しでげを敞行せば、水を任意の高さに迄押し揚ぐることを得。（押揚喞筒）。

おし-あ・つ（てつつるつれてよ）［押當］（他、た下二）㊀おしあて、おはふ。「袖を顏に—」。㊁すゐりやうす。

〔**おしあて**［押當］（名）すゐりやう。

おし-あひ（イ-ア）［押合］（名）おしあふこと。おしつけあ

おし-あ・ふ（ウ-ア）（はひふふへへ）［押合］（他、は四）雙方より押す。たがひにおす。

†**おし-あゆ**［押鮎］（名）おほづけの鮎、古昔、元日の儀式などに用ひたり。

おし-いた［押板］（名）書院の床の間。

おし-いり［押入］（名）がうたう。おしこみ。（劫盗）。

おし-い・る（らりるるれれ）［押入］（自、ら四）無理にはひる。強ひて入りこむ。

おし-い・る（れれるるるれれよ）［押入］（他、ら下二）無理におしやりて入る。おしこむ。

おし-いれ［押入］（名）財物などを入るべき戸棚。（壁厨）。

おし-うつ・る（らりるるれれ）［推移］（自、ら四）年月又は時勢と相伴ひてうつり行く。「世と共に—」。

おし-うり［押賣］（名）強ひて賣りつくること。（強賣）。

おし-おくり［押送］（名）風に關せずして、ひたすら櫓（ロ）を以て船をこぎやること。又、其船。

おし-か・く（けけくくるくれけよ）［押掛］（自、か下二）㊀進撃す。進取す。㊁人の招待をうけずして強ひて行く。此方の勝手におしてゆく。

おし-かけ［押掛］（名）㊀おしかくること。㊁馬の頭・胸・尾よりかけて、鞍まてつなぐ組み緒の稱。（鞅）。㊂先方の都合に關せず、強ひて進みゆくこと。

——**にようばう**（ウ-ボ）［押掛女房］（名）強ひて、夫の家に入りたる妻。

〔**おしかける**［押掛］（他）「おしかく」の訛。

おし-かた［押方］（名）射術にて、「おして」に同じ。

おし-かへ・す（エ-カ）（さしすすせせ）［押返］（他、さ四）㊀おして退く。㊁はなはだしく押しあふ。

おし-がみ［押紙］（名）㊀主意などを認めて、文書に張り付けたる別紙。つけがみ。㊁すひとりがみ。

おし-がり［押借］（名）無理に、人より財物又は金錢などを借り入るゝこと。

おし-きり［押切］（名）割判。契印。——**ばん**［押切判］（名）おしきり。（契印）。

おし-きり［押切］（名）すさ又はまぐさなどをきざむ器。（剉藁）。

おし-き・る（らりるるれれ）［押切］（他、ら四）㊀押して切り斷つ。㊁一意專心に目的をはたす。㊂絶えず櫓（ロ）を押して船を行（ヤ）る。

おし-くらべ［押競］（名）一種の遊戲、互におしあひて、倒れ若しくは退きたるを負けとす。

おし-こみ［押込］（名）㊀おしこむること。㊁とだな。おしいれ。㊂強盜。

おし-こ・む（まみむむめめ）［押込］（自、ま四）㊀故意に進入す。㊁強ひて入る。

おし-こ・む（めめむむるむれめよ）［押込］（他、ま下二）㊀無理におしやりて入る。㊁閉居せしむ。禁錮す。

おし-こめ［押込］（名）㊀おしこむること。㊁德川時代の刑罰の一、閉居せしめ又は禁錮すること。（幽禁）。

†**おし-こ・る**（らりるるれれ）［押凝］（自、ら四）あつまる。

おし-だし［押出］（名）㊀おしいだすこと。㊁多人數の中へ出でたる態度。やうす。

おし-だ・す（さしすすせせ）［押出］（自、さ四）㊀多人數打ち揃ひて出掛く。㊁多人數の中へ出で行く。

〔**おしたのわかしゆ**［御下若衆］（名）ぺいぺい役者の異稱。いなりまち。

おしちや［御七夜］（名）㊀「はうもんかう」に同じ。㊁「おしちや」の敬稱。

おし-つ・く（けけくくるくれけよ）［押付］（他、か下二）㊀はげしく押す。㊁強ひて人にかづく。

〔**おしつくら**［押競］（名）「おしくらべ」に同じ。

おし-つけ［押付］（名）おしつくること。強ひて人にかづくること。「—につかはす」。——**わざ**［押付業］（名）おしつけてする仕業。

†**おしづまり**［御靜］（名）寢ねたまふこと。

おし-つま・る（らりるるれれ）［押詰］（自、ら四）承擔又は時日切迫す。きはまる。つまる。「年—」。

おしづま・る（らりるるれれ）［御靜］（自、ら四）寢ぬの敬語。

おし-つ・む（めめむむるむれめよ）［押詰］（他、ま下二）㊀押して入れこむ。みたす。㊁つめよる。㊂つめちゞむ。

おし-て［押］（副）無理に。しひて。「—たのむ」。

おし-で［押手］（名）㊀古昔の印章の式、掌に墨・朱などを塗り、これを押して印章となしゝこと。㊁射術にて、左手の稱。ゆんて。㊂證據となるべき印章。㊃絃をおして音を發せしむること。

†**おし-てる**［押照］（枕）「なには」に冠らする詞。

おし-とほ・す（オ-ト）（さしすすせせ）［押通］（他、さ四）㊀おしてとほす。㊁なしとぐ。つらぬき行ふ。

おし-どり［押取］（名）無理に取ること。強奪。

おし-な・ぶ（べべぶぶるぶれべよ）［押並］（他、は下二）とりすべて同列となす。おしならぶ。

おし-なべて［押並］（副）おしくるめて。なべて。

おし-なら・す（さしすすせせ）［押均］（他、さ四）平かにす。ひとしくす。

おし-ね［晩稻］（名）おそいね。おくて。

おし-の・く（けけくくるくれけよ）［押退］（他、か下二）㊀おし

てしりぞく。（排）。㊁他人をして其位置を失はしむ。

おし-は［押羽］（名）鳥の羽のもとの方にある、うぶげの如く極めて短き毛。

おし-はかり［推測］（名）おしはかること。すゐりやう。

おし-はか・る（らりるるれれ）［推測］（他、ら四）此事を推して他事を考ふ。すゐりやうす。（臆度）。

おし-ひら・く（かきくくけけ）［推開］（他、か四）推しあく。「排す」。

おし-ひら・む（めめむむるむれめよ）［推平］（他、ま下二）おしてひらたくす。

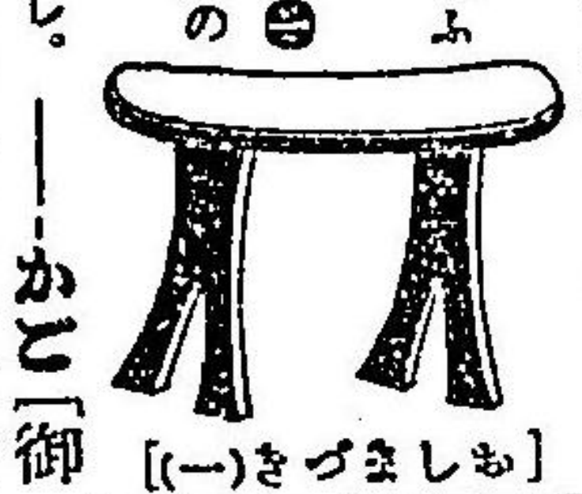
おし-ひろ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）［推擴］（他、か下二）おしてひろくす。

おし-ひろ・む（めめむむるむれめよ）［推弘］（他、ま下二）ひろく行きわたらす。ひろめおよぼす。擴張す。

おし-ぶち［押緣］（名）物のおさへに打ちつくる物。「屋根の—」。

おし-へ・す（さしすすせせ）［押壓］（他、さ四）むりにおしてひしぐ。ひしやうにす。

†**おしまづき**［几］（名）㊀けふそく。㊁よりかゝるべき机。



［おしまづき（一）］

〔**おしまひ**［御仕舞］（名）㊀おしまひの敬語。をはり。㊁婦人の化粧。「朝湯で—がすむ」。

〔**おしめ**［御襁褓］（名）おめし。——**かご**［御襁褓籠］（名）中に火をおきて、おしめのぬれたるを乾すべき料に作りたる籠。

おしも［御下］（名）㊀古昔、內侍の次の女官の稱。㊁貴族などのはしため。

おしやく［御酌］（名）㊀客の盃に酒をつぐこと。㊁〔未だ一人前とならざる藝妓。はんぎよく。（雛妓）。

おしやこ（名）婦人の髮の結（ユ）ひ方、おばこに似たるもの。

〔**おしやべり**（名）よくおしやべること、又、其人。

〔**おしやま・す**（さしすすせせ）［被仰］（他、さ四）おはせらる。

〔**おしやらく**（名）身なりを飾ることを好む性質、又、其人。

おシヤリ［御舍利］（名）㊀「ブッシャリ」の尊稱。㊁病死して白くなりたるかひこ。

おし-や・る（らりるるれれ）［押遣］（他、ら四）㊀おして進む。㊁おして退く。

おしや・る（らりるるれ）［御座］（自、ら變）「ござる」に同じ。

〔**おしやん**［御職］（名）おしよく。

おしよく［御職］（名）㊀同輩の中にて頭立つ身分の人。㊁同輩の中にて最も頭立つ遊女。（東京の方言）。

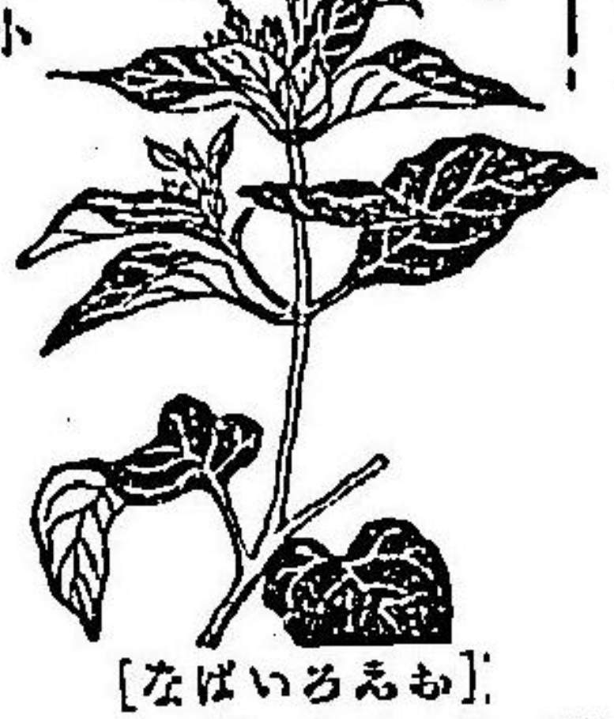
おし-よ・す（せせすするすれせよ）［押寄］（自、さ下二）多人數群れをなしておしかく。

〔**おしよせる**［押寄］（他）「おしよす」の訛。

おしろい［白粉］（名）一種の化粧品、顏其他身體の白く見すべき部分に塗るべき白色の粉末、多くは鉛を原料として製す。「みづ—」。「えり—」。（鉛粉）。

——**おした**［白粉下］（名）おしろいをぬる前にまづ肌にぬりおく料。——

ばな［白粉花］（名）【植】紫茉莉科に屬する草、高さ二三尺許、莖圓く節高く、葉は圓形にして綠色、秋の頃の夕方、梢頭に小花簇（ムラガ）り着く、其色種々あり、實の中に白粉を含む。ゆふげしき。（紫茉莉）。



［おしろいばな］

おし-わ・く（けけくくるくれけよ）［押分］（他、か下二）前後左右へ分く。

〔**おしわける**［押分］（他）「おしわく」の訛。

おし-ゑ［押繪］（名）花鳥・人物・禽獸などの形を厚紙にて作り、これを布にて包み、物に貼り附けて製したる繪。——**ざいく**［押繪細工］（名）おしゑの細工。又、其細工物。

おし-をけ［壓桶］（名）㊀えなをけ。㊁つけものを壓す桶。

お・す（さしすすせせ）［押］（他、さ四）㊀力を入れて進めやる。（推）。㊁せまる。すゝむ。㊂強ひて爲す。「おして行ふ」。㊃犯して爲す。「病を—」。㊄櫓をあやつりて舟を行（ヤ）る。㊅印章の面に墨などをつけて、其形を紙などにおさへうつす。（捺）。

お・す（さしすすせせ）［推］（他、さ四）㊀いたゞく。あふぐ。㊁すゐきよす。あぐ。㊂うつす。なずらふ。およぼす。「己が心をおして人に及ぼす」。㊃思想をおよぼす。究め考ふ。

お・す（さしすすせせ）［壓］（他、さ四）㊀上よりおもみを以ておさへつく。㊁しづむ。をさむ。㊂寄り迫る。㊃己の下風に立たしむ。㊄しへたぐ。あっせいす。

†**おず・し**（くしきけれ）［鈍］（形、一）おぞし。にぶし。

†**おず・し**（くしきけれ）［悍］（形、一）おぞし。強し。

†**おずま・し**（しくしきけれ）［鈍］（形、二）おぞまし。

†**おずま・し**（しくしきけれ）［悍］（形、二）おぞまし。おぞし。

〔**おすわり**［座］（名）㊀すわるとの敬語。㊁すわりもち。（供餅）。

おすゑ［御末］（名）後宮又は奧向きにて婢女（ハシタメ）の居る所。又、其婢女。

おせち［御節］（名）御節供の略言。——**く**［御節供］（名）五節句などのせちゑの日に製する食

物の菜。

おぜん[御膳](名) ㊀食器の臺の敬稱。㊁飯の敬稱。——**ぶ**[御膳部](名) ㊀貴族方の膳部の事をつかさどる所。又、其人。㊁「おぜん」に同じ。

廿**おぞ**[鈍](名) おぞきこと。おぞましきこと。

オゾーン[Ozone](名)【化】無色にして僅かに鹽素の如き臭ある瓦斯、放電の際殊に雷鳴のときによく發生す、酸素の變質したるものにして、酸化作用甚だ強し。

おそかれはやかれ[早晩](副) おそきかはやきか。其うちには。つひには。いつか。

おぞけ[恐氣](名) おそるゝこゝろ。——**だ・つ**（たちつつてて）[恐氣立](自、た四) ぞっとして身の毛たつ。そうけだつ。——**ふる・ふ**（はひふふへへ）[恐氣振](自、は四) おそれて身の毛よ立ちふるふ。

廿**おぞさ**[鈍](名) おぞくある度合ひ。

おそざき[遲咲](名) おくれて咲くこと。おくれざき。はやざきの對。「——の櫻」。(晩花)。

おそざくら[遲櫻](名) 普通のさくらよりおくれて咲く櫻。(晩櫻)。

おそ・し（くしきけれ）[遲](形、一) ㊀速かならず。㊁のろし。おぞし。㊂ながびきたり。ひさし。㊃時機すでに後れたり。

廿**おぞ・し**（くしきけれ）[鈍](形、一) にぶし。のろし。

廿**おぞ・し**（しくしきしけれ）[悍](形、二) こはし。おそろし。

おそなは・る（らりるるれれ）[遲](自、ら四) ㊀おそくなる。おくる。㊁延引す。ながびく。

〔**おそなへ**[御供](名) そなへもちの敬稱。

おそば[遲齒](名) おそく生(ハ)ゆる齒。やへば。

おそば[御側](名) ㊀主君のそば。「——づとめ」。㊁主人のそばにつかふる人。侍臣。近臣。(内臣)。

おそは・る（れれるるるれれよ）[魘](自、ら下二) うなさる。

おそ・ふ（はひふふへへ）[襲](他、は四) ㊀敵の不意に攻めかゝる。㊁衣服をかさねて着る。㊂承(ウ)く。「天祿を——」。㊃うけつぐ。つぐ。

おそまき[遲蒔](名) ㊀時期におくれて種子をおろすこと。㊁時機におくれて事を爲すこと。

廿**おぞま・し**（しくしきしけれ）[鈍](形、二) おぞし。にぶし。

廿**おぞま・し**（しくしきしけれ）[悍](形、二) おぞし。こはし。

おそらくは(副) たぶんは。おほかた。「——それ然らん」。

廿**おそり**[恐](名) おそるゝこと。おそれ。

おそ・る（れれるるるれれよ）[恐](自、ら下二) 先方のつよさに心ひるむ、我に對するものゝために氣うす。おづ。ひるむ。(怖)。

おそれ[恐](名) 恐るゝこと。おそり。——**い・る**（らりるるれれ）[恐入](自、ら四) ㊀過ちをさとりて謝罪す。わびをなす。㊁あまりにもったいなく感ず。いたみいる。「君を勞するは——」。(惶悃)。

おそれおほ・し（くしきけれ）[恐多](形、一) もったいなし。かしこし。

おそれながら[乍恐](副) おそろしとは思へども。もったいなしとは考ふれど。「——申し上ぐ」。

〔**おそれる**[恐](自) 「おそる」の訛。

おそろ・し（しくしきしけれ）[恐](形、二) ㊀おそるべし。㊁甚し。

おだい[御臺](名) 飯又は膳の異稱。(婦人の語)。廿——**がひ**[御臺匙](名) 「めしおやくし」の古名。廿——**びつ**[御臺櫃](名) ㊀めしびつ。いひびつ。㊁ちぎばこ。(京阪地方の方言)

〔**おたいこ**[御太鼓](名) ㊀「たいこもち」の略言。㊁「おたいこむすび」の略言。——**むすび**[御太鼓結](名) 女の帶の結び方、かけを結び目の中に入れてまろく結ぶもの。

おたがじやくし[御多賀杓子](名) 「おたまじやくし」の一名、近江國多賀神社のおまもりに出だしゝより此名あり。

〔**おたから**[御寶](名) ㊀一月二日の夜に、枕の下におく寶船の畫の稱。㊁金錢の異稱。

おたくら(名) 役者の用ふる鬘(カツラ)の一種。

廿**おだ・し**（しくしきしけれ）[穩](形、二) 心やすらかなり。擧動沈着なり。おだやかなり。「——き人」。

おたち[御立](名) ㊀發足の敬語。㊁客の歸ることの敬語。

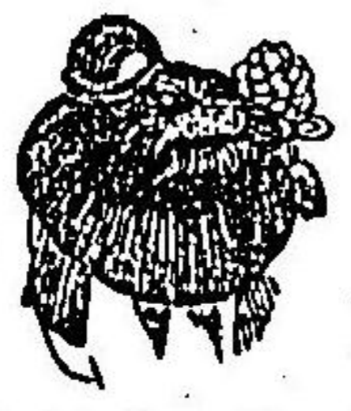
おだ・つ（てててつつるつれてよ）[煽](他、た下二) たぶらかしさそふ。そゝのかす。すゝむ。(煽動)。

おたづね[御尋](名) たづぬることの敬語。——**もの**[御尋物](名) 官府よりたづぬる犯罪人。

おだて[煽](名) おだつること。そゝのかし。すゝめ。「——にのる」。

〔**おだてる**[煽](他) 「おだつ」の訛。

おタバコぼん[御烟草盆](名) ㊀烟草盆の敬稱。㊁七八歲ぐらゐの少女の髮の結(ユ)ひ方、左右に分けたる髮を雙方より併せて結ぶもの。



[おたバコぼん(二)]

廿**おだひ**[穩](名) おだやか。しづか。

おたび[御旅](名) 「おたびしよ」の略言。——**しよ**[御旅所](名) 祭禮のときに、神輿の暫くとゞまる所。

〔**おたふく**[阿多福](名) ㊀婦人の顏の圓くして鼻低く頰肉豐かなるもの、稱。おかめ。おたふくづら。㊁婦人をのゝしりていふ語。——**あめ**[阿多福飴](名) 細長くしたる飴の中に、阿多福の形あるもの。——**づら**[阿多福面](名) ㊀おたふくの面相。㊁婦人をのゝしりていふ語。「あの——が」。——**まめ**[阿多福豆](名) そらまめの實の異稱。

〔**おたま**[御玉](名) 「おたまじやくし」の略言。——**じやくし**[御玉杓子](名) ㊀蛙の子に似たる形のじやくし。㊁【動】蛙類の卵子より孵化して後、水中にのみ棲息せるときの稱。蛙の子。(蝌斗)。

おたまや[御靈屋](名) 死者の靈を祭りておく所。(身分貴き人に用ふ)。(廟)。

〔**おため**[御爲](名) ための敬語。——**ごかし**(名) 其人のためをはかる如く見せて、却て害をなし若しくは自身の利益をのみ計畫すること。じやうずごかし。

おだやか[穩](名) ㊀事なきこと。しづけきこと。やすらか。㊁おちつきてあること。輕率ならざること。㊂心のおほまかなること。むねのひろきこと。

おだらひ[御盥](名) 女の髮の結(ユ)ひ方、髻を橫にして、これに髮を打ち交へに卷きたるもの。

おち[落](名) ㊀さがること。くだること。㊁ぬけ。もり。㊂にぐること。のがるゝこと。「七騎——」。㊃落語の結局。

〔**おぢ**[祖父](名) 「おほぢ」の略言。

おちあひ[落合](名) 河と河とのおち合ふ所。(會合)。

おちあ・ふ（はひふふへへ）[落合](自、は四) 同じ所に出て會ふ。

おちい・る（らりるるれれ）[陷](自、ら四) ㊀深く凹(ボク)む。くぼまる。㊁落ちて中に入る。はまる。おちこむ。㊂謀計にかゝる。㊃城など沒落す。

おちう・す（せせすするすれせよ）[落失](自、さ下二) のがれかくる。にぐ。

おちうど[落人](名) 人目を忍びて逃ぐるもの。かけおち。たうばうにん。だっそうにん。

おちえん[落緣](名) 雨戶の外に、座敷より一段低く設けたるえんがは。

おちおち[落落](名、副) こゝろ安らかなるさまにいふ語。

おぢおぢ[怖怖](名、副) 恐怖の念を懷きつゝあるさまにいふ語。

おちがみ[落髮](名) 拔けたる髮の毛。ぬけ毛。

おちぐり[落栗](名) ㊀落ちたる栗の實。㊁黑色を帶びたる紅色。くりいろ。——**いろ**[落栗色](名) 「おちぐり」(二)に同じ。

おぢけ[怖氣](名) おづる心。おそれをいだくけはひ。おそれ。ひるみ。「——が付く」。

〔**おぢけ・る**（けけけるけるけれけよ）[怖](自、か下一) おづおづす。おくす。

おちご[御童](名) ㊀高貴なる僧に侍(ハベ)る小童。㊁祭禮などの隊列に、美服をかざりて加はり行く小童。㊂「ちごわ」に同じ。

おちこ・む（まみむむめめ）[落込](自、ま四) ㊀はまる。㊁おちくぼむ。㊂おち來たる。「金が懷中に——」。

おちころび[落轉](名) おちぶれ。おとろへ。不運。

おちしほ[落潮](名) ひきしほ。

おちつき[落着](名) おちつくこと。——**はら・ふ**（はひふふへへ）[落着拂](自、は四) 極めて平氣にかまふ。あわてずしてあり。

おちつ・く（かきくくけけ）[落着](自、か四) ㊀居所さだまる。㊁勤務永くつゞく。㊂安心す。やすまる。㊃鎭定す。しづまる。㊄調和す。かなふ。「若色——」。㊅物事に動ぜず、言行かろ〴〵しからず。

おちつ・く（けけくくるくれけよ）[落着](他、か下二) おちつくやうにす。さだむ。しづむ。「心をおちつけて聞け」。

〔**おちつける**(他) 「おちつく」の訛。

廿**おぢな・し**（くしきけれ）[怖甚](他、一) おづることを甚し。

おちのひと[御乳人](名) 貴人の子をはぐゝむ乳母。(乳媼)。

おちば[落葉](名) ㊀地に落ちて散りたる木葉。らくえふ。㊁枯れたるおちばの色。稍や黃色にして赤みばしりたる色。——**いろ**[落葉色](名) 「おちば」(二)に同じ。

おちびと[落人](名) 「おちうど」に同じ。

おちふだ[落札](名) 入札にあたりたること。らくさつ。

おちぶ・る（れれるるるれれよ）[落魄](自、ら下二) 貴かりしもの賤しくなる。富みてありしもの貧しくなる。れいらくす。(零落)。

おちぶれ[落魄](名) おちぶるゝこと。れいらく。らくはく。

〔**おちぶれる**[落魄](自) 「おちぶる」の訛。

おちぼ[落穗](名) 地に落ちたる五穀(特に稻)の穗。(遺穗)。

おちま[落間](名) ㊀家の中に、一段低く設けある所。㊁古昔、京阪地方の芝居にありし棧敷(サジキ)の稱、今の「きりおとし」に同じ。

おちむしや[落武者](名) 軍に敗北して、にげ落つる武者。(敗兵)。

おちめ[落目](名) おちぶれかゝり。かたむく運命。

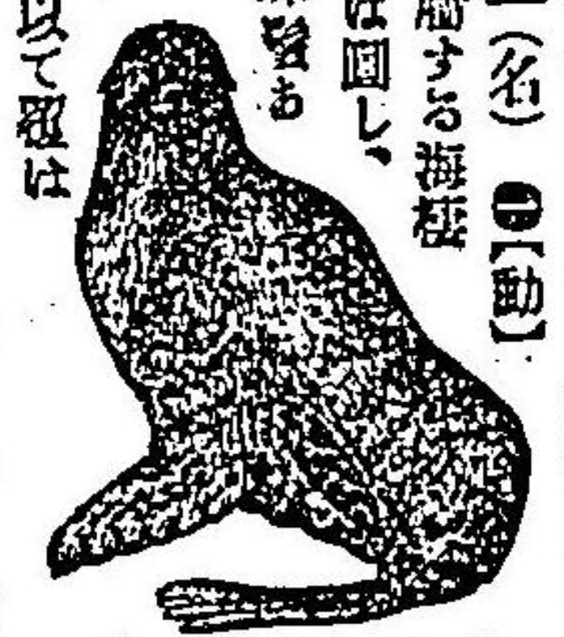
おちや[御茶](名) 茶の敬稱。廿——**をひく** 遊女などの客なくしてひまなるにいふ。

おぢやう[御孃](名) 身柄よき家の處女の敬稱。——**さま**[御孃樣](名) 前條に同じ。

〔**おちやちやら**(名) 口さきばかりの親切。

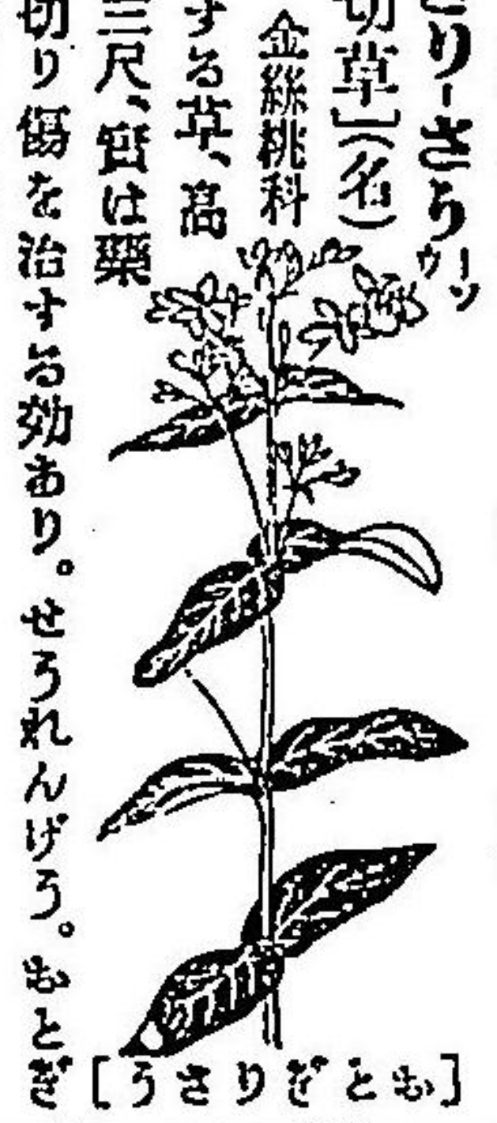
おちやどころ[御茶所](名) 神社又は佛閣などに附屬して、其神佛へ茶を奉り、又、參詣人をやすます所。

〔おちやや〔御茶屋〕(名) ㊀茶の湯の座敷。㊁かけ茶屋。料理店。
〔おちやれ(名) (「來れ」の俗語)旅人に淫をひさぐ旅店の下婢の稱。
おちゆく（かきくくけけ）〔落行〕(自、か四) ㊀逃げ行く。㊁なり行く。
おちゐる（ゐゐゐるゐるゐれゐよ）〔落居〕(自、わ上二) おちつきゐる。
〔おつ〔乙〕(名) ㊀十干の一、きのと。㊁さげて低くする聲調、甲(カン)の對。㊂甲に對して、第二位の稱。
おつ〔乙〕(名) 《御通の轉なるべし》 ㊀或物事によく通じて明かなると。㊁きのきゝたると。「―な茶碗」。㊂奇なると。異なると。「―な事」。
おつ（ちちつつるつれちよ）〔落〕(自、た上二) ㊀高きより低きへくだる。さがる。㊁おちこむ。はまる。「術中に―」。㊂漏る。殘る。㊃沈む。入る。「日西山に―」。㊄のがる。亡(ニ)ぐ。㊅死ぬ。たふる。「命―」。㊆衰ふ。へる。「名聲―」。㊇あたる。きまる。「入札が―」。㊈うす。脫(ヌ)く。「垢―」。㊉止む。去る。「風―」。⑪全快す。なほる。⑫了解す。わかる。「心に―」。⑬性行くづる。墮落す。⑭劣る。くだる。⑮城陷る。ぬく。⑯もの離る。とれる。⑰罪に服す。はくぢやうす。⑱手に入る。「中原の鹿、誰の手に―るを知らず」。
おづ（ぢぢづづるづれぢよ）〔怖〕(自、た上二) おそる。ひるむ。
〔おつう〔乙〕(副) きたいに。
おづおづ〔怖怖〕(名、副) おぢつゝ、あぶなさまにいふ語。
〔おつ(感) 急なる場合に發する聲。「―とおめいて斬りかゝる」。
〔おつかあ〔阿母〕(名) 母の稱(關東地方下等社會の俚言)。
〔おつかけ〔追掛〕(名) ㊀おひかくると。㊁人力車夫の辻待ちをして、客を引くと。㊂物事をひきつゞけてなすと。――おつかけ〔追掛追掛〕(副) 更におひかけて。
おつかなし（くしきけれ）(形、二) おそろし、こはし。
おつクフ（ヲク）〔億劫〕(名) 「おくコフ」の轉。
おつくり〔御作〕(名) けしやう。粉飾。
おつけ〔御浸〕(名) ㊀麵類のつけ汁。㊁すべての汁の稱。おもに味噌汁。
オッコ(名) 〔植〕「オンコ」の一名。
〔おつこち(名) 情夫又は情婦。(東京の方言)。
〔おつこちる(自) 「おちる」の訛。(東京の方言)。
〔おつことす(他) 「おとす」の訛。(東京の方言)。
〔おつしやる(他) 「おほせらる」の訛。
(おつだい〔乙第〕(名) ㊀しもやしき。㊁第二等。
〔おつたてる(他) 「おひたつ」の訛。
〔おつちよこちよい(名) かるがるしきと。たしかならぬと。
〔おつつけ〔追付〕(副) ほどなく。まもなく。
〔おつつける〔抑附〕(他) 「おしつく」の訛。
〔おつつめる〔追詰〕(他) 「おひつむ」の訛。
おつて〔追手〕(名) 人の跡を追ふ人。うつて。
おつて〔追而〕(副) ㊀遲からず。やがて。㊁つけ加へて。なほなほ。(手紙に用ふ)。――がき〔追而書〕(名) なほなほがき。つけ加へがき。
〔おつと(感) 急激なる場合の發聲。「―こなたへ」。
おつとせい〔膃肭〕(名) 〔動〕「おつとせい」(二)に同じ。
――せい〔膃肭臍〕(名) ㊀〔動〕鰭脚類あざらし科に屬する海獸動物、軀幹は長く頭部は圓し、唇は薄く上唇に剛き疎鬚ありて牡は殊に長し、四肢は短小にして鰭狀をなす、體は厚き毛を以て覆はれ、體色は、稍や生長したるものは灰白色なれど、十分生長したるものは紫褐色なり、體長牡は六尺餘にして牝は其半なり、北海に產し常に獨色を帶びたる潮流に從ひて洄游し、時々上陸す、水中の動作は活潑なれど、陸上の動作遲鈍なり、聽官嗅官共に鋭敏なり、肉味は美にして毛皮殊に貴重せらる。㊁おつとせいの陰莖と睾丸とを臍(ヘソ)に連ねて切り取りたるものにして、滋養の藥用とす。


[おつとせい(一)]

おつとり〔抑取〕(副) すぐ。そのまゝ。「―役に立つ」。――かうがい（ーコウガイ）〔抑取笄〕(名) なほざりに差したるかうがい。――がたな〔抑取刀〕(名) 急激の場合に、早速にかたなを取ると。
おつとりこむ（めめむむるむれめよ）〔追取込〕(他、ま下二) 追ひつめてかこむ。
〔おつとりこめる〔追取込〕(他) 「おつとりこむ」の訛。
おつとりまく（かきくくけけ）〔追取卷〕(他、か四) 追ひつめて取りまく。
おつとる（らりるるれれ）〔追取〕(他、ら四) 速かに手にとりあぐ。
〔おつぺす（さしすすせせ）〔抑壓〕(他、さ四) おしつく。
おつぼ〔御壺〕(名) 膳部の壺に入れある盛り物。
〔おつむ〔頭〕(名) つむり。あたま。(小兒の語)。――てんてん(名) 赤兒が兩手にて、わがあたまを輕くうつと。
〔おつもり(名) 酒宴のをはりの酒。
おてうち〔御手打〕(名) 主人の手づから其臣下を切ると。
〔おでこ(名) 額の出でたるものをあざけりいふ語。(東京の俚語)。
〔おてだま〔御手玉〕(名) 女童の玩具、小さき布帛の袋に、赤小豆などを入れて縫ひとぢ、これを投げ受けなどして遊ぶもの。
おでまし〔御出座〕(名) 出で行くとの敬語。
おてまへ（ーマエ）〔御手前〕(名) てなみ。うでまへ。

おてまへ（エーマエ）〔御手前〕(代) 德川時代に、武士のあひてを呼びし稱。なんぢ。あなた。
おテラしゆう〔御寺衆〕(名) 僧の敬稱。
〔おでん〔御田〕(名) ㊀「でんがく」の略言。㊁こんにやく・芋などを串(クシ)にさして、煮込みにしたるもの。
〔おてんば〔御轉婆〕(名) 女のかるはずみなると又はとりとめなく騒ぐ性質。又、其女。
おと〔音〕(名) ㊀ひゞき。こゑ。ね。おん。㊁おとづれ。いんしん。
艹おと〔弟〕(名) 「おとうと」の古言。
おと〔乙〕(名) すゑ。つぎ。
(おと〔於菟〕(名) 〔動〕(い)「とら」の異稱。(ろ)「ねこ」の異稱。
おとうと〔弟〕(名) 《弟人の音便》同じ親に生まれたる年あとの男子。――でし〔弟弟子〕(名) 同師の許に、後に來りたる弟子。あにでしの對。――ぶん〔弟分〕(名) 假りにおとうとと定めたるもの。ぎてい。(義弟)。――よめ〔弟嫁〕(名) おとうとの妻。おとよめ。(娣)。
〔おどおど〔怖怖〕(名、副) 「おづおづ」の訛。
〔おどかし〔威〕(名) 威を示して先方を恐らすると。おどし。
〔おどかす（さしすすせせ）〔威〕(他、さ四) おどかしをなす。おどす。(恐嚇)。
おとがね〔音金〕(名) 弓のうらはずのすこし下にあたる處の弓弦(ユツル)の中に、入れたる銅又は鉛をいふ、射てひゞきの出づるもの。(響鐵)。
おとがひ（ーガイ）〔頤〕(名) 下のあぎと。あご。――をとく〔解頤〕いたく笑ふ。
おとき〔御齋〕(名) 佛事の食物。精進の食物。僧の食物。非時の對。
おとぎ〔御伽〕(名) ㊀とぎの敬稱。㊁妾の稱。――ばなし〔御伽噺〕(名) ㊀人のつれづれを慰むるためのはなし。㊁兒童の面白がるやうなはなし。――ばうず（ーボウズ）〔御伽坊主〕(名) 葬式の前に來りて、おとぎをし經などをよむ僧。
おとぎりさう（ーソウ）〔弟切草〕(名) 〔植〕金絲桃科に屬する草、高さ二三尺、質は藥とし切り傷を治する効あり。せうれんげう。おとぎりす。(小連翹)。


[おとぎりさう]

おとぎりす(名) 〔植〕「おとぎりさう」に同じ。
艹おどく（けけくくるくれけよ）(自、か下二) 《天降の義》 ㊀とりしまり無くあり。やりばなしなり。㊁しやれをいふ。こつけいのさまをなす。たはむる。ふざける。(諧)。
おどけ〔詼諧〕(名) しやれ。たはむれ。(滑稽)。――ぐち〔詼諧口〕(名) おどけたる口のきゝやう。しやうだんぐち。(冗口)。――ばなし〔詼諧噺〕(名) おどけたる話。
おとご〔弟子〕(名) 末子。――のついたち〔弟子朔日〕(名) 陰曆十二月一日、末子の祝日とす。
〔おとごぜ〔弟御前〕(名) おたふく。
おとさた〔音沙汰〕(名) おとづれ。音信。
おとし〔落〕(名) ㊀おとすと。㊁鳥獸などをおとし入れて捕ふる裝置。「鼠―」。㊂はなしのおち。㊃木製の火鉢の灰をいるゝ所、銅鐵などの薄き板にて落しこむやうに造りたるもの。㊄戸の棧に付けて、閉づるとき、敷居に設けある穴に差しこむもの。
おどし〔威〕(名) おどすと。おどかし。
おとしあな〔陷穽〕(名) ㊀穴を掘り人又は獸などを欺きておとし入るゝ穴。(坎阱)。㊁人をおとしいるゝ詭計。
おとしいる（れれるるるれよ）〔陷〕(他、ら下二) ㊀さそひおとす。欺きおとす。「おとし穴に―」。㊁たばかりて引きいる。「罪に―」。㊂城塞を攻め取る。
〔おとしいれる〔陷〕(他) 「おとしいる」の訛。
おとしがけ〔落懸〕(名) ㊀らんまの下などにあるはりもの。㊁元祿の頃、やゝ行はれたる元結ひの一種。㊂驗座の落つるが如きところ。
おとしがみ〔落紙〕(名) かはやに用ふる紙。ちりがみ。
おとしきんちやく〔落巾着〕(名) 紐を付けて着物の襟(エリ)などにかくる巾着。
おとしざし〔落揷〕(名) 腰刀をこじりさがりに佩(オ)ぶると。
おとしだな〔落棚〕(名) 四十八棚の一、ちがひだなの類。
おとしだね〔落胤〕(名) 貴人の私生兒の世にうづもれてあらはれざるもの。
おとしだまご〔落卵子〕(名) 吸物などに、生たまごをわりているゝと。
おとしちがひだな（ーチガイー）〔落違棚〕(名) 「おとしだな」の一名。
おとしばなし〔落語〕(名) おとしを面白くいひて、聽者を興ぜしむる談話。おどけばなし。(諢話)。
おとしぶた〔落蓋〕(名) ふたの一種、箱の上の緣にかゝらず、中におちこむやうに作りたる蓋、さしぶたに似たるもの。(插蓋)。
おとしぶみ〔落文〕(名) あらはにいへぬ事を、かくし名にもて認め、道路などにおとして置くふみ。(匿名書)。
艹おとしむ（めめむむるむれめよ）〔貶〕(他、ま下二) みさぐ。みくだす。みくびる。さげしむ。

おとし-もの［遺物］（名）心付かず落したるもの。ゐぶつ。

おとし-や［落矢］（名）上の方より下の方へ射る矢。

おとし-ゑ［落餌］（名）脇に飼ふ餌。

おと・す（さしすせせ）［落］（他、さ四）㊀高きより低きへやる。くだす。さぐ。㊁紛失す。遺失す。㊂もちいらす。はまりこます。「術中に—」。㊃もらす。のこす。㊄へらす。損す。「人望を—」。㊅いやす。なほす。「おこりを—」。㊆所有とす。手に入る。㊇攻め取る。おとしいる。㊈のぞく。去る。㊉脱（ヌ）かす。弱くす。「力を—」。㊉一罪に服せしむ。「まらべ—」。㊉二逃れしむ。にがす。「主人を—」。

おど・す（さしすせせ）［威］（他、さ四）おどかす。おどろかす。おそれしむ。（嚇）。

おど・す（さしすせせ）［縅］（他、さ四）鎧のさねを綴る。

おと-づき［弟月］（名）十二月の異稱。

おと-つづみ［弟鼓］（名）こつゞみ。えつゞみの對。

おと-づ・る（れれるるるれれよ）［訪］（自、ら下二）㊀人のもとをたづぬ。とぶらふ。はうもんす。㊁書狀を以て安否をとふ。みまふ。（音）。

おと-づれ［訪］（名）㊀はうもん。たづね。㊁せうそく。たより。（音信、消息）。

〔**おとづれる**［訪］（自）「おとづる」の訛。

おと-と［弟］（名）「おとうと」の略言。

†**おと-ど**［大殿］（名）貴人のやかたの敬稱。

おと-ど［大臣］（名）だいじん。

おと-どい［弟兄］（名）「おとゝえ」に同じ。

おと-ゝえ［弟兄］（名）はらから。きやうだい。

おと-な［大人］（名）㊀十分に生長したる人。一人まへの人。元服したる人。（成人、長者）。㊁小兒のおとなしきと。

おと-な［乙名］（名）㊀一族のをさ。㊁をさ、ちやう。（頭首）。

〔**おとな-くさ・し**（しくしきけれ）［大人臭］（形、一）少年の大人らしき擧動あるにいふ。

おとな-げ［大人氣］（名）おとならしきこと。——**な・し**（しくしきけれ）［大人氣無］（形、一）大人にして大人らしき擧動なし。

おとな・し（しくしきけれ）［大人風］（形、二）㊀おとなの如く、諸事おちつきてあり。㊁おだやかにてあり。すなほにてあり。をんたうなり。

おとな-だ・つ（たちつつてて）［大人立］（自、た四）おとなの如く、擧動おだやかにあり。おとなぶ。

おとな-はづか・し（しくしきけれ）［大人恥］（形、二）人兒の智慧の大人にも勝るばかりなり。

おとな-ひ（イ—ナ）［音］（名）㊀おとなふこと。ひゞき。「水の—」。㊁おとづるゝこと。はうもん。

おとな・ふ（ウ—ナ）（はひふふへへ）［音］（自、は四）㊀音發す。ひゞく。㊁はうもんす。おとづる。

おとな・ぶ（びびぶぶるぶれびよ）［大人風］（自、は上二）おとなだつ。

〔**おとな-ぶる**（らりるるれれ）［大人風］（自、ら四）㊀大人のふりなす。㊁大人なるを誇る。

†**おと-ね**［乙子］（名）正月下旬の子の日。

おと-ひめ［弟姫］（名）㊀妹にあたるひめ。㊁龍宮にゐるといふ仙女の名。——**の-かんざし**［弟姫簪］（名）〔植〕「うみやなぎ」の一名。

〔**おと-ぼね**［頤骨］（名）おとがひの骨。

†**おど-ま・し**（しくしきけれ）［疎］（形、二）「うとまし」の轉。

おと-み-つはり（ワリツ／ワリ）［弟身惡阻］（名）婦人が、ちのみ子ある中に、又、子をはらみてつはりとなること。

おと-め［處女］（名）未だ嫁せざる少女。未だ男子に接せざる婦女。きむすめ。うぶ。

†**お-ども**（名）前にたちて行く舟。

お-とも［御供］（名）じゆうしや。ともびと。

おと-や［弟矢］（名）一手二本の矢の第二番目に射る矢の稱。はやの對。

おと-よめ［弟嫁］（名）弟の妻。おとうとよめ。（娣）。

おとり［劣］（名）おとること。品のさがること。——**ばら**［劣腹］（名）妾腹の子。

おと・る（らりるるれれ）［劣］（自、ら四）㊀及ばず。まさらず。㊁等位降る。さがる。

〔**おどれ**［己］（代）人を罵りて呼ふ稱。「—、なにやつなれば」。

†**おどろ**（名）㊀草木のいりまじりて茂りたる處。（荊棘）。㊁物のみだれたるさまにいふ語。

†**おどろ-おどろ・し**（しくしきけれ）（形、二）おそろし。おどろくべし。

おどろかし［驚］（名）おどろかすこと。

おどろか・す（さしすせせ）［驚］（他、さ四）おどろかしむ。おどす。おどかす。（駭、愕）。

おどろき［驚］（名）おどろくこと。

おどろ・く（かきくくけけ）［驚］（自、か四）思ひの外なる事に遇ひて心騒（さわ）ぐ。びっくりす。ぎやうてんす。（駭、愕）

おとろ・ふ（へへふふるふれへよ）［衰］（自、は下二）いきほひ減（へ）る。ちから弱る。すゐぢやくす。すゐびす。

おとろへ（エ—ロ）［衰］（名）おとろふること。すゐぢやく。すゐび。へる。よわる。

〔**おとろへる**［衰］（自）「おとろふ」の訛。

おと-をぢ［弟小父］（名）父のおとうと。しゆくふ。きふ。（叔父、季父）。

〔**おない-どし**［同年］（名）「おなじとし」の音便。

お-なか［御中］（名）㊀食事。（女房詞）。㊁腹の異稱。（婦人の語）。

〔**お-ながれ**［御流］（名）㊀やがて行はるべき事の廢止となること。豫てもくろみし物事のやぶれたること。「花見の相談、雨で—になる」。㊁人の盃に殘れる飲みあまりの酒のしづく。（貴人より盃を、頂戴するときなどにいふ）。「—頂戴」。㊂目上の人の所有物の不用なるを與へらるゝこと。又、其頂戴物。

お-なじ（じくじじきじけれ）［同］（形、二）㊀かれとこれと一様なり。ひとし。㊁ながくもとのまゝに殘る。かはらず。

おなじ-どし［同年］（名）㊀生れ年の同じきこと。又その人。㊁互に同じきこと。

〔**お-なで**［御撫］（名）「はうき」の異稱。（御殿女中の語）。

〔**お-なべ**［阿鍋］（名）下女の稱。（西京の方言）。

〔**お-なら**［屁］（名）「へ」の異稱。（轉矢氣）。

お-なり［御成］（名）出て行くとの敬稱（古昔、宮方、攝家、將軍などにいふ）。

お-なんど［御納戶］（名）㊀貴人の衣服調度などを入れおく部屋。㊁「おなんどやく」の略言。㊂染色の名、ねずみ色をおびたる藍色。——**やく**［御納戶役］（名）德川時代の納戶のかゝり、即ち、貴人の衣服調度の出納にあづかりしもの。

おに［鬼］（名）㊀死人の靈魂。いうれい。幽魂。㊁戮（リク）をなす幽魂。ものゝけ。㊂想像上の動物、人類の形をなし、頭に角あり、裸體にして虎皮の褌（シタヾ）を着す、相貌獰惡にして怪力ありといふ。ラせつ。「ヤシヤ」。㊃おにごっこにて、人を捕ふる役となるもの。㊄借金とり。債鬼。

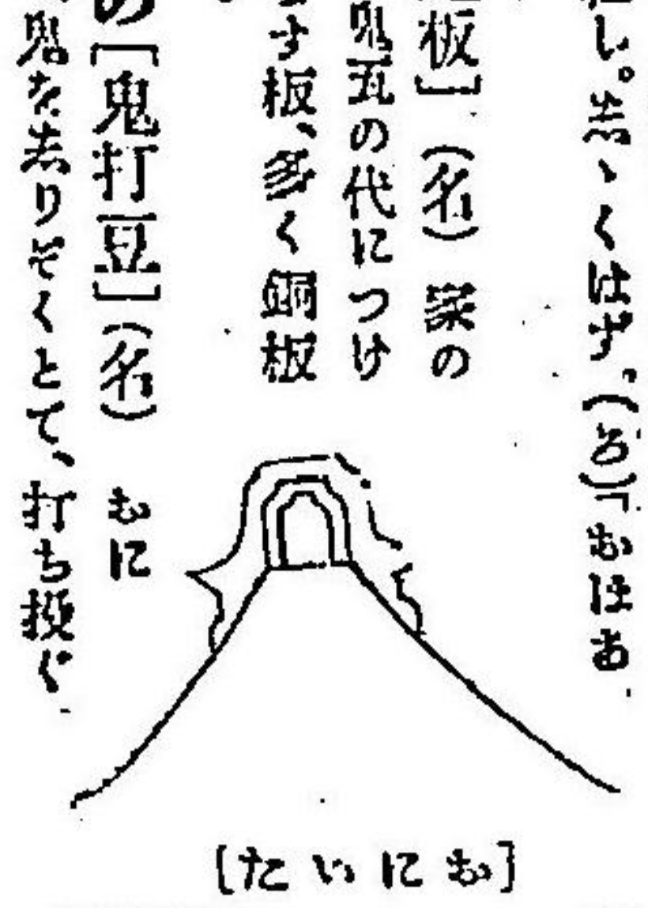
おに—［鬼］（接頭）㊀或語に冠して猛勇なるものゝ意を表はす。「—少將」。㊁或語に冠して無慈悲なるものゝ意を表はす。「—婆」。㊂或語に冠して異形なるものゝ意を表はす。「—ほたる」。

おに-あさ［鬼麻］（名）〔植〕「いらくさ」の一名。

おに-あざみ［鬼薊］（名）〔植〕「やまあざみ」の一名、（大薊）。

おに-あは（ワ—ア）［鬼粟］（名）〔植〕（い）おほあはの一種、穂長く粒粗し。しゝくはず。（ろ）「おほあは」の一名。

おに-いた［鬼板］（名）家の搏風（ハフ）の上に鬼瓦の代につけて、かざりとなす板、多く銅板にて包みたり。



〔おにいた〕

おに-うち-まめ［鬼打豆］（名）おにやらひのとき、鬼を去りぞくとて、打ち投ぐる豆。

〔**おに-おに**［鬼鬼］（名）「おにごっこ」（仙臺の方言）。

†**おに-おに・し**（しくしきけれ）［鬼鬼］（形、二）殘酷なり。鬼のやうなり。あらあらし。

おに-が-しま［鬼島］（名）古昔、鬼の住めりといひ傳へし無人島の稱。

おに-ガハラ（ワラ—ガ）［鬼瓦］（名）屋根の棟（ムネ）の端におく瓦、能く鬼の面などに似せて製す、惡魔降伏のためなりといへり。（鴟吻）。

おに-がみ［鬼神］（名）㊀荒き神。きしん。㊁其國にて最もすぐれたる勇士の稱。

おに-がら-やき［鬼殼燒］（名）一種の料理、蝦を殼のまゝ、醬油をつけて燒きたるもの。

おに-ぐこ［鬼枸杞］（名）〔植〕くこの一種、刺多くして葉小く、實は細長にして苦味あり。

おに-ご［鬼子］（名）おにごと。おにごっこ。

おに-ごっこ［鬼子事］（名）子供の行ふ一種の遊戲、群集の中より、一人のもの鬼となり、他を追ひ捕ふれば、捕へられたるもの代りて鬼となり、また他を追ひ捕ふること、おにご。おにごと。おにんぶくろ。おにわたし。

おに-ござ［鬼事］（名）おにごっこ。おにご。

おに-ころし［鬼殺］（名）酒精（アルコホル）分の強き酒即ち粗惡なる酒の異稱。

†**おに・し**（しくしきけれ）［鬼］（形、二）鬼の如し。「—き人かな」。

おに-しだ［鬼羊齒］（名）〔植〕水龍骨（アヲチカツラ）科に屬する羊齒植物、葉は莖に排生し冬も凋まず、秋の頃、葉面に胞子を生ず。

おに-しぼり［鬼絞］（名）しぼりぞめの一種、大くくゝりよせて絞りたるもの。

おに-すぎはらがみ（ラ—ワ／ワ—ア）［鬼杉原紙］（名）すぎはらがみの一種、版ひろし、播磨國より出づ。すぎはら。ほんすぎはら。ほんのりいれ。

おに-たで［鬼蓼］（名）〔植〕「いぬたで」の一名。

†**おに-たら-し**［御多羅枝］（名）（「みたらし」の訛）天子の御弓。

おに-どころ［鬼草薢］（名）〔植〕薯蕷科に屬する上昇草本、山野に自生す、單性花と、三箇の翼を具へたる蒴と、網狀脈葉とを有す、根及肉芽は食用に供せらる。きどころ。（鬼野老）。

〔**おに-の-さら**［鬼皿］（名）㊀「おにごっこ」の一名。（常陸の方言）。㊁左右の手をよせて戯ふる子供の遊戲、

†**おに-の-しこぐさ**［鬼醜草］（名）〔植〕「しをん」の古名、

おに-は［鬼齒］（名）やへばの外の方に向ひて、牙の如くなれるもの。

おに-ばす［鬼蓮］（名）〔植〕睡蓮科に屬する水草、葉は圓形をなし、萼片は厚く内面は紫赤色外面は帶綠色にして、花瓣は帶紫色なり、地下莖・種子及嫩き莖柄は食用に供せらる。みづぶき。（芡）。

冖**おに-ばば**〔鬼婆〕(名) 無慈悲なる老女を嘲りていふ語。

おに-び〔鬼火〕(名) 濕氣ある場所より雨夜などに燃え出る一種の青光、燐の發光なりといふ。いうれいび。りんくわ。いんくわ。(燐火、陰火)。

おに-ふすべ〔鬼蕈〕(名)【植】「ほこりだけ」に同じ。

おに-へゴ〔鬼杪欏〕(名)【植】杪欏科に屬する羊齒植物、木本狀にして芽胞房叢の下部より生ずる球形の被包を有す、觀賞用として栽培せられ、又、種々の用に供せらる。

おに-ぼし〔鬼星〕(名) 二十八宿の一。(鬼宿)。

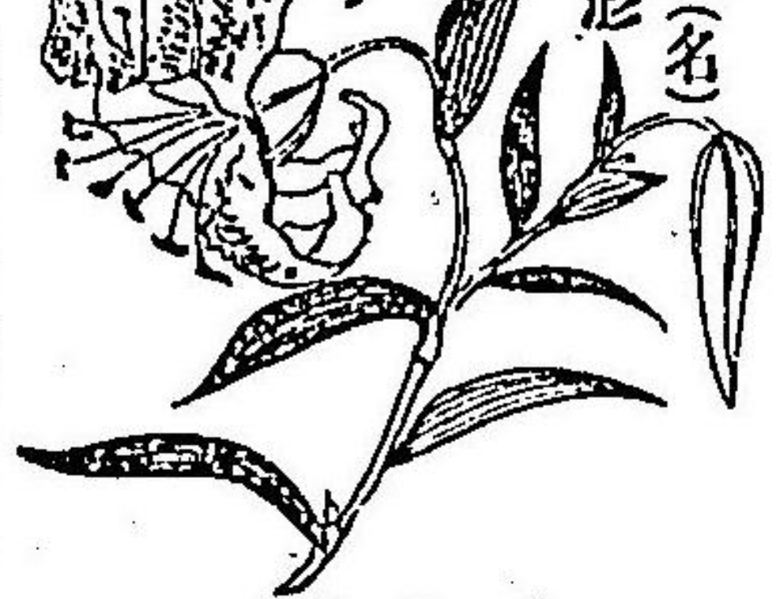
廿**おに-みそ**〔鬼味噌〕(名) ㊀やきみその一種、鹽氣の極めてつよきもの。㊁弱き人、弱みそ。

冖**おに-むし**〔鬼蟲〕(名)【動】「かぶとむし」の一名。(仙臺の方言)。

おに-むしや〔鬼武者〕(名) 荒き武者の稱。あらむしや。

おに-やらひ（ヤライ）〔追儺〕(名) 古昔は、十二月の末日に、人を疫病の鬼に擬して、これを追ひはらひし式。後世は、節分の夜に、大豆を炒(イ)りこれをおにうちまめと名付け、「福は内、鬼は外」と高く呼びて撒(マ)く式。

おに-やんま〔鬼蜻蜓〕(名)【動】蜻蛉科に屬する大形の蟲、體色は黄にして黒色の條あり、雙眼は頭上に相接し、尾端に斑狀の片なし、性あらし。


〔おにゆり〕

おに-ゆり〔鬼百合〕(名)【植】百合科に屬する宿根草、莖は葉腋に珠芽を生じ、花は秋開く、花蓋は赤黄色にして暗紫色の斑點を有し、其各片は大いに反捲す、觀賞用として栽培せられ、鱗狀根は食用に供せらる。いぬゆり。やまゆり。(卷丹)。

冖**おに-よけ**〔鬼除〕(名) 酒の異稱。

おに-わたし〔鬼渡〕(名) 「おにごっこ」に同じ。

おに-わらび〔鬼蕨〕(名)【植】わらびの一種、深山に生ず、葉は細長にして鋸齒を有し、一莖にむらがり着く。(貫衆)。

おにん-ぶくろ〔鬼袋〕(名) 「おにごっこ」に同じ。

お-ぬし〔御主〕(代) や、めしたにつかふ對稱の代名詞。おまへ。そなた。きさま。おのし。

お-ねば〔御粘〕(名) 「にぬき」の一名。(婦人の語)。

おの〔己〕(代) 「おのれ」の略言。(己)。

おの-おの〔各〕(名、副) めい〳〵。かた〴〵。ひとり〴〵。それ〴〵。(各自)。

おのおの〔各〕(代) 同輩以下に用ふる對稱の代名詞。おまへたち。なんぢら。

廿**おの-が-おし**〔己自〕(副) めい〳〵の心まかせに。めい〳〵に。(各自)。

廿**おの-が-よよ**(副) めい〳〵に。別々に。(夫婦離別したる時などにいふ)。(各自)。

冖**お-のし**〔御主〕(代) 「おぬし」の轉。

おの-づ-から〔自〕(副) (己之從の義)其まゝに。自然に。有りしまゝに。じねんに。てんねんに。

廿**おの-づ-さ**〔自〕(副) おのづから。

冖廿**おの-づま**〔己妻〕(名) おのれの妻。

廿**おの-ぼれ**〔己惚〕(名) 「うぬぼれ」に同じ。

冖**おの-も-おの-も**〔各〕(名、副) おの〳〵。めい〳〵。

冖**おの-ら**〔己等〕(代) おのれら。なんぢら。

おの-れ〔己〕(名) ㊀其人みづから。おぶん。自身。㊁其物みづから。自體。「岩打つ波の―のみ」。(己)。

おのれ〔己〕(代) ㊀自稱の代名詞。われ。おれ。㊁人を罵りいやしむる際の對稱の代名詞。うぬ。(己)。

お-ば〔祖母〕(名) ㊀「おほば」の略言。㊁年老いたる女。らうぢよ。

おば-いけ(名) 鯨の身と尾との間の肉。

廿**おは-ぎ**(名)【植】「よめな」の古名。([illegible])。

冖**お-はぎ**〔御萩〕(名) 「はぎのもち」(萩餅)に同じ。

お-はぐろ〔御齒黑〕(名) ㊀婦人などの齒を黒く染むること。かねつけ。(染牙)。㊁齒を黒く染むるに用ふる液、鐵を酒に浸(ヒタ)してつくる。はぐろめ。(鐵漿)。――**とんぼ**〔御齒黑蜻蛉〕(名)【動】「かねつけとんぼ」の一名。

冖**お-ばけ**(名) ㊀へんげ。えうくわい。ばけもの。㊁【動】「おばけがひ」の略言。――**がひ**（イーガ）(名)【動】「やどかり」の一名。

おば-こ〔祖母子〕(名) 女の髮の結(ユ)ひ方、兩方に小さき縮(ワ)をつくり、笄を横にさしたるもの。

廿**おばしま**〔欄〕(名) 「らんかん」の古名。

おはし-ます（オワ）〔さしすすせせ〕〔御座〕(自、さ四) おはすにますを添へたる敬語。おはす。

おは-す（オワ）〔せしすするすれせよ〕〔在〕(自、さ變) ㊀居るの敬語。㊁來るの敬語。㊂行くの敬語。

お-ハチ〔御鉢〕(名) 飯を入るゝ桶。めしびつ。おひつ。――**が まはる** 順番が來る。

お-は-もじ〔御は文字〕(名) はづかしきこと。(婦人の語)。――**さま**〔御は文字樣〕(名) 前條に同じ。

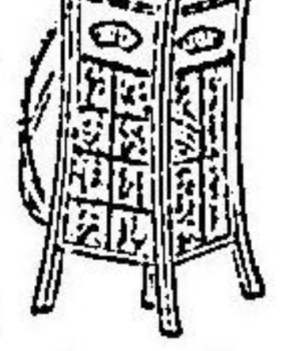
お-はらひ（ーワイ）〔御祓〕(名) 神社などの神號を捺したるおふだ。――**ばこ**〔御祓箱〕(名) ㊀おはらひをいるゝ箱。㊁やとひ人を解傭すること。

お-はらへ-たて（エーハラ）〔御祓立〕(名) 兜(カブト)のまへ

だてを立つる所。

おはら-め〔大原女〕(名) 「おほはらめ」の略言。

冖**お-はり**〔御針〕(名) ㊀雇はれて、針しごとする女。(針線娘)。㊁はりしごと。さいほう。


〔おひ〕

おひ（オイ）〔笈〕(名) つゞらの類、四隅に脚ありて、開閉すべき戸を設く、修行者又は行脚(アンギヤ)僧などが旅中背に負ふもの、中には衣服書籍などを納る。「辨慶の―」。

おび〔帶〕(名) ㊀衣類を身に纏ひ着くるために、其上より腰のあたりにまとひ結ぶもの。㊁すべておびの如き狀態をなすものゝ稱。「―封」。㊂【數】一つの球を二つの平行せる平面に切りたるとき、其間にある球面の部分。――**あげ**〔帶揚〕(名) 女の帶のむすびのさがらぬためにむすぶひも。

冖**お-ひい-さま**〔御姬樣〕(名) 「おひめさま」に同じ。

おひ-いだ-す（オイ）〔さしすすせせ〕〔追出〕(他、さ四) おひはらふ。おひだす。

おひ-い-づ（オイ）〔でででづるづれでよ〕〔生出〕(自、だ下二) ㊀うまれいづ。㊁はえいづ。

おひ-う-ち（オイ）〔追擊〕(名) おひうつこと。びげき。

おひ-う-つ（オイ）〔たちつつてて〕〔追擊〕(他、た四) 追ひかけて擊つ。つゐげきす。

おびえ〔怯〕(名) おびゆること。恐怖。

冖**おびえる**〔怖〕(自) 「おびゆ」の訛。

おひ-おとし（オイ）〔追落〕(名) ㊀おひおとすこと。㊁圍碁にて、つぎ目多き石が敵に追はれ、これを綴(ツ)ぐも到底いきの路なきこと。

おひ-おと-す（オイ）〔さしすすせせ〕〔追落〕(他、さ四) ㊀おひておとす。㊁おひはぎす。

おひ-おひ（オイオイ）〔追追〕(副) だん〳〵に。ひきつゞきて、順序を追ひて。

おひ-か-く（オイ）〔けけくくるくれけよ〕〔追掛〕(他、か下二) あとより追ふ。

おび-かけ〔帶掛〕(名) 「おびどめ」に同じ。

冖**おひかける**〔追掛〕(他) 「おひかく」の訛。

おひ-かぜ（オイ）〔追風〕(名) ㊀うしろより吹く風。㊁船を吹きおくり來る風。おひて。(順風)。㊂吹き入る風。㊃衣袖の動くによりて起る風。

おび-がね〔帶金〕(名) 刀劍の鞘に附きたる鐶、これに緒を貫きて刀劍を腰に佩(オ)ぶ。

おひ-かは（オイカワ）〔追川〕(名)【動】「はえ」に同じ。

おび-かは（ワーカ）〔帶革〕(名) 革にて拵(コシラ)へたる帶。かはおび。(鞓)。

おび-がは（ワーカ）〔帶側〕(名) 帶地の片側。

お-ひき〔御引〕(名) 「ひきでもの」に同じ。

おひ-き（オイ）〔負木〕(名) ㊀古昔、婚禮のときに、女を乘せて負ふに用ひし具。㊁婚禮のときの引出物。

冖**お-ひきずり**〔御引摺〕(名) ㊀衣の裾長くして、歩むに地を曳(ヒ)くこと、又、其したての衣服。㊁婦人の物事にぶしやうなること。

おび-く〔かきくくけけ〕〔誘〕(他、か四) あざむきいざなふ。だましさそふ。

おひ-くづ-す（オイ）〔さしすすせせ〕〔追崩〕(他、さ四) 敵陣などを追ひうちてやぶる。おひかけて衝きやぶる。

お-ひげ〔御髭〕(名) ㊀ひげの敬稱。㊁ひげをのばし居るものゝ稱。――**をはらふ** 媚びへつらふ。

おひ-ごえ（オイ）〔追肥〕(名) 植ゑ物へさきに施し、肥料の上に、更に肥料を施すこと。

おひ-こみ（オイ）〔追込〕(名) ㊀追ひこむこと。㊁芝居の大入り場。㊂多くの客を一間に入るゝこと。

おひこみ-ば（オイ）〔追込場〕(名) 「おひこみ」(二)に同じ。

おひ-こ-む（オイ）〔まみむむめめ〕〔追込〕(他、ま四) 追ひて物の内に入る。

おひ-こ-む（オイ）〔めめむむるむれめよ〕〔追籠〕(他、ま下二) ㊀おしこむ。㊁病毒を外に發せしめずして、内にこもりをらしむ。

廿**おひ-こ-る**（オイ）〔らりるるれれ〕〔生凝〕(自、ら四) 生ひしげる。

おひ-さき（オイ）〔生先〕(名) 行くすゑ。しやうらい。

お-ひざ-もと〔御膝元〕(名) 國君の居城ある所。(輦下)。

廿**おひ-し-く**（オイ）〔かきくくけけ〕〔生及〕(自、か四) 生ひつゞく。よくしげる。

廿**おひ-し-く**（オイ）〔かきくくけけ〕〔追及〕(自、か四) 追ひつく。追ひおよぶ。

おび-した〔帶下〕(名) ㊀帶のあたる腰の邊。㊁腰より足までの距離。

おび-しばり〔帶紲〕(名) 腰の少し上の帶をしむべき所。よわごし。

冖**おびしろ-はだか**(名) 婦女の小帶を帶びしばかりにて、しだらなきさまにいふ。

おひ-すが-ふ（オイスガウ）〔はひふふへへ〕〔追次〕(自、は四) おひつく。あとをおふ。

おひ-すが-る（オイ）〔らりるるれれ〕〔追縋〕(自、ら四) 追ひおよぶ。

おひ-ずり（オイ）〔負簏〕(名) 背に負ふ簏(リス)。

おひ-ずり（オイ）〔笈摺〕(名) 順禮の着る一種の服、袖なし羽織に似る、笈を負ひて背の摺れざるために着けしに起るといふ。

おひ-ずる（オイ）〔笈摺〕(名) 前條に同じ。

おひ-ずゑ（オイ）〔生末〕(名) おひさき。

おひ-せん（オイ）〔追錢〕(名) 一旦拂ひたる上に、更に餘分に拂ふ錢。

おひ‐だし｜オイ［追出］（名）おひだすこと。――ぐすり［追出藥］（名）病氣の内攻をふせぐ藥。

おひ‐だ・す｜オイ（さしすせせ）［追出］（他、さ四）㊀外へ追ひやる、はうちくす。㊁病毒を外へ發せしむ。

おびただ・し（しくしくしき、しけれ）［夥］（形、二）㊀きはめて數多し。おほし。㊁はなはだし、「――き物音」。

おひ‐たち｜オイ［生立］（名）㊀おひたつこと。㊁おひたちたる經歷又は系統、「生若の――」。

おひ‐た・つ｜オイ（たちつつてて）［生立］（自、た四）次第にそだつ。おひゆく。せいちやうす。

おひ‐た・つ｜オイ（てててつつるつれてよ）［追立］（他、た下二）追ひはらふ。追ひやる。

おひ‐たて｜オイ［追立］（名）㊀おひたつること。㊁からすきの後の方に、柄の如く出でたる所。（犂梢）。

おび‐ぢ［帶地］（名）帶にすべき切れ地。

〔**お‐ぴつ**［御櫃］（名）おハチ。めしびつ、飯櫃。

おひ‐つかひ｜オイツカイ［追使］（名）おひつかふこと。又、おひつかはるゝ人。

おひ‐つか・ふ｜オイツカウ（はひふへへ）［追使］（他、は四）勝手に使役す。きまゝにつかふ。

おひ‐つぎ｜オイ［追次］（名）あとより書き加ふること。追加、追錄。

おひ‐つ・く｜オイ（かきくけけ）［追着］（自、か四）おひ及ぶ。

おひ‐つ・む｜オイ（めめむむるむれめよ）［追詰］（他、ま下二）逃ぐる所も無きまで追ひ迫る。おひせまる。（追窮）。

おひ‐て｜オイ［追風］（名）おひかぜ。じゆんぷう。（背風）。

おひ‐て｜オイ［追手］（名）亡(ニ)ぐる者をおひかけ行く人。おって。

十**おび‐と**［首］（名）姓(カバネ)の名。おうと。

おび‐とき［帶解］（名）㊀女の子の五歲のとき行ふ祝ひの儀式。おびなほし。㊁結びたる帶の解けたるまゝになしおくこと。――すがた［帶解姿］（名）おびとけてしだらなき姿。

おび‐どめ［帶留］（名）婦人の帶のうへに締め結ぶ紐。

おび‐とり［帶取］（名）「おびとりがは」の略言。――がは｜ガワ［帶取革］（名）太刀を腰に帶ぶるための革の緒。（鞓）。

おひとり‐がり｜オイ［追鳥狩］（名）鳥を追ひたて獵りすること。

おひ‐なは｜オイナワ［追繩］（名）野馬を捕ふるに用ふる繩、長さ三ひろ許、かけなは。

おび‐なほし｜オーナオシ［帶直］（名）「おびとき」(一)に同じ。

おひ‐なほり｜オイナオリ［生直］（名）運命のなほること。不幸の轉じて幸福に向ふこと。

お‐ひ‐な・る（らりるるれれ）［御豐成］（自、ら四）「おひんなる」の略言。

おひ‐はぎ｜オイ［追剝］（名）おひはぐこと。又、其人。おひおとし。（劫盜）。

おひ‐は・ぐ｜オイ（がぎぐぐげげ）［追剝］（他、か四）旅人などを途におびやかして、其衣服・財物をかすめとる。おひおとす。（行劫、掠奪）。

おひ‐ばら｜オイ［追腹］（名）古昔、主君の死を傷(イタ)み、臣下が其跡を追ひ切腹せしこと。じゆんし。（殉死）。

おひ‐はらひ｜オイハライ［追拂］（名）㊀おひはらふこと。㊁あとより支拂ふこと。

おひ‐はら・ふ｜オイハラウ（はひふへへ）［追拂］（他、は四）追ひ出す。おひ去りぞく。

十**おび‐ひき**［帶引］（名）古昔行はれし一種の遊戲、多人數集まりたる席にて、各自の帶の端によりたる紙を結び付け、これを集めて、兩人づゝ其中より引き試み、若し雙方とも相手方の帶を引き當てたるときは、其帶を交換したり。

おび‐ふう［帶封］（名）郵便物などを全く封じこめずして、たゞ其上に帶のみ掛けて封ずること。

十**おび‐ぶくろ**［佩袋］（名）㊀佩びらるゝやうに作りたるふくろ。さげぶくろ。（縢）。㊁「きんちやく」の古名。

おひ‐まく・る｜オイ（らりるるれれ）［追捲］（他、ら四）はげしく追ひかく。おひ散らす。

おひ‐まはし｜オイマワシ［追廻］（名）㊀あみの一種、雙方に竹を立て、これに綱を張りたるもの。（綽網）。㊁かれこれとおひつかふこと、又、其つかひ男。

おひ‐まは・す｜オイマワス（さしすすせせ）［追廻］（他、さ四）㊀あちらこちらと追ふ。㊁おひつかふ。ひどく使役す。

おひ‐め｜オイ［負目］（名）身に負ふ借財。しやくせん。かり。負債。（債）。

おび‐もの［佩物］（名）㊀古昔、禮服に用ひたる一種の裝飾、玉を綬に貫き、大抵乳の下のあたりより垂れしもの。おんもの。ぎよくはい。（玉佩）。㊁腰にさぐる裝飾品の總稱。

〔**お‐ひや**［御冷］（名）つめたき飲料水。のみみづ。ひやみづ。

おびやか・す（さしすすせせ）［脅］（他、さ四）㊀おびえしむ。おそれしむ。おどす。おどろかす。㊁おどして心に從はす。おどして財物を奪ふ。（劫）。㊂威力をしめす。（威）。

〔**お‐ひやくど**［御百度］（名）「ひやくどまゐり」に同じ。

十**おびや・す**（さしすすせせ）（他、さ四）おびやかす。

〔**おひやらか・す**（さしすすせせ）（他、さ四）ひやかす。からかふ。

おひ‐や・る｜オイ（らりるるれれ）［追遣］（他、ら四）㊀おひはらふ。おひて去らしむ。㊁せきたてゝ行かしむ。

おび‐ゆ（ええゆゆるゆれえよ）［怯］（自、や下二）㊀おぢおどろく。おづ。㊁惡夢におそはる。

〔**お‐ひら**［御平］（名）「ひらわん」の略言。

〔**お‐ひらき**［御開］（名）宴をはること。（多く婚禮の宴などにいふ）。

おび・る（れれるるるれれよ）［惚］（自、ら下二）あどけ無くおり、ぼんやりす、「寢――」。

おひ‐わけ｜オイ［追分］（名）㊀路の左右に分るゝ處、（岐路）。㊁「おひわけぶし」の略言。――ぶし［追分節］（名）小唄の一種、聲を永くひきて謠ふもの。

お‐ひん‐な・る（らりるるれれ）［御豐成］（自、ら四）ねむりさめて起くの敬語。

お・ふ｜ウォ（はひふふへへ）［追］（他、は四）㊀あとを踏(フ)む。おひかく。おひゆく。㊁あとに附く。したがふ。㊂おひつく。及ぶ。㊃救ふ、「既往の事は――べからず」。㊄既往に溯る。さかのぼる、「前功をおひ思ふ」。㊅非を遂ぐ。とぐ、「非を――」。㊆順序を經行く。すぐ、「年月を――」。

お・ふ｜ウォ（はひふふへへ）［逐、追］（他、は四）㊀退き去らしむ。おひはらふ。はなつ。㊁出だし遣(ヤ)る、やらふ。㊂馳驅す。はす。かる、「馬を――」。㊃競奔す。きそふ。㊄求む。㊅外物に執着す、「心物を――」。

お・ふ｜ウォ（はひふふへへ）［負］（他、は四）㊀背にのす。せおふ。㊁身に受く。うく。きる。（負）。

お・ふ｜ウォ（ひひふふるふれひよ）［生］（自、は上二）成長す。はゆ。のぶ。そだつ。

お・ぶ（ばびぶぶべべ）［帶］（他、は四）㊀腰に捲く。㊁腰にさぐ。身に着く、「刀を――」。佩。㊂めぐらす。おびとす、「水を――」。㊃含む。もつ、「雨を――」。

お・ぶ（びびぶぶるぶれびよ）［帶］（他、は下二）前條に同じ。

〔**おぶう**（名）湯の稱。（東京の方言）。

お‐ふく［阿福］（名）㊀頰腮高く鼻低くして、笑ひ顏したる女の顏の稱。おかめ。おたふく。

お‐ふく［御福］（名）頂戴物などの敬稱。――わけ［御福分］（名）頂戴物などを他に分け與ふること。

〔**お‐ふくろ**［御袋］（名）母たる人。（家母）。

お‐ふけ‐な・し（くしくしき、けれ）［負氣無］（形、二）身の分にすぎて、堪へ難し。

〔**おぶさ・る**（らりるるれれ）［被負］（自、ら四）㊀背の上にのる。おはる。㊁依賴す。たよる（寄託）。（東京の方言）。

十**おふし**｜オウシ［啞］（名）おし。あゐや。

おふ‐す｜オウス（名）古昔、游泳するとき、溺れぬために、脇に挾みて身をかろくするに用ひし具、後世の浮き袋。（拍浮）。

十**おふ・す**｜オウ（さしすすせせ）［生］（他、さ四）そだつ。やしなふ。

おふせ｜オウセ［仰］（名）おほせ。いひつけ。（命）。

おふ‐て｜オウ［追手］（名）（敵を或口より追ひ込みて、裏にてからめとる意）城又はとりでなどの表口の稱。からめての對。

十**おふな‐おふな**｜オウナオウナ（副）身に負ひ得るだけ負ひて、十分力を盡くして。

〔**おぶ・ふ**｜オブウ（はひふふへへ）［負］（他、は四）「おふ」に同じ。

おふれ［御觸］（名）德川時代に、幕府又は城主よりの訓令又は示達の稱。（御徇）。

お‐へや［御部屋］（名）貴人のめかけの稱。（姨姫）。――さま［御部屋樣］（名）前條に同じ。――しゆう［御部屋衆］（名）將軍の寢所に宿直するもの。

オペラ［Opera］（名）劇詩と音樂とを合せ、これに身振を加へて演ずる西洋の演劇。

おほ‐｜オオ［大］（接頭）㊀或語に冠して大盛なる意又は根原の意を表はす、「――雨」、「――もと」。㊁或語に冠して尊敬の意を表はす。

おほ‐あせ｜オオ［大汗］（名）甚しくいづる汗。

おほ‐あな｜オオ［大穴］（名）㊀大いなる穴。㊁大いなる缺損。

おほ‐あに｜オオ［大兄］（名）第一の兄。總領の男子。

おほ‐あね｜オオ［大姉］（名）第一の姉。總領の女子。

おほ‐あは｜オオアワ［大粟］（名）［植］あはの一種。穗大くして實の粒の粗なるもの。

おほ‐あふぎ｜オオオウギ［大扇］（名）古昔、天皇の出御のとき、左右より女官のさしかざし、長柄の扇。

おほ‐あめ｜オオ［大雨］（名）はなはだしくふるあめ。

おほ‐あらめ｜オオ［大荒目］（名）鎧のおどし方の名、綠目の間を、まばらに編みたるもの。

おほ‐あれ｜オオ［大荒］（名）㊀大いにあるゝこと。㊁暴風雨の最もはげしきこと。

十**おほ‐い**｜オオ［大］（名）㊀「おほき」の音便。㊁古昔、位に冠して用ひし語、「――みつのくらゐ」。（正）。㊂同官中高き方の稱。

おほ‐いき｜オオ［大息］（名）ふとく吐く息。といき。ためいき。ふといき。たいそく。

十**おほい‐ぎみ**｜オオイ［大君］（名）第一のあねぎみ。（大郎姫）。

おほ‐いくさ｜オオ［大軍］（名）はげしきたゝかひ。大合戰。

おほ‐いに｜オオ［大］（副）㊀甚しく。多く。㊁ふとく。たかく。㊂あらく。ひろく。

おほ‐いぬ｜オオ［大犬］（名）［動］いぬの一種、形大きく力つよく、よく狩りにつかふもの。（獒）。

十**おほい‐ほっし**｜オオ［大法師］（名）㊀僧の位。㊁僧の敬稱。

十**おほい‐まうちぎみ**｜オオイモウチー［大臣］（名）「おほきまうちぎみ」の音便。

十**おほいまつりごと‐の‐つかさ**｜オオ［太政官］（名）「だじやうくわん」に同じ。

十**おほうた‐どころ**｜オオ［大歌所］（名）古昔、諸國の風俗・神樂・催馬樂(サイバラ)の歌曲を掌りし所。

おほ-うちオホ［大内］（名）だいり。ごえよ。(内裏)。—**ぎり**［大内桐］（名）五三の桐。—**びし**［大内菱］（名）ひしの花模様の一種。おほうちぎりの類。—**ぼん**［大内本］（名）大内義隆が、明國に紙をやり、摺らせて取り寄せし書物の稱。—**やま**［大内山］（名）〔「やま」は、添へたる語〕禁中の大庭。おほうち。

卄**おほ-うちぎ**オホ［大袿］（名）うちぎの大きなるもの。あこめのゆきたけを、大きく仕立てたるもの。

おほ-うみオホ［大海］（名）大いなる海。たいやう。

おぼえ［覺］（名）㊀おぼゆること。㊁見聞きしたることを、心に存して忘れぬこと。きおく。(記憶)。㊂技術に熟練したること。㊃信用あること。寵遇せらるること。「君の―めでたし」。—**がき**［覺書］（名）㊀記憶のために書き付けておくこと。又、其書き付け。㊁［Memorandum］一種の外交文書、一國政府又は其使臣が、對手國政府又は其使臣に對して、某事件の性質歴史其他これに就きて執るべき態度を明かにし、又は其論斷主張等を闡するために送付するもの、長文に捗ること多し。又、別に商議の始末書ありて、其合議の成立せるときのものは、即ち、一種の協定書なり。—**ちやう**［覺帳］（名）おぼえがきするための帳簿。てちやう。てびかへ。

おほ-おくオホ［大奥］（名）江戸城にて御臺所及び女中の起居するところ。

卄**おほ-おとゞ**オホ［大弟］（名）皇太弟を申し奉る語。

おほ-おばオホ［大祖母］（名）祖母の母。ひばゞ。(曾祖母)。

卄**おほ-おほ-し**（しく・し・しき・しけれ）（形、二）〔「おほ」は「おぼろ」の略音〕はきとせず。あいまいなり。

おほ-おほぢオホオホ［大祖父］（名）祖父の父。ひぢぢ。(曾祖父)。

卄**おほ-おみ**オホ［大臣］（名）上代の官職、大連と共に朝政を執りたる者、即ち、臣の氏の上にして臣の氏を攝理したる者。

卄**おほ-および**オホ［大拇指］（名）おやゆび。

おほ-がオホ［大鋸］（名）大きなる鋸。おが。がんぎ。がゞり。

卄**おほ-が**オホ［繰車］（名）「いとくりぐるま」の古名。

おほ-かうもりオホコ（名）【動】翼手類に屬する哺乳動物、體は鼠大にして翼廣し、果實を食す、小笠原・琉球等に産す。(果蝙蝠)。

おほ-がさオホ［大笠］（名）古昔に用ひし大なる笠、柄ありて携帶し得べきもの。(簦)。

卄**おほかしはで-の-つかさ**オホカシワデ［大膳職］（名）古昔、宮内省に屬し、諸國の調雜物其他膳部に關する一切の事を取り扱ひし所。

おほ-かたオホ［大方］（名、副）十のうち七八。たぶん。たいてい。あらかた。(約、略)。

おほ-がたオホ［大形］（名）大きなる形。こがたの對。

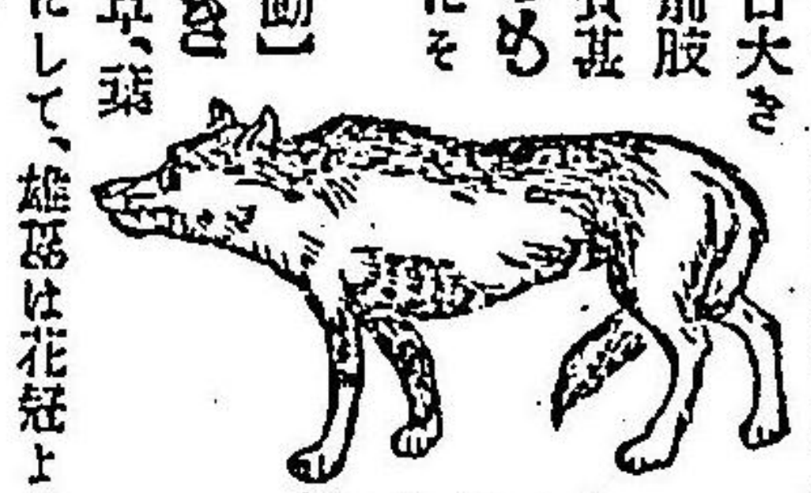
おほ-かたびらオホ［大帷子］（名）かたびらの一種、單(ヒトヘ)の下に着る、古昔は、汗取のため夏のみ用ひしが、後世は、夏冬ともに着用す、色目は夏紅にして冬白なり。(衫衣)。

卄**おほ-がね**オホ［巨鐘］（名）「つりがね」の古名。(鐘)。

〔**おほ-がね**オホ［大金］（名）多額なる金。たいきん。—**まうけ**ウケモ［大金儲］（名）大金をまうくること。—**もち**［大金持］（名）多額の財貨を有する人。財産家。金滿家。

おほ-がひガイオホ［頁］（名）漢字のつくりの名、順・類の如き字の右方にある頁の字の稱。「こがい」(貝)の對。

おほかみオホ［狼］（名）【動】食肉類中犬科に屬する獸、深山に棲む、耳小さく口大きく、頭は細長し、趾行にして前肢に五爪後肢に四爪あり、性質甚だ猛惡なり。—**ごろも**［狼衣］（名）衣服の身體にそはずして大きなるにいふ語。


［おほかみ］

〔**おほ-かめ**オホ［狼］（名）【動】「おほかみ」の訛。—**の-き**（名）【植】忍冬科に屬する草、葉は廣楕圓狀或は圓狀心形にして、雄蕊は花冠より長し、嫩葉は食用に供せらる。

〔**おほ-がら**オホ［大柄］（名）㊀身體の通常より大きなること。(魁梧)。㊁縞柄(シマガラ)の普通より大きなること。

卄**おほ-かり**オホ［大雁］（名）【動】「ひしくひ」の古名。

おほき-オホキ［大］（接頭）㊀「おほ」に同じ。㊁「おほい」二(一)に同じ。(正)。

卄**おほき-おとゞ**キオホ［太政大臣］（名）「だじやうだいじん」に同じ。

卄**おほき-おほい-まうちぎみ**オオキオオイモウチギミ［太政大臣］（名）前條に同じ。

卄**おほき-さき**オホ［大后］（名）皇太后を稱し奉る語。

おほき-さキオホ［大］（名）おほきなる度合ひ、ふとさ。

おほき-しキオホ（く・し・き・けれ）［大］（形、一）㊀狹からず。ひろし。㊁少からず。おほし。㊂あまりなし。とりとめなし。㊃輕からず。おもし。「事おほきくして其才に堪へず」。㊄密ならず。あらし。㊅かさ多し。ふとし。㊆聲高し。たかし。㊇年多し。たけたり。

〔**おほき-に**キオホ［大］（副）「おほいに」に同じ。

卄**おほき-まうちぎみ**オオキモウチギミ［大臣］（名）「おほいまうちぎみ」に同じ。

おほ-きみオホ［大君］（名）㊀至尊の尊稱。㊁親王の御子「王」。

卄**おほきみ-づかさ**オホ［正親司］（名）「おほきんだちのつかさ」に同じ。

おほ-きもいりオホ［大肝煎］（名）おほじやうや。(大保正)。

〔**おほ-ぎやう**オホギヤウ［大形］（名）實際よりは様子の方、却ておもおもしくあること。おほげさ。

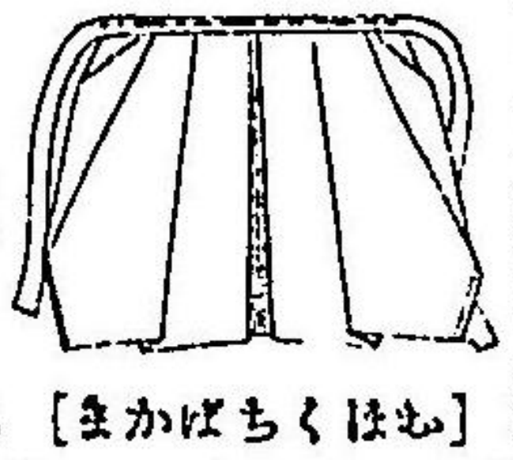
おほ-ぎりオホ［大切］（名）㊀大きく切り分けたる切り身。㊁芝居の狂言の終末。おほづめ。けつきよく。(大團圓)。㊂すべて物事の終末。をはり。

卄**おほきんだち-の-かみ**オホ［正親正］（名）古昔の官名、おほきんだちのつかさの長官。

〔**おほきんだち-の-つかさ**オホ［正親司］（名）古昔、宮内省に屬し、皇族・諸王などの名籍をつかさどりし所。おほきみづかさ。

おほ-ぐけオホ［大絎］（名）くけ針の大きなるもの。

おほ-くちオホ［大口］（名）「おほくちばかま」の略言。—**ばかま**［大口袴］（名）古昔、行はれし下袴の一種、束帶のとき上袴の下に穿ちたるもの、裾の口廣くして大きし、すゞし又はひらきぬを用ひて仕たてたり。


［おほくちばかま］

〔**おほ-ぐち**オホ［大口］（名）㊀大きく口をひらくこと。㊁みだりがはしきことをきらひなくいふこと。—**をきく**　おほぐちをいふ。

おほ-くびオホ［大領］（名）「おくみ」に同じ。

おほ-ぐひグイオホ［大食］（名）たいしよく。ばうしよく。

おほ-ぐもオホ［大蜘蛛］（名）【動】くもの一種、大形にして白斑あり、脚長くして毛多し。

おほくら-きやうキヨウオホ［大藏卿］（名）㊀古昔の大藏省の長官。㊁明治十八年官制改革以前に於ける、大藏大臣の稱。

おほくら-しやうシヨウオホ［大藏省］（名）㊀古昔の八省の一、太政官に屬し、出納・貢調・權衡・度量・賣買・估價・其他金銀・珠玉等に關する事務をつかさどりし中央官廳、おほくらのつかさ。㊁大藏大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、財務行政の事務を取り扱ふ中央官廳、又、大藏大臣が處理する事務の全體の稱。—**しようけん**［大藏省證券］（名）流動公債の一、會計年度内に一時の歳入不足を塡補するため、大藏省が發行せる短期の公債證書、我國現行法にては、十二ヶ月を以て償還の最長期とし、毎年の豫算にて、其發行最高額を定む。

おほくら-だいじんオホ［大藏大臣］（名）各省大臣の一にして、財務行政の單獨官府、政府の財務を總轄し、會計・出納・租税・貨幣・預金・保管物及銀行に關する事務を管理し、府縣郡市町村及公共組合の財務を監督するもの。

卄**おほくら-の-かみ**オホ［大藏卿］（名）「おほくらきやう」(一)に同じ。

卄**おほくら-の-つかさ**オホ［大藏省］（名）「おほくらしやう」(一)に同じ。

〔**おほ-げさ**オホ［大袈裟］（名）㊀さほどにも無きことを大きくいふこと。おほぎやう。㊁肩より斜に切りおろすこと、「―に切り拂ふ」。

おほけ-な-しオホ（く・し・き・けれ）［負氣無］（形、二）不相應なり。力にあまれり。

〔**おぼこ**（名）㊀娘の未だ世に慣れざること、女の未だ男に接せざること、又、其頃の女、處女。㊁末の子。

おほ-ごしよオホ［大御所］（名）古昔、隱居せられたる親王の尊稱。又隱居せられたる將軍の稱。

おほ-ごてふオオゴチヨウ［大蝴蝶］（名）【植】「きんぽうげ」に同じ。

〔**おほ-ごと**オホ［大事］（名）なみなみならぬ事がら。

おほ-ごゑオホ［大聲］（名）たかき聲、大きなるこゑ。たいせい。かうせう。

卄**おほ-ざう**ソウオホ（名）ひとゝほり。おもてむき。

おほさか-がうしオオサカゴウシ［大阪格子］（名）障子の一種、腰を板張りにし上を細き格子にして、取りはづし得る小障子あるもの。

おほさか-ぢやうばんオオサカジヨウバン［大阪定番］（名）德川時代に、大阪の京橋口及玉造口の二ヶ所の守備にあたりし役。

おほさか-づけオホ［大阪漬］（名）大根の根と葉とを細かくきざみて、これを鹽につけたるもの。

おほ-ざけオホ［大酒］（名）酒を多く飲むこと。たいしゆ。ばういん。(暴飲)。—**のみ**［大酒飲］（名）おほざけを飲むもの。

〔**おほ-ざっぱ**オホ（名）㊀小き事に拘泥せぬ性質。おほまか。ふいらく。㊁細密にわたらざること。およそ。あらまし。

おほ-ざつまオホ［大薩摩］（名）「おほざつまぶし」の略言。—**ぶし**［大薩摩節］（名）一種の俗曲、享保の頃、大薩摩主膳太夫より始まる、後分れて、河東・小薩摩など種々の派を生じ、江戸節もまたこれより出づ。

おほ-ざとオホ［大邑］（名）邑を阝としたる漢字のつくり、即・郊などの如き字の右方にあるものゝ稱。

おほ-さはオオサワ［多澤］（名）〔「さは」は、多くの義〕たくさんにあること。

おほ-しオホ（名）【植】蓼(タデ)科に屬する草、葉は波狀

を基し、蕊柄の上面は平坦なり、藥用(下劑)植物なり。からだいわう。(大羊蹄)。

おほ・しオオシ〔くしき・けれ〕「多」(形、一) ㊀數又は量十分にあり。すくなからず。たくさんなり。㊁求むる所きびし。「子に求むる—」。

おほ・し〔しく・しき・しけれ〕「思」(形、二) おもはし。「彼の人と—き壁」。

おほ-しかオオ「大鹿」(名)【動】偶蹄類中麋鹿科に屬する獸、牝ね牡のみ有枝の角を生じ其質固形して每年これを交脫し年々一枝を增す、老成後は每年同形の角を生じ、其枝は末端にて族(ムラ)り分る、毛に斑なく、牡は暗黑色にして牝は褐色なり。

おほ-しかけオオ「大仕掛」(名) 仕掛けの大なること。

おほ-しばゐオオ「大芝居」(名) ㊀仕掛けの大なる芝居。又、大劇場。㊁名題の技藝。又、名優にも及ぶべき技藝。

おほ-しほオオシオ「大潮」(名) 一ケ月内にて最もさしひきの大なる潮、太陽及太陰が、地球に對して同方位にあるときか、或は地球が太陽と太陰との中間にあるときか、即ち、滿月か若しくは新月かのときに起る。

おほ-しぼオオ「大皺」(名) ㊀ゑぼしの紙にある、あらき皺(シワ)。㊁皺の多くよりたること。

おほ-しまオオ「大島」(名) ㊀砂糖の一種、大隅國大島より出だすもの。㊁「おほしまつむぎ」の略言。 **—つむぎ**「大島紬」(名) 大隅國大島より產出する飛白(カスリ)織りの紬。 **—りう**「大島流」(名) 鎗術の流派の一、大島吉綱を祖とす。

おほしま-すぢオオ「大縞條」(名) けもの、毛なみ、縞(シマ)になりて大なる筋あるもの。

おほし-めし「思召」(名) おぼしめすと、おかんがへ。

おほしめ・す〔さしすせ・すせせ〕「思召」(他、さ四) おもふの敬語。(所念)。

おほ-しやうオオジヤウ「大庄屋」(名) 多くの庄屋の上に立つ支配區域大きなる庄屋。おほぎもいり。

おほ・すオオ〔さしすせ・すせせ〕「生」(他、さ四) ㊀成長せしむ。はやす。のばす。㊁養育す。やしなふ。そだつ。

おほ・すオオ〔せせすするすれせよ〕「遂」(他、さ下二) なしとぐ。はたす。をふ。「頭み—」「志—」。

おほ・すオオ〔せせすするすれせよ〕「負」(他、さ下二) ㊀脊おはしむ。おはす。おひもたす。㊁うけもたす。かづく。

おほ・すオオ〔せせすするすれせよ〕「課」(他、さ下二) ㊀貢租を納るべきことを命ず。㊁わりあてゝなさしむ。命じてなさしむ。

おほ・すオオ〔せせすするすれせよ〕「仰」(他、さ下二) いふ又はいひつくの敬語。

おぼ・す〔さしすせ・すせせ〕「思」(他、さ四) おもふの敬語。

おほせセオオ「仰」(名) ㊀いひつけ。めいれい。㊁おことば。

おほ-せいオオ「大勢」(名) あまたの人。たいぜい。たにんず。(大衆)。

おほ-せいろう-だなオオ「大西樓棚」(名) 四十八棚の一。

おほせ-がきオオ「仰書」(名) おほせの事をかきたる文書。

おほ-せきオオ「大關」(名) ㊀相撲の稱のうちにて、最も上に位すべき身分。せき。せきとり。㊁其仲間のうちにて、最もすぐれたるもの、稱にもいふ。

おほせ-ごとセゴオオ「仰言」(名) おほすることば。

おほ-せつきオオ「大節季」(名) 一年のをはり。せっき。ねんまつ。

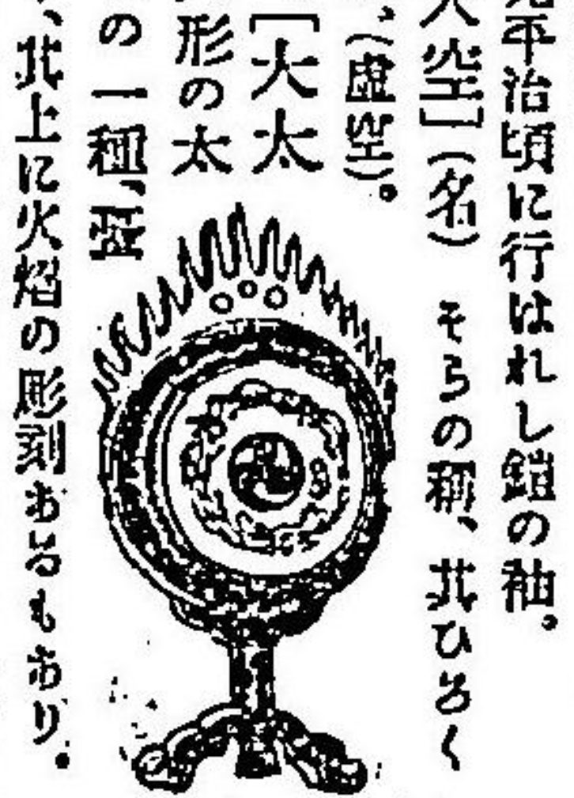
〔**おほせる**〕「遂」(他) 「おほす」の訛。

おほ-そ「御細」(名) ㊀「おび」の一名。(奥女中の語)。㊁「いわし」の一名。(婦人の語)。

おほ-そでオオ「大袖」(名) ㊀はゞひろきそで。ながきそで。㊁保元平治頃に行はれし鎧の袖。

おほ-ぞらオオ「大空」(名) そらの稱、其ひろく大なる故にいふ。(虛空)。

おほ-だいこオオ「大太鼓」(名)(い)大形の太鼓。(ろ)たいこの一種、臺の上に据ゑつく、其上に火焰の彫刻あるもあり。



〔おほだいこ(ろ)〕

おほ-だうぐオオドウ「大道具」(名) 芝居にて、舞臺に用ふるたてつけ・障子其他すべての道具が、普通のものより稍や大なるもの、稱。

おほ-たかオオ「大高」(名) 「おほたかだんし」の略言。 **—だんし**「大高檀紙」(名) 檀紙の一種、大形にして、地白く厚く皺あり。

おほ-たちオオ「大太刀」(名) 戰場に脊負ひ行く大なる太刀。

おほ-たてあげオオ「大楯揚」(名) すねあての一種、古昔に多く用ひしもの。

〔**おほ-たてもの**〕オオ「大立物」(名) ㊀芝居にて、其一座の中の技倆最もすぐれたる名題役者。㊁其社會にて、推し立てらる、人物。

おほ-ぢオオ「大路」(名) 幅のひろき交通路。たいだう。こうぢの對。

おほ-ぢオオ「祖父」(名) おほぢゝ。ぢゝ。

おほぢ-が-ふぐりオオ(名)【動】かまきり蟲の幼蟲、秋の終りに樹枝などに著く、初めは唾の如く、後には黑褐色となる。あしがらみ。(螵蛸)。

〔**おほ-つ**〕オオ「黄土」(名) 「わうど」(黄土)の訛。

〔**おほ-づ**〕オオ「大圖」(名、副) おほよそ。たいがい。

おぼつか-なが・る〔らりるれ・ろれれ〕「覺束無」(他、ら四) おぼつかなく思ふ。

おぼつか-な・し〔くしき・けれ〕「覺束無」(形、二) ㊀判然せず。分明せず。㊁心もとなし。たしかならず。

おほ-つごもりオオ「大晦」(名) 一年の最終の日。おほみそか。おほとし。

おほ-つちオオ「大地」(名) 地の稱、其廣大なるよりいふ。

おほ-づつオオ「大砲」(名) たいはう。(巨熕)。

おほ-つづみオオ「大鼓」(名) つゞみの一種、大形にして、腰にもたせてうつもの。

おほ-つぼオオ「大壺」(名) ㊀大いなるつぼ。㊁「サシユビン」の古名。

おほつぼ-りうオオ「大坪流」(名) 足利義滿の頃より始まりたる馬術の一流、大坪廣秀を祖とす。

おほ-づめオオ「大詰」(名) 芝居の最末。おほぎり。 **—のき**オオ「大詰木」(名) 芝居にて、おほづめに入る、拍子木(ヒヤウシギ)。

おほつ-ゑオオ「大津繪」(名) ㊀きはめて走り書きにしたる一種の粗畫、多くは滑稽ぶみたるものにして、近江國大津より賣り出したりといふ。㊁「おほつゑぶし」の略言。 **—ぶし**「大津繪節」(名) 一種の俗謠。

おほ-てオオ「大手」(名) 城の前門。(追手)。

おほ-でオオ「大手」(名) 雙手を左右へ張りひろげたること。

廿**おほ-てて**オオ「大父」(名) 祖父の古稱。

おほ-どオオ「大戶」(名) 表口などにある大いなる戶。

おほ-どうオオ「大胴」(名) 能樂に用ふる大鼓。

おほどかオオ(名) ゆるやか。おほのか。ゆたか。おほまか。おほざっぱ。

廿**おほ-ど・く**オオ〔かきくく・けけ〕(自、か四) 取り締(マ)りなくあり。おほまかにてあり。

おほ-どこオオ「大床」(名) ㊀椙のそとがこひ。(椽)。㊁ひろき床の間。

廿**おほ-とし**オオ「大年」(名) ㊀ぐわんねん。㊁おほみそか。 **—とし**「大年越」(名) 「としこし」に同じ。 **—より**「大年寄」(名) 「たいらう」(大老)に同じ。

廿**おほと-なぶら**オオ「大殿油」(名) 古昔、宮中につけたるともしびの稱。「近く—まゐりて」。

廿**おほ-とねり**オオ「大舍人」(名) 古昔の官名、宮中の分番又は宿直などの事をつかさどりしもの。 **—のつかさ**「大舍人寮」(名) 古昔、中務省の被管にして、大舍人の出仕せし役所。 **—のつかさ-の-かみ**「大舍人寮頭」(名) おほとねりのつかさの長官。

おほ-とのオオ「大殿」(名) ㊀廿古昔、宮城の寢殿の稱。㊁古昔、貴人の當主の父の尊稱。㊂貴人の世子に對して、當主の稱。 廿**—あぶら**「大殿油」(名) 「おほとなぶら」に同じ。 廿**—どもり**「大殿籠」(名) 主上の御寢なること。 廿**—ども・る**〔らりるる・れれ〕「大殿籠」(自、ら四) 主上の御寢なるにいふ語。 廿**—ほがひ**ガイ「大殿壽」(名) 古昔、宮殿などに、火災其他の災難無からんことを祈りし祭事。(大殿祭)。

おほ-どほりオオドオリ「大通」(名) 市中にあるひろき道。おほぢ。だいだう。

廿**おほ-ともひ**オオトモイ「大辨」(名) 古昔の太政官の判官、辨の條を見よ。

おほ-とりオオ「大鳥」(名) ㊀鶴鸛などの類の稱。㊁莊子に記しある鵬(ホウ)といふ鳥の稱、鯤(コン)といふ大魚の化してなりたるものといふ。 **—の**「大鳥」(枕) 「羽がへ」に冠らする詞。

廿**おほ-ど・る**オオ〔れれるるるれれよ〕(自、ら下二) ㊀みだれ散る。ひろがりみだる。㊁おほどく。

廿**おほな-おほな**オオナオオナ(名) 「おふなおふな」に同じ。

廿**おほな-と**オオナ「凡子」(名) 普通の人の子。いやしき身分のもの、子。又、大名の兒にして女の美稱なりともいふ。

おほ-なだいオオ「大名題」(名) 綴物の脚本にて總體の標題、各段の標題に對していふ。

廿**おほ-なほび**オオナオビ「大直日」(名) ㊀(物忌みより平常になほるよりいふ義) 神事はて、後の宴。なほらひ。なほみ。㊁大直日の神の略言。 **—の-かみ**「大直日神」(名) まが事をなほして吉となしたまふといふ神。

おほ-なみオオ「大浪」(名) 高く大きなる浪。(巨濤)。

廿**おほ-なめ**オオ「大滑」(名) 「はだつけ」の古名。

廿**おほ-なめ**オオ「大嘗」(名) 「おほなめまつり」の略言。 **—まつり**「大嘗祭」(名) 天皇の大位に卽(ツ)きたまひしとき、天祖を始め奉り天神地祇を祭らせたまふ大祀。たいじやうゑ。

廿**おほ-にへ**オオニエ「大贄」(名) ㊀(大贄の義)「だいじやうゑ」の一名。㊁つと。あらまき。(苞苴)。

おほ-ねオオ「大根」(名) ㊀物事の起源。もと。㊁廿【植】「だいこん」の古名。(蘿蔔)。

〔**おほ-ね**〕オオ「大根」(副) ぐわんらい。もとより。

廿**おほね-むし**オオ(名)【動】「いなむし」の古名。(蝗)。

廿**おほのか**オオ(名) 性質寬大にして小事にかゝはらざること。ゆるやかにしてこせつかざること。

廿**おほ-ば**オオ「祖母」(名) 祖母。(祖姑)。

おほば-がらしオオ「大葉芥子」(名)【植】からしなの變種、葉大にして辛味(カラ)少し。

おほば-こオオ「大葉子」(名)【植】車前草科に屬する草、葉は根生にして、花は穗狀花序に排列し、頭は横開す、葉は食用に種子は藥用に供せらる。かへる

ば。おんばこ。（車前草、蝦蟆草）。

おほ-はし-だな（オオ）[大橋棚]（名）「おはせいろう」に同じ。

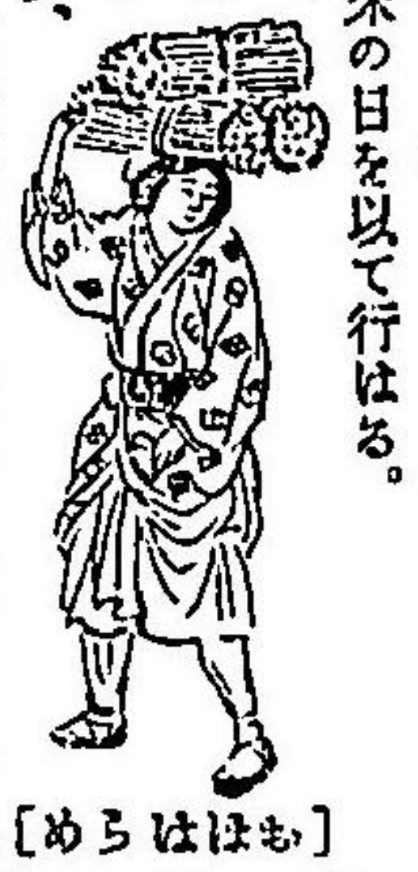
おほはし-りう（オオ）[大橋流]（名）和風の書法の一派、石川丈山の門人なる大橋長左衛門の子隆慶より始まれるもの。

⌐**おほ-はだぬぎ**（オオ）[大肌脱]（名）肌を多くあらはして脱ぐこと。

おほ-はば（オオ）[大幅]（名）布帛の幅の大なること。又、其布帛。

おほ-はらひ（オオハライ）[大祓]（名）半年の罪穢（ツミケガレ）を祓（ハラ）ふ意の神事、古昔、六月及十二月の晦日に、百官を朱雀門に會して行はれたり、今時、宮中を始め各神社にて、在來の日を以て行はる。

おほはら-め（オオ）[大原女]（名）京都附近大原の里より出づる女、頭上に薪を戴き、「黒木召せ」と、呼びて賣りあるく。


[おほはらめ]

おほ-ばん（オオ）[大判]（名）㊀版の大なるもの。こばんの對、「―の紙」。（大版）。㊁昔時、通用せし金貨の一、形はこばんに同じく、一枚にて七兩二分にあたりたるもの。

おほ-ばん（オオ）[大鷭]（名）【動】「かはがらす」に同じ。

おほ-ばん（オオ）[大番]（名）㊀鎌倉時代に、課役として京都に駐在せし諸國の武士の稱。㊁「おほばんぐみ」の略言。 **―がしら**[大番頭]（名）おほばんぐみの長。 **―ぐみ**[大番組]（名）徳川時代に、江戸・京都・大阪の三城を戍（モ）りし武士の稱。 **―せき**[大番席]（名）徳川氏の制にて、はたもとの扶持高二千石未滿より廩米二百俵までのものゝ稱。

おほひ（オオイ）[被]（名）おほふこと。おほふに用ひたるもの。（蓋、幎）。

おほ-びき（オオ）[大引]（名）家の床下などに横にわたす木。

⌐**おほ-びけ**（オオ）[大引]（名）東京の遊郭にて、午前二時頃の稱。

おほ-ひら（オオ）[大平]（名）㊀一種の料理、芋・蓮根・蒟蒻（コンニヤク）などに鳥の肉などを加へ、汁多く煮たるもの。㊁「おほひらわん」の略言。 **―わん**[大平椀]（名）ひらたくして大なる椀。

⌐**おほ-びら**（オオ）（名）あらはにて、他見に頓着せざるさまにいふ語。

十**おほ-びる**（オオ）[大蒜]（名）【植】「にんにく」の古名。

おほ-びろま（オオ）[大廣間]（名）㊀徳川時代に、江戸城内の廣間の稱、即ち、諸侯の列席せし所。㊁すべて、通常のものより超えて廣く、衆人會合のために設けられたる間の稱。

おほ-ふ（オオウ）（はひふふへへ）[覆、被]（他、は四）㊀上にかけふさぐ。㊁かぶす。きす。㊂かぶる。きる。㊃包羅す、つゝむ、「仁德天下を―」。㊄庇護す。かばふ。㊅隱蔽す。かくす。

おほ-ふ（オオウ）（はひふふへへ）[覆、被]（自、は四）㊀上にかゝりふさがる。㊁布及す。およぶ。

⌐**おほ-ふう**（オオ）[大風]（名）そんだい。おほへい。

おほ-ぶく（オオ）[大福]（名）歳旦の朝の祝ひに飲むうめぼしを入れたる茶湯。

おほ-ふね（オオ）[大舟]（名）大いなる船。

おほ-ふりそで（オオ）[大振袖]（名）㊀延寶・天和の頃迄行はれし大なるふりそで。㊁すべて大なるふりそでにいふ語。

⌐**おほ-ぶろしき**（オオ）[大風呂敷]（名）㊀幅ひろき風呂敷。㊁自家の事を誇大にいふこと。 **―をひろぐ** 誇大なる言をなす。

廿**おほ-べ**（オオ）[大嘗]（名）「たいじやうゑ」に同じ。

⌐**おほ-へい**（オオ）[大柄]（名）傲慢、おほふう。

廿**おほほ-し**（シ―オ）（しくしくしきしけれ）（形、二）おぼゝし。

廿**おほほ-す**（ス―オ）（さしすすせせ）[思]（他、さ四）おぼしめす。

おほ-ボトケ（オオ）[大佛]（名）巨大なる佛像、だいぶツ、「奈良におはす―」。

十**おほほ-る**（れれるるれれよ）[溺]（自、ら下二）おぼる。

おほ-ま（オオ）[大間]（名）㊀ひろき室、廣間。㊁「さやうま」の一名。

廿**おほ-まうちぎみ**（オオモウ）[大臣]（名）「おほいまうちぎみ」の略言。

⌐**おほ-まか**（オオ）[大]（名）ゆるやかなること。おほやう。

廿**おほ-まがどき**（オオ）[大禍時]（名）夕ぐれなどの薄ぐらくなりたる時の稱。

廿**おほまつりごと-の-おほまつぎみ**（オオオ）[太政大臣]（名）「だじやうだいじん」に同じ。

廿**おほまつりごと-びと**（オオ）[太政人]（名）參議の古稱。

廿**おほま-どき**（オオ）[大禍時]（名）「おほまがとき」に同じ。

おほ-まはし（オオマワシ）[大回]（名）まはり道して行くこと。おほまはり。

おほ-まはり（オオマワリ）[大回]（名）㊀道などを遠くまはりて行くこと。とほまはり。ちかみちの對。㊁大いなる立ちまはり。

おほ-まへ（オオマエ）[大前]（名）伊勢の大神宮の社の前の庭、他の神にては廣前といふ。

おほ-まめ（オオ）[大豆]（名）まめ又はだいづの稱。

おほ-マンヂユウ（オオ）[大饅頭]（名）㊀饅頭の大なるもの。㊁「おほマンヂユウどころ」の略言。 **―どころ**[大饅頭鉢]（名）兜（カブト）のはちの一種、饅頭の形にかたどり作りたるもの。

おほ-まんどころ（オオ）[大政所]（名）攝政又は關白などの母の尊稱。

廿**おほ-み-**（オオ）[大御]（接頭）或語に冠して物を尊みていふ意を表はす、「―歌」。 **―あかし**[大御燈]（名）神佛などに奉る燈明の敬稱。 **―あへ**（エ）[大御饗]（名）宮中にて群臣にたまはる酒饌の敬稱。

おほみ-いつ（オオ）[大御稜威]（名）天子の御威德。

おほ-みそか（オオ）[大晦日]（名）一年の最終の日。おほつごもり。おほとし。（除日）。

⌐廿**おほみ-たから**（オオ）[大御寶]（名）（國のたからといふ義）國民の稱。おほんたから。れいみん。（公民）。

おほ-みち（オオ）[大道]（名）幅ひろき道。だいだう。おほぢ。

おほ-みづ（オオ）[大水]（名）暴雨などのため、河水溢（アフ）れて陸上を浸（ヒタ）すこと。こうずゐ。（洪水、巨浸）。

おほみね-いり（オオ）[大峯入]（名）修驗者が修業のために、大和國大峯山に入ること。又、其修驗者の稱。「―のやまぶしの如く」。

おほみ-の-やり（オオ）[大身槍]（名）刃の大なる槍。

廿**おほ-みや**（オオ）[大宮]（名）㊀大なる宮殿。㊁おほうち。皇室。㊂皇太后の御一名。 **―づかさ**[大宮司]（名）「だいぐうじ」に同じ。 **―びと**[大宮人]（名）㊀宮中に仕ふる人。㊁後宮の女官。

廿**おほ-みら**（オオ）[薤]（名）【植】「らっきよう」の古名。

おほ-むかし（オオ）[大古]（名）最も年久しきむかし。たいこ、じやうこ。

おほ-むぎ（オオ）[大麥]（名）【植】禾本科に屬する一年生又は二年生の直立草本、穎果は四列に相並びて芒あり、重要なる農作物にして、種子は食用に供せられ、稈（ワラ）は帽子其他麥稈細工の原料に用ひらる。

おほ-むね（オオ）[大旨]（名）だいたいの主意。

おほ-むね（オオ）[大旨]（名、副）おほよそ。たいてい。たいりやく。「―皆惡物」。

おほ-むら（オオ）[大村]（名）戸數多き村。

廿**おほ-むらじ**（オオ）[大連]（名）上古、大臣とならびて朝政に參與せしもの、多くは、臣（オミ）又は連（ムラジ）の姓の家のもの任ぜられたり。

おほ-め（オオ）[大目]（名）㊀二百目を一斤とすること。㊁監督をゆるやかにすること。「―に見ておく」。

廿**おぼめか-し**（しくしくしきしけれ）（形、二）たしかならず。判然せず。

⌐**おほ-めかし**（オオ）（名）甚しく身なりを飾ること。

廿**おぼめか-す**（さしすすせせ）（他、さ四）ほのめかす。

廿**おぼ-めく**（かきくくけけ）（自、か四）あきらかならず。ほのめく。判然せず。

おほ-めつけ（オオ）[大目附]（名）徳川幕府の職名、諸大名の藩中の監督をなし、目附け役。

おほ-もと（オオ）[大本]（名）物事の第一のもと。おほね。たいほん。

廿**おほ-もとゆひ**（オオユイ）[大元結]（名）いれもとゆひ。けさやうもとゆひ。

⌐**おほ-ものぐひ**（オオグイ）[大物食]（名）大食すること。又、其人。（健啖）

おほ-もん（オオ）[大門]（名）㊀第一のおもてもん。（正門）。㊁東京にて、遊郭の入り口の稱。

おほ-や（オオ）[大屋]（名）㊀おもや。ほんけ。㊁借家の貸し主。いへぬし。

おほ-やう（オオヨウ）[大様]（名）㊀おほかた。たいりやく。㊁寛大にして細事にかゝづらはざること。沈着にして意氣のひなめかざること。おほまか。

おほ-や-かず（オオ）[大矢數]（名）射術にて、京都三十三間堂のとほし矢の數の稱。「―後藤五兵衛は、五十ひとすぢ」。

おほ-やけ（オオ）[公]（名）（大宅（オオヤケ）の義）㊀朝廷又は政府。おかみ。㊁官廳又は官事。やくしよ。つとめ。㊂世間又は衆人。㊃表だちたること。ひそかならぬこと。（公然）㊄私曲なきこと。たゞしきこと。㊅かたおちなきこと。かたよらざること。㊆えやべつなきこと。平等。㊇私の占有にあらざること。共同。 **―ごと**[公事]（名）㊀宮中の大饗節會など、重だちたる事の總稱。㊁すべて、自己の私に屬せざる衆だちたる事の稱。 **―ざた**[公沙汰]（名）おもてだちたること、政府の手をわづらはすこと。（公判）。 廿**―ばら**[公腹]（名）㊀うはべにあらはして、腹を立つること。㊁おほやけに關したる事に就きてのいきどほり。（公憤）。 **―びと**[公人]（名）朝廷又は政府に事ふる人。くわんり。おほみやびと。やくにん。

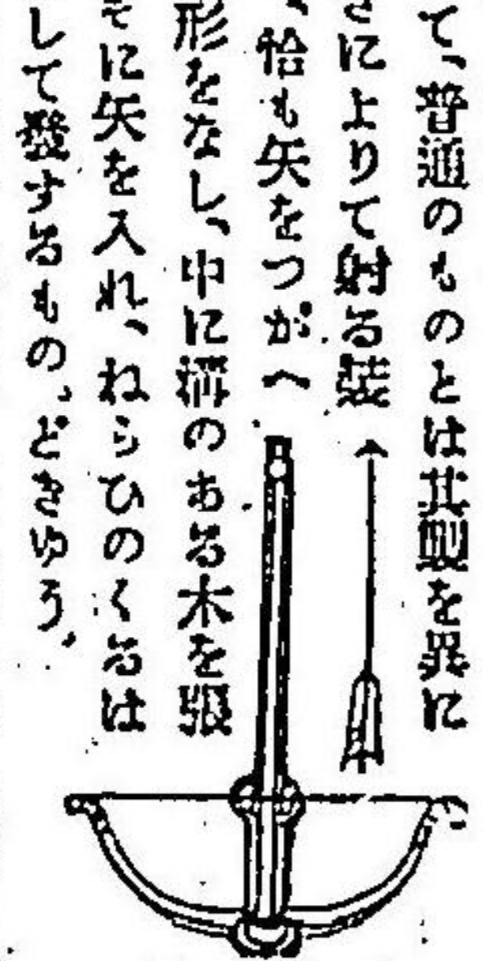
おほやしろ-づくり（オオ）[大社造]（名）神社の建築法、正面を搏風造にし、側面に階を設け、殿內を二間とし、奥の間に神位を安置するもの。

廿**おほ-やすみ-どの**（オオ）[大安殿]（名）「だいごくでん」（大極殿）に同じ。

おぼ-ゆ（えええゆるゆれえよ）[覺]（他、や下二）㊀心にうかぶ。おもはる。㊁心に悟る。さとる。㊂心にとゞむ。きおくす。わすれず。

おほ-ゆび（オオ）[大指]（名）手足の指の中の一番ふときもの。おやゆび。（拇）。

おほ-ゆみ【大弓】(名) 一種の弓、最も大形なるものにして、普通のものとは其製を異にし、はじきによりて射る装置にして、恰も矢をつがへたる如き形をなし、中に溝のある木を張り、其みぞに矢を入れ、ねらひのくるはぬやうにして發するもの。どきゆう。


〔おほゆみ〕

おほ-よそ【大凡】(名) 其物事の要略。かうがい。はんえう。たいがい。——**びと**【大凡人】(名) 世上の普通の人。あたりまへの人。ぼんにん。(世人)。

おほ-よそ【大凡】(副) あらましは。おほかたは。すべて。

十**おほ-よめ**【大嫁】(名) 兄のつま。あによめ。(兄嫁)。

おほ-らうか【大廊下】(名) 徳川時代に、江戸城中にありしざしきの一、將軍の親族にあたる大名の詰席せし所。

十**おほ-らか**【大量】(名) 氣象のさつぱりしたること。胸中のゆたかなること。おほやう。——**に**【大量】(副) さつぱりと。さらりと。「—思ひ止まる」。

おぼら-かす【溺】(他さ四) おぼらす。

おぼら-す【溺】(他さ四) ㊀おぼるゝやうにす。㊁おちこましむ。ふけらす。

おぼ-る【溺】(自ら下二) ㊀水中におちいりて浮び得ず。㊁水中におちいりて死ぬ。(淹死)。㊂心を奪はる。ふける。すさむ。

おぼれ-おに【溺死】(名) 水中におちて死ぬること。

十**おぼれる**【溺】(自) 「おぼる」の訛。

おぼろ【朦朧】(名) ㊀判然せざること。さだかならぬこと。ぼんやり。ほんのり。うつすり。(朧朧)。㊁一種の食品。海老の皮を去り身をすりつぶして粉となし、味をつけて煮たるもの。——**か**【朧】(名) 「おぼろげ」に同じ。——**げ**【朧氣】(名) 十分たしかならぬこと。ぼんやり。不分明。——**づき**【朧月】(名) ほのかにかすめる月。(おもに春夜の月にいふ)。(淡月)。——**づきよ**【朧月夜】(名) おぼろ月のある夜。霞める空の月夜。(おもに春の月にいふ)。十——**づくよ**【朧月夜】(名) 「おぼろづきよ」に同じ。——**どうふ**【朧豆腐】(名) とうふの一種、桶の中にて、こりかたまらせたるもの。——**ぶね**【朧船】(名) 朽ち果てたる船。うちすて、水などの侵入したるもの。

おほ-わ【大輪】(名) くるまの「アミダ」の周圍にはむる金の輪。(輞)。

おほ-わきざし【大脇差】(名) 脇差のつくりの大がたなるもの。

おほ-わらは【大童】(名) 結べる髪とけて甚しく亂れたること。らんぱつ。みだれがみ。(被髪)。

おほ-わらひ【大笑】(名) ㊀聲高く笑ふこと。㊁甚しくあざけり笑ふこと。

おほ-ゐ【大藺】(名) 【植】「ふとゐ」に同じ。(莞)。——**ぐさ**【大藺草】(名) 【植】前條に同じ。

十**おほゐ-どの**【大炊殿】(名) 古昔、宮中の飯を炊ぎし所。

十**おほゐ-の-かみ**【大炊頭】(名) おほゐのつかさの長官。

十**おほゐ-の-つかさ**【大炊寮】(名) 「おほゐれう」に同じ。

十**おほゐ-れう**【大炊寮】(名) 古昔、宮内省の被管にして、御領地の穀類及宮中の炊事に預りし所。

十**おほ-を**【大緒】(名) 履の足につくる紐(ひも)。

おほ-を【大峯】(名) 大なる丘。

おほ-をとこ【大男】(名) 身體の大なる男。(大漢)。

十**おほ-をば**【大小母】(名) 祖父母の姉妹。(従祖母)。

おほ-をんな【大女】(名) 身體の大なる女。

十**おほん—**【御】(接頭) 「おほみ」の音便。「—とき」「—たから」。

十**おほん-ぞ**【御衣】(名) 主上其他すべてたふとき人の服。

十**おほん-べ**【大嘗會】(名) 「だいじやうゑ」に同じ。

十**お-まし**【御座】(名) 主上のまします所。

十**お-ましま-す**【御坐】(自さ四) おはします。

お-ま-す【御坐】(自さ四) ㊀在りの敬語。㊁居るの敬語。

十**おまな-はじめ**【御學始】(名) 主上・皇族其他たふとき人の學問を始めらるゝこと。

お-ま-す (自さ四) ございます。(京阪地方の方言)。

お-まはり【御回】(名) ㊀飯の菜。おめぐり。おかず。(京阪地方の方言) ㊁まはるとの敬語。

お-まはり【御巡】(名) 警吏・巡査の俗稱。(婦女などの言)。

お-まへ【御前】(名) 人のまへの敬語。

お-まへ【御前】(代) 對稱の代名詞。もとは敬稱なりしが、今は同輩又は目下に用ふ。

十**おみ**【臣】(名) (大身の略言) ㊀君につかふる人。しんか。㊁姓(カバネ)の名。上代には、貴族の上流に位する一階級にして、大臣は其族より撰ばれたりしが、大化改新の後は、姓の第六等のものとなれり。

十**おみ**【使主】(名) 上代の姓(カバネ)の名。

お-み【御身】(名) 人の身の敬稱。おからだ。「—大切に」。

お-み【御身】(代) おもと。ぬし。きみ。

お-み—【大御】(接頭) 「おほみ」の略言。「—す」「—おび」。

お-みき【御酒】(名) ㊀神前に供ふる酒。㊁酒の稱。

十**おみ-な**【老婦】(名) おうな。ばゞ。(嫗、老媼)。

十**おみ-の-こ**【臣子】(名) おみのかばねの人。

十**おみやう-じ**【陰陽師】(名) 「おんやうじ」に同じ。

十**お-む**【臆】(自、ま下二) おそる。おくす。「おめずおくせずつとよりて」。

十**おむが-し** (形、二) よろこばし。

十**おむがし-む** (自、ま四) よろこぶ。うれしく思ふ。

十**お-むす**【御娘】(名) 人の娘の敬稱。(令女)。

十**お-むつ** (名) 「おしめ」の一名。

お-むら【御紫】(名) 【動】「いわし」の一名。(徳川時代の奥女中の語)。

オムレツ【Omelet】(名) 一種の料理。玉子と牛乳と若しくはそれに肉片を混じたるものに、胡椒を加へ脂にて焼きたるもの。

オムレット (名) 「オムレツ」に同じ。

お-むろ-がき【御室柿】(名) 【植】柿の一種、京都御室邊より出づ、大きさ二寸許、つるがきにやゝ似たるもの。(黄柿)。

お-むろ-やき【御室燒】(名) やきものゝ一種、京都御室より出づ。

お-め【御目】(名) ㊀目の敬稱。㊁見るとの敬語。「—がきく」。——**にかゝる** 人に逢ふの敬語。——**にかく** 人に見すの敬語。

十**おめ-あし**【瘂】(名) (直足の義)足腫(フ)るゝ病氣。

お-めい-かう【御命講】(名) (大御影供の訛) ㊀「みえいく」に同じ。(一向宗の語) ㊁「ゑしき」の一名。(法華宗の語)。

お-め-おめ【阿容阿容】(名、副) 恥を知らずして、平然としてゐるさまにいふ語。のめ〳〵。まざ〳〵。

お-めがね【御眼鏡】(名) ㊀眼鏡の敬稱。㊁監識の敬語。「—にかなひ」。

お-めぐり【御回】(名) ㊀十至尊に奉る御菜の古稱。㊁飯のさい。おかず。おまはり。(京阪地方の方言)。㊂つきのもの。月經。

お-めし【御召】(名) ㊀人の着物の敬稱。㊁「おめしちりめん」の略言。㊂御呼びよせの敬語。「—につれてはいさやうなら」。——**ちりめん**【御召縮緬】(名) 上等のちりめんの稱、古昔、貴人の着用せしによりて此名あり。——**なんど**【御召納戸】(名) 染色の名、おめしちりめんに、おなんど色を掛けたるもの。

十**おめ-むし**【臆蟲】(名) 【動】「わらぢむし」の古名。(鼠婦)。

お-める【臆】(自) 「おむ」の訛。

十**お-も**【阿母】(名) 母。(慈母)。

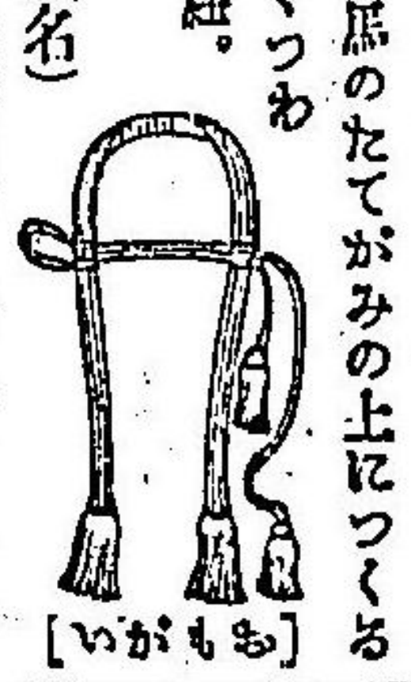
お-も【面】(名) ㊀かほ。つら。㊁へうめん。うはべ。「水の—」。

お-もいれ【思入】(名、副) 「おもひいれ」の略言。

おもおも-し【重重】(形、二) ㊀げんぢゆうなり。おごそかなり。ていちようなり。㊁かろ〳〵しからず。おちつきてあり。

お-もがい【面繋】(名) 馬のたてがみの上につくる装飾、即ち、馬の頭よりくつわにかけて結びたる飾り紐。おもしかけ。(鞅、羈絡)。

十**お-も-がくし**【面隱】(名) 正面に顔を向け得ざること。顔をかくすこと。


〔おもがい〕

お-も-かげ【面影】(名) ㊀おもざし。かほつき。がんしよく。㊁やうす。すがた。かたち。(俤)。

十**お-も-がし** (形) 「おむがし」に同じ。

お-も-かた【面形】(名) ㊀顔のかたち。かほつき。㊁めん。假面。

お-も-かぢ【面舵】(名) ㊀舟のへさきを、右へ向くるときの舵の取りかた。とりかぢの對。㊁舟の右のふなばたの稱。とりかぢの對。(面梶)。

お-も-がはり【面變】(名) おもざしのかはること。

十**お-も-ぎらひ**【面嫌】(名) 其人のおもてによりて、其人を嫌ふこと。ひとみしり。

お-も-くるし【重苦】(形、二) ㊀重く押へつけらるゝが如し。㊁沈鬱なり。

おもくろ-し【面黒】(形、二) 「おもしろし」に同じ。

お-も-ざし【面差】(名) 顔だち。かほつき。(面相)。

お-も-さま【思樣】(名、副) 「おもふさま」の略言。

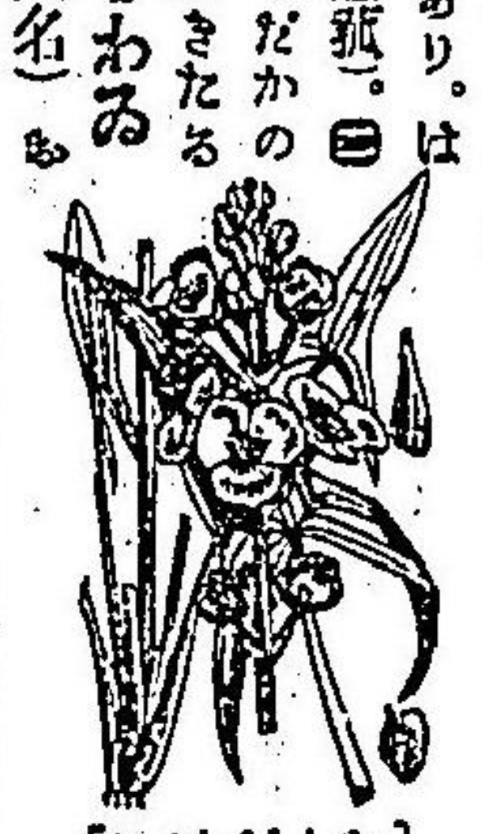
お-もし【重】(名) ㊀物をおさへつくるために用ふるもの。おもし。(壓)。㊁人をおし志づむる勢力。

お-も-し【重】(形、二) ㊀ぢゆうりやう多し、かるく無し。㊁おもんずべし。たふとぶべし。㊂事態容易ならず。おほいなり。㊃深し。甚し。「罪—」。㊄おごそかなり。おちつきあり。おも〳〵し。「君子おもからざれば威あらず」。㊅肝要なり。㊆ふさぎてあり。氣沈みてあり。「氣—」。

十**お-も-じ**【重】(形、二) おも〳〵し。「—き人」。

お-も-しろ【面白】(名) おもしろきこと。「—の春雨や」。——**し**【面白】(形、二) ㊀情にかなへり。樂しむべし。よろこばし。こゝろよし。㊁興味多し。おもむき多し。

お-もだか【澤瀉】(名) ㊀【植】澤瀉科に屬する水草、夏の初め三瓣の白花を開く、葉は楕圓形にして葉柄との分界明瞭なり、表に白く模様の如きものあるにより此名あり。はなくわゐ。(水慈菰)。㊁紋所の名、おもだかの葉又は花を描きたるもの。——**ぐわゐ**【澤瀉慈姑】(名) お


〔(一)おもだか〕

もだかの根にある莖塊。――ずり［澤瀉摺］（名）布に澤瀉をすりたるもの。

おもた・し（くしきけれ）［重］（形、二）めかた多し。おもし。

〔おもたせ［御持］（名）人の持たせ來れるをの敬語。――もの［御持物］（名）人より持せ來りたるおくり物の敬稱。

卄おもだ・し（しくしきしけれ）［面立］（形、二）面目あり。面目よし。

おもだ・つ（たちつつてて）［重立］（自、た四）主となる。かしらだつ。

卄おもぢち［母父］（名）ちゝはゝ。兩親。

〔おもちや［玩具］（名）（「おもちあそび」の轉）小兒の玩具。もてあそびもの。もちあそびもの。（玩物）。

卄おもづら［絡頭］（名）「おもがい」の古名。

おもて［面］（名）㊀かほ。つら。顏面。㊁めん。おもがた。假面。㊂めんぼく。――もふらず　脇目をせず。――をおかす　其人の不機嫌をも憚らずに諫む。――をおこす　顏をあぐ。又、ほまれを得。――をふす　うつむく。又、面目を失す。

おもて［表］（名）㊀外部。外側。そと。うらの對。㊁家屋の中にて、客に接對するところ。「――ひろま」。㊂いりくちに近き處。㊃うはべ。あらは。見え。㊄おほやけ。「――沙汰」。㊅ところ。もと。「西京――」。㊆たゝみおもて。疊表。「備後――」。

おも-で［重手］（名）おもきず。ぢゆうしやう。ふかで。「――を負ふ」。（重傷）。

卄おもてうた［表歌］（名）人に賞美せられて、面目ある歌。

卄おもておこし［面起］（名）名譽となりて、面目をほどこすこと。

卄おもてがた［面形］（名）めん。假面。

〔おもてがへ（ーガエ）［表換］（名）疊のおもてを取り換ふること。

おもてぐち［表口］（名）おもてにあたる入り口。

おもてざた［表沙汰］（名）㊀政府に訴訟すること。㊁おほやけざた。おもてむき。

〔おもてだうぐ（ーダウグ）［面道具］（名）鼻・口・目・眉など、すべて顏に屬する身體の部分。

おもてだ・つ（たちつつてて）［表立］（自、た四）㊀公事沙汰となる。裁判事となる。㊁世にあらはれて公然となる。

おもてつき［表附］（名）下駄にたゝみをつけたること。又、其下駄。

おもてどほり（ードオリ）［表通］（名）市街の表にあたる大通路。うらどほりの對。

おもてはづか・し（しくしきしけれ）［面羞］（形、二）面目なし。

おもてはんでふ（ージヨウ）［表半疊］（名）劇場にありて、種々の用事をつとむる係りのもの。

おもてぶせ［面伏］（名）はぢて面を伏すること。おもぶせ。（不面目）。

おもてまけ［面負］（名）㊀外面のみにて阿附すること。㊁おもてよはきこと。

おもてむき［表向］（名）㊀おもてだつこと。公然となること。㊁公事。裁判。㊂うはべ。あらは。公邊。

おもてもん［表門］（名）家のおもてぐちにある門。うらもんの對。（正門）。

おもてよわ・し（くしきけれ）［面弱］（形、二）人と對面して強き言動をなす能はず。

おもと［萬年青］（名）〔植〕百合科に屬する草、葉は革質綠色にして根莖より簇生す、花は穗狀花序に排列し、花蓋は短くして綠黃色を帶ぶ、夏の末、ほゝづきに似たる實を結ぶ、觀賞用として栽培せらる。

卄おもと［御許］（名）お坐所。おそば。

〔おもと［御許］（代）婦人の對稱の代名詞。あなた。（甚）。

卄おもとびと［御許人］（名）貴人の側にありて、諸用を辨ずる人。おそば。（侍臣、侍從）。

卄おもとまちぎみ［侍從］（名）古昔、天子の御側に侍せしもの。おもとびと。

卄おもな［面無］（名）おもなきこと。「さながら――のあり樣にて」。

おもなが［面長］（名）顏の稍や長きこと。

卄おもな・し（くしきけれ）［面無］（形、二）人にあはすべきおもてなし。面目なし。おもはゆし。はづかし。（赤面）。

卄おもな・る（れれるるるれれよ）［面馴］（自、ら下二）面を見なる。

おもに［重荷］（名）㊀重き荷。㊁過重の負擔。せめ。ひきうけ。「――を負ふ」。（重任）。――にこづけ　あるが上に、過重の負擔のそはること。

おもに［主］（副）主として。もつぱら。

おもにく・し（くしきけれ）［面憎］（形、二）つらにくし。

おもね・る（らりるるれれ）［阿］（自、ら四）（面練の轉）つゐしようをなす。へつらふ。こぶ。（諂、欺）。

卄おもの［佩物］（名）身に帶ぶる物。おびもの。

卄おもの［御物］（名）主上などの供御（ゴク）。（御膳）。――し［御物師］（名）後宮の裁縫師。――だな［御物棚］（名）御膳を据うるたな。（御膳棚）。――やどり［御物舍］（名）古昔、紫宸殿の西廂にありて、すべての供御を安置せしところ。（御膳所）。

おもはく（オモワク）［思］（名）（「おもふ」の延言）㊀かんがへ。おもふ所。（想）。㊁投機にて、暴利を豫期すること。（思惑）。――がひ（ーガイ）［思惑買］（名）投機にて、暴利を豫期して買ひ込むこと。

おもは・し（ーワシ）（しくしきしけれ）［思］（形、二）㊀おしはかり思ふべし　すゐりやうせらる。㊁好きやうに思はる。

おもはず（ーワズ）［不思］（副）おもひもそめず。おもひがけなく。――しらず［不思不知］（副）前條に同じ。

〔おもはせぶり（ーセブリ）［思振］（名）擧動を以て示し、他をして其正意をさとらしむること。

卄おもはゆ・し（くしきけれ）［面映］（形、二）顏あはすは、まばゆく思はれてはづかし。おもぶせなり。はぢらはし。（面恥）。

おもひ（オモイ）［思］（名）㊀おもふこと。おもふ所。かんがへ。しよぞん。㊁思想。㊂うれひ。しんぱい。㊃すゐりやう。さうざう。㊄しふねん。うらみ。「――をはらす」。㊅卄中古、喪に籠（コモ）りて居りしこと。

おもひあか・す（オモイ）（さしすすせせ）［思明］（他、さ四）ふかく物を思ひつゝ、夜をあかす。

おもひあた・る（オモイ）（らりるるれれ）［思當］（他、ら四）おもひくらべて、げにと思ひあはす。おもひよる。かんがへつく。

おもひあは・す（オモイアワス）（せせすするすれせよ）［思合］（他、さ下二）おもひくらべて考へあつ。おもひつく。

〔おもひあはせる［思合］（他）「おもひあはす」の訛。

おもひあま・る（オモイ）（らりるるれれ）［思餘］（自、ら四）㊀おもひ過ごす。㊁思ひに堪へず。

おもひいだ・す（オモイ）（さしすすせせ）［思出］（他、さ四）㊀考へつく。㊁むかしの事をおもひうかぶ。（回想）。

おもひい・づ（オモイ）（でででづづるづれでよ）［思出］（他、た下二）おもひいだす。

おもひい・る（オモイ）（らりるるれれ）［思入］（自、ら四）㊀ふかく思ひ考ふ。かんがへこむ。㊁おもひ及ぶ。㊂世をいとひて山に入る。㊃こゝろをかく。

おもひいれ（オモイ）［思入］（名）㊀おもひいること。㊁心をこむること。㊂芝居にて役者が、おもひいるしうちをなすこと。

おもひいれ（オモイ）［思入］（副）おもふぞんぶん。滿足するまで。

おもひお・く（オモイ）（かきくくけけ）［思置］（他、か四）おもひのこす。

おもひおこ・す（オモイ）（さしすすせせ）［思起］（他、さ四）おもひいづ。（想起）。

おもひおもひ（オモイオモイ）［思思］（名、副）各自の心任せ。

おもひがけず（オモイ）［不思掛］（副）おもひよらず。（不意）。

おもひがけな・し（オモイ）（くしきけれ）［思掛無］（形、二）かくあらんとは思ひまうけずにあり。意外なり。ふりよなり。（不意、忽然）。

おもひがは（オモイガワ）［思川］（名）人の思念を、水の流れにたとへいふ語。

おもひかへし（オモイカエシ）［思翻］（名）おもひかへすこと。

おもひかへ・す（オモイカエス）（さしすすせせ）［思翻］（他、さ四）㊀非と知りて思ひ改む。（改意）。㊁今迄のおもひをいれなほす。

〔おもひきつて（オモイ）［思切］（副）かたく心を定めて。「――行ふ」。

おもひきり（オモイ）［思切］（名）おもひきること。だんねん。

おもひき・る（オモイ）（らりるるれれ）［思切］（他、ら四）思ひをたつ。斷念す。あきらむ。（絶念）。

卄おもひぐさ（オモイ）［思草］（名）思ひを草にたとへいふ語。

おもひぐまな・し（オモイ）（くしきけれ）［思隈無］（形、二）㊀思ひやりなし。考へ行きとゞかず。㊁思ひあまねく至る。よく氣付く。

おもひぐる・し（オモイ）（しくしきしけれ）［思苦］（形、二）こころぐるし。

おもひご（オモイ）［思子］（名）かはゆき子。（愛子）。

おもひこが・る（オモイ）（れれるるるれれよ）［思焦］（他、ら下二）おもひあこがる。おもひこむ。

おもひこみ（オモイ）［思込］（名）おもひこむこと。

おもひこ・む（オモイ）（まみむむめめ）［思込］（自、ま四）深くおもひいる。（決意）。

〔おもひざし（オモイ）［思差］（名）其人に心ありて、酒杯をさすこと。（思獻）。

おもひしづ・む（オモイ）（まみむむめめ）［思沈］（自、ま四）ふかく考へこむ。おもひわづらふ。

おもひしに（オモイ）［思死］（名）思ひしづみ其ため病をかもして、遂に死ぬること。

おもひし・む（オモイ）（まみむむめめ）［思染］（自、ま四）おもひこむ。

おもひし・る（オモイ）（らりるるれれ）［思知］（他、ら四）心にそれとおもひあたる。

卄おもひすぐし（オモイ）［思過］（名）思ひすぐすこと。

卄おもひすぐ・す（オモイ）（さしすすせせ）［思過］（他、さ四）思ひすごす。

おもひすごし（オモイ）［思過］（名）思ひすぎて誤ること。

おもひすご・す（オモイ）（さしすすせせ）［思過］（他、さ四）とりこしぐらうす。あらぬ事まで思ふ。

おもひすま・す（オモイ）（さしすすせせ）［思澄］（自、さ四）おもひ定めて、迷はずにあり。

おもひそ・む（オモイ）（めめむむむるむれめよ）［思初］（他、さ下二）おもひはじむ。

おもひだ・す（オモイ）（さしすすせせ）［思出］（他、さ四）おもひおこす。

おもひたち（オモイ）［思立］（名）㊀思ひたつこと。決意。㊁おもひつき。

おもひた・つ（オモイ）（たちつつてて）［思立］（自、た四）物事を成さんと、思慮を定む。（企圖）。

おもひつき（オモイ）［思付］（名）㊀かんがへ。くふう。㊁心に浮ぶこと。

おもひつ・く（オモイ）（かきくくけけ）［思付］（他、か四）㊀考へつく。考へおこす。（立意）。㊁思ひ寄る。したひはじむ。

おもひ-つゞ・く オモ〔け、け、く、くる、くれ、けよ〕「思續」(他、か下二) 其事のみを思ふ。いろ／＼と思ふ。

〔おもひつゞける「思續」(他) 「おもひつゞく」の訛。

おもひ-つ・む オモ〔め、め、む、むる、むれ、めよ〕「思詰」(他、ま下二) 一圖に思ひこむ。思ひこみて決心す。

〔おもひつめる「思詰」(他) 「おもひつむ」の訛。

おもひ-で オモ「思出」(名) ㊀以前ありし事を、思ひだしてわが心をなぐさむること。㊁心のとゞくこと。おもひのまゝをなすこと。

十おもひ-ど オモ「思所」(名) 思ふところ。

十おもひ-とぢ・む オモ〔め、め、む、むる、むれ、めよ〕「思止」(他、ま下二) おもひとまる。

おもひ-とゞ・む オモ〔め、め、む、むる、むれ、めよ〕「思止」(他、ま下二) おもひやむ。

おもひ-とま・る オモ〔ら、り、る、る、れ、れ〕「思止」(他、ら四) 斷念す。おもひきる。あきらむ。

おもひ-どり オモ「思取」(名) ㊀うけひき。又、さとり。㊁己の思ふ人より盃をとること。

おもひ-と・る オモ〔ら、り、る、る、れ、れ〕「思取」(他、ら四) 其れと氣づく。さとる。

十おもひ-なが・す オモ〔さ、し、す、す、せ、せ〕「思流」(他、さ四) ㊀おもひやる。㊁おもひつゞく。㊂おもひにとゞめず。

おもひ-なし オモ「思做」(名) 思ひはかりて、それと定むること。おもひなすこと。

おもひ-な・す オモ〔さ、し、す、す、せ、せ〕「思做」(他、さ四) するさうして、それと定む。

おもひ-なほし オモイナオシ「思直」(名) おもひなほすこと。

おもひ-なほ・す オモイナホス〔さ、し、す、す、せ、せ〕「思直」(他、さ四) 考へなほす。思ひをあらたむ。(翻思)。

おもひ-ね オモ「思寐」(名) 深く其事を思ひながら寐ること。「―の夢」。(思寢)。

十おもひ-の-いへ オモイノイエ「思家」(名) 三界の火宅。煩惱(ボンナウ)にみちたる斯世。

十おもひ-の-いろ オモ「思色」(名) くれなゐの色。

おもひ-のこし オモ「思殘」(名) みれん。ざんねん。

おもひ-のこ・す オモ〔さ、し、す、す、せ、せ〕「思殘」(自、さ四) 心をのこす。思ひおく。みれんのこる。ざんねんがる。

おもひ-の-つな オモ「思綱」(名) 其事のために思ひのまゝならぬこと。こゝろのほだし。

十おもひ-の-つゆ オモ「思露」(名) なみだの稱。

おもひ-の-ほか オモ「思外」(名) 意外。案外。

おもひ-の-まゝ オモ「思儘」(名、副) 心に思ふまゝ。おもふさま。ぞんぶん。(存分)。

おもひ-ば オモ「思羽」(名) つるぎば。いてふば。(舵羽)。

おもひ-はじ・む オモ〔め、め、む、むる、むれ、めよ〕「思始」(他、ま下二) おもひそむ。

おもひ-は・つ オモ〔て、て、つ、つる、つれ、てよ〕「思果」(他、た下二) おもひきる。

おもひ-びと オモ「思人」(名) 思ひを掛けたる相手の人。こひゞと。(戀人)。

おもひ-まう・く オモイモウク〔け、け、く、くる、くれ、けよ〕「思設」(他、か下二) あらかじめ考へおく。豫期す。

〔おもひまうける「思設」(他) 「おもひまうく」の訛。

おもひ-まは・す オモ〔さ、し、す、す、せ、せ〕「思回」(他、さ四) ㊀色々に思ふ。思ひめぐらす。(熟想)。㊁往事を追想す。

おもひ-みだ・る オモ〔れ、れ、る、るる、るれ、れよ〕「思亂」(自、ら下二) 思ひくるしむ。おもひなやむ。おもひわづらふ。

〔おもひみだれる「思亂」(自) 「おもひみだる」の訛。

おもひ-み・る オモ〔み、み、みる、みる、みれ、みよ〕「思試」(他、ま上一) 思ひあつ。思ひためす。かんがへみる。おもんみる。(思惟)。

おもひ-めぐら・す オモ〔さ、し、す、す、せ、せ〕「思迴」(他、さ四) 思ひまはす。(回想)。

おもひ-もの オモ「思者」(名) 愛妾。(嬖妾)。

おもひ-やり オモ「思遣」(名) おもひやること。

おもひ-や・る オモ〔ら、り、る、る、れ、れ〕「思遣」(他、ら四) 人の身の上などを、おしはかりて與(アハ)みおもふ。

おもひ-や・る オモ〔ら、り、る、る、れ、れ〕「思遣」(自、ら四) 心をやる。思ひをはらす。

おもひ-よ・す オモ〔せ、せ、す、する、すれ、せよ〕「思寄」(他、さ下二) かんがへを傾く。思ひをかく。

〔おもひよせる「思寄」(他) 「おもひよす」の訛。

おもひ-よらず オモ「不思寄」(副) 不意に。思ひがけず。あんぐわいに。

おもひ-よ・る オモ〔ら、り、る、る、れ、れ〕「思寄」(他、ら四) 思ひあたる。かんがへつく。おもひつく。

おもひ-れ オモ「思入」(副) 「おもひいれ」の略言。

おもひ-わす・る オモ〔れ、れ、る、るる、るれ、れよ〕「思忘」(他、ら下二) わする。

おもひ-わた・る オモ〔ら、り、る、る、れ、れ〕「思渡」(自、ら四) 思ひつゝ月日をおくる。

おもひ-わづら・ふ オモイワズラウ〔は、ひ、ふ、ふ、へ、へ〕「思煩」(自、は四) おもひなやむ。おもひくるしむ。

おもひ-わ・ぶ オモ〔び、び、ぶ、ぶる、ぶれ、びよ〕「思侘」(自、は上二) わびしく思ふ。いとはしく思ふ。

おも・ふ オモウ〔は、ひ、ふ、ふ、へ、へ〕「思」(他、は四) ㊀思慮す。かんがふ。㊁推量す。おしはかる。㊂想像す。おもひかたどる。(想)。㊃願望す。ねがふ。㊄忘れず。記す。㊅戀しむ。戀(レン)ふ。㊆憐む。愛す。(顧)。㊇甚(クジ)ふ。こひしがる。(懷)。㊈回顧す。おもひめぐらす。

十おもぶき「趣」(名) おもむき。

十おも-ぶ・く〔け、け、く、くる、くれ、けよ〕「趣」(他、か下二) おもむく。

おも-ぶくら「面脹」(名) 顏肥えて頰豐かなること。

おもふ-さま オモウサマ「思樣」(名、副) 思ふとほり。おもふまゝ。おもささま。おもいれ。(任意)。

おも-ぶせ「面伏」(名) 面目なきこと。はづかしきこと。はぢらふこと。「―にいふ」。

おもふ-に オモウ「思惟」(副) 思惟するに。かんがふるに。はかるに。(顧惟)。

おもへ-らく オモエ「思謂」(副) 思へるには。(以爲)。

十おも-へり オモエリ(名) かほつき。顏色。

十おもほ・し〔しく、し、しき、しけれ〕「思」(形、二) おもはし。

十おもほ・す〔さ、し、す、す、せ、せ〕「思」(他、さ四) おぼす。おぼしめす。

十おも-ほでり(名) おもはてること。

十おも-ほて・る〔ら、り、る、る、れ、れ〕(自、ら四) 顏にいかれる氣色あらはる。

おもほ・ゆ〔え、え、ゆ、ゆる、ゆれ、えよ〕(自、や下二) 思ひ得らる。思はる。

おもみ「重」(名) おもくある度合ひ。

おも-むき「趣」(名) ㊀ことわけ。しゆい。㊁やうす。いきほひ。㊂其物事に存する感興。ふうゐん。おもしろみ。あぢはひ。

おも-む・く〔か、き、く、く、け、け〕「趣趨」(自、か四) ㊀其方向をとる。㊁すゝみ行く。向ひ至る。㊂したがふ。歸す。

おも-む・く〔け、け、く、くる、くれ、けよ〕「趣趨」(他、か下二) おもむかしむ。ゆかす。したがはす。

おも-むろ「徐」(名) しづか。おだやか。ゆるやか。

おも-もち「面地」(名) かほつき。めんしよく。おもかげ。「恐れたる―」。(面色)。

おも-や「母屋」(名) ㊀家の最も中央なる部分。廂下などの對。(母殿)。㊁住まひなどにすべき家。ながやなどの對。(正屋)。

おも-やう オモヨウ「面樣」(名) かほつき。かほだち。おもざし。

おも-やく「重役」(名) おもき役目。ぢゆうやく。

おも-ゆ「重湯」(名) 極めてうすき粥。飯の汁。

おもらか「重」(名) 重くあるらしく見ゆること。

おもり「重」(名) ㊀輕きものに、重さを增さんために附け加ふるもの。「釣絲の―」。㊁秤(ハカリ)の附屬品、はかるべき物品の重さと平均を保たしむるために用ふるもの。ふんどう。(錘)。

おもりか「重」(名) 「おもらか」に同じ。

おも・る〔ら、り、る、る、れ、れ〕「重」(自、ら四) ㊀目かた多くなる。㊁病氣危篤となる。

十おも-わ「面曲」(名) おも、おもて。「おやの―のなつかしきかな」。(面輪)。

おも-わすれ「面忘」(名) 以前には見知り居りし人の顏を見わすれたること。

おもん・ず〔ぜ、じ、ず、ずる、ずれ、ぜよ〕「重」(他、さ變) ㊀たふとぶ。うやまふ。㊁はゞかる。難んず。㊂愛す。をしむ。㊃ねんごろにあつかふ。大切にす。㊄おもとなす。第一とす。

おもんぱかり「慮」(名) ㊀しりよ。かんがへ。㊁とりはからひ。處置。㊂はかりごと。謀略。㊃うたがひ。うれひ。

おもんぱか・る〔ら、り、る、る、れ、れ〕「慮」(他、ら四) (おもひはかるの略) ㊀かんがへはかる。つら／＼かんがふ。おもひめぐらす。㊁物事をつまびらかに處置す。「安くして后よく―」。㊂謀策を立つ。㊃疑ふ。惡ふ。

おもん・みる〔み、み、みる、みる、みれ、みよ〕「惟」(他、ま上一) (おもひみるの略) かんがへこゝろみる。おもひめぐらす。

おや「親」(名) ㊀我を產みたる人。ちゝはゝ。父母。㊁我を養ひて子としたる人。養父母。㊂子ある人。㊃祖先。「とほつみ―」。㊄頭だつもの。又、ものゝ出で來たる元。㊅大小相對するものにて、大なるものゝ稱。「―骨」。

〔おや(感) 意外の事に驚きたる聲。

おや-いも「親芋」(名) 芋の塊根の最初に出來たるもの。こいもの對。(芋魁)。

おや-おもひ オヤオモイ「親思」(名) 親に孝行なること。

〔おや-おや(感) 「おや」を重ねたる聲。「―大變」。

おや-がかり「親掛」(名) 子の尙は親に養はれて居ること。

〔おや-かぜ「親風」(名) ㊀親の身分位置を身に掛くること。㊁子に對して、親の威をふるふこと。

おや-かた「親方」(名) ㊀我が身に恩を掛けてくるゝ人。親として仰ぐべき人。㊁元祿時代に、主人の稱。㊂職人などの頭又は飮食店の主人などの稱。㊃昔時、琉球にて按司(アンジ)の次なりし官名。

十おや-が・る〔ら、り、る、る、れ、れ〕「親」(自、ら四) 親ぶる。「おやがりたるおんふるまひ」。

〔お-やく「御役」(名) ㊀役目の敬稱。㊁つきやく。月經。

おや-こ「親子」(名) ㊀親と子と。㊁〔玉子と鷄肉と。㊂〔そら豆とえんどう豆と。

おや-ご「親御」(名) 人のおやの敬稱。―さま「親御樣」(名) おやご。(尊大人)。

おや-ごころ「親心」(名) 子を思ふ親の慈愛心。「親思ふ心にまさる―」。

おや-ざと「親里」(名) 嫁したる女又は奉公人などが、吾が親の家を指していふ語。おやもと。

〔おやこ-どんぶり「親子丼」(名) 丼へあたゝかき飯をいれ、其上に玉子と鷄肉とをあはせ煮たるをかけたるもの。

〔おやこ-なべ「親子鍋」(名) 鍋にて、鷄肉と鷄卵とをあはせ煮たるもの。

〔おやこ-まめ「親子豆」(名) そら豆とえんどう豆とをあはせ炒(イ)りたるもの。

廿**おや・じ**（じく、じく、じ、じき、じけれ）［同］（形、二）「おなじ」の轉。「心—き我が身なれども」。

おや・しほ（オーシ）［親潮］（名）【地】海流の一、「オホツタ」海に起り、我國の北海道及本州の東岸に沿ひて流るゝ寒流。

〔**おや・しらず**［不知親］（名）㊀子供の時に人に拾はれ又は孤兒となりて、父母の顏を見知らぬこと。㊁「おやしらずば」の略言。㊂波うちぎはなどの極めて危險なる所。——**ば**［不知親齒］（名）齒の三十二枚の中四枚最もおそく生（ハ）ゆるもの。

〔**おや・だま**［親玉］（名）㊀かしらだつ人。かしら。をさ。たいちやう。（巨魁）㊁遊藝などの巧みなる人を賞讃していふ語。

おや・ぢ［親父］（名）（親父（オヤチヽ）の轉）㊀他人に對して、我父の稱。ちゝ。（家父）㊁老人。おきな。㊂親方。——**さま**［親父樣］（名）他人の父の敬稱。ごしんぷ。

おや・つ［御八］（名）八つどきに食ふ間食。

おや・どり［親鳥］（名）鳥の親。子鳥の對。

おや・なし［親無］（名）幼兒の親をうしなひたること。又、其人。——**ご**［親無子］（名）親を失ひたる子。みなしご。（孤兒）。

おや・ばしら［親柱］（名）堺・欄干などの端にある太き柱。

おや・はん［親判］（名）證文の判を親の立ち合ひてすること。

おや・ふね［親船］（名）大いなる船。（和船にいふ）。

おや・ぶん［親分］（名）㊀假りの親。㊁職人又は遊び人などの社會にて、假に親として、すべての物事を依托する頭目（カシラ）の稱。こぶんの對。㊂轉じて、其人の依屬せる人の稱。

おや・ぼね［親骨］（名）扇の左右のはしに各一枚づゝある最もふとき骨。（扇股）。

おや・もと［親許］（名）おやざと。「—へ引きとる」。

おや・ゆづり［親讓］（名）親よりゆづりうけたること。又其物事。

おや・ゆび［親指］（名）㊀おほゆび。（拇）。㊁孕主の隠語。

おや・わん［親椀］（名）大なる飯椀。

お・ゆ（い、い、ゆ、ゆる、ゆれ、いよ）［老］（自、や上二）㊀よはひ重なる。としよる。㊁としよりて衰弱す。おとろふ。

お・ゆどの［御湯殿］（名）㊀湯殿の敬稱。㊁廿古昔、宮中にて御茶の湯などをまかけし所。

おゆ・らく［老］（自）「おゆる」の延言。

およぎ［泳］（名）およぐこと。およぐ術。

およ・ぐ（が、ぎ、ぐ、ぐ、げ、げ）［泳］（自、か四）㊀水中にて、肢體を動かし浮きて行く。㊁世に處（ヲ）る。官職を得。

廿**およ・ずく**（け、け、く、くる、くれ、けよ）（自、か下二）年の進むに從ひて、賢くなる。

およそ［凡］（名）其物事の要概。がいりやく。えうし、たいりやく。

およそ［凡］（副）㊀たいがいは。おほかたは、がいりやくは。㊁一般に。おしなべて。

廿**およづれ**［妖］（名）いつはること。あやしきことば。

廿**およ・な**［老女］（名）おうな。

およ・ばす（さ、し、す、す、せ、せ）［及］（他、さ四）およばしむ。

廿**および**［指］（名）ゆび。

および［御呼］（名）おめし。おまねき。

お・よび［及］（名）およぶこと。とゞくこと。——**ごし**［及腰］（名）からだをはこばず、手のみさきへ出だして、事を行はんとする態をいふ。

および［及］（接）また。ならびに。「花—月」。

およ・ぶ（ば、び、ぶ、ぶ、べ、べ）［及］（自、は四）㊀到達す。いたる。とゞく。「眾に—」。㊁遍布す。ゆきわたる。しく。㊂關係す。かゝる。つながる。㊃就く。おひつく。㊄追ふ。おひかく。「往言不可—」。㊅其ものと比す。しく。㊆其物事となる。「戰ひに—」。

およぼ・す（さ、し、す、す、せ、せ）［及］（他、さ四）およぶやうにす。およばす。とゞかす。しく。かく。

〔**およ・る**（ら、り、る、る、れ、れ）［寢］（自、ら四）およんなる。おやすみになる。

〔**およんな・る**（ら、り、る、る、れ、れ）［寢］（自、ら四）寢るの敬語。

〔**おら**［己］（代）おもに、下等人のつかふ自稱の代名詞。おれ。おいら。

廿**おら・ぶ**（ば、び、ぶ、ぶ、べ、べ）［叫］（自、は四）さけぶ。よばふ。

おり［織］（名）織ること。織りたるもの。

おり［澱］（名）流動體中にある沈澱したる渣滓（カス）。おどみ。ちんでんぶつ。（沈澱）。

オリーブ［阿列布＝Olive］（名）【植】木犀科の常綠木、橄欖に似たれども小なり、葉は對生し、長橢圓形にして深綠色をなす、夏秋の間、複總花序の小白花をつく、果實よりオリーブ油をとるべし。——**いろ**［阿列布色］（名）深綠色。——**ゆ**［阿列布油］（名）オリーブの果實より採りたる油。

おり・いろ［織色］（名）絲を染めて織りたるおりものゝ色。そめいろの對。

おり・ひめ［織女］（名）「たなばた」に同じ。

おり・べ［織部］（名）さかづきの一種、木製朱塗りにして、蒔繪・梨地などをほどこしたる小形のもの、天正の頃、織部重能といへるもの、茶道にくはしく、此形を作り出だしゝより名とす、其大なるを「むさしの」といふ。（京遊）。廿——**つかさ**［織部司］（名）古昔の官名、大藏省の所屬にして、織物の事をつかさどりし所。

おり・もの［織物］（名）㊀機（ハタ）にかけて、織りたる反物の總稱。㊁綾に織りたる絹布の特稱。

〔**おりもの**［下物］㊀月經。㊁あとざん。

おり・や［織屋］（名）はたおりを業とする家。

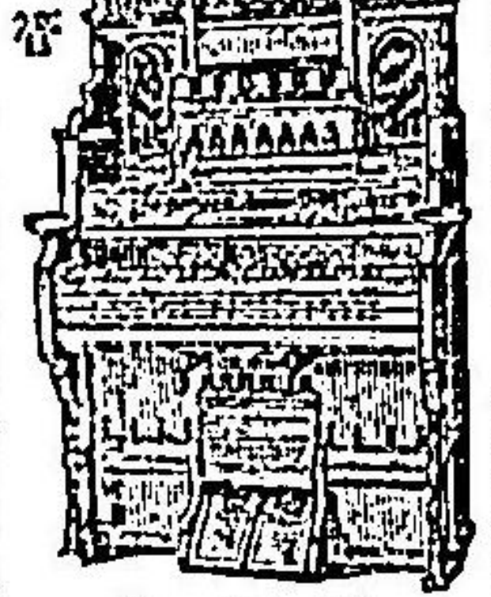
廿**おり・ゐ**［降居］（名）天皇位をゆづり給ひて、上皇として居給ふこと。

おり・ゐる（ゐ、ゐ、ゐる、ゐる、ゐれ、ゐよ）［下居］（自、わ上一）㊀下へおりてゐる。㊁位をゆづる。

お・る（ら、り、る、る、れ、れ）［織］（他、ら四）㊀絲を機（ハタ）にかけ、經（タテ）緯（ヨコ）をくみあはせて布帛につくる。㊁細長きすぢのものをくみあはせて、席・筵などをつくる。㊂まじへ作る。くみたつ。

お・る（り、り、る、るる、るれ、りよ）［下、降］（自、ら上二）㊀高きより低きへくだる。上にありしもの下にさがる。くだる。さがる。㊁位をさる。ゆづる。㊂露・霜など降る。

オルガン［Organ］（名）西洋より傳來したる一種の樂器、種々の管（一端閉きたるものと一端空がりたるものとあり）を裝置し、下に裝置したる鞴（フイゴ）を動かして、これに氣流を吹き入るゝときは、氣流は楔形の脣に衝突して、管內の氣柱に振動を起さしめ音を發す、學校にて、唱歌を教ふるとき又は「クリスト」教會にて、讚美歌を唱するときなどにこれを奏す。ふうきん。「オルゴル」。



［オルガン］

オルゴル（名）（「オランダ」語Orgel）㊀「オルガン」に同じ。㊁西洋傳來の一種の樂器、匣中にぜんまい裝置ありて、それにより回轉する「シリンドル」の刺が、他の櫛齒狀の鋼鐵に觸れて音を發す。（自鳴琴）。

〔**おれ**［己］（代）（「おのれ」の略言）㊀おもに下等社會の用ふる自稱の代名詞。われ。おら。おいら。㊁輕蔑の意の對稱の代名詞。「—などが、何なるべき」。

オレーフ［阿列布＝Olive］（名）【植】「オリーブ」に同じ。——**ゆ**［阿列布油＝Olive-oil］（名）「オリーブゆ」に同じ。

お・れい［御禮］（名）恩惠・庇護又はおくり物を受けたるに對して、感謝の意を表すること。——**まゐり**［御禮參］（名）神佛へ、かけたる願の成就して、其御禮として參詣すること。

廿**おれ・おれ・し**（しく、しく、し、しき、しけれ）（形、二）おろかに見ゆ。

おろ—（接頭）㊀或語に冠してくはしからぬ意を表はす。「—おぼえ」。㊁或語に冠していさゝかなる意を表はす。「—いゆ」。

廿**おろ・おろ**（名、副）㊀力無く十分ならぬさまにいふ語。㊁泣き聲するさまにいふ語。「—泣く」。——**ごゑ**（名）おろ〳〵となく聲。——**なみだ**（名）おろ〳〵と泣きて、涙をたるゝこと。

おろか［愚］（名）智能とぼしきこと。理解心のかけたること。ばか。あほう。（愚、癡）。

おろか［疎］（名）てぬかり。ぬかり。おろそか。疎略。

おろか・おひ（イオ）［穭］（名）刈りとりたる後に、稻の再び自生すること。又、其自生したる稻。

おろか・し（しく、しく、し、しき、しけれ）（形、二）㊀愚鈍なり。にぶし。㊁疎略なり。ぬかり多し。

おろか・もの［愚者］（名）ばかもの。あほう。

おろし［卸］（名）㊀おろすこと。㊁「おろしうり」の略言。㊂わさびおろし。だいこおろし。㊃「こきおろし」の略言。㊄山より吹きおろす風。（颪）。㊅穿き方に殘りたる食物の殘餘。のこり。（餕）。——**うり**［卸賣］（名）問屋より商品を請け賣り人にわたして賣らすること。即ち、多量の商品を賣買する商業。こうりの對。（包買賣）。

〔**おろし・ぐすり**［下藥］（名）墮胎さするための藥。

おろし・だいこん［卸大根］（名）大根をおろしにかけておろしたるもの。

おろし・なみ［卸並］（名）商品の賣價が、其卸し値（子）と同じきこと。

おろし・ね［卸値］（名）商品をおろしに附するときの値（子）。

おろ・す（さ、し、す、す、せ、せ）［卸、下］（他、さ四）㊀高きより低きへ移す。くだす。㊁結びつけたるものを解く。ほどく。㊂衣紋をくつろぐ。㊃垂下す。さぐ。㊄投下す。くだす。「碇を—」。㊅官職又は位階をひくゝす。㊆あしくいひなす。おとしむ。いひくさす。㊇高きより低きへ吹き降す。「吹き—」。㊈新しき品をつかひそむ。「春衣を—」。㊉切栽す。きる。「枝を—」。⑪剃去す。そる。「髮を—」。⑫おろしに掛けてすりくづす。「大根を—」。⑬おろしうりをなす。⑭墮胎させさす。「子を—」。⑮やすりにてすりへらす。

おろそか［疎］（名）㊀注意してなさゞること。なほざりに行ふこと。ゆるかせ。そりやく。㊁ぬかり多きこと。めんみつならざること。

おろぬ・く（か、き、く、く、け、け）（他、か四）「うろぬく」に同じ。

廿**おろ・ねぶり**［疎眠］（名）なほざりに眠ること。

廿**おろ・ねむ・る**（ら、り、る、る、れ、れ）（他、ら四）すこしくねむる。

〔**お・ゐど**（名）「おしり」に同じ。

〔**おん**［恩］（名）めぐみ。なさけ。いつくしみ。

〔**おん**［音］（名）㊀【理】物體の振動によりて起る聽官の感覺、物體の振動が、其周圍の媒體（通常は空氣）に傳はりて音波を生じ、以て聽官の鼓膜に達し、鼓膜の其ために振動するによりて、此感覺を生ず。㊁韵（ヒヾキ）の調子。ねいろ。㊂音聲。こゑ。「大—に喚ばる」。㊃單純なる音聲、即ち、一氣に出づる音聲。「掛—」「備—」　㊄漢字の字音。訓の對。

おん—［御］（接頭）（「おほみ」の轉、「おはん」の略言）

或語に冠して敬意を表はす。「—言」「—事」。

(おんあい［恩愛］(名) ㊀めぐみいつくしむこと。㊁こまやかなるなさけ。

(おんかい［音階］(名) 元音と其「オクターヴ」との間に、順次異なる樂音を排列したるもの、その順次は1,2,3,4,5,6,7,1にして、ヒ・フ・ミ・ヨ・イ・ム・ナ・ヒ又はDO,RE,MI,FA,SOL,LA,SI,DOといふ。

(おんがく［音樂］(名) 樂器を使用して、音を發し調を成し、歌謠(ウタ)の節に合はせて、以て人心を樂ましむるものゝ總稱。又、其技術。——か［音樂家］(名) おんがく專門の人。おんがくに長じたる人。

おんがへし［恩返］(名) 受けたるめぐみをかへすこと。報恩。

(おんぎ［恩誼］(名) めぐみ。あはれみ。(恩義)。

(おんぎ［音義］(名) ㊀音と意味と。「—を說く」。㊁一音ごとに有する意味。

(おんきふ［恩給］(名) ㊀めぐみて給ふこと。にぎはすこと。㊁政府が多年勤續して一定の條件の下に職務を去りたる判任以上の官吏に、一定の金額を終身給與すること、在官滿十五年以上にして、六十歲を超ゆるか又は疾病傷痍のためか、若しくは廢官廢廳のために退官したるもの、在官十五年に滿たざれど、公務のため傷痍を受け疾病に罹り、一肢以上の用を失ふに至りたるもの、乃至滿五年以上國務大臣の職にありたるもの等は、恩給を受くるものとす、軍人には特別なる恩給法ありて、其現役を離れたるものに給與す。——しやうしよ［恩給證書］(名) 恩給を受くる權利あることを證明したる證書、內閣これを作成して本人に交付す。

(おんきやう［音響］(名) ㊀音とひゞきと。㊁

音に同じ。——がく［音響學］(名) 音の性質及現象を研究する科學。

(おんぎよく［音曲］(名) 鳴りもの卽ち琴・三味線などの樂器に合はせて、謠(ウタ)ふべきうたひ物の稱。

(おんぐう［恩遇］(名) なさけをかけて取り扱ふこと。いうたいすること。(厚待)。

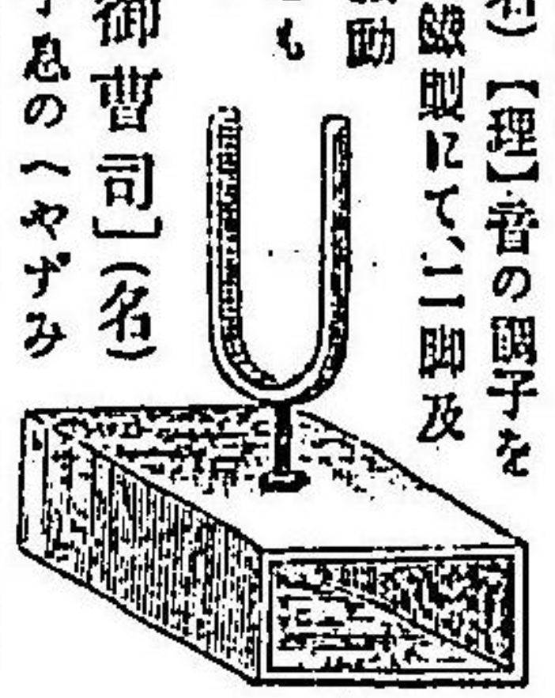
(おんけい［恩惠］(名) めぐみ。なさけ。——きじつ［恩惠期日］(名) 債務履行等につき、定期の外に特典として與ふる猶豫期限。

(おんこ［恩顧］(名) なさけをかくること。あはれみ。かばひ。ひいき。「—の郞黨」。

オンコ(名) 【植】「いちひ」の一名。

おんこと［御事］(名) 其人にかゝはる事柄の敬稱。「役德さまの—」

おんこと［御事］(代) きみ。あなた。


［おんさ］

(おんさ［音叉］(名) 【理】音の調子を計るに用ふる具、鋼鐵製にて、二脚及柄を有し、一定の振動數の音を發し得るもの。

卄おんざうし［御曹司］(名) ㊀古昔、堂上家の子息のへやずみの稱。㊁後世、源家嫡流のへやずみの子供の稱。「—爲朝」。

おんし［御師］(名) 「おし」に同じ。

(おんし［恩賜］(名) めぐみてたまはること。君主などよりたまはること。又、其たまはりたる物。

(おんし［恩師］(名) 恩義ふかき師匠。

(おんじき［飮食］(名) (字の吳音) 飮みものと食ひものと。「百味の—」

(おんしや［恩赦］(名) なさけによりて、罪をゆる

さるゝこと。「—にあふ」。(恩免)。

(おんしやう［恩賞］(名) 其行爲をほめて物を賜はること。はうび。「—を受けんとすれば」。

(おんしやう［音聲］(名) 【生】人類の發するところ、咽喉の內にある聲帶が空氣出入の際に振動して發するもの、其大小高低あるは、咽喉の軟骨これに附屬する筋肉と共動して、聲門を潤大にし狹小にし、又、聲帶を弛緩し緊張するが故なり。

(おんしやく［恩借］(名) なさけによりて金錢又は物品を借りたること。又、其借りたる金錢物品。

(おんしゆ［飮酒］(名) 【佛】五戒又は十戒の一、酒をのむこと。

おんしらず［恩不知］(名) 恩をうけて酬ゆることをしらざること。又、其人。

(おんしん［音信］(名) おとづれ。たより。いんしん。(音問)。

(おんじん［恩人］(名) 恩をかけてくれたる人。

オンス［英＝Ounce］(名) 英・米兩國に於ける衡量の單位、「アヴォルヂュポイス」衡にては、「ポンド」の十六分の一にして、我國の七匁五分六厘に當る、又、「トロイ」衡にては、「トロイ、ポンド」の十二分の一にして、我國の八匁二分九厘四毛に當る。

(おんせい［音聲］(名) 「おんしやう」に同じ。

卄おんぞ［御衣］(名) ㊀貴顯の人の着する衣服。㊁神事などの場合に着する服。

(おんたく［恩澤］(名) めぐみ。うるほひ。「—に浴す」。

(おんてい［音程］(名) 【理】二つの樂音の振動數の比。

(おんてう［音調］(名) ㊀【理】音の高低の稱にして、發音體の振動數の多少に起る、振動烈しければ高く緩なれば低し。㊁詩文の語路又は音曲の曲折。こゑのしらべ。こゑのふし。

(おんてん［恩典］(名) めぐみを施すこと。

(おんでん［隱田］(名) かくしだ。

(おんと［音吐］(名) 聲の出しかた。又、音聲。

おんど［音頭］(名) 二人以上にて唄(ウタ)などをうたふとき、一人が先づ頭だちて調子を取ること。——とり［音頭取］(名) ㊀音頭をつとむる人。發聲者。(毀頭、歌頭)。㊁物事の首唱者。

(おんとく［恩德］(名) めぐみ。なさけ。

(おんどく［音讀］(名) ㊀漢字を其音にて讀むこと。㊁こゑを出して讀誦すること。訓讀の對。

〜おんども(代) われ〳〵ども。(九州地方の方言)。

〜おんば［乳母］(名) めのと。うば。

(おんぱ［音波］(名) 【理】發音體に接觸せる空氣が、發音體の振動を受けて生ずる疎密の波、其波及が、吾人の耳に入り鼓膜を振動するにより、音の感覺を起す。

おんばう［御坊］(名) ㊀墓を守る人。はかもり。(穩葬)。㊁火葬にて、死骸を燒く職業の人。(焚屍人)。

卄おんはかせ［音博士］(名) 古昔の大學寮の博士の一、主として漢字の漢音・吳音の研究を擔當し、これを諸生に敎へしもの。

おんばこ［車前］(名) 【植】「おほばこ」の音便。

(おんびん［音便］(名) 語調の便宜によりて、其音をなだらめてよびなす一定の音格。「かみぬし」を「かんぬし」「行きて」を「行つて」といふ類。

〜おんぶ［負］(名) ㊀背におふこと。㊁會計などを人に持たすること。人におごらせなどすること。

おんみ［御身］(代) 稍や敬意を含める對稱の代名詞。「詞」。(卿)。

(おんみつ［隱密］(名) ㊀ひそかになすこと。かくしてなすこと。㊁たんてい。かくしめつけ。

オンムン［諺文］(名) (字の朝鮮音) 朝鮮の國字、

子母二十八字よりなる寫音文字にして、其中の三字は現今用ひられず、傳へて李朝第四世の王世宗の創作するところとすれど詳かならず、梵字に傚ひて數個の文字を造り、これを基礎とし聲音相互の關係を斟酌して組み立てたるもの。(鬼文)。

(おんめい［恩命］(名) ありがたきおほせ。

卄おんもの［佩物］(名) 「おびもの」の轉。

卄おんやう［陰陽］(名) ㊀「いんやう」に同じ。㊁おんやうしの行ふ道。——け［陰陽家］(名) 次條に同じ。——し［陰陽師］(名) 古昔の官名、陰陽寮の所屬にして、卜筮方鑑の事を掌りしもの。(卜筮者)。——はかせ［陰陽博士］(名) 古昔の官名、陰陽寮の所屬にして、天文・曆數などを敎授せし職。——だう［陰陽道］(名) 卜筮方鑑又は天文・曆數などに關する學問。——のつかさ［陰陽寮］(名) 古昔、中務省の被管にして、陰陽に關する事を掌りし役所。——れう［陰陽寮］(名) 前條に同じ。

(おんりつ［音律］(名) ㊀おんのてうし。こゑのしらべ。㊁轉じて、音樂の稱。「—を好む」。

(おんゐ［恩威］(名) 恩惠と威光と。「—並び行はる」。

(おんゐん［音韻］(名) 音と韻と。「—相叶はず」。

か　が

か　喉的破裂音K卽ち舌の後部を軟口蓋に接して破裂せしむる音と、母音「あ」との綴音。

が　「か」の濁音、凡て「か」と同じく、たゞ破裂音に聲帶

の振動の伴ふを異なりとす。

か［香］(名) 嗅官の感覺、にほひ。かをり。「梅が—」。

か［蚊］(名) 【動】雙翅類に屬する小さき飛蟲、夏日人畜の血を吸ふ、體は黑褐色にして、腹部及脚部の白色なるもあり、雄蟲は花液を吸收し、雌蟲は二三百の卵子を水中に滴下す、卵子は、孵化後三週間にして蛹に化し、尙は十日間を經て成蟲に化す。

卄か［鹿］(名) 【動】「しか」に同じ。

(か［加］(名) かさん。よせざん。又、よせざんしたる數値。

(か［可］(名) ㊀よろしきこと。㊁ゆるすこと。㊂や、不滿足ながらゆるすこと。

卄か［彼］(代) かれ。「—はたれどき」。

か［歟、乎、哉、耶、邪］(助) ㊀疑ひの意を表はす語。「豈—」「うつゝ—」「ある—」「なき—」。㊁問ひかくる意を表はす語。「いづれ—」「どれ—」。㊂感歎の意を表はす語。かな。「さびしくもある—」「ひぐらしの聲」。

卄か—(接頭) 語調を整ふるために或語に冠する語。「—ぐろき髮」「—よわし」。

(—か［個、箇］(接尾) 物事を數ふるにいふ語。「三—」「百—」。

(—か［荷］(接尾) 一人の荷(ニ)ふべき分量の荷物を數ふるにいふ語。「兩掛一—」。

—か［處］(接尾) 或語に添へて、場所の意を表はす語。「住み—」「隱れ—」。

—か［日］(接尾) 或語に添へて、日數の意を表はす語。「十—」。

(が［賀］(名) ㊀いはひ。ことぶき。「改曆の—」「新年の—」。㊁齡老いたるをよろこび祝ふこと。古昔は、四十・五十・六十・七十・八十等の年齡に行ひしが、今時は六十一・七十七・八十八等の齡にも行へり。

(が［駕］(名) 馬のひく乘車。のりもの。「—を迎ふ」。

(が［鵝］(名) 【動】「がてう」に同じ。

(が)[蛾](名)【動】蛾類の成蟲。

(が)[芽](名) 植物の萌(ザ)し、即ち、嫩蕊を以て被包せられたる生長點。め。

(が)[我](名) ㊀わが思ふ處をいひはりて、人の言に從はぬこと。(執拗)。㊁自家の私利をはかること。私慾。㊂【佛】自家一身は假合なるに、實體なりと執着すること。㊃【哲】自家の存在、觀察點を異にするに從ひて、客我・主我等に分つ。㊄【心】一切の心的狀態の中に於て、最も主觀的と感ぜらるゝ心的狀態。

(が)[雅](名) ㊀支那上代に於ける詩の六義の一、義理正しくして後世の法とすべきもの。「大—」、「小—」。㊁たゞしき音樂。たゞしき歌謠。(雅樂。雅音)。㊂たゞしき言語。たゞしき道蹊。㊃たゞしきこと。正雅。㊄たゞしきむくゆかしきこと。けだかきこと。みやびやか。しとやか。㊅簡略にして趣味多きこと。(風雅)。

が(助) ㊀主格を表はす語。「人—笑ふ」。㊁關係を表はす語。「君—世」。㊂「にある」の意を表はす語。「宮城—原」。㊃さうではあるもの、又はしかしながらなどの意を表はす語。「尋ね(し)—知れず」。

†が(助) こひねがふ意を表はす語。がな。

カーキー[Khaki](名) (きたな色の義) 近時おもに陸軍の軍服に用ひらるゝ茶褐の色。

ガーゼ(名) (「ドイツ」語 Gase) 消毒したる粗き木綿、外科撥用のもの。

カード[Card](名) ㊀厚紙の小片。ふだ。㊁骨牌。

——しき[—式](名) 簿記法にて、各個の口座を各個の「カード」に記載して勘定整理するもの。

カーバイド[Carbide](名) 「たんくわカルシウム」に同じ。

カーブ[Curve](名) 野球にて投手の投ぐる球が打手の前にて不意の方向に轉ずること。

かい[櫂](名) (「かき」の音便) 船具の名、櫓(ロ)より小さく且つ曲がらず、水を搔(カ)き分けて、船を進むるに用ふるもの。(楫、槳、楫)。

(かい)[戒](名) ㊀いましむること。いましむる言。いましめ。㊁漢文にて人をいましむるに用ふる文體。㊂【佛】非を防ぎ惡を止むること。又、其制。「十—」。「五—」。

(かい)[階](名) ㊀きざはし。あがりだん。㊁しな。くらゐ。だん。「位—」。

(かい)[楷](名) 「かいしよ」の略言。

(かい)[解](名) ㊀意義又は方法のときあかし。(解說)。㊁漢文にて人の疑ひを釋くに用ふる文體。

(かい)[海](名) うみ。なだ。「—面」。(洋)。

(かい)[介](名) ㊀かひがら。かひ。㊁すけ。かいぞへ。㊂なかだち。仲人。㊃節操かたきこと。㊄孤與なきこと。

(かい)[界](名) ㊀上下四方。空間。㊁場所。位地。㊂社會。なかま。「學者—」。㊃さかひ。かぎり。

(か-い)[下意](名) しも〴〵の意思。「—通ぜず」。

(か-い)[下衣](名) 上衣の下に着する衣服。したぎ。

〰(かい)[粥](名) 「かゆ」の訛。

かい—[搔](接頭) 語勢をそふるため或動詞に冠する語。「—つくろふ」。「—さく」。

(がい)[蓋](名) ㊀おほふもの。おほひ。㊁笠・傘又は繖(キヌガサ)など。かさ。㊂器物のふた。㊃【佛】貪慾瞋恚などの如き善心をおほふもの。

(がい)[害](名) ㊀そこなひ。さまたげ。さはり。わざはひ。「一利一—」。㊁【倫】人生の障礙抵抗、これを分ちて二とす、一は物理的にして即ち自然的勢力をいひ、他は道德的にして即ち惡をいふ。

(が-い)[我意](名) 我が思ふまゝのこゝろ。わがまゝ。

(がい)[街](名) ㊀とほり。ちまた。まち。㊁亞洲にて、國の管轄に屬する行政區劃、長を置きて其行政事務を取扱はしむ。

(がい)[該](代) その。この。「—事件」。「—局」。

(がい-あく)[害惡](名) 「がい」(害)に同じ。

(かい-い)[介意](名) 氣にかくること。しんぱい。

(がい-い)[害意](名) 他を害せんとする心ぐみ。

(かい-いん)[拐引](名) 詐僞の手段を用ひて、人を他處へつれゆくこと。かどはかし。

(かい-いん)[改印](名) 印形(インギヤウ)を改めかふること。「—屆」。

(かい-いん)[海印](名)【佛】覺者の智の稱、其諸法を照觀すること海の萬象をうつすにたとへいふ。

(かい-う)[海宇](名) 「かいだい」(海內)に同じ。

(が-いう)[雅遊](名) 風流なるあそび、即ち、詩歌の會又は山水の遊びなどにいふ。

(か-いうせい)[下遊星](名)【天】地球の軌道の內方にある遊星、即ち、水星・金星の稱。

(かい-うん)[開運](名) 幸運に向ふこと。運ひらけてよくなること。

(かい-うん)[海運](名) 船舶により海上を通じて貨物又は旅客を運送すること。——**げふ**[海運業](名) 海運を以て貨錢を取得することを目的となす營業。又、海路による運送の事業。

(がい-えう)[概要](名) あらまし。およそ。

(かい-えき)[改易](名) ㊀あらためかふること。㊁(族籍を改めかふる義) 德川時代に武士に科せし刑罰の一、其族籍を除(ノゾ)き其家祿を沒收して、平民となしゝこと。蟄居より重く切腹より輕し。

(かい-えん)[開演](名) 演說・講義又は遊藝・演劇などをはじむること。

(がい-か)[崖下](名) 絕壁の下。がけした。

(がい-か)[凱歌](名) 凱陣を祝ふうた。「—をあぐ」。

(かい-かう)[開講](名) 講義を始むること。

(かい-かう)[偕行](名) つれだちてゆくこと。又、ともにおこなふこと。

(かい-かう)[海港](名) 海岸にある軍艦・船舶の避難所若しくは停繫場。うみべのみなと。

(かい-かう)[開港](名) 其港に外國船の自由出入を許すこと。港を開放すること。又、其港。

(かい-かう)[開校](名) 學校にて授業を始むること。

かい-かう[開坑](名) 鑛山にて鑛坑を開鑿すること。

(かいかう-けんえき)[海港檢疫](名) 傳染病豫防のため、海外の諸港等より來る船舶に對し、指定の海港に於て檢疫を行ふこと。

(かいかう-しき)[開校式](名) 學校にて授業を始むるにつきて行ふ式。

(かいかう-ぢやう)[開港場](名) 開放したる港。

(かい-かく)[改革](名) ㊀あらためかふること。又、あらたまりかはること。㊁其目的が國家の基礎に關せず其方法が憲法の範圍を超えず、且普通に、行動の穩なる政治上又は社會上の變化。革命の對。

(かい-かく)[海角](名) みさき。さき。「喜望峯の—」。

(かい-かく)[介殼](名)【動】軟體動物の外套膜より分泌して生成する石灰質のもの、頭足類即ちいか等にては、多く甲狀をなして外套膜の內にあり、腹足類即ちたにし・あはび等にては、螺旋狀若しくは板狀をなし單一にして外套膜の外にあり、辨鰓類即ちはまぐり・あさり等にては、左右二枚概ね同形にして內に二枚の外套膜あり。

(かい-がく)[海壑](名) ㊀海とたにと。㊁器量の深大なるにたとへいふ語。「—の量」。

かい-がけ[皆掛](名) しろものとふうたいとを共に秤(ハカリ)にかくること。うはめ。

†(かい-がね)[胛](名) 「かいがらぼね」の古名。

†(かい-かふ)[開闔](名) ㊀ひらくととづると、㊁†古昔の官名、和歌所・藏人所・政所などにありて、次官に同じき職掌のもの。

かいがら-ぼね[胛骨](名)【生】軀幹の背の上部の骨、扁平三角形にして、左右一對あり、前方は上膊骨及鎖骨に連接して關節をなす。けんかふこつ。かりがねぼね。

(かい-がん)[海岸](名) 陸地の海に接近したる箇處。うみのきし。うみばた。うみべ。——**えうさい**[海岸要塞](名) 軍港・要港又は兵略上重要なる港灣に設けある要塞。——**せん**[海岸線](名) 海水と陸地との相接せる處、即ち、海陸の界。——**はう**[海岸砲](名) 海岸要塞に備置する各種の大砲。——**ばうぎよ**[海岸防禦](名) 海岸をふせぎまもること。又、海岸に設置せる兵備。——**はうだい**[海岸砲臺](名) 海岸防禦のために設けたる砲臺。——**ばうろう**[海岸望樓](名) 「かいぐんばうろう」に同じ。

(かい-き)[皆既](名)【天】「かいきしよく」に同じ。

(かい-き)[開基](名) ㊀ねもとをひらくこと。㊁寺院の創立者。寺院の祖。かいさん。「—は一遍上人」。(開祖、開山)。

かい-き(名) (甲斐絹の略か) 織物の名、甲斐國郡內地方より出づ、生絲にて織れる綾色の絹にして、無地又は縞等あり、蝙蝠傘又は羽織の裏などに用ふ。

(かい-き)[海氣](名) 海の氣。うみべの空氣。

(かい-ぎ)[海技](名) 海員として必要なる技術。——**めんきよじやう**[海技免狀](名) 海員の試驗に合格したるものか、若しくは適當の修業又は履歷を有し、遞信大臣が合格者同等と認めたるものにして、海員名簿に登錄濟みとなりたるものに對し、授與する船舶職員免許の證書。

(がい-き)[咳氣](名) 咳(セキ)を催す氣。「—あり」。(咳嗽)。

(かいき-しよく)[皆既食](名)【天】日蝕の一態、太陽が太陰に全く蔽(オホ)はれたる現象の稱にして、即ち、觀測者が太陰の本影內にあるときをいふ。

(かい-きふ)[階級](名) しな。くらゐ。とうきふ。「—を四等に分つ」。(等級)。

(かい-ぎやう)[戒行](名)【佛】よく戒律を守ること。

(かい-ぎやく)[諧謔](名) 不相應若しくは不釣合にして、好笑の情緒を呼び起す言。面白味多き言。おどけ。しやれ。

(かい-ぎよ)[海魚](名) 海に產する魚。うみうを。

(かい-きん)[戒禁](名) ㊀いましめ。制止。㊁【佛】一切の不善法を制止すること。

(かい-きん)[皆勤](名) 一年又は一箇月若しくは或時期の間に、一定の休日の外は、一日も缺かず出勤せしこと。

(かいきん-しや)[海金砂](名)【植】海金砂科に屬する羊齒植物、樹林の中などに生ず、莖は上昇攀本にして、芽胞房は其頂端に完全なる帽狀の彈力環を有す、藥用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる。

(かい-ぐ)[戒具](名) 刑事被告人又は囚人の逃走暴行等をいましむるために用ふる器具、あしかし・てぢやうの類。

(かい-ぐ)[皆具](名) 道具のこらず備はりたること。

(がい-く)[街衢](名) まち。ちまた。

(かい-ぐう)[海隅](名) 入りこみたる海のすみ。

†かい-ぐらみ-どき[搔暗時](名) たそがれ。くれがた。ゆふかた。(黃昏)。

かいぐり［掻繰］（名）かいぐること。

かい-ぐる（らりるるれれ）［掻繰］（他、ら四）左右の手にて繰る。たぐる。

（**かい-くわ**）［開化］（名）人智のひらけ進むこと。世の思想風俗など善良に向ひ進むこと。又、其開け進みたるありさま。「文明―」。（開明）。

（**かい-くわ**）［諧和］（名）睦じくやはらぐこと。

（**かい-くわい**）［開會］（名）㊀會議の成立又は會議・集會の開始。㊁帝國議會が有効なる行動を始むる手續、天皇が開院式を行ひ給ひてこれを命ぜらる。

（**かい-ぐわい**）［海外］（名）我國の境を圍める海のそとの國。とつくに。「―に遊ぶ」。（外國）。――**りよかうけん**（ーコー）［海外旅行劵］（名）海外へ渡航するもの、所持すべき旅行劵、外務大臣より出願者に對して附與するもの。

（**かい-くわつ**）［開豁］（名）㊀度量大なること。心裕（ゆた）かなること。こせつかぬこと。㊁眺望の開け濶れること。

（**がい-くわつ**）［概括］（名）すべくゝること。よせつゞむること。

（**かい-くわん**）［開卷］（名）書物を繙（ひもと）くはじめ。開きたる書物のはじめの部分。かきだし。はじめ。

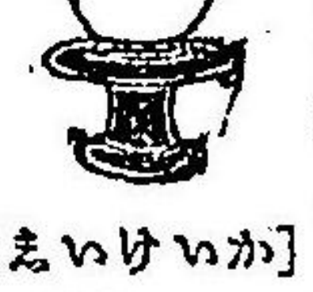
（**かいくわん-ぜい**）［海關稅］（名）稅關にて海路による輸出入の貨物に課する稅。

（**かい-ぐん**）［海軍］（名）海上の軍艦及兵備に關する一切の總稱、即ち、海上に於ける國家國民の利益又は權利を保護し、戰爭に際しては、海上の攻守にあたる軍備。――**かんせん**［海軍艦船］（名）海軍に屬する軍艦及船舶の總稱、分って第一種軍艦（戰鬪の役務に堪ふる軍艦）・第二種軍艦（戰鬪の役務に堪へざるも、常務を帶び航行し得る軍艦）・水雷艇・雜役船の四種とす。――**きくわんがくかう**（ーガッコウ）［海軍機關學校］（名）專ら機關に關する軍務に從事する海軍の高等武官を養成する學校、其學科は機關術・水雷術及普通學とす。――**きやう**（ーキヨウ）［海軍卿］（名）明治十八年官制改革前に於ける海軍大臣の稱。――**く**［海軍區］（名）海軍の必要より、我國の海岸及海面に設定したる區劃の稱、管理は其區内にある鎭守府司令官に屬す、現今の制にては、四海軍區あり。――**ぐんいがくかう**（ーガッコウ）［海軍軍醫學校］（名）海軍の軍醫官に高等の學術を教授し、又、海軍の醫官及藥劑官となすべき候補生に必要なる學科及職務を練習せしめ、兼ねて、被服食料等の衞生試驗を行ふ所。――**ぐんれいぶ**［海軍軍令部］（名）海軍上の國防及用兵に關する事を掌る所、部長ありてこれを統理す、部長は天皇に直隸して帷幄の機務に參し、國防及用兵に關する事を參畫し、親裁を受けこれを海軍大臣に移す。――**こうしやう**（ーシヨウ）［海軍工廠］（名）各軍港に設置しありて其鎭守府に屬し、艦船及兵器の製造・修理・艤裝並に兵器の保管・供給に關する事を掌り、又、需用品の調辨・供給を掌る所。――**こんきよち**［海軍根據地］（名）海軍が根據として諸種の設備をなしたる地。又、艦隊が一時設定したる、應急の修理・供給等をなす所。――**ざうへいしやう**（ーソウーシヨウ）［海軍造兵廠］（名）海軍に關する兵器の製造・修理・購買其他造兵事業に關する事を掌る所。――**しやう**（ーシヨウ）［海軍省］（名）海軍大臣の統轄の下に屬し、其裁恩を受けて、海軍に關する軍事行政を取り扱ふ中央官廳。又、海軍大臣が處理する事務の全體の稱。――**だいがくかう**（ーガッコウ）［海軍大學校］（名）海軍の將校及機關官に高等なる學術を教授する所。――**だいじん**［海軍大臣］（名）各省大臣の一にして、軍事行政の最獨官府、海軍に關する軍事行政を管理し、海軍の軍人軍屬を統率し、所轄所部（鎭守府・兵學校等）を監督するもの。――**はう**（ーホウ）［海軍砲］（名）軍艦の裝備に適する各種の直射砲。――**ばうろう**（ーボウロウ）［海軍望樓］（名）海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張り及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。――**へいがくかう**（ーガッコウ）［海軍兵學校］（名）海軍將校となすべき生徒を教育する所、其學科は、砲術・水雷術・運用術・航海術・機關術及普通學とす。――**りくせんたい**［海軍陸戰隊］（名）陸上の戰鬪にあたるために、軍艦の定員中より採りて編制せられたる軍隊。

（**かい-げ**）［改悔］（名）【佛】以前の非惡を自覺して、善道に向ふこと。ざんげ。

（**がい-け**）［咳氣］（名）せきの多く出づること。

（**かいけいし**）［盞擎子］（名）茶碗を載（の）する臺、載せたる茶碗の上に蓋をなす。



［かいけいし］

（**かい-けつ**）［解決］（名）もつれ事の處理。又、問題の解釋。

（**かい-けふ**）（ーキヨウ）［海峽］（名）【地】陸と陸とにはさまれて狹くなりたる海にして、大海に通じたるもの。

（**かい-げふ**）（ーギヨウ）［開業］（名）㊀營業を始むること。㊁營業をなしつゝあること。みせびらき。かいてん。――**い**［開業醫］（名）免狀を受けて開業せる醫師。――**しき**［開業式］（名）會社・銀行などが、其開業に際し、關係者などを招待して擧行する儀式。――**めんきよじやう**（ーシヨウ）［開業免狀］（名）特定の條件により特定の人に、官廳が開業を許可する證書、「醫術―」。

（**かい-げん**）［改元］（名）㊀年號をあらたむること。㊁帝王又は王朝の交代。だいがはり。かくめい。

（**かい-げん**）［開眼］（名）（まなこをひらく意）【佛】（い）法性眞如を證見すること。（ろ）新に出來たる佛體を神聖にするがために、僧徒の行ふ儀式。「―供養」。

（**かい-げん**）［戒嚴］（名）㊀いましめを嚴しくすること、きびしく用心すること。㊁【法】戰時若しくは事變に際し、兵備を以て全國若しくは一地方を警戒すること、其範圍内の行政權及司法權の一部若しくは全部を其地の司令官の掌管に委ぬるものにして、分ちて臨戰地境及合圍地境の二とす。――**れい**［戒嚴令］（名）【法】天皇の大權により戒嚴を宣告したまふ勅令。

（**がい-けん**）［概見］（名）大凡を見たること。ざっと目をとほすこと。

（**がい-げん**）［概言］（名）大凡をあげて言ふこと。

（**かい-こ**）［解雇］（名）やとひ居たる人を解除すること。やとひを解くこと。かいよう。

（**かい-ご**）［詿誤］（名）㊀しっさく。しくじり。あやまち。㊁人をまどはすこと。

（**かい-ご**）［解悟］（名）さとること。氣がつくこと。迷ひを開くこと。（開悟）。

（**かい-こう**）［邂逅］（名）おもはず出會すること。たまさかに遇（あ）ふこと。

（**かい-こう**）［開口］（名）㊀口をひらくこと。話を發すること。言ひ出すこと。㊁先づ第一番におんどを取りて、音聲を出すこと。はっせい。㊂うたひの一種、謠初などに作りてうたふもの。

（**かい-こく**）［海國］（名）四境の海なる國。しまぐに。

（**かい-こく**）［開國］（名）㊀國を建つること。㊁外國と交通を始むること、鎖國の對。

†**かい-こ-す**（さしすすせせ）［掻越］（他、さ四）うしろの方へ垂れたる髮の毛を、まへの方へこし出だす。

（**がい-こつ**）［骸骨］（名）㊀からだ。むくろ。㊁肉おちて、骨ばかりとなりたる死がい。――**をこふ**［乞骸骨］（主君にさゝげしむくろを乞ふ意）位地高き人の仕官を辭するにいふ。

かいご-の-はな［解語花］（名）（ことばのわかる花の意）美人の稱。ものいふはな。

かい-こ-む（まみむむめめ）［掻込］（他、ま四）㊀脇の下へかかへこむ。（抱込）。㊁流動體を汲みいる。

（**かい-こん**）［開墾］（名）山野をひらきて、新に田畝をつくること。かいはつ。かいたく。（開拓）。――**ち**［開墾地］（名）かいたくしたる土地。

（**かい-さ**）［開鎖］（名）ひらくととざすこと。

（**かい-さい**）［改歲］（名）しんねん。かいねん。

（**かい-さい**）［皆濟］（名）㊀借金をことごとく返却すること。又、年貢をことごとく納むること。㊁物事のことごとく、のひすみたること。

（**がい-さい**）［睚眥］（名）にくさげに人を視ること。にらむこと。――**の-うらみ**［睚眥怨］（名）わづかばかりのうらみにいふ語。

（**かい-さう**）（ーソウ）［海藻］（名）海產の植物の總稱。うみくさ。

（**かい-さう**）（ーソウ）［改葬］（名）一旦葬りたる死骸をあらためて葬りかふること。

かい-ざう（ーゾウ）［海象］（名）【動】「セイウチ」に同じ。

（**かい-さく**）［開鑿］（名）山などをひらきて、道を通ずること。

（**かい-さつ**）［開札］（名）入札などに、札をひらきて調ぶること。

（**かい-さつ**）［改札］（名）ふだをあらたむること。きっぷをしらぶること。「停車場の―」。

（**かい-さん**）［解散］（名）㊀集會せる者の散じ去ること。㊁集會のなかばに、集會せる者を散じ去らしむること。㊂契約を解き一定の事業を廢止すること。（會社にいふ）。㊃議員の任期未滿なるに、其資格を解除すること。（議會にいふ）。

（**かい-さん**）［開山］（名）㊀寺院の創立者。寺院の祖。開基。㊁或物事の開始者。

（**かい-さん**）［海產］（名）海に產するもの。

（**かい-ざん**）［改竄］（名）文字のかきかへ。文句のつくりかへ。

（**がい-さん**）［概算］（名）あらましの勘定。おほづもり。（槪計）。

（**がい-ざん**）［碍竄］（名）入るをさゝふること。――**せい**［碍竄性］（名）【理】物質の性質の一、一物質が占むる空間には、他の物質をして同時に占有せしめざること。

（**かいさん-ぶつ**）［海產物］（名）海に產するもの。

（**かい-し**）［界紙］（名）すぢを引きてある紙。（罫紙）。

（**かい-し**）［開士］（名）【佛】（法を以て開き導く人の意）菩薩（ボサツ）の稱。

（**かい-し**）［開始］（名）はじむること。又、はじまること。

（**かい-し**）［戒師］（名）【佛】信者に戒を授くる法師。

（**かい-し**）［介士］（名）甲冑を着けたる士。

（**かい-し**）［海市］（名）しんきろう。

（**かい-じ**）［開示］（名）ときしめすこと。いひあらはすこと。

（**かい-じ**）［海事］（名）海上に關する事。

（**がい-し**）［碍子］（名）架設する電線を支持し、且支柱などに其電流の傳はるを防ぐに用ふる磁器製の物、電柱の腕木の上に見ゆる白色の物これなり。

（**がい-じ**）［孩兒］（名）みどりご。をさなご。（嬰兒）。

（**かい-じう**）［海獸］（名）海中に棲息する獸類、即

ち、くぢら・あざらしの類。うみのけもの。

廿かい-しき〔掻布〕(名)(「かきしき」の音便)古昔、食物のうつはもの、中に、木葉などをしきしと。又、其しきたる木葉。

(かい-しき)〔解式〕(名)【數】演算の順序を一定の記號方法によりて記載したるもの。

(かい-しき)〔皆式〕(副) みな。のこらず。

(かい-じきよく)〔海事局〕(名) 遞信大臣の管理に屬し、船員及水先人の試驗又は船舶の試驗檢査其他法令の定むる所の海上に關する事務を取り扱ふ遞信省の一局。

(かい-しやう)（シヨウ）〔海相〕(名) 海軍大臣の異稱。

(かい-しやう)（シヨウ）〔海床〕(名)【地】海底の深淵。

(かい-しやう)（シヨウ）〔海商〕(名)【法】海上に於ける商行爲。──**はふ**（ホウ）〔海商法〕(名)【法】商法の一部、海商に關する權利關係を定むる法規、最も端艇(ハシケ)其他櫓(ロ)・櫂(カイ)のみを以て運轉し又は主として櫓櫂を以て運轉する舟には、これを適用せず。

(かい-しやう)（シヨウ）〔海上〕(名) 海のうへ。海のおも。──**けん**〔海上權〕(名) 海上を制御する權力。──**しようとつ**〔海上衝突〕(名) 海上に於ける船舶の衝突、其豫防に關し、船燈又は信號等に就き詳細なる規定あり。──**はふ**（ホウ）〔海上法〕(名) 航海に關する法規の總稱、これを分つて公法的及私法的の二とす、公法的は、船舶の國籍・登記又は貿易・航海に關する條約及規定等にして、私法的の大部は海商法なりとす。──**ほくわく**〔海上捕獲〕(名)【法】交戰國の一方が、交戰主體の權利により、公海又は領海に於て、敵國の船艦、若しくは他國の船艦の中立違犯の實跡又は嫌疑あるもの等を捕獲すること。──**ほけん**〔海上保險〕(名)【法】航海に關する事故によりて生ずべき損害の塡補を以て目的とする保險、此保險に關する商法の規定は、一種の特別法にして、若し特別の規定なき限りには、一般の保險に關する規定を適用するものとす。

(かい-しやう)（シヨウ）〔海上〕(名)「かいしやう」(海上)に同じ。

(かい-しやう)（シヨウ）〔開城〕(名) 城をひらきて敵に降ること。

(がい-しやう)（シヨウ）〔街上〕(名) ちまた。みちばた。

(かい-しやう-だんそう)〔階狀斷層〕(名)【地】斷層の順次に階級の狀をなすこと。

(かい-しやく)〔介錯〕(名) ㊀かいはうする人。㊁つきそひ、さしぞへ。㊂古昔、切腹のとき付き添ひて、其人の首をはねしと。又、其人。──**にん**〔介錯人〕(名) 介錯する人。

(かい-しやく)〔解釋〕(名) ㊀ときあきらむること。㊁ときあかし。せつめい。㊂もつれたる事件の處理。「東方問題の─」。

(かい-じやく)〔海若〕(名) 海の神。わたつみ。

(かい-しゆ)〔皆朱〕(名) 朱又は辰砂を混じて、赤色に塗りたる漆塗り。

(かい-しゆう)〔改宗〕(名) 信仰歸依(キエ)せる宗旨をあらたむること。

(かい-しゆん)〔改春〕(名) あらたまりたる春。しんしゆん。(新年)。

(かい-しゆん)〔開春〕(名) 春のはじめ。はつはる。

(かい-しゆん)〔改悛〕(名) 前非をあらたむること。心をいれかふること。かいしん。かいご。

(かい-しよ)〔楷書〕(名) 漢字の書體の一、隷書より轉化せしものにて、晉の王次仲の創始にかゝるといふ、形最も正し。しん、しんしよ。(眞書)。

(かい-しよう)〔改稱〕(名) となへをあらたむること。

(かい-しよう)〔階乘〕(名)【數】一より初めて一つ宛多き數を皆な掛け合はせたる積、$1\times2\times3\times4\times\cdots\cdots\times n$ は n の階乘なり、$n!$ 又は $\underline{|n}$ を以てこれを表はす。

(かい-しよく)〔解職〕(名) 其人を其職務より去らしむること。免職。

(かい-しよく)〔戒飭〕(名)「かいちよく」に同じ。

廿かい-しろ〔垣代〕(名) ㊀とばり。(帳)。㊁がくにん。れいじん。(伶人)。

(かい-しん)〔改心〕(名) 惡心をあらためて、善心にたちかへること。かいしゆん。かいご。

(かい-しん)〔開申〕(名) まうしひらき。まうしあげ。しやうしん。

(かい-しん)〔戒心〕(名) 自らいましむること。ようじんすること。

(かい-しん)〔改新〕(名) ㊀あたらしくすること。又、あたらしくなること。㊁年の始め。

(かい-しん)〔改進〕(名) ㊀物事のあらたまりすゝむこと。㊁舊弊を改め新文明に進ますること。

(かい-しん)〔開進〕(名) 軍隊が行進中、縱隊より横隊に變ずること。

(かい-しん)〔介心〕(名) 高大なる心。

(がい-しん)〔害心〕(名) わるだくみ。あくしん。

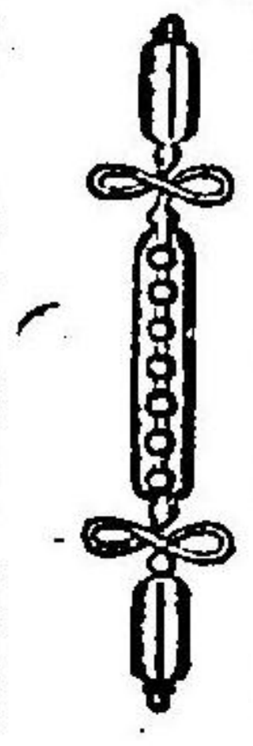
がい-す（せしすする、すれせよ）〔害〕(他、さ變) ㊀きずつく。そこなふ。㊁じやまをなす。さまたぐ。㊂さつがいす。ころす。「白晝人を─」。㊃ねたむ、忌む、「其能を─」。

(かい-すう)〔海陬〕(名) 海邊のかたゐなか。沿岸の僻村。(海隅)。

廿かい-す-む（まみむむめめ）〔掻擤〕(自、ま四) かきひそむ。「かいすみて、こゝろぼそげなれど」。

ガイスレル-くわん〔─管＝Geisslers' tube〕(名)【理】甚だ稀薄なる瓦斯を充(ミ)たせる玻璃管の

兩端に電極を附したるもの、これを感應「コイル」に絡(ツナ)ぎ、放電を行ふとき、陰極は青綠色の微光にて蔽(オホ)はれ、次に暗所あり、陽極は美麗なる桃色の微光が、斷狀をなし層々相重なりて發出す、「ドイツ」人「ガイスレル」氏初めて此試驗をなしゝにより此名あり、管内に發光を放つ物體を入れ、或は管を「ウラニウムガラス」にて作るときは、放電の際、發光を放ちていよ〳〵美麗なり。


［ガイスレルくわん］

(かい-すゐ)〔海水〕(名) 海洋に湛(タヽ)ふ水、多量の鹽分を含みて淡水より重し、固有の色は青なれど、鹽分の多寡によりて、其濃淡を異にす。しほみづ。──**よく**〔海水浴〕(名) 夏日衞生のため、海水に入りて沐浴又は游泳すること。

(かい-せい)〔改正〕(名) あらため正すこと。善き方へなほすこと。

(かい-せい)〔改姓〕(名) 苗字をあらたむること。

(かい-せい)〔皆濟〕(名)「かいさい」(皆濟)に同じ。

(がい-せい)〔慨世〕(名) 世の成り行きをなげきうれふること。かうがい。「─の氣あり」。

(がい-せい)〔蓋世〕(名) 世をおほひつくすほどの器量又は功名あること。「─の功名」。

(かい-せい-ぶつ)〔海生物〕(名) 海中に生ずる動植物、淺海に生ずるものは、普通人の知る所なれど、深海は水溫低く且闇黑なるが故に、植物は下等植物にして、動物は眼孔非常に大なるもあり、或に全く盲目なるもあり、又、燐光を發する等もありて、特殊の機關を備ふるものとす。

(かい-せう)（シヨウ）〔海嘯〕(名) 巨大なる波浪の不時に起りて陸地を浸すこと、海底火山の破裂若しくは地震等に伴ふもの多し。つなみ。

(かい-せき)〔解析〕(名) ㊀解きひらくこと。㊁物事を細かく解きひらき、理論によりて研究すること。──**きかがく**〔解析幾何學〕(名)【數】代數的演算により研究する幾何學、「フランス」人「デカート」氏の創めしもの。

(かい-せつ)〔開設〕(名) あらたにまうくること。はじむること。

(かい-せつ)〔解說〕(名) ㊀ときあかし。せつめい。㊁物事を分解して、其要素又は槪略を揭示すること。

(がい-せつ)〔剴切〕(名) 最も適切なること。「引證─」。

(かい-せん)〔海船〕(名) 海上を航行するための船舶。うみぶね。

(かい-せん)〔改選〕(名) 議員又は役員の任期滿ちあらためてこれを選擧すること。

(かい-せん)〔海戰〕(名) 海上の戰爭。陸戰の對。

(かい-せん)〔開戰〕(名) 戰爭行爲を始むること。敵に對して攻擊を始むること。

(かい-せん)〔疥癬〕(名) かいせんちゆうの寄生によりて生ずる皮膚病、甚だ痒(カユ)きもの。ひぜん。

(がい-せん)〔凱旋〕(名) いくさに勝ちてかへること。がいぢん。(旋軍、凱還)。

(がい-せん)〔蓋然〕(名) しかあり得るならん又はしかあるならんといふこと、必然の對。

(がい-せん)〔慨然〕(名、副) いきどほりなげくさまにいふ語。

(がい-せん)〔駭然〕(名、副) おどろきたるさまにいふ語。

(かい-せん-ちゆう)〔疥癬蟲〕(名)【動】蜘蛛類に屬する細小なる蟲、形狀壁蝨(ダニ)に類し、人の皮膚に寄生して、圓狀に害蝕し、以て疥癬を起す。ひぜんの

(がい-せん-もん)〔凱旋門〕(名) 凱旋の軍隊を歡迎し、及びその戰勝を記念するために、都會の主要なる位置に建つる門。

(がい-そう)〔劾奏〕(名) 官吏の罪過をあげて君主に奏すること。(彈劾)。

(かい-ぞく)〔海賊〕(名) ㊀海上に橫行し又は上陸して、財貨を强奪する盜賊。「─毛利九右衞門」。㊁近古、海軍の異稱。㊂【法】一國の主權の承認なく又は全く關係なく、公海・領海に橫行し若しくは島嶼・領地等に上陸して、貨財を奪ひ暴行を恣にするもの、現今の國際法にて、これを人類の公敵と看做し、何れの國の船艦又は國民にても、これを拿捕して、自國法廷の裁斷に附するを得るを通則とせり。──**せん**〔海賊船〕(名)【法】海賊の使用せる船舶、現今の國際法にて、海賊と同じく、何れの國の船艦又は國民にてもこれを拿捕して、自國法廷の裁斷に附するを得、又、海洋を航行する船舶の海賊たるを疑ふに足るべき十分の理由あれば、何れの國の軍艦も其船舶の審査を行ひ得るものなり。

(がい-そく)〔槪則〕(名) あらましのきそく。

かい-ぞへ〔介添〕(名) ㊀かしづき。たすけ。てつだひ。㊁嫁(ヨメ)に行きたる後まで、其嫁女にともなふ下婢。

(かい-そん)〔海損〕(名)【法】航海に關して生じたる船舶及荷物の損害、これを分つて共同海損・單獨海損・小損害の三とす、共同海損とは、船長が船舶及積荷をして、共同の損害を免れしむるための處分より生じたる損害をいひ(沈沒を免るゝために、積荷を投棄したる場合などの如き)、單獨海損とは、任意にあらずして、船舶又は積荷にのみ生じたる損害をいひ、小損害とは、航海及臨時の必要より生じたる費用をいふ。

(かい-たい)〔解體〕(名) ㊀身體をときわくること。か

いばう。㊁多數のもの相集りて成り立ちたる一の物事が、個々別々になること。

(かい-たい)［懈怠］(名) ㊀おこたり。なまけ。げたい。㊁ぬかり。失念。㊂【法】自己の行爲により生ずべき惡結果の豫想せられ、且これを防止し得べき地位に立つにも關らず、これを等閑に附したるがため、惡結果を生じたること、例せば、往來に於て放銃して通行人を殺傷せるが如きこれなり。

(かい-たい)［拐帶］(名)【法】委托を受けたる物品を、其人に送附する意思なきか又は其承諾以外の使用をなさんがために、持ち去ること。もちにげ。

(かい-だい)［改代］(名) 代のかはること。だいがはり。

(かい-だい)［改題］(名) 題號をあらたむること。

(かい-だい)［解題］(名) 書冊の著者又は概略若しくは出版の年月等の說明。「類書―」。

(かい-だい)［海內］(名) ㊀東西南北の四海のうち、即ち、國內。㊁天下の稱にもいふ語。

(かい-たう)［戒刀］(名) 僧具三衣を裁(タ)つに用ふる刀。又、僧侶のたしなみに持つ刀の稱。

(かい-だう)［海道］(名) ㊀沿海の地方を通ずる街道。山だうの對。㊁東海道の略稱。㊂廿みちすぢ。街道。廿――くだり［海道下］(名) 古昔、東海道を東國へくだりしこと。

(かい-だう)［海棠］(名)【植】薔薇科に屬する木、葉は羽狀にして、萼は黑紅色を帶び、花瓣は帶紅色なり、觀賞用として栽培せらる。(海紅、花仙)。

(がい-たう)［該當］(名) よくあてはまること。適合すること。

(がい-だう)［街道］(名) 國中に通ずるおほやけのみち。みちすぢ。ちまた。(官道)。

(かい-たく)［開拓］(名) 山野をひらき新に田畝をつくること。荒れ地をあらたにひらくこと。かいこん。――し［開拓使］(名) 明治二年設置せられ同十五年に廢止せられたる官職、始めは北海道及樺太の兩地なりしが、後に北海道のみとなり、其行政及開拓をつかさどれり。

かい-だ・す［搔出］(他、さ四) かき出す。くみ出す。

(かい-たふ)［解答］(名) ときあかして答ふること。ときあかし。こたへ。「謎の―」。

(かい-だん)［戒壇］(名)【佛】佛家にて戒法授受のための道場。――めぐり［戒壇廻］(名) 善光寺の堂の緣下の暗所をめぐりあるくこと。――せき［戒壇石］(名) 禪宗又は律宗の寺院の門前に建てたる石、多くは其面に「不許葷酒入山門」の句を記す。

(がい-たん)［骸炭］(名) 石炭を大氣に觸れしめずして熱したる多孔質の黑塊、木炭に比すれば其質緻密にして堅く且炭素に富む、冶金術又は鑄物等高熱を要するとき必用なる燃料なり。コークス。

(がい-たん)［慨歎］(名) なげきうれふること。

(がい-だん)［街談］(名) 道路の世評。世の中のうはさ。ふうせつ。「―巷說」。

(がい-ちう)［鎧冑］(名) よろひとかぶとと。又、戎衣の總稱。

(かい-ちく)［改築］(名) あらためきづくこと。きづきかふること。

(かい-ちゃう)［開帳］(名) (とばりをひらく義) 厨子(ヅ)のとばりを開きて、其中の佛像を拜するを公衆に許すこと。(啓龕)。

(かい-ちゃう)［開廳］(名) 官廳の執務を開始すること。

(かい-ぢゃう)［開場］(名) ばしよをひらくこと。公衆の入場を許すこと。

(かい-ぢゃう)［戒杖］(名) 山伏などの所持する杖。(錫杖)。

(かい-ちゅう)［海中］(名) 海のなか。うみのとなか。――くわざん［海中火山］(名)【地】海底に噴出せる火山。――だいげん［海中臺原＝Continental shelf］(名)【地】海の底が、海岸よりゆるき傾斜を以て漸次に低下し、急に傾斜の度を加へて一階段をなす處の稱。

(かい-ちゅう)［介蟲］(名) 介殼を有する蟲。

(がい-ちゅう)［害蟲］(名) 植物體の種々の部分を傷害し、且其繁殖の迅速なる攻食性の昆蟲、うんか・ありまきの類。

(かい-ぢょ)［刈除］(名) かりとること。のぞきすつること。「惡人を―す」。

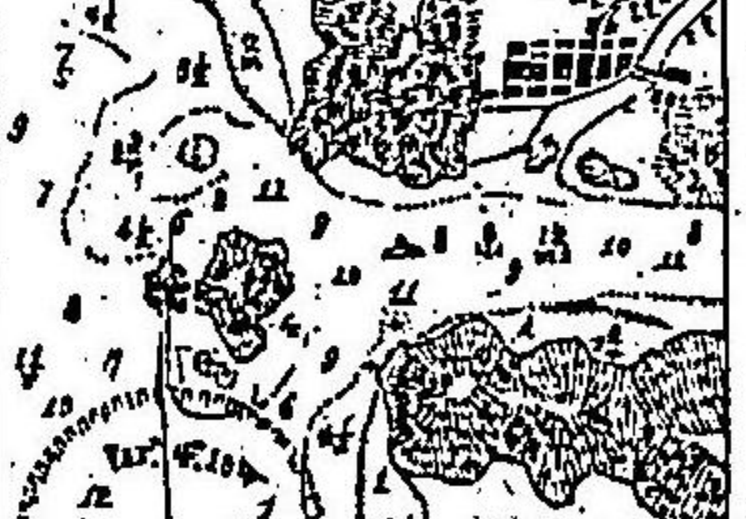
(かい-ぢょ)［解除］(名) ㊀ときのぞくこと、のぞきさること。㊁【法】或關係若しくは責任を消滅せしめて、其關係若しくは責任なき以前の狀態に復せしむること、契約の解除は、相手方に對する意思表示を以てこれを爲す。――けん［解除權］(名)【法】契約を解除し得る權利、或は法律の規定により生じ或は契約によりて生ず。

(かい-ちょく)［戒飭］(名) 人をいましめてつゝしましむること。

(がい-ぢん)［凱陣］(名) いくさに勝ちてかへること。

かい-づ［海津］(名)【動】くろだひの幼期。

(かい-づ)［海圖］(名) 歐字を以て海底の深淺を示し、且海底の性質岩礁の位置等、海洋の狀態を記載せる圖。



［かいづ］

(かい-つう)［開通］(名) ひらけとほること。又、ひらきとほすこと。「道路―」「―式」。

かい-つか・む［搔摑］(他、ま四) ㊀手にとらへつかむ。㊁概括す。とりあつむ。

かい-つくろ・ふ［搔繕］(他、は四) みだれたるをつくろひなほす。「衣紋を―」。

かいつぶり［鸊鷉］(名)【動】水禽類中短翼類に屬する鳥、嘴堅硬にして尖銳なり、兩翼短小にして脚は殆んど尾端に位し、各趾扁潤なり、巧みに游泳し、又、水中に潛沒す。むぐり。にほ。

かい-つま・む［搔摘］(他、ま四) つまむの意を稍や強めたる語。

かい-つら・ぬ［搔列］(他、な下二) つらぬの意を強めたる語。

かい-つら・ぬ［書列］(他、な下二) 書きつらぬ。

(かい-てい)［海程］(名) 海上の里程。

(かい-てい)［海底］(名) ㊀うみのそこ。㊁【地】海中臺原より傾斜再び緩慢となりて深海に達する處の稱、されど其形狀は所によりて一樣ならず、平地あり高巫あり深溝ありて、起伏すること陸地に異ならず。――くわざん［海底火山］(名)「かいちゅうくわざん」に同じ。――せん［海底線］(名)「かいていでんせん」の略言。――でんせん［海底電線］(名) 海底に架設したる電信線、其遠海に架設する線は、數個以上の銅線に各絕緣の裝置をなし、これを集束して防水絕緣物に包み、數條の大なる鐵線を合して作りたる數個の繩索を以て、其上を極めて緩き勾配の螺旋狀に捲き、更に其上に防腐劑を塗抹す。

(かい-てい)［階梯］(名) ㊀あがりおりの階段。きだはし。㊁進みゆくべき物事の初步又は端緒。はじまり。てびき。

(かい-てい)［解停］(名) 停止をときて以前の狀態に復すること。(新聞、雜誌などにいふ)。

(かい-てい)［開廷］(名) 法廷を組織し裁判を開くこと。

(がい-てい)［孩提］(名) をさなご。みどりご。

(かい-てう)［海潮］(名) うしほ。かいすゐ。

(かい-てふ)［戒牒］(名)【佛】戒をうけたるしるしに受くるかきつけ。

(かい-てん)［開展］(名) ㊀蓄積せるもの若しくは閉藏せるもの、ひらきのぶること。㊁發達進步すること。――はふ［開展法］(名) 地圖作成の一法、紙を圓筒狀となして地球を被ひ、地表の諸點をこれに投影して開展せしめたる理によるもの、此法によれば、子午線互に平行して方位一定するが故に、航海用としても最便なり。

(かい-てん)［開店］(名) 商人などの店をひらくこと。かいげふ。みせびらき。(開業)。

(かい-でん)［皆傳］(名) 藝術の師より、其奧義を殘りなく傳へらるゝこと。又、師のこれを傳ふること。おくゆるし。

(がい-とう)［街頭］(名) 市街のほとり。

(がい-とう)［街燈］(名) 市街に點火する夜燈。

かい-どう-げ［海藤花］(名) 一種の食品、鹽漬けにせる蛸の子、小さき粒多く集合して、藤の花に似る、播磨國明石の名產。

(がい-どく)［害毒］(名) ㊀いためそこなふこと。㊁健康をそこなふもの。善良をそこなふもの。

廿かい-ともし［搔燈］(名)（「かきともし」の音便、かきあげてともす義）古昔、禁中にて、夜の御殿などに點せし燈火。

かい-どり［搔取］(名)「うちかけ」に同じ。

かい-と・る［搔取］(他、ら四) 取又はつまさきを取りあげてかゝぐ。

廿かい-な・づ［搔撫］(他、た下二) なづの意を強めたる語。

かい-なで［搔撫］(名) 皮相を撫でたるばかりにて、其眞相に至らぬこと。

(かい-なふ)［皆納］(名) 年貢など殘りなく上納すること。かいさい。

かい-ならし［搔均］(名)「とかき(槩)」に同じ。

(かい-なん)［海難］(名) 航海上にて生ずる危難。

(かい-なんぷう)［海軟風］(名)【地】「かいふう(海風)(二)」に同じ。

(かい-にん)［解任］(名) 其人を其任務より退去せしむること。

(かい-にん)［改任］(名) 其人を其任務に新につかしむること。

かい-ねり［搔練］(名) ㊀紅のねりぎぬ。㊁かさねの色目、表も裏もすべて、紅のねりぎぬのもの。

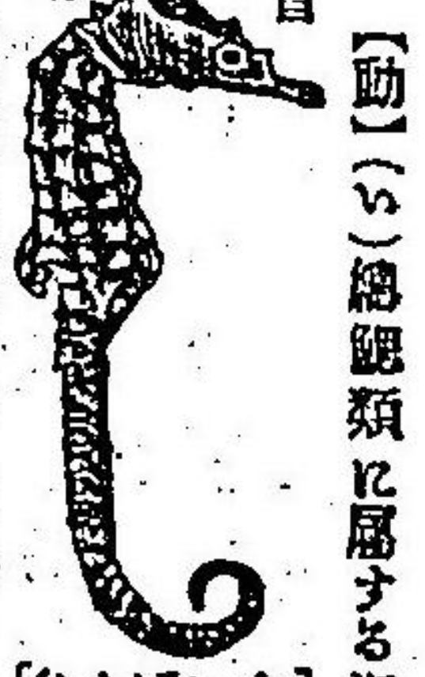
(かい-ねん)［改年］(名) あらたまりたる年。年の始め。えんねん。

(がい-ねん)［概念］(名)【心】或種屬或階級の個々特殊の具象的想念より、共通なる點を抽(ヌ)き出して構成したる想念、即ち、個々特殊の想念に共通なる抽象的想念をいふ、例せば、松・杉・檜等より抽象して木といふ概念を得るなり。

廿かい-のし［戒師］(名) 古昔、出家得道の人に、戒をさづけし僧。

(かい-は)［海波］(名) 海上にたつ波浪。

(かい-ば)［海馬］(名)【動】(い)總鰓類に屬する海產の小魚、其頭は馬首の如く直立して游泳し、柔撓なる尾部を以て海藻に纏絡す、雌は腹部に一種の皮囊を存し、其中に



［かいば(い)］

卵を入れて孵化せしむ。たつのおとしご。（ろ）游水類に屬する哺乳動物、體長およそ一丈、內外に達す、面に僅少の粗毛を生じ、頭は短けれど明かに胴と區別することを得、鼻孔は頭前に位し、口吻に厚き唇あり、胴は漸次尾となり、其末端は左右扁平なる尾鰭をなす、後肢は缺け前肢は短くして魚鰭の如し、熱帶地方の河口又は海洋に群居し、我國沖繩諸島にも產す。

（**かい-はい**［解廢］（名） やぶれすたること。やめて用ひざること。

（**かい-はい**［改廢］（名） 改むると廢（す）むると。

（**かい-はう**［介抱］（名） ㊀たすけいだくこと。㊁世話をすること。かんびやうすること。

（**かい-はう**［解放］（名） 拘繫又は監禁せられてあるものを、ゆるしてときはなすこと。自由を束縛せられてあるもの即ち奴隷などの束縛を解き、これが自由を得しむること。

（**かい-はう**［開放］（名） ㊀あけはなすこと。㊁防禦を解き去ること。「城塞の―」。㊂禁制を撤去して、自由に交通を許すこと。「滿洲―」。

（**かい-ばう**［海防］（名） 一國の海岸の防禦。うみのふせぎ。――**かん**［海防艦］（名） おもに海岸の防禦にあたる軍艦、速力及石炭の積載量は多からず。又、淺水に利用するため喫水淺く建造せらる。

（**かい-ばう**［解剖］（名） ㊀動物の身體を解きて、其骨格・筋肉・臟腑などの委細をしらぶること、其全身に涉（ワ）るものと局部に限られたるものとあり。（分解）。㊁物事の條理を細かに分ちこれを研究すること。――**じゆつ**［解剖術］（名） 人身を解剖する手術、醫術の一派。

（**がい-はく**［該博］（名） 學問のひろくゆきわたりたること。

（**かい-はさ・む**（まみむむめめ）［搔挾］（他、ま四） はさむの意を強めたる語。

（**かい-はつ**［開發］（名） ㊀開きおこすこと。㊁【教】兒童の教育に、其心意の發達の順序に從ふ方法を擇び、兒童をして自發的に領解して智識をみづから發し開くやうになすこと。ちゆうにふの對。――**しゆぎ**［開發主義］（名） 【教】教育上二大主義の一、即ち、開發を以て教育法の本旨となすもの。

（**かい-ばつ**［皆伐］（名） 全林を採伐し盡すこと。

（**かい-ばつ**［海拔］（名） 【地】陸地又は山嶽の海水平面より高き差異。

†**かい-ば・む**（まみむむめめ）［垣間見］（自、ま四） かきまむ。のぞきみる。

（**かい-はん**［改版］（名） はんぎをほりなほすこと。

（**かい-はん**［解版］（名） 組み上げたる活版を箇々の字にときわくること。

（**がい-はん**［鎧板］（名） 彈丸の洞貫等を防ぐために、物の表面に施したる鐵若しくは鋼の板。

（**かい-ひ**［開扉］（名） ㊀とびらをひらくこと。㊁かいちやう。（開帳）。

†**かい-ひそ・む**（まみむむめめ）［搔潜］（自、ま四） かくれゐる。ひきこもる。

†**かい-ひそ・む**（めめむむるるれれよ）［搔潜］（他、ま下二） 身をひそます。

（**かい-びやく**［開闢］（名） ㊀天地のひらけはじめ。世界のおこりはじめ。㊁佛家にて、儀式の開始をいふ。「法華會の―」。「五壇法の―」。

（**かい-ひん**［海濱］（名） はまべ。うみべ。かいへん。――**しよくぶつ**［海濱植物］（名） 【植】海濱の砂上に生ずる植物、葉は肥厚多肉にして、且多量の鹽分を含み、烈しき潮風又は強き日光に堪ふ、はまばうふう・はまひるがほ等これなり。

（**かい-ぶ**［海部］（名） 織物又は蒔繪などの模樣に、大いなる波の中に、小さき貝などゑがきたるもの。

（**かい-ふう**［海風］（名） ㊀【地】海岸地方にて、晝間に海上より陸上へ吹く風、晝間は陸上熱して海上冷かなる故に起る。㊁海上に吹きある〻風。

（**かい-ふう**［開封］（名） 手紙の封緘を開くこと。又、封緘をせぬ書類。

か-いぶし［蚊燻］（名） 蚊をおひやるために、物をいぶしやくこと。かやりび。（蚊烟）。

（**かい-ぶん**［海盆］（名） 【地】海峽の大なるもの。

（**がい-ぶん**［涯分］（名） 其身相應の程度。

（**かい-へい**［開閉］（名） ひらくととづると。あけたて。

（**かい-へい**［開平］（名） 【數】平方根を求むること。

（**かい-へい**［海兵］（名） 海軍下士卒の稱。――**だん**［海兵團］（名） 各軍港に設置せられて其地の鎭守府に屬し、海軍下士卒の教育・訓練及軍港の守衞を司り、補缺員を統轄する所。

（**かい-へう**［界標］（名） 陸地又は水面の界を表示するための標識（シルシ）。

（**かい-へう**［開票］（名） 投票函を開き投票の結果をとりしらぶること。――**たちあひにん**［開票立會人］（名） 開票に立ち合ひこれを監視する人。

（**かい-へん**［海邊］（名） うみのほとり。うみべ。はまべ。

（**かい-はう**［改封］（名） 土地をうつしあらためらる〻こと。領地を變換せらる〻こと。くにがへ。

か-いぼ・す（さしすすせせ）［搔乾］（他、さ四） 池沼などの水をくみつくす。

（**かい-ほつ**［開發］（名） ㊀かいこん。㊁誤りて、かいはつ。

⌒**かい-ぼり**［搔堀］（名） 堀などの水をかいほすこと。

かい-まき［搔卷］（名） うす綿にせる夜着。どてら。よぎ。（搔卷）。

†**かい-ま-み**［垣間見］（名） 物のあひだなどよりのぞきみること。かいまむこと。（闚覘）。

†**かい-ま・む**（まみむむめめ）［垣間見］（自、ま四） 物のひまよりひそかにうかゞひみる。のぞきみる。

（**かい-みやう**［戒名］（名） 【佛】（い）受戒によりて得たる諱。即ち、得度後の名。（ろ）死者に附くる號。

（**かい-む**［皆無］（名） 物のみなことごとく無きこと。

（**かい-む**［皆無］（副） のこらず。かいくれ。みな。ことごとく。「―見えない」。

（**かい-む**［海霧］（名） 海上にたつ霧。

（**かい-めい**［改名］（名） 名をあらたむること。姓をかふること。（變名）。

（**かい-めい**［解明］（名） ときあかし。

（**かい-めい**［開明］（名） 人智開け文物進歩せること。野蠻の狀態に遠ざかれること。（開化）。

（**かい-めん**［海面］（名） うみのおもて。うみづら。

（**かい-めん**［海綿］（名） 【動】（い）海綿動物の略言。（ろ）俗にいふ海綿は、海綿動物の一なる沐浴海綿の角質の骨骼を曬したるもの、多くはこれを沐浴用に供す。――**どうぶつ**［海綿動物］（名） 【動】下等動物の一、海に產す、種々の形狀あれど、多くは瓶形なる囊狀にして、其一端は他物に固着し、他端に大孔あり、大孔の直下は內腔にして、これより射出する無數の樹枝狀細管ありて、體壁を貫き無數の小孔により外へ開く、此細管は處々に纖毛室あり、其働きによりて、水は小孔より內へ入り大孔より外へ出で、ために有機物を伴ひ來りて營養分となす、體壁は厚くして角質・石灰質若しくは硅質の骨骼を有す、概ね出芽又は分裂によりて增大す。

⌒**かい-もく**［皆目］（副） のこらず。全く。

†**かい-もちひ**［搔餅］（名） 飯にてつくりたるぼた餅。又、そばがきをもいふ。（餺飥餅）。

†**かい-もと**［垣下］（名） 饗宴のとりもちする人。しやうばん。

（**かい-もん**［海門］（名） せと。かいけふ。

（**かい-もん**［開門］（名） 門をひらくこと。

（**かい-もん**［戒文］（名） 【佛】戒の條文。

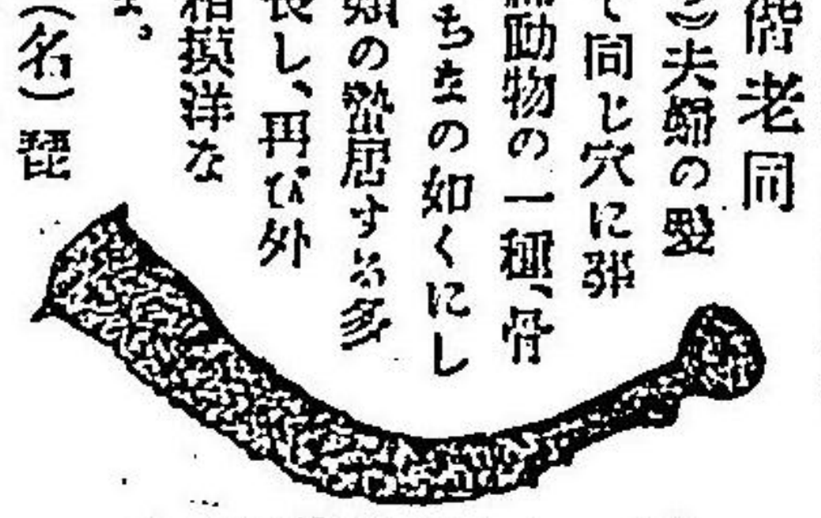
†**かい-や・る**（らりるるれれ）［搔遣］（他、ら四） 強ひて彼方へ押しやる。

（**かい-よう**［海容］（名） 海の如き寬大の心を以て、罪を宥恕すること。（罪を謝するに用ふ）。「御―下されたく候」。

（**かい-よう**［解傭］（名） 「かいこ」（解雇）に同じ。

（**かい-らう**［偕老］（名） 夫婦睦まじくして共に老ゆること。「―のちぎり淺からず」。

（**かい-らう**［海老］（名） 【動】「えび」に同じ。



［かいらうどうけつ（二）

（**かい-らう-どう-けつ**［偕老同穴］（名） ㊀（詩經より出づ）夫婦の契約深く、死してなほ相伴ひて同じ穴に葬らるといふこと。㊁【動】海綿動物の一種、骨骼は硅質にして形狀恰も〈ちまき〉の如くにして美麗なり、中に一二疋蝦類の蟄居する多し、これ其幼時に入りて生長し、再び外に出づる能はざるものか、相模灘などの深底に產す。うみへちま。

かい-らう-び［海老尾］（名） 琵琶又は三味線の絲まきに近き上部の後方へ曲がりて、恰もいせえびの尾のごとくなりたる所の稱。（魁頭）。

かいらぎ［梅華皮］（名） てふざめの皮、刀のつか又はさやを包むに用ふ。

（**かい-らく**［開落］（名） 花などの、ひらくとおつること。

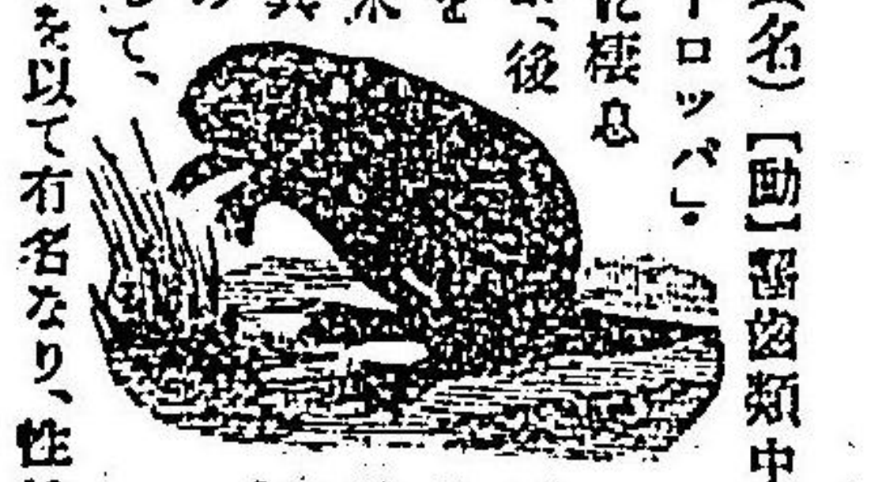
（**かい-らく**［偕樂］（名） 多くの人と共に樂しむこと。

（**かい-らん**［解纜］（名） 船舶のともづなを解きて出帆すること。

（**かい-り**［海里］（名） 海上の距離を測る單位、合衆國にては六〇八〇六「フィート」にして、「イギリス」國にては六〇八〇「フィート」、我國の約十七町に當る。（浬）。

（**かい-り**［解離］（名） ㊀解けはなる〻こと。又、解きはなすこと。㊁【化】物體が狀況の變化により分解し、其狀況の復舊するときは、再び化合する場合に於ける分解をいふ。

（**かい-り**［海狸＝Beaver］（名） 【動】齧齒類中海狸科に屬する哺乳動物、「ヨーロッパ」・北「アメリカ」等の河湖の邊に棲息す、尾は扁平にして鱗を帶ぶ、後趾に蹼（ミヅカキ）あり、足と尾とを以てよく泳ぐ、又、よく大木を倒し、其皮と枝とを食ひ、其幹を組み立て、家の如きものを構造す、皮毛頗る高價にして、又、芳香ある一種の脂を出すを以て有名なり、性怜悧にして群居す。



［かいり］

（**かい-りう**［海流］（名） 【地】海中にて恰も陸上の河の如く一定せる流動系、其主因は風なれど、海上の溫度の相違なども與つて大に力あり、兩極地方より赤道地方へ向ふものを極流といひ、赤道地方より兩極地方へ向ふものを赤道流といふ。

（**かい-りつ**［戒律］（名） 【佛】諸戒と威儀と。――**しゆう**［戒律宗］（名） 【佛】律宗に同じ。

（かい・りふ）［開立］（名）【數】立方根を求むること。

（かい・りやう）［改良］（名）惡き點（エツ上）をあらためてよくすること。改善。――**ばんし**［改良半紙］（名）從來のものに比して、色白く質緻（マコ）かにして薄き半紙。

（がい・りやく）［概略］（名）あらまし。おほよそ。たいがい。

（かいる）［蛙］（名）【動】「かへる」の訛。

（かい・れき）［改曆］（名）こよみのあらたまること。かいねん。新年。（開曆）。

（かいろ）（名）【動】「かへる」の訛。

（かい・ろ）［海路］（名）うみの上の船の行くみち。ふなぢ。ふなみち。うみのみち。うみぢ。航路。

（かい・ろ）［薤露］（名）古昔、支那にて、貴人の柩を挽（ヒ）くとき歌ひし謠（ウタ）。

（がい・ろ）［街路］（名）市街の道路。

（がい・ろ・ゑん）［街路園］（名）街路の交叉點などにつくれる庭園。

（かい・わい）［界隈］（名）あたりきんじよ。

（かい・わう・せい）［海王星］（名）【天】太陽より最も遠き遊星、「フランス」國人「ヴエー」の推算に基き、「ドイツ」國人「ガレ」の發見にかゝるものにして、一個の衛星を有し、太陽よりの平均距離十一億六千里なり、百六十八年九個月を以て太陽を一周す。

（かい・わん）［海灣］（名）いりうみ。わん。

（かい・ゐ）［階位］（名）位階。くらゐ。

（かい・ゐ）［詿違］（名）あやまち。まちがひ。

（かい・ゐん）［海員］（名）船舶に於ける船長以外一切の乘組員の稱。又、海技免狀を有するもの、稱にもいひ、然るときは船長をも含む。――**めいぼ**［海員名簿］（名）遞信大臣が海技免狀を受けんとする者の請求に基き、授與すべきものと認めたる場合に、一定の様式通りに登錄する名簿。

（かいゐん・しき）［開院式］（名）帝國議會の召集後、勅令を以て開會の日を定められ、兩院議員を貴族院に會合せしめて、開會を命ぜらるゝ儀式、多くは天皇親臨して勅語を賜ふ。

（かい・ヲシヤウ）［戒和尚］（名）【佛】戒を授くる和尚。

廿**かう**［上］（名）「かみ」の音便。「―の殿」。（頭）。

（かう）［香］（名）㊀にほひ。かをり。㊁伽羅・沈香・白檀・旃檀等すべてにほひのよきもの。又、種々の香料を集めて練りたるもの。にほひもの。たきもの。（薫物）。㊂「かうあはせ」の略言。

（かう）［更］（名）一夜を五つに分けたる區分の稱、初更は五つ即ち今の八時、二更は四つ即ち今の十時、三更は九つ即ち今の十二時、四更は八つ即ち今の二時、五更は七つ即ち今の四時。

（かう）［講］（名）㊀書物をかうえやくすること。㊁神佛の信者又は賴母子などの組合。「富士―中」。

（かう）［孝］（名）よく父母に從順なること。よく親につかふること。「―をつくす」。（孝行、孝道）。

（かう）［考］（名）㊀かんがへ。㊁或事項の起原・沿革に付きての判定。㊂死にたる父の稱。先考。妣（ヒ）の對。㊃官吏の功課。かうくわ。

（かう）［効］（名）㊀しるし。きゝめ。かうのう。「藥の―」。㊁いさを。てがら。

（かう）［稿］（名）㊀わら。くき。禾莖。㊁さうかう。したがき。

（かう）［項］（名）㊀うなじ。うしろ。㊁或種類の事柄に屬する各箇の事柄の稱。かでう。㊂【數】多項式を組み立つる各箇の單項式。又、分數或は分數式にて、分子若しくは分母。又、二量の比にて各量。又、級數を組み立つる各數。

（かう）［衡］（名）㊀はかりざを。秤杆。㊁重量の標準、我國現今の制度にては貫を基本とす。㊂輕重を平かにすること。はからひ。㊃輕重を爭ふこと。あらそひ。㊄たひらか。平正。㊅てすり。欄杆。㊆よこぎ。横木。「―門の下」。㊇くびき。車軛。㊈冠（カンリ）のかうがい。㊉眉と目との間の稱。「―を揚げ笑ひを含む」。⑪よこ。「合從連―の策」。（衡）。

（かう）［膏］（名）㊀あぶら。㊁かうやく。膏藥。㊂うるほひ。潤澤。㊃くちべに。唇脂。㊄むねのした。心下。「病已に―盲に入る」。

（かう）［鋼］（名）かうてつ。はがね。

（かう）［綱］（名）㊀つな。おほづな。㊁おほぐゝり。おほもと。㊂つら。なみ。行列。㊃【動】動物學上に於ける自然分類の一階級、即ち門を分ちたるものにして、例せば脊椎動物なる門の下に哺乳類又は食肉類なる綱あるが如し。

（かう）［庚］（名）㊀えとの一、かのえ。「―申」。㊁よはひ。年齡。「同―のもの」。㊂みち。道路。

（かう）［交］（名）㊀ゆきゝ。ゆきかよひ。㊁つきあひ。まじはり。よしみ。㊂きりあふこと。交錯。㊃とも。ともどち。「―を重る」。㊄いりかはり。かはりめ。㊅あひだ。「八九月の―」。㊆えり。衣領。

（かう）［亢］（名）㊀二十八宿の一、あみぼし。㊁あやまち。㊂ひでり。旱魃。

（かう）［耕］（名）たがへし。かへさく。「―を廢す」。

（かう）［行］（名）㊀たび。しゆつたつ。「此―志必ず成らん」。㊁漢詩の一體、樂府より轉化したるもの。「白樂天の琵琶―」。

かう［斯］（副）「かく」の音便。

（かう）［校］（名）㊀學校の略言。「―を閉づ」。㊁校正の略言。「初―」。「再―」。

（かう）［郊］（名）㊀古昔、地方の區域の名、郡をわかちたるもの、「對島郡羽島―」。㊁ゐなか。さと。「―に入っては、―に從ふ」。

（がう）［毫］（名）㊀毛。㊁ふで。「―をふるふ」。㊂尺度又は秤目にて、一釐の十分の一の稱。㊃極めて微少なること。

（がう）［壕］（名）ほり。みぞ。

（がう）［號］（名）㊀となへ。名稱。名目。㊁おくりな。諡名。㊂いひつけ。まうしわたし。みことのり。「大―煥發」。㊃あひづ。ふてう。符號。㊄名又は字（アザナ）の外に附したる稱呼。「―は山陽」。㊅番を追ひて附したる標記。しるし。㊆物の大小長短の順序。「一―活字」。「二―活字」。㊇船舶の稱呼に用ふる語。「高陞―撃沈」。

（がう）［剛］（名）つよきこと。たけきこと。「―のもの」。（粲、強）。

（がう・あく）［強惡］（名）甚しくあしきこと。まうあく。きようあく。「―の人」。

（かう・あつ）［高壓］（名）高度の壓力。――**ぶ**［高壓部］【地】高氣壓の部分。

かう・あはせ［香合］（名）一種の遊戲、種々の香料をたき、其にほひを嗅（カ）ぎて、香の種類を考へあつる遊戲。

（かう・あん）［考案］（名）かんがへ。あんじ。くふう。

（かう・い）［更衣］（名）㊀ころもがへ。㊁女御の次ぎの女官。

（かう・いう）［交友］（名）ともだち。ほういう。（朋友）。

（かう・いう）［交遊］（名）㊀まじはり。つきあひ。㊁とも。ほういう。

（かう・いう）［孝友］（名）親に孝行にして兄弟と仲よきこと。

（かう・いう）［校友］（名）㊀同學の友。㊁學校が卒業生に對して與ふる一の稱呼。――**くわい**［校友會］（名）校友の團體又は集會。

（がう・いう）［豪遊］（名）さかんなる遊樂。

（がう・いん）［豪飮］（名）大酒すること。（鯨飮）。

（がう・いん）［強淫］（名）「がうかん」（強姦）に同じ。

（かう・う）［香芋］（名）【植】ナンキンまめ。

（かう・う）［膏雨］（名）しと〳〵とよく物をうるほす雨。「[illegible]たる―」。

（がう・う）［豪雨］（名）俄かに起る大雨、時としては雹をまじふることあり。

（かう・うん）［耕耘］（名）たがやしくさぎること。又、農作。

（かう・うん）［幸運］（名）さいはいなるうんめい。よきしあはせ。（好運）。――**じ**［幸運兒］（名）しあはせよき人。

（かう・えき）［交易］（名）物品と物品とをかへあふこと。我有餘の物品を與へて彼より我が不足の物品を得ること。財の交換。

（かう・えつ）［校閱］（名）書籍文書などのあやまりをしらぶること。しらべみすること。

（かう・えつ）［哽咽］（名）むせびくるしむこと。又、むせびなくこと。

（かう・えん）［講筵］（名）かうしやくをする席。

（がう・おく）［剛臆］（名）こゝろのたしかなることおくびやうなること。「―を試みる」。（勇怯）。

（かう・か）［降嫁］（名）皇女又は王女などの自家より位置低き人に嫁（トツ）ぎたまふこと。

（かう・か）［耕稼］（名）地をたがやし種をまくこと。又、農事。

（かう・か）［高價］（名）ねだんたかきこと。かうぢき。

（かう・が）［高雅］（名）けだかくみやびやかなること。かうしやう。

（がう・か）［豪家］（名）富みたる家。勢力ある家。ふか。ぶげんしや。

（がう・が）［聱牙］（名）㊀齊一ならざること。㊁文章のむづかしく解し難きこと。㊂強硬にして、人の言を聞き入れぬこと。

（かう・かい）［更改］（名）あらためかふること。以前の狀態を變ずること。

（かう・かい）［航海］（名）船舶にのりて海をわたること。船舶によりて目的地に向ふこと。船舶にて諸港の間を往復すること。（渡海）。

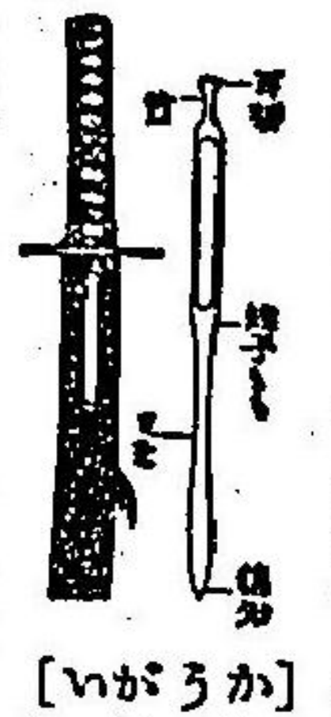
（かう・かい）［沆瀣］（名）海の氣。浪の氣。又、北方夜半の氣。

（かう・かい）［港界］（名）港の限界。

（かう・がい）［梗概］（名）あらまし。たいりやく。

（かう・がい）［慷慨］（名）意氣ふるひおこりてなげきかなしむこと。――**か**［慷慨家］（名）㊀國事又は世事を慷慨して奔走する人。㊁よく物事に慷慨する性質の人。

かう・がい［笄］（名）（かみかきの義）㊀古昔、男女ともに髮を掻き上ぐるに用ひし具。㊁後世、婦人のかみかざりの一種、金銀・瑇瑁又は蒔繪などにて造り、髷の間に横にさすもの。㊂刀のさやに差しこむ篦（ヘラ）に似たるもの。㊃冠に横にさす細長きもの。――**ぐる**［笄曲］（名）明曆の前後に行はれたる髮の結（ユ）ひ方、かうがいの周りに毛を卷き付けしもの。


［かうがい］

（かうかい・しや）［航海者］（名）航海を業とする人。（多くは、乘組員の上位にあるものをいふ）。

（かうかい・づはふ）［航海圖法］（名）「えんちゆうとうえいはう」（圓柱投影法）に同じ。

（かうかい・につし）［航海日誌］（名）船舶に備へ付けて、其航行中に起れる一切の事故を記載する日誌、航海者の最も要用とするもの。

かうがい・びる［笄蛭］（名）【動】渦蟲類中岐腸類に屬する蛔形動物、長形にして黑色なり、前頭

は拉木（モクシユ）の形をなし、これを以て物を脳踏す、恰もからがいをさしたるやうに見ゆ、我國諸所に産す、南方には、淡黄色にして暗褐色の縱線あるものもあり。

(からかい-へんかう)コウカイヘンカウ［航海變更］(名)【法】航海の中途にて、到達の目的地を變更すると、例せば、長崎より香港（ホンコン）へ向つて出帆し、中途にて變更し、上海（シヤンハイ）に到達するが如し。

(からかい-れき)コウカイレキ［航海曆］(名) 航海に必要なる天文事項を記載せるもの、「イギリス」國「グリニッチ」天文臺にて發行せるもの最も精しく、毎三年前に發行す。

(から-から)コウコウ［皓皓］(名) 雪などのつもりて白きさまにいふ語。

(から-から)コウコウ［皎皎］(名) 月の光などの白く見えわたるさまにいふ語、

(から-から)コウコウ［杲杲］(名) 日の光のあきらかなるさまにいふ語。

(から-から)コウコウ［灝灝］(名) 水面などのひろききさまにいふ語。

(から-から)コウコウ［耿耿］(名) ㊀小さき光の明かなるさまにいふ語。「——たる殘燈」。㊁まじ〳〵として、眠り得ざるさまにいふ語。

(から-から)コウコウ［香香］(名) かうのもの。つけもの。

(から-から)コウコウ［更行］(名) 女のそんづき。

(から-かう)コウコウ［航行］(名) 船舶にて水上をゆくと。

(から-かう)コウコウ［抗衡］(名) (「くびき」をあらそふ義) 相對抗して下らざるを。はりあふと。

(から-かう)コウコウ［孝行］(名) 親によく事ふると。

(から-かう)コウコウ［斯斯］(副) 「かく〳〵」の音便。

(がう-がう)ゴウゴウ［囂囂］(名、副) 聲多きさま又はかしましきさまにいふ語。

‡**から-がう-し**コウゴウシ（しく、しし、しき、しけれ）［神神］(形、二) (「神神し」の音便) ㊀ものさびて何となく尊く感ぜらる。神さびてあり。㊁たふとくしておごそかなり。いとけだかし。

(から-かうてん)コウコウテン［降交點］(名)【天】交點の一、「遊星」衛星又は彗星が、北より南に向つて通過するとき、黄道面を通過する點。

(から-かく)コウカク［磽确］(名) 地味豐沃ならざると。又、其地。いしぢ。やせち。(墝埆)。

(から-がく)コウガク［講學］(名) 學問をとくと。又、學問をきはむると。

から-かけコウカケ［首懸］(名) 馬具の一、馬の頭上に横に掛くる革。

カウカシアンコウカシアン［Caucasians］(名) 世界三大人種の一、骨格最も優秀なるものにして、皮膚白く紅色の毛髮は柔軟にして卷曲し、額廣く身高し、「ヨーロッパ」一體の人民は多くは此種に屬す。(高加索人種)。

(からか-てつだう)コウカテツダウ［高架鐵道］(名) 地上に柱礎を建設し、其上に架設する鐵道、多くは市街などの如き人家多くして地域狹き所に架設す。

(から-がふ)コウガフ［香合］(名) 香を入るゝ器。かうばこ。

(から-がふ)コウガフ［交合］(名) 男女の交接。ばうぶ。まじはり。

‡**からが-ふ**コウガフ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）［考］(他、は下二) 「かんがふ」の音便。

(から-かぶつ)コウカブツ［好下物］(名) よき酒の肴。

(から-かん)コウカン［浩瀚］(名) 廣大なると。多きと。

(から-がん)コウガン［抗顏］(名) ㊀世間に顏だしすると、人に顏をあはすると。㊁つれなきと。強顏。

(がう-かん)ゴウカン［強姦］(名) 暴行脅迫其他不法の手段を用ひて、婦人を姦淫すると。——ざい［強姦罪］(名)【法】強姦の犯罪、十二歳以下の幼女を姦淫したるものも、また此罪に準ぜらる、此犯罪は親告罪なり。

(がう-がん)ゴウガン［傲岸］(名) 高ぶりて擧動のかど〳〵しきと。

(から-がん-じ)コウガンジ［仰願寺］(名) 「かうぐわんじ」の訛。

(からかん-しんけい)コウカンシンケイ［交感神經］(名) 高等動物の體にありて、おもに胸腔腹腔の諸內臟及血管に分布せる一種獨立の神經系、人類のは鏈狀に連れる二十四對の神經球より成り、脊柱の兩側に沿（ソ）ひて縱行し、尾閭骨部に於て一個の神經球に合す、全體灰白質及白質の混合より成り、一端は腦神經及脊髓神經と連絡す。

(から-き)コウキ［綱紀］(名) 物事のおほもと。又、國家のまつりごと。

(から-き)コウキ［高貴］(名) ㊀身分たかく尊きと、「——なる生れ」。㊁あたひ高きと。

(から-き)コウキ［香氣］(名) にほひ。かをり。

(から-き)コウキ［降旗］(名) 降參のときに立つる旗。

(から-き)コウキ［坑氣］(名) 「メタン」と空氣との混合物、石炭坑中に發生し、爆發し易し。

(から-き)コウキ［耕器］(名) 土壤を打ち起すに用ふる農具、即ち、すき・くは等の類。

(から-ぎ)コウギ［講義］(名) 文書又は學說の意義を講じあきらむると。かうしやく。

(から-ぎ)コウギ［廣義］(名) 範圍廣く解釋したる意義。狹義の對。

(から-ぎ)コウギ［巷議］(名) ちまたのぎろん。せけんのうはさ。(街談)。

(から-ぎ)コウギ［抗議］(名) 反對の意見を主張すると。

(から-ぎ)コウギ［高誼］(名) なみ〳〵ならぬ恩誼。

(から-ぎ)コウギ［交誼］(名) かうさいのよしみ。したしみ。

(がう-き)ゴウキ［剛毅］(名) 意志の確乎として物事におぢひるまざると。精神の威力の健（スコ）かなると。

(がう-き)ゴウキ［豪氣］(名) ㊀心たけく確乎としたると。㊁意氣の壯快なると。

(がう-ぎ)ゴウギ(名) 勢はげしくりっぱなると。(東京地方の俚語)。

(からき-あつ)コウキアツ［高氣壓］(名) 空氣柱の平均の重さ、即ち七六〇「ミリメートル」の水銀柱の重さより、氣壓の度が大なると、大氣は高氣壓より低氣壓に向つて流動するものなり、氣壓の高低の變化は、溫度と水蒸氣とに主因すれど、概して高氣壓は緯度三十度の邊にあるものとす。低氣壓の對。

(から-きう)コウキウ［好逑］(名) よきつれあひ。よきつま。

(から-きう)コウキウ［購求］(名) あがなひもとむると。

(から-きう)コウキウ［講究］(名) 講じきはむると。けんきう。(攻究)。

(から-き-しん)コウキシン［好奇心］(名) つねに異なりたる事を好むこゝろ。ものずきのこゝろ。

(から-きふ)コウキフ［高級］(名) 階級の高きと、下級の對。「——參謀」。

(がう-きふ)ゴウキフ［號泣］(名) おほごゑをたてゝ泣くと。

(がう-きゆう)ゴウキユウ［強弓］(名) ㊀歩（フ）厚く力のつよき弓、重さ四十三貫の物を、其弓に掛け、僅かに撓（ユタ）む程度のものといへり。㊁強弓をひき得ると。

(から-きよ)コウキヨ［抗拒］(名) てむかひしてさゝふると。ふせぐと。

(から-きよ)コウキヨ［考據］(名) 考へをつくべきよりどころ。てがゝり。

(がう-きよ)ゴウキヨ［傲倨］(名) おごりたかぶると。

(から-ぎよく)コウギヨク［鋼玉］(名)【鑛】大理石又は花崗岩等の中に産する鑛物、硬度高く酸類に侵されず、分つて寶石種・尋常種及砂種の三とす、寶石種は藍・紅・黄・紫等にして多くは透明なり、尋常種は淡藍若しくは黑色にして透明ならず、砂種は粒子をなし磨き砂に用ふ。——せき［鋼玉石］(名)【鑛】前條に同じ。

(からき-るゐ)コウキルヰ［硬鰭類］(名)【動】硬骨類の一、其脊鰭完全なるか或は其一部分硬（カタ）くして關節なき鰭骨より成れるもの、たひ・すゞき等これなり。

(から-きん)コウキン［高金］(名) 大なる金高。たいきん。

(から-く)コウク［康衢］(名) おほどほり。かうくわん。

(から-ぐ)コウグ［香具］(名) 匂（ニホ）ひもの又はたきものなどの材料、即ち、白檀・沈香・丁子・伽羅・麝香などの總名。——うり［香具賣］(名) 香具を賣りあるく人。——し［香具師］(名) ㊀香具を賣り又は香具をつくる人。㊁やし。野師。——や［香具屋］(名) かうぐをうり又はつくる人。(香藥舖)。

(から-くわ)コウクワ［硬貨］(名) 其原質が金屬なる貨幣。軟貨の對。

(から-くわ)コウクワ［効果］(名) ㊀できあがり。しあげ。㊁きゝめ。しるし。㊂てがら。いさを。

(から-くわ)コウクワ［考課］(名) 官吏などの事務の効果。又、其効果のとりしらべ。

(から-くわ)コウクワ［硬化］(名) ㊀かたき物體となると。㊁弱き意見を捨てゝ、強硬の意見をとると。

(から-くわ)コウクワ［行貨］(名) わいろ。まひなひ。

(がう-くわ)ゴウクワ［豪華］(名) おごり。ぜいたく。

(から-ぐわい)コウグワイ［郊外］(名) まちはづれ。のべ。

(がう-ぐわい)ゴウグワイ［號外］(名) ㊀新聞・雜誌などが、定まりたる號數のほか、臨時に發行するすりもの。㊁轉じて、定まりたる數の外のもの〻稱。

(から-くわい)コウクワイ［狡獪］(名) わるがしこきと。ずるずれしたると。

(から-くわつ)コウクワツ［狡猾］(名) ㊀怜悧なると。㊁惡才あると。わるするどきと。㊂りんしよく。けち。

(から-くわん)コウクワン［高官］(名) たかき官職。

(から-くわん)コウクワン［交換］(名) ㊀とりかへ。ひきかへ。とりかへっこ。(更換)。㊁【經】自己に不必要若しくは必要少き財物を他人に與へ、其報酬として、他人より自己に必要若しくは必要多き財物を得ると、方法・時間及地域によりてこれを三種に分つ、方法に關するものは、物と物との交換と貨幣の媒介による交換となり、時間に關するものは、即時互に交換を了するものと他日に渡りて交換を了するものとなり、地域に關するものは、內國貿易と外國貿易となり。(交易)。㊂【法】金錢の所有權にあらざる財產權の移轉を目的とする契約、賣買の規定を適用すべきものとす。

(から-くわん)コウクワン［交驩］(名) とも〴〵にたのしむと、(交歡)。

(から-ぐわん)コウグワン［睾丸］(名) 總て雄性動物の有する器官にして、雄性元素即ち精子の製出作用を營むもの、其數は動物の種類によりて一定せず、高等動物にては一對、下等動物に至つては多數なり。きんたま。

(からくわん-かかく)コウクワンカカク［交換價格］(名)【經】社會一般の人を標準として定めたる價格、酒一升と米三升を交換せらるゝとせば、米三升は、酒一升の交換價格を有し、酒一升は、米三升の交換價格を有するものなり。有用價格の對。

(から-ぐわん-じ)コウグワンジ［仰願寺］(名) 「かうぐわんじらふそく」の略言。——らふそく［仰願寺蠟燭］(名) 細小なる一種の蠟燭、古昔、江戸山谷の仰願寺にて、念佛を修せしとき、大蠟燭は不便な

りしを以て、小さきものを用ひしより此名あり。

（かう‐ぐん）コウ［行軍］（名）軍隊が、列を整へて旅行又は進行すること。

（かう‐け）コウ［高家］（名）㊀王朝時代に、身分の高き人。（貴冑）。㊁德川時代に、幕府の儀式をつかさどりし職名の家柄。

（かう‐げ）コウ［高下］（名）㊀たかきと低きと。㊁まされるとおとれると。いうれつ。㊂あがりさがり。あげさげ。

（かう‐げ）コウ［香華］（名）佛などに奉る香と花と。かうはな。

（がう‐け）ゴウ［豪家］（名）「がうか」に同じ。

（かう‐けい）コウ［行徑］（名）㊀みち。こみち。㊁行ふ道。

（かう‐けち）コウ［纐纈］（名）染め模樣の名、くゝり染めにしたるもの、いたじめしぼりぞめの類。（夾纈）。

（かう‐けつ）コウ［膏血］（名）（あぶらとちとの義）人民の身心を勞して得たる收益又は資産にいふ語。「民の—を竭くす」。—をしぼる［絞膏血］苛税を人民に課するにいふ。

（かう‐けつ）コウ［高潔］（名）けだかくしてけがれなきこと。高尙にしていさぎよきこと。

（かう‐けつ）コウ［皎潔］（名）けがれなきこと。極めていさぎよきこと。

（がう‐けつ）ゴウ［豪傑］（名）智力・勇氣などの凡人にすぐれたる人。えいけつ。（英俊）。

（がう‐けふ）ゴウキョウ［豪俠］（名）こゝろたけくをとこぎあること。物事はでやかにしてをとこぎあること。

（かう‐げゐん）コウ［香華院］（名）だんなでら。

（かう‐げん）コウ［効驗］（名）しるし。きゝめ。かうのう。「藥の—」。

（かう‐げん）コウ［高言］（名）くちはゞひろきことば。たかぶりたるいひぶん。たいげん。「—を吐く」。

（かう‐げん）コウ［巧言］（名）たくみに言ひなすこと。

うまい口まへ。「—令色」。

（かう‐げん）コウ［郊原］（名）のべ。はら。のはら。「—十里」。（郊野）。

（かう‐げん）コウ［高原］（名）【地】平原の一、即ち、兩山脈に圍まれたる高地又は火山の噴出物の堆積より成りたる高地。

（かう‐こ）コウ［江湖］（名）㊀江水と湖水と。いりえとみづうみと。㊁世の中。世上。「—の諸彥」。

（かう‐こ）コウ［考古］（名）古代の遺物によりて、古代の物事を研究すること。—がく［考古學］（名）古代の物事を研究する科學。

（かう‐こ）コウ［好古］（名）古昔の物事に關する事を好むこと。

（かう‐こ）コウ［香壺］（名）香を入れておくつぼ。かうがふ。

（かう‐ご）コウ［向後］（名）いまよりのち。いご。こんご。このゝち。いらい。

（かう‐ご）コウ［行伍］（名）㊀兵隊の最下級の組合。くみ。「將帥—より出づ」。㊁隊列。ならび。

（かう‐ご）コウ［交互］（名）たがひちがひ。

（がう‐ご）ゴウ［豪語］（名）意氣盛んなることば。

かう‐ごいしコウ［神籠石］（名）山頂の宏大なる區域を圍らしたる一亘の石垣、九州・中國に散在し、古代祭祀を行ひし遺跡なりといふ。

（かう‐こう）コウ［港口］（名）港の船舶の出入口。

（かう‐こうがい）コウ［硬口蓋］（名）口蓋の硬（カタ）き部分。

（かう‐こく）コウ［抗告］（名）【法】訴訟手續に關し、裁判所がなしたる決定に對して、其直接上級裁判所に、不服の上訴をなすこと。

（がう‐こく）ゴウ［號哭］（名）おほごゑをたて、なげきかなしむこと。がうきふ。

（かう‐ごけいさん）コウ［交互計算］（名）商人間又は商人と商人にあらざるものとの間の取引にて、一定の期限間の債權・債務の總額につき、相殺をなして、其殘額の支拂ひをなすこと。

（かう‐こつ）コウ［硬骨］（名）㊀骨骼の硬（カタ）きこと。㊁妄に自家の主張又は主義を曲げざること。剛強にして人に屈せざること。—だんし［硬骨男子］（名）意志剛強なる男子。—るゐ［硬骨類］（名）【動】脊椎動物中の一類の稱、魚類の大部分を占むるものにして、骨骼は硬骨より成り、鰓は櫛齒狀をなして鰓蓋あり、更に分ちて、硬鱗類・軟鱗類・喉鰾類・圓鱗類・總鰓類とす。

（かう‐ざ）コウ［高座］（名）講釋・說法など、聽衆に對して物事を說く人のために設けたる一段高き席。

（かう‐ざ）コウ［講座］（名）㊀講義の座位。㊁講義すべき學科に就きて、特に定めたる教授事務の受持。「商法の—」。—きふ［講座給］（名）講座の受持に對して給與する俸給。

（かう‐さい）コウ［交際］（名）つきあひ。まじはり。—か［交際家］（名）交際に巧みなる人。—くわん［交際官］（名）國家と國家との交際の局にあたる官吏。外交官。—こく［交際國］（名）互に通商交際する國。—ひ［交際費］（名）㊀つきあひに要する費用。㊁職務上交際を要する特種の官吏に對し、官より給與する交際の費用。

（かう‐ざい）コウ［絞罪］（名）死刑の一種、首をしめ命を絕つこと。

（かう‐ざい）コウ［好在］（名）無事にてくらすこと。

（かう‐さう）コウソウ［窖倉］（名）土を掘りて物をいれおく所。あなぐら。

（かう‐さう）コウソウ［高燥］（名）場所高く濕氣少きこと。又、其場所。

（かう‐さう）コウソウ［顥蒼］（名）おほぞら。そら。

（かう‐さう）コウソウ［伉髒］（名）剛直なること、妄に人に屈下せざること。

（かう‐さう）コウソウ［行裝］（名）出立の用意。たびしたく。

（かう‐さう）コウソウ［抗爭］（名）あらそひ。はりあひ。

（がう‐さう）ゴウソウ［豪壯］（名）㊀氣象の強く盛んなること。㊁物事のはなやかにして勢盛んなること。

（かう‐さく）コウ［交錯］（名）かれこれ入りあふこと。さくそう。

（かう‐さく）コウ［高作］（名）人の詩文の敬稱。御作。

（かう‐さく）コウ［耕作］（名）田畑の土をすきかへして、穀菜を作ること。又、農事。—げんかいち［耕作限界地］（名）【經】最も生産力少き劣等なる土地、これを耕作すとも、其生産額は、生産費と等しくして殘餘なきもの。—のう［耕作農］（名）穀物を作ることを專業とする農。

卄かう‐ざくコウ［警策］（名）㊀一篇中の主眼。㊁詩文の秀逸なること。

（かう‐さつ）コウ［高札］（名）㊀古昔、町中に高くかゝげたる制札。たかふだ。㊁入札の中最も價を高くつくること。たかふだ。「—におとす」。

（かう‐さつ）コウ［高察］（名）他人の推察の敬稱。御察し。

（かう‐さつ）コウ［考察］（名）思想をはたらかして、物事をきはむること。かんがへえらぶること。

かう‐さま（コウ）［斯樣］（名）かくあるさま。

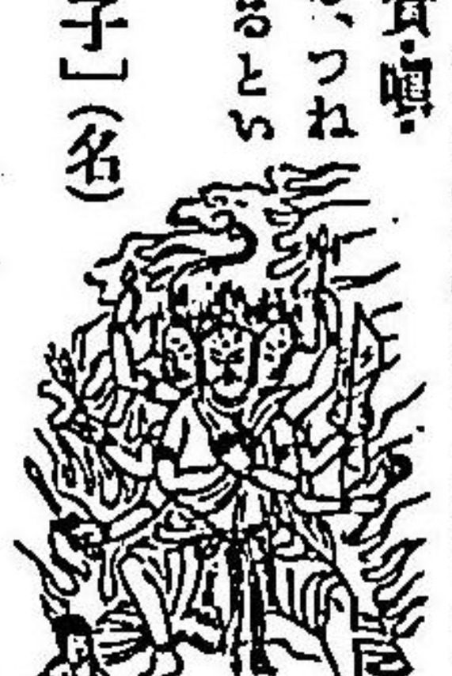
がう‐さむらひゴウ［鄉侍］（名）㊀「がうし」（鄉士）に同じ。㊁武骨なるゐなか者。ざいがうもの。

（かう‐さん）コウ［降參］（名）㊀たゝかひに負けて、敵にくだること。かうふく。（降服）。㊁すべて物事に負けて、閉口すること。

（かう‐ざん）コウ［高山］（名）たかき山。—しよくぶつ［高山植物］（名）【植】高山に生ずる植物、

其分布の狀態は、山の高低位置等によりて、多少異なれど、通常これを山顚帶・喬木帶・灌木帶・草木帶・地衣帶の五帶に分つ。

（がう‐さんぜ）ゴウ［降三世］（名）【佛】明王の一、三面八手にして、貪・瞋・癡の三毒を制し、つねに東方をまもるといふ。「東方、—」。



［がうさんぜ］

（かう‐し）コウ［孝子］（名）孝行の子。

（かう‐し）コウ［講師］（名）㊀學術の講義をなす人。㊁大學などにて、本官に就かず囑託を受けて教授する人。㊂歌合せなどのときに、歌をよみあぐる人。㊃古昔、諸國の國分寺にありて、佛經の講義をなし、僧官。

（かう‐し）コウ［高士］（名）㊀志高く節をまもりて、流俗にこびぬ人。㊁隱君子。

（かう‐し）コウ［考試］（名）學生又は進士（支那にて）若しくは志願者に對し、問題を擧げて、其學力資格を試み、採否又は及落を判すること。しけん。（試驗）。

（かう‐し）コウ［考思］（名）かんがへ。しあん。

（かう‐し）コウ［嚆矢］（名）㊀かぶらや。㊁支那の古昔に、戰爭の開始のしるしに、かぶらやを射掛けしより、すべて物事の開始たるものをいふ語。

（かう‐し）コウ［更始］（名）あらためはじむること。あらたまりはじまること。

（かう‐し）コウ［行使］（名）つかふこと。用ふること。

（かう‐し）コウ［格子］（名）（格（カク）子の音便）㊀細き木を縱横に組みあはせ、間をすかして作りたる建具、くみがうし・つりがうし・だいがうし等あり。㊁女郎が格子の內に店を張れるより、女郎屋の稱

にいふ。「小—遊び」。—ど［格子戶］（名）格子につくりある戶。—づくり［格子造］（名）表にかうしを設くること。又、其家。

（かう‐し）コウ［行尸］（名）（あるく尸（シカバネ）の義）無能の人をあざけりていふ語。「—走肉」。

（かう‐じ）コウ［柑子］（名）（「かんし」の音便）㊀【植】「みかん」の古名。㊁「かうじみかん」の略言。㊂黃と赤とを殆んど同分量に合はせたる色。だいだいいろ。—いろ［柑子色］（名）「かうじ」㊂に同じ。だいだいいろ。

（かう‐じ）コウ［好事］（名）㊀よろこばしきこと。めでたき事がら。「—魔多し」。㊁よき行ひ。「—門を出でず」。㊂ものずき。—しや［好事者］（名）ものずきの人。かうずか。

（かう‐じ）コウ［香餌］（名）㊀にほひ好き餌（エ）。「—の下、必ず死魚あり」。㊁人に啗（クラ）はす好利益。

卄かう‐じコウ［勘事］（名）「かんじ」の音便。勘當。

（がう‐し）ゴウ［鄉士］（名）村落に住居する武士、農を營むさむらひ。がうざむらひ。

かう‐じきコウ［香敷］（名）炭火の上に置き、其上にて香をたく器、雲母の薄片などをもてつくる。ひきき。ぎんえふ。（銀葉）。

かう‐じくりげコウ［柑子栗毛］（名）馬の毛色、栗毛にやゝ柑子色を帶びたるもの。

（かう‐しつ）コウ［膠漆］（名）㊀にかはとうるしと。㊁膠と漆とをもてつけたるやうに、極めて親密なること。「—の交」。

（かう‐しつ‐せい）コウ［向日性］（名）【植】植物の枝葉の太陽の光線の來る方に向つて成長する性質。

（かう‐じ‐はうていしき）コウジホウテイシキ［高次方程式］（名）【數】二次より高き次數の方程式の總稱。

(かう-しふ（コウシフ）[講習](名) 講じならふこと。――くわい[講習會](名) 或物事を講習するために、設立したる會。

かうじ-みかん（コウ）[柑子蜜柑](名) [植] みかんの一種、葉は一個の小葉より成り、花は白色にして柄を有し、果實は黄色にして皮薄く酸味多し、其皮は藥用又は香料に供せらる。たちばな。はなたちばな。(包橘、黄柑)。

(かう-しや（コウ）[膠沙](名) 船が沙地にのりかゝること。

(かう-しや（コウ）[巧者](名) たくみなること。上手。

(がう-しや（ゴウ）[豪奢](名) はなはだしき奢りをつくすこと。

(がう-しや（ゴウ）[鄕社](名) 神社の格、府縣社の下、村社の上にして、數個村の鎭守の社をいふ。

(かう-しやう（コウシヤウ）[高尙](名) ㊀程度高きこと。「―なる學科」。㊁尊敬の情を以て仰視せらるゝ性質。卑俗ならざる狀態。けだかさ。

(かう-しやう（コウシヤウ）[翺翔](名) ㊀鳥の翼を張り展(ノ)べて空をかけること。㊁逍遙して樂しむこと。

(かう-しやう（コウシヤウ）[好尙](名) ㊀このみ。のぞみ。㊁はやり。流行。

(かう-しやう（コウシヤウ）[行商](名) 貨物を賣りあるくこと。又、其商人。たびあきんど。

(かう-じやう（コウジヤウ）[綱常](名) 人生の履行せざるべからざる道義。三綱五常。

(かう-じやう（コウジヤウ）[交情](名) 交際のよしみ。したしみ。

(かう-じやう（コウジヤウ）[向上](名) 上位に向つてのぼりすゝむこと。進步。――しゆぎ[向上主義](名) 人生を現實神聖なるものと觀じ、進步を以て人生の道德となすこと。

(がう-しやう（ゴウシヤウ）[豪商](名) 勢盛んなる商人。財產多きあきうど。

(がう-じやう（ゴウジヤウ）[强情](名) 心のかたくななること。意地をはりとほす性質。がまん。

(かう-しやく（コウ）[講釋](名) ㊀釋(ト)きわくること。せつめい。かうぎ。㊁昔時、公衆に對して、源平盛衰記・太平記等の軍書を面白く讀み聞かせしこと。今時は、軍書のみに限らず、傳記・小說又は人情話などをも、平易に面白く說くことにいふ。ぐんだん。かうだん。――し[講釋師](名) 席亭にて、軍書又は傳記・小說などの講釋を業とする人。かうだんし。

(かう-しゆ（コウ）[絞首](名) ㊀首をしめてころすこと。㊁[法] 生命刑の一、重罪者に科するもの。――だい（コウ）[絞首臺](名) 罪人を絞首に處する臺。

(かう-じゆ（コウ）[香薷](名) [植]「いぬえ」に同じ。

(がう-しゆ（ゴウ）[强酒](名) おほく酒を飮むこと。たいしゆ。

(かう-しゆん（コウ）[交詢](名) 交際の便利をよくし、互に親密ならしむること。

(かう-じゆん（コウ）[孝順](名) 親に孝行にして其意に逆はぬこと。又、親に孝行にして兄姉に從順なること。

(かう-しよ（コウ）[校書](名) (支那の唐朝に薛濤といへる文筆に秀でし才妓ありしが、韋皐といへるものこれを召して、校書としたりといふ故事に出づ)「げいしや」の異稱。(歌妓)。

(かう-しよう（コウ）[考證](名) 古代の物事を說くに、證據の詮索を要とすること。――がく[考證學](名) 支那淸朝に至りて大に起りし學、古書を說くに證據の詮索を要とするもの。

(かう-しよう-ざん（コウ）[高勝山](名) かぶとの一種、鉢のわきをつぶし山を高くして、人の頭と同じ形にし、てっぺんの巾をせまくしたるもの

かうしよう-の-くわん（コウ）[高勝鐶](名) 兜のうしろにある鐶。

(かう-しよく（コウ）[好色](名) ㊀うつくしき色。美婦人。㊁いろごのみ。

かうしよく-ぼん（コウ）[好色本](名) 元祿頃に行はれし小說本、情事を主題としたる短篇小說を集めたるもの。

(かう-じる（コウ）[illegible](自、さ上二) 增長す。たかぶる。

(かう-しん（コウ）[庚申](名) ㊀えとの一。かのえさる。㊁[佛]「しやうめんこんがう」に同じ。

(かう-しん（コウ）[孝心](名) 孝行のこゝろ。

(かう-しん（コウ）[幸臣](名) 氣に入りのけらい。おきにいり。(寵臣)。

(かう-しん（コウ）[更新](名) あらたまること。又、あらたむること。

(かう-しん（コウ）[亢進](名) たかぶりすゝむこと。「神氣―」。(昂進)。

(かう-じん（コウ）[幸甚](名) 仕合せなること。ありがたきこと。(感謝するときに用ふ)。「高察を賜はらば―」。

(かう-じん（コウ）[好人](名) 心根よき人。

(かう-じん（コウ）[佼人](名) みめよき人。

(かう-じん（コウ）[行人](名) ㊀路行く人。㊁たびびと。旅人。㊂謁を行ふ者。とりつぎにん。

(がう-しん-かう（ゴウ）[降眞香](名) 一種の香料。

(かう-しん-だう（コウ）[庚申堂](名) 庚申を祀(マツ)りてある堂。

かうしん-づか（コウ）[庚申塚](名) 道邊(ミチベリ)に庚申を祀(マツ)りてある塚。

かうしん-ばら（コウ）[庚申薔薇](名) [植] ばらの一種、葉は通常三個乃至五個の平滑にして光澤ある小葉より成り、花は紅色・白色等にして美麗なり、隔月卽ち庚申ある月に、咲くより名づく、觀賞用として栽培せらる。いばらぼたん。(長春花)。

(かう-じん-ぶつ（コウ）[好人物](名) 心根よき人。あくぎなき人。

かうじん-まち（コウ）[庚申待](名) 庚申の夜、三尸の害を恐れて徹夜すること、その夜佛家にては庚申を祭り、神道にては猿田彥を祭る。

かう-す（コウ）（せ、し、す、する、すれ、せよ）[抗](他、さ變) ㊀はりあふ。あらそふ。㊁對す。むかふ。

かう-す（コウ）（せ、し、す、する、すれ、せよ）[航](自、さ變) ふねにて水上を渡る。

(かう-ず（コウ）[好事](名) 奇異なる物事に、殊に深く心を寄すること。ものずき。――か[好事家](名) ものずきのひと。

かう-ず（コウ）（ぜ、じ、ず、ずる、ずれ、ぜよ）[講](他、さ變) ㊀文書の意味を說く。㊁歌會などにて、和歌のよみあげをなす。㊂和解す。たひらぐ。「和を―」。(媾)。㊃諭告す。つぐ。㊄練習す。ならはす。「武を―」。㊅討究す。しらぶ。「道を―」。㊆謀議す。はかる。「事を―」。

がう-す（ゴウ）（せ、し、す、する、すれ、せよ）[號](自、さ變) ㊀いひたつ。いひふらす。「八十萬と―」。㊁號としてとなふ。名稱に呼ぶ。「名は解、馬琴と―」。

(かう-すゐ（コウ）[香水](名) ㊀にほひのよき水。㊁佛に供する水。㊂一種の化粧品、薔薇・丁子・菫菜(スミレ)など、芳香を有する植物より製したるにほひよき水。(花露水)。

かう-すくひ（コウ）[香匙](名) 香を盛るさじ。「匙(キヤウジ)」。

(かう-すゐ（コウ）[交綏](名) 敵味方共に退陣すること。あひびき。

(かう-すゐ（コウ）[硬水](名) [化] 石灰又は他の鑛物を溶解せる水、石鹼の溶液を加ふるときは、脂肪酸の「カルシウム」鹽を生じ沈澱するを以て、洗滌の用をなさず。

(かう-ずゐ（コウ）[洚水](名) 氾濫したる水。おほみづ。(洪水)。

(かう-せい（コウ）[校正](名) 印刷物と原稿とを引きあはせて、其誤謬をなほすこと。きやうがふ。

(かう-せい（コウ）[倣製](名) にせてつくること。

(かう-せい（コウ）[更正](名) あらためなほすこと。なほし。

(かう-せい（コウ）[好晴](名) 晴れわたりたる天氣。

(かう-せい（コウ）[高聲](名) こゑだか。おほごゑ。

(かう-せい（コウ）[行星](名) [天]「遊星」に同じ。

(がう-せい（ゴウ）[降生](名) 神佛などが、生を人間に享(ウ)けて斯世に生るといふこと。

(がう-せい（ゴウ）[剛性](名) [理] 物質の性質の一、破碎の難易をいふ。

(かう-せう（コウセウ）[巧笑](名) うつくしきわらひがほ。

(かう-せき（コウ）[衡石](名) はかり。(秤)。

(かう-せき（コウ）[考績](名) 官吏の功課。いさを。

(かう-せき（コウ）[拷責](名) がうもん。

(かう-せき-かう（コウ）[硬石膏](名) [化]「せきかう」(石膏)に同じ。

(かう-せつ（コウ）[高說](名) 他人の說の敬稱。おせつ。

(かう-せつ（コウ）[講說](名) 講じ說明すること。又、其主意。

(かう-せつ（コウ）[巧拙](名) たくみなるとつたなきこと。

(かう-せつ（コウ）[高節](名) 高きみさを。なみ〳〵ならぬおこなひ。

(かう-せつ（コウ）[巷說](名) ちまたのうはさ。世間のひやうばん。(街談)。

(かう-せつ（コウ）[交接](名) ㊀相接着すること。まじはりつくこと。㊁つきあひ。かうさい。㊂男女のまじはり。房事。(交合)。

(かう-せふ（コウセフ）[交睫](名) 上下のまつげをあはすること、卽ち、眼を閉ぢ睡ること。

(かう-せふ（コウセフ）[交涉](名) ㊀かけあひ。はなしあひ。㊁くわんけい。かゝりあひ。

(かう-せん（コウ）[抗戰](名) はりあってたゝかふこと。

(かう-せん（コウ）[交戰](名) ㊀戰を交ふること。相戰ふこと。がつせん。㊁[法] 交戰主體が互に兵力を以てする敵對行爲。

(かう-せん（コウ）[香煎](名) 米(多くは「だいたうまい」)のこがしに、陳皮・茴香などの香料を交へ合はせたる粉、湯に點じて飮む。

(かう-ぜん（コウ）[浩然](名) ゆったりとしたるさま。又は廣大なるさまにいふ語。「―の氣を養ふ」。

(かう-ぜん（コウ）[皎然](名) 月あきらかにしてくもりなきさまにいふ語。

(がう-ぜん（ゴウ）[囂然](名、副) かまびすしきさまにいふ語。

(がう-ぜん（ゴウ）[傲然](名、副) おごりたかぶるさまにいふ語。

(かう-せん-こく（コウ）[交戰國](名) 交戰主體たる國。又、我に對して戰鬪行爲をなす國。

(かう-せん-しや（コウ）[交戰者](名) [法] 戰鬪行爲に從事する者、卽ち、將校・兵士若しくは義勇兵の類。

(かう-せん-しゆたい（コウ）[交戰主體](名) [法] 兵力を以て敵對行爲をなす國、又、他の國より交戰主體と認められたる團體。

かうぜん-の-き（コウ）[浩然之氣](名) 道義に根底し、自ら省みて毫も疚(ヤマ)しき所なく、屈せず撓(タユ)まざる剛健の德。道義的大勇氣。「吾善養―」。

(かう-せん-はう（コウ）[鋼線砲](名) 大砲の一種、砲身の內筒外部に無數の鋼線を纏繞せしめ、砲彈の力を增加せしめたるもの。

(かう-そ（コウ）[高祖](名) ㊀己れより五代前の親、卽ち、祖父母の祖父母。㊁先祖の稱。㊂[佛] 一宗又は一寺の開基の人。「―日蓮大菩薩」。

かうぞ（コウ）「楮」(名)【植】(い)桑科に屬する直立木本、枝は密毛を有せず、葉は小形にして卵形をなし尖頭を有す、樹皮の纖維を採り製紙の原料に供す。かみのき。かぞ。(穀)。(ろ)「とろろあふひ」の一名。

(がうそ（ゴウ）「強訴」(名) 徒黨して訴訟すること。

(かうソウ（コウ）「高僧」(名) ㊀徳行すぐれたる僧。㊁官位高き僧。

(かうそく（コウ）「高足」(名) ㊀たかあし。㊁高位地の弟子。優秀なる門弟。

(かうそく（コウ）「梗塞」(名) ふさがりて通ぜざること。「道路―」。

(がうぞく（ゴウ）「豪族」(名) 勢力大なる家門。財産多き一家。

かうぞめ（コウ）「香染」(名) 黄に黑みある色、袈裟などに用ふ、もと「インド」にて、「ケンダラ」といふ香樹の葉にて染めしより此名あり。

かうぞり（コウ）「髪剃」(名) (髪剃(カミソリ)の轉) ㊀佛門に入る式、僧侶が死人又は出家に戒をさづけて、其髪を剃(ソ)ること。(首剃)。㊁在家俗人が佛門に歸依する證として行ふ一種の式、僧侶が剃刀(カミソリ)を其在家俗人の頭にあて、髪を剃(ソ)るまねをなす。

(かうたい（コウ）「交代」(名) かはりあふこと。「參勤―」。(交替)。——しき「交代式」(名)【數】代數式の一、式中の文字二つを交換して、其符號を變ずるとき、其二つの文字に就きての稱、例せば、$a(a+b)$ は a b に就きての交代式なり。——よりあひ「交代寄合」(名) 德川時代の身分格式の一、領地に住み、年を定めて參勤交代する一萬石未滿の武士の家柄。

(かうだい（コウ）「高臺」(名) ㊀高き足のあるわん。ちやわん。㊁たかく築きたるうてな。

(かうだい（コウ）「廣大」(名) ㊀たかく大なること。㊁最もすぐれたること。極めてたふときこと。

(がうたい（ゴウ）「剛體」(名)【理】如何なる力を加ふとも變形せざる假想體。

(かうたう（コウ）「浩蕩」(名) ひろびろとしたるさまにいふ語。

(かうたう（コウトウ）「高蹈」(名) ㊀たかく自家の地歩を占むること。世累をぬけ出づること。㊁官祿に心をのこさず身を退りぞくること。

(かうだう（コウドウ）「孝道」(名) 親に事(ツカ)ふる道。

(かうだう（コウドウ）「香道」(名) 香をかぎわくるわざ。

(かうだう（コウドウ）「講堂」(名) ㊀寺院にて講經又は說教をなす堂。㊁學校の教室。

(かうだう（コウドウ）「坑道」(名) ㊀地下にうがつ通路。㊁地下に火藥を裝置し爆烈せしむる所。

(がうたう（ゴウトウ）「豪宕」(名) 意氣さかんにして言行の尋常規律の外に逸すること。

(がうたう（ゴウトウ）「強盜」(名) 暴行又は脅迫の手段を加へて、他人の財物を奪ふ者。(劫盜)。——づきん「強盜頭巾」(名) づきんの一種、麻絲を紺染めにしてつくる、賤しき人のかぶるもの。——はん「強盜犯」(名)【法】強盜の罪、其際に強姦又は殺傷したるものをも概括していふ。

(かうたく（コウ）「膏澤」(名) ㊀うるほひ。㊁あぶら。

かうたけ（コウ）「革茸」(名) (「かはたけ」の轉)【植】菌類の一種、山嶽の落葉の下などに生ず、かさ芳(ハウ)しく、乾せば染め革の如き黑色となる、味苦く灰汁(アク)にてゆでゝ食ふ。(茅蕈)。

かうだたみ（コウ）「香疊」(名) 香包(カウツヽミ)・香箸(カウバシ)其他香道に必要の具を包む紙。

(がうだつ（ゴウ）「強奪」(名) しひてうばひとること。かすめとること。

(かうたん（コウ）「降誕」(名) 神佛又は非凡なる人のうまるゝにいふ語。たんじやう。「皇子の―」。(降世)。

(かうだん（コウ）「高談」(名) ㊀聲たかく物がたること、世間憚らず物がたること。㊁おせつ。おはなし。

(かうだん（コウ）「講談」(名) 「かうしやく」(講釋)(二)に同じ。——し「講談師」(名) 「かうしやくし」(講釋師)に同じ。

(かうだん（コウ）「講壇」(名) 講義する座位。

(がうたん（ゴウ）「豪膽」(名) 膽のよくすわりて居ること。物事に臆せぬこと。だいたん。「―の少年」。

(がうたん（ゴウ）「毫端」(名) 筆のはさき。(筆端)。

(がうだん（ゴウ）「強談」(名) 無理にはなしをつくること。おして談判すること。

(かうたんくわい（コウ）「降誕會」(名) 釋迦牟尼又は孔子・基督などの如き大偉人の降誕當日を祝するための會合。「孔子―」。

(かうだんし（コウ）「好男子」(名) りつぱなる男。よきをとこ。「―惜むらくは兵法を知らず」。

(かうち（コウ）「耕地」(名) 耕作すべき土地、山林・宅地・河海などの對。

(かうち（コウ）「巧智」(名) 物事たくみなる才智。

(かうち（コウ）「狡智」(名) わるがしこき才智。

カウチ（コウ）「交趾」(名) 古昔、安南國より舶來せし陶器の稱。

(かうち（コウ）「巧遲」(名) おそくしてできあがりの勝(スグ)れたること。拙速の對。「―は拙速に如かず」。

(かうち（コウ）「高地」(名) たかき土地。たかき場所。

かうぢ（コウジ）「麴」(名) 米又は麥を蒸(ム)してもやしと混じ、これをねかし、かうぢかびを生ぜしめたるもの、酒・醬油・味噌などを製する原料なり。——かび「麴黴」(名)【植】下等菌類の一、一の細胞より次第に新細胞を芽出し、後に特立の細胞となりて蕃殖す、醱酵の作用を有し、澱粉を糖類に變化せしむ。——ばな「麴花」(名) 「かうぢかび」に同じ。——むろ「麴室」(名) 麴をねかすためのむろ。

(かうちう（コウ）「行廚」(名) べんたう。わりご。

(かうぢき（コウ）「高直」(名) 價の高きこと。たかね。高價。

(かうちせい（コウ）「向地性」(名)【植】植物の根が地下に向ひて生長する性質。

(かうちせいり（コウ）「耕地整理」(名) 耕地の利用を增進するために、諸般の設備をなすこと、即ち、所有者共同して、土地の分合・變更若しくは畦畔・溝渠等の變更・廢置などを行ふこと。

(かうちやう（コウチヤウ）「校長」(名) 學校の長。

(かうちやう（コウチヤウ）「高聽」(名) 他人の聽くことの敬語。おきゝ。

(かうちやう（コウチヤウ）「綱丁」(名) 古昔、貢物を運送せし俊丁。

(かうちやう（コウチヤウ）「腔腸」(名)【動】くらげ等の體腔の營養をつかさどる所。——どうぶつ「腔腸動物」(名)【動】くらげ・さんご・いそぎんちやく等の總稱、體形は種々あれど、構造は一般に囊狀にして、僅かに二層の皮膜組織より成り、概ね口の周圍に觸手を有す、其口によりて外界に通ずる内腔は、腔腸にして、其一部若しくは全部を以て食物の消化をなし營養をつかさどる、又、此等の動物の特性として、外面の皮膜中に發刺胞と稱する小胞あり。

(かうぢやう（コウヂヤウ）「定考」(名) (文字をさかさに讀むが例なり)古昔、官吏の行狀又は藝能を、考へさだめて撰び出しゝこと。

(かうぢゆう（コウ）「講中」(名) 神佛などに協同の組をむすびて詣(マウ)づる連中。又、賴母子の連中。

(かうちよ（コウ）「較著」(名) いちぢるしきこと。ちよめい。

(かうぢよ（コウ）「孝女」(名) 孝行なる女。

(かうちよく（コウ）「鯁直」(名) 一途に正しきこと。りちぎ。(剛直)。

(かうつう（コウ）「交通」(名) ㊀ゆきかよひ。ゆきき。㊁人身の往復・物品の運搬又は人々互に意思を相通ずること、これを分つて運搬と通信との二とす、人身の往復又は物品の運搬は前者に屬し、意思を相通ずるとは後者に屬す。——きくわん「交通機關」(名) 往復又は運搬に屬する機關即ち道路・橋梁・船舶・鐵道等と、通信に屬する機關即ち電信・電話・郵便等とをいふ。——ろ「交通路」(名) ゆきかよひする路筋。ゆきゝのみち。「世界の―」。

(かうつがふ（コウツゴウ）「好都合」(名) つがふよきこと。

(がうつくばり（ゴウ）「強突張」(名) 剛愎にして人に從はざるものを罵りていふ語。

(かうづつみ（コウ）「香包」(名) 香を包む紙。

(かうつと（コウ）(感) 如何になさんかと考ふるときなどの發聲。かうと。えゝと。

(かうてい（コウ）「高弟」(名) いちばんでし。かうそく。

(かうてい（コウ）「行程」(名) みちのり。ゆきみち。

(かうてい（コウ）「高低」(名) ㊀たかきとひくきと。㊁あがりさがり。(昂低)。

(かうてい（コウ）「抗抵」(名) てむかひ。はりあひ。抵抗。

(かうてい（コウ）「更訂」(名) あらためなほすこと。

(かうてい（コウ）「校訂」(名) 出版物などの文字又は文句の誤謬をなほすこと。

(かうてい（コウ）「考定」(名) かんがへさだむること。又、其かんがへ。

(かうてい（コウ）「扛鼎」(名) (かなへをあぐる義)重き物をあぐる力あること。「―の力」。

(かうてい（コウ）「孝悌」(名) 父母に孝行にして、兄弟に從順なること。(孝弟)。

(かうてう（コウテウ）「高潮」(名) ㊀【地】あげ潮が其極に達せしときの稱。㊁感情又は時勢などが、最も高まり起りたる程。

(かうでうはう（コウデウハウ）「鋼條砲」(名) 「かうせんはう」(鋼線砲)に同じ。

(がうてき（ゴウ）「強敵」(名) ㊀手にあまるばかりつよき敵。きやう敵。㊁非常なること。すぐれたること。

(かうてつ（コウ）「鋼鐵」(名) 百分中に〇・八乃至一・八の炭素を含有する鐵、鎔鐵を融解して高壓を加へ、空氣を吹き入れ炭素の幾分を酸化せしめて製す、用途甚だ多し。はがね。——かん「鋼鐵艦」(名) 鋼鐵を材料として建造したる軍艦。

(かうてつ（コウ）「更迭」(名) あらたまりかはること。いりかはり。「内閣の―」。(更代)。——のり「更迭の理」(名)【數】同種類の四つの量が比例をなすとき、第一と第三との比が、第二と第四との比に等しきこと。

(かうてん（コウ）「昊天」(名) そら。あめ。

(かうてん（コウ）「高點」(名) おほき點數。たかき點數。

(かうてん（コウ）「交點」(名) ㊀かれとこれとが相交はる點。㊁【天】遊星・衛星又は彗星の軌道が、黄道面と相交はる點。——げつ「交點月」(名)【天】大陰が其軌道の交點の一を再び通過するまでの時間の稱、二十七日五時十分三十七秒なりとす。

(かうでん（コウ）「香奠」(名) 死者の靈前に供ふる贈物。(香典、賻)。

がうてんじやう（ゴウテンジヤウ）「格天井」(名) 格子の目の如くに棧(サン)をつくりたる天井。

(かうと（コウ）「狡兎」(名) するどきうさぎ。——しにてそうくにらる「狡兎死走狗煮」 事變の際、人のためにはたらきて功績を立てたるものも、事變平ぎて後は、却つて其人のために除害せらるゝにたとへいふ。

(かうと（コウ）「高第」(名) 品よくけだかきこと。ひとが

う。「—なつくり」。

(かう-ざう（コウ）［斯］（感）いかゞなさんかと物を考ふるときの發聲。さてと。えゝと。

(かう-ど（コウ）［高度］（名）㊀程度高きこと。㊁【天】地平より天體に至る角距離。

(かう-ど（コウ）［耕土］（名）心土即ち下層土の上層にありて、吾人の耕耡する部分の土壤、岩石崩碎して土砂となり、動植物質これに混じて、草木を養ふべき土となりたるもの。（表土）。

(かう-ど（コウ）［硬度］（名）瑕疵（キズ）を與へんとするに對する物體の抵抗の程度、普通用ふる程度の標準は、（一）滑石（二）石膏（三）方解石（四）螢石（五）燐灰石（六）長石（七）水晶（八）黃玉石（九）鋼玉石（十）金剛石の順序にして、金剛石は硬度最も高し。

(かう-どう（コウ）［昂騰］（名）價などのあがること。

(かう-とう（コウ）［高等］（名）程度のすぐれたること。

—がくかう（ガッコウ）［高等學校］（名）文部省直轄學校の一、專門學科を敎授する所にして、帝國大學の入學者のために豫備學科を設く。

—ぎやうせい（ギョウ）［高等行政］（名）國家社會の安寧に關する行政。

—くわん［高等官］（名）國家社會の官吏の等級の一、これを分つて八等とし、一等二等を勅任官といひ、三等以下八等迄を奏任官といふ。

—けいさつ［高等警察］（名）國家社會の安寧に關する危害を防止するを目的とする警察、即ち、出版・集會・結社又は浮浪・出獄人若しくは火藥・刀劍等に關する警察をいふ。

—けういく（キョウ）［高等教育］（名）程度高き敎育。又、專門の學科。

—けういくくわいぎ（キョウ）［高等教育會議］（名）文部大臣の監督の下に屬して、其諮詢の事項を審議する機關。

—こうげふがくかう（ギョウガッコウ）［高等工業學校］（名）文部省直轄學校の一、工業に關する高等の學術技藝を敎授する所。

—しはんがくかう（ガッコウ）［高等師範學校］（名）文部省直轄學校の一、師範學校・尋常中學校及高等女學校の敎員を養成する所、附屬中學校及附屬小學校を置く。

—しやうげふがくかう（ショウギョウガッコウ）［高等商業學校］（名）文部省直轄學校の一、商業に關する高等の學術・技藝を敎授する所。

—しよくぶつ［高等植物］（名）根より液狀の滋養分を吸收し、狀態の全く動物と異なる植物の稱。

—せうがくかう（ショウガッコウ）［高等小學校］（名）小學校の一種、尋常小學校を卒業したる者に更に程度高き初等普通敎育を施すを目的とする所、修業年限は、二箇年とす。

—たんばう（ボウ）［高等探訪］（名）新聞社にて、政治社會の狀況を探訪すること。又、其人。

—ぢよがくかう（ガッコウ）［高等女學校］（名）女子に高等なる普通敎育を授くるを目的とする學校。

—どうぶつ［高等動物］（名）口を有し固形又は液狀の食物を攝取し、複雜なる內部の器官によりこれを消化し、狀態全く植物と異なる動物の稱。

(かう-どう（コウ）［行動］（名）爲すこと。行ふこと。はたらき、しわざ。

(がう-とう（ゴウ）［鼇頭］（名）書物の欄上に細註を加ふること。（冠註）。

(かう-とく（コウ）［高德］（名）德のすぐれたること。

(がう-な（ゴウナ）（名）【動】「やどかり」に同じ。（[illegible]）。

(かう-なう（コウノウ）［香嚢］（名）にほひぶくろ。

(かう-なう（コウノウ）［行嚢］（名）郵便物を入れて遞送するに用ふる嚢。

十かう-なぎ（コウ）［巫］（名）「かんなぎ」の音便。

(かう-にん（コウ）［降人］（名）かうさんしたる人。

十かう-ぬし（コウ）［神主］（名）（「かみぬし」の音便）㊀神を祭るときの主たる人。祭主。㊁神につかふる人。かんぬし。（祠官）。

(かう-のう（コウ）［耕農］（名）耕作を專業とする農民。

(がう-のう（ゴウ）［豪農］（名）財產多く勢力ある農家。

十かう-の-との（コウ）［督殿］（名）（「かう」は「かみ」の音便）衞門府又は兵衞府の長官・國守等の尊稱。

かう-の-もの（コウ）［香物］（名）一種の食品、野菜を糠・鹽・味噌・粕などに漬けたるもの。かう〳〵。つけもの。（漬物）。

がう-の-もの（ゴウ）［剛者］（名）すぐれてつよき人。たけきものゝふ。（強者）。

(かう-は（コウ）［硬派］（名）㊀堅く政府に反對する意見を執る在野の政黨。㊁すべて敵に對して、手強き處置に出でんことを主張する派の稱。㊂新聞社又は雜誌社にて、文學又は雜物の擔當に對して、政事方面の擔當にいふ。「—記者」。

(かう-ば（コウ）［行馬］（名）㊀こまよせ。こまつなぎ。㊁端に釘をうちつけある杙（クヒ）、敵騎の突入を防ぐために、陣頭に設くるもの。

(かう-はい（コウ）［伉配］（名）つれあひ。めをと。

(かう-はい（コウ）［向背］（名）㊀したがふとそむくと。㊁やうす。なりゆき。

(がう-ばう（ゴウボウ）［好望］（名）前途によきめどあること。

(がう-はう（ゴウホウ）［豪放］（名）小節にかゝはらざること、勇氣ありておほまかなること。

(がう-はう（ゴウホウ）［號砲］（名）あひづに打つ大砲、又、其ひゞき。

(かう-はく（コウ）［巷陌］（名）ちまた。まち。

(かう-はく（コウ）［皓白］（名）白きこと。

かう-ばこ（コウ）［香箱］（名）香を入るゝ器、紙を折りてつくりたるもあり。（香合、香盒）。

十かう-ばさみ（コウ）［髮鋏］（名）「かみばさみ」の音便。

かう-ばし（コウ）［香箸］（名）香をたくとき、香をはさむに用ふる箸。（香匕）。—がひ（ガイ）［香箸貝］（名）【動】「うに」の一名。

かう-ばし（コウ）［香］（形、二）（しくしくしきしけれ）（「かぐはし」の音便）㊀かをりよし。にほひよし。（芳、芬）。㊁德間又は名聲の流傳するにいふ。㊂利益あり。おもしろし。「—き話」。

(がう-はつ（ゴウ）［毫髮］（名）㊀毛一すぢ。㊁轉じて、わづかなる物事。

かう-はな（コウ）［香華］（名）佛に奉る香と花と。「—たむくる方もなし」。

(かう-はん（コウ）［考槃］（名）樂しむこと。

(かう-はん（コウ）［皓礬］（名）【化】硫酸亞鉛の稱。

(かう-ばん（コウ）［交番］（名）㊀かはりあひて番にあたること。㊁「かうばんしよ」の略言。—しよ［交番所］（名）市中の要處に設置しある巡查の派出所。—でんりう［交番電流］（名）【理】方向の振動的に交互に變ずる電流。

(かう-ひ（コウ）［糠粃］（名）㊀あらぬかとしひなと。㊁粗末なる食事。㊂こな。くず。

(かう-ひ（コウ）［高批］（名）御ひやう。御批評。

(かう-ひ（コウ）［皐比］（名）虎の皮のしきもの。

(かう-び（コウ）［交尾］（名）鳥獸蟲魚などの雌雄兩性の交接。つるむこと。つがふこと。—き［交尾期］（名）鳥獸蟲魚などの交接を行ふ時期。

(かう-ひしよ（コウ）［行秘書］（名）いきてゐるしよもつばこ、即ち、博く書史に通じたる學者をいふ。

十かう-ひねり（コウ）［紙捻］（名）「もとゆひ」の古名。

(かう-びん（コウ）［幸便］（名）便宜よきたより。

(かう-ふ（コウ）［耕父］（名）ひやくしやう。

(かう-ふ（コウ）［交付］（名）事物を引渡すこと。ひきわたし。

(かう-ぶ（コウ）［講武］（名）武道を講じ習ふこと。

(がう-ふ（ゴウ）［豪富］（名）頗る富めること。又、其人。

(かう-ふう（コウ）［校風］（名）學校に特有なる氣風。

(かう-ふく（コウ）［幸福］（名）㊀運命の吉なること、遭遇のはえあること。さいはひ。しあはせ。（福祉）。㊁生存に危害なきこと。心中の平和なること。

(かう-ふく（コウ）［降伏］（名）くだること。かうさん。

(がう-ふく（ゴウ）［剛愎］（名）かたくなにして人に從はざること。がうじやう。—ふそん［剛愎不遜］（名）がうじやうにして人に對し不遜なる擧動多きこと。

(がう-ぶく（ゴウ）［降伏］（名）㊀我を屈して服從すること。㊁神佛の功力に由りて、惡魔・外道・敵などを抑へ鎭（シヅ）むること。「敵國—」。—のほふ（ホウ）［降伏法］（名）降伏のために、ごまをたきて祈ること。

(かう-ぶくろ（コウ）［香袋］（名）香を入るゝふくろ。

かう-ぶし（コウ）［香附子］（名）【植】一種の草、田野に自生す、葉はにらに似て堅くして光澤あり、五六月の頃、褐色の花を開き實を結ぶ、多く藥用とす。

(かう-ぶつ（コウ）［好物］（名）すきこのむ食物。

十かう-ぶり（コウ）［冠］（名）（「かかぶり」の轉）。㊀「かんむり」の古名。㊁位階。

十かう-ぶ-る（コウ）［被］（他、ラ四）（らりるるれれ）「かうむる」に同じ。

(かう-ぶん（コウ）［行文］（名）文章のかき方。文字のつかひ方。

(かう-ぶん（コウ）［高聞］（名）他人の聞くとの敬語。御きゝ。「—に達す」。

(かう-ぶん-ぼく（コウ）［好文木］（名）【植】「うめ」の異稱。

かう-べ（コウ）［首］（名）（上部（カウベ）の音便）くび。あたま。（頭）。—をめぐらす［回首］あとへふりむく。又、むきかへる。既往を回想す。

(かう-べき（コウ）［降冪］（名）【數】同一なる文字が、種々の冪を有する多くの項より成る式に於て、其最大冪の項より順次低き冪の項が下方へ列ねあること、例へば、$4x^3-2x^2+5x-7$ の如きこれなり。

(かう-へい（コウ）［降兵］（名）降參したる兵。

(かう-へい（コウ）［衡平］（名）平均すること。つりあふこと。又、平均若しくはつりあひを得しむること。

(かう-べん（コウ）［抗辯］（名）㊀はりあひて論辯すること。㊁【法】訴訟手續にて、訴訟の本案に就き辯論すべき特別の資格條件なきことを主張して、其辯論を拒むこと。

(かう-ぼ（コウ）［酵母］（名）【植】單細胞の下等植物、生殖は出芽による、數中に多く存在し、糖分をアルコールと炭酸瓦斯とに分解す。

かう-ほね（コウ）［河骨］（名）【植】睡蓮（ヒツジグサ）科に屬する水草、水上に傾出せる葉は箭狀心形を呈し、花片は黃色にして花瓣樣をなし、柱頭は歐裂して放線狀を呈す、觀賞植物として栽培せらる。（萍蓬草）。

(かう-ほん（コウ）［稾本］（名）したがき。草稿。（稿本）。

(かう-ぼん（コウ）［香盆］（名）香を盛る盆。

十かう-ぼり（コウ）［蝙蝠］（名）【動】「かうもり」に同じ。

(がう-ま（ゴウ）［降魔］（名）あくまを降服せしむること。—のけん［降魔劍］（名）不動明王が手にせる劍。

(がう-まい（ゴウ）［豪邁］（名）心たけくすぐれたること。

(がう-まつ（ゴウ）［毫末］（名）（毛すぢのさきの義）僅かなる物事にいふ。

かう-まゐり（コウ）［講參］（名）講中を結びて、神佛に參詣すること。

（かう‐まん）コウ［高慢］（名）㊀自ら高ぶりて人をあなどるヿ。（自負）。㊁其身のほどに過ぎたる事をするヿ。――ちやく‐れる（自、ら下二）様子又は口まへばかりが、實際と不平均に高慢なるにいふ。（東京の方言）。

（かう‐まん）コウ［灝漫］（名）ひろびろしきヿ。

（がう‐まん）ゴウ［傲慢］（名）おごりたかぶりて禮に缺けたるヿ。不遜。（驕傲）。

（かう‐み）コウ［好味］（名）よきあぢはひ。又、よきあぢはひのもの。（美味）。

（かう‐みやう）コウミヨウ［高名］（名）名のたかく現はるるヿ。なだかきヿ。よきひやうばん。

かう‐む・る コウ［被、蒙］（他、ら四）㊀頭にいたゞく。頭におはふ。（冠）。㊁上に罩ふ。上に加ふ。㊂着く。きる。「我衣を―」。㊃負ふ。「矢を―ヿ蝟の如し」。㊄受く。「御免を―」。㊅酒を飲み醉ひを帶ぶ。「酒をかうむりて臥す」。

（かう‐めい）コウ［高名］（名）㊀名高きヿ。よきひやうばん。㊁人の名の敬稱。「―はかねて承りて居りました」。

（かう‐めい）コウ［杲明］（名）日光のあきらかなるヿ。

（かう‐めい）コウ［講明］（名）ときあかすヿ。又、ときあきらかにするヿ。

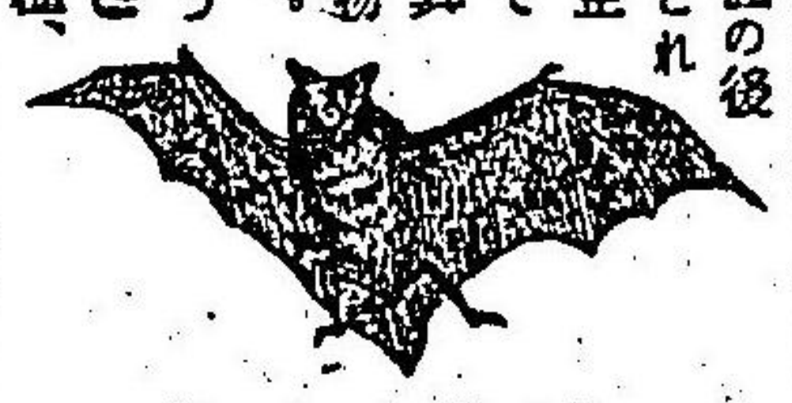
（かう‐めう）コウミヨウ［高妙］（名）すぐれてたへなるヿ。尋常のもの丶及び得ざる妙處あるヿ。「技術―」。

（かう‐めん）コウ［高免］（名）ゆるしを受くるヿの敬語。おゆるし。「―を乞ふ」。

（がう‐もう）ゴウ［毫毛］（名）（毛すぢの義）僅かなる物事にいふ。

（かう‐もく）コウ［綱目］（名）㊀網のおほづなと細かき目と。㊁物事のすべくゝりとこわけと。

かう‐もり コウ［蝙蝠］（名）㊀［動］翼手類に屬する小獸、眼ありて手と足との間より體の後端に皺（ヒ）がり、手指は伸長してこれを支張する骨となる、鳥の如く空中を飛翔す、體面には羽なくして毛あり、趾は短くして鉤爪を具し、休止するときはこれを以て物に懸垂す。かはほり。かくひどり。へんぷく。（天鼠、伏翼）。㊁「かうもりがさ」の略言。――がさ［蝙蝠傘］（名）さしがさの一種、西洋より傳來し、鐵の骨に綿子・毛綿子（シユス）・絹などをはりてつくれるもの。――づけ［蝙蝠附］（名）具足ののどわの作り方、かうもりの羽をひろげたる如くに、一枚革にて草摺（クサズリ）をひろく胴に附けたるもの。



［かうもり（一）］

（かう‐もん）コウ［肛門］（名）消食器の末端、卽ち、直腸の下端にありて、體中の不用老廢物を排出する孔。しりのあな。

（かう‐もん）コウ［港門］（名）みなとのいりぐち。

（がう‐もん）ゴウ［拷問］（名）罪人をいためせめて實狀を問ひたゞすヿ。

†かう‐や コウヤ（名）「かはや」（厠）の音便。

（かう‐や）コウ［郊野］（名）ひろびろとしたる野。かうぐわい。のはら。

（かう‐やう）コウヨウ［孝養］（名）孝行して親をやしなふヿ。かうかう。

かう‐やう コウヨウ［斯樣］（名）かやう。このやう。

かう‐や‐がみ コウヤ［紙屋紙］（名）「かみやがみ」の音便。

（かう‐やく）コウ［膏藥］（名）脂にて煉（ネ）りかためたる外敷用の藥、紙片又は布片に延べて、體の患部に貼用す。あぶらぐすり。

（かうや‐どうふ）コウ［高野豆腐］（名）紀伊國高野山より出るこほりどうふ。

かうや‐ひじり コウ［高野聖］（名）㊀勸進を目的に、高野山より全國に出づる僧徒の稱。㊁［動］蜻蛉類の幼蟲が水中に生活するときの稱、長さ二寸許、形は蜂に似て色黑く甲あり、足は六本、歩むと遲し、水中にありてぼうふりを食し、蚊の驅除に大効あり、我國に産するもの百餘種あり。

かうや‐まき コウ［高野槇］（名）［植］松杉科に屬する喬木、葉は長線形にして數箇輪生し、果鱗は通常七箇の胚珠を有す、高野山等に多く産す、木材は種々の用に供せられ、樹皮はまきはだと稱し、水槽・船等の空隙を塞ぐに用ひらる。（金松）。

（かう‐ゆ）コウ［香油］（名）化粧品として用ふるにほひよき油の總稱。

（かう‐ゆ）コウ［膏腴］（名）土地肥えて、作物によく適するヿ。「―の地」。

（がう‐ゆう）ゴウ［豪雄］（名）ゆうしや。がうけつ。

（がう‐ゆう）ゴウ［豪勇］（名）つよくいさましきヿ。又、其人。

（かう‐よう）コウ［効用］（名）㊀役に立つヿ。つかひみち。㊁りえき。きゝめ。㊂［經］財物が人の願望を充たすに適する能力。

（がう‐よく）ゴウ［强欲］（名）飽くヿを知らぬ欲心。どんらん。（大慾）。

かう‐より コウ［紙捻］（名）（「かみより」の音便）紙を細く切りてよりたるもの、普通にこよりといふ。かんぜんより。かんおんより。（紙縒、紙撚）。

カウライ コウ［高麗］（名）朝鮮産の陶器の總稱。（茶人の語）。――うぐひす コウ［高麗鶯］（名）

［動］うぐひすの一種、形は鶫（ツグミ）大にして、腹部は白く、頭部・背部は黃綠色なり、ころがる如き調子に鳴く。（黃鸝）。――しば［高麗芝］（名）［植］しばの一種、莖短く葉細くして美し。ひめしば。（鼓郡芝）。――せきしやう コウライセキシヨウ［高麗石菖］（名）［植］せきしやうの一種、葉細し。（錢蒲）。――せんべい［高麗煎餅］（名）せんべいの一種、饂飩粉を原料としたる小形のもの。――ぢやわん［高麗茶碗］（名）朝鮮より舶來せるちやわん。――で［高麗手］（名）「カウライやき」に同じ。――べり［高麗緣］（名）疊のへりの一種、白地の綾に、模樣を黑く織り出したるもの。――もん［高麗門］（名）普通の屋根の外に、左右のひかへ柱の上にも屋根ある門。――やき［高麗燒］（名）朝鮮にて燒きたる陶器の總稱。カウライて。

（かう‐らう）コウロウ［犒勞］（名）ねぎらひいたはるヿ。（慰勞）。

（かう‐らく）コウ［行樂］（名）細事にかゝづらはず心やすらかに樂むヿ。

（かう‐らん）コウ［高覽］（名）他人の見るヿの敬語。御らん。

（かう‐らん）コウ［高欄］（名）高き棚のらんかん。又、たけ高きらんかん。

（かう‐り）コウ［行李］（名）㊀旅行の荷物。旅行の支度。㊁軍隊の戰鬪又は宿營に必要なる物品を積載せる輜重、大行李と小行李との別あり、其條を見よ。㊂旅行用の荷物を入るゝ具、形はつゞらの如く、竹又は柳にて編み作る。㊃使者。つかひ。「一介の―」。

（かう‐り）コウ［高利］（名）貸し金の利息が、普通よりたかきヿ。――がし［高利貸］（名）高利を貪りて金錢を貸すヿ。又、其業に從ふ人。（放重利者）。

（かう‐り）コウ［狡吏］（名）わるく狡猾なる役人。

（がう‐り）ゴウ［毫釐］（名）極めて少き分量。――のさはせんりのあやまりをいたす［毫釐差致千里謬］始めはすこしのたがひも、終りは甚しき相違あるにいふ。

（かう‐りう）コウ［江流］（名）河のながれ。「―千里」。

（がう‐りき）ゴウ［强力］（名）㊀つよきちから。㊁やまぶしの連れたる下男。㊂登山する者の雇ふ人足。

（かう‐りつ）コウ［高率］（名）率の程度高きヿ。

（かう‐りやう）コウリヨウ［膏粱］（名）㊀あぢよきおほあは。㊁美味なる食餌。「―に飽く」。

（かう‐りやう）コウリヨウ［綱領］（名）物事の大眼目。おほもと。おほくゝり。

（かう‐りやう）コウリヨウ［考量］（名）かんがへはかるヿ。

（かう‐りよ）コウ［考慮］（名）かんがへ。おもんぱかり。

（かう‐りよ）コウ［行旅］（名）たび。又、たび人。

（かう‐りよう）コウ［蛟龍］（名）㊀想像上の動物、四足ありて頸細く、頸に嬰あり、其大なるものは人を呑む、雲雨に會して天上にのぼるといふ。あまりよう。㊁未だ時機に際會せざる英雄豪傑の稱。――うんをう［蛟龍得雲雨］豪傑英雄が時機に際會するにいふ。

（かう‐りよく）コウ［効力］（名）㊀はたらき。ちから。㊁きゝめ。りえき。

（かう‐りん）コウ［降臨］（名）神佛などのあまくだるヿ。

（かう‐りん‐るゐ）コウ［硬鱗類］（名）［動］魚類の一、骨骼は軟骨及硬骨の二部より成るか若しくは全く硬骨かなり、鱗は概ね斜方形の板狀體にして表面に琺瑯質を被るを常とす、尾鰭は通常不正なり、太古には繁榮せし魚類なれど、現今には生存するもの少し、てふざめこれに屬す。

（かう‐れい）コウ［綱領］（名）おほもとのすぢみち。えうれい。がんもく。

（かう‐れい）コウ［高齡］（名）としより。老年。

（かう‐れい）コウ［好例］（名）よきためし。よきひきごと。

（かう‐れい）コウ［伉儷］（名）つれあひ。夫婦。（配偶）。

（がう‐れい）ゴウ［號令］（名）㊀君主の勅令。みことのり。おほせ。㊁將官の指揮。さしづ。げぢ。㊂すべて上位にあるものゝ下位のものに對してのいひつけの稱。――あせのごとし［號令如汗］君上の勅令は、一たび發せられたる以上、更にこれを止めて以前の狀態の如くする能はずとの意を、汗の一たび出づればもとへかへらざるにたとへいふ。

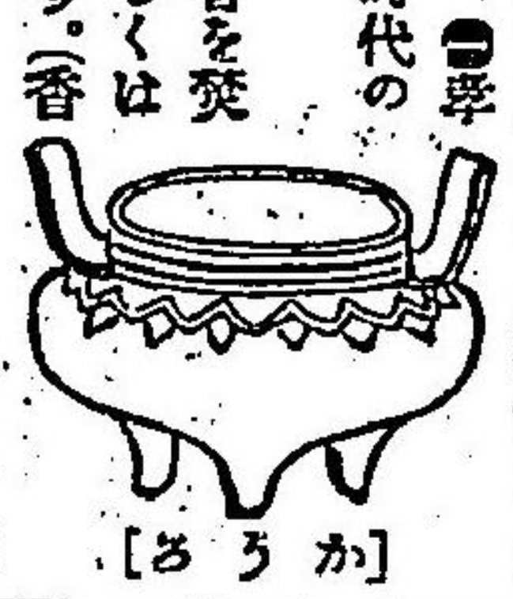
（かう‐れう）コウリヨウ［香料］（名）にほひよき材料品。「印度は―の産物に富む」。（香物）。

（かう‐れう）コウリヨウ［高料］（名）價たかきヿ。かうか。かうぢき。

（かう‐れう）コウリヨウ［校了］（名）すりものゝ校正のすめるヿ。

（かう‐れん）コウ［孝廉］（名）㊀孝行と廉直と。㊁支那の漢時代の進士の一名目。

（かう‐ろ）コウ［香爐］（名）香を焚く器、多くは陶器・銅器若しくは漆器を用ふ、其形種々あり。（香現）。



［かうろ］

（かう‐ろ）コウ［航路］（名）船舶の航行の路。ふねのゆきみち。

（かう‐ろ）コウ［坑路］（名）地下の通路。あなみち。

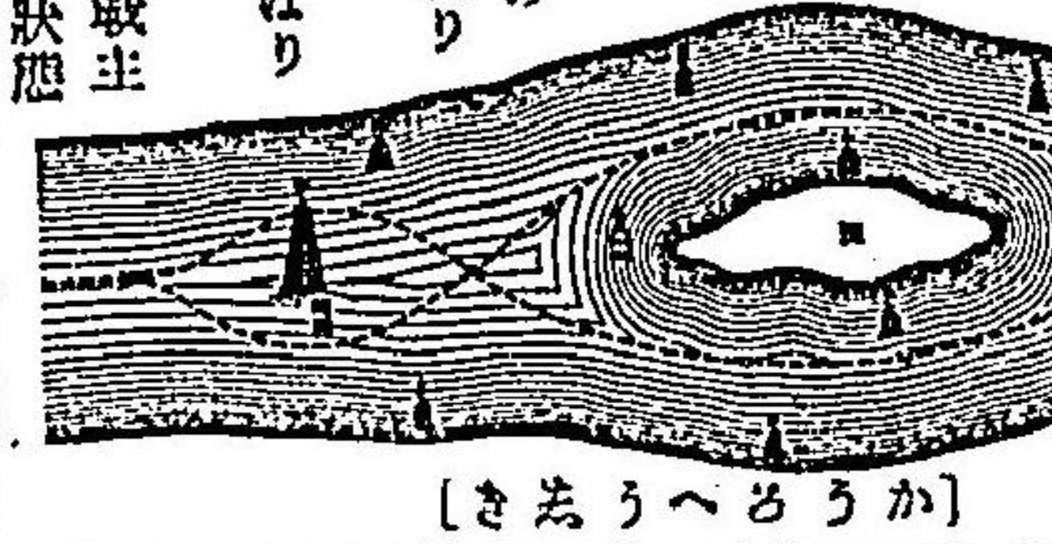
（かう‐ろう）コウ［高樓］（名）高きたかどの。（屋）。

（かう‐ろく）コウ［高祿］（名）多くの祿高。

（かうろ‐しんがう）コウロシンゴウ［航路信號］（名）航行中の汽船が他船に近寄りたるとき、衝突を避くるために、汽笛又は汽角を以て我船の變（カ）へんとする針路を通知するための號報、現今の規定にては、短聲一聲は針路を右舷に取るものとし、短聲二聲は、針

路を左舷に取るものとし、短聲三發は全速力を以て背進するものとす。

(かうろ-へうしき【航路標識】(名) 航路の安全を圖るための標識、卽ち、燈臺・燈船又は霧警號の如きもの。


[かうろへうしき]

(かうろ-へんかう【航路變更】(名) 航行の目的地を變更せずして、航行の路を變更すること。

(かう-ろん【高論】(名) ㊀りつぱなる議論。㊁他人の議論の敬稱。「―をうけたまはりたし」。

(かう-ろん【抗論】(名) はりあひて議論すること。

(かう-わ【講和】(名) 交戰主體が和睦して、平和破裂前の狀態に復すること。(媾和)。 ―-でうやく【講和條約】(名) 交戰主體が講和のために締結したる條約、其締結により交戰中に於てのみ繼續せらるべき行爲は廢絶せらるゝものとす。

かう-わか【幸若】(名) 桃井幸若の始めし舞、物語を音曲に合せ扇拍子にて舞ふもの。さいわか。

(かう-ゐ【行爲】(名) ㊀意思に基きたる動作。しわざ。おこなひ。㊁【法】權利の得喪移轉を生ずるわざ、これを分って二とす、其目的が直接に法律上の効果を生ぜしむるにあるときは、これを法律行爲といひ、其目的が直接に法律上の効果にあらずして、法律もまた其發生を欲せざりしものなるときは、これを不法行爲といふ。㊂【倫】意識に基きたる行爲が道德的性質を帶ぶるもの、即ち、通常所謂道德心を有するものゝ動作にして、其意識を以て爲されたるものなること、これを分って内面・外面の二とす、内面とは動機より意志までをいひ、外面とは動作より結果までをいふ。

(かう-ゐ【高位】(名) たかき位。

(かう-を【好惡】(名) このむとにくむと。すきときらひと。

(が-えい【牙營】(名) ほんぢん。(本營)。

〔か-えぶし【蚊燻】(名) 「かいぶし」の訛。

〔か-か(名) ㊀はゝの賤稱。(阿母)。㊁つまの賤稱。(家婦)。

(か-か【個個】(名、副) ひとつ〳〵。

(か-か【呵呵】(名、副) わらふさまにいふ語。から〳〵。げた〳〵。げら〳〵。

(か-か【家家】(名) もろ〳〵のいへ。いへ〳〵。いへごと。

(か-か【佳佳】(名) いとよきこと。上等。

(か-が【加賀】(名) 「かゞぎぬ」の略言。「―一疋」。

(が-が【峨峨】(名、副) 山などのかど〳〵しくそびえたるさまにいふ語。

〔かか-あ【嬶】(名) つまの賤稱。(家婦)。 ―-でんか【嬶天下】(名) 妻が夫よりも多く權力を持ち、一家を自由に支配すること。

(か-かい【加階】(名) 位階の加はりのぼること。

(か-かい【河海】(名) 河とうみと。 ―-はさいりうをえらばず【河海不擇細流】 大事業を成すものは、これがたよりとなるものは、瑣細なりともすてずしてこれを取るにいふ。

(か-がい【加害】(名) 害をくはふること。 ―-しや【加害者】(名) 害をくはへたるもの。

かが-いも(名) 【植】蘿藦科に屬する蔓草、山野に自生す、春末に宿根より芽を出す、葉は楕圓狀にして尖頭を有し對生す、夏の頃、紫色五瓣の小花を開く、根・莖・葉いづれも、切れば一種の白き汁を出す。(蘿摩、何首烏)。

(か-かう【歌稿】(名) 歌の草稿。

(が-がう【雅號】(名) 文人・畫客などが、實名の外に附くる號。

カカオ【加加阿＝Cacao】(名) ㊀【植】梧桐科に屬する木、熱帶植物にして、「アメリカ」及西「インド」等に產す、其肉質胡瓜(きうり)樣の果實に仁を有す。㊁一種の飮料、「カカオ」樹の仁を焙(あぶ)りて粉となしたるもの、通常「ビスケット」の如き形に製し、牛乳又は砂糖と共に、熱湯を加へて飮む。

かが-がさ【加賀笠】(名) 加賀國の名產なるすげがさ、元祿・寶永の頃最も行はれたり。

かが-ぎぬ【加賀絹】(名) 加賀國より產する絹布。「はぶたへ」の類。

(か-かく【家格】(名) 家の格。いへがら。

(か-かく【歌格】(名) うたの一定の法格。

(か-かく【價格】(名) ㊀あたひ。ねだん。さうば。㊁【經】財物と財物との交換の比例、分って有用價格と交換價格との二となす、通常價格と稱するは、交換價格をいふ。價値。

かか-ぐ【揭】(他、か下二) ㊀高き所へさしあぐ。「看板を―」。㊁表はし示す。㊂掻きたつ。「燈を―」。(挑)。

(か-がく【歌學】(名) 和歌の學問。歌道。

(か-がく【家學】(名) 家に傳はる學問。其家の學。

(か-がく【下學】(名) 手近なる所より學ぶこと。又、程度ひくき學問。 ―-じやうたつ【下學上達】(名) 手近なる所より學びて、次第に深遠なる事理にすゝみゆくこと。又、單に、學べば自づとすゝみゆくこと。

(が-かく【賀客】(名) 祝賀のために來る客。「新年の―」。

(が-かく【雅客】(名) ㊀風流なる人。㊁水仙花の異稱。

(が-がく【雅樂】(名) ㊀正しき音樂。みだらならざる音樂。㊁昔樂の一種、支那又は三韓より傳へたるもあり、本邦にて創作したるもあり、共に和琴・太鼓・三管などをもて奏す。

(かかく-てき【可覺的＝Sensible】(形) 吾人が感覺し得べきにいふ。

卄かか-ぐる(自、ら四) たより近づく。すがる。たどる。「かゝぐり行く」。

卄がが-くれう【雅樂寮】(名) 「うたまひのつかさ」に同じ。

卄かかげ-の-はこ(名) 古昔用ひし髮道具を容るゝ函。(揭筥)。

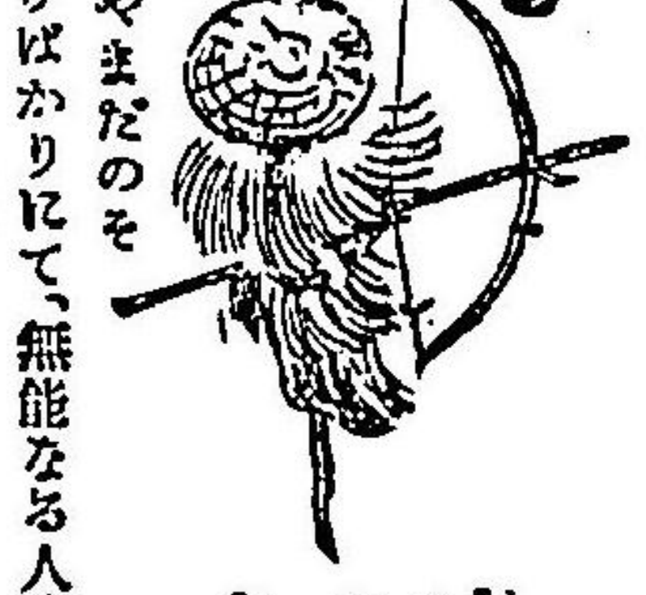
〔かか-げる【揭】(他) 「かゝぐ」の訛。

〔かか-さま【母樣】(名) はゝの敬稱。

かか-さん【母樣】(名) 前條に同じ。

〔かか-さん(名) 他人の妻の敬稱。又、母の敬稱。(京都地方の方言)。

かかし【案山子】(名) ㊀竹・藁などにて人の形をつくり、弓矢などを持たせ、田畠の間に立て、鳥獸の寄るを威(おど)し防ぐもの。そほど。やまだのそほづ。(驚人)。㊁見かけばかりにて、無能なる人物をのゝしりていふ語(東京の俚語)。


[かかし]

〔かがし【案山子】(名) 前條に同じ。

〔か-がしら【蚊頭】(名) 「かばり」に同じ。

卄かがち【酸漿】(名) 【植】「ほゝづき」の古名。

卄かかづらひ【關】(名) かゝづらふこと。

卄かか-づら・ふ【關】(自、は四) ㊀たづさはる。かゝはる。あづかる。㊁拘泥す。なづむ。㊂鞅掌す。つかさどる。

かかと【踵】(名) 足の裏の後部。くびす。きびす。

卄かが-な・く【赫】(自、か四) 聲をいからしてはげしく鳴く。

卄かが-なべて(副) 日日なべて。日を重ねて。

卄かが-の・む(自、ま四) (「かが」は飮む音)音をたてゝいそぎ飮む。ぐい〳〵のむ。かのむ。

卄かかは(名) 絹布のぼろ。

かかは・る【係、關】(自、ら四) ㊀これとそれとにわたる。互につながる。くわんけいす。㊁あづかる。たづさはる。かゝづらふ。㊂鞅掌す。つかさどる。㊃拘泥す。なづむ。(拘)。

卄かかは-わらうづ(名) かゝはを以てつくりたるわらぢ。

かが-ばんし【加賀半紙】(名) 加賀國より出す半紙、色白くして質良し。

卄かがひ【嬥歌】(名) ㊀「うたがき」に同じ。㊁ふなびとの謠ふ歌。頌歌。

卄かかふ(名) 「かゝは」の訛。

かか・ふ【抱】(他、は下二) ㊀雙腕にて支へ持つ。かく。さゝぐ。㊁腕の中にかこひこむ。いだく。だく。㊂含み有(も)つ。「たき物の香、かゝへたる」。㊃家臣又は召使とす。「乳母を―」。

(か-がふ【下合】(名) 【天】「がふ」(合)の條を見よ。

卄かが-ふ【嬥歌】(自、は四) 嬥歌(かがひ)をなす、男女かけあひにてうたふ。

かが-ぶし【加賀節】(名) 德川時代の初年に、一時行はれし俗曲。

卄かかぶ・る(他、ら四) かうぶる。

かかへ【抱】(名) ㊀かゝふること。㊁やとひ。めしつかひ。 ―-い・る【抱入】(他、ら下二) ㊀いだきいる。かゝへこむ。㊁やとひ入る。めし使ふ。 ―-おび【抱帶】(名) しごき。こしおび。 ―-ぐるま【抱車】(名) 車夫をかゝへいれて挽(ひ)かする自家用の人力車。 ―-しやふ【抱車夫】(名) かゝへおきて、自用車をひかする車夫。

〔かか-へる【抱】(他) 「かゝふ」の訛。

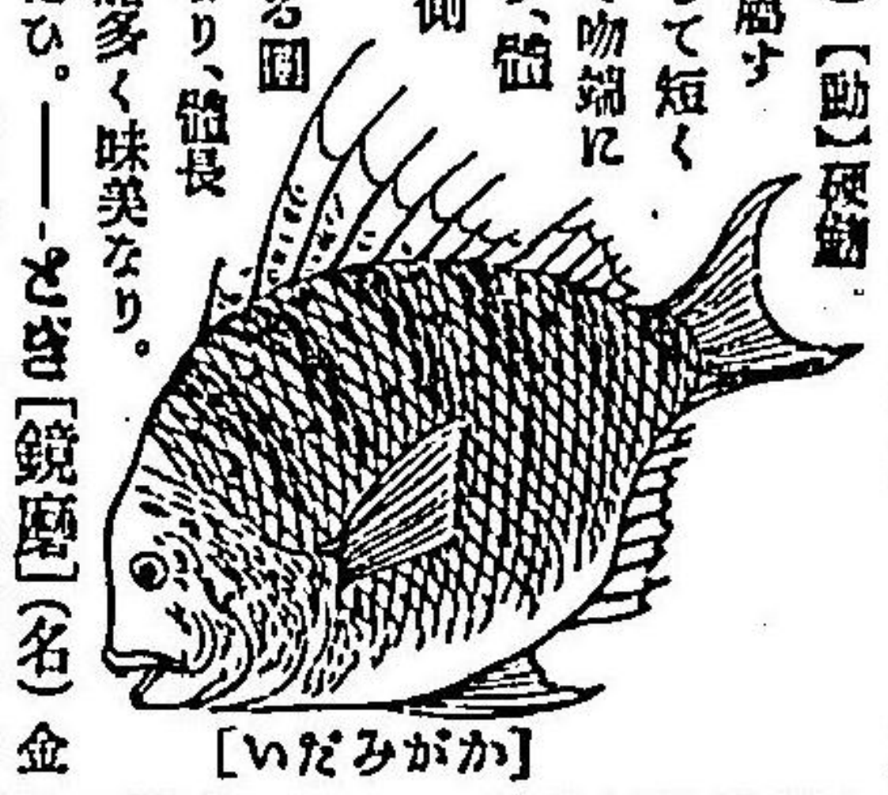
かが-ほほ【加賀頰】(名) めんぼほの一種、加賀國より作り出しゝもの。

かがま・る【屈】(自、ら四) かゞむやうになる。かゞむ。

卄かが-み(名) 【植】「かゞいも」の古名。

かが-み【鏡】(名) (影見の義) ㊀もの、姿形をうつして見る器、ひやくらふとからかねとを混じ、平面にして圓形なるものに作り、水銀を塗りて光を發せしめたるもの、今時は、多く硝子板の裏面に水銀を塗りたるものを用ふ。㊁滑かなる面にして、よく光線を反射するもの。㊂光りかゞやく圓形又は影をうつす平面。「月の―」。㊃よりて以て、是非曲直を正すべきものゝ稱。㊄訓戒又は模範の稱。いましめ。てほん。「世の人の―」。㊅酒樽の蓋。 ―-いし【鏡石】(名) 表面透明にて、物の影のよくうつる類の石。かゞみいは。 ―-いた【鏡板】(名) 芝居のだいぶばしらのある所、卽ち、かゞみのま。又、其後に張り付けたる板。 ―-いは【鏡石】(名) 「かゞみいし」に同じ。 ―-いを【鏡魚】(名) 【動】「かゞみだひ」に同じ。 ―-かけ【鏡懸】(名) 「かゞみたて」に同じ。 ―-ぐさ【鏡草】(名) ㊀古昔、正月元日禁中にて、かゞみもちのうへにむきしだいこんの稱。はるのかゞみぐさ。「けふよりは、我れを、もちひの―」。㊁【植】「いちやくさう」の一名。(白蘞)。 卄―-ど【鏡子】(名) ほゝづきの實。かがちのみ。 ―-さう【鏡草】(名) 【植】「いちやくさう」に同じ。 ―-だい【鏡臺】(名) 「かゞみたて」に同じ。 ―-たて【鏡立】

(名) かゞみを立てかくるためのわく又は臺。かゞみかけ。かゞみだい。きやうだい。(鏡架)。——**だひ**（イ）【鏡鯛】(名)【動】硬鱗類中まとだひ科に屬する魚、體は側扁にして短く高し、口は大にして吻端にあり、上顎は延長す、體色は蒼白にして體側の中央に鏡又は的の如き黑色の大なる圓點あり、鱗は微小なり、體長一尺五六寸、肉は脂多く味美なり。かゞみいを。まとだひ。——**とぎ**【鏡磨】(名) 金屬のかゞみのくもりを磨(ト)ぎなほすと。又、其人。——**のま**【鏡間】(名) 芝居のだいおんばしらのある所。十——**ば**【鏡葉】(名) 巾廣き柏の葉。——**びらき**【鏡開】(名) 昔時、武家にて、正月に男は具足に女は鏡臺に供へしかゞみもちを、其月の二十日に切りて食せしと。——**ブトン**【鏡蒲團】(名) へりを取りたる蒲團、形鏡に似たればいふ。——**もち**【鏡餅】(名) 圓く扁(ヒラ)くこしらへ、神佛に供へ又は吉例のときなどに用ふる餅、形金屬の鏡に似たるよりいふ。


[かがみだい]

十**かがみ・る**（みみみるみるみれみよ）【鑑】(他、ま上一) かんがみる。

かが・む（まみむむめめ）【屈】(自、ま四) ㊀折れ曲がる。㊁志たがふ。へりくだる。「人に—」。

かが・む（めめむむるむれめよ）(他、ま下二) かゞましむ。まぐ。かゞます。

十**かが・め・く**（かきくくけけ）(自、か四) 狼などなき叫ぶ。

〔**かがめる**【屈】(他) 「かゞむ」の訛。

かが・もん【加賀紋】(名) 五色に彩(イロド)りたるうはゑの紋所、加賀の國人多く用ひしより名づく。

十**かがやか・し**（しくしくしきしけれ）【赫】(形、二) はづかし。めんぼくなし。おもはゆし。まばゆし。

かがやか・す（さしすすせせ）【赫】(他、さ四) ㊀光を放つ。ひからす。㊁功名を揚ぐ。威勢を觀(シメ)す。

かがや・く（かきくくけけ）【赫】(自、か四) ㊀光輝發す。照りひかる。きらめく。ぴか〳〵す。(耀燿、輝)。㊁功名揚がる。威勢著はる。

〔**かか・ゆ**（えええゆるゆれえよ）【拘】(他、や下二) かゝふ。

十**かがよ・ふ**（はひふふへへ）【赫】(自、は四) かゞやく。

〔**かから・ふ**（はひふふへへ）【拘】(自、は四) かゝはる。

かかり【掛】(名) ㊀從事すると。㊁關係すると。㊂せむると。攻擊。「車—の陣」。㊃うけもち。(職分)。「出納—」。㊄つくりかた。かまへかた。㊅養はるゝと。厄介。「親—」。㊆いりか。にふひ。㊇かゝりもの。賦稅。㊈若手の第一步。てがゝり。㊉蹴鞠の場の稱、東西南北の位置正しく方形に設け、東北の隅に柳を東南隅に櫻を、西南の隅に紅葉を、西北の隅に松竹を植うるを古式とせり。けまりのば。⑪【文法】むすびに對し、其上に來るべき弖爾波(テニハ)「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」の用法。

かかり【鉤】(名) つりばりの曲りたる末の部分、即ち、魚の口中につきとほるべき部分。(倒鈎)。

かか・り（らりりるれれ）【斯有】(自、ら變) 「かくあり」の約。

かがり【篝】(名) ㊀かゞりびを焚く鐵籠。㊁かゞりび」の略言。㊂鎌倉時代に、京都及鎌倉の警衛として、其辻々に設備せし兵。「四十八所の—」。

かがり【縢】(名) かゞると。「俵の—」。

かがり【大鋸】(名) 最も大なるのこぎり。がんぎ。

かかり・あひ（イーフ）【掛合】(名) ㊀くわんけい。かゝはり。㊁まきぞへ。れんざ。れんるゐ。

かかり・あ・ふ（はひふふへへ）【掛合】(自、は四) ㊀くわんけいす。あづかる。たづさはる。㊁まきぞへとなる。れんるゐとなる。

かかり・うど【掛人】(名) (掛人(カヽリビト)の音便) 人によりかゝりて養ひをうくる人。やしなはれびと。ゐさふらふ。食客。(寄食兒)。

かかり・こ【掛子】(名) ㊀人に養はるゝ子。㊁親の年老いて養はるゝ子。

かがり・び【篝火】(名) かゞりに焚(タ)く火、夜のけいご又はすなどりなどに用ふ。(燎火、庭火)。

かがり・ぶね【篝船】(名) かゞりを焚きて、すなどりする船。(燎船)。

かかり・まけ【掛負】(名) 利益より費用多きと。

かがり・まつ【篝松】(名) かゞりびに用ふる松の材。たいまつ。(烘松)。

かかり・もの【掛物】(名) ㊀眼のなかに出づるくもり。ひ。(障翳)。㊁かゝり。賦租。

十**かがり・や**【篝屋】(名) 古昔、御所などのけいごの武士の屯(タムロ)せし所、夜はかゞりをたきしよりいふ。

かか・る（らりるるれれ）【掛】(自、ら四) ㊀物に附着して垂下す。たる。さがる。ぶらさがる。㊁凭(ヨ)る。もたる。「椅子に—」。㊂たよる。たのむ。㊃此處に至る。「通りに—」。㊄殺さる。仕向けらる。「人手にかゝりて死ぬ」。㊅養はる。厄介になる。㊆かゝはる。あづかる。(係)。㊇心にとゞまる。忘られず。「氣に—」。㊈かうむる。かぶさる。「顏は雲がかゝりて見えず」。㊉躍る。及ぶ。「とばしりが—」。⑪あふ。であふ。「病に—」。(罹)。⑫進み擊つ。攻む。「敵に—」。⑬碇泊す。いかりをおろす。⑭着手す。はじむ。「讀み—」。⑮費ゆ。いる。「金が—」。「手が—」。

かが・る（らりるるれれ）【縢】(他、ら四) うちかへに絲をかけて編み又は綴る。「鎧を—」。

(**か-かん**【下瞰】(名) 下を見おろすと。

(**か-かん**【假感＝Ideal feeling】(名)【哲】美の所立の感情、實在體より遊離したる假相に關して生ずるもの、實在體に關して生ずる實感に對して假感といふ、實感の如く好惡愛惜を伴はずして、且つ把持力薄し、假感を感ずる能力なきものに對しては、美は存在せず。

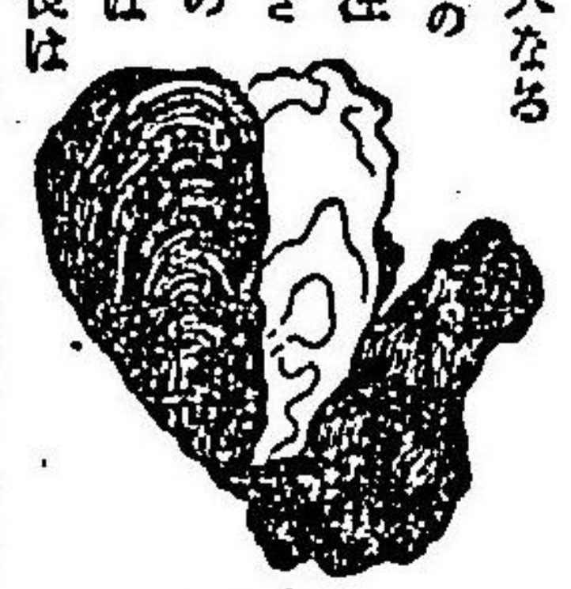
(**かがん-せん**【鵝眼錢】(名) 鵝鳥の目はまるくして、其臨四角なるより、これに似たる錢の稱。(鳥目)。

〔**かがんぼ**(名)【動】「かのうば」の訛。

かき【柿】(名)【植】柿樹科に屬する木、葉は大形淡綠色にして、通常毛を帶びたる三分內外の葉柄を有す、五月頃、淡黃色の小花をひらく、果實は大形にして二寸內外の長さを有し、味甘く食用とすべし、變種多く、ご志よがき・やまとがき・こねりがき・にたりがき・志ぶがき等あり。(柹、梯、赤實果)。㊁かき志ぶにて染めたる色。べにがらに少し黑を混じたる染色のかき志ぶに似たるもの。「—のころも」。

かき【垣】(名) ひとかまへの土地の圍ひに設けたるもの、多くは土・竹又は木などをもてつくる。

かき【牡蠣】(名)【動】瓣鰓類中卵柱類に屬する軟體動物、介殼は不正にして葉狀をなす、多くは左殼を以て海中の岩石に附着す、中には許多集堆して、山の如き形をなし、其大なるは高さ一二丈に至るものあり、我國沿海淡水の注流する所には多少產せざるはなく、殊に砂泥土の海底に多し、產卵期は六七月頃にして其生長は一二年間最も強盛なり、人爲を以て此時間に適當なる方法を行へば發育頗る宜し、肉味美にして、廣島地方の產特に有名なり。(蠔)。


[かき]

(**か-き**【嫁期】(名) 女のよめに行く年頃。よめいりどき。

(**か-き**【夏氣】(名) 夏の氣候。あつさ。

(**か-き**【夏季】(名) 夏の時節。「—休業」。

かぎ【鉤】(名) ㊀かゞみ曲がりたるかね。㊁かゞみ曲がりたるもの。

かぎ【鍵】(名) ㊀錠の中にさしいれて、これを開くに用ふる具。(鑰)。㊁「ぬすびと」の一名、其錠前のある處をあくるものなればいふ。かぎのて。

(**か-き**【歌妓】(名) うたひめ。げいしや。

(**か-き**【嘉儀】(名) よろこびごと。(賀儀)。

(**が-き**【餓鬼】(名) ㊀うゑたる鬼。㊁【佛】「がきだう」の略言。㊂無緣の亡者。㊃子供の賤稱。(東京の方言)。

(**が-き**【牙旗】(名) 大將の居る處に樹(タ)つる大旗、古昔、支那にては、其上に象の牙(キバ)にてつくりたる飾りをつけしよりいふ。

(**が-ぎ**【賀儀】(名) よろこび事。(嘉儀)。

かき-あ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）【搔揚】(他、か下二) かゝげあぐ。

かき-あ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）【書上】(他、か下二) ㊀記載して奉る。㊁書き終はる。㊂書き立つ。

かき-あげ【書上】(名) ㊀書きて目上の人に奉ると。又、其奉る書きもの。㊁書き終はり。

かき-あげ【搔揚】(名) ㊀「かきあげ志ろ」の略言。㊁天麩羅(テンプラ)の一種、生玉子と饂飩(ウドン)の粉とを搔(カ)き合はせ、これをころもとしてあぶらに揚げたるもの。——**志ろ**【搔揚城】(名) 塹(ホリ)のみ堀りて水未だ通ぜず、半ば出來せる城壘の稱。(堡砦)。

〔**かきあげる**(他) 「かきあぐ」の訛。

かき-あつ・む（めめむむるむれめよ）【搔集】(他、ま下二) 取りよせてひとつにす。

かき-あつ・む（めめむむるむれめよ）【書集】(他、ま下二) あつめて編輯す。(蒐集)。

かき-あつめ(名) かきあつむると。又かきあつめたるもの。

〔**かきあつめる**(他) 「かきあつむ」の訛。

かき-あは・す（せせすするすれせよ）【搔合】(他、さ下二) 手にて寄せ合はす。

〔**かきあはせる**【搔合】(他、さ下二) 「かきあはす」の訛。

かき-い・る（れれるるるるれれよ）【書入】(他、ら下二) ㊀書き加ふ。記入す。㊁抵當として記入す。「邸を—」。

かき-いれ【書入】(名) ㊀書き加ふると。記入。㊁ひきあて。抵當。

〔**かき-いれ**【搔入】(名) 豫期したるまうけ。——**どき**【搔入時】(名) 搔入の時期。

〔**かきいれる**(他) 「かきいる」の訛。

かき-いろ【柹色】(名) 柹(二)に同じ。——**がみ**【柹色紙】(名) 柹色の紙、伊豆國修善寺近傍の產。

かき-おき【書置】(名) ㊀人を訪(オト)れて其人不在なるとき用事の程を書き遺すと。又、其書き遺したるもの。おきてがみ。㊁所存又は要件を死後に書き遺すと。又、其書き遺したるもの。のこしぶみ。

かき-お・く（かきくくけけ）【書置】(他、か四) 書きおきをなす。書きのこす。「—あとを、かたみとも見よ」。

かき-おくり【搔送】(名) 櫂(カイ)もて漕(コ)ぐと。又、其船。おしおくりの對。

かき-おく・る（らりるるれれ）【書贈】(他、ら四) 其物事を書きて人におくる。

かき-おく・る（らりるるれれ）【搔送】(他、ら四) 櫂(カイ)を用ひて船をやる。

かき-おとし【書落】(名) 書くべき文字などを書きぬかすと。又、書き落としたる文字。

かき-おと・す（さしすすせせ）【書落】(他、さ四) 書き誤りて

文字などをぬかす。

＋かき-かぞ・ふ［掻數］（他、は下二） かぞふ。「指折り、—れば、七草の花」。

かき-がくかう［夏期學校＝Summer school］（名） 多くは夏期の休業などを利用して、其間だけ或學科を教授するために設立したる學校。

かき-がね［掛金］（名） 戸のさしかために用ふる鐵金物。かけがね。さすがね。（鎖）。

かき-がら［牡蠣殼］（名） 牡蠣のかひがら。（蠔殼）。

——ばひ［牡蠣殼灰］（名） かきがらを燒きて製したる石灰。かきばひ。かひいしばひ。（蠔殼灰）。

——やね［牡蠣殼屋根］（名） かきがらを載せたる屋根。（蠔殼屋根）。

＋かき-きら・す［掻盤］（自、さ四） かきくもる。

かき-き・る［掻切］（他、ら四） ㊀きる。「敵の首を—」。㊁刀の刃を己れの方へ向けて物を切る。

かぎ-ぐすり［嗅藥］（名） 嗅ぎて用ふる藥。（鼻藥）。

かき-くだ・す［書下］（他、さ四） 下へ順を追ひて書きゆく。「其文字。

かき-くは・ふ［書加］（他、は下二） あとより文句を補ひ足して書く。

かき-くはへ［書加］（名） かきくはふると。

かき-くも・る［掻曇］（自ら四） くもるの意を稍や強めたる語。「—雪氣の空を」。（掻陰）。

かき-くら・す［掻暗］（他、さ四） くらすの意を稍や強めたる語。

かき-くら・む［掻暗］（自、ま四） くらむの意を稍や強めたる語。

かき-く・る［掻暮］（自、ら下二） くるの意を稍や強めたる語。「長月の空かきくれて」。

かき-け・す［掻消］（他、さ四） 消すの意を強めたる語。「—やうに失せにけり」。

かき-ごし［垣越］（名） 垣の上を越ゆると。又、垣を隔てゝものするを。「—にものをいふ」。

かき-こみ［書込］（名） 書き入るゝと。又、書き入れたる文字。（傍註）。

かき-こ・む［書込］（他、ま四） 書き入る。

かき-こ・む［掻込］（他、ま四） 己れの方へ掻き入る。己れの方へ掻きあつむ。

かぎ-こ・む［嗅込］（他、ま四） ㊀鼻にかぎいる。㊁かぎつく。

かき-こも・る［掻籠］（自、ら四） 「こもる」に同じ。「おくの竹、—とも」。

かぎ-ざき［鉤裂］（名） 着物などを、釘などにかけてかぎなりに裂（サ）くと。又、其さけめ。

かき-さぐ・る［掻探］（他、ら四） 「さぐる」に同じ。

かき-さ・す［書止］（他、さ四） 書きかけてやむ。

かき-しぶ［柿澁］（名） しぶがきより取りたる液、紙・麻・木などに塗りて、其朽腐を防ぐ。（柿油）。

かき-す・う［舁据］（他、わ下二） 舁（カ）きてすゑおく。

かき-すて［書捨］（名） かきおき。

かき-そこなひ［書損］（名） かきそこなふと。又、其かき物。ちよそん。

かき-そこな・ふ［書損］（他、は四） かきやうをあやまる。

かき-そ・ふ［書添］（他、は下二） かきくはふ。

かき-そへ［書添］（名） かきくはへ。

かき-ぞめ［書初］（名） 新年に始めて文字を書くと。又其書きもの。（試筆）。

かき-だ［牡蠣田］（名） 海中に竹などを立てゝ垣根を結び、牡蠣（カキ）を養殖する所。

〔がき-だう［餓鬼道］（名）［佛］六道又は六趣の一、所住するもの福德あれば、山林塚廟の神となり得れど、然らざれば、不淨處に居り飲食を得ず、常に鞭打を受けて苦惱無量なりといふ。

かき-たし［書足］（名） 文書の不完全なる箇處を補ひかくと。又、其文句。

かき-だし［書出］（名） ㊀書き出すと。かきはじめ。㊁書きはじめのもの。ふでがしら。筆頭。㊂賣りたる品の値を記したるもの。かきつけ。勘定書。

かき-た・す［書足］（他、さ四） かきたしをなす。

かき-だ・す［書出］（他、さ四） ㊀書きて差出す。㊁書きはじむ。

かき-だ・す［掻出］（他、さ四） 物をかきて前へ出だす。

かぎ-だ・す［嗅出］（他、さ四） ㊀鼻にてかぎて知る。㊁見當を付けて探り知る。

かき-た・つ［掻立］（他、た下二） ㊀燈火などを掻（カ）きおこしてあかるくす。（挑立）。㊁かき混ず。はだつ。

かき-た・つ［書立］（他、た下二） とりあげて書きならぶ。「—れば、罪ばかり」。

〔かぎ-だつ（名） おや船のまどの稱。

かき-たて［書立］（名） 書きたつると。きはだゝせて書くと。

〔かきたてぎ［掻立木］（名） 「とうえんおさへ」の一名。

〔かきたてぼう［掻立棒］（名） 「とうえんおさへ」の一名。

〔かきたてる（他） 「かきたつ」の訛。

かぎ-タバコ［嗅烟草］（名） 烟を吸はず火を付けず、只鼻にて其香を嗅ぐための粉烟草。

＋かき-た・る［掻低］（自、ら下二） 雨雪などふりいでんとして空くもる。

かき-ちらし［書散］（名） 書きちらすと。又、書きちらしたるもの。

かき-ちら・す［書散］（他、さ四） ㊀筆にまかせて書く。㊁蹴（ケリ）もなく書きつく。

かき-ちん［書賃］（名） 書きものしたる賃錢。書きたる勞力の報酬。

＋かき-つ［垣內］（名） 垣のなか。

かき-づき［柿糕］（名） 一種の食品、餅米を洗ひ、其中にはしがきを入れ一緒に蒸して、これを餅につきあげたるもの。

かき-つ・く［書付］（他、か下二） しるしおく。記録す。

〔かぎ-つ・く［嗅付］（他、か下二） ㊀嗅ぎて考へあつ。㊁探（サガ）しあつ。

かき-つく・す［書盡］（他、さ四） 殘る所なく書く。思ふ存分に書く。

かき-つけ［書付］（名） 書き付けたる文書。

〔かきつける［書付］（他） 「かきつく」の訛。

〔かぎつける［嗅付］（他） 「かぎつく」の訛。

かき-つばた［燕子花］（名） （垣之端の義といふ）［植］鳶尾（イチハツ）科に屬する植物、葉は中肋脈を有せず、花は初夏に開き、種々の色あれど通常紫色なるもの多し、花蓋の內層の片は、通常細長くして蛇頭を有す。かはばな。ふでばな。（紫羅蘭、劇草）。

かき-つ・む［書詰］（他、ま下二） ㊀餘白なく記す。㊁たえまなく書き記す。

＋かき-つ・む［掻集］（他、ま下二） 掻きあつむ。「志ぎのはねがき、かきつめて」。

〔かきつめる（他） 「かきつむ」の訛。

かき-て［書手］㊀（名） 書又は畫を書く人又は書きたる人。筆者。㊁書又は畫をよくかく人。めいひつ。能書。

かき-とほし［垣通］（名） ［植］脣形科に屬する草、陰濕の地に生ず、莖は四角形をなす、葉は複葉にして通常五個の小葉より成り、色は深綠にして香氣強し、花は紫色にして四裂せる帶赤色の瓣を有す、藥用に供せらる。（積雪草）。

かき-と・む［書留］（他、ま下二） しるし置く。

かき-とめ［書留］（名） ㊀しるしておく書きもの。㊁「かきとめいうびん」の略言。

——いうびん［書留郵便］（名） 郵便物の送遞を確（シカ）かにするための手續、一定の手數料を拂へば、其取扱をなしたる郵便局所が、備へ付けの帳簿に、其郵便物の種類・番號及發送人と受取人との住所・姓名をかきとめおき、紛失若しくは誤送ありたるときは、其とり調べをなす。

〔かきとめる（他） 「かきとむ」の訛。

かき-ともし［掻燈］（名） 「かいともし」に同じ。

かき-とり［書取］（名） ㊀書きうつすと。又、其書きうつしたるもの。㊁教師の朗讀する語句又は文章などを生徒の書き取ると。

かき-と・る［書取］（他、ら四） 言語又は文字を書きてうつしとる。

かき-ながし［書流］（名） かきながすと。又、かきながしたるもの。

かき-なが・す［書流］（他、さ四） 筆の運びをゆるめずして書く。又、思ふまゝにさら〳〵と書く。

かき-な・す［書成］（他、さ四） 書きて其さまになす。かきうつす。

＋かき-な・す［掻鳴］（他、さ四） かきならす。「—琴のね」。

かき-なほし［書直］（名） かきなほすと。又、其物。

かき-なほ・す［書直］（他、さ四） 前に書きたるものをすてゝおき、改めて書く。

かき-なら・す［掻鳴］（名） 琴などを爪にて彈ず。

かき-にく・し［書難］（形、二） 書くになやまし。

かき-ぬき［書拔］（名） ㊀書きぬくと。又、其書きぬきたるもの。ぬきがき。ばっすゐ。（抄書、拔萃）。㊁芝居にて其役々のものゝ式わざ及口上を、臺帳より書きわけたるもの。

かき-ぬ・く［書拔］（他、か四） 文章の一部又は要領を寫しとる。ばっすゐす。ぬきがきす。

かき-ね［垣根］（名） ㊀垣のもと。㊁單に、垣。（墻）。

——ぐさ［垣根草］（名） 垣根に生ずる草。

かぎ-の-て［鉤手］（名） ㊀かぎの形にまがりたるもの。㊁ぬすみする性癖あるもの。

〔かき-のめし（名） なぐりがき。

〔かき-のめ・す（他、さ四） なぐりがきに書く。

＋かき-は［堅磐］（名） 堅固なる岩。（永久にと祝ふときに用ふる語）。「ときはに、—に」。

＋かきはき-の-こだち［掻佩小太刀］（名） つねに腰に帶ぶる小さきかたな。

かぎ-ばこ［鍵箱］（名） 多くのかぎををさめおく箱。

かき-はじ・む［書初］（他、ま下二） かくとにとりかゝる。かきいだす。

かき-はじめ［書初］（名） かきはじむると。又、かきたるものゝはじめ。

〔かぎ-ばな［鉤鼻］（名） 端曲りて鷲の嘴の如くなりたる鼻。

かき-ばひ［牡蠣灰］（名） 牡蠣（カキ）の殼を燒きてつくりたる石灰。かきがらばひ。いしばひ。

かき-はん［書判］（名） 規則だちたる文書の自名の下に、自筆にて一定の字形に書きたる判、多くは實名の字を種々にくづして、判の如くに書く。又、

其字形にぶ。くわあふ。(花押)。

かき-ひたし［柹浸］(名) 酒にひたしたる干柹。

かき-びん［掻鬢］(名) 徳川時代の初め、前髮だちの若年の者が結びし髮の風、耳の上より前髮の際(ハチ)まで、一緒にかきあげて束ねたるもの。

(か-きふ)［下級］(名) 級位の下なると。「—官吏」。

‡かき-ふ・す［掻臥］(他、さ下二) だきながら寢ねしむ。

‡かき-ほ［垣穗］(名) かきのすゑ。「—におふる夕顔の」。

かき-ほん［書本］(名) 印刷に附せざる本。寫本。

かき-ま・ず［掻雜］(他、さ下二) ㊀攪きまはして混合せしむ。まじふ。(攪和、捏) ㊁紛亂を起さしむ。みだす。(攪、擾)。

かき-まは・す［掻廻］(他、さ四) ㊀自由にあつかふ。㊁かきまず。

‡かき-ま-み［垣間見］(名)「かいまみ」の古言。

かき-みだ・す［掻亂］(他、さ四) まぜ亂す。かきまはす。かきまず。(攪、擾)。

かき-みだ・る［掻亂］(自、ら下二) みだる。

かき-めし［牡蠣飯］(名) 牡蠣を入れ、味をつけて炊(カシ)ぎたる飯。

‡かき-も［垣面］(名) 垣のおもて。

かき-もち［缺餅］(名) ㊀正月の具足餅を、うちくだきて細くせるもの。㊁餅を薄く切り乾して貯へおき、火にあぶりて食ふもの。へぎもち。けづりもち。(乾餅、鳴牙餅)。

かき-もの［書物］(名) ㊀文字などを書くこと。「—して居る」。㊁書きあらはしたる文。かきつけ。(文書)。

かき-もん［書紋］(名) 衣服の紋所を筆にてかきたるもの。ぬひもん又はそめもんの對。

(か-きやう)［佳境］(名) 快く思はるゝと。快く感ずる場合。「—に入る」。

(か-きやう)［家郷］(名) ふるさと。こきやう。

(かきやう-へんかく)［加行變格］(名)【文法】不規則動詞の一、「く」(來)といふ動詞のみに限る。

かき-やく［書役］(名) 文書の草案をつくり又は筆寫をなす人。ものかき。ゑよき。(書記)。

(か-ぎやく)［苛虐］(名) いぢめくるしむると。しへたげ。

(かぎやく-はんおう)［可逆反應］(名)【化】熱すれば分解し冷(ヒ)せば再びもとの化合物となるが如く、狀況を異にするとき正反對の反應を呈すると、例せば、鹽化「アンモニウム」を熱すれば、「アンモニウム」と鹽化水素とに分るれど、其分れたる「アンモニウム」と鹽化水素とを冷却すれば、再びもとの鹽化「アンモニウム」となるが如し。

がき-やみ［餓鬼病］(名) うゑに迫りたると。

かぎ-やり［鉤槍］(名) 槍の一種、穗のもとにかぎを付けたるもの、其かぎにて、敵の槍をからみてまき落とすに用ふ。(鉤鎌鎗)。

(か-ぎよ)［河魚］(名) かはざかな。かはうを。**——のやまひ**［河魚疾］(名)(左傳に出づ) はらのいたみ。ふくつう。(腹痛)。

(か-きよく)［歌曲］(名) ㊀うたひもの、曲譜。㊁うた。又、うたのふし。

かぎり［限］(名) ㊀きは。さかひ。げいかい。㊁あひだ。うち。ほど。㊂きはみ。はて。きよくど。㊃それ以外に及ぼさゞると。「其場—」。

—かぎり［限］(接尾) 極度まで。あるだけ。「力—」。「聲—」。「つゞく—」。

かぎ・る［限］(他、ら四) ㊀かぎりをなす。さかひをなす。㊁へだつ。さへぎる。せきる。㊂其物又は其人に如(シ)くものあらず。「あの人に—」。㊃特に其物事を指すにいふ語。「其日にかぎりて外出せぬ」。

‡かぎろ-ひ［陽炎］(名) かげろふ。いとゆふ。**——の**(枕)「はる」「もゆる」「ほのか」「夕」「ひ」「いは」に冠らする詞。

かき-わ・く［掻分］(他、か下二) わけひらく。わく。

かき-ゑ［描畫］(名) 筆にて描寫せる繪畫。すりものの繪の對。

(か-きん)［家禽］(名) 家に畜(ヤシナ)ふ鳥の總稱、雞・あひる等の類。

(か-きん)［瑕瑾］(名) ㊀疵のある玉と美しき玉と。㊁きず。やぶれ。㊂其人の短所。㊃不完全なる箇處。(闕點)。

(かく)［角］(名) ㊀つの。「牛—」。「鹿—」。㊁ゑかく。方形。「—あんどん」。㊂四角なる材木。「五寸—」。㊃すみ。かど。㊄【數】相會する二直線のなす形。かくど。㊅【天】二十八宿の一。すぼし。㊆鐙のかどにて、馬の脇腹を蹴(ケ)りて進めやると。㊇五音の一、東方に屬するもの。㊈射的の的にある四角形のもの。

(かく)［格］(名) ㊀のり。きそく。法式。法例。㊁くらゐ。みぶん。ぶんざい。「家—」。㊂古昔、代々の天皇が、律令を執行するために時勢に應じて臨時に發せられたる命令。きやく。「三代—」。㊃【文法】文章中に於て名詞が他の語に對する關係、即ち、主格・賓格・目的格などの類。㊄たな。庋架。㊅くひ。杙橛。

(かく)［閣］(名) ㊀樓觀又は宮殿。たかどの。ごてん。㊁庋藏又は庖廚。ものおき。くりや。㊂棧陞又は棧道。はしがゝり。かけはし。㊃内閣の略言。「—臣」。

(かく)［額］(名) かず。員數。「金—」。

(かく)［膈］(名) 食道に癌を發して、飲食の通過を害する疾。疾癌。食道癌。(噎膈)。

(かく)［核］(名) ㊀【植】果實の中果皮の中にある硬くして石の如きもの、即ち、内果皮の硬化して内部の種子を保護するもの。さね。㊁原形質即ち細胞の中身にある小體。

(かく)［客］(名)「きやく」に同じ。

(かく)［佳句］(名) よき文句。

(かく)［各］(副) おの〳〵。それ〳〵。

(かく—)［客］(接頭) むかし。過去。「—年」。「—月」。

(かく—)［隔］(接頭) 一つおき。間おき。

か・く［掻］(他、か四) ㊀爪をたてゝ擦(コス)る。「かゆき所を—」。(爬)。㊁手にておしやる。「水をかきて泳ぐ」。㊂彈ず。ひく。「琴をかきならす」。㊃ぬぐひ去る。はらひ去る。㊄かききる。「馘首を—」。㊅かうむる。受く。「はぢを—」。

か・く［書］(他、か四) ㊀文字を記るし又は畫をゑがく。㊁文に作る。書に述ぶ。又、畫に描(ヱガ)く。

か・く［舁］(他、か四) ㊀二人以上にてかゝへもつ。㊁二人以上の肩によりて物を支ふ。(舁)。

か・く［構］(他、か四) くみつくる。かまふ。「巢を—」。

か・く［繋］(他、か四) かけとゞむ。かけつなぐ。

か・く［缺］(他、か四) ㊀すくなくす。へらす。ふそくせさす。㊁損ず。こはす。そこなふ。㊂おとす。ぬかす。もらす。㊃時間をつひやす。勤務をおこたる。㊄租税を納めず。のがる。「租を—」。(逋)。

か・く［缺］(自、か下二) ㊀不足となる。すくなくなる。へる。㊁損じこはる。そこなはる。㊂ぬかる。もる。㊃時間つひゆ。勤務おろそかになる。㊄月影が滿月より漸次小さくなる。(虧)。

か・く［掛］(他、か下二) ㊀一端を物に附着して下(サ)ぐ。さぐ。㊁これとかれとにわたす。㊂よせもたす。よせかく。㊃關係をなす。「行末かけて」。㊄そゝぎかく。ふりかく。はなつ。「水を—」。「火を—」。㊅あぐ。かゝぐ。「額を—」。㊆かけ事に物を出す。(賭)。㊇及ぼす。破らしむ。「情を—」。㊈費やす。用ふ。「時間をかけて」。㊉所願をなす。⑪數を乘ず。かけ算をなす。⑫仕向けをなす。迫る。「攻め—」。⑬試みる。「謎を—」。⑭始む。「書き—」。⑮錠をおろす。⑯船を泊(トド)む。「船をかけて風を待つ」。⑰案ず。思ふ。「氣に—」。⑱秤(ハカリ)にて量を試みる。⑲欺く。だます。⑳日掛け月掛けの錢を出す。

かく［斯］(副) 上文の意を受けて、下につゞくるに用ふる語。かやうに。「—しつゝ」、「とにも—にも、ながらへて」。(如此)。

(か-ぐ)［家具］(名) 家の道具。(家什)。

(か-ぐ)［下愚］(名) 甚だおろかなると。「上智と—とは移らず」。

か・ぐ［嗅］(他、か四) 物質が瓦斯體となり、鼻粘膜に分布する嗅神經を刺戟して、一種の感覺を起す。㊀にほひを聞く。にほひを分別す。㊁物をさぐり知る。「景氣を—」。「様子を—」。

(がく)［額］(名) ㊀ひたひ。㊁「がくぎん」の略言。㊂紙・帛又は板などに、文字又は繪畫などをゑるして、門又はなげしなどに、高くかゝぐるもの。「掛—」。㊃【植】「がくさう」の略言。㊄員數又は分量。たか。

(がく)［樂］(名) 樂器により、調子よき音を發して、人心をたのしましむるものゝ總稱。

(がく)［學］(名) ㊀數をうくると。まなぶと。「はやく—に志す」。㊁まなぶべき道理又はまなぶべき法則。「—を修む」。㊂或物事に就きて概括をなし統系をたてたる智識の團體。「哲—」。「科—」。㊃「がくかう」に同じ。「大—」。「中—」。

(がく)［顎］(名) 動物の口の近傍にある器官の一、食餌をとるためのもの、人類のは上顎骨一對と下顎骨一枚とより成る。(腭)。

(がく)［萼］(名)【植】花の保護機關の一、花冠の外部にあり、通常綠色にして數個稍生し其一を萼片と稱す、植物により其形狀種々にして或はこれを缺くものもあり。はなぶさ。

がく-あぢさゐ［額紫陽花］(名)【植】あぢさゐの一種、其花周圍の外に向ひたる方より開き初むるもの。がくさう。はつもの。がくさう。八仙花。

(かく-い)［隔意］(名) こゝろおかれて、うちとけぬと。へだつること。

がく-いた［額板］(名) ㊀がくめんの板。㊁鎧のこての飾りの名。

(か-くう)［架空］(名) 根據なきと。「—の論」。

がく-うら［額裏］(名) ㊀額面のうら。㊁衣服の裏に、上部だけ他と異りたるよき帛をつけたるもの。

(かく-うんどう)［角運動］(名)【理】「くわいてん」(廻轉)に同じ。

(かく-えり)［角襟］(名)「はうりやう」(方領)に同じ。

(がく-おん)［樂音］(名)【理】規則正しき音波により、聽官に愉快なる感を與ふる音。

(かく-か)［閣下］(名) おそば。おてもと。(身分高き人に用ふ。「相公の—に白す」)。

(かく-か)［閣下］(代) 身分高き第二人稱の人をさす語。

(かく-が)［客我］(名)【哲】人が自己に囘して考察するときの對象、即ち、客觀的に見たる自己。

(かく-かう)［角行］(名) 將棊のこまの名、遠近自由に斜行するとを得、又、なりては更に一盤づゝ前後左右に動くとを得るもの。

(がく-かう)［學校］(名) 學問を教授する處。「大—」。「專門—」。「法律—」。**——い**［學校醫］(名) 囑託を受けて其學校の衛生事務に與(アヅカ)る醫士。**——くみあひ**［學校組合］(名) 或學校を設立維持のために設置する町村其他公共團體の

組合。 ——せいくわつ[學校生活](名) 學校にありて學問修業に身を委(ゆだ)ぬること。 ——ゑいせい[學校衞生](名) 學校の敎員職員特に生徒の健康の保護增進を圖ること。

(かく-かく[赫赫](名) ㊀きらめくさま又はあきらかなるさまにいふ語。㊁暑氣甚しきさまにいふ語。 ㊂威光かゞやくさまにいふ語。

かく-かく[斯斯](副) かやう〳〵。しか〳〵。

(がく-がく[諤諤](名、副) 率直にして、主君に對して節を曲げざるさまにいふ語。「—の臣」。

(かく-がん[擱岩](名) 船舶が岩にのりかゝること。

(かく-き(カッキ)[客氣](名) 血氣に任ずる勇。一時のはやり氣。

(かく-ぎ[閣議](名) 內閣の會議即ち國務大臣の會議、我國現今の制にては、會議の場所は一定せず、陛下の御前又は議會の一室又は總理大臣の官邸等に於てす、法律案・豫算決算案・外國條約及重要なる國際條件、官制又は法律規則の施行に關する勅令、各省間の主管權限の爭議、天皇より下付せられ又は帝國議會より送致せる請願、豫算外の支出、勅任官及地方官の任命及進退、其他各省主任の重大なる行政事務等は必ず閣議を經べきものと定めらる、此會議は多數決にあらず全會一致にして、一人にても不同意あるときは成立せざるものとす。

(がく-き(ガッキ)[樂器](名) 音樂を奏する器械、たいこ・ふえ・せう・ひちりき・かね・かっこ等の類。

(がく-き(ガッ)[學期](名) 一學年のうちの小區分。

(がく-きふ(ガッキウ)[學級](名) 同時同所に於て、同一の敎授を受くる生徒の一團。

(がく-ぎよ[鰐魚](名)【動】爬蟲類に屬する動物、體はとかげに似たれど遙かに長く強大にして硬き甲鱗を被る、尾は側扁にして水中進行の用をなす、鋭齒ありて顎骨に嵌入す、四肢は短けれど趾間に蹼ありて游泳に適す、性兇暴にして、概ね熱帶地方の大河沼澤に棲息し、長き丈餘に達するものあり、往々人畜を攫ふ。わに。(鰐)。

(かく-きより[角距離](名)【理】觀測者より二物體に至る二直線のなす角度。

(かく-ぎり[角切](名) 四角形に物を切ること。

(がく-ぎん[額銀](名) 德川時代の銀貨の一、形額面に似たればいふ、がくばん。五匁銀。

(かく-くわ(カックワ)[核果](名)【植】中果皮は多肉にして、內果皮は硬化し核をなす果實、即ち、梅桃の果實の如きこれなり。

(がく-くわ(ガックワ)[學科](名) 敎授上若しくは硏究上より、規定し區別しある學問の科目。

(かく-くわい[客懷](名) 他鄕にありての情思。たびのおもひ。「—恐し」。

(かく-ぐわい[格外](名、副) 普通にはづれたるさまにいふ語。「—よろし」。「—安し」。

(がく-くわい(ガックワイ)[學會](名) 或學問を硏究するために設立したる會合。

(かく-くわん(カックワン)[客觀=Object](名) 自己以外の他物又は意識の目的物、即ち、主たるもの、對象にして、自己又は意識に觀察せらるゝ一切の外物。

(かく-け(カッケ)[脚氣](名) 日本及び「スマトラ」「ブラジル」等に蔓延する疾病、病因不詳なれども、末梢神經を犯し、下肢・下腹及び唇を痲痺し、殊に脛下に浮腫を發し、脈搏迅速となり、尿量を減ず。

(がく-げき[樂劇](名)「オペラ」に同じ。

(かく-けつ(カッケツ)[喀血](名) 肺又は氣管支粘膜より出血したるものを咳とともに吐き出すこと。

(かく-げつ[客月](名) あとげつ。(去月)。

(かく-げつ[隔月](名) ひとつきおき。

(がく-げふ[學業](名) 學びのわざ。學問。

(かく-げん[格言](名) 法とすべき詞。妙理を發揮したる言。「古人の—」。(金言)。

(かく-ご[客語](名)【文法】命題の中にて、一般の事を言ひ表はしたる語、例せば「鷲は鳥なり」といふ命題にては、鳥は客語なり。主語の對。

(かく-ご[覺悟](名) ㊀事物の道理をさとること。さとり。㊁前より心に待ちまうくること。こゝろがまへ。ようゐ。 ——のまへ[覺悟前] かねて覺悟してあること。

(かく-こく(カッコク)[各國](名) くに〳〵。おの〳〵のくに。「世界—」。

(がく-こつ(ガッコツ)[顎骨](名) あごのほねの稱にして、人類のは、下顎骨一對と上顎骨一枚とより成る、上顎骨は顏面の中央にありて、不齊の方形をなして、不動關節なり、下顎骨は蹄鐵狀にして顳顬骨と可動關節をなす。

(かく-こん[恪勤](名) おこたらず勤むること。

(かく-さい[客歲](名) きよねん。昨年。

(かく-さい[隔歲](名) 一年おき。(間歲)。

(がく-さい[學才](名) 學問の才能。「幼にして—あり」。

(がく-さう(ガクサウ)[學窓](名) 學問を修業する處。まなびのまど。

(がく-さう(ガクサウ)[額草](名)【植】(い)「がくあぢさゐ」に同じ。(ろ)「おきなぐさ」の一名。(美濃の方言)。

‡かく-さ-ふ[隱](他、は四) 「かくす」の延言。「戀の—べしや」。

かくし[隱](名) ㊀かくすこと。㊁着物に縫ひつけある一種のふくろ、中に細かなる持物などを入る。「ポッケット」。

(かく-し[客思](名) たびのおもひ。かくくわい。

(かく-じ[角字](名) ㊀しんしよ。楷書。㊁はんじ。隸字。㊂しるしばんてんなどの紋所。又、模樣に用ふる一種の書體。

(かく-じ[各自](名、代) おの〳〵。めい〳〵。

(がく-し[學士](名) ㊀すべての學者の稱。㊁現今の制にては、大學本科規程の學問修業を終へたるものゝ稱號。「理—」。「工—」。

(がく-し[學資](名) 學問の修業に要する費用。

(がく-し[樂師](名) 音樂をつかさどる人。

(がく-じ[學事](名) 學問に關する事柄。

かくし-うら[隱裏](名) 外面より見えぬやうにつけたる衣服のうら。

(がく-しがう[學士號](名) 學士のとなへ。

(かく-しき[格式](名) ㊀身分其他に關する所定の儀式。(制度)。㊁格と式と。「三代—」。

(がく-しき[學識](名) ㊀學問と識見と。㊁學問上の識見又は學問より得來りたる識見。

‡かくし-きしやう[隱起請](名) にふさつ。いれふだ。

(がく-しきん[學資金](名)「がくし」に同じ。

かくし-げい[隱藝](名) 人に知らせず覺え得たる遊藝。

かくし-ごと[隱事](名) 他に知らせずしてなすしわざ。

かくし-ことば[隱語](名) 人に知られず味方のものゝみに知らするための符牒の言語。(秘密語)。

かくし-ぜい[隱勢](名) ふせぜい。ふくへい。

かくし-だ[隱田](名) 租稅をのがれんために、官に隱せる田地。

かくし-だい[隱題](名) 題の名を歌の中によみこむこと。又、其題。

かくし-だて[隱立](名) 他人に對して、事を知らしめざるやうにつゝみかくすこと。

(かく-しつ[確執](名) ㊀かたく自說を主張して曲げざること。㊁雙方のあひだ不和になること。

(かく-じつ[隔日](名) 一日づゝをへだつること。いちにちおき。(間日)。

(かく-じつ[確實](名) まちがひなきこと。矛盾(ムジユン)なきこと。危險なきこと。たしかなること。

かくし-づま[密夫](名) まをとこ。まぶ。

かくし-づま[密妻](名) かくしめ。かこひもの。

かくし-どころ[隱所](名) 男女の陰部。

かくし-な[隱名](名) いつはりの姓名。

かくし-ぬひ(イーヌ)[隱縫](名) 外面に出でざるやうにぬふこと。

かくし-ばいぢよ[隱賣女](名) 密賣淫婦。ぢごく。

(がく-しふ-ゐん[學習院](名) 天皇陛下の聖旨に基き、華族の子女に、華族的敎育を施す所、又、華族にあらざるものなりとも、敎育の都合によりては、入學を許さる、宮內大臣の監督を受け、院長これを總理す。男子部・女子部あり。

かくし-まど[隱窓](名) 外より見えぬやうにつくれる窓。

かくし-むすび[隱結](名) 緣又は紐の類を、外より見えぬやうに結ぶこと。

かくし-め[隱女](名) かくしづま。(外妾)。

かくし-めつけ[隱目附](名) しのびて事情を探偵する警吏。(隱密)。

(かく-しや[客舍](名) たびのやど。はたごや。

(かく-しや[客車](名) 旅客運送用の列車。

(がく-しや[學者](名) 學事に通達せる人。學問に長じたる人。

(かく-じやう[客情](名) 旅行中の感情。(客心)。

‡がく-しやう[學生](名) 學ぶ人。がくせい。

(かく-しやう-だいじん[各省大臣](名) 內閣の次班にありて、行政事務の分配を擔任し其責任を負ふ單獨官府、其擔任事務に就きて省令を發し、下級の官府に對して、訓令及監督の權を有す、次官以下の行政官吏はすべて其補助なり。

(かく-しゆ[鶴首](名) ㊀しらがあたま。㊁首をのばして、物事の到來を待ちわぶること。

(がく-じゆつ[學術](名) ㊀學問と技術と。㊁學問の方法。 ——ご[學術語](名) 學問の硏究上特に使用する語。

‡がく-しよ[樂所](名) 古昔、音樂をつかさどりし所。

(かく-しよう[確證](名) たしかなる證據。

(がく-しよく[學殖](名) 學問の素養。

かくし-ゑ[隱繪](名) うち見ては、さもなけれど、よく見れば、尙ほ他の形の隱しかきてある畫。

かくし-をとこ[隱男](名) まぶ。(密夫)。

かくし-をんな[隱女](名) かくしめ。(密妻)。

(かく-しん[客心](名) 旅行中などの心情。(客情)。

(かく-しん[確信](名) かたく信じて疑はざること。又、動かざる信仰。

(かく-しん[革進](名) 舊態をあらため進歩の域に向ふこと。

(かく-しん[隔心](名) うちとけずしてへだてあること。

(かく-しん[閣臣](名) 國務大臣の稱。

かく-す[隱](他、さ四) ㊀見えぬやうにす。知れぬやうにす。ひむ。㊁知れぬやうにして所持す。㊂おほふ。㊃辭(イ)ひていはず。私して說かず。㊄埋葬す。はうむる。「そのなきがらかくして」。

(かく-すゐ[角錐](名)【數】一つの平面多角形及其各邊を底邊とし、同一の點を頂點とする三角形の界する多面體。

(かく-せい[隔世](名) 世代を異にすること。「—の思ひあり」。

(かく-せい[客星](名) 時に臨みてあらはるゝ星。

(がく-せい［學生］（名）㊀學問に從事する生徒。學ぶ人。しよせい。（書生）。㊁大學本科生徒の特稱。

(がく-せい［學制］（名）諸種の學校に於ける學問の程度又は其順序・連絡等に關する規定。「―の變更」。

(がく-せい［學政］（名）「けういくぎやうせい」（敎育行政）に同じ。

(がく-せき［學籍］（名）其學校に在學して、生徒名簿に名を登錄しあること。又、其登錄しある名簿。**――ぼ**［學籍簿］（名）學校に備へ置ける生徒の名簿。

(かく-せつ［確說］（名）たしかなる說。

(かく-せつ［隔絕］（名）へだたりてあること。かけはなれたること。「天地千里の―」。

(がく-せつ［學說］（名）學問上の說。

(がく-ぜん［愕然］（名、副）おどろきたるさまにいふ語。「―答ふる所を知らず」。

(かく-せん-せき［角閃石］（名）【鑛】我國の火山にある岩石中に廣く存在する鑛物、普通柱狀の結晶をなし、褐色又は綠色を帶ぶ、形狀甚だ輝石と類似すれど、長き柱狀をなす特徵あり。

(がく-そく［學則］（名）學生に關する學校の規則。

(かく-そく-ど［角速度］（名）【理】物體の廻轉する割合、即ち、定點より物體に引ける線が單位時間に畫く速度。

かく-そで［角袖］（名）㊀角形の袖。㊁日本在來の衣服。㊂「かくそでじゆんさ」の略言。**――じゆんさ**［角袖巡査］（名）官服を着けずして普通の衣服を着けたる巡査。

(かく-たい［客體］（名）意思又は行爲の主體に對し、其意思又は行爲を及ぼさるゝものゝ稱、例へば、國土又は臣民は國家の客體にして、義務者は權利者の客體なるが如し。

(がく-たい［樂隊］（名）音樂を奏する一隊。又、音樂を奏することを業とする一隊。

(がく-だいこ［樂太鼓］（名）雅樂に用ふる大鼓。

(がく-だう［額堂］（名）神社佛閣などにある繪面をかゝげ置く堂。

(がく-だう［學堂］（名）學問を教授する所。がくかう。

(かく-たふ［確答］（名）たしかなるへんたふ。

(かく-だん［格段］（名、副）かくべつ。かくぐわい。とりわけ。（格別）。**――すう**［格段數］（名）【數】數学を以て表はされたる數。一般數の對。

(かく-ちく［角逐］（名）互に競爭すること。

(かく-づきん［角頭巾］（名）頭巾の一種、すみ頭巾といふべきを、よみあやまれるもの。

かく-づと［角髢］（名）德川時代に、御殿女中などが髮のたぼを、角（カク）にせしもの。まるづとの對。

かく-て［搔手］（名）琴の手の一種。「―、十文字」。

かく-て［斯］（接）斯くの如くありて。さて。それより。「―、其後」。（然而）。

(かく-てい［角觝］（名）ちからくらべ。すまひ。

(かく-てい［確定］（名）たしかに定まること。定まりて動かぬこと。**――こうさい**［確定公債］（名）政府償還の準備ある公債。**――はんけつ**［確定判決］（名）【法】不服申立ての期間を經過したる判決又は上告審の判決の稱、即ち、確定の効力を有するもの。

(かく-てう［格調］（名）詩歌の字句の組織又は調子。

(かく-でう［各條］（名）あげてあるそれ〳〵の箇條。

(がく-てう［樂調］（名）音樂の調子。

(がく-てん［樂典］（名）音樂の法式。

(かく-と［殼斗］（名）【植】雌蕊の總苞の成熟したるもの、例へば、栗の毬（イガ）の如きこれなり。

(かく-ど［角度］（名）【數】相會する二直線のなす形、又、其形の空間の度數、圓の中心より周を三百六十等分したるものを單位としてこれをはかる。

(かく-ど［客土］（名）㊀たび。他國。「―に流寓す」。㊁おきつち。あげつち。

(かく-ど［赫怒］（名）はげしくいかること。おほいにいかること。

(かく-とう［角壔］（名）【數】一つの直線に平行なる數個の平面と、此直線に會する二つの平行平面とにて界する多面體。

(かく-とう［角燈］（名）「ガラス」を張りたる四角形の燈、さげ持つやうにつくる。

(かく-とう［格鬪］（名）くみうち。うちあひ。

(がく-とう［學頭］（名）㊀數多の教師の內にて、上席を占むるもの。㊁校長。塾頭。

(がく-とく［學德］（名）學問と德行と。

(かく-と-くわ［殼斗科］（名）【植】多年生木本植物にして、根は木質多年根、莖は木質多年生、葉は不完全單葉網狀脈、花は單性花雌雄同株、花蕊は穗狀、果實は堅果にして殼斗あり。

カグ-ナミ［江南］（名）（字の朝鮮音）刀のつばの一種。

卄かぐ-なわ［結菓］（名）「かくのあわ」の略言。「―に思ひみだれて」。

(かく-にん［確認］（名）まことみとむること。たしかに是認すること。

(がく-にん［樂人］（名）音樂を奏する人。雅樂を奏する人。伶人。（音樂師）。

(かく-ねん［客年］（名）きよねん。さくねん。

(かく-ねん［隔年］（名）一年づゝへだてたること。いちねんおき。（間年）。

(がく-ねん［學年］（名）學校にて規定せる一年間の修業期、又、一年間の修業期によりて、區別したる學級。

卄かく-の-あわ［香菓泡］（名）古代の菓子の名、油揚げにして、形は緒を結びたる如くなりといふ。かぐなわ。（結菓）。

卄かぐ-の-このみ［香菓］（名）「かぐのみ」に同じ。

卄かぐ-の-み［香菓］（名）たちばなの實。

がく-の-ま［額間］（名）御殿の名を書きたる額をかけてある柱の間。

(かく-のり［角乘］（名）四角なる材木を水に浮かべ、其上にて種々の輕わざをなすこと。

(がく-は［學派］（名）學問の流派。「陽明―」。

(かく-はう［確報］（名）たしかなるしらせ。

か-ぐは-し［香］（形、二）（香細しの略）かうばし。「梅の風もことに―」。

かく-ばしら［角柱］（名）㊀四角形をなす柱。㊁卄竹の一名。「世と共に聞くぞ恐しき―」。

(かく-はん［各般］（名）もろ〳〵。いろ〳〵。

(かく-ばん［隔番］（名）一度置きに交代すること。一日置きに交替すること。かはりばん。

(がく-ばん［額判］（名）「がくぎん」に同じ。

(かく-ひつ［擱筆］（名）筆をさしおきて書きやむること。「三晝夜―せず」。

卄かく-ひ-どり［蚊食鳥］（名）【動】「かうもり」の一名。

卄かく-びやう［脚病］（名、ト）「かくけ」（脚氣）に同じ。

卄かく-ふ［圍］（他、は四）「かこふ」に同じ。

(がく-ふ［樂譜］（名）音樂の譜。

(かく-ぶつ［格物］（名）㊀事物の道理をきはめ知ること。（究理）。㊁意念の生滅に就き、反省して惡を絕ち善に進むこと。

(かく-べ［角兵衞］（名）「かくべゑじし」の略言。**――じし**［角兵衞獅子］（名）㊀名工角兵衞といふものゝ製作せししゝがしらの稱。㊁「ゑちごじし」の一名。（觔斗人）。

(かく-へき［隔壁］（名）㊀へだてのかべ。㊁へだて、しきり。

(かく-べつ［格別］（名、副）とりわけ。べつだん。

(がく-へん［萼片］（名）はなぶさの片。（蕚の條を見よ）。

(がく-ぼく［學僕］（名）師家の僕となりて、學問する人。

(かく-まく［膈膜］（名）【生】胸腔と腹腔との中間にありて二腔を區別する筋肉質の膜、平常は胸腔に向って隆起すれど、收縮すれば扁平となり下方に胸腔を擴張す、此膜の一張一縮は呼吸の原因なり。

(かく-まく［角膜］（名）【生】眼球の白色なる外壁の前面にある膜、堅革且透明にして著しく隆起す。**――えん**［角膜炎］（名）眼病の一種、かくまくのはれていたむ症。

かく-まふ［圍］（他、は四）ひそかに人を隱す。かくす。（舍、匿）。

卄かく-み［圍］（名）かこみ。**――ゐ**［圍居］（名）かこみてすわること。まどゐ。

卄かく-む［圍］（他、は四）「かこむ」に同じ。

(がく-む［學務］（名）敎育上に關する事務。**――ゐゐん**［學務委員］（名）市町村又は市町村學校組合が、小學校敎育事務のために設置する委員。

(かく-めい［革命］（名）㊀前の王統廢（スタ）り他の王統代りて、統治者となること。㊁目的が國家の基礎に關し行動が憲法の範圍を超え、且普通に急激擾亂なる政治上又は社會上の變化。㊂陰陽家にて、辛酉の歲の稱。（此歲には、變亂多しといへり）。

(がく-めい［學名］（名）學術上便利のため動植物に附したる世界共通の名稱、「ラテン」語にて記す。

(がく-めん［額面］（名）㊀「がく」（額）に同じ。㊁證券面の金額。**――かかく**［額面價格］（名）公債・株券等の額面どほりの價格、例せば、額面百圓なれば其百圓をいふ。賣買價格の對。

(かくめん-はう［角面堡］（名）少數の邊より成る多角形の堡壘、其面の數及配置は、地形及射擊すべき方向の如何によりて一定せず。

(がく-もん［學問］（名）㊀まなびならふこと。學藝を修むること。㊁修得せる學藝。**――じよ**［學問所］（名）學問するために設けられたる處。（學館）。

かく-や（名）舊き香物を細かくきざみたるもの。

がく-や［樂屋］（名）㊀能・芝居などの舞臺のうしろにある部屋、役者の裝束をつけ化粧をなし又は休息する所。（戲房）。㊁うちまく。ないしよ。**――いり**［樂屋入］（名）役者の自宅より樂屋に行くこと、樂屋に入ること。**――おち**［樂屋落］（名）㊀落語家のおちを、其落語家の話し了り樂屋に入りたる頃に了解せらるゝこと。㊁落語のおちが樂屋にのみ了解せられて一般には通せざること。

(かく-よく［鶴翼］（名）㊀つるのつばさ。㊁古昔、左右を張りたる陣形。

卄かぐ-よ-ふ（自、は四）かゞやく。

か-ぐら［神樂］（名）（神座（カミクラ）又は神樂（カムラク）の轉）今日に傳はれる古代の音樂、歌あり舞ひあるもの、吹物は、古昔は和琴・笛・拍子の三つなりしが、後世に至りこれに篳篥（ヒチリキ）を加ふることとなれり。**――うた**［神樂歌］（名）かぐらに合はせて謠（ウタ）ふ歌、其曲およそ三十七ありといふ。**――ざさ**［神樂笹］（名）【植】（い）百合科に屬する草、地上莖は枝を有し葉は披針形をなす、花蕊は淡黃綠色にして紫色を帶び、稍々鐘狀をなし其片は鋭頭なり、滿洲より渡來したる草本にして、觀賞用として栽

培せらる。たうちくらん。まんだゆちく。(萬壽竹)。

(名)「ごまいざゝ」の一名。——さん[神樂笙](名)「まやち」(車地)に同じ。——すず[神樂鈴](名) すゞの一種、小さき鈴を十二箇綴りて、柄をつけしもの、おもにかぐらに用ふ。——だう（ウード）[神樂堂](名)「かぐらでん」に同じ。——づき[神樂月](名) 陰曆十一月の異稱。——でん[神樂殿](名) 神社の境內に設けたる神樂を行ふ所。——ぶえ[神樂笛](名) 一種の橫笛、かぐらに用ふるもの。

(かくらう（ウーロ）[閣老](名) 老中の異稱。

(かくらふ（ウーロ）[客臘](名) 昨年の末。

(かくらん[鶴蘭](名) [植]蘭の一種、琉球に產す、花は白色若しくは紫色にして、其形鶴に似る、觀賞用として栽培せらる。

(かくり[隔離](名) ㊀へだゝること。又、へだつること。㊁傳染病患者を遠ざけ移すこと。——しつ[隔離室](名) 傳染病患者を遠ざけ移す室。

(がくり[學理](名) 學問上に於て是認せられたる理論。學問上の說明。——てき[學理的](形) 物事を論じ又は行ふに、學理を基とするにいふ。

(かくりつ[格率](名) のり。きそく。

(かくりつ[確立](名) 志つかりと立つること。立ちて動かざること。

廿かく-る（れれるるれれよ）[隱](自、ら下二) ㊀外部にあらはれずにあり。外部より見えずなる。(蔽) ㊁ひそむ。かゞむ。(潜)。㊂のがる。にぐ。(匿)。㊃去る。うす。「大道既に—」。㊄官に仕へずして野に處る。世を逃れて山などに住む。㊅高貴なる人死亡す。

廿かく-る（らりるるれれ）[隱](自、ら四) 前條に同じ。

かくれ[隱](名) ㊀みえずなること。㊁ものかげの

外より見えぬ處。「山の—にひそみて」。——あそび[隱遊](名) 小兒のたはむれ。かくれんばう。

(かくれい[格例](名) ㊀志きたり。ためし。㊁のり。きそく。

廿かくれい[革令](名) 陰陽家にて甲子の年の稱。

(かくれい[閣令](名) 內閣總理大臣が、其職權內に於て發する行政命令、官報を以てこれを公布す、法律・勅令には抵觸するを得されど、府縣令・廳令はこれを廢止變更するを妨げざるものとす。

(がくれい[學齡](名) 小學校就學の年齡の稱にして、兒童滿六歲の翌月より滿十四歲までをいふ。——志どう[學齡兒童](名) 其齡が學齡內なる兒童の稱。

かくれ-いは（ワーイ）[隱岩](名) 水波に隱れて見えぬ岩石。(暗礁)。

(かくれう（ヨーリ ウ）[閣僚](名) 內閣に列する國務大臣。又、一の國務大臣より他の國務大臣をさす稱。

(がくれう（ヨーリ ウ）[學寮](名) がくかう內の生徒の寄宿する所。又、寺院にて徒弟の修學する所。

かくれ-が[隱所](名) ㊀世をのがれてかくれ住むいへ。㊁世をしのぶ者のかくれ居る所。

かくれ-かご[隱駕籠](名) 古昔、志のびあるきするに乘りしかご。

かくれ-がさ[隱笠](名) かくれみのゝ類。

廿かくれ-ごと[隱語](名) 其人の居らぬ所にて、其人の上を論評すること。かげぐち。

かくれ-どころ[隱所](名) かくれひそむ所。(隱匿所)。

廿かくれ-ぬ[隱沼](名) 草などにうもれて外よりは見えぬ沼。

かくれ-ば[隱場](名) かくれが。かくれどころ。

「かくれ-ばう（ウーボ）[隱坊](名)「かくれんばう」に同じ。(隱遊)。

かくれ-ば-志よ[隱場所](名) かくれが。かくれば。

かくれ-みち[隱道](名) ぬけみち。(間道)。

かくれ-みの[隱蓑](名) ㊀身を隱すために着る簑。「かいま見の人—とられたる心地して」。㊁[植]五加（ウコギ）科に屬する常綠木、葉はあをぎりに似て小さく、色濃綠にして光澤あり。

「かくれる[隱](自)「かくる」の訛。

「かくれん-ばう（ウーボ）[隱坊](名) 小兒の遊戲、數人物かげに隱れたるを、他の一人がさがし出し、其さがし出されたる者が、代りて更に他の者をさがし出すこと。(捉迷藏)。

廿か-ぐろ-し（くしきけれ）[黑](形、二) くろし。

廿かくろ-ふ（ウーロ）（はひふふへへ）[隱](自、は四)「かくる」の延言。「かくろひて待つほどに」。

廿かくろ-ふ（ウーロ）（へへふふるれへよ）[隱](自、は下二) 前條に同じ。

(かくろん[確論](名) たしかなるぎろん。

(かくわ[假果](名) [植]萼（ハナブサ）の花托等の部分が、子房と共に肥大して形成したる果實、梨・林檎等の果實これなり。

(かくわい[嘉會](名) ㊀よろこび事ありて、多人數の集合すること。㊁風流なる會合。

「かくわい[歌會](名) うたの會。

(かくわん[加冠](名) ㊀元服すること。㊁元服のとき、冠を元服する者に着する人。

(がくわん-せき[鵝管石](名) ㊀[動]「いしぎく」の唐名。㊁[鑛]中の空虛なるつらゝいし。

(がくゐ[學位](名) ㊀文部省より或學術に長じたる人に對して、特に授與する博士號。㊁大學卒業者の學士號の俗稱。

(かくん[家君](名) わが父。(嚴父)。

(かくん[家訓](名) 家庭のをしへ。父母のいましめ。

廿か-け[鷄](名)「にはとり」の一名。

かけ[掛](名) ㊀「うちかけ」の略言。㊁「かけそば」の略言。㊂帶をえめはじむる方の一端。「—がゆるんで志まらぬ」。㊃金錢の授受を後日として、物品を賣買すること。㊄かけね。

かけ[賭](名) 勝負事に互に物を出しあひて、勝ちたるものこれを取ること。又、其出しあひたる物。

かけ[駈](名) 馬を疾走せしむること。馬を驅（カ）ること。「—を乘る」。(馳驅)。

かげ[闕](名) かくること。又、かけたる部分。(虧)。

かげ[景](名) ひかり。あかり。「日—」。「月—」。(晷)。

かげ[影](名) ㊀光を遮りてあらはるゝ暗體の形。「隔子にうつる人—」。㊁物の形狀及物色等が、其まゝ鏡面又は水面などにうつりて見ゆるもの。「鳥の—、水に落ちて」。㊂人の姿。「—をかくす」。㊃[理]光線が暗體によりて遮られたる部分の稱、若し光線が一點より出づれば、影は全く暗けれど、然らざるときは、全く光線の遮せざる部分と、幾分か光線の遮する部分とあり、光線の全く遮せざる部分を本影といひ、幾分か遮する部分を半影といふ。

かげ[陰、蔭](名) ㊀光にあたらぬ所。影となる所。「家の—」。「山の—」。㊁人目にふれざる所。「—で笑ふ」。㊂他よりの庇護。人のおかげ。「みんなの—で」。

かげ[鹿毛](名) 馬の毛色、志かの毛の如く茶色なるもの。(騮、駵)。

がけ[崖](名) 懸けたるごとくそばだちたる岸。きりきし。(崖、垓)。

—がけ[掛](接尾) ㊀或語に添へて其まゝなる意を表はす語。「わらぢ—で坐敷へ上がる」。㊁或語に添へて投げ出す意を表はす語。「命—」。㊂或語に添へてついての意を表はす語。「行き—」。

かけ-あし[駈足](名) ㊀はやく走ること。㊁體操

又は行軍に於ける一種の步調、前足の急なるもの。㊂馬をはやく走らすこと。かけ。

かけ-あは-す（ワーア ワス）（せせすするすれせよ）[駈合](他、さ下二) 互に乘馬をよせ合はせて戰ふ。

かけ-あは-す（ワーア ワス）（せせすするすれせよ）[掛合](他、さ下二) ㊀これとかれとを關係せしむ。㊁掛算をなす。

「かけあはせる[掛合](他)「かけあはす」の訛。

かけ-あひ（イーア）[掛合](名) ㊀かはりあひてなすこと。「—て讀む」。㊁はなしあひ。だんぱん。㊂「かけあひせりふ」の略言。——せりふ[掛合臺詞](名) 芝居にて、役者が順々に一句づゝのぶるせりふ。

かけ-あ-ふ（ウーア）（はひふふへへ）[掛合](自、は四) ㊀それとこれと相關係す。㊁はなしあふ。

かけ-アンドン[掛行燈](名) 柱などにかけおく行燈。

(か-けい[家兄](名) わがあに。

(か-けい[家計](名) 一家生計の用度。一家の經濟。

(か-けい[夏畦](名) 夏の炎天に耕作する農夫。

(か-けい[家鷄](名) [動]にはとり。

(か-けい[嘉慶](名) よろこびごと。めでたき事。

(が-けい[雅兄](代) 男子を親しみ尊びていふ稱。「—以て如何となす」、「平田—」。

かけ-いた[掛板](名) ㊀押入などの棚板。㊁芝居の左の大臣柱に掛くる木札。

「かけ-いと[掛絲](名) あぜいと。あやいと。

かけ-いっぽん-だち[掛一本立](名) 相撲四十八手の一、我足一本のみ立たして投ぐる手。

(かけい-ぼき[家計簿記](名) 一家生計の費用を整理するために用ふる簿記、其主要帳簿は日記帳及元帳にして、他に種々の補助帳簿あり。

「かけ-いり[駈入](名) ㊀馳けこむこと。㊁新參。

(か-けう（ヨーキャ ウ）[架橋](名) はしをかけわたすこと。又、

かけわたしたるはし。かけはし。

かけ-うま[駈馬](名) 馬にはしりくらべをせさするあそび。

かけ-うり[掛賣](名) 其品物のあたひを貸しおきて賣ること。かしうり。(賒賣)。

かけ-おち[駈落](名) 住地より逃亡すること。ちくてん。志ゆっぽん。(失踪)。——もの[駈落者](名) かけおちしたる人。逃亡者。(失踪者)。

廿かけ-おび[掛帶](名) 古昔の婦人の服飾、裳（モ）につきたる帶の如きものにして、これを肩より前にかけたり。

かけ-がう（ウーコ）[掛香](名) ㊀香を絹のふくろに包みて懸けおくこと。㊁絹の袋に香料を入れて、婦人などの携帶せるもの。(佩香)。

廿かけ-かけ-し（しくしきけれ）(形、二) こゝろに掛くる樣子なり。

かけ-がね[掛金](名) かきがね。(鐶)。

かけ-がへ（エーガ）[掛替](名) 用意に備へおくもの。ひかへ。かはり。(懸替)。

「かけ-がまへ（マエーカ）[掛構](名) 心かまへ。心まち。

かけ-がみ[懸紙](名) ㊀毀損を防ぐため、書狀を卷きて封袋に入るゝ白紙。㊁文案を檢閱して、意見を他の紙に書し、これをはりたるもの。ふせん。

かけ-きん[掛金](名) ㊀日掛け月掛けなどに、掛けてゆく錢。(掛錢) ㊁かけになりてある代金。

かけ-ぐさり[懸鎖](名) 物にひきかくるくさり。

かげ-ぐち[陰口](名) かげごと。

かけ-くら-ぶ（べべぶぶるれべよ）[掛比](他、は下二) 品目を比較す。物事を比較す。くらぶ。てらしあはす。

かけ-くら-ぶ（べべぶぶるれべよ）[駈比](自、は下二) はしりくらべをなす。

かけ-くらべ[掛比](名) てらしあはせ。比較。

かけ-くらべ[駈比](名) はしりくらべ。かけっこ。

〔かけくらべる（自、他）「かけくらぶ」の訛。

かけ-ご［懸子］（名）はこのふちに掛けて、其中に嵌入するやうに造りたる箱。（套子、習匣）。

かけ-ごと［賭事］（名）財物を賭けて、勝負を爭ふこと。「―に身をやつす」。（賭博、博奕）。

かげ-ごと［陰言］（名）其人の居らぬ所にてそしること。（後言）。

かけ-ことば［掛詞］（名）【文法】義異にして音同じき語に、上下兩樣の意味を含ましむること。例せば、「無く」と「泣く」との意義を含まして、「何と仕樣もなくばかり」といふが如し。

かけ-ごひ［掛乞］（名）かけとり。（元祿頃の語）。

かけ-こみ［駈込］（名）かけこむこと。――そせうよ［駈込訴訟］（名）昔時、町奉行などへの訴訟を、尋常の手續によらずして直接に奉行所に駈込みてなしゝこと。――ねがひ［駈込願］（名）前條に同じ。

かけ-こ・む［駈込］（自、ま四）㊀駈けて入る。「かけこみ來る」。㊁かけこみそゑようをなす。

かけ-ごゑ［掛聲］（名）㊀人をよびかくる聲。㊁擊劍などにて、勢をそふるために發する聲。（挑聲）。

かげ-ざくら［影櫻］（名）櫻の花の模樣をかげにてみたてたるもの。

〔かけ-さき［掛先］（名）掛代金を受けとるべき先方。

かけ-ざを［掛竿］（名）㊀手拭又は衣服などを掛くるための竿。（椸竿）。㊁軸物をかくるに用ふる竿。

かけ-ざん［掛算］（名）【數】二つの數の乘積を求むる算法。乘法ともいふ。（乘算）。

かけ-じ［掛字］（名）床の間などにかくる書幅。かけもの。（軸物）。――かけ［掛字掛］（名）かけものを掛くるための竿。

かけ-じ［缺字］（名）㊀主上などの御名をかくすに、其字の上をあけおくこと。㊁闕字。

かけ-じやうゆ［掛醬油］（名）㊀料理にかくる色薄き醬油。㊁一種の料理、鯛などの肉を、色薄き醬油にて蒸したるもの。

廿かけ-じる［羹汁］（名）おものにかくるあつもの。

かけ-す［懸巢］（名）【動】燕雀類からす科に屬する鳥、稍や大形なり、嘴は大きく、其根基に剛き羽毛ありて鼻孔を蔽ふ、性質あらく、小鳥を取りて食ふ、秋の末群飛す。かしどり。

かけ-すずり［懸硯］（名）かけごのある硯箱。

かけ-せん［掛錢］（名）かけきん。（掛金）。

かげ-ぜん［陰膳］（名）旅に出でたる人の無難を祈りて、其留守に供ふる膳部。

かけ-そば［掛蕎麥］（名）汁をかけたるそばきり。もりそばの對。

かけ-だいきん［掛代金］（名）かけうりの品物の代金。

かけ-だし［駈出］（名）㊀かけいだすこと。㊁物事のはじまり。㊂まだ其物事になれぬこと。

かけ-だ・す［駈出］（自、さ四）㊀かけはじむ。㊁にぐ。去る。

かけ-だひ［懸鯛］（名）古昔、正月の儀式に、門松にかけし二疋のほしだひ。

廿かけ-ぢ［懸路］（名）石間の細き道路。

廿かけ-ぢから［懸稅］（名）古昔、伊勢神宮の祭事に稻のまゝにて垣にかけて、神に奉りし稻。

かけ-ぢく［掛軸］（名）床の間などにかくる書畫の幅。かけもの。

かけ-ぢやや［掛茶屋］（名）路傍などに構へたる粗末なる茶屋。

（か-けつ［可決］（名）會議にて、議案を是認せる議決をなすこと。

かけ-づ［掛圖］（名）壁上などにかくるやうに軸物にしたる圖。

廿かけ-づかさ［掛官］（名）一役をもてる上に、更に他の役をあはせもつこと。又、其人。（兼官）。

かけ-つ・く［駈付］（自、か下二）駈けて到り着く。急ぎて到り着く。

かけ-づくり［懸造］（名）谿又は小川などの上に、かけわたしてつくりたる家。「―の茶屋」。（棧閣）。

廿かけ-づく・る［懸造］（他、ら四）かけわたしてつくる。「―、谷のいほりの軒場より」。

〔かけっこ（名）はしりくらべ。

かけ-づめ［蹴爪］（名）けづめ。（距爪）。

〔かけづ・る［駈］（自、ら四）奔走周旋す。かけまはる。

かけて［掛］（副）かねて。

かげ-どうろう［影燈籠］（名）まはりどうろう。（走馬燈）。

廿かげ-とも［影面］（名）㊀山の南。㊁山陽道の古稱。――のおほみかど［影面大御門］（名）大內裡の南門。――のみち［影面道］（名）山陽道の古稱。

〔かけ-とり［掛取］（名）掛代金を請求に來る人。（債鬼）。

かけ-ながし［掛流］（名）㊀一度用ひたるのみにて捨つること。㊁物をかけ其まゝになしおくこと。

かけ-なは［掛繩］（名）繩。おひなは。（買索）。

かげ-にんぎやう［影人形］（名）光線の作用によりて、紙又は布などにうつす人形の影。

かけ-ね［掛値］（名）㊀實價より高くいへる値。㊁〔おほぎやうに物事をいふこと。

廿かげ-の［陰野］（名）山のかげになりてある野。

かけ-はし［掛橋］（名）㊀はしご。（梯）。㊁けはしき處に板などを渡したる橋。（棧）。㊂すべて物と物とへかけわたしたる往來の路。

かけ-ばないけ［懸花生］（名）柱又は壁などに掛けおく花いけ。

かけ-はな・る［掛離］（自、ら下二）遠くへだゝる。はなれてあり。（懸隔）。

〔かけ-はなれる［掛離］（自）「かけはなる」の訛。

かけ-ばん［掛盤］（名）外へそりたる足ある膳の上品なるもの。

かけ-ひ［懸樋］（名）地上に架設し水を通ずるとひ。（筧）。

かけ-ひき［駈引］（名）㊀軍隊が機會を見はからひて、或は駈け進み或は引き退くこと。㊁賣買・談判等に機會を見はからひてなすこと。

かげ-ひなた［影日向］（名）㊀日のさす部分とさゝぬ部分と。㊁場合によりて其所行を異にすること。

（か-げふ［家業］（名）なりはひ。職業。

かげ-ぶち［鹿毛斑］（名）馬の毛色、斑文ある鹿毛。

かけ-べり［掛減］（名）秤（ハカリ）にかけてはかるに缺きて、目量減ずること。

〔かげ-べんけい［陰辨慶］（名）かげにては強きさまをなせど、表面に立ちては弱きこと。

かげ-ぼし［陰干］（名）日のさゝぬ處にて干（ホ）しかわかすこと。「―の銀杏」。（陰乾）。

かげ-ぼふし［影法師］（名）㊀うつし繪。㊁光によりてうつりたる人影。

廿かけまく-も［掛卷毛］（副）口にかけていはむも。「―、あやにかしこし」。（懸卷）。

かげ-ま［陰間］（名）男色を賣る童。（孌童）。

かげ-まつり［影祭］（名）㊀芝居にて、曾我の狂言を演じ了りて行ふ樂屋の祭事。㊁例年の儀式を省きて、質素にする神社の年祭。

かけ-まは・る［驅廻］（自、ら四）かけづる。

かげ-まひ［陰舞］（名）㊀昔時、役者が、舞臺に出ず幽欧などにて舞ひしこと。又、それを業となしゝ役者。㊁かげまに同じ。

かげ-み［影身］（名）影となり身となりて、まめやかに守ふこと「―に添ひて」

かげ-みち［陰路］（名）ものかげにある路。（陰路）。

かけ-むかひ［掛向］（名）二人さしむかひ。

かげ-むしや［影武者］（名）古昔、敵を詐（アザム）くために、主將などが己と同裝せしめし武者。

かけ-め［缺目］（名）㊀かけ落ちて滿足ならぬ部分。㊁圍碁にて、打ちならべたる石の中に目の如く見ゆれど、其四方を圍み盡さば目とならざるもの。

かけ-め［掛目］（名）秤にかけてはかりたる重量。りやうめ。（量目）。

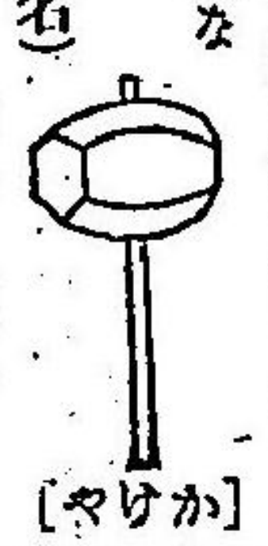
廿かげ-め［陰女］（名）めかけ。（妾）。

かけ-もち［掛持］（名）二つ以上の事を受持つこと。（兼帶）。

かけ-もの［掛物］（名）㊀書畫を軸物に表裝し、掛けおきて、一室の裝飾とし又は賞翫に便にするもの。（掛軸）。㊁こはりがけ又はひがけにせる乾菓子。――かけ［掛物掛］（名）かけものをかくるに用ふる具、端に叉（マタ）を附けたる竿。

かけ-もの［賭物］（名）勝負事にかけたる物。

かけ-や［掛矢］（名）最も大なるさいづち。（福槌）。



［かけや］

廿かげゆ-し［勘解由使］（名）古昔、解由狀（ゲユジヤウ）の事實をかんがふる職官。

〔かけ-ら［缺片］（名）ものゝ斷片。きれ。

かげ-りう［影流］（名）「あんかげりう」の略言。

かけ・る［翔］（自、ら四）㊀鳥翼をのばして空たかく飛ぶ。㊁疾走す。はす。

〔かける［掛］（他）「かく」の訛。

〔かける［欠］（自）「かく」の訛。

かげ・る［陰］（自、ら四）㊀かげになる。㊁くもる。㊂日傾く。（仄）。

廿かけろ（名）鷄の鳴き聲。「―と鳴く」。

廿かげろひ［陽炎］（名）かげろふ。（遊絲）。

かげ-ろふ［陽炎］（名）春のうらゝかなる日に、野邊などにちらちら立ち上る氣。いとゆふ。（遊絲）。

かげ-ろふ［蜉蝣］（名）【動】（い）廿蜻蛉の古名、其かげろふのひらめくが如きより此名あり。（玉蜻）。（ろ）擬脉翅類蜉蝣科に屬する蟲、腹賀にして網狀脈を有する二雙の翅を具し、ほゞ同長なる三個の尾毛あり、夏秋の交、多く水邊に飛び、數時間にして死す、幼蟲は二三年を經て、成蟲に羽化す。

廿かげろ・ふ［陰］（自、は四）㊀光かくれてかげになりゆく。㊁月の光りなど物のすきまよりひらめく。

かけ-ゑ［掛畫］（名）ゑのかけもの。（懸繪）。

かげ-ゑ［影畫］（名）うつしゑ。（寫繪、幻燈繪）。

かけ-を［懸緒］（名）冠の緒、古昔は紙捻にてつくり、後世は組にてつくる。

（か-けん［家憲］（名）一家の根本の規定。

（か-げん［嘉言］（名）よきことば。「―善行」。（善言）。

（か-げん［下弦］（名）㊀【天】太陰が弓狀に見ゆる場合の一、即ち、其弦が下方に見ゆる望より晦に至る間。㊁陰曆廿二三日頃の月の特稱。

（が-げん［我見］（名）㊀【佛】此身は虛假なるに、妄に主宰を立て、我となすこと。㊁偏頗なる見地。

（か-げん［加減］（名）㊀加はると減（ヘ）ると。又、加ふると減ずると。㊁程あひ。ぐあひ。「鹽―」。

（か-げん［下元］（名）陰曆十月十五日の稱。

（か-げん［家嚴］（名）ちゝうへ。ちゝぎみ。

（が-げん［雅言］（名）みやびやかにて正しきことば。殊に歌などに用ふることば。

廿か-こ［鹿子］（名）【動】鹿の子。

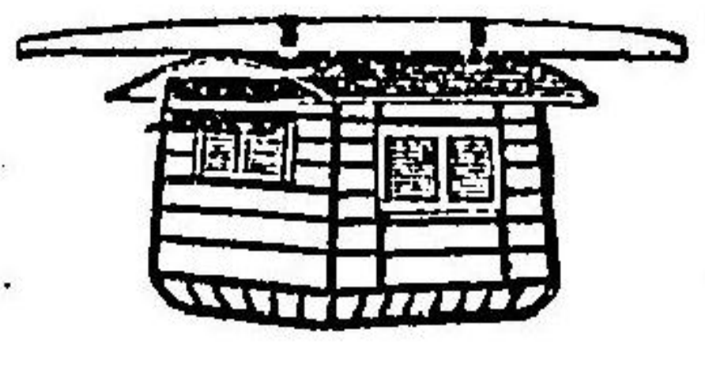
か-こ［舵子］（名）船をつかふことを業とする水夫。

ふなこ。かんどり。かぢとり。(水手)。

かこ[鉸具](名) ㊀革帶の端にある鉤、帶をとむるためのもの。㊁あぶみの鉸環に附屬せるひぢよがね。

かご[籠](名) ㊀竹にて編みたる器物の總稱。(籃)。㊁金屬の線條にて編みたる器物。「銅の―」。

か-ご[駕籠](名) 人をのせて、前後よりかき行くのりもの、よつてかご・たれかご等種類多し。(監輿、肩輿)。


[かご]

(か-ご)[加護](名) 神佛などが力を添へてまもり給ふと。(擁護)。

(が-ご)[雅語](名)「がげん」(雅言)に同じ。

(か-こう)[河口](名) 河流の湖又は海に注ぐ口。かはぐち。

(か-こう)[加工](名) ㊀人工を加ふると。細工。㊁[法]天然物又は他人の所有物に工事を施すと。

(が-こう-さう)[鵝口瘡](名) 極めて幼稚なる小兒に發する一種の病、口中白くたゞれて乳を吞むに苦しむ、多くは牛乳より傳染す。

かご-うつし[籠寫](名) 書畫などを、中を空白にし、まはりを線にて寫しとると。又、其寫しとりたるもの。ふたへがき。(塡廓、影搨)。

廿**かこか**[圍](名)「かこやか」に同じ。

かご-かき[駕籠舁](名) かごをかく人夫。(舁夫)。

かこ-がしら[鉸具頭](名)「かこ㊁」に同じ。

(か-こく)[苛酷](名) ㊀過度にきびしきと。からきと。(刻覈)。㊁無慈悲なると。むごきと。(酷虐)。

(か-こく)[家國](名) ㊀ふるさと。故國。㊁國家。

かごしま-じる[鹿兒島汁](名) 獸肉・野菜などを混同して煮たる汁。「―を啜ふ」。

かご-そ[駕籠訴](名) 徳川時代に、大名などの通行を要し、其駕籠に近づきて、直接に訴訟なしゝと。(閑輯上世)。

かこち-がほ（ガオ）[託顔](名) なげくかほつき。えんがほ。(怨色)。

かこ・つ[託](他、た四) ㊀かこつく。㊁思ひわびてなげく。(咳)。

かこつ・く[託](他、か下二) ㊀他の事實をいひたてにす。ことよす。㊁他の事柄に寓して說く。「かこつけて詠む」。

かこつけ[託](名) いひぐさ。いひまへ。

か-ごと[託言](名) ㊀かこつけいふと。又、其物事。㊁言ひわけだけの事實、言ひわけまでの行爲。いひわけ。㊂すこしばかり。少許。——**がま・し**（しく　しし　しき　しけれ）[託言箇間敷](形、二) ㊀かごとめきて見ゆ。㊁恨みかこつ樣なり。——**ばかり**[託言許](名) いひわけまで。又、すこしばかり。

かご-ぬき[籠拔](名) かごうつし。

かご-ぬけ[籠脫](名) かるわざの一種、身を躍（オド）らせて、竹籠の筒をくゞりぬくると。(衝狹戲)。

かこひ（カコイ）[圍](名) ㊀かこふための垣又は屛など。㊁足利義政のとき、茶道の祖たる佾珠光が、慈照寺に設けし數寄屋を板かこひになしゝより出で、茶道にて、數寄屋の稱。㊃まはり。周回。㊄かこへる敵兵又は堡壘。「―を衝く」。——**ぐるひ**[圍狂](名) かこひ女郞におぼれて通ふと。又、かこひものにおぼれて通ふと。——**ぢよらう**[圍女郞](名) 京都島原の女郞の稱。——**め**[圍妾](名) 我家の外にかくまひおく妾。(外妾、外嬖)。——**もの**[圍物](名) ㊀貯へおくもの。秘藏もの。㊁「かこひめ」に同じ。——

をんな[圍女](名)「かこひめ」に同じ。

かこ・ふ（カコウ）[圍](他、は四) ㊀四方をかぎる。あたりをふさぐ。とりまく。かこむ。㊁かくす。かくまふ。かくしおく。㊂貯へおく。「松茸を―」。㊃敵軍の四方を遮斷す。とりまき攻む。

かこみ[圍](名) ㊀かこむと。㊁かこむための垣又は屛など。㊂まはり。周回。㊃とりかこみたる敵兵又は堡壘。「―を破ぶって走る」。

(かご-みみ)[籠耳](名) 聞きたる事を忘れ易きと。

かこ・む[圍](他、ま四) ㊀かこふ。とりまく。(繞)。㊁敵軍の四方を遮斷す。とりまき攻む。

か-ごめ[香籠](名) 其物の香をも合せとると。にはひぐるみ「―にさそふ風の來ぬ間に」。

かご-め[籠目](名) うちひもなどの、竹籠の目の如く編みたるもの。

かご-や[籠屋](名) かごを編み又は賣る人。又、其家。

かご-や[駕籠屋](名) ㊀かごかき。㊁かごかきをおき、要めに應じて駕籠を爲立つる人。又、其家。

廿**かこやか**[圍](名) ㊀かこまれたるが如きさまをなすと。㊁しづか。しめやか。

廿**かご-ゆみ**[鹿兒弓](名) 鹿を射る弓。

かご-わたし[籠渡](名) 山澗の絶崖などに綱を亙（ワタ）し、これに籠を吊（ツ）るし、往來の人を其中に乘せて渡すもの。

かさ(名) ㊀雨又は日をさへぎるために、頭にかぶるもの。かぶりがさ。(笠)。㊁「さしがさ」の略言。(傘)。㊂ぬりわんのふた。(蓋)。㊃さしがさ又はかぶりがさのさまをなすもの、稱。「松蕈の―」。「ランプの―」。(蓋)。㊄大氣中に微細なる水粒の浮遊せるとき、光線の屈折によりて、太陽又は太陰の周圍に見ゆる輪形の光。(暈)。——**にきる**　已が役援者又は威勢を恃むにいふ。又、已が施し、恩徳を恃むにいふ。

かさ[椋](名) 實の殼。「松―」。

かさ[瘡](名) ㊀皮膚病の總稱。できもの。はれもの。㊁黴毒の特稱。さうどく。ばいどく。

―をかく　ばいどくを病む。

かさ[嵩](名) ㊀重なりたる物の高さ又はひろがり。(量)。㊁數量の多寡。容積。(量)。

かざ[香](名) にほひ。かをり。か。

かざ[風](名) 風の轉。「―ぐるま」。「―かみ」。

かさ-あて[笠當](名) かぶり笠の内部の頭にあたる處に、つくる小さき布團（フトン）の如きもの。

かざ-あな[風穴](名) ㊀風ぬきの穴。㊁風の吹き出る穴。「富士の―」。㊂風の來るすきま。「障子の―」。

(か-ざい)[加罪](名) 罪の加はり重なると。「―」。

(か-ざい)[家財](名) ㊀家の道具、家具。(家什)。㊁一家の財產。

かさい-ねんブツ[葛西念佛](名) ㊀徳川時代に、武藏國葛西の農夫が、笛又は太鼓の囃（ハヤシ）につれ、念佛を唱へつゝ、江戸市中を踊りありきしと。㊁芝居にて、鐘・太鼓・三味線の三曲をもて囃（ハヤ）すと。

かさい-のり[葛西海苔](名) 古昔、武藏國葛西邊の海にて、採りし海苔。淺草海苔に同じ。

かざ-いれ[風入](名) むしぼし。

(か-さう)[家相](名) 家の方向・地位又は結構などを觀てなす吉凶の判斷。

(か-さう)[假相](名) 實在にあらざる物象。假りの現象。感覺若しくは空想の作用により、實在より遊離したる現象。

(か-さう)[假裝](名) 假に其ものゝ姿をよそほふと。——**くわい**[假裝會](名) 各自思ひ思ひに異形のよそほひをなして集まる會合。——**ぶたふ**[假裝舞蹈](名) 思ひ思ひに異形の出立ちをなしてする舞蹈。——**じゆんやうかん**[假裝巡洋艦](名) 戰時に巡洋艦の艤裝をなす商船。

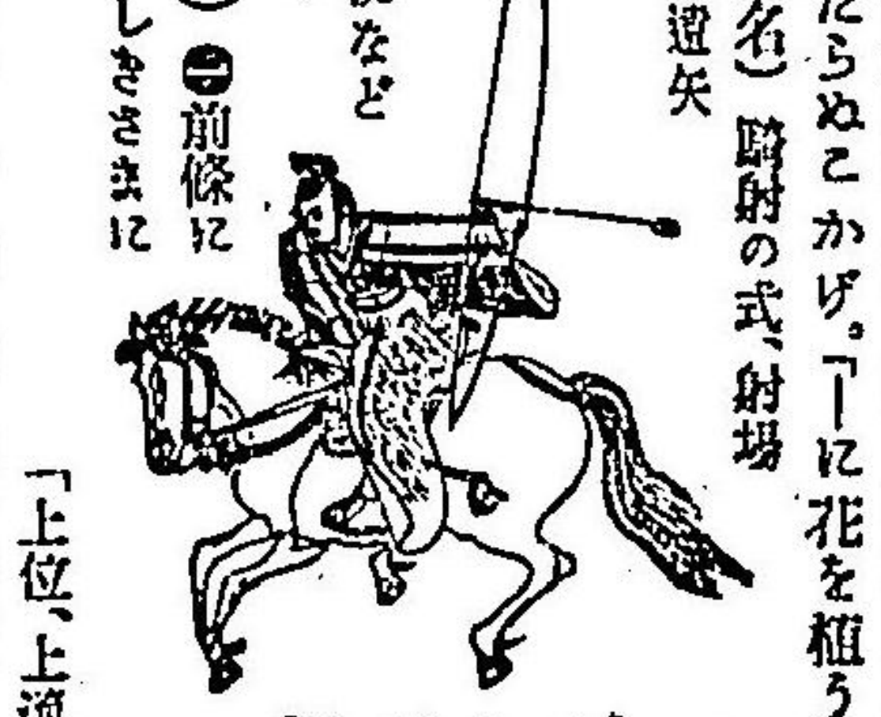
(か-ざう)[家藏](名) 家にをさめおくと。又、其物。「―の書物」。

(が-さう)[我相](名) [佛]心の所證に執着し、これを認めて我となすと。又、學問・財寶又は家格等を恃（タノ）みて驕慢なると。

かさ-かき[瘡搔](名) 瘡毒を病める人。(患瘡人)。

廿**かざ-がくれ**[風隱](名) 風を避け物かげに隱るゝと。又、風のあたらぬこかげ。「―に花を植う」。

かさ-がけ[笠懸](名) 騎射の式、射場に高く笠をかけて、遠矢を射ると。


[かさがけ]

〔**かさ-かさ**　(名、副) 乾くしてからびたる物などの相觸れて出る音。

〔**がさ-がさ**　(名、副) ㊀前條に同じ。㊁性質騷がしきさまにいふ語。

かざ-かみ[風上](名) 風の吹き來る方角。轉じて、上位、上流。

かさ-ぎ[笠木](名) 鳥居又は門などの上に、橫にわたす木。(蓋木、衡木)。

かざ-きり[風切](名) ㊀船上に樹（タ）てゝ風むきを見る旗。かざみ。㊁鳥の兩翼の短き羽、これを以て風を切りて飛ぶといふ。(翮)。——**ばね**[風切羽](名) 前條(二)に同じ。

(か-さく)[家作](名) やづくり。家屋。

(か-さく)[假作](名) かりにつくると。

(か-さく)[佳作](名) 詩文などのできよきと。又、其詩文。

廿**かさ-ぐさ**[瘡草](名) [植]「だらくわんさう」の一名。

かざ-ぐすり[風藥](名) 風邪をなほすに用ふる藥。かぜぐすり。(風邪藥)。

かざ-ぐるま[風車](名) ㊀風力を假りて回轉せしむる裝置の車。㊁[植]毛茛科に屬する草、花瓣は箆（ヘラ）形にして帶白色を帶び、葉は九箇の小葉より成る、觀賞用として栽培せらる。(鐵仙蓮)。

かさ-け[瘡氣](名) 黴毒の氣味。「うぬぼれと―」。

かざ-け[風氣](名) ㊀風邪に感じたると。(感冒)。㊁風の起らんとする天候。

かさ-ご[笠子](名) [動]硬鰭類かさご科に屬する魚、鰭は稍や楕圓形をなし、眼の間凹（ボク）みて中央に溝あり、背部は綠褐色にして暗褐色の斑紋あり、我國東海より西南海にかけて多く生ず。

かざ-ごゑ[風聲](名) 風邪のためにかれたる聲。

かさ-さぎ[鵲](名) [動]燕雀類中からす科に屬する鳥、稍や大形にして、嘴大きく其根基に剛き羽毛ありて鼻孔を蔽（オホ）ふ、翅は黑色にして頭部及背部は暗褐色なり。——**のはし**[鵲橋](名) ㊀陰曆七月七日の夜、牽牛と織女との會合のとき、かささぎが、翅を並べて天河にかくといふ想像上の橋。(鳥鵲橋)。㊁禁中の御階。

かざし[簪](名) ㊀かざすと。又、かざすに用ふるもの。㊁古昔、冠又は頭にかざし、花枝又は造花の稱。挿頭花。(華、簪、插頭)。——**ぐさ**[插頭草](名) [植]「かもあふひ」の一名。

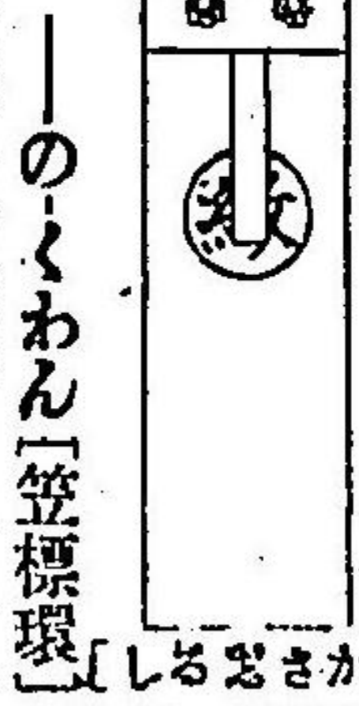
かさ-じころ[笠錣](名) 笠の如き狀につくりたる錣。

かざ-した[風下](名) 風の吹きゆく方。かざしも。

かざし-のは[翳羽](名) 鳥の羽などにてつくり、これに柄をすげたるものにして、古昔、貴婦人など翳すに用ひたり。えい。さしは。(雉羽扇)。

かざ-しも［風下］（名）かざした。

かさ-じるし［笠標］（名）古昔、軍隊の目じるしのためにかぶり物に付けし標。（笠符）。——**の-くわん**［笠標環］（名）かぶとの鉢の後の環、これに笠標をつけたり。



［かさじるし］

かざ-じるし［風標］（名）かざみ。かざきり。

かざ-す（すさしせせ）［翳］（他、さ四）㊀冠又は頭にはさむ。（插頭）。㊁頭上におく。かぶる。「一刀をふりー」。㊂かげをなす。おほふ。㊃まかげをなす。「ー顔」。

かさ-すげ［笠菅］（名）【植】すげの一種、用ひて笠を編む。（莚）。

かさ-だか［嵩高］（名）嵩の高きこと。——**し**（くしきけれ）［嵩高］（形、二）嵩多し。かさばれり。

（**か-さつ**［苛察］（名）こまかき事にまでも、立入りてせんさくすること。きびしくさぐること。

〔**がさつ**（名）たちゐふるまひの粗暴なること。

〔**かさっ-かき**［瘡搔］（名）「かさかき」の訛。

かさ-づけ［笠附］（名）俳諧にて初句を出して、次の二句を附くること。

かさ-どころ［瘡處］（名）瘡のあと。

卄**かざ-ながれ**［風流］（名）鷹などの風に吹かれてそれ行くこと。

かざ-なぎ［風和］（名）風やみて波のなぎたること。

かざ-なみ［風波］（名）㊀風のために立つ波。㊁いさかひ。あらそひ。もめ。

かざ-なみ［風並］（名）風の方向。

かさ-なり［重］（名）かさなること。かさなる段。（累、居）。

かさな-る（らりるるれれ）［重］（自、ら四）㊀物の上に物つもりたまる。事の上に事増し加はる。たゝまる。つもる。（累）。㊁更に爲さる。くりかへさる。

かさ-ぬ（ねねぬぬるぬれねよ）［重］（他、な下二）㊀物事の有るが上に物事をつけ加ふ。つむ。たゝみあぐ。㊁更に爲す。くりかへす。

かざ-ぬき［風拔］（名）空氣を通はするための穴。「かぜぬき」。（透涼）。

かさ-ぬひ（イーヌ）［笠縫］（名）笠を製造する人。

かさね［重］（名）㊀かさぬること。又、かさねたるもの。㊁古昔、袍の下に着し服。（襲）。㊂衣服をかさね着ること。かさねぎ。又、其衣服。㊃上着下着の衣服具はること。又、其衣服。㊄かさなりたるものを數ふるにいふ語。「餅一ー」。——**あ-ぐ**（げげぐぐるぐれげよ）［重上］（他、か下二）かさねてつむ。つみあぐ。——**あげる**［重上］（他）前條の訛。——**がさね**［重重］（副）ぢゆう／＼。たび／＼。——**がハラけ**（ワーケ）［重土器］（名）三つ組みなどの如く重ぬるカハラけ。又、定まれる獻酬の外にかさぬる盃。——**ぎ**［重着］（名）衣服をかさねて着ること。（襲）。——**すずり**［重硯］（名）數個くみかさぬるやうに作りたる硯箱。——**だんす**［重箪笥］（名）二つかさぬるやうにつくりたるたんす。——**て**［重］（副）くりかへして。ふたゝび。さらに。——**ばこ**［重箱］（名）重ぬるやうに作りたる箱。

〔**かさ-バチ**［瘡鉢］（名）小兒の頭瘡（ウツサ）。

かざ-ばな［風花］（名）㊀初冬の細雨。㊁かざほろし。

かざ-はや［風早］（名）風の強きこと。

かさ-ば-る（らりるるれれ）［嵩張］（自、ら四）かさ多くあり。かさ增す。かさむ。

卄**かさ-びる**［草蛭］（名）【動】「やまびる」に同じ。

かさ-ぶた［瘡蓋］（名）はれものきずあとなどの瘡（イ）ゆるに從ひて、其上に生ずる皮。（痂）。

卄**かざ-ふり**［簪振］（名）頭に挿（サ）したるものゝやうす。

かさ-ぼこ［傘鉾］（名）祭禮のときに用ふる傘の上に鉾などの飾あるもの。（蓋鉾）。

かざ-ほろし［風痱］（名）風邪の熱によりて、皮膚に細く出る瘡物。（風疹）。

かざ-ま［風間］（名）かぜのやみたる間。

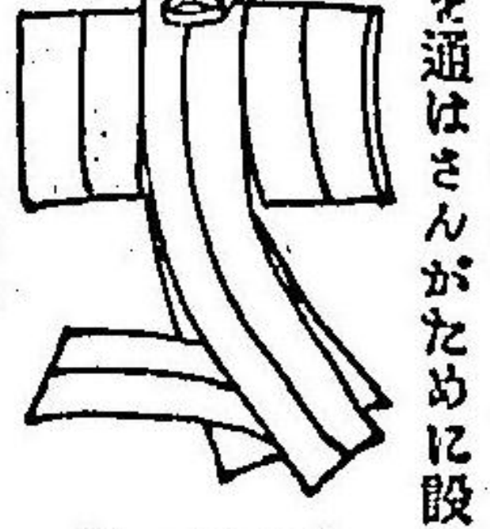
かざ-まち［風待］（名）船舶が出帆せんと順風を待ち居ること。

かさ-まつ［笠松］（名）笠の如き形に茂れる松。（蓋松）。

かざ-まつり［風祭］（名）風の神の祭事、秋收又は海上などに、風を鎭むるために行ふ。

かざ-まど［風窓］（名）風を通はさんがために設けたる窓。かざあな。（氣眼）。

か-ざみ［汗衫］（名）古昔は、汗取りの服、後世は、官女又は童女などの初夏のうはぎ。（汗衣）。


［かざみ］

かざ-み［風見］（名）風の方向を候（ウカ）がふために、屋上又は船中などに設けある具。かざきり。かざじるし。（候風、檢風）。

かざみ（名）【動】「かざめ」に同じ。

卄**かざ-み-ぐさ**［風見草］（名）【植】「やなぎ」の異稱。

かさ-む（まみむむめめ）［嵩］（自、ま四）㊀かさばる。㊁おごる。（驕）。

かざ-むき［風向］（名）かぜむき。

かざめ（名）【動】かにの一種、頭胸部は著しく左右に延長し、其兩端突出す、疎なる顆粒ありて短毛を有す、體は暗綠色にして體長大なるは二尺許に達す、我國東海に多く産す、常に近海の泥沙に棲息す。（蝤蛑、虎蟳）。

かざ-もり［風守］（名）かざむきに注意すること。又、其人。

かさ-やどり［笠宿］（名）路上にて夕立ちなどに逢ひ、軒下又は樹陰に暫時あまやどりすること。

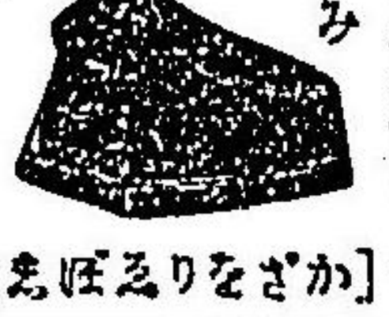
かざ-よけ［風除］（名）風をさへぎるもの。

かざり［飾］（名）㊀かざること。（飾、裝）。㊁かざりたるもの。又、かざるに用ふるもの。「正月のー」。㊂髮。——**ぐし**［飾串］（名）古昔、冠につけたる裝飾の一種。——**しよく**［餝職］（名）金屬にて細かき細工をする職業。又、其職業の人。（金銀工）。——**た-つ**（てててつつるつれてよ）［飾立］（他、た下二）りっぱにかざる。さかんにかざる。——**たてる**［飾立］（他）「かざりたつ」の訛。——**だま**［飾玉］（名）㊀裝飾に用ふる玉類。㊁【鑛】水晶・碧玉又は瑪瑙等の稱。一に、半寶玉といふ。——**つ-く**（けけくくくるくれけよ）［飾付］（他、か下二）品物などをかざりそろふ。——**つけ**［飾付］（名）かざりつくること。又、かざりつけたるもの。——**つける**［飾付］（他）「かざりつく」の訛。——**なは**（ワナ）［飾繩］（名）一月の松飾に用ふる繩。又、しめなは。——**もの**［飾物］（名）かざりに用ふるもの。又、かざりてあるもの。——**や**［飾屋］（名）「かざりしよく」に同じ。——**わら**［飾藁］（名）藁にてつくりて一月の飾に用ふるもの。——**を-おろ-す** 貴人が髮を剃（ソ）りて僧尼となるにいふ。

かざ-る（らりるるれれ）［飾］（他、ら四）㊀外觀をよくす。文采を加ふ。よそほふ。りっぱにす。はなやかにす。（飾、裝）。㊁修めとゝのふ。㊂人爲を加ふ。「素朴にしてかざらず」。㊃內實の非なるに、外觀のみを偽る。

かざ-わき［風傍］（名）風の吹く方角にそれたる方。

かざをり-ゑぼし［風折烏帽子］（名）ゑぼしの一種、さきを折りたわめたるもの。


［かざをりゑぼし］

かざ-をれ［風折］（名）樹木などの風に吹き折られたること。又、其樹木。

〔**か-さん**［加筭］（名）㊀年を加ふること。㊁【數】二つ以上の數をよせあつめて其値を求むること。よせざん。加法。

〔**か-さん**［加餐］（名）（食物を加ふる意）やうじやう。衞生。

〔**か-さん**［家產］（名）家の財產。しんだい。（家資）。

〔**か-ざん**［家山］（名）ふるさと。故鄕。（鄕國）。

かし［樫］（名）【植】殼斗科に屬する喬木、葉は長楕圓形にして尖り、長き葉柄を有し十分に成長すれば平滑となる、木材は帶赤色にして種々の用に供し、又、觀賞用として栽培せらる。あかゞし。（橿、櫧）。

かし［枷］（名）鐵又は木にてつくり、罪人などの身體の自由を束縛するために、其體に嵌（ハ）むるもの。「くびー」。「てー」。「あしー」。（戒具）。

かし［牂］（名）船を繋ぐくひ。もやひぐひ。（牁）。

かし［貸］（名）㊀貸すこと。又、貸したる物。㊁「かしかた」に同じ。

か-し［河岸］（名）河水又は湖水などの岸。

〔**か-し**［家資］（名）しんだい。（財產）。

〔**か-し**［下士］（名）㊀卑き身分のさむらひ。㊁陸海軍の下士官。

〔**か-し**［家士］（名）家につかふさむらひ。（家臣）。

〔**か-し**［下肢］（名）あし。脚部。

〔**か-し**［瑕疵］（名）きず。あやまち。けってん。

かし（感）語の末尾につけて、其意を強むる語。「知らずー」。

〔**か-し**［家事］（名）家內の事。かせい。

〔**が-し**［餓死］（名）うゑじに。

かし-あげ［河岸揚］（名）荷物などを、河岸より揚ぐること。みづあげ。にあげ。りくあげ。

かし-いへ（エーイ）［貸家］（名）かしや。

か-しう（名）【植】「かしゆう」（何首烏）に同じ。

かし-うり［貸賣］（名）かけ。かけうり。

かじか［鰍］（名）【動】硬鰭類に屬する魚、淡水に産す、形はぜに似て常に石の下に隱匿す、體長三寸許に達す、食ふべし。（鰍魚）。

か-じか［河鹿］（名）【動】かはづの一種、外觀醜くけれど美音を發す、山間の溪流などに棲む。（石蛙）。

かし-かた［貸方］（名）㊀物を貸す人。かして。（債主、金主）。㊁【簿記】にて、帳簿に對し何物かを渡したる方、例へば、一反の反物を拾圓にて買ひ取りたりとせば、拾圓の金額は貸方なり。

かし-がま-し（しくしきけれ）［囂］（形、二）かしまし。やかまし。（喧、聒）。

〔**かじか-む**（まみむむめめ）（自、ま四）手足こゞえて動かず。「手がー」。（痲痺）。

卄**かし-おき**［欅］（名）「かんざき」の古名。（[illegible]）。

かし-ぎ［炊］（名）㊀飯をたくこと。（爨）。㊁飯をたく人。——**がて**［炊糧］（名）雜炊（ザフスヰ）の類。（饘飯）。——**どの**［炊殿］（名）飯をたく所。

かしく［恐］（名）婦人の手紙の末尾に用ふる語。頓首又は謹言などの類。

かし-ぐ（ぐがぎぐぐげげ）［炊］（他、か四）穀類を煮又は蒸して飯につくる。たく。（爨）。

卄**かし-ぐ**（ぐがぎぐぐげげ）［傾］（自、か四）かたむく。（欹）。

卄**かし-ぐ**（げげぐぐるぐれげよ）［傾］（他、か下二）かたむかす。

かじ-く（けけくくくるくれけよ）（自、か下二）㊀やせほそる。おとろへ弱る。（憔悴）。㊁冷えちゞむ。こゞえひるむ。（氣屈）。

かし-ぐら［貸藏］（名）他に貸す土藏。

〔**か-しくわん**［下士官］（名）陸海軍の下級の士官、即ち、陸軍にては曹長・軍曹及伍長をいひ、海軍にては上等兵曹及兵曹をいふ。かし。

〔**かじ-ける**（自）「かじく」の訛。

かしこ［彼處］（代）彼の所。あそこ。あしこ。（彼許）。

かしこ［恐］（名）㊀かしこきこと。㊁かしく。

かし-こし［貸越］（名）定限より貸し過ぎたること。

かしこ・し（くしきし／けれ）［恐、畏］（形、二）㊀もったいなし。おそれ多し。㊁かたじけなし。ありがたし。

かしこ・し（くしきし／けれ）［賢］（形、二）㊀才智多し。思慮深し。㊁勝(グス)れたり。まされり。㊂卄好し。㊃卄甚し。

かしこ-どころ［賢所］（名）宮中にて、祖宗を祀り神鏡を置かせ給ふ御殿。けんしよ。ないしどころ。

卄かしこ-どり［畏鳥］（名）【動】鷹の一名。

かしこ-まり［畏］（名）㊀かしこまること。㊁おそれ。㊂わびごと。託言。「佛に一聞ゆるこそくるしけれ」。㊃おとがめ。かんだう。

かしこま・る（らりるる／れれ）［畏］（自、ら四）㊀おそれつゝしむ。㊁わび入る。㊂正しく座す。ひざまづく。㊃つゝしみて承る。

かしこ・む（まみむむ／めめ）［畏］（自、ま四）つゝしむ。かしこまる。「かしこみて、つかへまつらむ」。

かし-ざしき［貸座敷］（名）㊀料をとりて貸す座敷。かしま。㊁ぢよらうや。いろぢよや。

かし-さげ［貸下］（名）政府が民間に物を貸すこと。

かし-ち［貸地］（名）貸す土地。

か-じち［家質］（名）質に入れたる建物。いへじち。（典房）。

かし-ちん［貸賃］（名）貸したる物の料。

（か-じつ）［暇日］（名）用なき日。ひまのひ。

かし-しようもん［貸證文］（名）財物をかしたる證書。

かし-せき［貸席］（名）㊀料をとりて貸す坐席。㊁ぢよらうや。ちやや。

（か-しそつ）［下士卒］（名）下士官と兵卒と。

かし-だな［貸店］（名）人に貸す店。

かしづき［傅］（名）㊀かしづくこと。（顧）。㊁もり。かいぞへ。（侍）。——**びと**［傅人］（名）もり。かいぞへ。——**もの**［傅物］（名）大切にすべきもの。

かし-つ・く（けけくくるれけよ）［貸附］（他、か下二）かしつけをなす。かしわたす。かす。

かし-づ・く（かきくくけけ）［傅］（他、か四）㊀附き添ひ守る。まもる。（顧侍）。㊁愛す。かはゆがる。㊂後見す。うしろむ。たすく。

かし-つけ［貸附］（名）他人に後に還附せさする約にて、或物を交附し、又は或物の使用若しくは收益をなすを許すこと。——**きげん**［貸附期限］（名）貸附の約が存續する期間。——**れう**（リヨウ）［貸附料］（名）借主が貸主に支拂ふ料、地代・家賃の類。

かし-て［貸手］（名）貸す人。かりての對。

（かしてきにん-しようしよ）［下士適任證書］（名）成績優等なる兵卒に、服役滿期の際、下士に適任せるを證して授與する證書。

かし-どり［樫鳥］（名）【動】「かけす」の一名。

かし-ぬし［貸主］（名）かしつけをなす當事者。貸す人。

卄かし-は（ワ）［葉］（名）（炊葉の義といふ）古代に、炊ぎたる飯などを盛りし木の葉の稱。

かし-は（ワ）［柏］（名）（前條と同義なりといふ）㊀【植】殼斗科に屬する喬木、葉は濶大にして長倒卵形をなし、緣邊に波狀の鈍齒を有し、下面に褐色の毛を生ず、幹は薪炭料に樹皮は染料及柔皮用に供せらる。（大葉櫟）。㊁古代に、かしはの葉に食物を盛りしより、轉じて、食器の稱。

かしは（ワ）［黄鷄］（名）【動】茶色の毛の鷄、肉味美なり。

卄かしは-で（ワ）（名）㊀飲食の義。㊁饗膳をつかさどる人。（膳司）。

かしは-で（ワ）［柏手］（名）神を拜するに、兩の掌をうちあはせて鳴らすこと。（振動拜）。

卄かしは-ばさみ（ワ）［柏夾］（名）古昔、凶事に用ひたる冠、白木をもて造れり。

かしは-もち（ワ）［柏餅］（名）㊀ふたつに折りたる柏の葉に包みたるあんもち、五月節句の供物とす。（槲葉餅）。㊁一枚の布團にくるまりて寢ること。

（か-しふ）（シユウ）［歌集］（名）和歌を集めたる書。

（か-しふ）（シユウ）［家集］（名）一人の述作の歌をあつめたる書。「貫之—」。

（か-じふ）（ジユウ）［家什］（名）家の什物。家具。

（が-しふ）（シユウ）［我執］（名）【佛】心の所證に執着して我を立つること。又、我意を偏(カタヨ)り執ること。

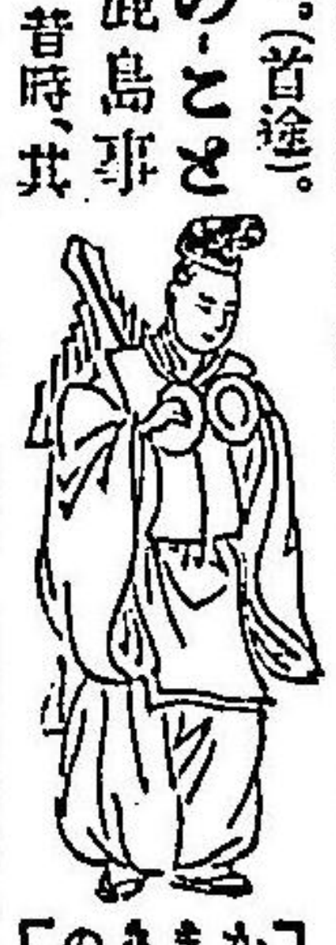
（か-しぶんさん）［家資分散］（名）【法】強制執行處分により、義務を辨濟する資力なき者に對して、管轄裁判所が、職權又は申立により決定を以てなす處分、此處分の宣告を受けたる者は、其當日より選擧權及被選擧權を喪失するものとす。——**しや**［家資分散者］（名）家資分散の宣告を受けたる者。

かし-ま［貸間］（名）價をとりて貸す部屋。

かしま・し（しくしきし／けれ）［囂］（形、二）言煩(ウルサ)く又は聲多くして厭(イト)ふべし。かまびすし。やかまし。

かしま-だち［鹿島立］（名）かどで。しゆったつ。たびだち。（首途）。

かしまの-ことぶれ［鹿島事觸］（名）昔時、其年の吉凶につき鹿島の神の神託を、春毎に全國にふれまはりしこと。又、其人。



〔かしまのことぶれ〕

カシミヤ［Cashmere］（名）舶來の織物、地質強く光澤多く、且皺を生ぜず、多く女學生の袴地に用ひらる。

かし-もの［貸物］（名）損料にて貸す夜具。（京阪地方の方言）。

かし-や［貸家］（名）人に貸す家。（貸屋）。

か-しや［香車］（名）寶永頃に、「やりて」の稱。（花車）。

（か-じやう）（ジヨウ）［嘉祥］（名）めでたきこと。めでたきしるし。ずゐさう。

（か-しやう）（シヨウ）［假晶］（名）【鑛】或鑛物が他の鑛物の結晶をなすこと。

（か-しやう）（シヨウ）［嘉賞］（名）よみしほむること。

（か-じやう）（ジヨウ）［嘉祥］（名）陰曆六月十六日に疫を拔(ハラ)ふために、菓子又は餅十六個を先づ神に供へ後これを食ひしこと、後世にては、錢十六文をもて物を買ひて祭ることとなれり。——**ぐひ**（イーグ）［嘉祥食］（名）前條に同じ。

（か-じやう）（ジヨウ）［下情］（名）民間の情態。しも〴〵のやうす。（民情）。

（か-じやう）（ジヨウ）［佳釀］（名）よきさけ。美酒。

（が-しやう）（シヨウ）［牙商］（名）さいとり。なかがひ。

（が-じやう）（ジヨウ）［牙城］（名）城の本丸。

（かしや-かしや）（名、副）かはきたるものゝ相觸るる音。

（がしや-がしや）（名、副）㊀堅くして細かきものゝ相觸るる音。㊁物事のさわがしく又はやかましくいひ立つるさまにいふ語。

（か-しやく）［呵責］（名）とがめかゝること。せめさいなむこと。

（か-しやく）［假借］（名）㊀かること。よること。㊁かすこと。ゆるすこと。「すこしも—せず」。㊂漢字の六書の一、其字本來或意味を有せざるに、他の同聲の字の或意味をかり用ふるもの、例へば、哥と歌との如し。

（か-しゆ）［嫁娶］（名）㊀よめいりとよめとりと。「—の禮」。㊁結婚。

（が-しゆ）［雅趣］（名）風雅なるおもむき。（雅致）。

（か-しゆう）［何首烏］（名）【植】蓼科に屬する莖草、根莖は毛多くして味苦(ニガ)し、元來は支那產のものにして、其根莖はかしゆうだまと稱し、藥用とし、又、灰汁を以て煮て食用とす。（夜合）。——**いも**［何首烏藷］（名）かしゆうの根莖。——**だま**［何首烏玉］（名）前條に同じ。

（か-じゆう）［家從］（名）㊀親王家又は諸王家の庶務に從事する屬官にて、家扶の次席なるもの。㊁華族の家人にて、家扶に屬從し庶務に從事するもの。

（か-じゆう）［加重］（名）㊀加へて重くすること。㊁【法】再犯以上又は犯罪人の特別の情狀により、法律上にて、刑を加へて重くすること、されど其結果は罪名を變ずることなし。

（か-じゆく）［家塾］（名）一箇人の設立せる塾。しじゆく。

（か-じゆん）［河潤］（名）恩澤の及ぶを河の土地を潤(ホウル)すにたとへいふ語。

（が-じゆん）［雅馴］（名）みやびやかにしておだやかなること。「文字—」。

（か-しよ）［歌書］（名）和歌の書物。

（か-しよ）［箇所］（名）これと目ざす處。ところ。

（か-しよう）［下舂］（名）日の西に沒すること。

（か-じよう）［家乘］（名）家の記錄。

（か-しよく）［稼穡］（名）穀物を植ゑ又は取り入ること。農作。

かし-よね［粿米］（名）せんまい。あらひよね。

かしら［頭］（名）㊀かうべ。首部。㊁かみ。頭髮。「—をおろす」。㊂うへ。さき。まへ。㊃頭だつ人。をさ。（長）。㊄仕事師のおやかた。㊅刀の欄頭。つかがしら。——**あげ**［頭上］（名）事項又は金額などを、他の行と區別してかきあぐること。——**がき**［頭書］（名）本文の上に解釋などを書きそふること。（冠註、標註）。——**じ**［頭字］（名）文章若しくは字句の首にある文字。おやもじ。——**だ・つ**（たちつつてて）［頭立］（自、た四）其社會にてをさとなる。首座をしむ。上にたつ。——**づつみ**［頭裹］（名）づきん。ばうし。——**のゆき**［頭雪］（名）白くなりたる髮。——**のしも**［頭霜］（名）前條に同じ。——**もじ**［頭文字］（名）「かしらじ」に同じ。——**ぼね**［頭骨］（名）㊀頭の骨。づがいこつ。㊁魚の頭にある丁字形の骨。——**やく**［頭役］（名）をさ。長。——**を あつむ**［鳩頭］（名）多人數よりあつまりて相談などするをいふ。——**を おろす** 髮をそりて僧尼となる。

卄——かしら［頭］（接尾）或語に添へて其所、其なり又は其とたんの意を表はす語。「であひ—」。

卄かじり-つき［齧付］（名）かじりつくこと。

卄かじり-つ・く（かきくくけけ）［齧付］（自、か四）㊀ひっしと其物に取り付きて離れず。㊁其位地を離れじとさまぐ〵に力を盡す。

かじ・る（らりるる／れれ）［齧］（他、ら四）㊀物の片はしを嚙(カ)む。「鼠が—」。（咬）。㊁僅かの部分に手をつけこゝろむ。「少しく法律を—」。

（か-しん）［家臣］（名）家につきたる臣。けにん。けらい。

（か-しん）［河身］（名）河の水の流るゝ部分。

（か-しん）［嘉辰］（名）よきひがら。めでたきひ。

（か-じん）［歌人］（名）歌を詠(ヨ)む人。うたよみ。

（か-じん）［佳人］（名）みめよき女。美人。

（か-じん）［家人］（名）㊀妻子眷族。㊁かしん。けらい。

かす［滓］（名）㊀をどみ。おり。㊁酒の醪(モロミ)の漉(コ)して殘りたるもの。（糟粕）。㊂よきところを取り去りて、あとに殘りたる不用物。

か・す（さしすす／せせ）（他、さ四）㊀ひたす。つく。（漬、浸）。㊁水にてあらふ。穀類をとぐ。（淅）。

か・す（さしすす／せせ）［貸］（他、さ四）㊀後に返さす約束にて物を交付す。或期間だけ其物の使用又は收益をなすことを許す。（假）。㊁宥恕す。ゆるす。「罪を—」。㊂力を添ふ。たすく。「智恵を—」。

か・す（せしすする／すれせよ）［嫁］（自、さ變）よめに行く。とつぐ。よめいる。「人に—」。

か・す（せしすする／すれせよ）［嫁］（他、さ變）よめにやる。とつがす。

か・す（せしすする／すれせよ）［架］（他、さ變）かけわたす。

か・す（せ、せ、す、する、すれ、せよ）「乾」（自、さ下二）瘡又は創のかさぶた乾く。かせる。「腫物が―」。

かず「數」（名）㊀物事の多寡。かぞふべきもの。かさ。りやう。㊁數多あること。くさ〴〵。いろ〳〵。「―ある中に」。㊂取り立てゝかぞへらるゝこと。「―ならぬ身をさほど迄に」。（員）。

ガス「瓦斯＝Gas」（名）㊀流動し易くして且一定の體積を有せざる物質、即ち、空氣・水素・酸素等の如きこれなり。氣體。㊁「せきたんガス」の略言。㊂「ガスとう」の略言。㊃「ガスいとおり」の略言。

か・す（せ、し、す、する、すれ、せよ）「賀」（他、さ變）いはふ。ことぶく。

が・す（せ、し、す、する、すれ、せよ）「駕」（他、さ變）㊀車馬を御す。馬車に乘る。「車に―」。㊁制御す。あつかふ。つかふ。㊂上に出づ。しのぐ。「人に―」。

ガス・いと「瓦斯絲」（名）瓦斯にて、つやをつけて練（ネ）りたる絲。――おり「瓦斯絲織」（名）「ガス」絲を經（タテ）緯（ヨコ）にしておりたる織物。

（か・すう）「假數」（名）〔數〕對數の小數の部分、例せば、log20＝1,3010に於て、.3010の如し。

かすか「幽、微」（名）㊀あきらかならざること。ほのかと認めがたきこと。ほのか。「―なる形」。㊁物さびしきこと。見るかげもなきこと。「―なるくらし」。㊂すくなきこと。わづかなること。

〔かす・かす〕（名）うまみもあぶらけもなきさまにいふ語。「―した氷豆腐」。

かず・かず「數數」（名、副）いろ〳〵。たくさん。あまた。きよた。

かすが・とうろう「春日燈籠」（名）燈籠の一種、笠（カサ）大ならずして丈高く、火袋は六角又は四角にして、二方に雌雄の鹿の形を刻み他の二方には雲形に日月を浮彫にしたるもの、木造と石造とあり。

かすか・に「微、幽」（副）㊀ほのかに。㊁さびしく。㊂すこしく。

かすがひ（イ・ガ）「鎹」（名）㊀戸じまりのかけがね。かきがね。㊁兩端同樣に曲りたる釘、物の合目を繋ぎ止むるために打ち込むもの。（鐵鉺、蝙蝠鉺）。㊂兩者の間を繋ぎとむるものゝ稱。「子は夫婦の―」。

ガス・きくわん「瓦斯機關＝Gas engine」（名）石炭瓦斯を活塞を具へたる圓筒内に導き、これに點火して爆發せしめ、活塞を動かして動力を生ぜしむる裝置の機關。

かす・きやく「粕客」（名）利益なき客。（元祿時代の語）。

かす・げ「糟毛」（名）馬の毛色、灰色に白きさし毛あるもの。（驄、衣馬）。

ガス・けいりやうき（リヨ・ウー）「瓦斯計量器」（名）「ガスメートル」に同じ。

かす・ご（名）〔動〕硬鰭類中たひ科に屬する魚、體形は楕圓形にして側扁なり、體色は淡褐にして體側に濃き同色の斜線ありて、鮮明なる綠色の斑點散在す、我國沿岸多少これを產せざる所なし。（棘鬣）。

‡かす・どめ「醨」（名）にごりざけ。

かず・さし「數差」（名）かずとり。

かず・しれず「數不知」數あまりに多くして知ること出來ず。

ガス・たい「瓦斯體」（名）氣體。

ガス・ため「瓦斯溜＝Gas-holder」（名）瓦斯を貯へおき隨時所要の量だけ供給する器、水上に浮べたる鐵製の圓筒にして、瓦斯の入るときは圓筒上り、出づるときは、其重さにて下るやうの裝置にしたるもの。

かず・つか「數塚」（名）射的をおくために砂を盛りあげたるもの。

かす・づけ「糟漬」（名）肉又は野菜などを酒糟に漬くること。又、其漬けたるもの。（粕漬）。

カステイラ「粕底羅」（名）（「ポルトガル」語 Castella）一種の菓子、雞卵と砂糖とを小麥粉にまぜ、鍋にて蒸燒きにしたるもの、もと、西班牙の Castilla といふ地より製出せしが故に此名ありといふ。（卵糖）。

カステラ（名）前條に同じ。

ガス・とう「瓦斯燈＝Gas-burner」（名）石炭瓦斯を管に通しこれに點火する裝置の燈。（煤氣燈）。

かず・とり「數取」（名）㊀或物によそへて其物を數ふること。㊁多くの數をかぞふるとき、其心覺のしるしとなすもの。（籌）。

かず・の・こ「數子」（名）（かどの子の義）鯡（ニシン）のはららごを乾したるもの、水にひやしおきて、これに醬油などをかけて食す、數の子を子孫繁盛の義にとりて、新年・婚禮及其他の祝儀に用ふ。（青魚卵）。

ガス・はつどうき「瓦斯發動機＝Gas engine」（名）「ガスきくわん」に同じ。

か・すひ・どり（イー・ス）「蚊吸鳥」（名）〔動〕燕雀類中怪鴟類に屬する鳥、嘴は扁平にして口裂濶し、翅長くしてよく飛翔す、足は小さく且微弱にして地を歩むに適せず、夜間出でゝ昆蟲類を食す。（蚊母鳥）。

‡かず・ふ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）「數」（他、は下二）かぞふ。

‡かずへ・の・かみ（カズエ）「主計正」（名）主計寮の長官。

‡かずへ・れう（カズエ・リヨウ）「主計寮」（名）古官、民部省の所管にして、調庸又は貢獻の事をつかさどりし所。かぞふるつかさ。

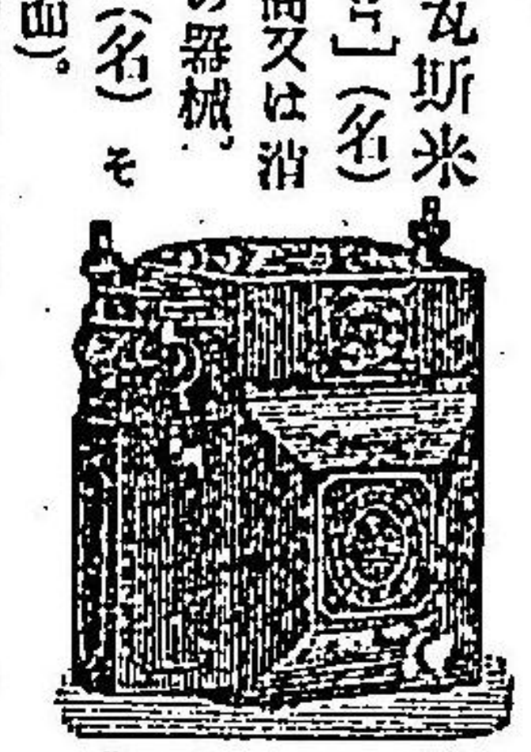
‡かず・ま・ふ（ウーマ）（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）「數」（他、は下二）㊀かぞふ。㊁人なみにかぞふ。

かすみ「霞」（名）㊀かすむこと。（靄）。㊁朝又は夕に、天空の日光を受けて赤く見ゆること。あさやけ。ゆふやけ。㊂春の空の明かに見えぬこと。（霞）。――いし「霞石」（名）〔鑛〕硅酸鑛物の一種、透明若しくは不透明にして玻璃光を帶ぶ、色は一樣ならず。――のころも「霞衣」（名）かすみを、衣にたとへていふ語。――のほら「霞洞」（名）仙洞御所の異稱。――のまゆ「霞眉」（名）德川時代に、奥女中が、春のころ眉をほのかにさして粧（ヨソホ）ひし眉の稱。――そめ・づき「霞初月」（名）（此月より、かすみそむといふ義）陰曆正月の異稱。

かす・む（ま、み、む、む、め、め）「霞」（自、ま四）㊀霞たなびく。（靄）。㊁明かに見えず。（朦）。

かす・む（め、め、む、むる、むれ、めよ）「掠」（他、ま下二）㊀竊（ヒソ）かに盜む。ぬすむ。㊁強（シ）ひて奪ふ。うばふ。㊂一部分を盜寄す。かする。㊃ほのめかす。諷す。㊄觸れて過ぐ。僅かにさはる。

ガス・メートル「瓦斯米突＝Gas-meter」（名）石炭瓦斯の產出高又は消費高を測る一種の器械。



［ガスメートル］

‡かす・も「滓面」（名）そばかす。（雀斑、飼面）。

かず・もの「數物」（名）㊀數の多くあるもの。㊁數すくなきもの。

‡かす・もみ（名）糟漬にしたる肉。

かす・ゆざけ「糟湯酒」（名）湯にさけのかすを溶（ト）かしたるもの。

かすり「掠」（名）㊀かすること。㊁一部分をとること。うはまへをはぬること。「―を取る」。（微利）。――きず「掠傷」（名）かすれきず。

かすり「飛白」（名）㊀筆蹟の處々掠（カス）りて墨乏しく見ゆること。㊁織物の處々かすれたる如き模樣。又、其模樣ある織物。（絣、綃、緦）。――がき「飛白書」（名）かすりに書くこと。又、其書法。（緦）。――おり「飛白織」（名）かすり模樣ある織物。

か・す・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）「掠」（自、ら下二）㊀輕くふる。ふれ過ぐ。㊁墨乏しくなりて、筆蹟かすりとなる。

かす・る（ら、り、る、る、れ、れ）「掠」（他、ら四）㊀輕くふる。ふれ過ぐ。「矢が身を―」。㊁一部をかすめとる。うはまへをはねる。㊂かすれがきをなす。

かすれ「掠」（名）かろく物にふるゝこと。かすること。（輕傷）。――きず「掠傷」（名）物のかすりて皮膚に生じたる微傷。「彈丸の―」。

〔かすれる〕（自）「かする」の訛。

（か・すゐ）「歌吹」（名）うたをうたひ笛を吹きなどすること。轉じて、遊藝又は遊興。――かい「歌吹海」（名）遊藝又は遊興の盛んなる所。

（か・ずゐ）「嘉瑞」（名）めでたきしるし。（吉兆）。

かせ「桛」（名）つむにて取りたる絲をかけ卷く具、殆んど叉（サ）の狀をなして叉より大きし。かせひ。

かせ「枷」（名）㊀「かし」（枷）に同じ。㊁三味線のこま。

かせ「揵」（名）水をふせぐための竹籔。

〔かせ〕（名）うにの殼。かぶとがひ。（甲贏）。

〔かせ〕「乾」（名）かさぶた乾くこと。

かぜ「風」（名）㊀氣壓の變化によりて起る大氣の流動、高氣壓の地より低氣壓の地に向ひて流動す。㊁傳はり來ること。「―のたより」。㊂さま。けぶり。やうす。「臆病―」。㊃あしき氣候に中り、體内の蒸發を妨げられて、體溫其宜しきを失し、ために寒氣（サムケ）又は發熱などを生ずること。ふうじや。かざけ。（風邪、感冒）。――をくらってにぐ　すきまをうかゞひてにげ失（ウ）するにいふ。――をひく　風邪にかゝる。

（か・せい）「加勢」（名）㊀たすくること。助力をなすこと。㊁たすけの人。たすけの兵。ゑんぺい。

（か・せい）「家政」（名）一家の經濟。家のとりしまり。

（か・せい）「家聲」（名）一家のほまれ。家のひやうばん。

（か・せい）「歌聲」（名）うたふ聲。「―雲を遏む」。

（か・せい）「假聲」（名）こわいろ。つくりごゑ。

（か・せい）「苛政」（名）多額の租稅を取り又は人民の自由を束縛する等の政治。殘酷なる政治。「―は虎よりも猛し」。

（か・せい）「苛征」（名）からき租稅のとりたて。

（か・せい）「歌聖」（名）歌に最もすぐれたる名人。

（か・せい）「苛稅」（名）からき租稅。

〔が・せい〕「我精」（名）骨を惜まず勤むること。

かせい・カリ「苛性加里＝Caustic potash」（名）〔化〕水酸化「カリウム」に同じ。

かせい・ソーダ「苛性曹達＝Caustic soda」（名）〔化〕水酸化「ナトリウム」に同じ。

カセイタ「梨糕」（名）（外國語なるべきも、原語明かならず）梨に砂糖を混じて製したる菓子。

かせ・いと「桛絲」（名）桛にかけたる絲。（綛絲）。

かぜ・いり「風入」（名）風の吹き入ること。「―よい」。

‡かせ・き（名）〔動〕鹿の古名。

かせ・ぎ「桛木」（名）「かせ」（桛）に同じ。

かせぎ「稼」（名）㊀はげみはたらくこと。はたらき。㊁くらし。なりはひ。――て「稼手」（名）かせぎにん。――にん「稼人」（名）㊀かせぎて一家を養ふ人。「―に死なれて困る」。㊁よくはたらく人。

かせ・ぐ（が、ぎ、ぐ、ぐ、げ、げ）「稼」（自、か四）家業に精を出す。はげみはたらく。ほねをる。（出精）。

かぜ・くさ「風草」（名）〔植〕茅の一種、其なびく方によりて風向の知らるゝ故に此名あり。（知風草）。

かぜ・け「風氣」（名）かざけ。

かぜ・しり・ぐさ「風知草」（名）〔植〕「かぜくさ」に同じ。

（か・せつ）「假說」（名）㊀假に設くること。假につくること。「―敵」。㊁［Hypothesis］實驗によりて確定せ

られたる事實を說明せんがために、假に設けたる說。あくせつ。

(か-せつ)[架設](名) かけわたすこと。わたし設くること。「橋梁の—」。

(か-せつ)[佳節](名) よきひがら、又、いはひ日。「天長節の—」。

(か-せつ)[佳絕](名) 最もすぐれてよきこと。

(が-せつ)[賀節](名) いはひ日。

かせ-づゑ[桛杖](名) あたまが桛(カセ)の形をなす杖。(楞杖)。

かぜ-とほし[風通](名) 風の吹きかよふこと。

かぜ-ぬき[風拔](名) 空氣の通(カヨ)ふ穴。かざぬき。

かぜ-の-かみ[風神](名) かぜを吹かする神。

卄かぜ-の-たまくら[風枕](名) かぜの吹く處に寢ぬること。

かぜ-の-たより[風便](名) ほのかなる風聞。うはさ。ひやうばん。

かぜ-の-つて[風傳](名) かぜのたより。うはさ。

かせ-ひ[桛](名) 「かせ」に同じ。

かぜ-ひき[風引](名) 風邪に犯さるゝこと。かぜ。「—の氣味」。(感冒)。

かぜ-ぶか[桛鮫](名)【動】「ゐゆもくざめ」に同じ。

卄かぜまち-づき[風待月](名) 陰曆六月の異稱。

かぜ-まつり[風祭](名) ㊀立田又は廣瀨の神をまつりて豐作をいのること。㊁稻の實のるさかり頃に、風の神を祭ること。

かぜ-むき[風向](名) ㊀風の吹く方向。㊁ひやうばん。聲譽。「—がわるい」。㊂いきほひ。やうす。「—がかはつた」。

(か-せる)[乾](自) 「かす」の訛。

(か-せん)[歌仙](名) 和歌の名人。「三十六—」。

(が-せん)[牙錢](名) てすうれう。こうせん。

(が-ぜん)[俄然](名、副) にはかなるさまにいふ語。たちまち。だしぬけ。「—雲湧く」。(突然)。

卄かぞ[父](名) 父。「—いろはいかになげかん」。

かぞ[楮](名)【植】「かうぞ」の略言。

カゾアル(名) (「ホルトガル」語 Casuar の訛。「イギリス」語 Cassowary)【動】「ひくひどり」の一名。

卄かぞ-いろ[父母](名) ちゝはゝ。ふぼ。

(か-ソウ)[加僧](名) 會式などのすけに出る法師。

(か-そう)[下層](名) ㊀したのかさなり。したのだん。㊁下方の階級。「—に沈淪す」。

(か-ぞう)[加增](名) 加はりますこと。又、加へますこと。(增加)。

(か-ぞく)[家族](名) 戶主の家長權の下にある親族の團體。いへ。うから。やから。一家。一門。 **—せいど**[家族制度](名) 家族を國家社會の單位となす制度、此制度にては、家長のみ人格を有し、家族及其財產を支配して、家族は單に一の物體たるに過ぎざるものなり。

(が-ぞく)[雅俗](名) 雅なるものと俗なるものと。上品なるといやしきと。風流と野卑と。

(か-そく-ど)[加速度](名)【理】速度の變化の割合、單位時間に對する速度にて計る、速度の增加する場合には正なれど、速度減ずる場合は負となる。

(か-そく-どう)[加速動](名)【理】時間の經過するに從ひて、其路程の次第に增加し行く運動。

卄かそけ-し[幽](形、二) かすかにてあり。

卄かそ-ふ[掠](他、は四) かすむ。

かぞ-ふ[數](他、は下二) ㊀數を積もる。勘定す。計算す。㊁取り擧げていふ。あぐ。「罪をかぞへてこれを責む」。

かぞへ-あ-ぐ[數上](他、か下二) ㊀かぞへたつ。(數擧、枚擧)。㊁かぞへ終る。

かぞへ-うた[數歌](名) 一二三の數を追ひて唱ふるやうに作りなしたる歌、即ち、一つとやの如き歌又はてまり歌などの如きもの。

かぞへ-き-る[數切](他、ら四) かぞへ終る。

かぞへ-た-つ[數立](他、た下二) ひとつ〴〵かぞふ、かぞへあぐ。

(かぞへる)[數](他) 「かぞふ」の訛。

かた[肩](名) ㊀【生】腕と體との接續する所、一に肩帶といひ、前方は鎖骨後方は肩胛骨より成り、これに諸種の筋肉附着して其運動をなす。㊁衣服の肩にあたる部分。「—がよごれる」。㊂獸の前肢又は鳥のつばさのうへなる部分。㊃物の右の上。「—に記す」。㊄擔(ニナ)ひたること。擔(ニナ)ひたる荷。「—をおろす」。 **—を-ならぶ**[比肩] 其等位を同じくす。 **—を-もつ** たすく。ひいきをなす。

かた[潟](名) ㊀海岸の遠淺にして、潮來れば隱れ潮去れば現はるゝ所。ひがた。㊁海水より上に見はれいでたる泥砂。㊂浦又は湖(西國の方言)。「松浦—」。㊃湖又は沼(東北の方言)。「八郞—」。

かた[形](名) ㊀知らるべき物體のありさま。かたち。㊁もやう。あいろ。㊂劍術又は柔術などにて、其流派の仕方。「—をつかふ」。㊃ひきあて。抵當。㊄うらかた。占兆。㊅錢の文字の刻みてある方。

かた[模](名) ㊀てほん。のり。模楷。㊁ためし。しきたり。典例。「—の如く」。㊂鑄物の具、金屬を溶(ト)かし入れて或形を作るもの。いがた。(型)。

かた[方](名) ㊀はうゐ。はうがく。㊁むかふ所。むき。はうかう。㊂なかま。くみ。みかた。㊃其局にあたる人。かゝり。「勘定—」。㊄てだて。しかた。方法。

かた—[片](接頭) ㊀或語に冠して、對にてあるべきもの、たゞ一つある意を表はす語。「—足」「—膝」。㊁或語に冠して完全ならざる意を表はす語。「—言」。㊂或語に冠して一方に偏したる意を表はす語。「—田舍」。(片)。

カダ[迦陀](名) (梵語、Gāthā頌の義) 「ゲ」(偈)に同じ。

—がた[方](接尾) 人を指して呼ぶに添ふる敬語。「殿—」。「御婦人—」。

かた-あげ[肩上](名) 小兒などの衣服のゆきの長きを肩に縫ひ上げて置くもの。

かた-あし[片足](名) ㊀一方の足。(隻脚)。㊁一方の足のみある不具の人。

かた-あて[肩當](名) ㊀衣服の裏の肩のあたる部分につけたる布片。㊁寒さを防ぐために枕と肩との間にはさむ布。

かた-あひて[片相手](名) 一方の相手。

かた-あふぎ[片扇](名) 他をあふぎたて又は騷ぎを鎭むるときなどに、つかふ扇のあふぎ方。

かた-あぶら[固油](名) びんつけあぶら。

かた-あめ[固飴](名) 固く製したる飴。(餳)。

卄かた-あらし[偏荒](名) 田を一年がはりに作ること。

かた-いき[片息](名) たえ〴〵なる息。

(か-たいげん)[假體言](名)【文法】動詞をいひすゑて名詞となせるもの。

かた-いぢ[片意地](名) 我儘なること。意地を立てとほすこと。又、其性質。(偏意地、執拗)。

かた-いつぱう[片一方](名) 兩者の中の一方。

卄かた-いと[片絲](名) よりあはせぬ絲。 **—-どり**[片絲鳥](名)【動】雁の異稱。「—の血の淚なり」。 **—-の**[片絲](枕) 「よる」「くる」「あふ」「節」に冠らする詞。

かた-いろ[片色](名) のしめの一種、色の最も麗はしきもの、おもにかりぎぬに用ふ。

(か-だう)[歌道](名) 歌の道。(歌學)。

(か-だう)[家道](名) 家計。家政。

(か-だう)[河道](名) 河水の流るゝ道。

(が-たう)[牙纛](名) 大將軍のたつる大旗、支那の古昔には、其上に象牙の飾をつけたりといふ。

かた-うづら[片鶉](名) 雌雄相添はずして、唯だ一匹にてゐる鶉。

かた-うで[片腕](名) ㊀片方の腕。かたて。㊁最もたのみとする輔佐の人。(股肱)。

かた-うど[方人](名) ㊀相對せる一方の人。㊁わがかたの人。なかま。みかた。(贊助者、荷擔人)。

卄かた-え[片枝](名) 片方の枝。

かた-おち[片落](名) ㊀一方のみ重きこと。平均を失すること。(偏重)。㊁一方のみをひいきすること。公平を失すること。えこ。(偏頗)。㊂肉などの一方を切りおとしたる部分。「鯛の—」。

卄かた-おひ[片生](名) 十分に成長せぬこと。

かた-おもひ[片思](名) 我を思はぬ人を思ふこと。かたこひ。(片戀慕)。

かた-おや[片親](名) ㊀兩親の中父又は母の稱。㊁兩親の中一人かけて、其殘れる一人。

かた-おろし[肩下](名) 東あそびの曲の名、肩をぬぎて舞ふ。

かた-がき[肩書](名) ㊀本文の右上に書き添ふること。㊁人の姓名の右上に居所などを書くこと。㊂(爵位・勳等又は學士號などの稱。

かた-かけ[偏掛](名) かた帆をかくること。「—の舟にや乘りし」。

かた-かけ[肩掛](名) 婦人などが、外出のとき肩にかけおほふもの、毛絲又は羅紗にて製す、模樣又は色は種々なり。

かた-かげ[片陰](名) ㊀物の陰。㊁日のあたらぬ部分。(陰處)。

かた-かた[片方](名) かたはう。一方。

(かた-かた)(名、副) ㊀堅き物の相觸れて發する音。㊁板の上を下駄にて小走りに步むときなどの音。

かた-がた[方方](名) ひと〴〵。人たち。

かた-がた[方方](代) 多人數をよぶ時の敬語。きみら。おの〴〵がた。

卄かた-がた[方方](副) あれこれ。いろ〳〵。さま〴〵。とりまぜて。

(かた-がた)[旁](接) ついでに。いつしよに。(序)。

(がた-がた)(名) かた〳〵よりは大いなる音。 **—ぶるひ**(名) はげしく胴ぶるひすること。

かた-かど[片角](名) ㊀一方の角。ひとかど。㊁卄ひとかどの役に立つ藝能。

かた-かな[片假名](名) 假名の一種、「アイウエオ」の如き楷體のものにして、漢字の畫を省略してなれるもの。 **—しんがう-はふ**[片假名信號法](名) 右に赤旗、左に白旗を持ち、これを動かして片假名の形象を示し、通信する法にして、多く陸海軍に行はれ、現時小學校兒童の間に普及す。

かた-かは[片側](名) 一方のかは。「町の—」。「帶の—」。(半面)。 **—やぶり**[片側破](名) 理でも非でも押し通さんとする性質。又、其性質の人。

かた-かへり[片鴘](名)【動】二歳の鷹の稱。

かた-かほ[片顏](名) ㊀一方より見たる場合の顏。㊁かためん。(片面)。 **—なし**[片顏無](名) 心一徹にして他を顧みざること。又、其人。

かた-かま[片鎌](名) 「かたかまやり」の略言。 **—やり**[片鎌槍](名) 槍の刃の片側に枝の一本あるもの。(輌丁)。

かた-がみ[形紙](名) 模樣を付しある紙。

卄かた-かゆ[固粥](名) かたく煮たる粥、即ち、今の普通の飯。(飯)。

卄かた-かんな[片假名](名) 「かたかな」に同じ。

かたき[敵](名) ㊀あひて。「ことば—」。(對手)。㊁あた。(仇敵)。

かた-ぎ[片食](名) 一度の食事。

かた-ぎ［模木］（名）㊀模型を彫（ホ）りたる板。㊁「はんぎ」（板木）に同じ。

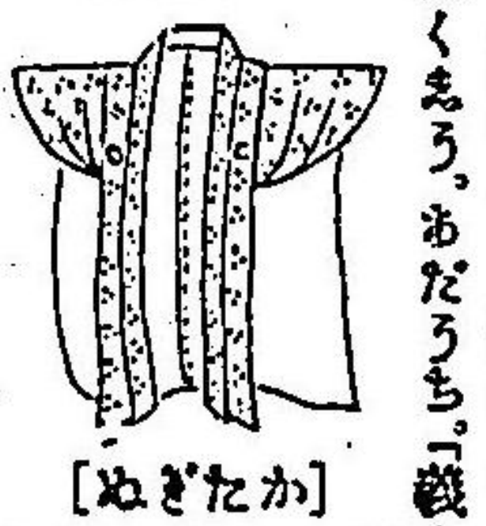
かた-ぎ［樫木］（名）㊀堅き木材。㊁［植］「かし」の一名。

かた-ぎ［堅氣］（名）㊀心の堅固なること。浮蕩ならざること。りちぎ。「—な人」。㊁ばくち打又は藝娼妓などの營業に對して、常の營業の稱。「足をあらうて—になる」。

かた-ぎ［氣質］（名）其身分に相應したる氣性。「商人—」「醉生—」。

かた-き-うち［敵討］（名）ふくしう。あだうち。「武士の—」。（復讐）。

かた-ぎぬ［肩衣］（名）古昔、武家にて用ひし禮服、もと素袍（ウヘ）の袖を去りたるに起る、袖無くして、肩より背に掛けて着るもの、下は半袴を用ふ。（背衣）。


［かたぎぬ］

かた-き-やく［敵役］（名）㊀芝居にて、惡人にいてたつ役。あくがた。㊁うらみを受くる言行をなすもの。にくまれもの。

〔**か-たく**［假托］（名）ことよすること。かこつけ。

〔**か-たく**［家宅］（名）いへやしき。又、すまひ。——**しんにふ**［家宅侵入］（名）［法］故なくして人の住居せる邸宅又は看守せる建造物に侵入すること。——**そうさく**［家宅搜索］（名）［法］豫審手續の一、刑事被告人の住所又は證據物件を藏匿する疑あるもの、住所、若しくはそれ等の身體財産に就きて證據物件をさがしたづぬること。

かた-ぐ（がぎぐぐげげ）［傾］（他、か四）かたむく。

かた-ぐ（げげぐぐるれげよ）［擔］（他、か下二）になふ。かつぐ。

かた-くじけ（名）見にくゝ曲がりくじけたること。「雁首の—たる古煙管」。

かた-くち［片口］（名）㊀片方の口上。一方の陳述。「—は頼めぬ」。㊁一方にのみ口あるながえの銚子。又、一方にのみ口のある鉢。——**いわし**［片口鰯］（名）［動］「ひしこ」の一名。

かたくな［頑］（名）㊀強情を張りとほすこと。片意地強きこと。ぐわんこ。㊁心偏りて常識に遠ざかること。へんくつ。㊂おろかにして理に通ぜざること。（固陋）。

艹**かたくな.し**（くしきけれ）［頑］（形、二）かたくななり。ぐわんこなり。へんくつなり。固陋なり。

艹**かた-くび**［肩首］（名）かたぐるま。

かた-ぐま（名）かたぐるま。「草履かくし—」。

かた-くり［片栗］（名）㊀［植］百合科に屬する宿根草、山野に自生す、花は鐘狀をなし片端は反捲す、根は白く葛に似る、以て澱粉を製すべし。（車前葉、山慈姑）。㊁「かたくりこ」の略言。——**こ**［片栗粉］（名）かたくり草の根にて製したる淡白色の澱粉、麵類又は菓子の料に供し、又、熱湯に和して飲む。——**めん**［片栗麵］（名）かたくり粉にて製したる麵。（山慈麵）。

〔**がた-くり**（名、副）がた〱と搖（ユ）れうごくさまにいふ語。——**ばしや**（名）がたくりとする粗末なる乘合馬車。

かた-くる.し（しくしきけれ）［堅苦］（形、二）あまり嚴格なり。偏屈なり。

かた-ぐるま［肩車］（名）人を肩に跨らせて擔（カツ）ぐこと。かたくび。かたぐま。

かた-げ［片食］（名）㊀一日一回の食。㊁一回のみの食。

かたげ-ぼう［擔棒］（名）テンビンぼう。

かた-こと［片言］（名）㊀ひとつの語の半分。㊁不完全なる語。（左言）。㊂一方のみの言。かたくち。

かた-こひ（イーコ）［片戀］（名）かたおもひ。

かた-こり［片凝］（名）かたこること。

かた-こ.る（らりるるれれ）［片凝］（自、ら四）一方にのみ凝る、

かた-さ［堅］（名）かたき度合。

〔**かた-ざう**（名）品行よき人。つゝしみ深き人。かたじん。かたぎ。

かた-さがり［片下］（名）一方の下りあること。

かた-さき［肩先］（名）肩の上部。（肩頭）。

かた-さと［片里］（名）遐鄙なる里。かたほとり。かたゐなか。

艹**かた-さま**［方樣］（名）㊀方向。ゆくへ。㊁人を愛し敬ひて呼びし稱。

艹**かたし**［鍛］（名）鍛ふこと。きたひ。又、鍛冶する人。

〔**かたし**［偏］（名）かた〱。

かた.し（くしきけれ）［堅］（形、一）㊀くだけ易からず。やぶれ易からず。けんごなり。ぢやうぶなり。（固）。㊁たしかなり。あやふからず。（確）。㊂みだらならず。つゝしみぶかし。「身持ち—」。㊃きびし。つよし。「かたく主張す」。

かた.し（くしきけれ）［難］（形、一）容易ならず。なやまし。むづかし。「創業と守成と何れかかたき」。

艹**かたし-がひ**（イーガ）［偏貝］（名）二つあるべき貝殼が離れて一つになりたるもの。かたつがひ。

かた-しき［片敷］（名）かたしくこと。——**ごろも**［片敷衣］（名）ひとりねの衣。

かた-し.く（かきくくけけ）［片敷］（他、か四）㊀ひとりねに衣の片袖を下に布く。㊁ひとりねをなす。

かたじけなさ［忝］（名）かたじけなきこと。「—に涙こぼるゝ」。

かたじけな.し（くしきけれ）［忝］（形、一）㊀おそれ多し。もったいなし。（辱）。㊁あり難し。謝するに餘りあり。

かたじけ-なみだ［忝涙］（名）かたじけなさに催（モヨ）ほす涙。ありがた涙。

艹**かたじけな.む**（まみむむめめ）［忝］（自、ま四）かたじけなく感ず。

かた-しほ（オーシ）［固鹽］（名）かたまりたる鹽。

かた-しやぎり（名）芝居にて、役者の舞臺より退く時に用ふる囃（ハヤシ）。

かた-しるし［肩章］（名）陸軍の兵種を區別するため、兵士の肩につけたるしるし。けんしやう。

かた-しろ［形代］（名）㊀古昔、神を祀るとき、其神靈の代りとして作りたるもの、佛家の位牌の類。（尸）。㊁陰陽師などが、みそぎ又は祈禱のときに用ふる紙の人形（ヒトガタ）、これを以て身體をなでゝ、其身の災を移すといふ。ひとがた。なでもの。（偶）。㊂本物になぞらへ作りたるもの。

〔**かた-しん**［堅人］（名）かたざう。

艹**かた-しす**（さしすすせせ）［鍛］（他、さ四）きたふ。

かた-すかし［肩透］（名）相撲の手、己が指したる手と、敵の腕に當てたる肩とを引き、敵の體を前へ引き落すこと。

かた-すそ［肩裾］（名）肩と裾と。

かた-すみ［片隅］（名）かたよりたる一方の隅。かたわき。かたはし。（偏隅）。

かた-ずみ［堅炭］（名）樫・櫟などを蒸しやきにしたる炭。（硬木炭）。

艹**かた-そ**［片岨］（名）山の一方の險阻なる處。

かた-そぎ［片削］（名）屋根にあるちぎの一端をそぎたるもの。ちぎ。

かた-そば［片傍］（名）片方の傍。かたはし。

かた-たがひ（イーガ）［片違］（名）ふそろひ。いきちがひ。たかひく。

艹**かた-たが.ふ**（ヘーク ガウ）（へふふふるれへよ）［方違］（自、は下二）かたゝがへをなす。

艹**かた-たがへ**（ガヘーク）［方違］（名）陰陽家にて、天一神の居るといふ方角を避けて他出すること。

かた-たて［肩楯］（名）肩をおほふためのたて。

かた-だより［片便］（名）此方より音信をなせども、先方よりは返事の無きこと。

かたち［形］（名）㊀知覺によりて知り得べき物體のありさま。㊁やうす。けはい。㊂すがた。みめかたち。容貌。（容）。

かた-ぢ［堅地］（名）漆塗などの堅固なる下地（シタヂ）。どろ地の對。

かたちづく.る（らりるるれれ）［形］（他、ら四）㊀其形をなす。㊁容貌をかざる。けしやうす。（容）。

艹**かたち-びと**［容人］（名）かたちうるはしき人。みめよき人。（美人）。

かた-ちんば［片跛］（名）ちんば。ふそろひ。（跛）。

かた-づ［固唾］（名）心をこめて事をなすときなどに、口中にたまる唾。——**をのむ** 心をこらし氣をつめて、事のなりゆきを危み待つにいふ。

〔**かたっ-かは**［片側］（名）「かたかは」の訛。

かた-つき［肩衝］（名）茶入れの一種。

かた-つき［形付］（名）模様のあるもの。

かた-づき［片付］（名）㊀物事の落着又は整理。をはり。をさまり。㊁よめいり。結婚。

かた-づ.く（かきくくけけ）［偏着］（自、か四）かたよる。かたづる。

かた-づ.く（かきくくけけ）［片付］（自、か四）㊀亂れたるもの治まり整ふ。とゝのふ。をさまる。おちつく。㊁嫁（ヨメ）に行く。よめいりす。

かた-づ.く（けけくくるれけよ）［片付］（他、か下二）㊀亂れたるを整へをさむ。とゝのふ。㊁よめにやる。とつかす。よめいらす。

〔**がた-つ.く**（かきくくけけ）（自、か四）㊀堅き物の觸れあひてがた〱と音す。㊁不和起る。もめ生ず。

〔**かたづける**［片付］（他）「かたづく」の訛。

〔**かたっ-つら**［片面］（名）「かたつら」の訛。

〔**かたっ-はし**［片端］（名）「かたはし」の訛。

かたつぶり［蝸牛］（名）［動］腹足類中有肺類に屬する軟體動物、螺旋の殼を有すれど蓋なし、陸上に棲息し脚を以て空氣を呼吸す、雌雄同體なり、二對の觸角を具ふ、種類多し。まひ〱。（蝸螺）。

〔**かたっ-ぺら**［片片］（名）「かたへら」の訛。

〔**かたっ-ぽ**［片方］（名）「かたはう」の訛。

かた-づま［片隅］（名）かたはし。一端。（片端）。

〔**かた-づ.む**（まみむむめめ）［片詰］（自、ま四）㊀かたよりて一般にゆきわたらず。㊁一方へのみ傾く。

〔**かた-づ.む**（めめむむむめよ）［片詰］（他、ま下二）かたはしより事をきめて行く。

かた-つら［片面］（名）一方の面。（半面）。

〔**かた-づ.る**（らりるるれれ）（自、ら四）かたよる。

かた-て［片手］（名）㊀一方の手。隻手。㊁一方の對手。㊂かたはう。一方。㊃五圓又は五十圓若しくは五百圓等、圓以上の五の數を冠する額の隱語。——**うち**［片手擊］（名）㊀かたてにて打ち又は切ること。㊁かたてもち。——**おち**［片手落］（名）一方に厚くして一方に薄きこと。かたおち。（偏頗）。——**じやうだん**（ウーヂヤウ）［片手上段］（名）擊劍にて、片手にて上段の構へをなすこと。——**せいがん**［片手星眼］（名）擊劍にて、片手にて星眼の構へをなすこと。——**つき**［片手突］（名）擊劍にて、片手にて突きをかくること。——**まき**［片手卷］（名）刀のつかいとを、一片よりまきたるもの。——**わざ**［片手業］（名）本業のかたはらになす職業。ないしよく。（餘業）。——**をけ**［片手桶］（名）をけの一片に取手を附けたるもの。

かた-ど［片戶］（名）扉一枚のひらき戶。

かた-とき［片時］（名）暫時の間。しばしのま。へんじ。

かた・どる（らりるるれれ）［象］（他、ら四）物の形をうつし採る。まねる。になふ。「古代の作に―」。

かた・どる（らりるるれれ）［方取］（他、ら四）其方にひかゆ。「後に―」。

かた・な［片名］（名）二字名の半分。（偏諱）。

かたな［刀］（名）（片刃（カタハ）の轉かともいひ、又、片薙（カタナギ）の略音かともいふ）㊀片刃の劍。㊁昔時、武士の帶せし大小の中の長きもの、稱。（佩刀、腰刀）。㊂小なる刃物、即ち、庖丁の類。――**かけ**［刀懸］（名）刀をかけおくための具。（刀架）。――**かぢ**［刀鍛冶］（名）刀をきたひつくる鍛工。（刀劍工）。――**きず**［刀創］（名）刀にて切りたる疵。又、其疵の平癒せし後の痕。（刀傷、刀瘢）。

廿**かたなし**［結政所］（名）古昔、太政官の外記廳の南にありて、文書をとゝのふるとを掌りし所。

かた・なし［堅梨］（名）［植］林檎の一名。（棠梨樹）。

〔**かた・なし**［形無］（名）㊀取るに足らぬほどなること。「―の境界」。㊁遂に其效なかりしこと。

かたな・だま［刀玉］（名）田樂などにて、刀を空へ投げ上げて、手に受くるわざ。

かたな・とぎ［刀研］（名）刀劍類を研ぐこと。又、其業の人。

かたな・の・さび［刀銹］（名）㊀刀に生ずる銹。㊁斬られて命を喪（ウシナ）ふこと。

かたな・もち［刀持］（名）貴人の刀を持ちて附從するもの。

廿**かた・なり**［片生］（名）いまだなりとゝのはずして、發育の不充分なること。

かた・に［片荷］（名）半分の荷。又、些少の荷。

廿**かた・ぬ**（ねねぬぬるるねねよ）［固］（他、な下二）むすびて一緒に重ねあつむ。

かた・ぬぎ［肩脫］（名）㊀かたぬぐこと。㊁廿古昔、宮中の宴會にて、裝束の肩をぬぎて遊びしこと。

かた・ぬ・ぐ（がぎぐぐげげ）［肩脫］（自、か四）㊀上着を半ばぬぎて、下着を出す。㊁はだぬぐ。（袒、肉袒）。

廿**かた・ね**［固根］（名）「ねぶと」に同じ。

かた・ね［偏寢］（名）體の一方をのみ下にし、ねがへりせずに寢ること。

かた・ねり［固練］（名）固く練ること。又、固く練りたるもの。「―の甘酒」。

かた・のり［偏乘］（名）一方にかたよりて乘ること。

かた・は［片刃］（名）㊀刀などの一方にのみ刃を付けたるもの。兩刃の對。㊁小刀などの裏の方をおもに研ぎて刃をつけたるもの。

かた・は（ワイ）［片端］（名）㊀普通の人におとりてあること。又、其人。㊁盲・啞・聾・跛など身に具はらぬ所あること。又、其人。（不具）。

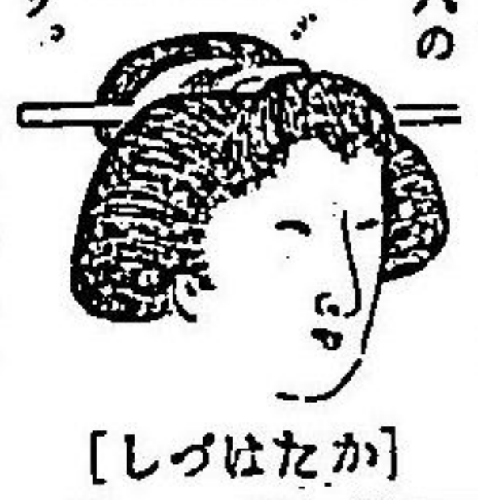
かた・はう（ウ｜ホ）［片方］（名）一方。

かた・はし［片端］（名）一端。

かた・はだ［片肌］（名）㊀一方の肌。㊁「かたはだぬぎ」に同じ。――**ぬぎ**［片肌脫］（名）片肌脫ぐこと。（偏袒）。〔――**ぬ・ぐ**（がぎぐぐげげ）［片肌脫］（自、か四）㊀衣をぬぎて片肌をあらはす。㊁人に力を添ふるにいふ。

かた・ばち［片撥］（名）太鼓の撥を片手にて打ち入るゝこと。

かた・はづし［片外］（名）婦人の髮の結（ユ）ひ方、輪に結び、笄を橫に貫きて其上部を外（ハヅ）したるもの、笄をぬけば下げ髮となる、德川時代に、御殿女中又は武家の內室などおもに結びたり。


［かたはづし］

かた・ばみ［酸漿］（名）㊀［植］酸漿草科に屬する草本、酸味を有す、莖は傾臥し花は黃色なり、葉は通常三個の小葉より成り、食用とすべく、又、鏡を磨ぐに用ふべし。（旭酸草、酸漿草）。㊁紋所の名。――**わうれん**（ウ｜ヲ）［酸漿黃蓮］（名）［植］毛茛科に屬する草、葉は掌狀複葉にして三個の小葉より成る、雌蕊は明瞭なる柄を具ふ、藥用植物なり。――**も**［酸漿藻］（名）［植］浮萍の一種、根は泥中に蔓延し、葉は四個の小葉より成り、酸漿の葉に似て田字形をなす、夏の頃、四瓣の白花を開く。かつみ。

かた・はら［偏腹］（名）わきばら。（脇）。廿――**ぼね**（ラ｜ワ）［偏腹骨］（名）あばらぼね。

かた・はら（ラ｜ワ）［傍］（名）そば。わき。（側）。――**いた・し**（くしきゝけれ）［傍痛］（形、二）㊀かたはらにありて氣の毒に思はる。きのどくなり。㊁笑ふに堪へず。（捧腹、抱腹）。――**な・し**（くしきゝけれ）［傍無］（形、二）ならぶもの無くすぐれてあり。「かたはらなき人たち」。――**め**［傍目］（名）よこめて見ること。

かた・ひいき［片贔負］（名）えこのさた。かたよりたるひいき。

廿**かた・ひ・く**（かきくくけけ）［片引］（他、か四）かたひいきをなす。

かた・ひざ［片膝］（名）一方の膝。――**たて**［片膝立］（名）かた膝を立てゝゐること。

かた・ひさし［片廂］（名）一方へのみ出でたるひさし。

〔**かた・ぴし**（名）堅き物の相觸れて發する音。

廿**かた・びと**［片人］（名）みかた。なかま。

かた・ひば［堅檜葉］（名）［植］卷柏（イハヒバ）科に屬する羊齒植物、山中に生じ岩石に附着す、大小二種の胞子を有し各別種あり、觀賞用として栽培せらる。

かた・びら［帷子］（名）（傍平張の略といふ）㊀古昔、木丁（キチヤウ）・幌（トバリ）などになしゝ布帛の稱。㊁昔時、單衣の總名。夏は生絹冬は練絹を用ひたり。ひとへ。ひとへもの。（暑衫、凉衫）。㊂後世、麻絲にて織りたる夏衣。又、それに用ふる布帛の稱。

廿**かた・ぶ・く**（かきくくけけ）［傾］（自、か四）㊀かたむく。㊁頭をかたむけて考ふ。㊂うたがふ。あやしむ。

廿**かた・ぶ・く**（けけくくるくれけよ）［傾］（他、か下二）㊀かたむく。㊁難ず。なじる。

廿**かた・ぶち**［片淵］（名）一方のみ水深き河。

かた・へ（ヘ｜エ）［片方］（名）㊀かたはら。かたはし。かたわき。かたそば。（傍、側）。㊁はんぶん。なかば。

かた・へら［偏片］（名）對にてあるべきものゝ一方。かたし。かたはう。

かた・ほ［片帆］（名）帆を一方にかたむけて、風をふくますること。眞帆の對。

廿**かた・ほ**［片偏］（名）不充分にてあること。また完全ならざること。

かた・ほとり［偏邊］（名）㊀へんぴ。かたゐなか。㊁かたすみ。かたへ。

かた・ほほ（ホ｜ホ）［片頰］（名）一方の頰（ホホ）。

廿**かた・ま**［筐］（名）目のかたくこまかき籠。

廿**かた・ま・し**（しくしきしけれ）［奸］（形、二）心ねぢけてあり、性質正しからず。（佞）。

かた・まめ［堅豆］（名）硬（カタ）く炒（イ）り又は煮たる豆。

かた・まり［固］（名）㊀かたまること。又、かたまりてあるもの。「砂糖の―」。（團塊）。㊁あつまり。だんたい。㊂極めて頑固に信仰すること。

かた・ま・る（らりるるれれ）［固］（自、ら四）㊀凝（コ）りて堅くなる。㊁あつまる。よる。㊂たしかになる。熟練す。「腕が―」。㊃定着して進歩なくなる。㊄深く信ず。厚く心を籠（コ）む。㊅十分の活動をなす能はざるやうになる。㊆きまる。定まる。「天氣が―」。

廿**かた・み**［筐］（名）目のこまかき籠。かたま。

かた・み［形見］（名）㊀死にし人又は別れたる人の生存中又は昵近（ジツコン）中の事を思ひ出さるゝ種となる遺物。（紀念）。㊁すべて過去の事の思ひ出さるゝ種となるもの。

かた・み［片身］（名）㊀身體の半分。（偏身）。㊁衣服のぬひあはせらるべき一方。みごろの半分。

〔**かた・み**［肩身］（名）人に對して自分の位置、面目。

廿**かたみ・うらみ**［互恨］（名）相互に怨恨の念を抱くこと。

廿**かたみ・がはり**（ガ｜ハリ）［互替］（名）互にかはりあふこと。りんばん。

廿**かたみ・ぐさ**［形見草］（名）［植］（い）葵の一名。（ろ）菊の一名。

かた・みち［片路］（名）往返の道の一方。

かた・みづけ［片身漬］（名）魚肉の片身の鹽漬。

かた・みつわ［片三輪］（名）婦人の髮の結（ユ）ひ方、みつわの一方を切りはづして、若衆（ワカシユ）まげの如くせるもの。

廿**かたみ・に**［互］（副）たがひに。ともに。

廿**かた・みみ**［傍耳］（名）かたはらにありて聞くこと。

かた・む・む（めめむむむるめれめよ）［固］（他、ま下二）㊀堅くす。㊁警戒す。いましむ。㊂たしかにす。「心を―」。

廿**かだ・む**（まみむむめめ）［奸］（自、ま四）心ねぢく。

かた・むき［傾］（名）㊀かたむくこと。㊁かたむきたる度合、けいしや。

かた・む・く（かきくくけけ）［傾］（自、か四）㊀斜に一方へ向く。（敧）。㊁より向ふ。あつまる。「人心の―所」。㊂不確に思ふ。いぶかる。うたがふ。㊃日又は月西に入らんとす。㊄衰運に向ふ。おとろふ。「家運日に―」。㊅滅亡す。ほろぶ。

かた・む・く（けけくくるくれけよ）［傾］（他、か下二）㊀斜に一方へ向かす。㊁より向かす。かたよす。「耳を―」。㊂おとろへしむ。よわくす。又、ほろぼす。くつがへす。「國を―」。

かた・むくろ［片軀］（名）偏屈にして一徹なること。

廿**かた・むすび**［片結］（名）帶などをもろともに結ばぬこと。

かため［固］（名）㊀堅くすること。たしかにすること。いましめまもること。㊁ちかひ。約束。「夫婦の―」。㊂そなへ。警衛。「大手の―」。

かた・め［片目］（名）㊀一方の目。㊁一目の盲せるもの。がんち。めっかち。（眇目）。

かた・めしひ（シ｜イ）［片盲］（名）かた方のめしひなること。又其人。

廿**かため・ぶみ**［固文］（名）誓約の證書、きしやうもん。

かた・めん［片面］（名）一方の表面。（半面）。

かた・もち［堅餅］（名）鏡餅を碎きて干（ホ）したるもの。

廿**かた・もひ**（イ｜モ）［片思］（名）「かたおもひ」に同じ。

かた・もん［固紋］（名）衣服の紋の堅く縫（ヌ）ひつけて浮かぬやうにしたるもの。浮紋の對。

かた・や［方屋］（名）相撲の力士の控へゐる小屋。

廿**かた・やき**［肩燒］（名）古昔、占（ウラナヒ）をなすに、鹿の肩骨を燒きしこと。

かた・やまざと［片山里］（名）都會より遠ざかれる山里。

かた・ゆき［片裄］（名）左右いづれかの裄。（肩行）。

かた・よ・す（させすするすれせよ）［片寄、偏］（他、さ下二）一方へよす。よせかたづく。

かた・より［片寄、偏］（名）㊀かたよること。㊁［理］光線の通過又は反射の能が、方向によりて異なる象、或角度（角度は物體によりて異なり）にて或より反射し、又は或物體（結晶體）を通過したるを再び反射若しくは通過せしめんとするとき、置にてはよく反射若しくは通過すれど、これにの位置にては反射若しくは通過せざること。

かた・より［片縒］（名）一方より絲のよりをか

かた・よ・る（らりるるれれ）［片寄、偏］（自、ら四）㊀一

のみ傾きよる。よる。かたむく。㊁避けて傍に添ふ。(避)。㊂公平を失す。かたおちとなる。

かたらひ(ラカイク)[語](名) かたらふと。はなしあひ。やくそく。——**ぐさ**[語草](名) はなしの種。——**びと**[語人](名) はなし相手。

かたら・ふ(フクワウカ)[はひふへ][語](他、は四) ㊀相談す。かたりあふ。はなしあふ。㊁約束す。いひかはす。ちぎる。㊂徒黨に引き入る。

かたり[語](名) 脚本の外題(ゲダイ)のうへに、五七の文章を以て、其作の大要を述べたるもの。

かたり[騙](名) 人をだまして物などを掠むると。又、其人。

かたり・ぐさ[語草](名) 語るべきたね。はなしのたね。(話柄)。

かたり・ごと[語事](名) 語りきかする事實。

かたり・ごと[騙事](名) 騙りをなすと。だますと。

かたり・つ・ぐ[語繼](他、か四) 話しつたふ。いひつぐ。

‡**かたり・べ**[語部](名) 古昔、大嘗祭のとき、其式場に出て、古事を語りし人民。

かたり・もの[語物](名) 淨瑠璃の諸曲。又、かたる淨瑠璃の外題(ゲダイ)。

カタル[加答兒＝Catarrh](名) 粘膜に焮衝などを起すと。「腸—」、「胃—」。

かた・る[語](他、ら四) ㊀思ふ事を言語によりて陳べ表はす。つげいふ。いふ。㊁他と互に言語を交へあふ。ことばをかはす。はなす。㊂淨瑠璃などを節をつけて唱(ウタ)ふ。

かた・る[騙](他、ら四) 詐僞して人を迷はす。あざむきて財物を取る。だます。(拐騙)。

かた・わき[片脇](名) かたはら。かたへ。

かた・われ[片割](名) ㊀物割れて二つ以上となりたる其一片。(碎片)。㊁黨與の一部分。なかま。くみ。「敵の—」。(黨與)。㊂片割月の略言。——**づき**[片割月](名) 弦月の稱。(半輪、缺月)。——**ぶね**[片割舟](名) 割れて役をなさぬ舟。

‡**かた・ゐ**[傍居](名) ㊀道傍にありて、人に金錢食物などを乞ひもとめて、生を送るもの。こじき。(乞食)。㊁らいびやう。かったゐ。天刑病。

かた・ゐざり[片躄](名) ㊀僅かに這(ハ)ふと。やっとゐざると。㊁片足は膝を立て片足は地をすりて這(ハ)ひ行くと。(片膝行)。

かた・ゐなか[片田舍](名) 遠く都をはなれたる田舍。へんぴ。(僻村)。

かた・ゑみ[片笑](名) 片頰にわらひを含むと。

かた・をりど[片折戶](名) 一方のみ開くつくりの折戶。又、一方のみ開きたる折戶。

(**か・たん**)[荷擔](名) ㊀力をそへて助くると。味方すると。㊁荷物をになふと。「—して走る」。

〔**かたん**〕(名) 物の落つる時に響く音。又、風が戶障子などを吹き動かす音。

〔**がたん**〕(名) 前條に同じ。

カタン・いと(名) (「カタン」は英語、Cotton)もと舶來したる綿絲、もろよりにして光澤よし。

かち[徒](名) ㊀車馬其他乘物にのらずして歩行すると。足にてあるくと。(徒步、徒行)。㊁「かちざむらひ」の略言。「ふ—」。(徒士)。

かち[勝](名) 勝つと。まけの對。(勝、贏)。

かち[褐](名) 濃き紺色。かちいろ。

(**か・ち**)[價値](名) ㊀あたひ。ねうち。㊁くらゐ。たふとさ。㊂【經】財が人の慾望を充たすに適する程度、即ち、効用の程度の稱、慾望と財との關係に基づくものにして財の固有のものにあらず、故に財が定量以上を超ゆれば、遂に其價値を失ふに至る、を價値の限界といふ。

かぢ[梶](名) ㊀艪(ロ)又は櫂(カイ)など舟を行る具の稱。(楫)。㊁艪に付けて舟の方向を正しくする船具。(舵)。㊂車の梶棒。㊃車の梶棒に感じる、稻荷の皿丑、「—が皿し」。

かぢ[梶](名) 【植】桑科に屬する直立木本、枝毛を有し、葉は粗糙にして多少稍圓形をなす、樹皮の纖維は製紙の原料に供せらる。

か・ぢ[鍛冶](名) (金打(カヌチ)の轉) 金屬をきたひて器物を製すると。又、其工人。「刀—」。(鍛工)。

(**か・ぢ**)[加持](名) 【佛】(い)諸佛の大慈は行者に加はり、行者の信心は佛因を感ずると。諸佛が行者を加護保持して災を除き樂を與ふると。(ろ)密教にて、佛力の加護を祈りて病氣・災難を除くと。

(**が・ち**)[雅致](名) みやびやかなる趣。風流なるさま。「古色蒼然として—多し」。(風致)。

——**がち**[勝](接尾) 或語に添へてかたよる義を表はす語。「强ひ—」。「傾き—」。

かち・あひ[搗合](名) しようとつ。又、むおゆん。

かち・あ・ふ[はひふへ][搗合](自、は四) ㊀物と物とつき合ふ。しようとつす。㊁互に一致せず。矛盾(ムジュン)をなす。はんたいす。

かち・ありき[徒步](名) 徒(カチ)にてあるくと。(步行)。

かち・あるき[徒步](名) 前條に同じ。

かち・いくさ[徒軍](名) ㊀徒(カチ)だちの士卒。步兵。㊁步兵の合戰。

かち・いくさ[勝軍](名) 勝利ある戰。(捷戰)。

かち・いろ[勝色](名) 「カーキー」に同じ。

かち・いろ[褐色](名) 「かち」(褐)に同じ。

かち・え[褐衣](名) 古昔、隨身(ズヰジン)の着し褐色の衣。

‡**かち・かた**[搗難](名) 【植】「むはむぎ」の異稱。

〔**かち・かち**〕(名、副) 固きもの、鋭く觸れあふ音。

〔**がち・がち**〕(名、副) ㊀固き物のふれあひて發する音。㊁愁(ソイ)がしげなるさまにいふ語。㊂物事に餘裕なく氣せはしきさまにいふ語。

かち・き[勝氣](名) 人に負くるを忌む性質。人ときそひ勝ちなると。(克忌)。

かぢ・き[舵木](名) ㊀舟の舵、もとは木にてつくる故にいふ。㊁【動】硬鰭類に屬するかぢきとほし、はたうを等の總稱。又、俗に「かぢきとほし」の略言。——**とほし**(オト)[舵木徹](名) 【動】硬鰭類中かぢき科に屬する魚、體は圓長にして稍や圓錐形をなす、鱗なくして皮膚は粗糙なり、上顎は延長して劍狀をなし、其緣邊は鋸齒をなす、口は闊けれど齒なく、尾鰭は新月形をなす、背部碧藍色にして淡黑色を帶び腹部は銀白色なり、體長大なるものは一丈三尺許に及ぶ、常に遠洋の上層に游泳し動作猛烈なり、七月頃より九月頃にかけて產卵のため近海に來る、我沿海槪ねこれを產す、殊に南海西海に多し。かぢきまぐろ。かぢとほし。——**まぐろ**[舵木鮪](名) 【動】前條に同じ。

(**か・ちく**)[家畜](名) 家に飼養する動物、即ち、牛・馬・豚・雞等の稱。

かち・ぐり[搗栗](名) 栗の實をゆでゝよく乾し、これを臼に入れ搗きて其澁皮と殼とを去りたるもの、勝栗と音相通ずるを以て、祝賀の儀式などに用ふ。(勝栗、乾栗)。

‡**かち・さ・ぶ**[勝進](自、さ上二) 勝ちすゝむ。

かち・ざむらひ(イーク)[徒侍](名) ㊀徒步して伴をなす從者。㊁德川氏の部下にありし小身の士。おかち。(徒步士)。

‡**かち・しね**[搗稻](名) 「もみよね」に同じ。

‡**かち・すみ**[和炭](名) けしずみの類。

かち・だち[徒立](名) 徒步。

かち・ぢ[徒路](名) 徒(カチ)にてあるくと。

(**か・ちつ**)[加秩](名) ㊀秩祿の增し加はると。㊁年齡のましくはゝると。

かぢ・づか[舵柄](名) 舵の柄。(柁杠)。

〔**がち・つ・く**〕(自、か四) ㊀がち〳〵する。㊁かち〳〵音生ず。㊂もめ事生ず。

かち・つづけ[勝續](名) 勝がつゞくと。

かち・どき[勝鬨](名) いくさにかちてあぐる鬨の聲。

かぢ・どこ[舵床](名) 船のともの木を刻みて舵を入るゝところ。

かち・とほし(オト)[勝通](名) 續けて勝つと。

かぢ・とほし(オト)[舵徹](名) 【動】「かぢきとほし」に同じ。かぢきまぐろ。(旗魚)。

かぢ・とり(名) ㊀楫(カヂ)をあやつる人。(梶師)。㊁舵(カヂ)を取りて舟の方向を定むる人。(舵手)。㊂或團體の行動を指揮する人の稱。

〔**かち・にげ**〕[勝逃](名) 勝負に勝ちしまゝ其場を去ると。

かち・ぬの[褐布](名) 褐色に染めたる布、播磨國飾磨(シカマ)の名產。

‡**かち・のき**[勝木](名) 【植】「ぬるで」の古名。

かぢ・のき[梶木](名) 【植】「かぢ」(梶)に同じ。

かぢ・のは[梶葉](名) ㊀梶の木の葉。㊁紋所の名、梶の木の葉を描きたるもの。‡——**ひめ**[梶葉姬](名) 古昔、七夕の夜に梶の葉に、詩歌などを書きしより、織女の稱。

‡**かち・の・やまひ**[癇病](名) 「せうかち」に同じ。

かぢ・ばしら[舵柱](名) 舵の柄。

かち・はだし[徒跣](名) 徒(カチ)にて且跣足(スアシ)なると。「供をも連れず—」。

‡**かち・びと**[徒人](名) 徒步する人。

かぢ・ぼう[梶棒](名) 人力車などの長柄。

‡**かぢ・まくら**[舵枕](名) 船中に旅寢すると。ふなやどり。(楫枕)。

かち・まけ[勝負](名) かつとまくると。(勝敗)。

かち・むしや[徒武者](名) 徒步の軍隊。徒步の兵士。かちいくさ。

かち・め[勝布](名) 【植】あらめの類、多く遠江國相良(サガラ)地方より出す、これを細粉となして吸物にす。さがらめ。(搗和布)。

かち・めつけ[徒目付](名) 德川時代の目付役の所屬、今時の巡査の如きもの。

かぢ・や[鍛冶屋](名) 鍛冶を職となす人。又、其家。(冶工)。

(**か・ちやう**)(ヨウ チ)[蚊帳](名) 「かや」(蚊屋)に同じ。——**ぐさ**[蚊帳草](名) 【植】「かやつりぐさ」に同じ。

(**か・ちやう**)(ヨウ チ)[家長](名) ㊀一家の主長たるもの。あるじ。戶主。㊁家臣の長。家宰。——**けん**[家長權](名) 一家の主長たる權利、家族制度の昔時にては、絕對のものにして、家族は殆んど物件と同じく、其生命自由も財產もすべて家長權の下に支配せられたりしが、個人制度の今日に至りては、家族もまた權利の主體となり、家長權は變じて親權となり、家族が其居所を定むると及其婚姻・緣組等に就きて拒否する權利あるのみとなれり。

〔**かちや・かちや**〕(名、副) 堅きもの數多く一處に集合し相觸るゝ音。

〔**がちや・がちや**〕(名) 【動】「くつわむし」の一名。

〔**がちや・がちや**〕(名、副) ㊀「かちや かちや」に同じ。㊁やかましくいひ立つるさまにいふ語。——**タバコ**(名) 文化以前に、わらびての鍔つきたる引出に、刻煙草をふたかはに並べ入れ、がちや〳〵

と音立てゝ賣りあるきしもの。又、其刻煙草。

（かちやつ・く（かきくくけけ）(自、か四) ㊀かちや〳〵と音す。㊁葛藤生ず。もめ起る。

〔がちやつ・く（かきくくけけ）(自、か四) 前條に同じ。

〔がちやん(名) 物の落つる時などの音。

（か‐ちゆう〔家中〕(名) ㊀大小名の家來の全體。㊁武士の仲間。「ー屋敷」。

かち‐ゆみ〔徒弓〕(名) 徒歩にて弓射ること。(歩射)。

（か‐ちよ〔家猪〕(名) 【動】「ぶた」の異稱。

（か‐ぢよ〔加除〕(名) 加ふると除くと。

（か‐ぢよ〔歌女〕(名) ㊀うたひめ。げいしや。㊁【動】「みゝず」の異稱。

〔かちり(名、副) 堅く小さき物の堅き物にあたりたる音。「矢がーあたる」。

〔がちり(名、副) 前條に同じ。「鍬がー石にあたる」。

かち‐わたり〔徒渡〕(名) 舟又は筏(イカダ)などに乘らず、徒歩して川を渉(ワタ)ること。(歩渉)。

かぢ‐を(名) 舟の舵又は楫(カヂ)につけて力とする緒。(舵緒、楫緒)。

かちん(名) (搗飯(カチイヒ)の轉)餅の一名。

〔かちん(名) 堅き物の相あたる音。

〔がちん(名) 前條に同じ。

（かつ〔渇〕(名) 喉のかわくこと。「ーを覺ゆ」。

（かつ〔褐〕(名) ぬのこ。わたいれ。「ーを衣る」。

か・つ（たちつつてて）〔勝〕(自、た四) ㊀相手を負かす。(勝、贏)。㊁敵軍を敗る。(捷)。㊂物事にすぐれてあることを示す。㊃おさへつく。おしとゞむ。「私慾にー」。(克)。

か・つ（たちつつてて）〔搗〕(他、た四) ㊀うすつく。つく。「餅をー」。㊁加ふ。そふ。

か・つ（てててつつるつれてよ）〔揉〕(他、た下二) まぜ合はす。まず。

かつ〔且〕(副) 彼にもわたり此にもかゝはりて。一方には。「ーこえて、分れも行くか、逢ふ坂は」。

かつ〔且〕(接) 其上に。なほ。「武を修め、ー文を屬す」。

（かつ‐あい〔割愛〕(名) 惜しく思ふものを見すつること。おもひきること。「ーして歸る」。

＋かつ‐ち〔且〕(接) 「かつ」に同じ。

（かつ‐かう〔恰好〕(名) ㊀あたかも好きこと。丁度ころあひなること。㊁すがた。かたち。やうす。「ーの善惡」。㊂價の相應してあること。又、割合に價のやすきこと。「ーな品」。

（かつ‐がう〔渇仰〕(名) 渇望して待ち迎ふること。(熱望)。

〔かっ‐かっ(名、副) ㊀炭火などの熾(サカ)んなるさまにいふ語。㊁逆上せる心地にいふ語。「頭がーする」。

かつ‐がつ〔且且〕(副) わづかに。からうじて。ほとんど。「ー出來上つた」。

〔がつ‐がつ(名、副) 饑渇などにせまれる時のさまにいふ語。「ーして食ふ」。

＋かつがつ・し（しくしくしきしけれ）(形、二) 若かるべし。(可然)。

〔がっかり(名、副) ㊀張りつめたる氣の俄かに緩むさまにいふ語。㊁たちまち衰へかはるさまにいふ語。

＋かつ‐ぎ〔勝木〕(名) 【植】「ぬるで」の一名。

〔かつぎ〔被衣〕(名) 「かづき」の訛語。

かつぎ〔擔夫〕(名) 荷を運ぶ人。物を擔(ニナ)ふ人。(擔夫)。

かづき〔被衣〕(名) 「きぬかづき」(衣被)に同じ。

＋かづき〔潛〕(名) 水中に沒入すること。水をくゞること。(潛)。 ーめ〔潛女〕(名) 水をかづきて、底にあるものを拾ひ採る女。(海人、蜑人)。

（かつ‐きよ〔割據〕(名) おの〳〵一方面を占領すること。「英雄ー時代」。

〔かっきり(名、副) 區別のきはだちたるさまにいふ語。「割前ー五十錢」。

かつ・ぐ（がぎぐぐげげ）〔擔〕(他、か四) ㊀肩にかけて擔(ニナ)ふ。かたぐ。になふ。(負)。㊁あざむく。だます。

かづ・く（かきくくけけ）〔被〕(他、か四) 頭上にかうむる。かぶる。いたゞく。かうむる。

＋かづ・く（かきくくけけ）〔潛〕(他、か四) 水中にくゞりいる。もぐる。(潛)。

かづ・く（けけくくるくれけよ）〔被〕(他、か下二) ㊀被らしむ。かむらす。㊁負はす。持たす。「罪を他人にー」。㊂かづけものを與ふ。おくる。(賜)。㊃かこつく。ことよす。(託)。

〔かっ‐くひ〔蚊食〕(名) 身體の蚊のさしたる痕。

〔がっくり(名、副) 俄に挫(クジ)け衰ふるさまにいふ語。 ーねち(名) がっくり衰ふること。

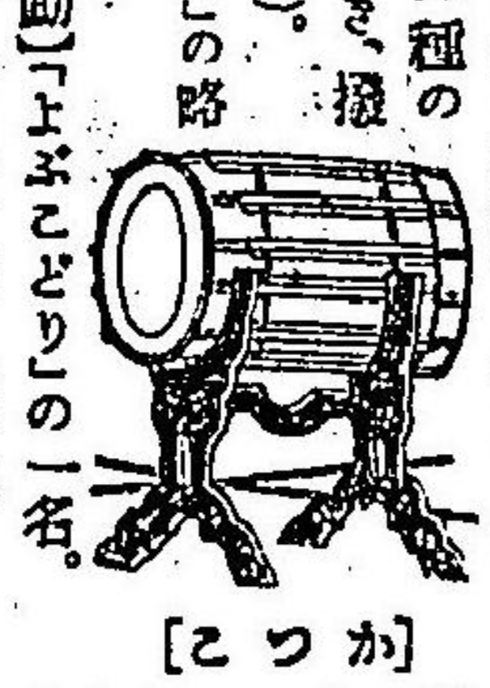
かっ‐け〔脚氣〕(名) 「かくけ」(脚氣)を見よ。

かづけ‐もの〔被物〕(名) 人(多くは藝人)をねぎらひ又は賞美して與ふる物品。はな。はうび。(纏頭)。

〔かづける〔被〕(他) 「かづく」の訛。

＋かっ‐こ〔餲餬〕(名) 古昔の一種の菓子、うどん粉を原料として製し、これを油揚にしたるもの。

（かっ‐こ〔羯鼓〕(名) 一種の樂器、足の上に横に置き、撥(バチ)にて打つもの。(杖鼓)。



[かつこ]

〔かっ‐こ(名) 「からころ」の略音。下駄。(小兒の語)。

かっこう‐どり(名) 【動】「よぶこどり」の一名。

（かっ‐こく〔各國〕(名) 各の國々。「ー條約」。

（かっ‐こん〔葛根〕(名) 葛の根、藥用に供す。 ーたう〔葛根湯〕(名) 葛の根を料としたる漢方の煎藥、風邪の發汗劑なり。

（かっ‐さい〔喝采〕(名) どよめきわたりてほむる聲。ほめごゑ。

（かっ‐さい〔鶻哉〕(名) 【動】小さき種類の隼(ハヤブサ)。

（がっ‐さい〔合切〕(名、副) のこらず。いっさい。「いっさいー」。 ーぶくろ〔合切袋〕(名) 身に附屬する小さき物を一切入るゝ袋、ずゞぶくろ。

（かっ‐さう〔褐藻〕(名) 【植】褐色又は帶褐色の水草、海中に生ず、蕃殖は有性及無性の兩様あり、こんぶ・わかめ等これなり。

（かっ‐し〔甲子〕(名) ㊀きのえね。㊁年月。

〔かっ‐し(名) 固きもの、はげしく觸るゝ音。

（かっ‐しき〔喝食〕(名) 佛家(主に禪と律と)にて給仕のちごを指して呼ぶ語。「ー花若丸」。

（がっ‐しき〔合式〕(名、副) 一切。いっさい。のこらず。

（かつ‐じやう〔割讓〕(名) 其物を割きて他へゆづり與ふること。「土地のー」。

（がっ‐しやう〔合掌〕(名) ㊀佛を拜するときなどに行ふ禮、雙方の掌を密着せしめてをがむこと、天竺の風なりといふ。㊁材木を交叉すること。又、交叉したる木材。 ーおよぎ〔合掌泳〕(名) 合掌したる手を水上に出してなす立ちおよぎ。 ーぐみ〔合掌組〕(名) 材木を交叉して組み合はすること。又、其材木。 ーびねり〔合掌捻〕(名) 相撲にて、相手の首を兩手にて捲(マ)き、其指先を組合せてひねり仆すこと。

（がっ‐しゆう‐こく〔合衆國〕(名) 國家が聯合して共同なる政府を立て、その下に組織し、完全なる外交權を有する一の國家。

（がっ‐しよう〔合從〕(名) 支那の戰國時代に、蘇秦が計策せし、秦に對する山東六ケ國の同盟。

（かっ‐しよく〔褐色〕(名) 茶色。 ーくわやく〔褐色火藥〕(名) 一種の火藥、黑色火藥に比すれば、低度の熱にて發火する利あり。 ーさう〔褐色藻〕(名) 【植】「かつさう」(褐藻)に同じ。 ーじんしゆ〔褐色人種〕(名) 世界の人種を五類別したるもの、一、皮膚褐色にして髮黑く鼻扁く、顴骨の突出したるを特性とす。「マレイ」人種。

〔がっしり(名、副) ㊀物のよく一致せるさまにいふ語。㊁體の強健なるさまにいふ語。「ーした身體」。

かっ・す（せしすするすれせよ）〔渇〕(自、さ變) 咽喉(ノド)かわく。「ーれども盜泉の水を飲まず」。

かっ・す（せしすするすれせよ）〔喝〕(他、さ變) ㊀聲を勵まして責む。志かる。とがむ。㊁おどす。おどかす。

がっ・す（せしすするすれせよ）〔合〕(自、さ變) あふ。

がっ・す（せしすするすれせよ）〔合〕(他、さ變) あはす。

（かっ‐すゐ〔渇水〕(名) 旱(ヒデリ)のために水の涸(カ)るゝこと。

（かっ‐せん〔割線〕(名) 【數】曲線と二つ若しくは二つ以上の點に於て交はる直線の稱。

（かっ‐せん〔合戰〕(名) 相戰ふこと。たゝかひ。(戰爭、戰鬪)。

（がっ‐そう〔合奏〕(名) 種々の樂器を合はせて、音樂を奏すること。

（がっ‐たい〔合體〕(名) ㊀體と體と一つになること。㊁一致すること。(合同)。

（かつ‐だう〔喝道〕(名) ㊀叱咤すること。どなりつくること。「智深便ちーすらく」。㊁昔時、貴人の通行などに、聲をあげて行人を避せしこと。みちおさへ。「ーして過ぐ」。

がったり(名) さしものをさすためによろひの後に附くる具。

かったゐ〔癩〕(名) かたゐ。らいびやう。(癩病)。 ーばう〔癩坊〕(名) らいびやうやみ。

（かっ‐たん〔褐炭〕(名) 石炭の一種、褐色を帶び紙に擦すれば褐色の痕を留む、炭化の作用未だ完(マツタ)からずして多量の有機物を混じ、燃燒するに火焔を發し奇臭を散ず、黑炭より火力弱く灰多し。

（かつ‐だん〔割斷〕(名) きりたつこと。たちはなすこと。

（がっ‐ち〔合致〕(名) 「がふち」に同じ。

（かっ‐ちう〔甲冑〕(名) ㊀鎧と兜と。㊁古昔の戎衣の總稱。(鎧胄)。

〔かっちり(名、副) かちりのやゝ度を強めたる語。

〔がっちり(名、副) ㊀がちりのやゝ度を強めたる語。㊁きっかり。丁度。「ー當てはまる」。

かって〔勝手〕(名) ㊀便宜よきこと。都合よきこと。㊁おのれの方にのみ利益になるやうに行ふこと。わがまゝ。きまゝ。「てまへー」。㊂だいどころ。みづやどころ。㊃すぎはひのやうす。くらしむき。 ーがた〔勝手方〕(名) ㊀まかなひ方。㊁家政をとりあつかふ人。㊂大名などの財政を掌る役人。 ーぐち〔勝手口〕(名) だいどころのではいりぐち。 ーづく〔勝手盡〕(名) 勝手をつくすこと。きまゝにすること。 ーに〔勝手〕(副) 自由に。思ふまゝに。 ーむき〔勝手向〕(名) くらしむき。なりはひのやうす。 ーもと〔勝手許〕(名) かってむき。

かつて〔嘗、曾〕(副) ㊀かねて。まへかた。㊁あるとき。いちど。㊂すべて。全く。「ー知らず」。

（かっ‐てつ‐くわう〔褐鐵礦〕(名) 【礦】黃褐色又は黑褐色にして光澤なき鐵礦、酸化鐵八五・六と水一四・四とより成り、不規則なる塊狀をなす、其軟(ヤハラカ)きものは指頭にて碎くことを得、往々砂・粘土・燐酸化物等を含有するを以て種々の變種を生ず、純良なるものは鐵を獲る要料とし、粘土を混ずるものは專ら繪具の料に供せらる。(含水酸化鐵)。

（がっ‐てん〔合點〕(名) ㊀詩歌などを評して、よきものに點を加ふること。(批點)。㊁承知すること。せうだく。㊂うなづくこと。てんとう。

（かっ‐とう〔葛藤〕(名) ㊀かづら。つた。㊁もんちやく。もめ。「黨派のー」。㊂煩悶又は疑問。

ガットリング‐はう[―砲＝Gatling gun]（名）「ガットリングはう」に同じ。

かつ‐は[且]（接）「かつ」に同じ。

（**かつ‐ぱ**[喝破]（名）㊀聲を大いにして他の言をおさへ止むるヿ。㊁邪說を排し眞理を說き明かすヿ。千古不滅の言を吐くヿ。

かっ‐ぱ[河童]（名）想像上の生物、水陸共に棲み、形三四歲の童子に似て、面は虎の如く嘴やゝ尖りて身に鱗あり、頭に毛少く、頭上凹み僅かの水を容る、其水の存する間は、陸上にても力強く、他の生物を水中に引き入れて血を吸ふ、俗說に河中にて子供の溺死するは其ためなりといひ傳ふ。かはっぱ。（水虎）。

カッパ[合羽]（名）（「スペイン」語の Capa より出づ）㊀雨天の外出などに用ふる外套、「スペイン」人の外套を摸して製したるに始まりたるものなりといふ、綿布・毛布・桐油などにて製して袖を付く、種類多し。（雨衣）。㊁荷物又は駕籠などの雨被に用ふる桐油紙。㊂見世物などの木戸口にゐて、客に見物を勸めて引き入る、出方の男、よく雨合羽を着して居たりしより名づく。――**かご**[合羽籠]（名）古昔、貴族の外出するとき、供人の雨具を入れて、奴に持たせたる具、前後に一つづゝ付け、棒にて肩に荷ふもの。――**ざる**[合羽笊]（名）「カッパかご」に同じ。

（**かつ‐ばう**[渴望]（名）炎天に水を求むるが如くに、切に希望するヿ。

（**かっ‐ぱう**[割烹]（名）食物の調理。料理。――**てん**[割烹店]（名）料理店。

〔**かっ‐ぱ‐と**（副）俄に倒れ伏し又は急に起き上がるさまにいふ語。「―起きて」。（岸破）。

（**かっ‐ぷく**[割腹]（名）武家時代に、武士の重罪犯あるもの丶閏刑。はらきり。切腹。

かっ‐ぷく[恰幅]（名）身體の成り立ちたるさま。ごたいのやうす。「―がよい」。

かつ‐ぶし（名）[鰹節]「かつをぶし」の略言。

カツプリ（名）西洋こがたなのたぐひ。

（**がっ‐ぺい**[合併]（名）ひとつに合はするヿ。

（**がっ‐ぺき**[合壁]（名）壁一重隔てたる隣家。となり。

カッペル（名）（「オランダ」語 Kagchel）「ストーブ」。

〔**かっ‐ぽく**[恰幅]（名）「かっぷく」の訛。[illegible]

かっ‐ぽれ（名）一種の俗曲、滑稽猥褻なる歌に合はせて、滑稽猥褻の踊りをなすもの。

（**がっ‐ぽん**[合本]（名）數冊を一冊にとぢ合せたる本。

〔**がつ‐つ・く**（自、か四）㊀がつ〳〵す。㊁もつれ生ず。

かつ‐の‐き[勝木]（名）[植]「ぬるで」の一名。（勝軍木）。

カツマ[羯磨]（名）（梵語、Karma）[佛]㊀受戒の儀式・作法。㊁佛器、獨鈷を二本なゝめに打ち違へたるもの。

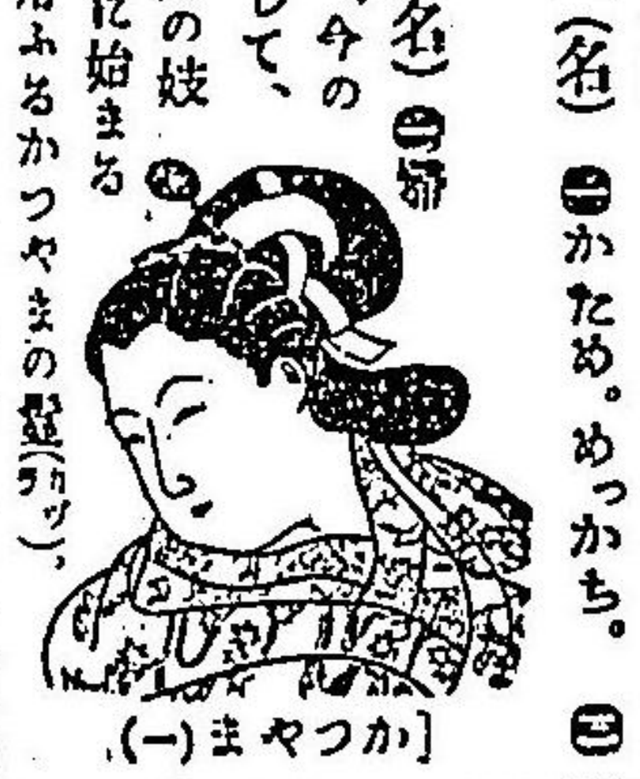
ガツマル（名）（琉球語、Gajimaru）[植]桑科の喬木、つばきに似、長き氣根を出す、材は細工用とす。

かつ‐み（名）[植]（い）廿「まこも」の古名。（ろ）「かたばみも」の一名。

（**かつ‐めい**[渴命]（名）はなはだしく餓うるヿ。

（**かつ‐もく**[瞎目]（名）㊀かため。めっかち。㊁めくら。

かつ‐やま[勝山]（名）㊀婦人の髮の結（ユ）ひ方、今のまるまげの前形にして、寶永の頃、江戸吉原の妓女勝山が結（ユ）ひしに始まるといふ。㊁役者の用ふるかつやまの鬘（カツラ）。


[かつやま(一)]

かつら[桂]（名）㊀[植][illegible]科の落葉喬木、樹皮は灰色なり、葉は心臟形にして對生し、葉柄は長し、雌雄異株にして、材は船材・鉛筆軸・版木・細工物等に用ひらる。㊁遊女の異稱。

かづら[葛]（名）㊀植物の匍匐莖・纏繞莖又は攀緣莖などの總稱。つる。㊁柿のたが。（京都の方言）。

かづら[鬘]（名）㊀廿古昔、蔓草を頭髮の飾とせしもの。㊁乏しき毛髮の補ひにいるゝ毛髮。そへがみ。かもじ。（髢、髲）。㊂毛髮を以て、種々の髷の形につくりたるもの。（假髮）。

廿**かつら‐あゆ**[桂鮎]（名）古昔、山城國桂の里より内裏へ奉りし鮎の稱。

かづら‐がほ[鬘顏]（名）鬘をつけたるときの顏。

廿**かづら・く**（自、か四）[鬘]鬘とす。

かづら‐し[鬘師]（名）かづらを造る職人。（鬘工）。

かづら‐した[鬘下]（名）婦人の髮の結（ユ）ひ方、昔時、俳優又は少女の多く結びしもの。

かづら‐ひげ[鬘髭]（名）かづらをつけたるやう美しき髭。

廿**かつら‐め**[桂女]（名）㊀古昔、山城國桂の里に住ひ物を賣り步きし女、世々女主なりしといふ。㊁古昔、婚禮のとき嫁女につき添ひし女。

かつら‐を[桂男]（名）「かつらをとこ」㊂に同じ。

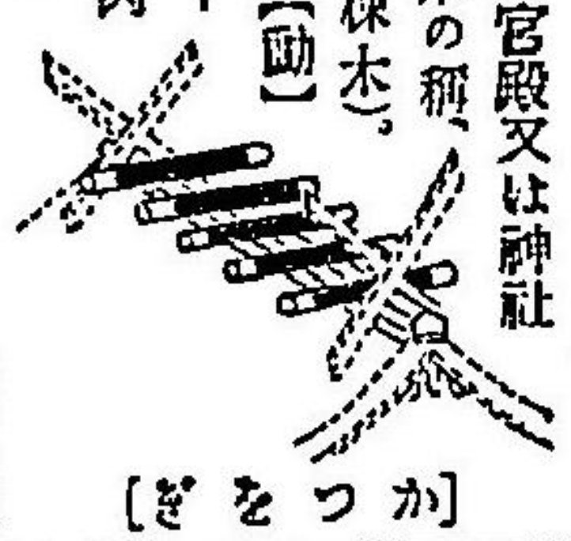
かづら‐をけ[鬘桶]（名）能狂言にて、太鼓を打つ人などの腰を掛くるもの。つゞみをけ。

かつら‐をとこ[桂男]（名）㊀月中に棲むといふ人。㊁月の異稱。㊂容姿麗はしき男子。

カツレツ（名）（「イギリス」語 Cutlet の訛言）一種の料理、おもに獸肉をへットにて揚げたるもの。

〔**かつ‐ゑる**[飢、餓]（自、わ下二）㊀空腹を感ず。（饑）。㊁乏しく欠乏を感ず。

かつを[鰹]（名）（堅魚（カタウヲ）の轉）[動]硬鰭類中さば科に屬する魚、體は頗る豐肥し、鱗は細小にして胸鰭の上部及後部を被ふのみ、背部は蒼黑色にして腹部は鉛白色なり、體側には四條乃至八條の蒼色なる線あり、體長二尺許に達す、我國東海西海に產す、性活潑なり、黑潮の變動に從ひて洄游す。（鰹魚、松魚、鯉魚）。――**いろり**[鰹色利]（名）鰹を煮出したる汁、食物の味付けに用ふるもの。（鰹魚煎汁）。――**ぎ**[鰹木]（名）宮殿又は神社のむなぎの上に並列せる材木の稱、丸く長く形鰹節の如し。（加棟木）。――**くぢら**[鰹鯨]（名）[動]「いわしくぢら」に同じ。――**ぶし**[鰹節]（名）鰹魚の肉を湯煮にし、これを干し固めたるもの、其生乾（ナマビ）なるをなまりといふ土佐及薩摩の產を佳良とす。（木魚、鰹干）。――**むし**[鰹蟲]（名）[動]（い）「みづすまし」の一名。（京阪地方の方言）。（ろ）「ぬかゞ」の一名。（水馬）。


[かつをぎ]

かて[糧]（名）㊀古昔、旅行又は行軍などに携帶せしほしいひ。（糗、糧）。㊁貯へおく穀物の類。㊂生命を維持し活動を補充する料。「精神の―」。

かて（名）雜炊（ザフスヰ）の稱。

かて[糅]（名）まぜ加ふる食物。「麥を、米の―とす」。

廿―**がて**[難]（接尾）或語に添へてかたき意を表はす語。「君まち―に」。

―**がて**[勝]（接尾）「がち」に同じ。「雪―」。

（**か‐てい**[柯亭]（名）（漢の蔡邕が柯亭館にて、館のたるきの竹にて笛を造りし故事に出づ）笛の異稱。――**の‐たけ**[柯亭竹]（名）前條に同じ。

（**か‐てい**[假定]（名）㊀かりに定め置くヿ。㊁或說明をなすために、未だ實際の證明若しくは經驗を經ずして想像したる事實。

（**か‐てい**[家弟]（名）おのれのおとうと。

（**か‐てい**[家丁]（名）自家のつかひをとこ。

（**か‐てい**[家庭]（名）一家の中。うち。「―の風波」。――**けういく**[家庭教育]（名）父母若しくは兄姉が、其子女若しくは弟妹に對し、家庭に於ける日常生活より自然に與ふる敎育。にはのをしへ。――**せうせつ**[家庭小說]（名）家庭敎育の一助ともなる小說。

（**か‐てう**[嘉兆]（名）めでたきしるし。

（**か‐でう**[箇條]（名）あげていふ件。かど。すぢ。（條款）。――**がき**[箇條書]（名）箇條を分けて書き立てたるもの。

（**が‐てう**[鵞鳥]（名）[動]水禽類中扁嘴類に屬する鳥、がんより大形なり、身白く頸長し、嘴大いにして頭黑し。たうがん。（蒼鵝）。――**くび**[鵞鳥頸]（名）鵞鳥のごとき長き首。

廿**かでら‐げ**（名）身輕に裝ふヿ。遊者にふるまふヿ。

かてて‐くはへて[搗加]（副）ある物事の上に更に加へまして、其上に。

―**がてら**（接尾）或語に添へて「それと共に」又は「其ついでに」の意を表はす語。「花見―」。

〔**か‐てる**[搗]（他、た下二）杵（キネ）にてつく。

（**か‐でん**[家傳]（名）家に傳來せるヿ。「―の妙藥」。

〔**が‐てん**[合點]（名）「がってん」の略言。

がでん‐いんすゐ[我田引水]（名）自己の主張する議論又は關係せる物事に、利益となるやう他の物事を引きよするヿ。

（**か‐と**[家兎]（名）家に飼ふうさぎ。

（**か‐と**[河圖]（名）支那の上代に、黃河に大魚（又は龍馬）ありて負ひて浮びしといひ傳ふる圖、或は日月星辰の狀を畫きたるものといひ、又、一・三・五・七・九の奇數を天即ち陽とし、二・四・六・八・十の偶數を地即ち陰として、これを排列して其變化を記したるものともいふ。

かど[門]（名）㊀住居の外郭にある出入口。もん。㊁もんのまへ。もんのきんぢよ。「御―を通る」。㊂一族。――**を‐いづ** 出家して僧尼となる。

かど[角]（名）㊀物體の外面へ尖出せる端末。㊁もののゝすみ。㊂まがりめの端末。「町の―」。㊃方面。事件。「一―の役に立つ」。㊄いひたつべき箇條。（廉、點）。㊅氣ばたらきあるヿ。智能あるヿ。「―ある童」。（才）。㊆ひとくせあるヿ。圭角あるヿ。「年老いて、―なくなり」。㊇節操あるヿ。主義あるヿ。㊈反抗の氣。悁悶の心。「ものはいひやうで―が立つ」。

〔**かど**[鰊]（名）[動]「にしん」の一名。（青魚）。

（**か‐ど**[家奴]（名）家にやとふしもべ。

（**か‐ど**[下土]（名）㊀天上に對して大地の稱。㊁都會に對して、田舍の稱。

（**か‐ど**[下奴]（代）㊀自家の謙稱。やつがれ。㊁他人の賤稱。なんぢ。

かど‐いで[門出]（名）かどで。

（**か‐とう**[下等]（名）品くだりてあるヿ。位低きヿ。いやしきヿ。

（**か‐とう**[歌頭]（名）踏歌の音頭。

（**か‐とう**[河東]（名）河東節の略言。――**ぶし**[河東節]（名）俗曲の一種、半太夫節の分派にして、十寸見（マスミ）河東の創始にかゝるといふ。

（**か‐どう**[家僮]（名）めしつかひの子供。

かとう‐ぐち[架燈口]（名）瓦燈口（グワトウグチ）の轉。

（**かどう‐くわんせつ**[可動關節]（名）[生]動物の關節が動くやうになりてあるもの。

（**かとう‐しよくぶつ**[下等植物]（名）[植]組

纖維界なる植物、其最も下等なるものに至つては、動物の最下等なるものと區別し難し。

(かとう-どうぶつ)[下等動物](名) ㊀[動]組織簡單なる動物、最下等なるものに至つては移動力をも有せず、植物の最下等のものと區別し難きものあり。㊁品性の下等なる人をのゝしりていふ語。

かど-かど[角角](名) すみ〴〵。すぢ〴〵。はし〴〵。「―によく注意して」。――‐し（しく、しく、し、しき、しけれ）[角角](形、二) ㊀才氣多し。かしこし。㊁かど多し。「―き岩」。

かど-がまへ（―ガマエ）[門構](名) ㊀門の構へ方。㊁漢字の頭にある門の字、閒・閣などの上にあるもの。

(か-とく)[家督](名) ㊀相續すべき家のあとめ。㊁[法]戸主の其身に專屬せる權利義務以外の其身分に伴ふ總ての權利義務。㊂家督を繼ぐべき子、即ち、嗣子。㊃長子の異稱。「僕有―」。――‐**さうぞく**[家督相續](名) ㊀一家のあとめをうけつぐこと。㊁[法]相續の一、前戸主の自身に伴ふ權利義務の相續即ち戸主權の繼承にして、戸主の死亡・隱居・國籍喪失若しくは戸主が婚姻又は緣組の取消、若しくは戸主の入夫婚姻又は入夫離婚によりて開始す。――‐**さうぞくにん**[家督相續人](名)[法]家督を繼承する人、被相續人の家族たる直系卑屬に於て相續人たるものは、親等の異なるものゝ間にては、其近き者を先にし、親等同じき者の間にては男を先にし、親等の同じき男又は女の間にては、嫡出子を先にし、嫡出子・庶子又は私生兒の間にては、嫡出子及庶子は女といへども私生子より先にす、以上に掲げたる事項につき相同じきものゝ間にては、年長者を先にす、これを法定の推定家督相續人といふ。

かど-ぐち[門口](名) 門の出入り口。「―にさむらひ二人」。

かど-さき[門先](名) 門の出入り口の前又は其近所。

かど-すずみ[門涼](名) 門前にてすゞむこと。

かど-せっけう（―キョウ）[門說敎](名) 德川時代に、人の門前に立ち說敎をなして物を乞ひし乞兒。

かど-た[門田](名) 門外の田。「―の稻葉」。

かど-だ・つ（た、ち、つ、つ、て、て）[角立](自、た四) ㊀角がたつ。あら〳〵しくなる。あらだつ。「議論が―」。㊁互の間に反抗又は慍怒の氣生ず。

かど-だ・つ（て、て、つ、つる、つれ、てよ）[角立](他、た下二) ㊀角を起す。㊁互の間に反抗又は慍怒の氣を生ぜしむ。あら〳〵しくす。

〜かど-だてる[角立](他) 「かどだつ」の訛。

かど-ちがひ（―ガイ）[門違](名) ㊀行くべき家をとりちがへたること。㊁取るべき方向又は目指すものをとりちがへたること。

かど-ちがへ（―ガエ）[門違](名) 前條に同じ。

かど-づけ[門附](名) 門口に立ちて音曲を奏し、金錢を貰ひ受くること。又、其人。

かど-で[門出](名) ㊀我家を發足すること。しゆったつ。(首途)。㊁逃亡すること。しゆっぽん。しゆっそう。

かど-なみ[門並](名) ㊀家ごと。けんべつ。(軒別)。㊁家のならび。いへつゞき。きんぢよ。

かど-ならび[門比](名) ㊀かどなみ。㊁となり。

‡かど-の-わらは（―ワラワ）[葛野童](名) 古、山城國葛野郡秦氏の女子の、御所の掃部主殿に事へ、火をともすことをつかさどりしもの。

‡かど-の-をさ[看督長](名) 古昔、檢非違使の下に屬し、追捕の事を司どりしもの。

カドミウム[Cadmium](名)【化】白色の光澤を

帶びたる金屬、亞鉛より稍や重く錫より稍や堅く、延性及展性に富む。

かどは-かし（―カシ）[勾引](名) かどはかすこと。(誘拐)。

かどはか・す（さ、し、す、す、せ、せ）[勾引](他、さ四) 未成年者又は女子などの如き力弱きもの又は智乏しきものを、或は暴力を用ひ或は詭計を用ひ、其保護者の許より誘ひ出して他へ連れ行く。

かど-ばしら[門柱](名) 門の柱。

かどは・す（さ、し、す、す、せ、せ）[勾引](他、さ四) かどはかす。

かど-び[門火](名) 葬送のとき、死者の軀を送るために、又、盂蘭盆にて、亡者の魂を送るために、門前にて焚(タ)く火。(門燎)。

〜かど-びらき[門開](名) 見世びらき。

‡かど-ふ（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）[勾引](他、は四) かどはかす。

かど-ふだ[門札](名) もんぺう。へうさつ。

‡かど-べ[門部](名) 古昔、衞門府に屬し、皇居の門を守りしもの。

かど-べ[門邊](名) 門の邊。門のきんぢよ。

かど-まつ[門松](名) 新年に家々の門前に立て飾る松。まつかざり。

かど-みせ[角店](名) 市街の角に構へある店。

‡かど-め・く（か、き、く、く、け、け）[角](自、か四) かどだつ。

かど-もり[門守](名) 門を守ること。又、其人。

かど-や[角屋](名) 街路の角にある家。

かど-やしき[角屋敷](名) 街路の角にある屋敷。

かとり[縑](名) (堅織りの義) 目を細く堅く織りたる絹布。(縑絖)。

〜(か-とり)[蚊鳥](名)【動】「かうもり」の一名(近江の方言)。

‡かとり-の-きぬ[縑衣](名) 白色又は水色のうすき絹布。

カトリック-けうくわい（―キョウ―）[加特力敎會=

Catholic Church](名) 異端に對して、全基督敎を統合したる正統の敎會の稱、後プロテスタント敎會の起るに及びて法皇管下の敎會を稱す、始め第一世紀に於て、羅馬、希臘の二派に分れしが、普通には羅馬敎會のみを呼べり。舊敎。

ガトリング-はう（―ホウ）[―砲=Gatling gun](名) 機關砲の一種、北米合衆國人「ガトリング」氏が千八百六十二年頃の發明にかゝる、中軸ありて砲身其周圍を繞囘し、回轉しつゝ發射し頻發し得る裝置にして、一分間に數百發の發射をなし得。

かど-れいしや[門禮者](名) 新年に門口まで來りて賀詞を述ぶる人。

(か-とん)[河豚](名)【動】「ふぐ」の異稱。

(か-とん)[嘉遯](名) 世をのがるゝこと。

か-とんぼ[蚊蜻蛉](名)【動】擬脈翅類中蜉蝣科に屬する蟲、二個の長き尾毛を有し、翅は透明なり、身瘦せて蚊に似る。

‡かな[鉋](名) かんな。

か-な[假名](名) 我國特創の寫音文字、漢字の片體を採り又は漢字をくづしたるもの、片假名と平假名との二種あり。(假字)。

かな[縢](名) 四條を合せて一條としたる織物の經(タテ)の絲。

かな[哉](感) 語尾に附けて、感歎の意を表はす語。「夜半の月―」。「樂しき―」。

かな―[金](接頭)(金の略) ㊀或語に冠して、金屬より成り立つものゝ義を表はす語。「―山」。「―火箸」。㊁或語に冠して、堅くして移らざる意を表はす語。「―つんぼ」。

がな(感) 語尾に附けて、希望の意を表はす語。「無くも―」。

かな-あみ[金網](名) はりがねにて網の目の如くに編みたるもの。

(か-ない)[家內](名) ㊀一家のうち。㊁わがつま。――‐**けいざい**[家內經濟](名) 一家の中のくらしむき。又、一家のくらしむきの處理。

かな-いろ[金色](名) 鐵の如き色。

かな-うつぎ[金卯木](名)【植】薔薇科に屬する植物、異葉にして互生し、莖は木本なり、花は白色にして二十個內外の雄蕊を有す。やまどうさん。

かな-がき[鐵搔](名) 草を搔(カ)くに用ふる農具、鐵にてつくる、形はくまでに似る。(鈀)。

かな-がき[假名書](名) 假名にてかくこと。又、其かきたる文書。

かな-がしら[金頭](名)【動】硬鰭類中かながしら科に屬する魚、頭部は大きくして堅く、背部は赤色にして少しく黃色を帶び腹部は白し、側部に淡黃色及黑色の縱線あり、體長大なるものは一尺五寸許に達す、我國東海に多く產す。

〜かな-かな(名)【動】「ひぐらし」の一名。

〜かな-がな(副) 辛うして。からがら。

かな-がひ（―ガイ）[金匙](名) 金屬にてつくれるさじ。

かな-がひ（―ガイ）[金貝](名) ㊀金・銀・銅・錫等の薄片を蒔繪にはりつけたるもの。㊁金屬の薄片を以て物を包みたるもの。「卷煙草の―」。――‐**さいく**[金貝細工](名) 蒔繪に金貝を施すこと。又、其細工を施したる蒔繪。

かな-ぎ[鐵木](名) ㊀古昔の刑具の一、首を挾するものにして、金屬にてつくれり。㊁石炭の一名。

〜カナキヌ[金巾](名) 「カナキン」の轉。(近江の方言)。

〜かな-きり-ごゑ[金切聲](名) 金屬を切る時に發する聲の如く細くして高き音聲。「―をたてる」。

カナキン[金巾](名)(「ポルトガル」語のCane-

quin より出づ) 一種の綿布、綿を絲となし、堅く撚(ヨ)りて目を堅く細かく織り成したるもの、幅廣くして普通の木綿巾に倍す。

かな-ぐ[金具](名) 器具器械に裝置する鐶・錠などの類。かなもの。

かな-くぎ[金釘](名) 金屬にてつくりたる釘。

〜――‐りう[金釘流](名) 字體の痩せて拙惡なる筆蹟をあざけりていふ語。

かな-くさ・し（く、し、き、けれ）[金臭](形、二) ㊀火などに物のくばりてあやしき香あり。きなくさし。㊁金屬の臭氣あり。

かな-ぐさり[金鎖](名) 金屬製のくさり。

かな-ぐし[金串](名) 金屬製の魚串(ウヲグシ)。

かな-くそ[金屎](名) ㊀鐵のさび。㊁熔解したる金屬の殘滓(カス)。

かな-くづ[金屑](名) 細工する金屬より出る屑。

かな-ぐつ[鐵沓](名) 馬の蹄の裏に打ちつくる鐵。(鐵靴、蹄鐵)。

かなぐ・る（ら、り、る、る、れ、れ）[拐](他、ら四) ㊀かきなぐる。しひてはらひのく。㊁ひきよす。ねぢとる。たぐる。

かな-け[金氣](名) ㊀金屬の氣。㊁鍋・釜又は鐵瓶などの如き、火にかくる金屬製の器具の新しきものよりしみ出て、其中に入れあるものを赤黑き一種の色に染めなすもの。

かな-こき[金扱](名) 「いなこき」に同じ。

かな-さいぼう[鐵撮棒](名) 古昔用ひし一種の兵器、太き鐵の棒にとげを設けあるもの。

かな-さび[金錆](名) 金屬に生ずるさび。

かな・し（しく、し、しき、しけれ）[哀、悲](形、二) ㊀愛すべし。いとほし。いとし。㊁いたまし。歎かはし。うれはし。

かなし-が・る（ら、り、る、る、れ、れ）[哀](自、ら四) かなしく思ふ。

かな‐しき[鐵敷](名) 金屬をきたふ臺、銅鐵にて上面を平たくつくりたるもの。かなとこ。(鐵砧)。

かな‐しばり[金縛](名) のがれ能はざるやうきつく縛りつくること。「不動の―」。

†かなしび[悲](名) かなしぶこと、かなしぶ心。

かな‐しぶ[鐵澁](名) 鐵に生じたるさびの液。

†かなし‐ぶ[悲](他、は四) かなしむ。

かなしみ[悲](名) かなしむこと、かなしむ心。

†かなし‐む[悲](他、ま四) をしむ。「露を―」。

かなし‐む[悲、哀](他、ま四) ㊀心にいたましく感ず。なげく。うれふ。(愴)。㊁ふびんに思ふ。いとしむ。あはれむ。(憐)。

かな‐じやくし[金杓子](名) 金屬にてつくりたる杓子。

かなた[彼方](代) 自身より最も離れたる部分に用ふる代名詞。あちら。あち。あっち。むかひ。――**こなた**[彼方此方](代) あちらこちら。をち〱。方々。

かな‐たが[金箍](名) 金屬にて造りたるたが。

かな‐だらひ[金盥](名) 金屬にて造りたる盥、多くは手水盥として用ふ。

かな‐づ[奏](他、た下二) ㊀音樂をなす。舞樂を演ず。㊁琴をかきなで、鳴らす。ひく。

かな‐づかひ(カナヅカイ)[假名遣](名) 正しく假名をつかひて和文を書くこと。假名をうまくつかひ分くること。

かな‐づち[鐵鎚](名) 金屬にて造りたる鎚。かねのさいづち。――**のかはながれ** 人の浮ぶ瀬なきにたとへいふ。

†かな‐つなゐ[金綱井](名) 「はねつるべ」の古稱。

かな‐つぼ[金壺](名) 金屬にて造りたるつぼ、銅壺・鐵壺の類。――**いし**[金壺石](名) 鐵鑛の砂礫・粘土などゝまじりあひたるもの。はったいいし。

――**まなこ**[金壺眼](名) 落ちこみて形圓く白眼多き目、貪慾の相なりといふ。

かな‐つゑ[鐵杖](名) 金屬にてつくりたる杖。

〜**かな‐つんぼ**[金聾](名) はなはだしきつんぼ。まるつんぼ。「―になりつ」。

かなで[奏](名) かなづること。舞樂。

かな‐てこ[鐵梃](名) 鐵にてつくりたるてこ。――**ぼう**[鐵梃棒](名) 前條に同じ。

かな‐と[金戶](名) ㊀金屬にて造りたる戶。㊁鐵のくぎを以て固めたる戶。

かな‐とこ[鐵床](名) 鐵を鍛ふ臺、鐵にて上面を平く造りたるもの。かなしき。(鑕、鐵砧)。

かな‐ばさみ[金鋏](名) ㊀金屬を切るためのはさみ。㊁「かなばし」に同じ。

かな‐ばし[金箸](名) 鍛冶の具、きたふべき物をはさむに用ふるもの。かなばさみ。かなひばし。

かな‐ひばし[金火箸](名) 金屬製の火ばし。

（**か‐なふ**(カノウ)[嘉納](名) よみして言を聞きいるゝこと、又、よみして物を受けをさむること。

かな‐ふ(カナウ)[適](自、は四) ㊀うまく合ふ。てきがふす。あてはまる。(稱)。㊁のぞみ成就す。なる。(叶)。㊂事を爲し得。よくす。たふ。㊃親和す。むつぶ。やはらぐ。「兄弟相―」。(諧)。

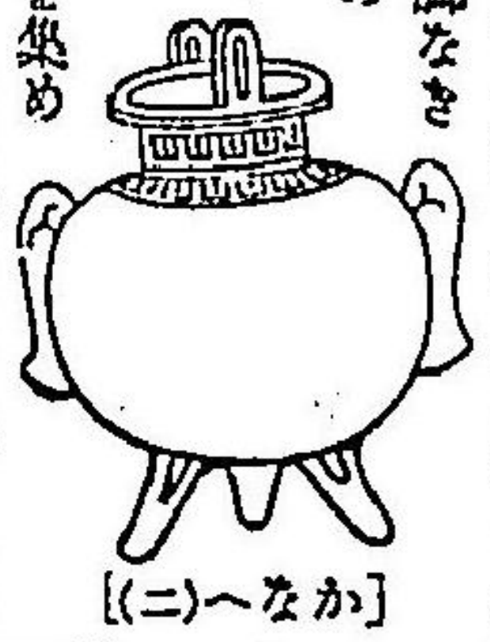
かな‐ふ(カナウ)[適](他、は下二) ㊀あてはまらす。適當せしむ。㊁望むとほりにせさす。願ひをかなへてつかはす。㊂親和せしむ。むつばしむ。

かな‐ふぐし(名) 土を堀り起す具。

かな‐ブツ[金佛](名) ㊀金屬にて作りたる佛像。木佛などの對。㊁感情の極めて冷かなるものを罵りていふ語。

かな‐ぶみ[假名文](名) 假名にて書きたる文章。「まなぶみ」の對。

かなへ(カナエ)[鼎](名) ㊀古代、食物を煮るに用ひし金屬製の器、脚あるものと脚なきものとありて、脚なきものは釜(マカ)に同じ。かま。㊁兩耳三脚ある鼎の特稱。あしかなへ。㊂支那の古昔、夏の禹王が九牧の金を集めて九個の鼎をつくり、これを王位承繼の寶器となししが、夏亡びて殷に傳はり、殷亡びて周に傳はり、周又亡びて秦に傳はりしより、王位又は帝業にかりいふ語。「國を覘ひ―を訊ふ」。――**のけいぢゆうをとふ**[問鼎輕重]（周の定王のとき、楚の莊王が、九鼎の輕重を問ひし故事に出づ）或國家又は或帝王を蔑視して、これを覆(クツガヘ)さんと試みるにいふ。轉じて、團體又は或個人を蔑視して、これを覆さんと試みるにもかりいふ。


[かなへ(二)]

かな‐へび[金蛇](名) [動]蜥蜴類中裂舌類に屬する爬蟲、形狀はとかげに頗似す、舌は細長くして叉裂し、其尾頗る長し。(蛇舅母)。

かな‐べら[金箆](名) ㊀金屬製のへら。㊁鐵梃(テコ)の一名。

かな‐ぼう[鐵棒](名) ㊀鐵にてつくりたる棒。(鐵棍)。㊁鐵の棒の頭に、鐵の輪を四つ五つ付けたるもの、夜番をするものなどが地を突きて鳴らすもの。㊂器械體操に用ふる一種の器械、左右二本の柱の腕木に鐵の棒を架けわたしたるもの。㊃「かなぼうひき」の略言。――**ひき**[鐵棒曳](名) ㊀かなぼうを突き鳴らして、夜をいましむる人。㊁些少なる事柄をもさわがしくふれ廻る人。

かな‐ほだし[鐵枷](名) 罪人をいましむる金屬製の枷(カシ)。

かな‐ボトケ[金佛](名) 金屬にてつくりたる佛像。かなブツ。

かな‐まじり[假名交](名) 假名と漢字とを混じて記すること。又、其文章。

かな‐また[鐵叉](名) 末端をさすまたの如くにつくりたる鐵の棒。

かな‐まり[金椀](名) 金屬製の椀。かなわん。(鋺)。

かな‐むぐら[金葎](名) [植]桑科に屬する纏繞草本、花は淡綠色にして雌雄異株なり、葉は掌狀に數裂す。(葎勒草)

かな‐め[要](名) (蟹目の義) ㊀扇の骨を綴るために、つらぬきて、鯨骨などを嵌(ハ)むる小さき穴。又、其小さき穴に嵌(ハ)め入るゝ鯨骨など。(扇眼)。㊁大事なる部分。肝要なる箇所。えうてん。えうしよ。――**いし**[要石](名) ㊀常陸國鹿島神社にある石、根は深く土中にひろがりて、其深さを知らずといふ。㊁轉じて、常に動かぬ物事にたとへいふ語。㊂[建]煉瓦又は石などを弓形に組み立て、其中ほどに差し入れて全體の力を支ふる石。

かな‐め[金目](名) [植]「かなめもち」の略言。――**のき**[金目木](名) [植]「かなめもち」の一名。――**もち**[金目黐](名) [植]薔薇科に屬する木、葉は楕圓形にして鋸齒を有し、嫩葉は赤色を帶ぶ、初夏、五瓣の小花を開き實を結ぶ、材堅くして種々の用に供せられ、殊に扇のかなめに適す、又、觀賞用として栽培せらる。(扇骨木)

かな‐もの[金物](名) ㊀金屬製の器具の總稱。㊁かなぐ。

かな‐やき[金灼](名) ㊀鐵を熱して燒印を捺(オ)すこと。又、其燒印。㊁牧場のしるしに、其牧場の馬のもゝに捺す燒印。

かな‐やま[金山](名) 金屬を堀り出す山。鑛山。

かならず[必](副) 相違なく。たしかに。きっと。――**かならず**[必必](副) きっと相違なく。ぜひ〱。――**しも**[必](副) かならずしもさうとも。(下に打消の意を添ふ)。「―賢ならず」。

〜**か‐なり**[可](副) ㊀普通に。ひととほりに。㊁すこぶる。よほど。隨分。

カナリア[加奈利亞](名) [動](大西洋中「スペイン」領(Canaria)諸島の原産なるを以て名づく)燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形すゞめより小さく嘴は圓錐形なり、色は黃にして、聲高く囀らし。(金絲雀)。

かな‐わ[金輪](名) ㊀鐵の輪。㊁ごとくの一種。(鐵環)。

かな‐わらび[金蕨](名) [植]わらびの一種、こはくして食すべからず。

かな‐わん[金椀](名) 金屬製の椀。

かに[蟹](名) [動]軟甲類中十脚類に屬する節足動物即ち短尾類の總稱、頭胸甲は幅廣く腹至つて小さく且扁平にして普通屈曲し、頭胸の下面に密着す、第一對脚は必ず螯(ハサミ)となる、尾鰭はこれを缺く、横にあるく特異の能あり。(蟹虎、蟹步)。

かに―[蟹](接頭) (鸕鷀草葺不合尊、海邊にて生まれたまひ、かにを掃ひ除けたまひしといふ故事に出づといふ)赤子に關係したる語に冠らする語。「―ばゝ」「―とり」「―くそ」。

†―がに(接尾) 或動詞に附屬して、これを副詞體にする語。やうに。ために。「身もまがふ―」。

かに‐いし[蟹石](名) 蟹の化石。

かに‐かく(副) とやかく。あれこれ。

〜**かに‐ぐさ**[蟹草](名) [植]海金砂に同じ。

かに‐くそ[蟹屎](名) ㊀赤子のはじめての糞、色黑し。かにばゞ。(胎屎)。㊁近江の湖水の梁などにつく瓜のたまごいふ。

†かに‐とり[蟹取](名) うぶぎ。産衣。(主に貴人にいふ)。

†かに‐の‐め[蟹目](名) 「かなめ」(一)に同じ。

†かには[樺](名) [植]「かば」に同じ。――**ざくら**[樺櫻](名) [植]「かばざくら」に同じ。

かに‐ばば[蟹屎](名) 「かにくそ」(一)に同じ。

†かに‐ひ(名) [植]「がんぴ」(雁皮)に同じ。「―の花、色は濃からねど」。

（**か‐にふ**(カニュウ)[加入](名) 或團體又は會社などに入ること。仲間入りすること。

かに‐め‐くぎ[蟹目釘](名) 頭の圓く高くなりたる鋲(ビヤウ)釘。

†かに‐もり‐の‐つかさ[掃部寮](名) 古昔の官名。「かもんれう」に同じ。――**のかみ**[掃部頭](名) かにもりのつかさの長官。(掃守)。

か‐ぬ[兼](他、な下二) ㊀一緒に合はす。合はせ持つ。㊁一つのものが兩樣のつとめをなす、兼帶す。「小刀と錐とを―ぬる刃物」。㊂定まりたる職務の外に、他の職務の事を行ふ。「總理大臣にして内務大臣を―」。㊃はゞかる。「人目を―」。

か‐ぬ[兼](自、な下二) 能はず。遂げず。「爲し―」「てき―」。(難)。

かぬ‐かぬ[豫豫](副) 「かねがね」に同じ。

†かぬ‐ち[鍛冶](名) (金打の約)金屬をうち鍛(キタ)ふこと。又、其人。

かね[金](名) ㊀金屬、鑛物。㊁貨幣、金錢。㊂かねじやく。曲尺。「大工の―や、藏の鍵」。㊃直線又は直角。「―に渡る」。(鐵)。

かね[鐘](名) 「つりがね」又は「おはがね」の略言。

かね[鉦](名) 「たゝきがね」の略言。

かね[鐵漿](名) 「おはぐろ」に同じ。

かね［印］（名）かねやき。

廿**―がね**（接尾）「がに」の轉。「かたりつぐ―」。

―がね（接尾）候補者の意を表はす語。やがてそれとなるべき資あるをいふ。「婿―」「きさき―」。

かね-あひ（アイ）［兼合］（名）輕重相關係して平均を保つと。「七分三分の―」。

かね-いれ［金入］（名）貨幣を入れ持つ具、おもに布帛製の袋をいふ。（財嚢）。

廿**かね-うり**［金賈］（名）古昔、砂金などを賈買したりし商人。「―吉次」。

かね-かし［金貸］（名）金錢を貸して、利息をとるとを業とすると。又、其人。

かね-がね［豫豫］（副）あらかじめ。まへもって。「かねて。

カネキン（名）「カナキン」に同じ。

かね-ぐら［金庫］（名）㊀貨幣を入るゝための倉庫。㊁金錢を得べき顧客。資本を引き出し得べき援助者。

かね-ぐろ［鐵漿黑］（名）鐵漿を黒々と染めたる「と。

廿**かね-ごと**［豫言］（名）かねていひおきたる言。又、契約の言。「露の―僞りならば」。

かね-ざし［鐵尺］（名）「かねぢやく」に同じ。

〔**かね-ぢやく**〕［鐵尺］（名）ものさしの一種、通常尺度をはかるに用ふるものにして、形は矩形に曲り、其一尺は鯨尺の八寸に當る。まがりざし。（曲尺）。

かね-たたき［鉦叩］（名）㊀鉦を叩くと。又、其人。㊁撞木（シュモク）の稱。㊂かねをたゝきて物を乞ひあるく乞食。㊃【動】直翅類中蟋蟀科に屬する小蟲、翅短くして體は赤褐色なり、秋日美聲を發して鳴く。

〔**かね-づかひ**〕（ヅカイ）［金遣］（名）金錢を冗費すると。又、其人。

かね-つき-だう（ドウ）［鐘撞堂］（名）つきならす鐘を「つるしおく堂。

かね-づく［金盡］（名）㊀金を使用するとの競爭。㊁有るたけの金を出して事を爲すと。

かね-つけ［鐵漿付］（名）㊀【動】「かねつけとんぼ」の略言。㊁かねふで。㊂鷹の嘴側の羽。――**とんぼ**［鐵漿付蜻蛉］（名）【動】とんぼの一種、翅は比較的大なれど他は薄弱なり、物にとまるときは翅を背上に直立す。おはぐろとんぼ。

かねつけ-いし（金付石）（名）【鑛】硅石の一種、質緻（マヽ）かく色黑し、金銀をすりつけて其眞僞をためすために用ふ。（試金石）。

かね-つぼ［鐵漿壺］（名）おはぐろつぼ。

かねて［豫］（副）まへかたより。まへもって。あらかじめ。「―聞きしかど」。

〔**かね-の-つる**〕［金蔓］（名）金錢を得らるべきて「づる。

かね-の-て（名）曲尺の如くに矩形をなすと。

かね-ばこ［金箱］（名）㊀貨幣を入るゝための箱。㊁金錢を得べき顧客。㊂其家の中にて、よく金錢をまうけ得る人（藝娼妓など）。

かね-ふで［鐵漿筆］（名）おはぐろをつくるに用「ふる筆。

かね-ふき［金吹］（名）鑛物を吹き分くると。又、其業の人。（冶金家）。

かね-へん［金偏］（名）漢字の偏の名、即ち、銀・鉛などの偏なる金の字の稱。

かね-ほり［金堀］（名）鑛山にて鑛物を掘ると。又、其人夫。

かね-まうけ（モーケ）［金儲］（名）金を儲くると。金錢「を得る方法。

かね-まはり（マワリ）［金廻］（名）金錢の融通。かねのうんてん。きんゆう。

かね-み［金見］（名）貨幣の良否を見分くると。又、「其人。

かね-め［金目］（名）㊀金錢上の價格。ねうち。ねだん。「―がない」。㊁ねだん多きと。「―のもの」。

かね-もち［金持］（名）金錢財貨を多く所持せる人。ぶげんしや。うとく。金滿家。（富豪）。

かね-もと［金元］（名）金主又は借權者。（元祿頃の「語）。

かね-やく［兼役］（名）兼務。兼勤。

〔**か-ねん**〕［加年］（名）年を加ふると。年を迎ふる「と。（超歳）。

〔**かねん-ぶつ**〕［可燃物］（名）よく火にもゆる物。

か-の［彼］（代）身邊を遠く離れたる事物を指す代名詞、あの。「―人」。

〔**か-のう**〕［可能］（名）㊀できうべきと。あたふと。㊁思惟上に於て矛盾なきと。㊂【文法】助動詞の分類の名、勢相に同じ。

か-の-うば［蚊姥］（名）【動】雙翅類中大蚊科に屬する昆蟲の總稱、觸角長くして絲狀をなし、胸背は穹形に膨大し中央に横皺あり、幼蟲は泥色を帶び濕地に座す、種類多し。

か-の-え［庚］（名）（金兄の義）えとの名、十干の一。

か-の-おば［蚊大母］（名）【動】「かのうば」に同じ。

か-の-こ［鹿子］（名）㊀【動】鹿の子の稱。（麑、麛）㊁【動】鹿の稱。㊂【植】「かのこさう」の略言。㊃【植】「かのこゆり」の略言。㊄「かのこしぼり」の略言。㊅「かのこもち」の略言。――**さう**（ソー）［鹿子草］（名）【植】敗醬科に屬する草、葉は羽狀複葉にして小葉は鋸齒を有し、花は淡紅色なり、根莖は藥用に供せらる。（排草、纈草）。――**しぼり**［鹿子絞］（名）鹿の子の斑文を絞染（シボリ）にしたるもの。かのこめゆひ。――**どり**［鹿子鳥］（名）【動】かはせみの一種、頭大きく嘴長大にして、體軀はほゞ鳩大なり、頭上に冠羽を生ず、體色は一般に白くして許多の黑斑點あり、通常山間の溪流に沿ひて棲息す。かぶとどり。やませみ。（花斑鳥）。――**マダラ**［鹿子斑］（名）鹿の毛の斑。又、それに似かよひたる模樣。「―の筵はふりけり」。――**めゆひ**（ユイ）［鹿子目結］（名）「かのこしぼり」に同じ。――**もち**［鹿子餅］（名）一種の菓子、甘く煮たる小豆をあんころ餅のまはりに付けたるもの。――**ゆひ**（ユイ）［鹿子結］（名）「かのこしぼり」に同じ。――**ゆり**［鹿子百合］（名）【植】百合科に屬する草、葉は線形にして花蓋の片は脚部より外方へ反捲し、雄蕊は大にして花蓋外に突出す、花の紅色なるものを特にかのこゆりと稱し、白色なるものをしろかのこゆり一名しらたまゆりと稱す、觀賞用として栽培せらる。（卷丹）。

廿**か-の-しし**（名）【動】鹿の古名。

か-の-たま［鹿玉］（名）【植】一種の菌、冬季山中の「朽木に生ず。

か-の-と［辛］（名）（金弟の義）えとの名、十干の一。

廿**か-の-にげ-ぐさ**（名）【植】人參の古稱。

〔**が-のみ**〕［我飲］（名）強ひて酒を呑み過ごすと。ざれて酒を飲むと。

か-の-む（ま・み・む・め）（他、四）か、と聲立て、慾に飲「む。

か-の-め（名）「かなめ」（要）に同じ。

か-の-よ［彼世］（名）人の死にて行くところ。よみ「ぢ。來世。

カノン-はう（ホー）［加農砲＝Cannon gun］（名）強き裝藥を用ひて平射を行ふ火砲、砲身長く、彈丸は極めて遠距離に達す。

かは（カワ）［川、河］（名）自然の作用により、地上の傾斜に沿（ソ）ひて流れ走る水。ながれ。

かは（カワ）［側］（名）㊀物の一方面、一邊。「帶の―」。㊁かたはら。かたへ。「東―」。㊂物の周圍。又、周圍にあるもの。「井戸の―」。

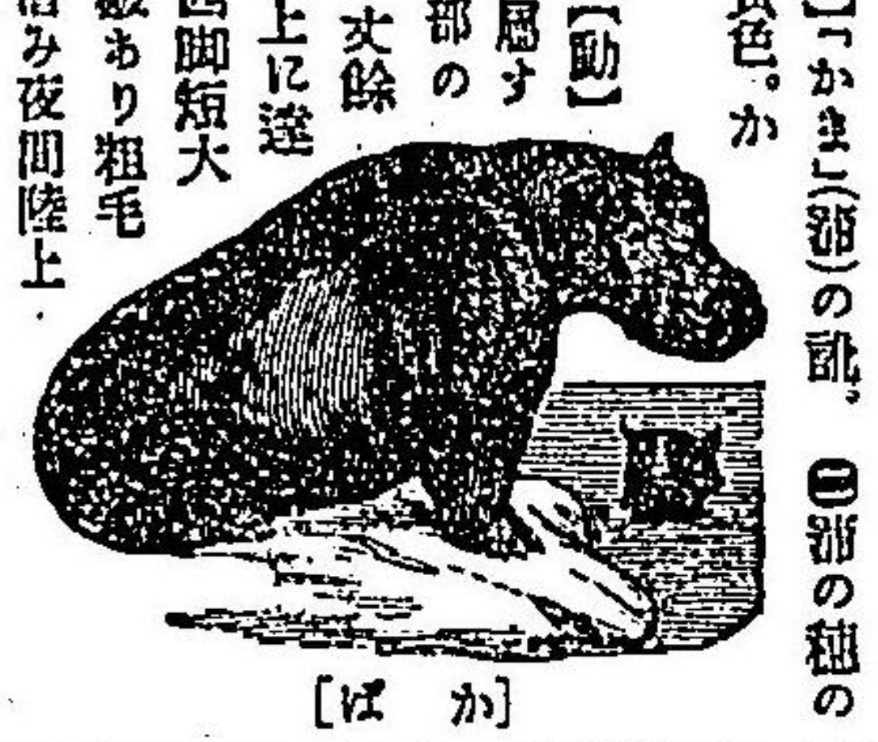
かは（カワ）［皮］（名）㊀動植物の外面を覆ひ包めるもの。㊁獸類のかはの特稱、けがは・つくりがは・なめしがは等あり。㊂物の表面。うはかは。

か-は（カワ）（助）反動の意を表はす語。「夜半に嵐の吹かぬもの―」。

かば［樺］（名）㊀【植】殼斗科に屬する喬木、葉は桑に似て尖頭及鋸齒を有し互生す、花は初夏に開き、雌雄同株にして共に葇荑狀をなし、花冠は白色なり、果實は翅を有する堅果にして毎苞三個あり、樹皮は物を卷き松明を作り又は屋根を葺く等の用に供せらる。かんば。ゑらかんば。かには。㊁「かば」（蒲）（二）に同じ。

かば［蒲］（名）㊀【植】「かま」（蒲）の訛。㊁蒲の穗の色。赤色を帶びたる黄色。かばいろ。（赤茶色）。

〔**か-ば**〕［河馬］（名）【動】有蹄類中偶蹄類に屬する獸、「アフリカ」南部の沼池に產す、體長一丈餘にして體重六百貫以上に達す、軀幹肥大にして四脚短大なり、皮は厚くして皺あり粗毛を生ず、日中は水に潛み夜間陸上に出て草を喰（ク）ひ、作物に大害をなす。


［かば］

〔**かば**〕（名）物と物と衝突し又は擦れあひて發する音。「―とつきあつ」。

かは-あげ-みづ（カワ・ズ）［川揚水］（名）田畝の灌漑のために川より引きたる水。

かは-あげ-ようすゐ（カワ）［川揚用水］（名）かはあげ水を堰（セ）き止め置く所、これより溝渠を以て灌漑すべき所に水を通ず。

かは-あざみ（カワ）［川薊］（名）【植】「ひめあざみ」に「同じ。

かは-あつ（カワ）［皮厚］（名）㊀外皮の厚くあると。㊁づう〳〵しきと。鐵面皮。

かは-あひ（カワアイ）［川合］（名）川と川と流れあふ處。おちあひ。

廿**かは-あみ**（カワ）［川浴］（名）河水に浴すると。

かは-あらし（カワ）［川嵐］（名）川に起る暴風雨。

かは-あをのり（カワ）［川青海苔］（名）【植】綠色藻門に屬する藻、淡水に生殖す、一層の細胞より成り綠色を呈す、味美なり。かはのり。かはもづく。

〔**かはい-さう**〕（カワイソウ）（名）かはいらしきと。

〔**かはい-らし**〕（カワ）（しく・しく・しき・しけれ）（形、二）かはゆらし。

廿**かは-いり**（カワ）［川入］（名）川に入りて死ぬると。

かは-いろ（カワ）［革色］（名）御納戸色のやゝ黒ずみたるもの。

か-ば-いろ［蒲色］（名）「かば」（蒲）（二）に同じ。（樺「色）。

〔**が-はう**〕（ホー）［牙保］（名）「がほ」に同じ。

かは-うす（カワ）［皮薄］（名）㊀外皮のうすきと。㊁皮膚のきめ細かにして滑かなると。「―に色白く」。

〔**かは-うそ**〕（カワ）［河獺］（名）【動】「かはをそ」の訛。

かは-うま（カワ）［河馬］（名）【動】「かば」に同じ。

かは-おと（カワ）［川音］（名）川の流るゝ音。

かは-おび（カワ）［革帶］（名）かはにてつゝりたる帶。

かは-おろし（カワ）［川下］（名）川をふきわたる風。

かは-おか（カワ）［川獺］（名）【動】「かおか」の一名。

かは-かぜ（カワ）［河風］（名）川を吹きわたる風。「―寒く千鳥啼く」。

〔**がは-がは**〕（名、副）㊀水などのゆれ動くときなどの音。㊁合羽などの擦（ス）れあふときなどの音。

かは-かぶり（カワ）［皮被］（名）物の皮を被れると。

かは-かみ（カワ）［川上］（名）㊀川の源。みなかみ。みなもと。上流。㊁川のほとり。

かは-がめ（カワ）［川龜］（名）【動】「スッポン」の一名。

かは-がらす（カワ）［川烏］（名）【動】燕雀類中からす

科に屬する鳥、稍や大形にして、翼と尾とは短く、嘴細長にして末端曲がる、頭部は褐色、胸部は白色、背部は灰黑色、趾廣くして蹼(ミヅカキ)の用をなす。

かは-がり（カワ—）[川狩](名) 川にて魚を獵するヿ。

かは-ばかり [斯許](名) かくばかり。かはど。

かは-ぎし（カワ—）[川岸](名) 川のはとり。川のきしべ。

＋**かは-ぎぬ**（カワ—）[皮衣](名) かはごろも。

かは-ぎり（カワ—）[皮切](名) ❶最初に一つすうる灸。❷すべて氣づかはしき物事の第一着手。

かは-ぎり（カワ—）[川霧](名) 川に立つ霧。「宇治の—」。

⌒**かは-く** [下膊](名) [生]「うで(二)」に同じ。——**こつ** [下膊骨](名) [生] うでの骨。尺骨と橈骨と。

かは-ぐち（カワ—）[川口](名) ❶河流の湖海などへ注ぐ口。(河口)。❷武藏國北足立郡川口より製出する釜・鍋其他の鐵器の總稱。

かは-ぐつ（カワ—）[革沓](名) 革にて作りたる沓。

かは-ぐつわ（カワ—）[革轡](名) 革にて作りたる轡。

＋**かは-くま**（カワ—）[川隈](名) 川の流のまがる所。川の流の入り込みたる所。かはわ。(河曲)。——**つづら** [川隈葛](名) [植]「まゆみ」に同じ。

かは-ご（カワ—）[皮籠](名) 皮にて張りたる箱。又、紙にて張りたる葛籠(ツヅラ)。

かはごえ-いも（カワ—）[川越薯](名) 武藏國川越より出すさつまいも。

かはごえ-ひら（カワ—）[川越平](名) 武藏國川越より出す一種の袴地、經(タテ)は生絲にして緯(ヨコ)は練絲なるもの。

かは-こざね（カワ—）[革小札](名) 鎧のこざねの一種、いためがはにてこしらへたるもの。

かは-ごし（カワ—）[川越](名) ❶川を徒步(カチ)にてわたるヿ。「—の人足」。❷人を背負ひて川をわたるを業とする人。「大井川の—」。

かは-ごろも（カワ—）[皮衣](名) 毛皮にてつくりたる衣。かはぎぬ。(裘)。

かは-ざいく（カワ—）[皮細工](名) 獸皮などにて品物をつくるヿ。又、其品物。

かは-ざうり（カワゾウリ）[皮草履](名) 竹の皮にてこしらへたる草履、寬文頃より始まりたりといふ。

かはさき-おんど（カワ—）[川崎音頭](名) 一種の俗曲、伊勢音頭はこれより分派せりといふ。

かば-ざくら [樺櫻](名) [植](い)さくらの變種、花は少なく一重にて白し、皮は曲物の料に供せらる。(ろ)「きざくら」の一名。

かは-しき（カワ—）[川敷](名) 川水の流れて經(ヘ)すべき敷地。

かは-しま（カワ—）[川島](名) 川の中にある島。

かは-しも（カワ—）[川下](名) 川水のながれ下る方。下流。

かば-しら [蚊柱](名) 蚊のあまたあつまり飛ぶさまの柱の如く見ゆるにいふ。

かは-じり（カワ—）[川尻](名) かはしも。かはぐち。

かは-す（カワス）[交](他、さ四) ❶とりやりす。かうくわんす。かへあふ。❷互に交ふ。まじへあふ。❸輕く身を轉じて避く。さく。

かは-すぢ（カワ—）[川筋](名) 川のながるゝ路。水路。

かは-せ（カワ—）[川瀨](名) 川にある瀨。

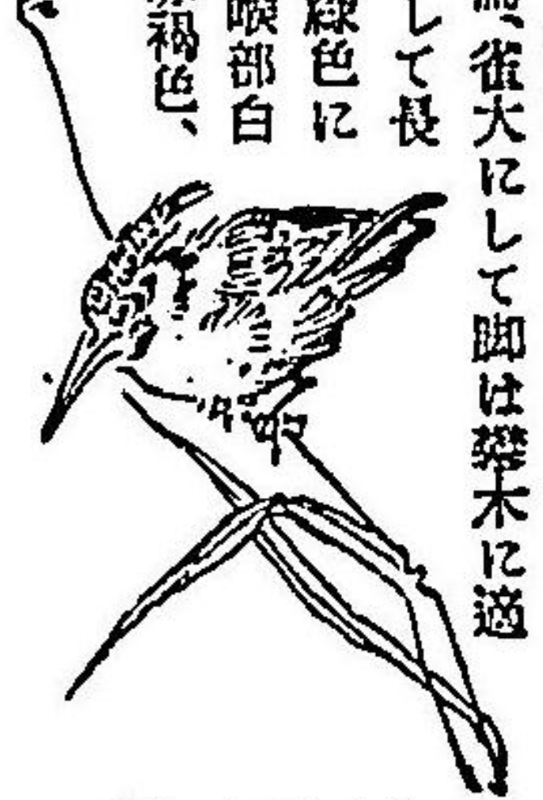
かは-せ（カワ—）[爲替](名) ❶かはすヿ。取りかはすヿ。❷「かはせてがた」又は「かはせけん」の略言。❸互に隔りたる地にあるものが、正金を送付する勞費・不便又は危險等を免るゝために、かはせてがた又はかはせけんによりて、貸借其他送金を要する事を決濟する方法、內國爲替と外國爲替との二種あり。❹かはせてがた又はかはせけんの賣買・割引其他かはせに關する事務。——**けいやく** [爲替契約](名) [法] 一定の時期に一定の場所に於て、一定の金額を、證券を占有する者に、自ら支拂ふか又は第三者をし支拂はしむるかの契約。——**けん** [爲替券](名) いうびんかはせの證券。——**さうば**（ソーバ）[爲替相場](名) 外國爲替の賣買價格の高低、爲替は現金輸送の勞費を省略せんための方便に過ぎざれば、需要關係の點より觀れば、現金輸送費に依て制限せらるべけれど、實際にては、金銀輸出の禁制及戰亂等最も高低の原因となり、殊に高低の度數繁きは、金銀價格の變動利子割引步合の高低及手形の信用の厚薄等に原因す。(外國爲替の條參照)。——**しようけん** [爲替證券](名)「かはせてがた」に同じ。——**しようしよ** [爲替證書](名) いうびんかはせの證券。——**そしよう** [爲替訴訟](名) [法] 一種の證書訴訟、商法に規定したる手形による請求を、證書訴訟を以て主張するものにして、支拂地の裁判所又は被告が普通裁判籍を有する地の裁判所に、これが訴訟を提起するを得るものとす。——**てがた**（カワ—）[爲替手形](名) 手形の一種にして、債權者が債務者に宛てゝ、自己又は其指圖人若しくは其所持人に一定の金額を支拂ふべしと命ずる證券、從うて振出人・支拂人・受取人の三者を具備するを要す、振出人は、支拂なき時にあらざれば其責を負はず、支拂人は、引受をなす迄はまた其責を負はず、受取人は、何時にても引受をなさしむるため、手形を支拂人に呈示するを得、支拂人が引受けざるとき若しくは支拂はざるときは、前者は引受拒絕證書を作らしめ、後者は支拂拒絕證書を作らしめ、振出人又は裏書讓渡人に對して、前者は擔保請求を後者は償還請求を爲すを得、此手形は裏書によりて轉輾して、貨幣の代用をなすものとす。

＋**かは-せうえう**（カワショウヨウ）[川逍遙](名) 川邊の散步。

⌒**かは-せせり**（カワ—）[川璺](名) 河の魚をあさりもとめて捕るヿ。

かは-せび（カワ—）(名) [動]「かはせみ」に同じ。

かは-せみ（カワ—）[川蟬](名) [動] 攀木類中はとゝぎす科に屬する鳥、雀大にして脚は攀木に適し、嘴は銳直にして長大なり、背部青綠色にして脊部青色、喉部白色にして腹部赤褐色、嘴黑くして脚赤し、多くは幽靜なる水邊に棲み、巧に魚の水面に浮ぶを窺ひてこれを捕ふ。かはせび。しよに。(魚狗)。



〔かはせみ〕

かは-ぞひ（カワゾイ）[川沿](名) 河に沿ひたる所。かはべ。

⌒**かは-た**（カワ—）(名) かはばう。(居兒)。

かは-たけ（カワ—）[河竹](名) ❶河邊に生ずる竹。(川竹)。❷川竹のおきふし定まらぬといふより、轉じて、定めなき身の上殊に遊女の身の上をいふ。

かは-たけ（カワ—）[革茸](名) [植]「こうたけ」に同じ。

かは-たけ（カワ—）[淡竹](名) [植]「かんちく」に同じ。——**のうてな** [淡竹臺](名) 古昔、淸涼殿の東庭に淡竹の植ゑありし所。かんちくのだい。

かは-だち（カワ—）[川立](名) ❶水練の達人。「—は川にてはてる」。❷川ぎしにゐる人。

かは-たで（カワ—）[川蓼](名) [植] 河邊に生ずるたで。

かは-たび（カワ—）[革足袋](名) 鹿のなめしがはなどにてつくりたる足袋。

＋**かは-たれ-どき**（カワ—）[彼誰時](名) (薄暗くて、かれはたれと、さだかに分からぬときの義) まだ明けきらぬ薄暗き時刻。

＋**かは-たれ-ぼし**（カワ—）[彼誰星](名) あけの明星。

＋**かはち**（カワチ）[輔](名) ❶つらがまち。❷車のかまち。

かは-ぢ（カワ—）[川路](名) 川の流るゝ路。

かは-ぢさ（カワ—）[川苣](名) [植] 玄參科に屬する水草、淺水に自生す、葉は披針形をなし、總狀花序は葉腋に生じ、花瓣は白色にして淡紅紫色の線を具ふ、莖葉は食用に供せらる。

かはち-もめん（カワチ—）[河內木綿](名) 河內國より織り出す木綿、地質普通のものより強し。

かば-ちゃ [樺茶](名) 茶にかばをおびたる色。

＋**かは-づ**（カワ—）[川津](名) 舟のよるべき川の岸。

かは-づ（カワ—）[蛙](名) [動](い)無尾類中跳指類に屬する兩棲動物、體形は稍小にして背部に疣(イボ)あり、趾指に吸盤あり、體色は黑色又は褐色にして、中には斑點あるもあり、外觀醜けれど美音を發す、山間の溪流などに棲む。(ろ)「かへる」に同じ。

かは-づ（カワ—）[河津](名)「かはづがけ」の略言。——**がけ** [河津掛](名) 相撲の手、片手を敵の首に掛け、片足を敵の片足に掛けて、反(ソ)りて敵を倒すヿ。

かは-つき（カワ—）[皮附](名) 皮のつきてゐるもの。

かは-づたひ（カワヅタイ）[川傳](名) 河にそひて行くヿ。

かは-つづら（カワ—）[革葛籠](名) 革にて張りたるつづら。

かは-づら（カワ—）[川面](名) ❶河の邊。かはべ。❷河の表面。

かは-つるも（カワ—）[川蔓藻](名) [植] 眼子菜(ヒルムシロ)科に屬する草、鹹水に生ず、葉甚だ狹く、花は通常二個づゝ叢生し、子房は成熟すれば柄を生ず。

＋**かは-と**（カワ—）[川門](名) 川の流の狹まりて瀨をなす處。

⌒**かは-と**（カワ—）[革砥](名) 刃物をとぐに用ふる革。

＋**かば-と**(副)「かっぱと」に同じ。

＋**かは-な**（カワ—）[川菜](名) [植]「かはあをのり」の一名。

かは-ながれ（カワ—）[川流](名) ❶川水に流さるゝヿ。「けんのうの—」。❷河にて溺死したるヿ、又、其人。

かは-なみ（カワ—）[川波](名) 川に立つ波。

かは-なみ（カワ—）[川並](名) 川邊に並ぶヿ。川ぞひ。

かばね [姓](名) (い)上古、血族の關係によりて社會の秩序を立て、以て國家を編制したりしときの氏族の名に添へて呼びし稱、卽ち、連(ムラジ)・臣(オミ)・首(オビト)・國造(クニノミヤツコ)などの類にして、例せば、中臣連・蘇我臣・忌部首・出雲國造と呼びしが如し、皆それぞれに定まりたる世襲の官職ありて、臣・連等は政府を輔け、國造等は地方を治むるなど、當時の政治機關なりしが、大化の革新以後は公權上に關係なきこととなれり。(ろ)天武天皇の時改めて八色の姓、卽ち、眞人(マヒト)・朝臣(アソン)・宿禰(スクネ)・忌寸(イミキ)・道師(ミチノシ)・臣(オミ)・連(ムラジ)・稻置(イナギ)を置かれし以後は、「淸原眞人」「藤原朝臣」「小槻宿禰」等の如く、たゞ氏族の名に添へて尊卑を表はす標號。

かばね [尸](名) 死者の身體。なきがら。しかばね。(屍)。

かは-ねずみ（カワ—）[川鼠](名) [動] 嚙齒類中ねずみ科に屬する小獸、身は扁くして蹼(ミヅカキ)あり、尾至つて細長く、色略ぼ普通の鼠に同じ、谷あひなどに穴居し魚を捕り食ふ。(水鼠)。

かは-のり（カワ—）[川海苔](名) [植]「かはあをのり」に同じ。

⌒**かは-ばう**（カワボウ）[皮坊](名) 動物の皮を剝ぐを商業とせる下賤の人。ゑた。かははぎ。ゑとり。

かは-ばおり（カワ—）[革羽織](名) なめしがはにて仕立てたる羽織、もとは寒を防ぎ又は火を防ぐに着用したれど、今は、職人・大工・仕事師・左官など着用す。

かは-ばかま（カワ—）[革袴](名) なめしがはの袴。

かは-はぎ（カワ—）[皮剝](名) 動物の皮を剝ぐを商業とする人。かはばう。

かは-はじかみ（カワ—）[川薑](名) [植] ごしゆゆ。(呉「茱萸」の一名。

かは-ばた【川端】(名) かはふち。かはべ。(河畔)。

かばひ-だて【庇立】(名) かばふこと。ひいき。

かは-びたり-もち【川浸餅】(名) 陰暦十二月一日に搗(ツ)く餅。かはわたりもち。

かは-びらき【川開】(名) 川の夕涼などの開始を祝して、花火などをうちあげてにぎはひをなすこと。「兩國の—」。

†かは-びらこ (名) 【動】蝶の古名。

(か-はふ)【加法】(名) 【數】二個以上の數を上せあつめて一數となすこと。かさん。

(か-はふ)【家法】(名) ㊀家内の法則。家風。㊁家傳の方法。家傳。「—の秘藥」。

(か-はふ)【苛法】(名) 過度にきびしきおきて。又、無慈悲なるおきて。

かば-ふ【庇】(他、は四) たすけまもる。いたはる。(回護)。

†かは-ぶえ【皮笛】(名) うそぶくこと。(嘯)。

かは-ぶくろ【革嚢】(名) 革にてつくりたる袋。

かは-ぶね【川船】(名) 川をのみ漕ぐための船。

かは-ぶばこ【革文匣】(名) 革にて造りたる文箱。かはぶんこ。

かは-ぶんこ【革文庫】(名) 前條に同じ。

かは-べ【川邊】(名) 川のほとり。かはばた。

†かは-べ【皮邊】(名) 肌又は膚。

かは-ぼね【骨蓬】(名) 【植】「かうほね」に同じ。

†かは-ぼり【蝙蝠】(名) ㊀【動】「かうもり」の古名。㊁扇の異稱。

かは-また【川股】(名) 河の分流する所。

かは-むかう【川向】(名) 「かはむかひ」に同じ。

かは-むかひ【川向】(名) 川を隔てたるむかひの岸。對岸。——**のくわじ**【川向火事】(名) 自家に何等の關係もなき物事にいふ。

かは-むき【皮剝】(名) ㊀皮を剝(ハ)ぐこと。「—のごくもん」。㊁獸類の革を剝(ハ)ぐことを業とする人。かはばう。ゑた。㊂「かはむきこがたな」の略言。㊃芝居のたての一種。——**こがたな**【皮剝小刀】(名) 果物などの皮を剝(ハ)ぐための小刀。

†かは-もづく (名) 【植】「かはあをのり」の一名。

かは-や【川屋】(名) 川ばたの家。「井手の—」。

かは-や【厠】(名) 大小便するところ。かうや。便所。後架。雪隱。淨房。

かは-や【皮屋】(名) 獸類の皮を製作する者。又、其家。

かば-やき【蒲燒】(名) 一種の料理、もとは、鰻の全身を縱に串に貫き、鹽燒きにしたるものにして、其形恰もがまの穗に似たるより此名あり、今時は、鰻・はも・鰌等を背開きにし、骨を去りてよき程に切り、これを串に貫き、たれをつけて燒く。

†かは-やしろ【川社】(名) 川のほとりにある神社。又、神をまつるため川のほとりに設けたる棚。

かは-やなぎ【川柳】(名) ㊀【植】楊柳科に屬する木、水邊に生ず、枝垂下せず、葉は桃に似て深綠色なり。(檉、赤楊、雅楊)。㊁茶の一種。ばんちや。

かはゆが-る【愛】(他、ら四) 愛す。いつくしむ。あはれむ。

かはゆ-し（く・し・き・けれ）(形、二) ㊀はづかし。㊁憫むべし。いとほし。㊂愛すべし。あいらし。㊃小さくて愛らし。「—き石」。

かはゆら-し（しく・し・しき・しけれ）(形、二) いとほし。あいらし。

かは-ゆり【川百合】(名) 【植】えいざんゆり。

か-はら【川原】(名) ㊀河邊の水なくして砂礫多き所。(磧)。㊁「かはらもの」の略言。㊂かはらものゝする仕業、即ち、芝居の技藝。

カハラ【瓦】(名) (梵語 Kapala) 泥にてこしらへ、蒸し燒きにしたるもの、おもに屋根を葺(フ)くに用ふ、其形種々あり、「おに—」、「ひら—」。

かはら (名) 船の舳(ヘサキ)より艫(トモ)まで船底の中心を貫きて、全體を保つ材。まぎりがはら。(龍骨)。

†かはらか (名) きよらか。さはやか。(瀟洒)。

カハラ-がま【瓦竈】(名) 瓦を蒸し燒きにする竈、土を饅頭の如くに積みてつくる。するがま。

カハラ-け【土器】(名)（瓦笥の義）㊀釉(クスリ)をかけぬ土燒の陶器の總稱。㊁土燒の盃の特稱。(瓦器)。——**な**【土器菜】(名) 【植】紫草科に屬する草、葉は圓形をなし、花は小形にして靑色を呈す、花序は總狀なり、果實は蕚より長き柄を有す、嫩葉は食ふべし。

かはら-げ【川原毛】(名) 馬の毛色、白に栗を帶びたるもの。

かはら-さいこ【川原柴胡】(名) 【植】(い)「うらおもて」に同じ。(ろ)茯苓草(ブクリヤウサウ)の一名。

カハラ-し【瓦師】(名) ㊀瓦を燒く職人。㊁瓦屋根を葺(フ)く職人。

かはら-すずめ【川原雀】(名) 「せきれい」に同じ。

カハラ-せんべい【瓦煎餅】(名) 屋根瓦の形につくりたる煎餅。

かはら-なでしこ【川原撫子】(名) 【植】石竹科に屬する草、葉は狹披針形にして、莖下の者は長くして尖り、花は大形にして花瓣の頭は齒牙狀に細裂す、觀賞用として栽培せらる。(石竹)。

かはら-はいだて【川原佩立】(名) はいだての一種、腰よりたれて膝を被ふもの。

かはら-ばと【川原鳩】(名) 【動】鳩鴿類に屬する鳥、原野に棲息す、形狀は家鳩に同じく羽毛紫灰色にして綠色を帶ぶ。(鴿)。

カハラ-ひ【瓦樋】(名) 瓦を圓く組み立て、こしらへたる樋、「路にふせたる、—(ご)」。(瓦竇)。

かはら-ひわ【川原鶸】(名) 【動】ひわの一種、頭と背とは鼠色にして、背に黑斑あり、鳴く聲うるはし、多く山中の水岸に棲息す。

†かはら-ふ（は・ひ・ふ・へ）【替】(自、は四) 「かはる」の延言。

カハラ-ぶき【瓦葺】(名) ㊀瓦にて屋根を葺(フ)くこと。又、其屋根。㊁寺の稱。(齋宮の忌詞)。

かはら-ふぢ【川原藤】(名) 【植】荳(マメ)科に屬する有刺木本、葉は多數の小葉より成り、小葉は狹長なり、藤に似たる黃色の花を開き莢を結ぶ、莢は刺を有せず、種子は念珠に用ひらる。

カハラ-まつ【瓦松】(名) 【植】「つめれんげ」の一名。

かはら-まつば【川原松葉】(名) 【植】金虎尾科に屬する草、田野に生ず、葉細くして強し、秋の頃、七八寸の穗を抽(ヌ)きて小白花を開く。

かはら-もの【川原者】(名) ㊀卑(イヤ)しき人夫の總稱。㊁德川時代に、芝居もの又は非人・穢多などの總稱。

カハラ-や【瓦屋】(名) ㊀瓦葺の家。㊁瓦を燒る家。又、瓦師。

カハラ-やね【瓦屋根】(名) 瓦葺の屋根。

かはら-よもぎ【川原蓬】(名) 【植】(い)菊の異稱。(ろ)菊科に屬する宿根草、河邊の砂地に生ず、葉は互生し胡蘿蔔(ニンジン)に似て白色の細毛を有す、八月頃、綿の如き白花を著く。(茵蔯蒿)。

かはり【代】(名) ㊀交替すること。又、其物。(交)。㊁つぐのふこと。又、其物。(償)。㊂だいり。名代。

かはり【變】(名) ㊀かはること、へんくわ。㊁尋常と異なること。「—もの」。

か-ばり【蚊鉤】(名) 基部に「カナリヤ」又は孔雀などの毛を着けて蚊の狀につくりたる細き鉤(ハリ)。鮎・はや等を釣るに用ふ。

かはり-うら【變裏】(名) 衣服の裏地の色が普通のものと變りたるもの。

かはり-がはり【代代】(名、副) かはりばんこ。かはるがはる。こもごも。輪番。交互。

かはり-ばん【代番】(名) ㊀交替にて務むること。㊁交替すべき順にあたること。——**こ**【代番】(名) 前條(一)に同じ。

かはり-め【代目】(名) 物事のかはりあふとき。「年の—」。「職員の—」。(交)。

かはり-もの【變物】(名) ㊀普通と變りたるもの。異物。㊁普通の人と一風異なりたる人。

かは-る（ら・り・る・る・れ・れ）【變】(自、ら四) ㊀轉化す。うつる。㊁更改す。あらたまる。㊂移轉す。うごく。㊃變化す。ちがふ。

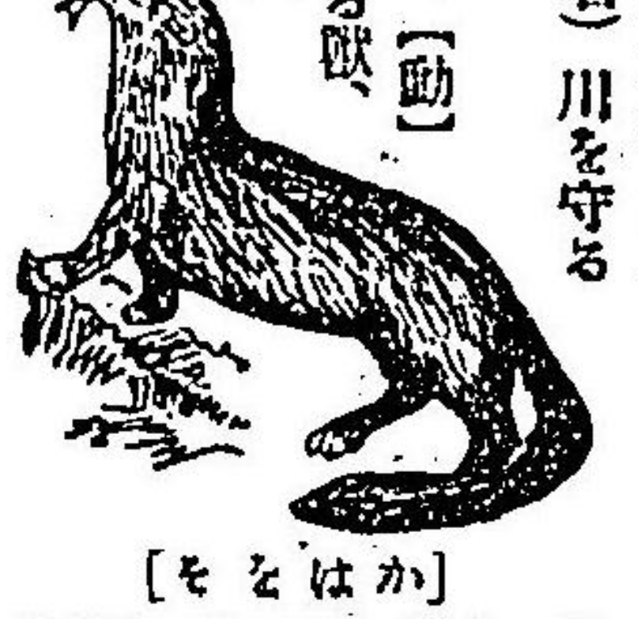
かは-る（ら・り・る・る・れ・れ）【代】(自、ら四) ㊀かれとこれと入りかはる。交替す。㊁假に他の身分となる。他のもの、なすべき事をなす。——**がはる**【代代】(副) かはり〴〵。

†かは-わ【川曲】(名) かはくま。

†かは-わた【川曲】(名) 前條に同じ。

†かは-をさ【川長】(名) 川を守る人。

かは-をそ【川獺】(名) 【動】食肉類中いたち科に屬する獸、頭圓く體は細長く、指趾五つありて蹼(ミヅカキ)を張り、水中を潛行するに適す、大さ三尺許、體色は灰黑色にして、好みて魚類などを捕へ食ふ、毛は細く柔かく衣服の料などに用ひらる。



[かはをそ]

†かは-をち【川遠】(名) 川の對岸。

(か-はん)【河畔】(名) かはゞた、かはぎし。

(か-はん)【加判】(名) ㊀德川時代に、執政職に加ると、公文書に判を加ふるより此名あり。㊁「れんぱん」(連判)に同じ。——**にん**【加判人】(名) 連印せし人。れんぱんにん。——**のれつ**【加判列】(名) 德川時代に、執政の職にありし者の稱。

(か-ばん)【加番】(名) 德川時代に、本職の他に兼ねて務むる役。「こなたは、—に、あをのぼんさま」。

カバン【鞄】(名) 「ズック」・革などにて、外面を包みたる携帶用又は旅行用の匣又は行李。(革包)。

かひ【殼】(名) 卵殼・貝殼等の如き、動物質の外側の殼(カラ)。

かひ【貝】(名) ㊀一個若しくは二個の外套膜より分泌して生成せる石灰質の外殼中に體軀を容れて水中に生殖する軟體動物、即ち、軟體動物中腹足類の多數及辦腮類に屬するものこれなり、又、其外殼の稱、個數形狀等は種類によりて異なり。㊁ほらがひの殼、山伏などの吹き鳴らすもの、昔時、軍隊の號令にも用ひたり。「—鉦太鼓」。

†かひ【卵】(名) たまご。かひこ。

†かひ【穎】(名) 芽。又、穗。

†かひ【匙】(名) さじ。しやくし。(飯匙)。

†かひ【峽】(名) 山と山との間。「山の—より立つ雲」。

かひ【甲斐】(名) せん。きゝめ。しるし。効驗。(詮)。

かひ【飼】(名) 飼ふこと。「人手は多し、—はよし」。

(か-ひ)【可否】(名) ㊀よろしとするとよろしからずとすると。よしあし。㊁可決と否決と。「—の數に加はる」。

(か-ひ)【下婢】(名) しもめ。下女。

かび【黴】(名) 【植】下等菌類の一種、特立の生活をなす能はずして、他の有機物に寄生す、種類夥多にして、其構造・形狀乃至大小・色澤も相同じからず、

生殖の狀態も從ひて一樣ならざれど、最も普通なるは、無色の菌絲より成り、播生して有柄の球粒を出し、成熟期に至れば破裂して胞子を飛散す、其胞子は復萠發してまた菌絲を發生するものとす、餅に寄生するあをかび又は麪包に寄生するくろかび等は最も多く見る所なり。

＋か-び〔鹿火〕（名） 豬鹿などを防ぐ爲に田畑にて焚く火。

か-び〔蚊火〕（名） 蚊遣り火。

（が-び）〔蛾眉〕（名） ㊀美人の眉を蛾の眉にたとへいふ語。「ーを蹙む」。㊁轉じて、美人の稱。「ーを擁す」。

かひ-あはせ〔貝合〕（名） 一種の遊戲、三百六十個の蛤殼を分配し、地貝と稱して、各一個づゝ貝を出して悉く其場に伏せならべ、其中央に空所を存し、更に出貝と稱して、各一個づゝ出し其空所に伏せおき、地貝と出貝と相合ふべきものを多くあはせとるを勝とす、多くは合する便利のために、貝の裏に繪又は歌などを描きたり。

かひ-いし〔貝石〕（名） ㊀貝殼の化石したるもの。㊁貝殼の附着したる石。

かひ-いしばひ〔貝石灰〕（名） 蝸(カキ)の殼を燒きてつくりたる石灰。

かひ-いれ〔買入〕（名） 「かいれ」に同じ。

＋かひ-おほひ〔貝被〕（名） 「かひあはせ」に同じ。

かひ-かう〔貝香〕（名） へなだり貝の蓋。

かひ-がかり〔買掛〕（名） 買ふ約束をしたること。又、買はんとする談判中。

かひ-がね〔貝鉦〕（名） 古昔、軍中にて號令又は合圖に用ひしはらがひとかねとの稱。

かひ-がひ-し〔甲斐甲斐〕（形、二） ㊀たちふるまひさも勇まし。けなげなり。㊁まめやかなり。かげひなたなし。

〔かひ-かぶり〕〔買被〕（名） ㊀物の實價の鑑定を誤(アヤマ)りて多く金を拂ひて買ふこと。㊁人の眞實の性情又は才能を見誤りて、尊敬し又は信用すること。

〔かひ-かぶる〕〔買被〕（他、ら四） かひかぶりをなす。

かひ-がら〔貝殼〕（名） かひの外殼。「蛤のー」。

——ぼね〔貝殼骨〕（名） 「かいがね」の訛。

かび-くさ-し〔黴臭〕（形、二） ㊀かびの香あり。㊁ふるくさし。

〔かひ-ぐひ〕〔買食〕（名） 常食の外に、いぢきたなくしば〳〵食物を買ひて間食すること。

かひ-くら〔貝鞍〕（名） 靑貝などを塗り込みかざりとしたる馬の鞍。

かひ-こ〔蠶〕（名） （飼蠶の義） 【動】鱗翅類中に屬する蠶蛾の幼蟲の稱、頭部を除きて十二個の環節より成り、最初の三節は膨大し、第十一節に突起あり、孵化せしときは黑くして毛あれど、數日を經て毛脫けて灰色のものとなり、多くは暗色の斑紋を有す、通常前後四回の休眠と脫皮とを經て十分の成長を遂げ、絹絲を吐出して繭を造り、其裡に入りて第五回の脫皮をなして蛹となり、後羽化して蠶蛾となる、もとは野生にして桑葉の害蟲なりしが、今は主要なる益蟲にして、人家に飼養し、繭より絹絲を製す、種類極めて多し。（馬頭娘）。

＋かひ-こ〔卵〕（名） たまご。「雛のーのまだかへらぬほどに」。

かひ-ことば〔買言〕（名） 受けたる惡言に答ふる惡言。

〔かひ-ごろし〕〔飼殺〕（名） ㊀老いたる家畜などを使役せずして、たゞ養ひおくこと。㊁使役に堪へざる人を、たゞ給養しおくこと。

かひ-ざいく〔貝細工〕（名） 種々の貝殼を用ひて、種々の模樣・裝飾又は器具などを造ること。又、其細工物。「江島のー」。

かひ-さま〔返樣〕（名） さかさま。

かひ-し-む〔買占〕（他、ま下二） おのれ一手にて買ひ集む。

かひ-しめ〔買占〕（名） かひしむること。「株のー」。

かひ-しやくし〔貝杓子〕（名） ほたてがひの貝殼に竹又は木の柄をつけたる杓子。

かひ-す〔窩主〕（名） 賊の宿。

かひ-すり〔貝磨〕（名） 貝細工をなす人。

かひ-だこ〔貝蛸〕（名） 【動】（い）「たこぶね」の一名。（ろ）「いひだこ」の一名。

かひ-だし〔買出〕（名） うけうりの品物を其問屋又は市場などより買ひもとむること。「ーに行く」。

かひ-だ-す〔買出〕（他、さ四） かひだしをなす。

〔かひ-だま〕（名） 「すくひだま」に同じ。

かひ-だゆ-し〔腕弛〕（形、二） 腕疲(ツカ)れてたゆたし。

かひ-だる-し（形、二） ㊀「かひだゆし」に同じ。㊁疲れてたゆたし。

カピタン〔加比丹〕（名） （「オランダ」語 Kapitein、又、「スペイン」語 Capitan） ㊀德川時代に、年々長崎へ來りし、西洋船の船長。㊁又、其西洋船の齎(モタラ)し來りし、縞の織物の稱。

（か-ひつ）〔加筆〕（名） 文書に筆を加へて添削すること。

かひ-づか〔貝塚〕（名） 石器時代の住民が食ひし貝の殼を捨て置きたるが、丘となりて殘れるもの。

かひ-つ-く〔飼付〕（他、か下二） かひおく。かひならす。

かひ-つけ〔飼付〕（名） 飼ひならすこと。飼ひならしたること。

かひ-つけ〔買付〕（名） 買ひ慣(ナ)れてあること。

〔かひ-つ-ける〕〔買付〕（他、か下二） 常に親しく買ひ慣(ナ)る。つねに買ふ。

かひ-づめ〔貝爪〕（名） 扁(ヒラ)たくして短き爪。

＋かひ-つもの〔貝物〕（名） いそがひ。又、いそもの。

かひ-て〔買人〕（名） 物を買ふ人。物を買ふ局にあたる人。

かひ-と-る〔買取〕（他、ら四） 我手に買ひいる。

かひな〔肱〕（名） て。うで。（腕）。

かひ-な-し〔甲斐無〕（形、二） ㊀折角のしるしなし。せんなし。㊁わか〳〵し。未熟なり。

〔かひ-なじみ〕〔買馴染〕（名） しば〳〵遊女などの許に通ひ遊びて、其女と馴染となること。又、其女。

かひ-なり-かた〔貝狀形〕（名） 笄の一種、德川時代の奧女中の三の間以上のもの、用ひしもの。

かひ-ぬし〔買主〕（名） 物を買ひたる人。

かひ-ぬし〔飼主〕（名） 家畜など飼ひて置く人。

かひ-の-くち〔貝口〕（名） 帶の結び方、一端を折りかへして他の一端と眞結びに結ぶこと。

かひ-の-はしら〔貝柱〕（名） 【動】瓣鰓類に屬する軟體動物の介殼中にありて、其前後兩殼をつなぎとむる筋肉、分類上必要にして、其前後の同一なるを同柱類といふ、即ち、からすがひ・あかがひ等これなり、前なるものゝ小にして後なるものゝ大なるを異柱類といふ、即ち、いがひ・あこやがひ等これなり、後部のものゝみに存在するものを單柱類といふ、即ち、はたてがひ・かき等これなり。

かひ-の-り〔加比の理〕【數】同種類の數個の比が比例をなすときは、前項の和と後項の和との比が、一つの前項と後項との比に等しきこと。

かひ-ば〔飼葉〕（名） 牛馬などに與ふる枯草。まぐさ。

かひ-ばなし〔飼放〕（名） はなしがひにすること。

かひ-びやうぶ〔貝屛風〕（名） 貝細工の屛風、相模國江島の名産。

かひ-ふき〔貝吹〕（名） ほらがひを吹きならして合圖すること。又、其人。

かひ-へん〔貝偏〕（名） 漢字の偏の名、財・賤・賜などの字の左傍にある貝の字の稱。

かひ-もの〔買物〕（名） ㊀物を買ふこと。「ーに行く」。㊁買ひし物。又、買ふべき物。

かひ-もどし〔買戾〕（名） ㊀一旦賣り渡したる財物を更に買ひ取ること。㊁【法】不動産の賣主が、賣買契約と同時になしたる特約により、後日に至り前の代金及契約の費用を償還して、賣買の契約を解除し、其不動産を己の所有となすこと。

かひ-もど-す〔買戾〕（他、さ四） かひもどしをなす。「田地をー」。

＋かび-や〔鹿火屋〕（名） 山里などにて、田畠を害する獸類を逐ふために、火を焚(タ)く小屋。「朝霞、ーが下に鳴く蛙」。

（か-ひやう）〔下平〕（名） 漢字の平聲を兩分したるものゝ一、これを先・蕭・肴・豪・歌・麻・陽・庚・靑・蒸・尤・侵・覃・鹽・咸の十五に分つ。

かひ-やき〔貝燒〕（名） 介殼のつきたるまゝ貝を燒くこと。「あはびのー」。

＋かひ-よ（名） 鹿の鳴き聲。「何をーと鳴きあかすらん」。

かひ-よね〔買米〕（名） 米を買ひ入るゝこと。又、買ひ入れたる米。うりよねの對。（糴）。

〔か-びる〕〔黴〕（自、は上二） 黴生ず。かぶ。

かひ-れう〔飼料〕（名） 家畜に與ふる食料。又、家畜を飼ふ入費。

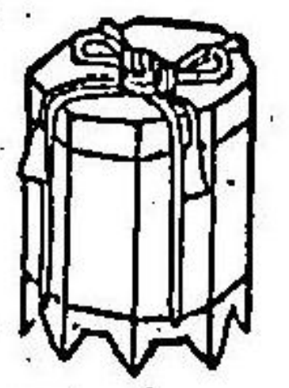
＋かひろ-ぐ（自、か四） ゆるぐ。なびく。

かひ-わり〔穎割〕（名） 菜などの種より二葉の萠(モ)え出でたるもの。かひわれ。

かひ-われ〔穎割〕（名） 前條に同じ。

かひ-をけ〔貝桶〕（名） かひあはせの貝を入るゝ桶。

かひ-をけ〔飼桶〕（名） 飼葉を入るゝ桶。



［かひをけ］

（か-ひん）〔佳賓〕（名） めづらしき客。よき客。ちんきやく。

（か-ひん）〔佳品〕（名） よき品。（良品）。

（か-ふ）〔可否〕（名） 「かひ」に同じ。

（か-ふ）〔下附〕（名） 政府が人民へさげわたすこと。「鑑札ー」。

（か-ふ）〔家父〕（名） おのれの父。

（か-ふ）〔家扶〕（名） ㊀親王家又は諸王家にて、家務會計を整理する屬官。家令の次席。㊁華族の家務會計を擔當するもの。家令の次席。

（か-ふ）〔跏趺〕（名） 兩足をくみ重ねて坐すること。あぐらをかくこと。

（かふ）〔甲〕（名） ㊀よろひ。ぐそく。㊁龜又は蟹などの外表を被ふ堅き殼。かふら。㊂琵琶・三味線などの胴。㊃すべて物の表面に着する堅固なる覆被物の稱。㊄手足の表面。「手のー」。「足のー」。㊅臺灣にて使用せらるゝ地積の單位、約百二十坪に當る。㊆第一位。乙の對。

か-ふ〔交〕（自、は四） ㊀交替す。かはる。㊁交互す。ゆきあふ。

か-ふ〔飼〕（他、は四） 動物に食物を與へて養ふ。「鳥をー」。（畜）。

か-ふ〔支〕（他、は四） さゝふ。つっかふ。「「さゝへをー」」。

か-ふ〔買〕（他、は四） ㊀價を拂ひて其品を我物とす。「紙をー」。㊁求め受く。「禍をー」。㊂遊

女などを招きて遊ぶ。㊄利用す。報酬す。「正直な所を—てやる」。

か・ふ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）[變]（他、は下二）㊀異ならしむ。變化せしむ。「形を—る秘傳の妖術」。㊁轉化す。うつす。㊂改革す。あらたむ。㊃移動す。うごかす。

か・ふ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）[換]（他、は下二）㊀物と物とを交換す。かへあふ。「砂糖と金とを—」。（交易）。㊁先のものを廢し此ものを用ふ。とりかふ。「人を—」。（代）。㊂古き水を去りて新しき水を入る。さらふ。「溝を—」。（渫）。

かぶ[株]（名）㊀きり倒したる木の殘りたる幹又は根。くひぜ。㊁植物の幹莖の個數。「三—の菜」。㊂官許又は規約によりて、特に限られある營業。「湯屋の—」。㊃昔時、賣買せし役目又は名跡。「同心の—」。㊄株式又は株劵。㊅（おさだまり。おきまり。）「愚痴はお—」。

かぶ[蕪]（名）【植】「かぶら」の略言。（蕪根）。

（か-ぶ）[歌舞]（名）㊀歌ふと舞ふと。「—音曲」。㊁うたひ且舞ひて興ずること。遊興。——**のち**[歌舞地] 遊興の盛んに行はる、繁華の地。

か・ぶ（び、び、ぶ、ぶる、ぶれ、びよ）[黴]（自、は上二）かび生ず。

（がふ）[合]（名）㊀一坪の十分の一、即ち、三・六平方尺の積の稱。㊁一升の十分の一、即ち、六四八二・七立方分の量の稱。㊂距離などを十分して其一の稱、「富士山の八—目」。㊃蓋（フタ）ある器の個數。「椀一—」。㊄計算のまめ高、たか。㊅[Synthesis]【哲】辨證法にて、一事物若しくは一概念が、發展して或矛盾の狀態を經過し、更に新しき事物若しくは概念となると、即ち、正が反となりて更に一狀態を形成するを。㊆【天】二つの天體が、同黃經若しくは同赤經に來ると、通常は遊星・衛星又は彗星が、太陽と同黃經若しくは同赤經に來るをいふ、其太陽と地球との間に來るときは下合といひ、太陽がこれと地球との間にあるときは上合といふ、故に上遊星には下合起ることなし。

（が-ふ）[餓莩]（名）「がへう」に同じ。

（が-ふ）[衙府]（名）やくしよ。やくば。

（が-ふ）[樂府]（名）漢詩の古體の一、句の長短一定せず、漢の武帝が音樂にのぼせうたふために、制定せしめしに創まる。

（がふ-い）[合意]（名）互の意思が相一致せると。互の契約若しくは談合のできたると。

（がふ-いつ）[合一]（名）一つにあふと。又、一つにあはすると。——**さいむ**[合一債務]（名）【法】各債務者が合同して一の債務を負ふと、債權者は同時に總債務者に對してのみ履行を請求するを得、

（か-ふう）[家風]（名）家の掟、家のならはせ。

（か-ふう）[下風]（名）其人の下位。「其—に立つ」。

（かふ-えん）[溘焉]（名、副）逝ぬるさまにいふ語。たちまち。

（かふ-おつ）[甲乙]（名）㊀第一と第二と。㊁假定又は名を知らざる兩人。「—相和せず」。㊂すぐれたるとおとりたると。又、かみとしもと。「伎倆—なし」。——**にん**[甲乙人]（名）貴賤上下の人。

（かふ-か）[闔家]（名）一家內。全家。

（かふ-か）[閤下]（名、代）「かくか」（閣下）に同じ。

（かふ-かく）[岬角]（名）みさき。さき。

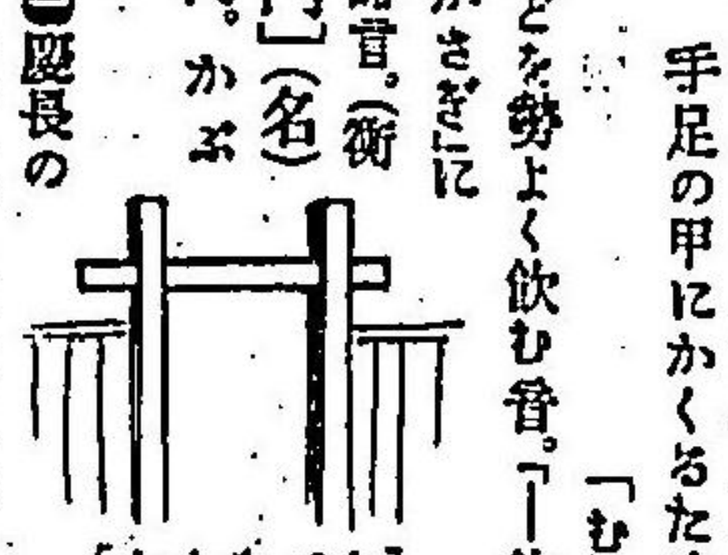
（かふ-かく）[甲殼]（名）【動】節足動物の皮膚が、多量に石灰質を含み硬化したるもの。——**るゐ**[甲殼類]（名）【動】節足動物の一、水中に棲息す、外皮は甲殼をなし、頭胸部と腹部とに分る、兩部の各節に肢あり、鰓を以て呼吸し、二對の觸角を有す、かに・えび等これなり。

（がふ-かく）[合格]（名）㊀一定の格式又は條件に適合すると。㊁採用の試驗に及第せると。

かふ-かけ[甲掛]（名）手足の甲にかくるためのもの、布片にてつくる。

がぶ-がぶ（名、副）酒などを勢よく飲む音。「—飲む」。

かぶ-き[冠木]（名）㊀「かさぎ」に同じ。㊁「かぶきもん」の略言。（衡木）。——**もん**[冠木門]（名）かさぎを上に渡したる門。かぶき。（衡門）。


[かぶきもん]

（かぶ-き）[歌舞伎]（名）㊀慶長の頃、出雲の神子（ミコ）阿國といふ女の新に始めし舞曲、即ち、阿國歌舞伎の稱、これに淵源して其舞曲の行はれゆくに連れ次第に改良を加へられ、遂に芝居となり、今日にては、專ら芝居の稱にいふ。㊁「かぶきしばゐ」の特稱。廿——**こ**[歌舞伎子]（名）歌舞伎に出づる役者。やくしや。——**しばゐ**[歌舞伎芝居]（名）格よき芝居、昔時は、櫓（ヤグラ）を上ぐるとを得しもの、今時の大劇場。——**じふはちばん**[歌舞伎十八番]（名）十八番の條を見よ。——**やくしや**[歌舞伎役者]（名）歌舞伎芝居に出勤する名題役者。

（がふ-ぎ）[合議]（名）二人以上の者の相集まりて議すると。——**さいばん**[合議裁判]（名）二人以上の判事の合議によりて成立する裁判、現今我國の地方裁判所・控訴院・大審院等に於ける裁判これなり。——**せいど**[合議制度]（名）合議によりて事を行ふ制度。

（がふ-きふ）[合級]（名）二級以上を合併して教授すると。

かぶ-きり[株切]（名）小兒などが、頭の毛を四方同じ長さに切り揃（ソロ）へたると、「—の若衆すがた」。

かぶ-きん[株金]（名）株式に對する出資金。

（がふ-きん）[合卺]（名）（卺はひさごの盃を半切したる杯、支那の古昔の婚姻の式に、夫婦各其杯にて酒をくみかはしゝよりいふ）婚姻の式を擧ぐると。けつこん。こんれい。「—の式を擧ぐ」。

（がふ-きん）[合金]（名）二種以上の相異なる金屬を熔融混合して成りたる金屬、しやくどう・しんちゆう等これなり。

（かふ-くわ）[甲科]（名）第一級。

（がふ-くわん-ぼく）[合歡木]（名）【植】「ねぶのき」に同じ。

（がふ-けい）[合計]（名）㊀合せ數ふると。㊁合せ數へたる高。

（がふ-げふ-はふ）[合業法]（名）二人以上のものが共同して業を營む方法。

かぶ-けん[株劵]（名）株式の所有を證明するための證劵にして、該株式會社が本店所在地にて登記をなしたる後に、株主に對して發行するもの。

（がふ-ご）[合期]（名）一定の時間にあふと。「進退更に—せず」。

（かふ-こく）[闔國]（名）一國內。全國。

かぶさ・る（ら、り、る、る、れ、れ）[被]（自、ら四）表面にかゝりふさがる。おほふやうになる。

（がふ-し）[合祀]（名）二柱以上の神を一社に合せまつると。

（がふ-し）[合資]（名）資本を合すると。

（がふ-し）[合子]（名）蓋ある椀。

（かふしう-きん）[甲州金]（名）武田氏以來、甲斐國にて通用せし古金貨。

かふしう-りう[甲州流]（名）昔時の兵學の一派、小幡勘兵衞景憲を流祖とす。

かぶ-しき[株式]（名）株式會社の資本の單位、各株式の金額均一なるものにして、會社の定款に別段の規定なきときは、これを自由に他人に讓り渡すを得。——**がふしくわいしや**[株式合資會社]（名）無限責任社員と株主とを以て組織せる會社、其無限責任社員は合資會社の無限責任社員と株式會社の取締役とを兼ね、株主は株式會社の株主と同樣の權利義務を有す、機關は、會社を代表する無限責任社員及株主總會・監査役なり。——**くわいしや**[株式會社]（名）株主を以て組織せる有限責任會社にして、株式により成立せる資本團體、會社の權利義務に就ては會社のみ權利義務の責任を有し、各社員は其會社に對して權利義務の責任を有するのみ、機關は株主總會・取締役・監査役なり。——**とりひきじよ**[株式取引所]（名）株式の取引賣買をなす取引所。（取引所の條參照）。

（がふし-くわいしや）[合資會社]（名）無限責任社員と有限責任社員とを以て組織せる會社、有限責任社員は、たゞ其組織の際出資したる外は一切責任を負はずして、無限責任社員の承諾を得ば、其持分を他に讓渡すとを得、無限責任社員は、會社を代表し事務を執行する權利義務を有し、總員の承諾を得ざれば、其持分を他に讓渡すとを得ず。

（がふし-さん）[合資算]（名）【數】二人以上の人が醵金し、これを資本として營みたる事業より生じたる利益配當高・損失分擔額等を定むる計算法。

（かふ-しゆ）[甲首]（名）かぶとくび。

（かふ-しん）[盍簪]（名）（易經に朋盍簪とあるに出づ）友人のあつまりあふと。

カフス[Cuffs]（名）洋服を着するとき手首に着くる飾、布もて作り、蠟引又は護謨引にしたるもの、「ホワイトシャツ」の手首にあたる所にも附けあり色はおもに白を用ふ。

かぶ-す（名）（蚊燻（カイブス）の義）【植】橙の一種、皮苦し、おもに蚊遣火に焚くより此名あり。（臭橙）。

廿**かぶ・す**（さ、し、す、す、せ、せ）[被]（自、さ四）頭傾く。

かぶ・す（せ、せ、す、する、すれ、せよ）[被]（他、さ下二）㊀かぶらす。きせる。おほふ。㊁或物の上に、更に他の物を入れてろう。㊂あざむく。たばかる。

かぶせ[被]（名）㊀物を被（オホ）ふと。又、被ふに用ふるもの。（覆、蓋）。㊁「ばくち」の隱語。

（がふ-せい）[合成]（名）二つ以上のものが、相合して一の狀態を成すと。

（かふ-せつ）[狎褻]（名）なれてみだらになると。

かぶせ-ぶた[被蓋]（名）中身を殘らず被ふ蓋。

（かふ-ぞく）[甲族]（名）門閥高き家。よき家柄。

（かふ-そつ）[甲卒]（名）よろひを着したる兵士。

（かふ-だい）[甲第]（名）㊀かみやしき。㊁進士などの第一等。

かぶ-だいこん[蕪大根]（名）【植】かぶら。

かふ-だか[甲高]（名）手背又は足のおもての高くはりいでたると。「—足袋」。

廿**かふ-ち**[枸櫞]（名）【植】「まるぶしゆかん」の古名。

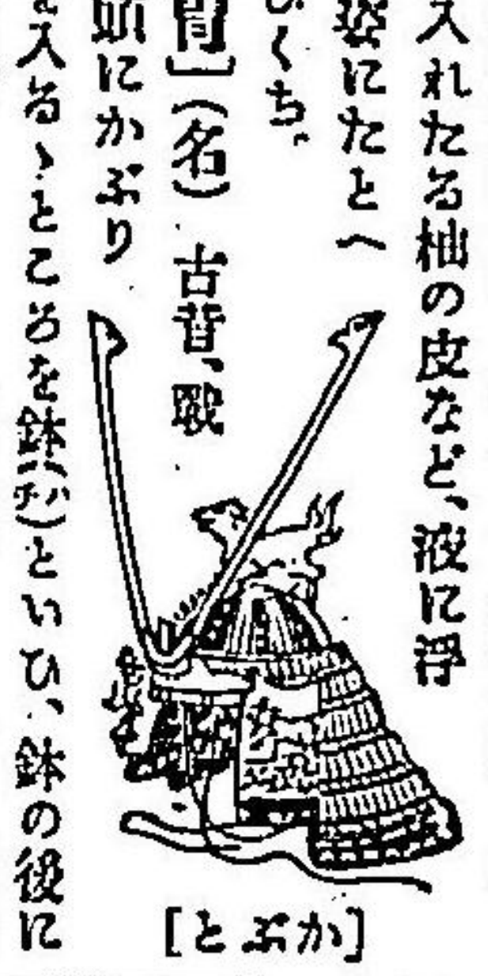
（がふ-ち）[合致]（名）兩者互に一致すると。

（かふ-ちゆう）[甲蟲]（名）【動】昆蟲類中鞘翅類の稱、口器はものを咬むに適し變態完全なり、前翅は革質にして鞘をなし、其下に膜質の後翅を折り疊（タ）む、中胸後胸の兩部は相癒合す、其種類多く、かみきりむし・ほたる等これに屬す。

（か-ぶつ）[下物]（名）酒の肴。さかな。

（かふてつ-かん）[甲鐵艦]（名）鋼鐵を以て裝ひたる軍艦、「アメリカ」合衆國の南北戰爭のときの

創始にかゝるといふ。
††かふ-とコウ［鴨頭］（名）（字音の誤讀）吸物に香をそふるため入れたる柚の皮など、液に浮ぶ體を鴨の姿にたとへていふ。すひくち。


［とぶか］

かぶと［兜、冑］（名）古昔、戰爭のときに頭にかぶりしもの、頭を入るゝところを鉢（ハチ）といひ、鉢の後に垂れて頸を被（オホ）ふところを錏（シコロ）といひ、目庇（マビサシ）の上につくる鍬形などを前立（マヘダテ）といふ、鉢は鐵にて作り、錏はいため革などにてつくる、俗に甲の字をかぶと冑の字をよろひと誤用せるを久し。（甲）。——がに［兜蟹］（名）【動】蟹の一種、體は堅甲を被り幅廣し、はゞ半月形の頭胸及六角形の腹より成り、後端に細長なる尾節を具す、頭胸の下面に口を圍みて六對の脚あり、腹に五對の鰓狀肢を有し鰓を有す、瀬戸内海及九州沿海等に多く產す。（鱟魚）。——がひイーガ［兜貝］（名）うにの石灰質の外殼。（蟹螺）。——ぎく［兜菊］（名）【植】毛莨科に屬する草、大なるものは四五尺に達す、葉は廣くして掌狀に分裂し深綠色にして光澤あり、花は通常深碧色を呈し、秋の頃に開く、有毒植物にして、根はぶすと稱し藥用に供せらる。とりかぶと。かぶとばな。（雙鸞菊）。——くび［兜首］（名）昔時の軍陣にて、大將分の首級の稱。「—に恩賞」。——たて［兜立］（名）昔時の陣中にて、冑をかけ置きし具、長さ六尺許、全體槍に似ていしづきあり、其頂上に多くは饅頭形の盤を置き、其盤に冑をかく。（冑立）。——にんぎやう［兜人形］（名）五月節句に飾る武者人形。——バチ［兜鉢］（名）㊀兜の頭をおほふ部分の稱。㊁緣の廣くはりいてたる鉢、天鼓羅星などにて餛飩の粉を澄（ト）くなどに用ふるもの。——ばな［兜花］（名）【植】「かぶとぎく」に同じ。——むし［兜蟲］（名）【動】鞘翅類中五節類に屬する昆蟲、幅七八分長二寸五六分許、全身栗色なり、雄は頭邊より一個の長き突起を出す、雌にはこれなし、雌雄陶汰の最も著しき蟲にして、通常さいかち・樒等に多く見る所のものなり。——をぬぐ　降參するにいふ。——のををしむ　敵に對して油斷をなさゞるにいふ。

（がふ-どうゴウ［合同］（名）二つ以上のもの、一つになること。又二つ以上のものを一つにすること。

かぶ-な［蕪菜］（名）【植】「かぶらな」の略言。（蕪菁）。

かぶ-ぬし［株主］（名）株式會社の社員又は株式合資會社の無限責任社員以外の社員、株主となるには、少くとも一個の株式を引き受けざるべからず、其權利は株劵を以てこれを證明す。——そうくわい［株主總會］（名）株式會社及株式合資會社の機關の一、其決議は會社の意思にして、各株主は一個の株式に付き一個の議決權を有す、十一株以上を有する株主の議決權は、定款を以て制限することを得、取締役これを招集するものにして、定時と臨時とあり、定時は每年一回一定の時期に必ず招集すべきものにして、取締役の提出書類及監査役の報告書を調査し、且利益又は利息の配當を議決す、臨時は必要ある每に招集せらる、總資本の十分一以上を有する株主は、總會招集の請求をなすことを得。

（かふ-はんコウ［甲板］（名）船のカンパン。

がふひ-のりゴウ［合比の理］【數】二つの比相等しければ、一つの比の前項と後項との和と、其後項との比が、他の比の前項と後項との和と、其後項との比に等しといふこと。

（かふ-へいコウ［甲兵］（名）よろひを着したる兵。

（がふ-へいゴウ［合併］（名）一つにあはすること。

（がふべん-くわゴウ［合瓣花］（名）【植】合瓣花冠をなす花。——くわん［合瓣花冠］（名）【植】花瓣の合着して一花冠をなすもの、あさがほ・かきうり等の如きこれなり。

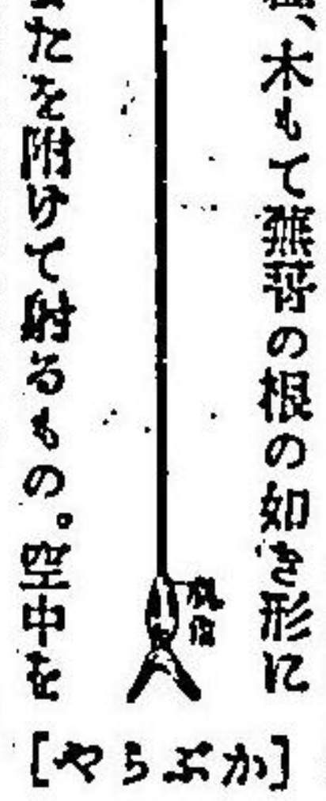
（がふ-めいゴウ［合名］（名）名前を一緒に書き列ぬること。「—て香奠を送る」。——くわいしや［合名會社］（名）二人以上のものが、各出資して共同の商業を營む無限責任の會社、各社員は會社を代表し會社の業務に當る權利を有す、若し會社の財產を以て會社の債務を完濟する能はざるときは、各社員は連帶して其債務を負ふものとす。

（がふ-やくゴウ［合藥］（名）火藥の一名。

かふ-らコウ［甲］（名）（「ら」は添辭）「かふ」に同じ。

かぶ-ら［蕪］（名）【植】十字花科に屬する一年生又は二年生の栽培草本にして、あぶらなの變種なり、種子は一列に並び、根は蕪菁根をなす、種子より油を搾（シボ）るべく、葉及根は食用に供せらる。かぶ。かぶな。（蕪菁）。——な［蕪菜］（名）【植】「かぶら」に同じ。——のせんまいづけ［蕪千枚漬］（名）蕪の根を薄くきりて鹽漬にしたるもの。——ぼね［蕪骨］（名）鯨の頭の骨、鮨にて細く削り、三杯酢などに入れて食ふ。ひづ。

かぶ-ら［鏑］（名）「かぶらや」の略言。——や［鏑矢］（名）やじりの一種、木もて蕪菁の根の如き形に作り、中を空にし三個の穴をあけ、かりまたを附けて射るもの。空中を通過するとき響を發す。（鳴鏑、鏑箭）。——ゑり［鏑鐫］（名）頭の曲りたる鑿、ももにかぶらやの中


［やらぶか］

を彫るに用ふるより此名あり。

かぶり［被］（名）㊀頭にかぶるもの。㊁狆（チン）の其目の隠るゝばかりに毛の蔽ひかぶりたるもの。

かぶり（名）（頭振の略）頭を左右にふりて不承知の意を示すこと。——をふる　否む意を示す。

（かぶり（名）芝居の大入り。

（がふ-りゴウ［合理＝Rationality］（名）㊀正に然るべきこと。公平なること。道理に合ふこと。㊁論理的に論證すること。推論上其道理が必然の結果なること。經驗又は想像の對。

（がぶり（名、副）流動物を飲む音。がぶく。

かぶり-がさ［被笠］（名）頭にかぶる笠。

かぶり-したぢ［被下地］（名）㊀冠を被る下地に用ふるもの。㊁髮の結（ユ）ひ方、冠を被るともさはりなきやう、髻を頭上にかためて結びたるもの。

（がふり-せつゴウ［合理說＝Rationalism］㊀合理的に組織したる說。㊁基督敎の一派、聖書の中にて、合理的部分のみを取りてこれを信じ、不合理的部分はこれを排除するもの。

かぶりつ・く（かきくくけけ）［嚙付］（他、か四）㊀むしやぶりつく。㊁かみつく。

（がふりつ-ひれいゴウ［合率比例］（名）【數】「複比例」に同じ。

（がふり-てきゴウ［合理的＝Rational］（名）論理的に判斷論證するにいひ、又、道理に合するにいふ。

かぶり-もの［被物］（名）㊀笠又は帽子の如く頭にかぶるもの。㊁頭にかぶりてあるもの。

（がふ-りよくゴウ［合力］（名）㊀力を合はすること。よりき。たすけ。㊁施與すること。めぐみ。ほどこし。㊂【理】二個以上の力が組み合ひて成る一つの力。

かぶ・る（らりるるれれ）［被］（他、ら四）かうぶる。

かぶ・る（らりるるれれ）［嚙］（他、ら四）㊀かむ。かじる　㊁苦痛の感を起さしむ。「腹を—」。

かぶ・る（れれるるるれよ）［感］（自、ら下二）㊀漆などの氣に感じて、皮膚病起る。㊁感じて其物の如くになる。感化をうく。あやかる。「惡人にかぶれて」。

かぶれ［感］（名）㊀かぶるゝこと。又、かぶれたるもの。㊁かぶれて起りたる皮膚病。「うるし—」。——る［感］（自）「かぶる」の訛。

かぶろ［禿］（名）㊀頭に毛髮なきこと。はげあたま。㊁山に樹木なきこと。はげやま。㊂幼者などが髮を短くして結ばざること。㊃遊女の側に居て其使役にあたる幼女。かむろ。——だち［禿立］（名）㊀子供の頃。㊁もと禿にて先輩に仕へ、よく其道をわきまへたりとの意より、遊女をほめていふ語。——まつ［禿松］（名）葉の少なき松。

（がふ-ゐゴウ［合圍］（名）まはりをかこむこと。とりまくこと。——ちきやう［合圍地境］（名）敵の合圍若しくは攻擊等の事變に際し戒嚴する地域、其地の普通警察を停止して非常警察を行使する權を、其地の司令官の警察に委ぬ。

（かぶん-さいむ［可分債務］（名）【法】債務の目的物が分割して履行し得る性質の債務、例せば、金錢の債務の如きものにして、幾部分を支拂ふとも全體との差はたゞ其率に止まるものなり。

（かぶん-すう［假分數］（名）【數】分子が分母より大なる分數、分數は整數一より小なる數を表はすものなるに、分子大なるは、整數一より大なる數にして、たゞ分數の形式をなすものなる故にいふ。

（かぶん-せい［可分性］（名）【理】物體の有する性質の一、如何なる細微にも分たれ得べきこと、香氣は其物體の微細なる部分が飛散せるによるものなるを觀ても、これを知るべし。

（かぶん-ぶつ［可分物］（名）【法】當事者の意思又は法律の規定によりて、分割し得べき性質なる權利の目的物。

かへエカ［榧］（名）【植】「かや」に同じ。

かへエカ［代］（名）㊀かふること。かはること。㊁かはり。みやうだい。㊂物價の割合。「米一俵七圓—」。（替）。

かべ［壁］（名）㊀家の四方のかこひ又は室の内部のへだての土を塗りて作りたるもの。㊁††（ぬるときに見るといふ義）古昔、夢の異稱。（おもに歌に用ふ）「ねぬる夜の、—さわがして見えしかど」。——にみみ　密談などのやゝもすれば洩れやすきにいふ。

かへい-ぢ［嘉平地］（名）めいせんもりの袴地。

（が-へうガヘウ［賀表］（名）めでたき事を賀する上奏文。

（が-へうガヘウ［餓莩］（名）うゑじに。餓死したるもの。

かへ-うたカヘ［替歌］（名）或歌と語數及曲節の同じやうに作られたる歌。

かへ-おとりカヘ［替劣］（名）交換して惡しきものを得たること。

かべ-がき［壁書］（名）㊀壁にかきたる文字。又、壁に貼りおく文書。㊁おきて書。「評定所—」。

かへ-がへカヘガヘ［代代］（名）とりかへ。かうくわん。

かべ-ごし［壁越］（名）壁を隔てたること。又、壁を隔てゝものすること。「—に話す」。

かへ-ことばカヘ［代言葉］（名）ふてふ。あひことば。

††かへ-さカヘ［歸］（名）「かへるさ」に同じ。

かへ・さ・ふ（はひふふへへ）カヘサフ［返］（他、は四）「かへす」の延言。

かへ-さまカヘ［反樣］（名）さかさま。

かへ-しカヘシ［返］（名）㊀かへすこと。㊁字音の反切。㊂へんたふ。返事。㊃かへしうた。返歌。㊄波濤の去りて再び寄せ又は地震大風などの止みて再び起こるにいふ。㊅芝居の一幕の内にて、暫時幕を閉ぢ鳴物にて其間をつなぎ、直に開くきり。——り

た［返歌］（名）㊀贈られたる和歌の意に答へて、詠みかへす歌。へんか。㊁長歌の意を約めて、其後に附くる短歌。——がたな［返刀］（名）一方へ切り付けたる太刀を、更に他方へふりかへすときの太刀。かへすかたな。——じ［返字］（名）「かへりじ」に同じ。

かべ-したぢ［壁下地］（名）壁の壁土をつけとゞむる骨となすもの、おもに竹又は木などの細き材を、縦横に細かく結びて作る。かべしろ。（壁骨）。

かへし-ばり（カエ）［返針］（名）衣服などの縫ひ方にて、縫ひ行きたる終りの止めに、もとの方へ一寸餘縫ひ返すこと。又、袋物などの縫ひ方にて、一針づゝあとへ返し縫ふこと。

かへし-もの（カエ）［返物］（名）㊀さいばらの呂律の歌。㊁ものをかへすこと。又、もどすべきしろもの。

かべ-しろ［壁代］（名）㊀宮殿などの内部に壁の代用に掛くる帳。㊁かべしたぢ。

かへ・す（カエス）［返］（他、さ四）㊀もとの如くにす。もどす。（復）。㊁もとの所へ到らしむ。（歸）。㊂受けず。へんきやくす。「品物を—」。㊃却退す。しりぞく。「追ひ—」。㊄嘔吐す。はく。㊅報酬す。むくゆ。「恩を—」。㊆くりかへす。

かへ・す（カエ）［反］（他、さ四）㊀くつがへす。ひるがへす。㊁重ねて爲す。くりかへす。「これを—」。㊂耕す。㊃漢字の反切をなす。「〜」。

かへ・す（カエ）［孵］（他、さ四）卵を子に化せしむ。

かへす-がへす（カエスガエス）［返返］（副）幾度も。かさね

かべ-すきや［壁透屋］（名）すきやの一種、普通のすきやよりは、一層よく絲に縒（ヨ）りをかけて、壁蒋羅（カベチヨロ）の如くに織りなしたるもの。

かべ-そしよう［壁訴訟］（名）㊀たゞ獨が壁に對してつぶやくこと。きけよがしに物語すること。㊁とはまはしに密告又は讒訴などをなすこと。

〜**かへ-だま**（カエ）［替玉］（名）眞物に見せかけて、其かはりに用ふる假物。「—をつかふ」。

かへ-ち（カエ）［替地］（名）㊀移轉して住むべき土地。㊁とりかふる土地。

かべ-チヨロ［壁著羅］（名）かめあやに似たる一種の絹布、ちゞれてちゞみの如き細かき文を表はしたる地合厚きもの。

かべ-つち［壁土］（名）壁を塗る土。

かへっ-て（カエ）［却］（副）うらうへに。うらはらに。——さく［却說］（副）さて。さてまた。

かへ-で（カエデ）［楓］（名）㊀［植］（蛙手の略言、葉の形蛙の手に似たればいふ）槭樹科に屬する喬木、葉は掌狀にして對生し、單葉又は複葉なり、嫩葉は色麗しく長じて綠色となり、霜に逢へば紅葉して殊に美し、果實は雙翅果なり、種類多し、觀賞用として栽培せらる。（雞冠木、槭樹）。㊁かさねの色目、表裏共に萠黄（モエギ）なるもの。——だな［楓棚］（名）四十八棚の一、足の細き四本、棚板八枚、袋棚は附屬せず、書院わきなどに適當す。——の-き［楓樹］（名）［植］「かへで」に同じ。

かべ-どなり［壁隣］（名）壁一重隔てたる隣家。

廿**かへ-どの**（カエ）［柏殿］（名）古昔の離宮の名、朱雀院にありたる皇后のおはしましゝ所。

かへ-な（カエ）［替名］（名）㊀本名に代へて用ふる名。㊁別名。「江戸助六のことは暁雨の—とぞ」。

かべ-ぬり［壁塗］（名）壁を塗ること。又、其職人。（泥工）。

かへ-ほ・す（カエ）［換乾］（他、さ四）水を汲み涸（ツ）くす。

かへ-もん（カエ）［代紋］（名）定紋にかへて別に用ふる紋。うらもん。

かへ-やぐら（カエ）［代櫓］（名）往時江戸の大芝居の代用として興行を許されし劇場。

かへら・ふ（カエラフ）［歸］（自、は四）「歸る」の延音。

かへり（カエリ）［返］（名）㊀かへること。もどること。㊁歸る路。かへりみち。㊂返事。返書。㊃かへり點。

かへり（カエリ）［反］（名）㊀うらがへること。くつがへること。㊁くりかへし。たび。（返）。

廿**かへり-あそび**（カエリ）［返遊］（名）一旦宴を終へて後、更に宴を催すこと。

廿**かへり-あるじ**（カエリ）［還饗］（名）古昔、はれの勝負事（弓又は相撲など）の終りたるとき、勝ちたる方の大將が、其部下に行ふ饗應。かへりだちのあるじ。かへりのあるじ。

かへり-うち（カエリ）［返擊］（名）仇討をなさんとして、却りて仇に討たるゝこと。「—にあふ」。（反討）。

かへり-がけ（カエリ）［歸掛］（名）㊀歸らんとする場合。歸る途中。歸るついで。かへるさ。かへりしな。

かへり-ごと（カエリ）［返事］（名）へんじ。あいさつ。こたへ。返答。「御—聞えざらんも人目あやしければ」。

廿**かへり-ごゑ**（カエリ）［返聲］（名）雅樂にて、春のしらべより、秋のしらべにうつること。

かへり-ざき（カエリ）［返咲］（名）㊀時ならぬころ植物の花の二三輪開くこと、通常春咲きたるもの再び秋咲くにいふ。にどざき。㊁一旦おとろへたるもの、再びもとの如くになること。

かへり-ざま（カエリ）［歸樣］（名）㊀かへりがけ。㊁かへりたる其まゝ。

かへり-じ（カエリ）［返字］（名）漢文を和譯して讀むときに、顚倒して讀むべき文字。かへしじ。

かへり-しな（カエリ）（名）歸路のついで。かへりがけ。

かへり-しんざん（カエリ）［歸新參］（名）一旦出で去りたる人が、立歸りて再び事ふること。でかへり。

廿**かへり-だち**（カエリ）［還立］（名）古昔、加茂の祭事などの終りし後、御所に還りて行ひし歌舞。

廿**かへりだち-の-あるじ**（カエリ）［還立饗］（名）「かへりあるじ」に同じ。

かへり-ちゆう（カエリ）［返忠］（名）うらぎり。內應。

かへり-て（カエリ）［却］（副）「かへって」に同じ。

かへり-てん（カエリ）［返點］（名）漢文を和讀するため、漢字の左傍に記して返り讀むことを表する符號、レ又は上・中・下又は一・二・三若しくは甲・乙・丙等を用ふ、レは直に上へ返り讀むべきもの、上・中・下は上より中・下と順を追ひて返り讀むべきもの、一・二・三等は一より、甲・乙・丙等は甲より、共に順を追ひて返り讀むべきものなり。

かへり-ばな（カエリ）［返花］（名）㊀かへりざきの花。二度ざきの花。㊁かへりざきのもの。

かへり-びな（カエリ）［歸雛］（名）離緣せられて家にかへり居る女。

廿**かへり-まうし**（カエリモウシ）［返申］（名）㊀返事の奏聞。復奏。㊁おれいまゐり。

かへり-み（カエリ）［顧］（名）㊀ふりむくこと。「—していへらく」。㊁既往の回想。㊂自己の反省。㊃なさけ。恩眷。「身にあまるまで御—」。

かへり-みち（カエリ）［歸路］（名）かへりの路。

かへり-み・る（カエリ）［顧］（他、ま上一）（返り見る）㊀うしろの方へ振り向く。「—都の山の六出花」。㊁既往を思ふ。往事を尋ぬ。㊂自己に反省す。「我身に—」。（省）。㊃なさけをかく。あはれむ。かばふ。「かへりみ給ふ御なさけ」。

かへり-やみ（カエリ）［返病］（名）一旦なほりたる病氣が、さらに惡くなること。やみかへし。ぶりかへし。

かへる（カエル）［蛙］（名）［動］兩棲類中無尾類に屬する動物、幼蟲即ち蝌斗（オタマジヤクシ）のときは、尾を有し水中に住み鰓を以て呼吸すれど、一定の變態を經過すれば、尾を失し肺を生じて空氣を呼吸し、陸上に生活す、四脚よく發達し後趾は長くして跳躍に適す、後趾間に蹼を張り能く水中を游泳す、叫囊を膨脹せしめて聲を發す。

〜**かへる**（カエル）（名）魚の梁、やなす。うへ。

かへ・る（カエル）［返］（自、ら四）㊀もとありし如くになる。なほる。もどる。（回、復）。㊁もとありし所へ立もどる。（歸、還）。㊂再び到る。また來る。㊃退去す。さる。しりぞく。「使者—」。

かへ・る（カエル）［反］（自、ら四）㊀ひるがへる。うらがへる。「秋風に—まくずの裏葉にも」。㊁くつがへる。㊂轉回す。めぐる。

〜**かへ・る**（カエル）［孵］（自、ら四）卵化して子となる。「雞の卵が—」。

〜**かへ・る**（カエル）（自、ら四）熱のために形かはる。

かへる（他）「かふ」の訛。

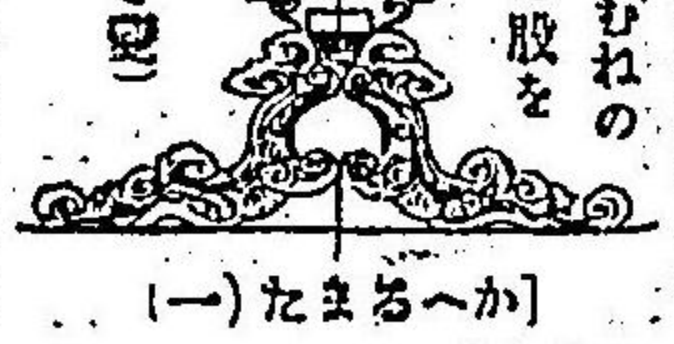
廿**かへる-がへる**（カエルガエル）［返返］（名）かへすがへす。

がへる-ご（ガエル）［蛙子］（名）［動］おたまじやくし。

廿**かへる-さ**（カエル）［歸］（名）歸るとき。かへるみち。

廿**かへる-ば**（カエル）［蛙葉］（名）［植］「おほばこ」の一名。

かへる-また（カエル）［蛙股］（名）㊀屋のむねの破風（ハフ）の下などに付くるもの、蛙の股を擴（ヒロ）げたるさまをなす。㊁かんざしの一種、其足のかへるまたになりたるもの。㊂すべて蛙の股を擴（ヒロ）げたる如きさまをなすものゝ稱。


［かへるまた（一）］

がへん・ず（ガエンズ）［肯］（他、さ變）うけがふ。ひきうく。

かほ（カオ）［顏］（名）㊀目と眉との間。㊁鼻・口・目・眉のある所の總稱。おもて。つら。㊂身の面目。めいよ。「—を立つ」。㊃其座に列する人。「—がそろふ」。〜—**がうれる** 人に立てらるゝ。巾がきく。〜—**にどろをぬる** 恥辱を與ふ。はぢをかゝす。〜—**をうる** 人に立てらるゝやうにす。巾を利かす。〜—**をつぶす** はぢをかゝす。面目を失はす。

〜**か-ぼ**（名）「かははう」の略言。

⌒**が-ほ**［牙保］（名）すあひ。なかゞひ。

—**がほ**（ガオ）［顏］（接尾）其風をなすこと。「物しり—」。「時しり—」。

かほ-いろ（カオ）［顏色］（名）㊀顏のいろあひ。「—がいゝ」。㊁かほつき。かほばせ。「—沈む」。（顏容）。

⌒**か-ほう**［加俸］（名）㊀俸給の增加。㊁本俸給の外に、特別の事情によりて給與せらるゝ俸給。

かほ-おしろい（カオ）［顏白粉］（名）顏に化粧するためのおしろい。えりおしろいの對。

かほ-かたち（カオ）［顏貌］（名）顏のやうす。又、顏と姿と。

⌒**か-ぼく**［家僕］（名）けらい。つかひをとこ。

かほ-さき（カオ）［顏先］（名）㊀かほ。つら。㊁かほのまへ。眼前。「—にさし出す」。

かほ-そ・し（カオ）［細］（形、一）はなはだほそし。よわ〱し。きやしやなり。（孱弱）

〜**かほ-ぞろひ**（カオ）［顏揃］（名）㊀其席に列すべき人數のそろひたること。㊁役者すぐれたるもの又は種類同じきものゝそろひ居ること。

〜**かほ-だし**（カオ）［顏出］（名）㊀挨拶などに行くこと。おとづれとふこと。㊁集會の席に列すること。

カボチヤ［南瓜］（名）㊀（印度支那の Cambodia より傳來せしが故に此名あり）［植］葫蘆科に屬する蔓草、花冠は淺く五裂し、雄蕊は通常三個あり、果實は無毛にして、稍ゝ成熟したるものは橙黃色の肉を有し食用に供せらる。（番南瓜）。㊁カボチヤヤシ

ろ」の略言。～――やらう[南瓜野郎](名) 男子を罵りていふ語。

かほ-つき[顔付](名) ㊀顔のてき。かほかたち。(面容)。㊁かほいろ。かほのやうす。

十かほ-づくり[顔作](名) ㊀顔の化粧(ケシヤウ)。「色どりたる―」。㊁かほかたち。

十かほ-づゑ[顔杖](名) ほゝづゑ。つら杖。

かほ-ど[斯程](名、副) これほど。此くらゐ。

十かほ-どり[顔鳥](名) 美しき鳥。

かほ-ばせ[顔](名) 顔のさま。顔のいろ。かほつき。

(がほ-はん)[牙保犯](名) 【法】強盗又は竊盗などの贓物なるを知りて、其賣買の媒介をなしたる罪。

〔かほ-ぶれ〕[顔觸](名) ㊀「かほみせ」に同じ。㊁其物事の計畫又は發表などに列する連中。

かほ-みせ[顔見世](名) 古昔、芝居にて一座の役者が、總出にて見物人にめみえせしと。今時も田舎芝居にては、初日の興行をいへり。「―狂言」。

かほ-もち[顔持](名) 顔かたちのありさま。

かほ-やく[顔役](名) 勢力あり名望ある親分。(多くは俠肌又は博徒などの仲間にいふ)。

十かほよ-ぐさ[顔佳草](名) 【植】(い)「かきつばた」の異稱。(ろ)「しやくやく」の異稱。

〔かほ-よごし〕[顔汚](名) 面目を損ずると。體面をけがすもの。つらよごし。

十かほよ-どり[顔佳鳥](名) 美しき鳥。

十かほよ-ばな[顔佳花](名) 【植】かきつばた。

かま[蒲](名) 【植】香蒲科に屬する草、水中に生ず、葉は長くして五分内外の幅を有す、夏の頃、七八寸の矛形の花穂を抽く、これをかまぼこといふ、雄花より成る部と雌花より成る部とは相接近す、葉を以て席を織り、雄花の熟せる穂は、これに油を灑(ソソ)ぎて蠟燭に代用し、又、火口(ホクチ)の料となす。(香蒲)。

かま[釜](名) ㊀飯を炊(カシ)ぎ又は湯を沸(ワカ)すに用ふる器、多くは鐵をもて作る、形狀は用ふる所の異なるに從ひ種々なれど、通常庖廚に用ふるものは、鍋の形にして深く、腰につばの如きものあり。まろかなへ。㊁茶道にて湯を沸すに用ふる器の總稱、其形は流派によりて同じからず。㊂汽罐の俗稱。

かま[竈](名) 「かまど」に同じ。

かま[鎌](名) ㊀草木などを刈(カ)るに用ふる具、鐵をもて新月の形につくり、内に向けて刃をつけたるもの。㊁鎌の如く曲りたる刃。「―槍」。㊂「くさりがま」又は「かまやり」の略言。

十かま[囂](名) やかましきと。「あな―」。

かま[蒲](名) 【植】蒲の轉。(香蒲)。――あふぎ[蒲扇](名) 蒲を編みて作りたる扇。

がま[蝦蟇](名) 【動】(い)無尾類中尖指類に屬する兩棲動物、舌の前端は口底に附着す、指趾の末端尖るを常とす。(ろ)大いなる蛙の異稱。「―の妖術」。

かま-あげ-うどん[釜揚饂飩](名) 釜よりあげ立ての饂飩を、熱湯を入れたる桶に盛りたるもの。

かま-いたち[鎌鼬](名) 旋風などの際に、空氣中に眞空を生じ、人體これに觸るゝときは、鎌にてきりたる如くに、皮膚の裂け破れて血を出すと、古來、一種の鼬の如き妖魔が、空中にありてこれを行ふと信じたるより此名あり。

かま-いり[釜煎](名) 天正・慶長の頃に、行はれたる刑罰の極めて慘酷なるものにして、罪人を熱湯の沸騰せる釜に入れこれを煮殺せしと。

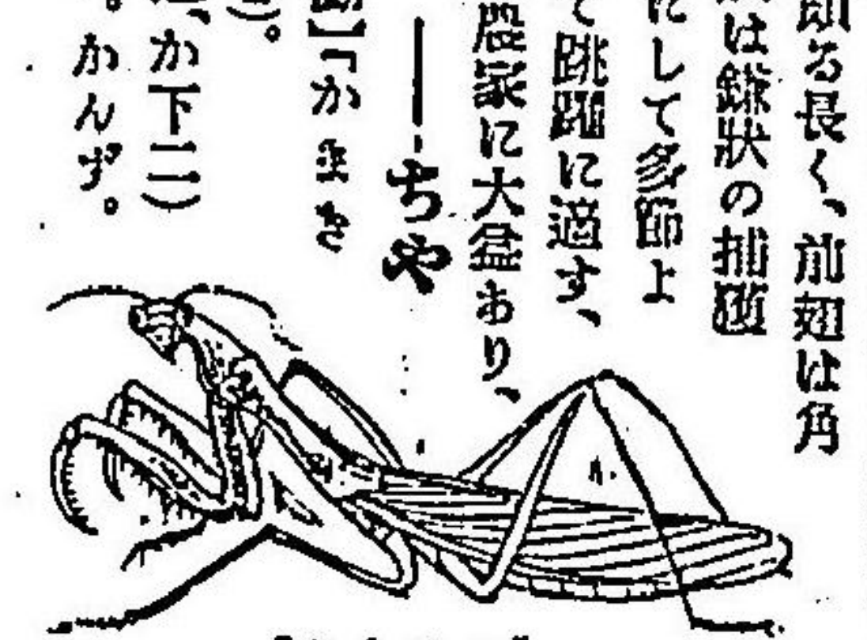
〔かま-うで〕[釜茹](名) 「かまゆで」の訛。

〔かま-き〕[叺](名) 「かます」に同じ。

〔かま-きすご〕[鎌鱚子](名) 【動】かますの小さきものゝ稱。

〔かま-ぎっちやう〕(名) 【動】(い)「かまきり」の一名。(東京地方の方言)。(ろ)「とかげ」の一名。(奥羽地方の方言)。

かま-きり[鎌切](名) 【動】直翅類中蟷螂科に屬する昆蟲の總稱、前胸頗る長く、前翅は角質なり、肢は強く、前肢は鎌狀の捕獲肢に變し、觸角は絲狀にして多節より成る、後翅は長くして跳躍に適す、多くは皆な害蟲を食し農家に大益あり、種類少からず。(蟷螂)。――ちやうらい(名) 【動】「かまきり」の一名。(肥前の方言)。


〔かまきり〕

十かま-く(他、か下二) (氣負の義) ㊀越闘す。かんず。㊁拘泥す。かゝはる。

がま-ぐち[蝦蟇口](名) 巾着の一種、其開きたるさまの蝦蟇(ガマ)の口に似たるよりいふ。

かま-くび[鎌首](名) 鎌の如き形の首。蛇などの擡(モタ)げたる首の形。(蛇起頭)。

かまくら-えび[鎌倉蝦](名) 【動】「いせえび」の一名、相模國鎌倉沖の産なる故に此名あり。

かまくら-くわんりやう[鎌倉管領](名) 足利時代に、關東の鎭定として鎌倉に置きし管領。

かまくら-ござん[鎌倉五山](名) 鎌倉にある禪宗の五大寺、即ち、建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺の稱。

かまくら-じだい[鎌倉時代](名) 治承四年源頼朝が幕府を鎌倉に開きしより、元弘三年北條高時の滅亡に至るまで、凡そ百五十年間の稱。

かまくら-ばくふ[鎌倉幕府](名) 源頼朝によりて鎌倉に開かれたる武家の政府、鎌倉時代の政權はこゝに歸したり。

かまくら-ぶし[鎌倉武士](名) 「かまくらむしや」に同じ。「―は色好み」。

かまくら-ぼり[鎌倉彫](名) 鎌倉時代の彫刻の一種の特質を備へ、牡丹(ボタン)・梅・菱・紗綾形(サヤガタ)・雲形(クモガタ)などを彫り、黑漆をもて塗りたる上に、朱漆などをもて彩(イロド)れるもの。

かまくら-むしや[鎌倉武者](名) ㊀鎌倉時代の武者。㊁關東の武者。

〔かま-け〕[蒲笥、叺](名) 「かます」に同じ。

かま-ける(他) 「かまく」の訛。

かま-ささげ[鎌豇豆](名) 【植】「いんげんまめ」の一名。

かま-し[釜師](名) 釜を鑄る職人。

かま-しき[釜敷](名) 釜・鐵瓶などを置くとき其下に敷くもの、多くは藁又は藤蔓などをもて、輪の形につくる。

十かま-しし[毳鹿](名) 【動】「かもしか」に同じ。

かま-す[魳](名) 【動】硬鰭類中かます科に屬する魚、體は圓柱狀をなし鱗は圓形をなす、口濶(ヒロ)し、背部蒼白色にして腹部白色、體長一尺許に達す、我國沿岸到る處に多少これを産する近海魚なり。――ご[魳子](名) 【動】かますの幼魚。

かま-す[叺](名) (蒲簀の義) ㊀穀物杯を入るゝに用ふる藁むしろの袋。かまけ。かまき。(席囊)。㊁煙草入の煙草を入るゝもの。――ど[叺兒](名) 叺に包みて輸送する小魚、攝津國兵庫より多く出す。

がま-ずみ(名) 【植】忍冬科に屬する木、葉は倒卵形又は圓狀にして短尖頭を有す、夏の頃、五瓣の小白花を開く、花冠は整齊にして果實は核果なり、木材は種々の用に供せらる。(莢蒾)。

かまち[輔](名) ㊀頰の上下の骨。かはち。はゝぼね。つらがまち。

かまち[框](名) ㊀車の兩脇にあてたる木。㊁床の端に亙す横木。㊂戸障子などの周圍のわく。(框)。

かま-つか[鎌柄](名) ㊀鎌の柄。㊁【植】「うしころし」の一名、其材を多く鎌の柄とするより名づく。㊂【動】一種の小魚、形だぼはぜに似て、頭四角に尖り鱗細かし、常に水底に沈み口を張り沙を吹く。(鈇)。

〔かまつ-ぱらひ〕[釜拂](名) 「かまばらひ」の訛。

かま-ど[竈](名) (釜處の義) ㊀土石をもて築き、其上に鍋又は釜などをかけて火を焚くもの、今時は、鐵などにてつくりたるものあり。くど。へっつひ。㊁戸數割などの賦課にて、家族の生活の殊別に就きての稱、例へば、一軒の家にて其生活を殊別にするもの二組あれば、これを二かまどといふ。

かま-どめ[鎌止](名) (鎌を入るゝを禁ずる義) 山野の草木を刈るを禁ずると。

十かま-とり[釜取](名) 「おいかけ」の一名。

十かま-な[鎌菜](名) 【植】「ひめあざみ」の古名。

かま-なり[釜鳴](名) 釜の不時に音すると、俗に、これを以て吉凶をうらなふ。

かま-の-かみ[竈神](名) ㊀かまどを守護する神。荒神。㊁妻の賤稱。

かま-はうざうゐんりう[鎌寶藏院流](名) 寶藏院流の槍術の一名、其流の鎌槍を使用するよりいふ。

がま-はばき[蒲脛巾](名) 蒲の葉にて編みたる「はゞき」。

かま-ばらひ[釜拂](名) 男の巫(ミコ)。

かまひ[構](名) ㊀かまふと。かゝはると。㊁追放に處して其地に入るを得しめざると。「江戸―」。

かまびす-し[喧](形、二) 言煩(ワヅ)はし。聲囂(ド)はし、やかまし、かしがまし、さわがし。(喧)。

かまひ-て[構手](名) かまふ人。相手になる人。

かま-ふ[構](自、は四) ㊀關係す。拘泥す。かゝはる。㊁結ばる。連なる。「兵かまひて離れず」。

かま-ふ[構](他、は四) ㊀追放の刑に處す。㊁相手になる。㊂からかふ。なぶる。

かま-ふ[構](他、は下二) ㊀屋宇を架(カ)けわたす。㊁組み立てつくる。「家を―」。㊂附會す。讒言す。つけあはす。㊃結ぶ。連ぬ。「兵を―」。㊄合す。「男女精を―」。あひつくらふ。㊅待ち設く。まちうく。㊆仕度す。準備す。㊇武器を持ちて待つ、態度を定めて對す。「槍を―」。

かま-ぶろ[竈風呂](名) ごゑもんぶろ。

かまへ[構](名) ㊀用意。準備。仕度。㊁こしらへ方。つくりかた。くみたて。㊂設けゐると。備へあると。「門―の家」。㊃つけあはせ。こしらへごと。附會。讒言。㊄劍術・槍術などにて、武器の持ち方、又、柔術などにて身のそなへ。――て[構](副) ㊀必ず。決して。「―心配し給ふな」。――る[構](他) 「かまふ」の訛。

かま-ぼこ[蒲鉾](名) ㊀蒲の花穂。ほ。㊁魚類の肉を叩(タタ)き剉(キザ)みてすり碎き、これを固めて燒きたるもの、昔時は、おもに竹串を心とし圓長形に塗り、其形蒲の花穂に似たりしより此名起りたれど、近時は、多くこれを長方形の薄板の上に低き穹窿形に盛る、これをいたつきかまぼこともいふ。(蒲梃、肉餅、魚團)。㊂「かまぼこがた」の略言。――がた[蒲鉾形](名) いたつきかまぼこの如く低き穹窿形をなすものゝ稱。――ごや[蒲鉾小屋](名) 竹とむしろとにて圓く低く作りたる小屋にして、乞食などの住むもの、かまぼこ形なるより此名あり。

――**たが**［蒲鉾箍］（名）眞鍮（シンチユウ）又は銅などのたがの中央はりいでゝ、緣の薄くなりたるもの。

――**なり**［蒲鉾形］（名）「かまぼこがた」に同じ。

†**かま-まろ**［鎌麻呂］（名）「がま」に同じ。

がま-むしろ［蒲席］（名）蒲にて編みたるむしろ。又、ふとゐにて編みたるむしろ。

†**かま-め**［鷗］（名）【動】「かもめ」に同じ。

かま-や［釜屋］（名）酒造家にて釜を炊く男。

かま-やり［鎌槍］（名）刃に枝ある槍、其兩方にあるを兩鎌といひ、片方にのみあるを片鎌といふ。

かま-ゆで［釜茹］（名）釜にて物をにること。

†**かまり**［伏兵］（名）ふせぜい。

（**が-まん**［我慢］（名）㊀【佛】我（ガ）に執着する邪見。㊁自ら傲り人を凌ぐこと。㊂我意を張りとほすこと。㊃こらへ忍ぶこと、忍耐。

かみ［上］（名）㊀高き所。高き位。うへ。㊁天子の尊稱。（主に漢文に用ふ）。「―聞きて笑ひて曰く」。㊂官廳又は政府。「―のおふれ」。㊃將軍又は諸侯。「―の御通り」。㊄位高き人又は年長けたる人。「―は下を憐み」。㊅はじめ。もと。元始。㊆むかし。いにしへ。古昔。㊇宮城ある地。「―方」。㊈和歌の上の句。㊉身體の腰より上の部分。⑪衣服の腰より上をおほふ部分。⑫古昔の官制にて長官の稱、諸官各其文字を異にすれど訓皆な同じ、即ち、神祇官にては伯をいひ、省にては卿をいひ、彈正臺にては尹をいひ、使にて長官をいひ、職にては大夫をいひ、寮にては頭をいひ、司にては正をいひ、兵衛府にては督をいひ、內侍司にては尚侍をいひ、國にては守をいへり。

かみ［神］（名）（上の義）㊀冥々の間に存在して、妙絕不可思議の能力を有し、人類に禍福威を降すと思惟せらる、靈、即ち、宗敎的思想上歸依若しくは畏怖せらるゝ客體。㊁神武天皇の建國以前に、我國土を統治したまひし方の尊稱。「千早振る―代」。㊂寺院に供養せらるゝ佛に對して、神社に奉祀せられある靈の稱。「―や佛に見離され」。㊃「キリスト」敎にて、全智全能にして宇宙を創造し且支配する惟一絕對の主宰者。上帝。天帝。㊄神祇式に於ける亡者の靈魂。㊅人智を以て量り得られぬ物事。

かみ［髮］（名）（上毛の義）㊀頭部に生ずる毛髮。あたまのけ。とうはつ。㊁頭部の毛髮を結（ユ）ひたる形。「―がよくできた」。

かみ［紙］（名）書畫を認め又は物を包み、其他種々の用に供する薄片、其種類によりて原料を異にすれど、おもに纖維素より成る、其製造法は原料に苛性曹達若しくは石灰を加へて煮沸し、更に舂（ツ）き碎きて軟塊とし、これに樹脂又は糊等を加へ抄（ス）きて製す、洋紙は襤褸・木材・藁等を原料とし、日本紙は楮・三椏（ミツマタ）・雁皮等を原料とす。

（**か-み**［加味］（名）他物を交へて味をつけくはふること。

（**か-み**［佳味］（名）旨き味。美味。

†**かみ-あがり**［神上］（名）崩御又は薨去。かんあがり。（殂落）。

†**かみ-あげ**［神上］（名）かみおろしゝたる神を、祭事はて、後、もとへ歸したてまつること。

かみ-あげ［髮上］（名）㊀髮をあげ結ぶこと。㊁†古昔、女子がおとなになりて、切りはなち垂れ下げたる髮を取り上げて結びしこと。㊂髮を結ぶ人。†――うねめ［髮上采女］（名）古昔、內侍の髮あげをつとめしもの。

†**かみ-あそび**［神遊］（名）音樂にあはせて歌舞し、神事に奏するもの。かぐら。（神樂）。

かみ-あひ［嚙合］（名）㊀かみあふこと。㊁けんくわ。つかみあひ。

かみ-あ-ふ（はひふふへへ）［嚙合］（自、は四）獸類など互に嚙みあらそふ。

かみ-いだし［髮出］（名）髮の毛のはさきを出す所の（義）兜（カブト）のうけばりのうしろにある穴。

かみ-いちだん-くわつよう［上一段活用］（名）【文法】五十音圖の伊列の音にのみ活用する動詞の變化、例へば、「い・い・いる・いる・いれ・いよ」「き・き・きる・きる・きれ・きよ」等の如きこれなり。

かみ-いれ［紙入］（名）㊀「はながみいれ」の略言。㊁巾着の一種、紙幣其他すべて薄き物など入れて、これを懷中するもの。（夾囊）。

かみ-うた［神歌］（名）神に奉る歌。

かみ-うつし［紙寫］（名）寫眞にて、紙に映像をうつしとること。又、其寫眞。硝子寫の對。（紙撮）。

かみ-おき［髮置］（名）兒童の頭髮を延ばし初むる時の儀式、くしおきの粉を頂に付け白髮を被らせて祝ふ、男女とも古昔は、三歲の霜月十五日を吉辰として行ひしが、今時は、陽曆の十一月十五日に行ふ。

†**かみ-おほ-ぢ**［上大父］（名）曾祖の親。高祖。

かみ-おろし［神降］（名）㊀かんなぎなどが、神靈を身に迎（ヨ）せんとて祈ること。㊁かんなぎなどが、神靈を身に迎（ヨ）せて其託宣をのべいふこと。㊂祭壇などを設けて、神靈を招き奉ること。㊃和歌の第一番の五文字の稱。

かみ-がかり［神憑］（名）神靈が人身にのりうつること。

かみ-がかり［上掛］（名）謠曲にて觀世・寶生兩派の稱。下掛の對。

かみ-がき［神垣］（名）㊀神社の周圍のかきね。みづがき。たまがき。（神籬）。㊁轉じて、神社。

かみ-がくし［神隱］（名）童子など、俄に行衞知れずなること、古來魔神の所爲といひ傳へてかくいふ。

かみ-かざり［髮飾］（名）㊀髮を理（ヲサ）め櫛又は笄などを以て飾ること。㊁髮のかざりに用ふる具、即ち、櫛・笄などの類。

かみ-かぜ［神風］（名）神の威力によりて起るといふ風。かむかぜ。――の［神風］（枕）「伊勢」に冠らする詞。

かみ-がた［上方］（名）維新以前迄、京都に皇居の在らせられしため、他國より畿內邊を指して呼ぶ稱。――うた［上方唄］（名）上方に流行する俗曲。〔――ざいろく［上方才六］（名）上方の人をのゝしりていふ語。〔――ぜいろく［上方贅六］（名）「かみがたさいろく」の訛。

†**かみ-かた-し**（く・し・き・けれ）［髮固］（形、二）すこやかなり。

かみ-かたち［髮容］（名）㊀髮を取りあげたる樣子・結びたる髮の工合。㊁髮の結（ユ）ひ樣によりて、其容貌のかはりて見ゆること。

かみ-ガッパ［紙合羽］（名）桐油紙にて造りたる「カッパ」、雨を防ぐために、物に被らせ又は身にまとふもの。

かみ-かは［紙革］（名）紙にてなめしがはの如くにつくりたるもの。

かみ-かへ-す（さしすすせせ）［嚙反］（他、さ四）牛又は羊など、一旦かみて嚥（ノ）み下したるものを再び吐き出して食ふ。ねりかむ。

〔**がみ-がみ**（名、副）嚙みつくが如く、言葉きびしく責めたつるさまにいふ語。「―いふ」。

かみ-からし［髮枯］（名）こはくしてちゞれ、普通のものとは全く違ひたる髮。

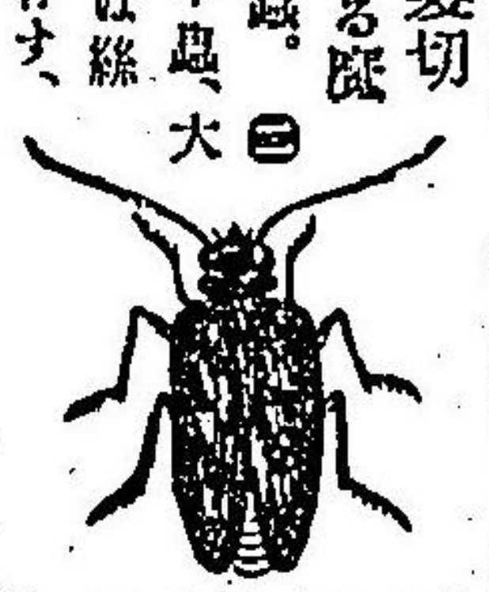
†**かみ-き-づき**［神來月］（名）陰曆十一月の異稱。

かみ-きぬ［紙衣］（名）かみこ。

かみ-ぎは［髮際］（名）髮の生（ハ）えたる際（キハ）。はえぎは。

かみ-きり［紙切］（名）「かみきりこがたな」の略言。――こがたな［紙切小刀］（名）紙を切る料の小刀。

かみ-きり［髮切］（名）㊀髮の毛のいつとなく切れ落つる一種の病。㊁髮を切ること。㊂「かみきりむし」の略言。――むし［髮切蟲］（名）㊀髮の毛を切る魔力あるといふ想像上の蟲。㊁【動】鞘翅類に屬する甲蟲、大形にして、鞭狀若しくは絲狀をなせる長き觸角を有す、樹幹に孔を穿ち大害をなす。（天牛、剪頭蟲）。


［かみきりむし(二)］

かみ-き-る（らりるるれれ）［嚙切］（他、ら四）嚙みて斷つ。

かみ-くづ［紙屑］（名）すたりものになりたる紙片。くづ。――かひ［紙屑買］（名）紙くづを買ひあつめて、活計をたつる人。くづや。――ひろひ［紙屑拾］（名）紙くづ其他落ちたる廢物を拾ひあつめて歩く賤業者。

†**かみ-ぐに**［神國］（名）㊀日本國の異稱。㊁「かみごほり」に同し。

†**かみ-くら**［上座］（名）㊀貴顯の座席。㊁席のうちにて最も上位。かみざ。上席。

かみ-こ［紙子］（名）かみにて仕立てたる衣服、もと律僧これを用ひたり、女人の手を觸れずして仕立てらるゝ故といふ。かみぎぬ。（紙袍）。――うり［紙子賣］（名）かみこを賣り歩く商人。――がみ［紙子紙］（名）白紙をつぎ合はせて柹しぶを引き、揉（モ）みて柔かにしたるもの。――づきん［紙子頭巾］（名）かみにてこしらへたる頭巾。

かみ-ごと［神言］（名）㊀神の託宣。おつげ。㊁神を祭るときの祝詞。のりと。

かみ-ごと［神事］（名）㊀神の祭典。まつりごと。神事。祭事。㊁神のしわざ。奇怪不可思議なる現象。

かみ-ごほり［神郡］（名）（神の居らるゝ郡の義）伊勢國飯野・多氣・度會の三郡の稱。かみぐに。

かみ-ざ［上座］（名）かみくら。上位。上席。

かみ-ざいく［紙細工］（名）㊀紙にて作れる細工物。㊁紙ざいくを業とする人。

〔**かみ-さかやき**［髮月代］（名）昔時、月代（サカヤキ）を剃（ソ）りて髮を結（ユ）ひしこと。（梳剃）。

かみ-さげ-むし［紙下蟲］（名）【動】くそ蠅の仔蟲の一名、俗に、四月八日の朝、あま茶にてすりたる墨汁にて、呪文を紙にしるし、これを厠に貼（ハ）れば、上にのぼり來らずといひ傳ふるより此名あり。

かみ-さ-ぶ（びびぶぶるぶれびよ）［神進］（自、は上二）かう〳〵としてものさびしくあり。すごく尊く見ゆ。（神閑）。

かみ-さま［神樣］（名）神の尊稱。

かみ-さま［上樣］（名）公方の御臺所など高貴の婦人の敬稱、公方は上（ウヘ）樣といひ、相並べて兩上（ウヘ）樣ともいふ。

†**かみ-さり-づき**［神去月］（名）「かみなづき」の一名。

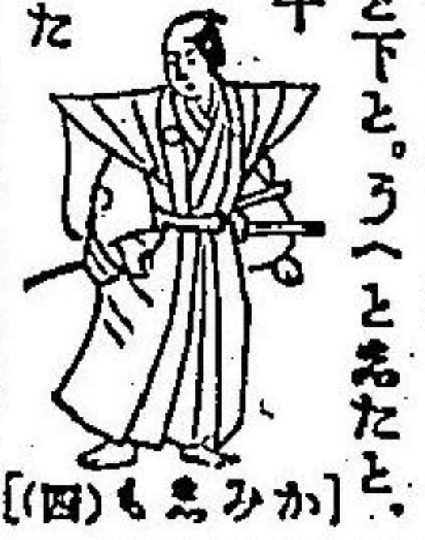
かみ-さん［上樣］（名）中流以下の妻の稱。おかみさん。「其文里さんの―の心にもなつて見や」。

†**かみ-しま**［神島］（名）蓬萊山の異稱。

かみ-し-む（めめむむるむれめよ）［嚙緊］（他、ま下二）㊀力を入れて嚙む。くひしばる。㊁よくあぢはふ。玩味す。

〔**かみ-しめる**［嚙緊］（他）「かみしむ」の訛。

かみ-しも［上下］（名）㊀上と下と。うへとしたと。㊁袍と裳と。㊂直垂（ヒタヽレ）・水干（スヰカン）又は素袍（スハウ）などと袴とを合はせての稱。㊃肩衣（カタギヌ）と袴と上も下も同じ色に染めたるものにして、德川時代の主なる禮服。㊄身體の腰より上と腰より下と（按摩の語）。「按摩―八百文」。


［かみしも(四)］

かみ-しやうじ（シヨージ）［紙障子］（名）紙張りの障子。

かみ-すき［紙漉］（名）㊀紙を漉くわざ。㊁紙を漉く職業の人。――**ぶね**［紙漉槽］（名）紙を漉く原料を煮沸し更に碎砕し、これを溶解したる水を貯ふる大いなる水槽。

かみ-すぢ［髪筋］（名）㊀髪を梳（ケヅ）りたる櫛あと。㊁髪の毛。けすぢ。（髪條）。

〜**かみ-すり**［剃髪］（名）毛髪を剃るヿ、又、其ための刀。かみそり。（剃刀）。

かみ-ぜに［紙錢］（名）紙にて錢がたをこしらへ祭事に神に奉るもの。

艹**かみ-そぎ**［髪削］（名）古昔の小兒が、髪おきの式を經たる後、齢に應じて次第に髪をそぎて行きしと、びんそぎ・ふかそぎ等の別あり。

かみ-そり［剃刀］（名）㊀（髪剃の轉）髪を剃るための小さき刃物、はがねのみにて打ちきたひ、刃は薄くきっさき無く、平面なる造り方のもの。かみすり。そり。㊁才機鋭く果斷に富み速かに事務を處理するさまをたとへいふ語。切りまはしの敏（スルド）きど。「―大臣」。――**がひ**（イーガ）［剃刀貝］（名）【動】（い）「からすがひ」の一名。（ろ）「たからがひ」の一名。――**かぶれ**［剃刀感］（名）頭髪をそりたる後に生ぜる小さき腫物。――**ど**［剃刀砥］（名）剃刀を研（ト）ぐための砥石。

かみ-だ［神田］（名）神社に屬する田。

かみ-だいどころ［上臺所］（名）高家にて奥むきの食物を調ふるだいどころ。

かみ-だな［神棚］（名）家のうちに神の靈符などを祭りおく棚。（神架）。

かみ-だのみ［神頼］（名）神にいのりて其加護をこふと。「苦しいときの―」。

かみ-たれ［髪垂］（名）子供の生れて六日目に、うぶ髪を剃るヿ。

艹**かみ-ぢ**［神路］（名）神の通ひたまふといふ路。

かみ-ぢよちゆう［上女中］（名）華族又は富豪の女中の主人の側近く事ふるもの。

艹**かみ-づかさ**［神祇官］（名）古昔、神祇の祭事其他神祇に關係したる事務をつかさどりし所。太政官の上に位せり。ぢんぎくわん。――**の-かみ**［神祇伯］（名）古昔のかみづかさの長官。神祇に關する事務を總理せり、相當は從四位の下。後世にては、二位・三位まで登用せられたり。

かみ-つ・く（かきくけけ）［嚙附］（他、か四）食ひつく。（嚙着）。

〜**がみ-つ・く**（かきくけけ）（他、か四）がみ〳〵いふ。

かみ-つけあひ（イーア）［紙附合］（名）一種の遊戯、額に紙を唾などにて附け、目のあたりまで下げたるを、息を上へ吹きて落すもの。

かみ-づつみ［紙包］（名）紙をもて包みたるもの。紙のつゝみ。

かみ-づ・る（らりるるれれ）（自、ら四）のぼせあがる。

カミツレ（名）【植】「カミルレ」の訛。

かみ-て［上手］（名）㊀瓜網の左方の綱。㊁上の方。

かみ-でっぽう（ウーポ）［紙鐵砲］（名）小兒の玩弄品、女竹の節なき處を適當の長さに切りて筒とし、其兩端に濕（ヌ）らしたる紙をまるめたる丸を込め、細長きものにて一方の丸を筒内に押し入るれば、空氣の壓搾作用により、他方の丸は音をなして飛ぶ。

艹**かみ-とき**［神解］（名）かみとけ。らくらい。

艹**かみ-とけ**［神解］（名）雷の落つるヿ。らくらい。

かみ-どこ［髪床］（名）かみゆひどこ。

かみ-な（名）【動】「がうな」の古名。

かみ-なが［髪長］（名）㊀僧の異稱。（齋宮の忌詞）。㊁婦人の稱。「―の妙」。

かみ-ながら［神隨］（名）「かむながら」に同じ。「じ。

かみ-なし-づき［神無月］（名）「かみなづき」に同じ。

かみ-な-づき［神無月］（名）（此月には、八百萬の神々が出雲の大社に集りたまふとの俗傳により名づくといひ、又、かみなりなき月の義なりともいふ）陰暦十月の異稱。

艹**かみ-なは**（ワーナ）［紙繩］（名）こより。くわんぜより。

艹**かみ-なら・ふ**（はひふふへへ）［神習］（他、は四）神の道に隨ふ。「―わざ」。

かみ-なり［雷鳴］（名）㊀空中に於ける電氣の放電により生ずる音響、古昔は、一種の鬼神ありて、これを起すと誤想せしより此名あり。なるかみ。いかづち。㊁（轉）やかましく責むるヿ。がみ〳〵言ふヿ。「―親父」。㊂（轉）物のつくりの堅固なるにいふ語。「―おこし」。艹――**の-ぢん**［雷陣］（名）古昔、雷鳴三度すれば、警衛のために、近衛の大將及次將は弓箭を帶して御殿の孫廂に伺候し、將監以下は皆な簑笠を着け南殿の前庭に伺候せしと。――**の-つぼ**［雷壺］（名）古昔、禁中に造られし五舍の一、凝花舍の北にあたれり、即ち、瑞芳舍の別名。――**ぼし**［雷干］（名）あをうりを輪に長くつなぎて切り、鹽おしゝて日に干して食するもの、其輪になりて延びたるさまの、繪に畫きたる雷公の太鼓に似たるより名づく。艹――**まさかり**［雷斧］（名）古昔、驟雨雷鳴のときなどに、土中に埋もれたる石器時代の遺物なる石斧が、露出したるものゝ稱、其珍しさに、これを雷公の持物なりと誤想せしより此名あり、當時は、たゞ石斧のみにあらず、他の石器時代の遺物もまた露出せるもの多かりしより、雷楔・雷環・雷珠・雷鎖・雷鑽等の名稱もありたり。――**よけ**［雷除］（名）㊀雷の落つるを除（ヨ）くるヿ。㊁落雷を避くるための神佛のお札。㊂落雷の害をふせぐために、屋上に設置しある柱。避雷柱。（避雷針）。

かみにだん-くわつよう［上二段活用］（名）［文法］五十音圖の伊列及宇列の音にのみ活用する動詞の變化、例へば、「き・き・く・くる・くれ・きよ」「し・し・す・する・すれ・しよ」等の如きこれなり。

かみ-の-き［紙木］（名）【植】「かうぞ」の一名、其樹皮を紙の原料となすより此名あり。

かみ-の-く［上句］（名）和歌にて、はじめの五七五の三句をいふ。しものくの對。

かみ-の-け［髪毛］（名）かみ。頭髪。

かみ-の-け［神氣］（名）かみのたゝり。

かみ-の-つかひ（カイーツ）［神使］（名）神に附屬して、其使となるといひ傳ふるもの、所謂、伊勢の狼・日吉の猿・稻荷の狐・八幡の鳩・春日の鹿・熊野の烏・大黑天の鼠・宇賀神の蛇の類の如きもの。

艹**かみ-の-と**［上戸］（名）清涼殿の殿上より東方へ出る戸口。

かみ-の-みち［神道］（名）㊀かむながらのみち。㊁其道は神より出たりとなす基督教の類。

艹**かみ-の-みむろ**［神御室］（名）神社に同じ。

かみ-の-よ［神世］（名）かみよ。

かみ-の-をしへ（シオ）［神教］（名）㊀かみのみち。㊁かみのおつげ。神託。

かみ-ばさみ［紙鋏］（名）紙をきる料のはさみ。

かみ-ばな［紙花］（名）ゑら紙を捻（ヒネ）りなどして與へ、後に與ふる纒頭（ハナ）のしるしとするもの。

艹**かみ-びと**［神人］（名）神に仕ふる人。かんぬし。

かみ-びな［紙雛］（名）紙にてつくりたる雛人形。

かみ-びねり［紙捻］（名）㊀こより。㊁錢など包みたる紙を捻りたるもの。

かみ-びひな（ナーイ）［紙雛］（名）「かみびな」に同じ。

かみ-ぶくろ［紙袋］（名）紙にてつくりたる袋。

かみ-ぶすま［紙襖］（名）カラかみ。ふすま。

かみ-まつり［神祭］（名）神を祭るヿ。

かみ-みくじ［紙御鬮］（名）神佛のみくじの紙に占文を記したるもの。

かみ-む［上無］（名）十二律の一。

かみ-むかへ（エーカ）［神迎］（名）陰暦十月の晦日に、出雲の大社にあつまりたまひし神々が、おの〳〵歸りたまふを迎ふるといふ意の祭儀。

かみ-むき［上向］（名）官府に關係するヿ。おもてざた。

かみ-や［紙屋］（名）㊀紙を漉（ス）く家。又、其人。㊁紙を賣る家。又、其人。

（**か-みやう**（ヨウ）［家名］（名）一家の名目。かめい。

かみや-がみ［紙屋紙］（名）古昔、京都の紙屋川邊にて、御所の反古を漉（ス）きかへしたる紙、當時はこれを官用としたり。かうやがみ。（宿紙）。

かみ-やしき［上屋敷］（名）古昔、諸國の大名が、江戸市中に設けて、自身の常の住居となしゝ屋敷。中やしき又は下やしきの對。（甲第）。

艹**かみ-やっこ**［神奴］（名）「かみびと」に同じ。

艹**かみ-やま**［神山］（名）神の住むといふ山。

かみ-ゆひ（イーユ）［髪結］（名）㊀髪を結（ユ）ふヿ。㊁髪を結（ユ）ふ業の人。――**どこ**［髪結床］（名）髪結ひを業とする店。又、轉じて理髪する所。

かみ-よ［神代］（名）（神の統治したまひし御代の義）開闢以來、神武天皇の御代までの時代。「千早振る―」。（神世）。

かみ-よし［神吉］（名）陰暦にて、神又は先祖など祭りてよしといふ吉日。

艹**かみ-より-いた**［神憑板］（名）古昔、神を呼ぶために、琴の板とて鳴らしゝ杉の板。

艹**か-みら**［香韮］（名）【植】韮の古名

カミルレ（名）（「オランダ」語 Kamille）【植】菊科に屬する草、外國より傳へしものにして藥用とす。

かみ-わ・く（けけくくるくれけよ）［嚙分］（他、か下二）㊀食物をかみて玩味す。あぢはふ。㊁物事を細かに分別し思考す。かんがへはかる。（咀嚼）。

かみ-わけ［嚙分］（名）かみわくるヿ。〜――**る**［嚙分］（他）「かみわく」の訛。

かみ-わざ［神事］（名）㊀神のなしたまふ不可思議の事。かみごと。かんわざ。㊁まつり。神事。

〜**かみ-わたし**［神渡］（名）（十月は神々出雲の大社に會するにつき、其神を渡らせ送るために吹く風の義）陰暦、十月頃に吹く西風の稱。

かみ-ゑ［紙繪］（名）紙に描（エガ）きたる繪。

かみ-をんな［上女］（名）㊀かみがたの女。京都邊の女。㊁かみぢよちゆう。

（**か-みん**［下民］（名）まんみん。しも〴〵。

艹**かむ**［神］（名）神の轉。「―風」「―たち」。

（**か-む**［家務］（名）一家の事務。

艹**か・む**（まみむむめめ）［醸］（他、ま四）かもす。

か・む（まみむむめめ）［嚙］（他、ま四）㊀上齒と下齒とを相礫（キシ）らす。「齒を―」。（切齒）。㊁上下の齒にて物をはさみ碎く。㊂齒にて物を傷つく。かじる。

艹**か・む**（まみむむめめ）［擤］（他、ま四）鼻の中の鼻液をぬぐふ。

艹**かむ-いまけ**［神今食］（名）ぢんこんじき。

艹**かむ-がかり**［神懸］（名）おつげ。神託。託宣。

かむ-かぜ［神風］（名）「かみかぜ」に同じ。――**の**［神風］（枕）「伊勢」に冠らする詞。

艹**かむ-がら**（名）「かむながら」に同じ。

艹**かむ-が・ふ**（へへふふるふれへよ）［考］（他、は下二）「かんがふ」に同じ。

艹**かむ-さ・る**（らりるるれれ）［神去］（自、ら四）かみさる。

〜**が-むしや**［我武者］（名）むちやくちやに物事をふるまふヿ。又、其人。

艹**かむ-たち**［麹］（名）（頭立の轉）「かうぢ」の古名。

廿**かむ・だち**[神館]（名）古昔、神殿に附屬し神事を行ひし所。かうだち。

廿**かむ・ち**[麹]（名）かむたち。

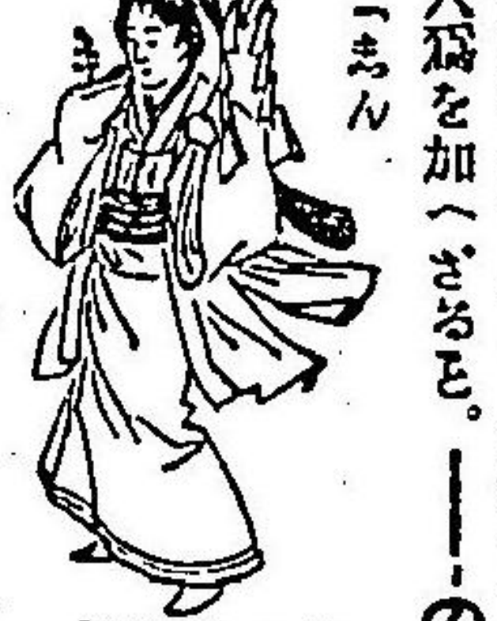
廿**かむ・ぢから**[神税]（名）神に奉る稻。

廿**かむ・つど・ふ**（ウツト）[神集]（自、は四）神々あつまりたまふ。

廿**かむ・づま・る**（らりるるれれ）[神鎭]（自、ら四）かみしづまりたまふ。かみとゞまりたまふ。

廿**かむ・ながら**[神隨]（名）神の徳を具(ソナ)へたること、神の心のまゝにて人爲を加へざること。――**の・みち**[神隨道]（名）「しんたう」(神道)に同じ。

かむ・なぎ[巫]（名）神につき仕へ神樂を奏し神おろしなどを行ふもの、男をかむなぎといひ女をめかむなぎ又はみこといふ。(覡)。


[かむなぎ]

かむ・なめ・まつり[神嘗祭]（名）伊勢の大神宮の祭典、もとは、陰曆九月十一日に敕使に幣を授け、十六日に度會の宮(外宮)を祭り十七日に皇大神宮(内宮)を祭られたりしが、明治以後は改めて、十月十七日と定められたり。しんじやうさい。

廿**かむ・はた**[綺]（名）(神機の義)古代のあやもりもの、錦に似て薄し。

廿**かむ・ほぎ**[神祝]（名）神に奉る祝詞、のりと。

廿**かむ・ほざき**[神祝]（名）前條に同じ。

かむ・みぞ[神御衣]（名）神に奉る御衣。――**まつり**[神御衣祭]（名）五月十四日と十月十四日とに、一年二度伊勢の神宮に御衣を奉る祭事。

廿**かむ・やらひ**（クヰヤ）[神逐]（名）神の逐らるゝこと。神の放逐したまふこと。

かむり[冠]（名）「かんむり」に同じ。――**だな**[冠棚]（名）冠をのするたな。みづしだなの類。――**づけ**[冠附]（名）俳諧にて、初句を出題して次ぎの二句を附くること。

かむ・る（らりるるれれ）[冠]（他、ら四）かうむる。かぶる。

かむろ[禿]（名）「かぶろ」に同じ。

廿**かむろぎ**[神漏岐]（名）祖先の男神の總稱。

廿**かむろみ**[神漏美]（名）祖先の女神の總稱。

廿**かむ・わざ**[神事]（名）かみわざ。又、まつり。

かめ[龜]（名）【動】爬蟲類に屬する動物、體軀は盤狀をなし、腹背に甲ありて互に體側に於て癒着し、頭尾及四足の出入し得る孔あるのみ、甲の表面は皮膚の露出せる部分に、角質の小鱗あり、性遲鈍にして長く饑渴に堪ふ、多くは熱帶・温帶の水に棲み、穴を掘りて産卵す、いしがめ・すっぽん・あをうみがめ・たいまい等の種類あり。きべつるゐの總稱。(龜)。

かめ[瓶]（名）㊀流動物を盛る器、普通は陶器なりとす。㊁「へいし」(瓶子)に同じ。

〔**カメ**（名）(「イギリス」語にて、Come(來い)と犬を呼べるを聞き訛りての稱)西洋種の犬の總稱。洋犬。

かめ・あや[龜綾]（名）龜の甲に似たる模樣を細く織りだしたる綾織絹。

（**か・めい**[佳名]（名）評判よきこと。よきな。

（**か・めい**[下命]（名）おいひつけ。おまうしつけ。

（**か・めい**[加盟]（名）盟約にくはゝること。團體にくはゝること。なかまいり。(加入)。

（**か・めい**[下名]（代）せっしゃ。わたくし。

（**か・めい**[家名]（名）㊀一家の名稱。かみやう。家號。㊁一家の評判。「――を上ぐ」。――**さうぞく**（ウリー）[家名相續]（名）家名をうけつぐこと。

廿**かめ・うら**[龜卜]（名）古昔のうらなひの一法、龜の甲を灼(ヤ)き其さけめによりて吉凶をトしたり。

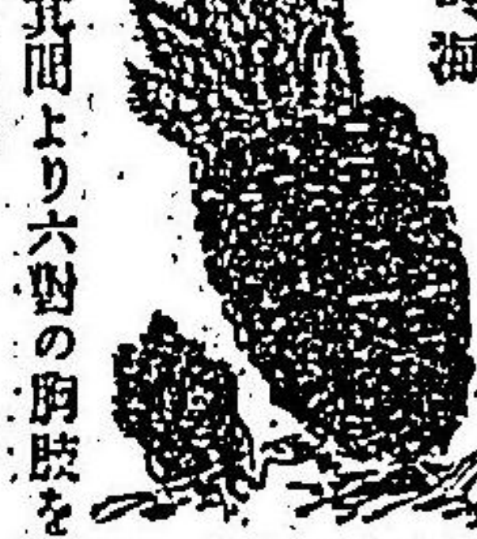
かめざう・こもん（ウーリツ）[龜藏小紋]（名）渦まきの模樣ある小紋の稱、昔時、役者市村龜藏なるものが著始めしより此名あり。

廿**かめ・の・かがみ**[龜鑑]（名）㊀古昔、龜の甲を灼きて行ひたるうらなひのかた。㊁後世までの手本。

かめ・の・かふ（ウーコ）[龜甲]（名）㊀龜の背部にある角質の固き殼、中部稍や高く起る。龜甲(キッカフ)。㊁六角形の上下左右に並びたる模樣。きっかふ。㊂船の甲板(カンパン)の稱、其龜の甲に似たるよりいふ。

〔**かめ・の・こ**[龜子]（名）㊀「かめのかふ」の略言。㊁小さき龜の稱。――**いか**[龜子烏賊]（名）【動】烏賊の一種、普通の烏賊より背高くしてかめのかふに似る。――**ざる**[龜子笊]（名）笊の一種、底圓く口窄くして、全體かめのかふに似たるもの。どんがめいかき。どうがめざたみ。ひらざる。

かめ・の・て[龜手]（名）【動】甲殼類中蔓脚類に屬する節足動物、海岸の岩礁の間などに生じ、肉質の柄を以て外物に附着す、肉柄に鱗狀の石灰小片を被むり、先端に二枚の貝殼を有し、其間より六對の胸肢を出入せしめて食物を攝取す。(石蜐)。


[かめのて]

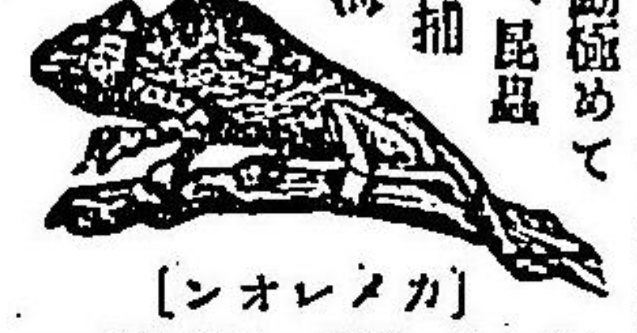
かめ・の・を[龜尾]（名）脊骨の下端即ち肛門の上の高き骨、其龜の尾に似たるよりいふ。(尾骶骨)。

かめ・ばら[龜腹]（名）腹中に一種の塊を生ずる病。(癥瘕)。

かめ・やま[龜山]（名）蓬萊山の異稱。

カメラ[Camera]（名）「あんばこ」に同じ。

カメレオン[Chameleon]（名）【動】蜥蜴類に屬する爬蟲、形やもりに似る、眼大にして頭上に突起あり、三趾内に向ひ二趾外に向ふ、運動極めて緩慢なり、先端膨大せる長き舌を有し、昆蟲の近づくものは、これに粘着せしめて捕食す、體長一尺許、「アフリカ」の北方海岸に棲息し、時々其色を變ずる奇性あり。


[カメレオン]

かめ・ゐ[龜居]（名）端坐して足を外に披き、尻を下につくること。

（**か・めん**[假免]（名）假の免許。

（**か・めん**[假面]（名）木・紙又は土などにてつくりたる顏の形。めん。おもて。――**を・かぶる**[被假面] 本心をつゝみて、うはべを飾らざるが如くに見せかくるをいふ。

かも[鳧]（名）【動】水禽類中扁嘴類に屬する鳥、嘴は軟皮を被り、たゞ其末端のみ硬(カク)化し、嘴緣に角質薄板排列す、頭は長く、足は短くして後方に位す、前三趾間に蹼あり、河海沼湖に棲息する候鳥なり、種類多し、脂多く肉味は佳なり。(野鴨、野鶩、鴨)。

廿**かも**[氈]（名）古昔、獸毛にて織りたるまうせん。

廿**かも**[缸]（名）「かりも」の略言。

廿**か・も**（感）(疑問辭の「か」に、感動詞の「も」を加へたる辭)㊀疑問の意を表はす語。「晴るゝ夜の、星か、河邊の、螢―」。㊁感歎の意を表はす語。「三笠の山に出でし月―」。

廿**が・も**（感）希望の意をあらはす語。「がな」に同じ。

かも・あひる[鳧鶩]（名）【動】かもの變種、かもとあひるとの中間に位する鳥にして、體軀は恰もかもの如くなれど、飛力はあひるの如くに退化せり。

かも・あふひ（オーイア）[加茂葵]（名）【植】馬兜鈴科に屬する宿根草、山中に生ず、莖は上昇せず花は監齊なり、花柱は結合して柱狀をなし、葉の平面は平滑なり、山城國加茂神社のあふひ祭に用ひたるより多く歌に詠ぜり。ふたばあふひ。(雙葉細辛)。

かも・いけ[鴨池]（名）鴨を飼養し置く池。

廿**かも・うり**[氈瓜]（名）【植】「とうがん」の古名。

かも・え[鴨柄]（名）「かもゐ」に同じ。

廿**かもかくも**（副）ともかくも。「―君がまにまに」。

かもがは・ぞめ（ワーガ）[鴨川染]（名）友禪染の一名、特に北横模のやゝあらきものゝ稱。(加茂川染)。

か・もぢ[髢]（名）(髮文字の義)㊀婦人の髮にそへ加ふる髮。いれがみ。㊁おや船のへさきに垂れ飾る流蘇(サフ)。――**ぐさ**[髢草]（名）【植】禾本科に屬する草、春夏の交に花穗を抽く、女小供がこれを採り揉(モ)みて柔かにし、かもぢの如くに結びて弄ぶより此名あり。(鵝觀草)。

廿**か・もじ**[母文字]（名）(「か」は「かゝ、さま」の略言)母の異稱。(女房詞)。

かも・しか[氈鹿]（名）(氈に織る毛ある鹿の義)【動】有蹄類中洞角科に屬する獸、牡牝共に角あれど通常の鹿と其性を異にし、無枝且中空にして、前額より生ずる骨軸を圍繞す、毛長く茶褐色にして柔かし、昔時これを採り氈などをつくれり、我國幽峻なる深山に産す。かもしゝ。かましゝ。(羚羊)。

廿**かも・しし**[氈鹿]（名）【動】前條に同じ。

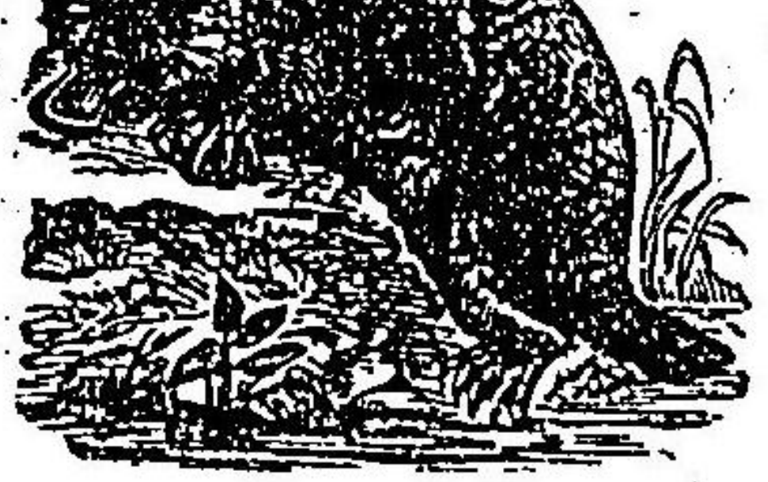
かも・す（さしすすせせ）[醸]（他、さ四）㊀穀類を麹にし、これを水と和して、酒・醤油・味噌の類に熟し成す。㊁もよほし成す。こしらへ出す。てかす。「亂を―」。

廿**が・も・な**（感）(「がも」に感動詞の「な」を加へたるもの)しかあれと企望する意を表はす語。「世の中は、つねにも―」。

廿**か・も・の・いつき**[加茂齋]（名）加茂神社の齋院。

かものは・いろ[鴨羽色]（名）光澤強き綠色。

かも・の・はし[鴨嘴]（名）【動】鳥に近き獸、形はかはをそに似て小なり、顎は長くして角稍を被り鴨の嘴の狀をなす、卵を產し腹部に有する囊の中にてこれを孵化す、「オーストラリア」洲に產す、河岸に穴居し水中に游泳す。


[かものはし]

かも・まつり[加茂祭]（名）山城國加茂神社の祭典、陰曆四月中の申の日を當日と定められ、中古最も盛んに行はれたる故、祭といへば加茂に限れるやうなりき、又、寛平元年より、毎年十一月下の酉の日に、臨時祭の執行はじまれり。

かもめ[鷗]（名）【動】水禽類中長翼類に屬する鳥、鳩大にして、嘴端鉤狀をなし、翼長くして末端尖り、前三趾は蹼を以て連綴せらる。――**じり**[鷗尻]（名）毛皮の太刀の末端の稱、其雞刀形にして上にはねあがりて見ゆる體の、恰もかもめの尻の狀に似たれば名づく。

かも・ゐ[鴨居]（名）引戸・障子などをたつる所の上の横木、溝ありて引戸・障子などをはめて開閉するに便にす。しきゐの對。

（**か・もん**[家門]（名）㊀一家一門。「―の恥辱」。㊁いへすぢ。いへがら。

（**か・もん**[下問]（名）身分下なるものに、物事をとひはかること。「―を恥ぢず」。

廿**か・もん**[勘文]（名）古昔、朝廷よりの諮問につき、博士などが、其勘考(カンガヘ)を書きて上(タテマツ)りし意見。かんもん。「陰陽博士の―」。「明法博士の―」。

（か-もん［家紋］（名） 家々の紋所、例せば、徳川家の葵又は島津家の轡などの類。いへのもん。

（が-もん［衙門］（名） やくしよ。官省。

（が-もん［牙門］（名） 大將の陣營の門。牙營の門。

廿かもん-の-かみ［掃部頭］（名） 「かにもりのかみ」に同じ。

廿かもん-れう［掃部寮］（名） 「かにもりのつかさ」に同じ。

かや［榧］（名） 【植】公孫樹科に屬する喬木、山野に自生す、葉は披針狀をなして互生し、花は單性にして雌雄同株なり、果實は楕圓形にして食用とすべく、材木は種々の用に供せらる。（榧子、玉山果）。

かや［茅］（名） 【植】禾本科に屬するち・かや・すげ・すゝき等の總稱。

かや［萱］（名） 【植】禾本科に屬する草、形狀殆んど莖（シア）に似る、莖と異なる點は、莖の心空しからざるにあり、其葉を取りて屋根を葺（フ）く。（萱）。

か-や［蚊屋］（名） 蚊を防ぐために、吊（ツ）りて寢床を覆ふ一種のとばり、麻布又は絽にて方形に仕立て、四方へ掛けて吊（ツ）る。かちやう。（蚊幮）。

（か-や［夏夜］（名） 夏の夜。

（か-やう［加養］（名） 養生すること。

か-やう［斯樣］（名、副） このやう。このとほり。

か-や-がひ［榧貝］（名） 【動】瓣鰓類中同柱類に屬する貝、櫨實大にして、鹽水と淡水との間の泥沙中に棲息す、介色は綠色にして少しく黑色を帶び、東海地方の河口などに多く產す。

廿かや-がみ［紙屋紙］（名） 「かみやがみ」に同じ。

か-や-か-や（名、副） 笑ふ聲。からから。「―笑ひて」。

（が-や-が-や（名、副） あきたの人聲して騷がしきさまにいふ語。

（か-やく［加藥］（名） 食物のやくみ。

（か-やく［加役］（名） ㊀本職の補佐。たすけ。すけ。㊁芝居にて、其幕の重立ちたる役者を助けて技を演ずる役。

かや-ぐき［草潛］（名） 【動】游禽類に屬する鳥、形は鵜（ラウ）に似る、嘴長くして其基部は軟皮にて被はれ、脚長くして趾は自在なり、水邊の芽の間に棲息し、小魚及小蟲等を捕り食す。（䴘、鸊）。

〔か-やす［返］（他） 「かへす」の訛。

か-やす-し［易］（形、二） ㊀わけなし。たやすし。㊁かろ〴〵し。てがるし。

か-やつ［彼奴］（代） あのやつ。あいつ。きやつ。

か-や-つり［蚊屋吊］（名） 【植】「かやつりぐさ」の略言。――ぐさ［蚊屋吊草］（名） 【植】（い）莎草科に屬する草、莖は關節を有せずして多くは三稜なり、葉は三裂し閉鎖せる葉鞘を具へ、花は多く兩性にして通常雌雄同株なりとす、子供の莖を裂きて蚊屋の形をつくりて翫（モテアソ）ぶより此名あり。莎草。（ろ）「めひしば」の一名。

かや-ぶき［茅葺］（名） 茅にて屋根を葺くこと。又、其屋根。

かや-むしろ［萱席］（名） 萱にて編みたるむしろ。

かや-や［茅屋］（名） 茅ぶきの屋根。又、其家。

かや-やね［茅屋根］（名） 茅ぶきの屋根。かやや。

か-やり［蚊遣］（名） 蚊を追ひやるために、烟を燻（フス）らし立つること。かいぶし。――び［蚊遣火］（名） かやりのためにいぶす火。

かゆ［粥］（名） 米を柔く水煮にしたるもの。おかゆ。

〔かゆ［換］（他） 「かふ」の訛。

廿かゆき-かくゆき（副） あちらへ行きこちらへ行きて。

かゆ-し［痒］（形、二） 膚に搔（カ）きたき感覺を生ず。かゝまはし。（痒）。

廿かゆ-づゑ［粥杖］（名） 古昔、正月十五日に、粥を煮たる木を削りて造りし杖、これにて子無き女を打てば姙娠すといへり。かゆのき。「―ひきかくして」。

廿かゆ-の-き［粥木］（名） 前條に同じ。

（が-よ［駕輿］（名） のりもの。みこし。こし。――ちやう［駕輿丁］（名） のりものを舁（カ）つぐ人。こしかき。輿丁。

か-よけ［蚊除］（名） 蚊を追ひはらふこと。又、蚊を追ひはらふに用ふるもの。――の-ま［蚊除間］（名） 蚊をふせぎとむる裝設をなしたる居間。

かよは-す［通］（他、さ四） 通ふやうにす。つうず。「水を―」。

かよはせ-ぶみ［通文］（名） いろぶみ。艶書。「數百人の―つひに明けず」。

かよひ［通］（名） ㊀かよふこと。ゆきゝ。往來。交通。㊁酒宴などの給仕をすること。又、其人。㊂行きかよふ路。㊃「かよひちやう」の略言。――げいこ［通稽古］（名） 通ひて學ぶこと。つうがく。――だる［通樽］（名） 祝ひ事の儀式に用ふる酒樽。――ぢ［通路］（名） 行き通ふみちすぢ。「雲の―」。――ちやう［通帳］（名） 物品をかけにて賣る人と買ふ人との間又は金錢を預くる人と預かる人との間に、其物品又は金錢の授受の都度、其金額を記し置く帳面。「買物の―」。「貯金の―」。――づとめ［通勤］（名） 通ひてつとむること。――ばこ［通箱］（名） 藥茶屋より茶を入れて得意先に送る小さき箱。――ばんとう［通番頭］（名） 自宅より其店へかよひづとめする番頭。

かよ-ふ［通］（自、は四） ㊀往來す。交通す。ゆきゝす。ゆきかふ。「息が―」。「心が―」。㊁よく似てあり。かれとこれと同じくあり。「似―」。

廿かより-かくより（副） 「かゆきかくゆき」に同じ。

廿か-よ-る（自、ら四） そばへ近づく。よる。

か-よわ-し［弱］（形、二） （「か」は接頭語）よわ〴〵し。かぼそし。「かよわき體」。（孱弱）。

から［空、虛］（名） ㊀中の空虛なること。內に物の存せざること。「―船」。㊁何物をも所持せざること。「―手」。㊂正味なきこと。「―鉄砲」。㊃眞實なきこと。「―うそ」。

から［殼］（名） ㊀內容なき外皮。「貝の―」。㊁もぬけのあと。ぬけがら。㊂きらず。卯花。㊃死骸。

から［幹］（名） ㊀みき又は莖。「芋―」。㊁箆（ノ）。「や―」。㊂柄（エ）。「斧の―」。

カラ（名） ㊀古昔、朝鮮の稱にいひし語。（韓）。㊁古昔、支那の稱にいひし語。（唐）。

から（助） これよりかれへと物事の轉じ行く意を表はす語。「これ―行く」。「あと―よくなる」。

カラ―（接頭） ㊀或語に冠して、外國より舶來したる意を表はす語。「―綾」。「―紅」。㊁或語に冠して、支那又は朝鮮の意を表はす語。「―ひと」。「―やう」。

〔から―（接頭） もとより。又、はなはだ。（多くよからぬ場合に用ふ）。「―いけない」。「―惡るい」。

―から［柄］（接尾） 或語に添へて、人倫のつゞきあひの意を表はす語。「や―」。「う―」。

―から［故］（接尾） 或語に添へて、其語を副詞とし、事物の原因を示す意に用ふる語。のゆゑ。そのため。「吹く―に、秋の草木の、しをるれば」。

〔がら［柄］（名） 體裁。樣子。「着物の―」。「大―」。――にない 其身分に不相應なること。

―がら［柄］（接尾） ㊀或語に添へて、みぶん又はぶんざいの意を表はす語。「人―」。「家―」。㊁或語に添へて、並び立つ狀の意を表はす語。「日―」。「間―」。

カラー［Collar］（名） 洋服の附屬品、「シャツ」の襟さきに現はし頸に纏ふ一種の飾、通常白色なり。

カラ-あふひ［唐葵］（名） 【植】錦葵（フヒニア）科に屬する草、莖高くして枝を生ぜず、葉は皺（ワシ）を有し、花は大形にして柄短く、紅・紫・白等種々の色を呈す、莖皮より纖維を採るべく、又、觀賞用として栽培せらる。はなあふひ。（蜀葵）。

カラ-あや［唐綾］（名） うき織に織りたる綾。

カラ-あゐ［韓藍］（名） 【植】鷄頭花の一名。

カラ-いと［唐絲］（名） 綾に組みたる絲。「其上に―の綱をかけ」。

カラ-いも［唐薯］（名） 【植】「さつまいも」の一名。

（か-らう［家老］（名） ㊀大・小名の家臣の長。としより ㊁家政をつかさどる家人。家宰。

から-うじて［辛］（副） やうやくのことにて。からくして。わづかに。かつ〴〵。やっと。

から-うす［殼臼］（名） 「すりうす」の一名。

カラ-うす［唐臼］（名） うすの一種、地を掘りてこれを据ゑ、足にて杵（キネ）の一端を踏み、其中に入れたる穀類などを搗く裝置のもの。ふみうす。（碓）。――の-さを［唐臼杵］（名） カラうすの杵。きね。

〔から-うそ［空嘘］（名） 全くの虛言。事實すこしもなきうそ。

カラ-うた［唐歌］（名） 支那の歌即ち漢詩。やまとうたの對。

カラ-うど［唐櫃］（名） ㊀カラびつ。㊁ひつぎ。

カラ-うど［唐櫃］（名） 前條に同じ。

カラ-うめ［唐梅］（名） （後水尾天皇のとき、朝鮮より獻上したりしよりいふ）【植】「らふばい」の異稱。

カラ-うり［唐瓜］（名） 【植】「カボチヤ」に同じ。

カラ-え［唐荏］（名） 【植】「たうごま」に同じ。

〔から-えづき［空嘔］（名） はき氣もよほせど、何物をもはき出さゞること。

カラ-おり［唐織］（名） 「カラおりもの」の略言。――にしき［唐織錦］（名） 蜀江の錦に擬して織りたる一種の錦、其模樣に花鳥等種々あり、能狂言の裝束などに用ふ。――もの［唐織物］（名） 唐より渡來せる織物。

廿カラ-かぎ［鉤鍵］（名） （錠鍵の錠といふ）かぎがね。

廿から-かご（名） 【動】「いしぶし」の類の古稱。

カラ-かさ［傘］（名） （唐笠の義）雨雪又は炎天にさして身を覆ふ具、割竹を骨とし、油紙などを張り、轆轤によりて開閉し得るやうにつくる。さしがさ。

カラ-かね［唐金］（名） （製法の支那より傳はりたるより此名あり）銅の合金の一種、其割合は銅五六乃至八四と亞鉛一一乃至三二と錫三乃至四との合金より成り、稍々青黑色を帶ぶ、延べて板となし、鑄物・打物に用ふ。（紫銅、青銅）。

から-かは［辛皮］（名） 山椒の木の皮。

カラ-かは［唐皮］（名） ㊀虎の毛皮の一名。「―の尻鞘」。㊁「オランダ」より舶來の紋革。

から-か-ふ［調弄］（他、は四） ㊀押しつかへしつ爭ふ。あらそふ。「忘ればしからかひて、こしがたなをぬきて」。㊁なぶりあそぶ。たはむる。

カラ-かみ［唐紙］（名） ㊀種々の模樣ある麗（ウル）しき紙、おもに襖（フスマ）に張る。㊁「カラかみしやうじ」の略言。――しやうじ［唐紙障子］（名） 唐紙を張りたる障子。ふすま。

から-から（名、副） さはやかに高く笑ふ聲。「―と打笑ふ」。（呵々）。

〔から-がら［辛辛］（副） やうやく。からうじて。

〔がら-がら（名、副） ㊀からびたるものなどの觸れて出る音。「―する」。㊁物の空虛になりたるさまにいふ語。「櫃が―になる」。㊂言語にかざりなく、物事の包み隱しなきさまにいふ語。「―した人」。

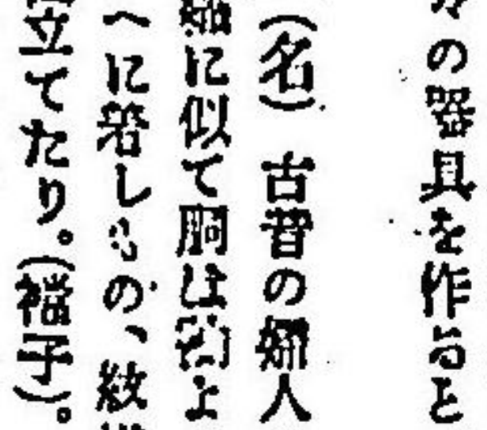
〔がら-がら（名） ㊀「がら〳〵せんべい」の略言。㊁

一種の玩具、振ればがら〱と鳴るもの。——せんべい（名）中に小さき玩弄物をつゝみ入れたる〔煎餅〕。

廿から‐き[枯木]（名）かれたる木。

カラ‐き[唐木]（名）（もと支那より舶來したるよりいふ）熱帶植物なる紫檀・黒檀・白檀などの材木の稱。——ざいく[唐木細工]（名）唐木にて花瓶・茶棚・机等種々の器具を作ること。又、其器具。

カラ‐ぎぬ[唐衣]（名）古昔の婦人の禮服、形は今の羽織に似て胴は裄よりも短く、上着のうへに着しもの、紋様ある綾を用ひて仕立てたり。（褙子）。


[カヲぎぬ]

から‐きめ[辛目]（名）つらきおもひ。つらき場合。

〰から‐きり（副）ねからはから。すこしも。一向。

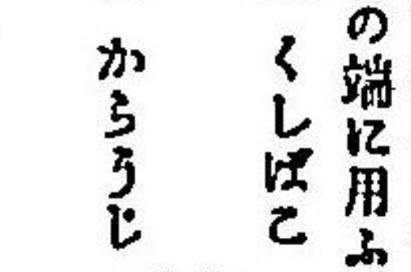
から‐く[辛]（副）からうじて。えいやっと。

から・ぐ（げ、げ、ぐ、ぐる、ぐれ、げよ）[紮]（他、か下二）まとひてつかぬ。かゝげてつかぬ。えばる。くゝる。（縢）。

廿から‐くさ[枯草]（名）かれくさ。まぐさ。（芻）。

カラ‐くさ[唐草]（名）蔓草の種々に這（ハ）ひまとふ模様。——カハラ（ガワラ）[唐草瓦]（名）端に唐草の模様ある平瓦、多くは軒の端に用ふ。

カラ‐くしげ[唐匣]（名）くしばこの上品なるもの。


[カヲくしげ]

から‐くして[辛而]（副）からうじて。

〰がら‐くた（名）雜物の道具、つまらぬ物。やくざ物。

カラ‐くに[唐國、韓國]（名）支那又は朝鮮の稱。

カラ‐くは（グワ）[唐桑]（名）㊀支那より舶來する桑の材木、たうぐは。㊁［植］「いつき」の一名。

カラ‐くみ[唐組]（名）絲を組み合はせて、美しき模様を織り出したる帶。

から‐く・む（ま、み、む、む、め、め）[紮組]（他、ま四）からげ組む。「紐を——」。

カラ‐くら[唐鞍]（名）古昔、節會に用ひし馬具、雲珠（ウズ）などの飾あるもの。うずぐら。

から‐くり[繰]（名）㊀からくること。あやつること。㊁あやかけ。機械。㊂絲のあやかけによりて、色々に狀態をかへあらはすもの。「——人形」。㊃「のぞきめがね」の一名。㊄「やりくりさんだん」。くりまはし。——しんしやう（ショウ）[繰身上]（名）うはべのみ豐かに見えて、うちうち苦しき身代。やりくりの家計。——しんだい[繰身代]（名）前條に同じ。——なんばん[繰南蠻]（名）錨のなんばんぐさりの一種、環太くして、ひとつびとつ鋲をもて打ちつけたるもの。——にんぎやう（ギョウ）[繰人形]（名）矢を的に射あつれば、的がはづるゝと共に、人形のあらはれ出るやうのしかけのもの。——びやう（ビョウ）[繰鋲]（名）かぶとの鉢に打つ鋲。——まと[繰的]（名）からくり人形の的。「念力の矢に中った——」。

から‐く・る（ら、り、る、る、れ、れ）[繰]（他、ら四）㊀括動せしむ。あやつる。㊁絲を縱橫より組み合はせて吊（ツ）る。

カラ‐くれなゐ[韓紅]（名）韓より渡來したるくれなゐ。麗しき深紅の染色。「——に水くゝるとは」。

カラクン‐てう（チョウ）[唐國鳥]（名）（「オランダ」語 Kalkoen）［動］「しちめんてう」に同じ。

から‐げ・つ・く（け、け、く、くる、くれ、けよ）[紮附]（他、か下二）からげくゝる。

〰から‐げつける[紮附]（他）「からげつく」の訛。

〰から‐げる[紮]（他）「からぐ」の訛。

から‐こ[殼粉]（名）㊀饂飩粉の團子。㊁麩（フスマ）。

カラ‐こ[唐子]（名）㊀綰模様などに畫く、支那風の打扮（ナリ）したる小兒。㊁「カラこにんぎやう」の略

言。㊂「カラこわげ」の略言。

から‐こ（名）藺莚にてからげたるいりこ。

廿カラ‐こざね[唐小札]（名）鎧のこざねの一種、一枚ごとに上へ打ち出だしたるもの、慶長の頃、多く行はれたり、こざねの極品とす。

廿カラ‐こと[韓琴]（名）琴又は箏の總稱。やまとごとの對。

カラこ‐にんぎやう（ギョウ）[唐子人形]（名）唐子の姿したる人形。からこ。

〰から‐ころ（名、副）堅きもの、顚轉して響く音。又、駒下駄の音。

廿カラ‐ころも[韓衣]（名）㊀朝鮮の衣服。㊁古代の衣袍。（褂子）。

カラ‐ころも[韓衣]（枕）「きる」に冠らする詞。

カラこ‐わげ[唐子髷]（名）「カラわ」に同じ。

カラこ‐をどり[唐子踊]（名）唐子の扮裝（ナリ）してなす踊。

〰から‐ころん（名、副）「からころ」に同じ。「その——の大門口」。

〰から‐さ[辛]（名）辛くある度合。

から‐ざけ[辛酒]（名）酢（ス）の一名。

廿から‐ざけ[乾鮭]（名）鮭の腹を裂きて腸を去り、鹽を振らずしてかげぼしにしたるもの。（干鮭）。

廿からさ・ぶ（び、び、ぶ、ぶる、ぶれ、びよ）（自、は上二）あれはつ。（荒涼）。

〰から‐さわぎ[空騷]（名）㊀左程にもなき事に、無益にさわぎ立つること。㊁酒肴の設けなしに、三味線などを彈（ヒ）き歌ひつ舞ひつすること。

から‐ざを[殼竿]（名）稻麥などの穗の籾（モミ）をこきたるあとをうつ具、竿のさきに樞（クルリ）ありて、これに更に竿をつけ、それを廻して打つもの。まひきね。くるりぼう。（連枷）。

からし[芥子]（名）からしなの實を粉にしたるもの、黃色にて一種の辛味（カラミ）あり。

から・し（く、し、き、けれ）[辛]（形、二）㊀舌を刺す如き感じあ

り、即ち、山葵（ワサビ）唐辛などを、舌に當てゝ起る感じにいふ。㊁むごし、つらし。「——き目見する」。㊂かんぢやうだかし。えわし。㊃いるみなし。きびし。「からきおきて」㊄貫目又は數量かつ〲さだめの程に足る。「からき貫目」。

から・し（く、し、き、けれ）[鹹]（形、二）鹽氣多し。しほはゆし。しほからし。

カラ‐しし[唐獅子]（名）［動］獅子をゐのしゝと區別していふ語。「牡丹に——」。

から‐しづけ[芥子漬]（名）野菜を芥子にまぶして漬物となすこと。又、其漬物。

から‐しな[芥子菜]（名）［植］十字花科に屬する一年生の栽培草本、葉は辛味（カラミ）ありて鹽漬とし、種子は辛味又は藥用に供せらる。

から‐じり[輕尻]（名）昔時の宿場の駄馬に荷をつくるに、本馬の荷（三十六貫目）の半分卽ち十八貫目を一駄と定めたりしもの。（輕尻）。

からす[烏]（名）［動］燕雀類に屬する鳥、稍や大形なり、嘴強大にして其根基に卵（ヒコ）き羽毛ありて鼻孔を蔽（オホ）ふ、鳴聲を有せず、叫聲を發す、羽毛は通常黑色にして光澤あり、種類少からず、多くは人家近き所に棲息す。（鴉）。

から・す（さ、し、す、す、せ、せ）[枯]（他、さ四）枯るゝやうにす。「木を——」。（槁）。

から・す（同）[嗄]（他、さ四）聲をたえ〲にす。聲をやぶる。えはがらす。「聲をからして呼ぶ」。

から・す（同）[涸]（他、さ四）水を汲み竭（ツ）くす。乾して水氣を去る。ほす。

からす‐[烏]（接頭）或語に冠して、色黑き意を表はす語。「——石」。

ガラス[硝子＝Glass]（名）堅く脆（モロ）く透明なる物質にして、硅酸鹽を融合したる無定形の塊、通常これを「ソーダ、ガラス」「カ

リ、ガラス」一名「ボヘミア、ガラス」、鉛「ガラス」一名「フリント、ガラス」の三種に分つ、通常「ガラス」といふは、おもに「ソーダ、ガラス」を指す、若色のものは金屬を混じたるにて、藍色には「コバルト」、紫色には酸化「マンガン」、赤色又は綠色には酸化銅等を使用す、用途多く、種々の器具を作るに用ひらる。瑚。

廿からす‐あふぎ（オウギ）[烏扇]（名）［植］「ひあふぎ」の古名。

からす‐いし[烏石]（名）㊀うるしいし。㊁石炭の一名。

ガラス‐いた[硝子板]（名）硝子の平面なる板。

ガラス‐うつし[硝子寫]（名）寫眞にて硝子の板に映像をうつすこと、又、其寫眞、紙寫の對。（硝子撮）。

からす‐うり[烏瓜]（名）［植］葫蘆科に屬する宿根草、葉は圓狀にして三裂乃至五裂し毛茸を有す、夏時に、漏斗形の白花をつけ、果實は熟して赤色に變ず、根より澱粉を採りて洗滌の料とす。くそうり。ひさごうり。（王瓜）。

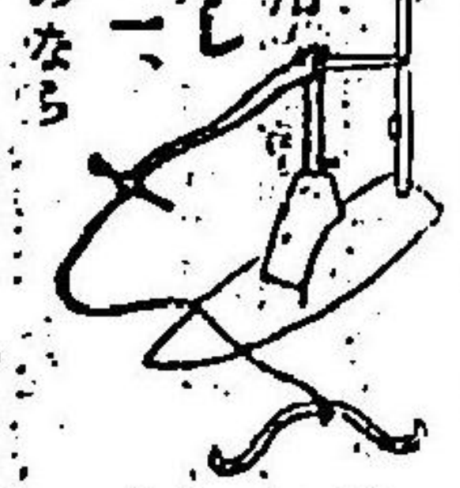
からす‐おどし[烏威]（名）屋の棟（ムネ）などに、鳥のとまるを防ぐため、おどしに繩などにて鈎をかけ設けたるもの。

からす‐がしら[烏頭]（名）馬のあと足の外へ向ける節。くはゆき。

からす‐がね[烏金]（名）（翌日の鳥の鳴くを合圖に利子を取上ぐる金の意）日歩にて取り上ぐる高利の金、貸したる翌日は其利金を取り上ぐ。

からす‐がひ（ガイ）[烏貝]（名）［動］（い）瓣鰓類中同柱類に屬する貝、介殼は稍圓形にして膨脹し、外面は眞黑色にして內面は眞珠色なり、長さ五寸餘高さ三寸餘、淡水の軟泥の上層に棲息す、我國湖沼概ねこれを產す。（ろ）殼黑き蛤（ハマグリ）の異稱。

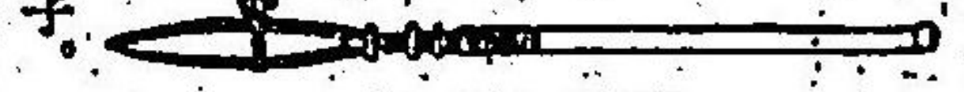
カラ‐すき[唐鋤]（名）柄曲がりて刄廣き鋤、多く牛につけて田畠を耕すに用ふ。うしぐは。（犂）。——ぼし[唐鋤星]（名）二十八宿の一、卽ち、參宿の一名、三個の星のならびたる形、カラすきに似たるより此名あり。みつぼし。（參星、犂星）。


[カヲすき]

ガラス‐きり[硝子切]（名）「ガラス」を切るための具、「ペン」兕形の柄の端に鋼を嵌（ハ）め、これに小さき金剛石を着けたるもの。

からす‐ぐち[烏口]（名）圖引に用ふる具、鋼鐵を以て鳥の嘴の如くに造り、其中に墨汁を含ませ線を引くもの。

からす‐ざんせう（ショウ）[烏山椒]（名）［植］芸香（ヘンルウダ）科に屬する植物、葉は通常のさんせうより大形なり。


[からすぐち]

ガラス‐しやうじ（ショウジ）[硝子障子]（名）紙を張るかはりに、硝子板をはめこみたる障子。

からす‐だな[烏棚]（名）四十八棚の一、二三枚の棚板を床板に平行せしめたるもの。つただな。

ガラス‐ど[硝子戶]（名）「ガラスしやうじ」に同じ。

〰からす‐とび[烏飛]（名）鳥の飛ぶが如くに、横さまに飛ぶこと。

からす‐なき[烏鳴]（名）鳥の鳴く聲、俗間にこれによりて吉凶を占ふ。

からす‐なめり[轉筋]（名）足の筋肉の縺（モツ）れちぢまること。こむらがへり。

からす‐なへ（エ）[轉筋]（名）前條に同じ。

〰からす‐の‐きう[烏灸]（名）子供の口角に生ずる「たゞれ」。

〰からす‐の‐ぎやうずゐ（ギョウズイ）[烏行水]（名）沐浴する時間の甚だ早きこと。

からす-の-ごま［烏胡麻］(名)【植】田麻科に屬する草、葉は楕圓形にして、緣邊に齒牙を有し、花瓣は五個ありて黃色を呈す、雄蕊は通常二十個ありて、其中五個は葯を有せず。(田麻)。

からす-の-ぬれ-は-いろ［烏濡羽色］(名) 最もうるはしき烏羽の色。

からす-の-ゑんどう［烏豌豆］(名)【植】荳(マメ)科に屬する植物、莖は赤色にして、四月頃、黃色の花を咲く。(雲實、大巣菜)。

からす-ば［烏羽］(名) ㊀烏の羽。「—に書く、言の葉の」。㊁烏の羽の色、紺の光澤まじれる黑色。——**いろ**［烏羽色］(名) 前條(二)に同じ。

ガラス-ビン［硝子壜］(名) 硝子にてつくりたる徳利。

からす-へび［烏蛇］(名)【動】蛇類中閉口類に屬する爬蟲、全身黑色にして、山野に棲息す、尾尖り頭圓く、氣猛し、其大いなるは人を追ふ、漢方にては、捕りて醫藥に供す。くろくちなは。(黑花蛇)。

十**からす-へみ**［烏蛇］(名) 前條に同じ。

ガラス-まど［硝子窓］(名) 硝子を張り又は硝子障子をたてたる窓。

からす-まめ［烏豆］(名)【植】荳科の野草、莖細く花は淡紫色、實は黑くして小さし。たんきりまめ。

カラ-すみ［鱲］(名)(唐墨の義) 一種の食品、さはら・ぼら・めなだ等の子を胞袋のまゝ乾して製せるもの、形唐墨に似たれば名づく、肥前國野母(モ)の名產。

カラ-ずみ［唐墨］(名) ㊀支那製の墨。たうぼく。㊁【鑛】黑色の琥珀。

からす-むぎ［烏麥］(名)【植】禾本科に屬する一年生の草本、原野に自生す、平滑なる莖を有し、小穗狀花序は通常二三個の花より成り、花は皆な長き芒を有す、牧草として有用なり。(雀麥)。

からす-ゆり［烏百合］(名)【植】「あまどころ」に同じ。

〔**から-せき**［乾咳］(名) たゞ咳(セキ)のみ起りて痰の出でざること。

からだ［體］(名) ㊀身體。ごたい。(形骸)。㊁物の胴にあたる部分。㊂物の全體。——**を-こ-に-す** 甚しく骨折りはたらく。——**を-こ-は-す** 病氣をかもす。——**を-を-し-む** はたらくを厭(イト)ふ。

カラ-だいわう［唐大黃］(名)【植】「おほし」に同じ。

から-たけ［幹竹］(名)【植】「まだけ」の一名。(簳)。——**わり**［幹竹割］(名) 幹竹を割る如くに、物を縱に眞直に切り割くこと。(多くは人を斬るにいふ)。

カラ-だけ［漢竹］(名)【植】「かんちく」に同じ。

カラ-たち［枸橘］(名)(唐橘の義)【植】芸香科に屬する植物、刺多し、葉は三個の小葉より成り綠色にして光澤を有す、春末に白色の花を開く、瓣は五個にして殆んど無柄なり、多くは藩籬用として栽培せらる。きこく。(枳殼)。

カラ-たちばな［唐橘］(名)【植】紫金牛(ヤブカウジ)科に屬する植物、草本狀の小木本にして葉は厚からず、花梗は葉腋に生じ小數の花を着く、花冠は稍や白色にして赤色の小點を有す、果實は紅色なり、觀賞用として栽培せらる。(平地木)。

ガラ-だま［唐玉］(名) 外國より舶來せる玉。

〔**から-ちち**［乾乳］(名) 乳汁の出でざる乳ぶさ。

カラ-ちや［唐茶］(名) 支那流にたてたる煎茶。

〔**から-つ**［唐津］(名) ㊀關西にて陶器の總稱、關西地方にては、種々の陶器中にて、唐津燒其名を專らにするより起る。㊁「からつやき」の略言。

〔**から-つ-く**（かきくくけけ）(自、か四) から〳〵す。

〔**がら-つ-く**（かきくくけけ）(自、か四) がら〳〵す。

から-づけ［辛漬］(名) 澤庵漬などを鹽辛く漬くること。又、其漬物。

から-づつ［空砲］(名) 銃砲に彈丸を込めずして發火すること。からでっぽう。

カラット［Carat］(名) 合金中に含む金の割合、純金を二十四「カラット」とし、十八「カラット」十六「カラット」とは、二十四分中に十八分又は十六分の金を含むをいふ。

〔**から-つばき**［空唾］(名) 痰などの混合せざる唾。「肺病やみの—」。

カラ-つばき［唐椿］(名)【植】つばきの一種、支那より渡來したるものにして、通常のつばきよりは葉細長くして厚し、花もまた大形にして麗しき紅色を帶び牡丹に似る。(蜀茶)。

から-つ-や［唐津屋］(名) 陶器をうる家。(關西の語)。

からつ-やき［唐津燒］(名) 肥前國唐津より出す陶器の總稱、色は多く黑を帶びたる薄萠黃(ウスモエギ)にして、まゝ薄柿色に朱線を現したるものあり。

から-て［空手］(名) 手を空うして何物をも持たぬこと。手を空うして何事をもなさぬこと。すで。てぶら。

から-でっぱう［空鐵砲］(名) ㊀「からづゝ」に同じ。㊁虛言すること。實なきこと。

カラ-と［唐櫃］(名) ㊀「カラうと」の略音。㊁「こめびつ」の一名。

カラ-ど［唐戶］(名) 縱の中央に一本、橫に數本のさんを入れたる左右相對する開戶。

カラ-なし［唐梨］(名)【植】薔薇科に屬する植物、葉は楕圓形にして鋸齒を有し、花冠は白色にして淡紅色を帶ぶ、果實は林檎(リンゴ)に似て大きく紅色なり、木材は種々の用に供せられ、果實はまた食用に供せらる。べにりんご。

カラ-なつめ［唐棗］(名)【植】棗の變種、葉は長卵狀にして三大脈を有す、果實は形圓く味酸し、秋熟して赤色となる、仁は固く太く藥劑に供せられ、木材もまた種々の用に供せらる。

カラ-なでしこ［唐撫子］(名)【植】「かはらなでしこ」の一名。(石竹)。

から-にし［辛螺］(名)【動】「いはにし」の一名、味辛きより此名あり。

カラ-にしき［唐錦］(名) 支那より渡來し又は韓人の製作に成れる錦。又、金絲をいれて織りたる錦。やまとにしきの對。

〔**から-ぬひ**（イーヌ）(名)「からげぬひ」の略言。

から-ね［乾根］(名) 黑き稻。

カラ-の-かしら［唐首］(名) 犛牛(ハウギウ)の毛を上に飾りたる兜(カブト)。

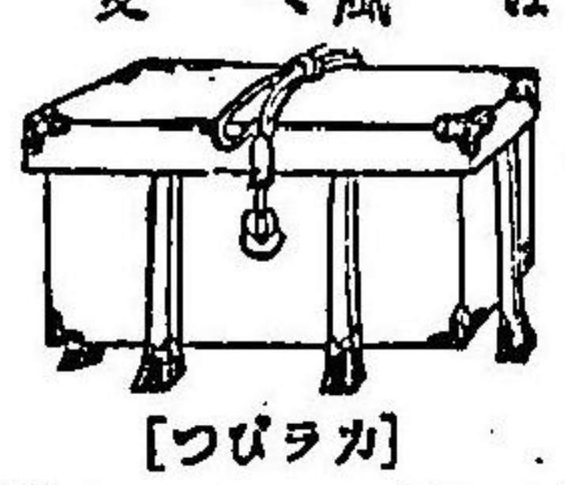
〔**から-の-ら** (名) のらくらと暮らすこと。

カラ-はな-さう［唐花草］(名)【植】桑科に屬する草、寒國に生ず、纏繞莖及雌雄異株花を有す、葉は心形にして往々三裂す、果實はまつかさに似る、醫藥に用ひ、又、麥酒の醸造にも用ひらる。

カラハニ (名)「ガルバニ」に同じ。

カラ-はふ［唐破風］(名) 破風を乙字形に似たる曲線狀に作りたるもの、玄關又は門などの屋根の飾として用ふ。

カラ-びつ［唐櫃］(名) 支那風に作りたる脚ある櫃。「つは者共、—に走せ寄って」(辛櫃)。



［カラびつ］

カラ-びと［唐人、韓人］(名) 支那又は朝鮮の人。

〔**から-びる**［乾］(自)「からぶ」の訛。

カラ-ひわ［唐鶸］(名)【動】「ひわ」(鶸)の一名。

から-ぶ（びびぶぶぶれびよ）［乾］(自、は上二) ㊀水分失せてよく乾燥す。かわく。㊁草木など生氣弱きてかじく。

カラフト-だま［唐太玉］(名) 滿洲より唐太を經て、內地に來れるねり物の玉、色青し、煙草入の緒締(ヲジメ)などに使用す。むしのす。

から-ふね［空船］(名) 積荷も乘客もなき船。

カラ-ふね［唐船］(名) 朝鮮又は支那の船。又、其他一般の外國船。

カラ-ぶみ［漢書］(名) 支那の文書。漢文の書籍。かんしよ。——**よみ**［漢書讀］(名) ㊀漢書の讀みかた。㊁漢書を讀む人。

から-ぼり［空堀］(名) 水なき堀。(隍)。

カラ-まつ［唐松］(名) ㊀【植】松杉科に屬する落葉木、山中に自生す、葉は針狀叢出して柔軟なり、花は單性雌雄同株にして毬狀をなす、木材は種々の用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる、奧羽の南部地方に多し。てうせんまつ。シンラゑよう。㊁「カラまつせんべい」の略言。——**せき**［唐松石］(名)【動】きくめいしの大いなる模樣の現はれたるもの。——**せんべい**［唐松煎餅］(名) カラまつの葉の形したる煎餅。

から-ま-る（らりるるれれ）［絡］(自、ら四) まとはりつく。まきつく。

から-み［辛味］(名) 辛き味。又、辛き味のもの。——**もち**［辛味餠］(名) 搗(ツ)きたるまゝの柔かき餠に、大根おろしをつけたるもの。

〔**から-み-み**［乾耳］(名) 耳の病、膿汁出ずしてたゞ痛むもの。

から-む（まみむむめめ）［絡］(他、ま四) まとはりつく。まとひつく。まきめぐる。「蛇が足を—」。(繞)。

から-む（めめむむるるれめよ）［搦］(他、ま下二) 罪人などを捕縛す。からめとる。しばる。

〔**ガラム** (名)「グラム」の訛。

から-むぎ［殼麥］(名) 殼のつきたるまゝの麥。

から-むし［苧］(名) ㊀【植】(幹(カラ)蒸しの義といふ)蕁麻(イラクサ)科に屬する草、多少木質の莖を有す、高さ四五尺、葉は互生し下面は白色なり、夏の頃、細き青色の小花を着く、莖の皮より纖維を採り絲を製し布を織る、越後縮は此纖維を以て織れるなり。(枲)。

㊁「からむしてふ」の略言。——**づきん**［苧頭巾］(名)「もこそづきん」の一名、もとからむしの莖の纖維を以て織りてつくりしより此名あり。——**てふ**［苧蝶］(名)【動】鱗翅類中地蠶蛾類に屬する蟲、翅は黑褐色にして、黑條黑紋あり、軀幹肥大す、苧の害蟲なり。

カラ-めかす［唐風］(自、さ四) 唐樣になす。

がらめき-の-ひ［柄目木火］(名) 越後國蒲原郡柄目木村附近の地中より出る天然の石炭瓦斯。

カラ-め-く（かきくくけけ）［唐風］(自、か四) 唐樣に見ゆ。

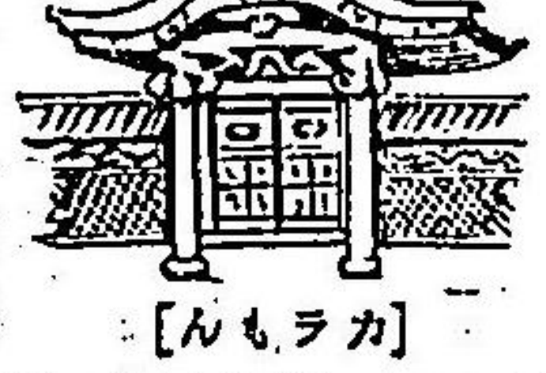
からめ-て［搦手］(名) 城砦の裏門。おふての對。「—の大將」。(後門)。

カラ-もの［唐物］(名) 唐土より舶來せる雜貨。——**の-つかひ**（カイーツ）［唐物使］(名) 古昔、唐土の商船筑紫に着したるとき、其舶載せる雜貨を檢するため、京都より出張せし使者。

カラ-もも［唐桃］(名)【植】(い)杏(アンズ)の一名。(ろ)桃の一種、葉細長し、花はおほくして紅白色なり。

カラ-もん［唐門］(名) 唐破風(カラハフ)の屋根にて、唐戶をたてたる門。

カラ-やう［唐樣］(名) ㊀支那の風。和樣の對。㊁行・草以外の書體、即ち、楷・篆・隸などの書體の稱。——**がき**［唐樣書］(名) からやうの文字を書く人。



［カラもん］

から-やま［空山］(名) ㊀草木の枯れたる山。(枯山)。㊁草木なき山。はげやま。

がら-ゆき［柄行］(名)「がら」(柄)に同じ。「縞物の—」。

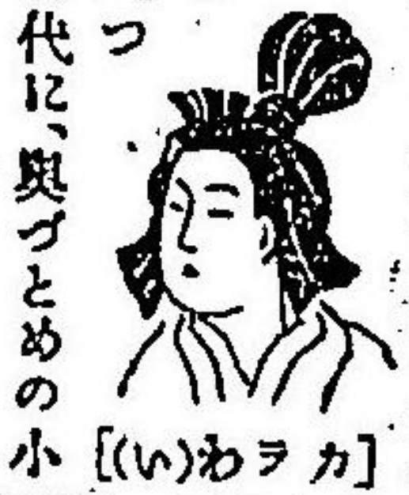
十**カラ-よもぎ**［唐艾］(名)【植】菊の一名。

〔**からり** (名、副) 物事の全く以前に變はれるさまに

いふ語。「―避ける」。

〔がらり（名、副）前條に同じ。

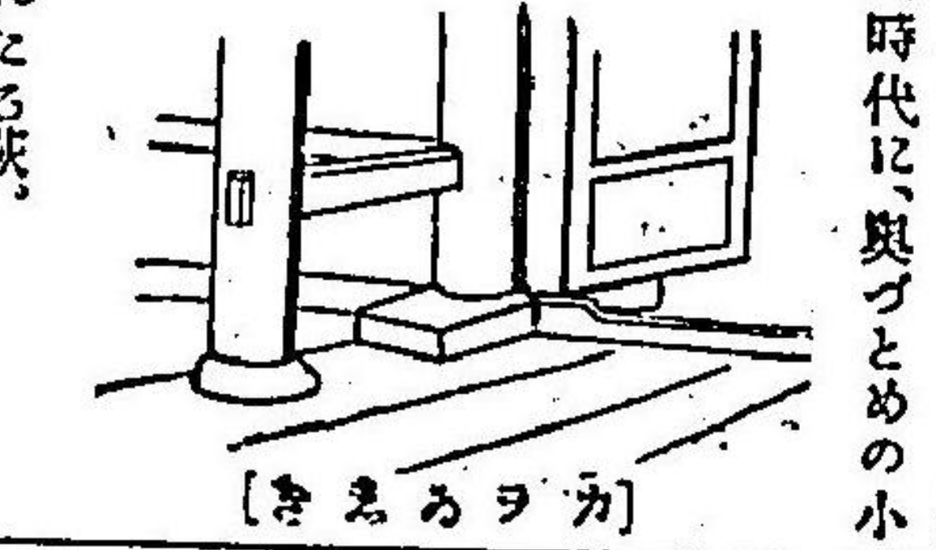
カラ-わ［唐輪］（名）（婦人の髮の結(ユ)ひ方）(い)髻(モトドリ)を束ねて其上部を輪につくりたるまげ、慶長以前頃迄久しく行はれしもの。(ろ)髻より上を二つに分け頷の上にて二つの輪をつくりたるもの、徳川時代に、與ごとめの小姓の少女これを結べり。



［カラわ(い)］

から-ゐ［空井］（名）乾燥して水無き井。

カラ-ゐしき［唐居敷］（名）支那風に門の柱の下に敷きたる木。



［カラゐしき］

カラ-ゑ［唐畫］（名）支那人の手に成りたる畫、又、支那人の畫法にならひたる畫、倭畫の對。「―の山水」。

†から-をぎ［枯荻］（名）枯れたる荻。

ガラン［伽藍］（名）（梵語 Samghârâma（僧伽藍摩）の略、僧園又は精舍と譯す）衆多の僧の遊歩修行する場所。テラ。「七堂―」。

〔がらん-どう（名）（空虛の義ともいひ、又、伽藍堂の義ともいふ）家の中に物なくして虛きこと。

かり［雁］（名）【動】水禽類中扁嘴類に屬する鳥、頸長し、嘴は軟皮を被りてたゞ末端のみ硬く、嘴緣に數多の角質の薄板排列す、脚は短くして後方に位し、前三趾間に蹼(ミヅカキ)を張り後趾小さし、河海池沼に棲息する候鳥にして秋來り春去る、其聲悲哀の情を催す、故に古來多く歌などによめり。

カリ［加里＝Kalium］（名）【化】「カリウム」に同じ。

かり［狩］（名）㊀鳥獸類を追ひ捕ること。(獵)。㊁鷹狩の特稱。㊂魚を漁(スナド)ること。㊃尋ねさがしありくこと。「松茸―」。「紅葉―」。

かり［假］（名）㊀永久ならざること。えばし。(暫時)。㊁暫時それと定め置くこと。「―につくる」。㊂眞正のものにあらざること。似て非なること。にせ。いつはり。㊃他の職をかぬること。臨時。「―の太守」。(兼攝)。

かり［借］（名）借ること。又、借りたる物。

かり［刈］（名）㊀刈りとること。㊁古昔の段別の稱、今の四坪に當る。

†かり（名）樗蒱(チヨボ)の釆(サイ)。

†かり［甲］（名）音樂にて、調子を高く上ぐること。

†―がり［許］（接尾）或語に添へて、そのもとへの義を表はす語。「妹―行けば冬の夜の」。

かり-あつ・む（め、め、む、むる、むれ、めよ）［驅集］（他、む下二）驅りたて、よせあつむ。「獵師をかりあつめて」。

〔かりあつめる［驅集］（他、め下一）「かりあつむ」の訛。

†かり-あを［狩襖］（名）古昔、隨身・舍人などの着し衣服、表は布にして裏は絹なるもの。

かり-いぬ［獵犬］（名）狩獵に使ふ犬。れふけん。

かり-いへ［借家］（名）人の家屋を借りてすまふこと、又、其家。

かり-いほ［假廬］（名）かりにすまふいほ。かりほ。

（か-りう［下流］（名）㊀川末。㊁卑く賤しき地位。「―に居るを恥む」。

（が-りう［我流］（名）おのれひとりにて立てたる流儀。「―の手際」。「―の劍術」。

かり-うち［樗蒱］（名）博奕の一種、厚紙の札の外を黑く内を白くして、これに種々の絵模樣を描き、背をぼう、赤色をいす、圓形をもる、半圓をこふといひ、各十二枚合計四十八枚あり、これを以て勝負を爭ふ、恰も今時の花合せに類するもの。

かり-うど［獵人］（名）山野にて鳥獸を獵するを職業となす人。れふし。(獵者)。

カリウム［加僧母＝Kalium］（名）【化】銀色をなす脆(モロ)き金屬、水に遭(ア)ひ水素を遊離して水酸化「カリウム」となり、其際發する熱により音を發し紫焰をあげて燃燒す、酸化し易きを以て、石油或は揮發油に入れて貯ふ、天然には長石・明礬等となりて存在す。

かり-うめ［假埋］（名）かりにうづめおくこと。

かり-かいげふめんきよぢやう［假開業免狀］（名）醫師乏しき地にて、府縣知事の具狀により、內務大臣より試驗によらず其人の履歷のみによりて付與する醫師の開業免狀。

かり-かた［借方］（名）㊀人より物を借る手段。㊁借りたる方の人。㊂簿記の仕譯にて、帳簿が受けたる方の稱、例へば、織物一尺を買ひ金十圓を支拂ひたりとすれば、其織物は帳簿に於て借方なり。

かり-がね［雁音］（名）㊀雁の聲。㊁【動】雁の一名。「玉づさは、掛けて來つれど、―の」。 **―てん**［雁音點］（名）漢文の返點の一なる「レ」の稱。

〔かりがね-ぼね（名）「かいがね」の訛。

かり-かぶ［刈株］（名）刈りたるあとに殘る株。

かり-かぶ［假株］（名）「かりかぶけん」の略言。 **―けん**［假株券］（名）會社より株主へ假に付與しおく株券、後に本株券と引き換ふるもの。

カリ-ガラス［加里硝子＝Potash glass］（名）おもに「カルシウム」及「カリウム」の硅酸鹽より成る「ガラス」、「ガラス」の中にて、最も融解し離く且水及酸類の作用を受くること最も少きを以て、多く化學用器具製作に用ひらる。

かり-かり（名、副）㊀雁の鳴き聲。「來る秋ごとに―と叩く」。㊁堅きものを細かく嚙みくだく音、「―音をさす」。

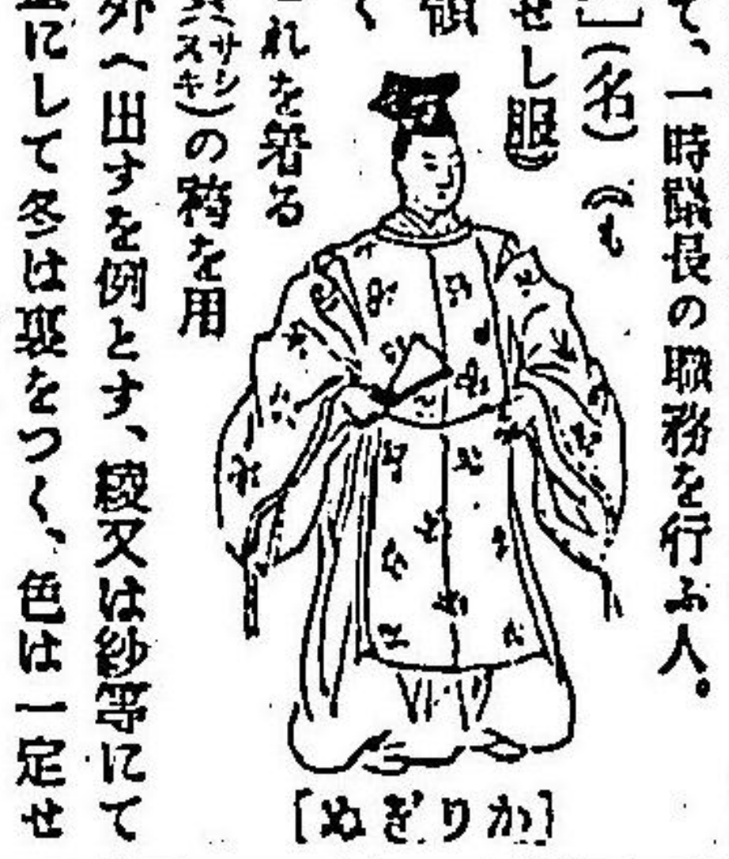
〔がり-がり（名、副）前條(二)に同じ。「―齒ごたへする」。 **―ばうず**（名）㊀食慾の僧をいやしめていふ語。㊁頭髮を極めて短く刈ること。 **―まうじや**（名）執念深く我慾を成さんとするものをいやしめいふ語。

かり-ぎ［刈葱］（名）【植】ねぎの變種、葉莖だ小さし。かれぎ。(外葱)。

かり-ぎ［借着］（名）他人の衣服を借りて着(キ)ること、又、其服。「損料の―」。(借衣)。

かり-ぎちやう［假議長］（名）議長若しくは副議長にあらずして、一時議長の職務を行ふ人。

かり-ぎぬ［狩衣］（名）（もと鷹狩の時に着せし服）古昔の官服、盤領(マルエリ)にして袖にくくりあるもの、これを着るときは、必ず指貫(サシヌキ)の袴を用ひ、裾(スソ)を袴の外へ出すを例とす、綾又は紗等にて仕立て、夏は一重にして冬は裏をつく、色は一定せず、五位以上のものは綾紋を用ひ、五位以下のものは無紋を用ひたり。



［かりぎぬ］

かり-くび［雁首］（名）㊀雁の首に似たる形をなすもの。㊁陰莖の頭。(龜頭)。

†かり-くら［狩座］（名）鳥獸を狩る所。かりば。

†かり-くら［狩競］（名）爭ひて狩獵を行ふこと。

かり-けつぎ［假決議］（名）本來の效力を有せざる決議、又、效力不確定なる決議。

かり-こ［狩子］（名）狩獵に、鳥獸を驅り出す士卒。「せこ」。

かり-こみ［刈込］（名）㊀刈りこむこと。㊁果樹栽培上必要なる手いれ、無用の枝を剪除して有用の枝を保護すること、初冬落葉の後若しくは早春發芽の前に行ふべきものとす。 **―ばさみ**［刈込剪刀］（名）樹枝をかりこむに用ふる柄長き剪刀。又、頭髮をかりこむに用ふる鋏製の剪刀。

かり-こ・む（ま、み、む、む、め、め）［刈込］（他、ま四）草木又は頭髮を刈りて短くす。「散髮を―」。(剪)。

〔かり-こ・む［借込］（他、ま四）金錢などを多額に借る。

かり-ごも［刈菰］（名）刈りたる眞菰。 **―の**［刈菰―］（枕）刈りたる菰は亂れ易きより、「みだる」に冠らする詞。

†かり-ごろも［狩衣］（名）㊀狩に着る服。㊁旅行の服。

かり-さしおさへ［假差押］（名）【法】強制執行を保全するための處分、金錢又は金錢の債權に換ふることを得べき請求に就き、其目的たる動產又は不動產が、隱蔽又は賣却等によりて失はるゝ恐れあるときに行ふものにして、判決の確定以後に行ふを通常とすれど、未だ期限に至らざる請求にても、其手續を履めばまた行ふことを得、假差押せんとする物の所在地の區裁判所又は本案緊屬の裁判所に申請し、其命令を得てこれを行ふ。(假處分の條參照)。 **―けってい**［假差押決定］（名）【法】假差押の申請に對し、該管轄裁判所が、口頭辯論を經ずしてこれを認可する決定。

かり-ざしき［借座敷］（名）借りたる座敷。

かり-しっかう［假執行］（名）㊀假に或事柄をとり行ふこと。㊁【法】裁判所が職權又は申請により、判決は未だ確定に至らざれど、これに附したる假執行の宣言に基づきてなす強制執行。 **―の-せんげん**［假執行宣言］（名）【法】裁判所が或場合又は或條件の下に、其判決を假に執行するを許すとの宣言。

かり-しほ［刈機］（名）刈りてよき時期。「稻の―に刈り越して」。(刈時)。

かり-しゅつごく［假出獄］（名）【法】重罪又は輕罪の刑に處せられたるものが、よく獄則を遵守し改悛の狀あるとき、假に獄より出して、普通人の生活を營ましむること。

かり-しょぶん［假處分］（名）㊀假に或事柄を處分すること。㊁【法】裁判所が係爭物に關し、其現場の變更により、當事者の一方の權利を實行すること能はず、又、これをなすに著しき困難を生ずる恐れあるときに許す處分、其假差押と異なる點は、假差押は、專ら金錢上の債權に關して、強制執行を保全するために行ふものなれど、假處分は、たゞ係爭の目的物に限るものなり。

かり-ずまひ［假住］（名）假の住居。借家。

かり-せんぐう［假遷宮］（名）神社の本殿を造營する間、假につくりし御殿に神體をうつす儀式。かりどのせんぐう。正遷宮の對。

かり-そ・ぐ（が、ぎ、ぐ、ぐ、げ、げ）［刈削］（他、が四）刈りへらす。

かり-そめ［假初］（名）㊀暫時のまにあはせ。かり。たうざ。(苟且)。㊁かろぐ\しくすること。そまつ。おろそか。なほざり。 **―に-も**［假初］（副）いやしくも。(苟且) **―ぶし**［假初臥］（名）うたたね。かりね。

かり-た［刈田］（名）稻などを刈りたるあとの田。

かり-たく［假宅］（名）一時假に住む家。

かり-たく［借宅］（名）借りたる宅。借家。

かり-た・つ（て、て、つ、つる、つれ、てよ）［驅立］（他、た下二）㊀驅り追ふ。おひたつ。「獸を―」。㊁強ひて催し赴かしむ。

かり-ち［借地］（名）借りたる地面。しやくち。

かり-ぢめん［借地面］（名）かりち。しやくち。

かり-ちん［借賃］(名) 物を借りたる料金。

かり-つか-ふ（カウ―ツ）［はひふふへ］［驅使］(他、は四) 「つかふ。

廿かり-て(名) かて。(糧)。むた

かり-て［借手］(名) 物を借る人。又、巧に物を借り入るゝ人。(借主)。

廿かり-で(名) かぶり笠の鍔(ツバ)をつくる部分。

かり-ていくわん［假定款］(名) 未だ株主總會の決議を經ざる會社の定款。

カリテイ-も［迦梨帝母］(名) 〔佛〕鬼子母神。(梵語、Hāriti)

かり-でうやく（ウ―ヤク）［假條約］(名) 未だ主權者の批准裁可を經ざる條約。やがて更改せんとの主意によりて締結したる當座の條約。「安政の―」。

かり-とぢ［假綴］(名) 書物などを假に綴ぢ置くこと。又、其書物。ほんとぢの對。

かり-どの［假殿］(名) かりのごてん。 ――**せんぐう**［假殿遷宮］(名) 「かりせんぐう」に同じ。

かり-な［假名］(名) ㊀廿かな(假名)の古稱。 ㊁假に定めたる名。

かり-に［假］(副) ㊀暫時の事として。まにあはせとして。「―作る」。 ㊁儻かにきめずして。ゑばらくそれとして。「―其論に從ふとも」。 ㊂兼攝して。臨時に。

廿かり-には（ワ―ニ）［狩場］(名) かりば。

かり-にも［假］(副) かりそめにも。いやしくも。

かり-ぬし［借主］(名) 借りたる本人。借りたる名前主。かしぬしの對。

かり-ぬひ（イ―ヌ）［假縫］(名) ㊀間に合はせに縫ふこと。 ㊁本仕立にかゝる前、工合を試みるため假に縫ふこと。

かり-ね［假寐］(名) ㊀暫時其まゝ睡ること。假に其所に寐ぬること。うたゝね。かりぶし。ころびね。 ㊁たびね。たびまくら。

かり-の-おや［假親］(名) やしなひおや。まゝおや。「うみのおや」の對。

廿かり-の-こ(名) 鴨の卵。

かり-の-こ［假子］(名) やしなひこ。まゝこ。うみ「のこの對。

かり-の-たまづさ［雁玉章］(名) (前漢の蘇武が匈奴に使して久しくとらはれしとき、雁の脚に書狀をくゝりて、音信を漢朝に通じたりといふ故事に出づ)おとづれの手紙。たより。

かり-の-たより［雁便］(名) 前條に同じ。

かり-の-ちち［假父］(名) 養父。繼父。うみのちゝ「の對。

廿かり-の-つかひ（カイ―ツ）［狩使］(名) ㊀古昔、狩獵のときに遣(ツカ)はされし使者。 ㊁古昔、國々の政治の可否又は國守の善惡を探(サグ)るために、應狩の使者の名義にて、政府より諸國に派遣せし使者。

かり-の-つかひ（カイ―ツ）［雁使］(名) 「かりのたまづさ」に同じ。

かり-の-はは［假母］(名) 養母。まゝはゝ。うみの「はゝ、の對。

かり-の-やど［假宿］(名) ㊀たびのやど。又、かりずまひ。 ㊁無常なる斯世。

かり-の-やどり［假宿］(名) 前條に同じ。

かり-ば［狩場］(名) 狩獵をなす場所。かりくら。かりには。(獵場)。

廿かり-ばかま［狩袴］(名) 古昔、狩獵のときに着けし袴、其形は差貫(サシヌキ)に似て、身輕に製したるもの、むかばきの類。

かり-ばし［假橋］(名) 間に合せに架(カ)けたる橋。

廿かり-ば-ね(名) 刈りたるあとの根。かりかぶ。

廿かり-ば-の-とり［狩場鳥］(名) 〔動〕「きじ」の異稱。(狩場の題)。

かり-ばり［假貼］(名) ㊀書畫の紙又は書畫を書かんとする紙の皺よらぬやう、其四邊を物にはりつくること。 ㊁皺よらぬやう紙をかりばりしておく具、槙に似たるものにして、表に柿澁を塗る。 ㊂障子のきりばりなどにもいふ。

〔**がり-ばり**〕(名) がむゑやら。むちやくちや。亂暴。 ――**もの**(名) がむゑやらの人。むやみもの。

廿かり-びと［狩人］(名) かりうど。(獵師)。

廿かり-ふ（カフ―）［刈生］(名) 草などの刈りたる後に、再び芽の生ふること。又、其芽。

かり-ぶし［假臥］(名) かりね。うたゝね。かりま「くら。

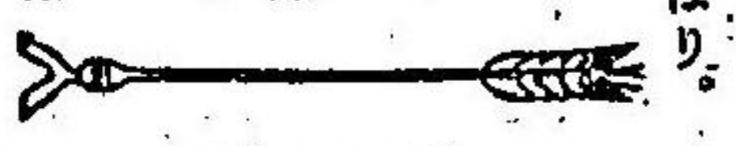
かり-ほ［刈穗］(名) 刈りたる稻の穗。

かり-ほ（オ―）［假庵］(名) 假につくりたるいほり。

かり-まいさう（ウ―ツ）［假埋葬］(名) かばねをかりにうづめおくこと。

かり-まくら［假枕］(名) ㊀うたゝね。かりね。 ㊁たびね。

かり-また［雁股］(名) 矢の根の一種、兜の鍬がたの如く、叉(マタ)になりて開きたるもの。(羊頭矢)。


［かりまた］

かり-みや［假宮］(名) ㊀かりにつくりたるごてん。 ㊁行在所。「吉野の―」。 ㊂神輿のお旅所。

廿かり-も［釭］(名) 車の轂(コシキ)の口にある鐵。かも。

廿かり-もがり［殯］(名) 死人を埋葬する前、暫時の間其屍を棺に入れて安置すること。

かり-もの［借物］(名) 借りたるもの。

かり-もよほ-す（モヨ―オス）［さしすすせ］［驅催］(他、さ四) 諸方よりかりだしあつむ。

廿かり-もり(名) 瓜の末成(スヱナリ)。

かり-や［假屋］(名) ㊀假につくりたるこや。こや。 ㊁神輿のお旅所。

かり-や［借家］(名) 借りたる家。ゑやくや。(賃房)。

(**か-り-やう**)（ヨウ―リ）［河梁］(名) かはのかけはし。

(**が-り-やう**)（ヨウ―リ）［雅量］(名) 度量ひろきこと。むねのうちのゆたかなること。

かり-やく［假役］(名) 假の役目。みならひ。臨時。

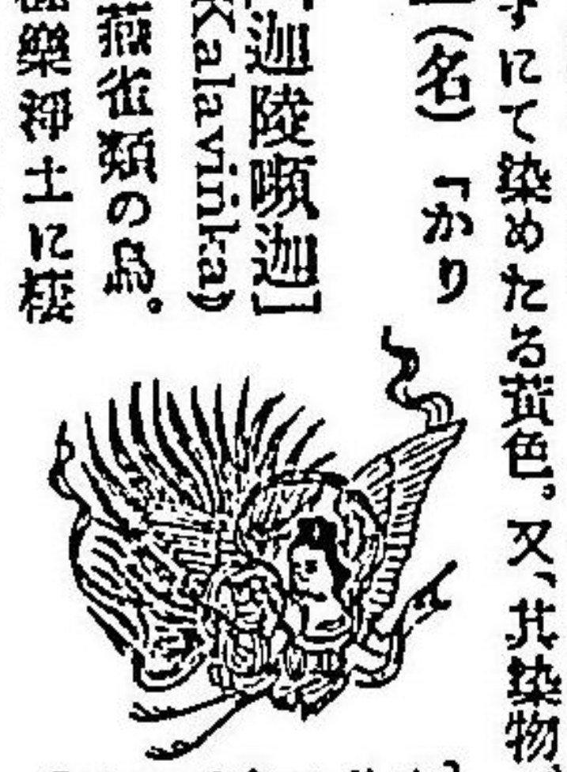
かり-やぐ［借夜具］(名) 借料を拂ひて借る夜具。かしやぐの對。

かり-やくそく［假約束］(名) かりそめのやくそ「く。又、くちやくそく。

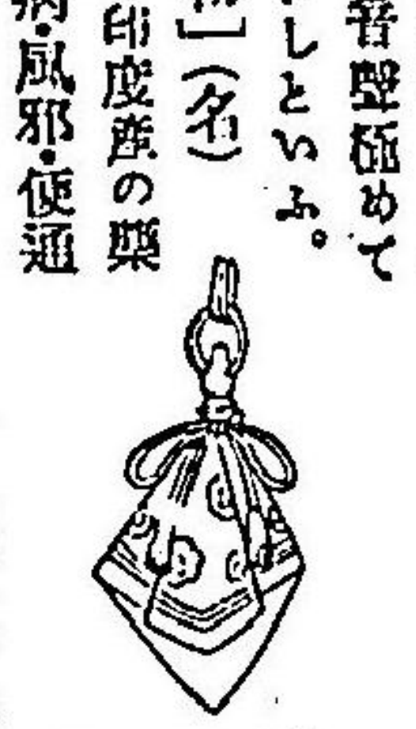
かり-やす［刈安］(名) 〔植〕禾本科に屬する草、山中に自生す、莖葉すゝきに似る、黄色の染料に供せらる。(王芻、青茅、藎草、黄草)。 ――**ぞめ**［刈安染］(名) かりやすにて染めたる黄色。又、其染物。

かり-やど［假宿］(名) 「かりのやど」に同じ。

カリヨウビンガ［迦陵頻迦］(名) 〔佛〕(梵語、Kalavinka) ㊀妙聲鳥と譯す。孔雀類の鳥。 ㊁想像上の鳥、極樂淨土に棲み、面美人の如く、音聲極めて微妙にして、比類なしといふ。


［カリヨウビンガ］

カリロク［訶梨勒］(名) (梵語、Haritaki)印度産の藥樹、その果實は眼病・風邪・便通によし、古來美しく飾れる袋に入れて、柱などにかけおきたり。


［カリロク］

廿かり-わらは（ワ―ワ）［狩童］(名) 「やまぶし」の一名。

(**か-りん**)［下臨］(名) ㊀高きより低きを臨むこと。 ㊁貴きものが賤きもの、許(モト)に往くこと。

廿か・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）［離］(自、ら下二) さかる。はなる。「目―」。

か・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）［枯］(自、ら下二) ㊀草木生氣盡きてかじく。 ㊁よく乾く。からぶ。 ㊂生氣無くなりておとろへつかる。「心―」。

か・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）［涸］(自、ら下二) ひる。かわく。「水―」。

か・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）［嗄］(自、ら下二) 音聲やぶれかはる。聲盡く。ゑはがる。ゑやがれる。

か・る（ら、り、る、る、れ、れ）［借］(他、ら四) ㊀返却すべき約束にて暫時其物を受く。 ㊁假に他の所有又は管理に屬するものを使用す。 ㊂他の助力を受く。たよる。「力を―」。(藉)。

か・る（ら、り、る、る、れ、れ）［驅］(他、ら四) ㊀おひちらす。おひたつ。 ㊁いそがす。はしらす。「馬を―」。 ㊂強ひて赴かしむ。強ひて敵に加はらしむ。「人數をかりあつむ」。

か・る（ら、り、る、る、れ、れ）［狩］(他、ら四) ㊀鳥又は獸を追ひ出し捕る。(獵)。 ㊁魚を漁す。すなどる。(漁)。 ㊂たづねさがす。さがしとる。

か・る（ら、り、る、る、れ、れ）［刈、芟］(他、ら四) ㊀群(ムラ)だちたる物を薙ぎ去る。など。「草を―」。 ㊁除き去る。削り絶つ。「殘賊を―」。

―がる(接尾) 或語に添へて、其おもひをなすの意を表はす語。「あはれ―」。「くるし―」。

かる-いし［輕石］(名) 「うきいし」(浮石)に同じ。

カルヴィン-けう（ヨウ―キ）［加爾維尼教＝Calvinism］(名) 「キリスト」敎新敎の一派、「フランス」國の神學者「カルヴィン」の唱道にかゝる。

カルカ(名) 鳥銃の具。こみや。(搠杖)。

かる-がも［輕鴨］(名) 〔動〕鴨の變種、背部黑色にして、頸の後部に青き光澤を有す、腹部は淡紅色にして黑色の縱紋あり。

かる-かや［刈茅］(名) かりとりたる茅。

かる-かや［刈萱］(名) 〔植〕禾本科に屬する草、形萱に似て小さく、葉に白色の縱線數條あり、秋の七草の一なり。

かるかや-たはし（シワ―ク）(名) 刈萱の莖を束ね、短く切りてつくりたるたはし。

かる-がる［輕輕］(名、副) さも輕くあるらしく見ゆるさまにいふ語。「―と提げて」。 ――・**し**（じく、しく、し、しき、しけれ）

［輕輕］(形、二) 「かろがろし」に同じ。

かる-くち［輕口］(名) 口前の滑稽めきて、面白味あること。ことばの輕くしてよく轉ずること。

かる-こ［輕籠］(名) 繩を縱横に交叉して編みたるもの、其四隅に繩をつけ、上に種々のものを載せ、棒をもて肩にかけて運ぶに用ふ。あじか。(簣)。

かる-こ［輕子］(名) 輕籠(カルコ)にて物を運送する賤業者。たちんばう。かつぎ。

カルコ(名) 「カルカ」に同じ。

カルサイ［加留佐以］(名) (「ホルトガル」語 Carisea の轉)羅紗の一種、地合稍や薄きもの。

カル-サン［輕衫］(名) (「ポルトガル」語、Calção) 一種の袴、裾だせまき仕立なるもの。(袴衦)。

かる・し（く、し、し、き、けれ）［輕］(形、二) 「かろし」に同じ。

カルシウム［加爾曳母＝Calcium］(名) 〔化〕白銀色の金屬、延性及展性を有し、錫よりは硬(カタ)し、空氣に觸るれば、水酸化物及炭酸鹽に變ず、天然には、石灰石・大理石・白堊・螢化石等となりて存在す。

カルタ［骨牌］(名) (「かりうち」の轉ともいひ、「ポルトガル」語Cartaの轉ともいふ) ㊀遊戯又は博奕に用ふる具、長方形の厚き札に、種々の形象を畫きたるものにして、其數は種類によりて同じからざれど、普通四五十枚を下らず、これを數人に分け、形象相似通ふ札と札とをあはせ取り、其札の點數によりて勝負を決するもの。 ㊁「うたガルタ」又は「いろはガルタ」の略言。 ㊂「トランプ」の一名。西洋ガルタ。

――**ばこ**［骨牌函］(名) ㊀「カルタ」を入るゝ箱。 ㊁德川時代に、兩替屋の店先に並べたりし箱、小だしの金錢を入るゝ料に供せしもの。

かる-に［輕荷］(名) ㊀輕き荷物。 ㊁船の荷の輕きとき、底に積む土石。

かるはずみ（名）「かろはずみ」に同じ。（輕率）。

ガルバニ（名）「オランダ」國の人「ガルバニス」（Galvanis）氏の發明にかゝる一種の電氣鍍金術。

かる・む［輕］（自、ま四）「かろむ」に同じ。

かる・む［輕］（他、ま下二）「かろむ」に同じ。

カルメラ（名）次條に同じ。

カルメル（名）《ポルトガル語Caramelo》一種の菓子、下等の砂糖を煮て泡を立たせ、そのまゝ凝らせたるもの。（浮石糖、泡糖、烘糖）。

かる・も［刈藻］（名）刈りたる藻。

卄**かる・も**［枯草］（名）かれぐさ。「臥す猪の床の、—にも」。 **—かく**［枯草掻］（他、か四）かれくさを掻き集めて臥す。（猪などにいふ）。

かるもの［輕物］（名）絹布の異稱。

卄**かるやき**［輕燒］（名）「かるやきせんべい」の略言。 **—せんべい**［輕燒煎餠］（名）砂糖を糯（モチゴメ）の粉に加へて製し、膨（フク）るゝやうに燒きたる煎餠。

かるゆき［輕行］（名）手輕く行くを。容易に埒（ラチ）あくを。

かるらか［輕］（名）「かろらか」の轉。

ガルロン［瓦＝Gallon］（名）「イギリス」國の量目、我國の二升五合一勺強にあたる。

かるわざ［輕業］（名）㊀身輕に行ふはなれ業、即ち、綱渡・梯子乘などの類。㊁極めて危險多き計畫又は生業。 **—し**［輕業師］（名）㊀輕業の興行人。㊁輕業の技を行ふ人。（肉飛仙）。㊂極めて危險多き計畫又は生業をなす者の稱。

（**かるゐ**［家累］（名）家族に關してのわづらひ。家事に關してのほだし。

（**がるゐ**［蛾類］（名）【動】鱗翅類に屬する昆蟲、變態完全にして、觸角は根棒狀をなさず、多く靜止するときは其翅を後方に向け横ふ、蛹は概ね繭を作る、益蟲多けれど害蟲もまた少なからず、かひこ・やままゆ等これに屬す。

かれ［彼］（代）㊀二人相對話するときに用ふる他の人の代名詞、即ち、第三人の稱。あれ。㊁身より遠くはなれたる事物を指すに用ふる代名詞。あれ。それ又はこれの對。 **—をしりおのれをしる**［知彼知己］敵と味方との事情を明かにして、能く其優劣長短を知るにいふ。

卄**かれ**［故］（接）かるがゆゑに。故に。

（**かれい**［家令］（名）㊀親王家にて、別當を助け家務會計を管理するもの。又、諸王家にて補叙の責に任じ、家務會計を管理し他の諸員を監督するもの。㊁華族にて、其一家の事務を管理し諸員を監督するもの、即ち、家臣の長。

（**かれい**［家例］（名）一家に昔より定例として擧行する儀式など。「—を守る」。

（**かれい**［苛令］（名）きびしき命令。（苛政）。

（**かれい**［嘉例］（名）めでたき例。（吉例）。

（**かれい**［遐齡］（名）年老いたるを。長壽。

（**かれい**［佳麗］（名）うるはしきを。きれいなるを。

（**かれい**［加齡］（名）年をむかへ齡を增すを。

（**かれい**［下隷］（名）しもべ。つかひをとこ。

卄**かれいひ**［乾飯］（名）「かれひ」（餉）に同じ。

かれいろ［枯色］（名）㊀草木などのかれしぼみたるときの色。㊁かさねの色目、表は白にて裏は薄色なるもの。

（**かれう**［下僚］（名）したづかさ。したやく。

かれえだ［枯枝］（名）かれたる木の枝。

卄**かれがし**［彼某］（代）かのなにがし。あのたれ。

かれがれ（名、副）㊀植物などの枯れんとするさまにいふ語。㊁聲嗄（ガシハ）るゝさまにいふ語。㊂卄交際などのうとくなるさまにいふ語。㊃卄おの〳〵相離れあるさまにいふ語。はなれ〳〵。

かれき［枯木］（名）枯れたる木。

かれくさ［枯草］（名）㊀かれたるくさ。㊁まぐさ。

かれこれ［彼此］（代）かれとこれと。

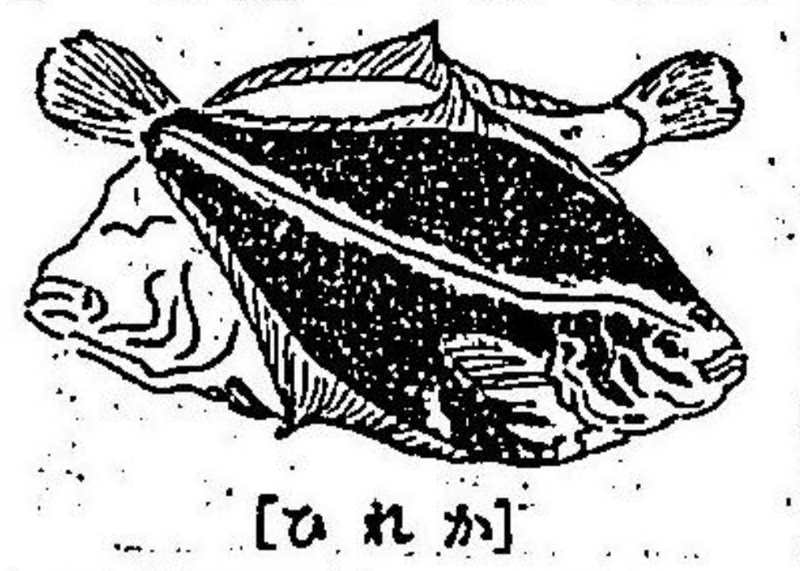
かれこれ［彼此］（副）㊀とやかく。いろ〳〵。㊁およそ。やがて。「—一里許隔つ」。

かれごゑ［嗄聲］（名）嗄れたる聲。しはがれごゑ。しやがれごゑ。（失聲）。

かれの［枯野］（名）草の枯れはてたる野。

かれは［枯葉］（名）枯れたる草木の葉。

かれひ［鰈］（名）【動】軟鰭類に屬する魚、體は頗る側扁にして稍々卵形をなし、一部は不等形をなす、殊に頭部は強くねぢれて高し、體の上面は砂色にして兩眼は此面上にあり大きくして分離す、他の一面は白く、これを下に向けて游泳す、近海の砂底に棲息す、種類多し。（比目魚、扁魚）。


［かれひ］

卄**かれひ**（名）（「かれいひ」の略言）㊀干（ホ）したる飯。はしひ。はしいひ。（糒）。㊁旅行などに持ち行く飯。べんたう。（餉）。 **—け**［餉笥］（名）べんたう。わりご。（樏子）。 卄**—つけ**［餉附］（名）鞍の後輪（シヅワ）の鞖（シホデ）の一名、古昔、此所に兵糧を付けて行きしよりいふ。

卄**かれふ**［枯生］（名）枯れたる草木。又、冬枯。

かれら［彼等］（代）彼の人々。あの人たち。あれら。

〜**か・れる**（自、ら下二）㊀「涸る」「嗄る」「枯る」等の訛。㊁技能進む。熟達す。「腕が—」。

（**かれん**［可憐］（名）憐れむべきを。愛すべきを。 **—せい**［可憐生］（名）憐れむべきを。憐むべきもの。

かろがろ［輕輕］（名、副）さも輕くあるらしく見ゆるさまにいふ語。

かろがろ・し［輕輕］（形、二）㊀いとたやすし。甚だ容易なり。㊁おごそかならず。おちつきてあらず。かろはずみなり。

（**かろく**［加祿］（名）祿だかの增し加はるを。（加秩）。

（**かろく**［家祿］（名）家に與はれる祿。ちぎやう。

かろ・し［輕］（形、二）㊀目方少なし。重からず。「目方—」。㊁威力なし。尊嚴ならず。「大將として—」。㊂沈着ならず。篤實ならず。㊃いやし。ひくし。㊄てがるし。たやすし。㊅すくなし。「罪—」。㊆はげしからず。ひどからず。「かろく打つ」。㊇利（ト）し。はやし。「車かろく、蹄するどし」。

かろし・む［輕］（他、ま下二）㊀輕侮す。あなどる。みさぐ。㊁をしまず。いとはず。

〜**かろしめる**［輕］（他）「かろしむ」の訛。

かろはずみ（名）かろ〴〵しく事を處置するを。思慮淺くしてはやるを。（輕率）。

卄**かろ・ぶ**［輕］（自、は上二）かろ〴〵しく見ゆ。かろ〴〵しくあり。

かろ・む［輕］（自、ま四）かろくなる。「病—」。

かろ・む［輕］（他、ま下二）㊀あなどる。かろんず。㊁かろくなす。すくなくす。

カロメル［Calomel］（名）水銀と鹽酸とを化合せしめたる劇藥、多くの瑕分を有すれど、また必用の藥品なり。（甘汞）。

かろやか［輕］（名）「かろらか」に同じ。

卄**かろらか**［輕］（名）物事の輕きさまにいふ語。

カロリー［Calorie］（名）【理】熱量の單位、一瓩の水を攝氏の零度より一度まで暖むるに要する熱量。

ガロン［瓦＝Gallon］（名）「ガルロン」に同じ。

かろん・ず［輕］（他、さ變）㊀あなどる。みさぐ。「人を—」。㊁をしまず。いとはず。「命を—るを、鴻毛も如かず」。

かわか・す［乾］（他、さ四）かわくやうにす。ほす。（干）。

かわき［乾］（名）かわくを。

かわ・く［乾］（自、か四）㊀濕氣去る。水分盡く。ひる。㊁喉にうるほひ盡きて、飲料を得たく思ふ。（渇）。

（**かゐ**［下位］（名）ひくき地位。しも。

（**かゐん**［下院］（名）二院制度にて、人民の選出したる議員を以て組織する議院の稱、上院の對。

（**かをく**［家屋］（名）いへ。 **—ぜい**［家屋稅］（名）家屋の所有者に對して賦課する租稅。

かをら・す［薰］（他、さ下二）よき香を發せしむ。にほはす。

かをり［薰］（名）かをるを。かをる氣。にほひ。（香、芳）。

かを・る［薰］（自、ら四）よき香發す。にほふ。

卄**かん**（名）長官（カミ）の音便。「—の君」。

かん［燗］（名）《本邦の創作にかゝる「火」と「間」との合字、火熱中間を得るの意》酒を器に入れて適宜の溫度まであたゝむるを。又、其溫度。「酒の—」。（煖）。

（**かん**［寒］（名）㊀さむきを。さむき時。さむさ。㊁冬の大寒と小寒との總稱。「—三十日」。㊂さびしき生活。まづしきを。「—士」。

（**かん**［癇］（名）㊀物事に激怒するを。又、激怒し易き性質。㊁神經過敏なる一種の病氣、身體に痙攣などを起し、[illegible]などにきづみ易し。「—の病」。

（**かん**［駻］（名）馬の勢つよくして馭し難きを。「前脚とつと—強く」。

（**かん**［漢］（名）㊀支那古代の有名なる朝、分つて前漢（西漢）と後漢（東漢）とす、前漢は紀元四百五十五年劉季が帝位に即きしに始まり、同六百六十八年孺子嬰が廢せられしに終り、後漢は同六百八十五年劉秀が帝位に即きしに始まり、同八百八十年魏に亡されしに終れり、當朝は漢人種の勢力最も發展せし時代にして、又、統治の閲最も久しかりしより、遂に支那の異稱となれり。「カラ」。「—學」。「—字」。「—文」。㊁をのこ。をとこ。「暴—」。「好—」。

（**かん**［間］（名）㊀あひ。あひだ。「天地—」。㊁なかたがひ。怨隙。㊂をり。しほ。「—に乘じてこれを說く」。 **—はつをいれず**［間不容髮］物事極めて近接し若しくは急激にして、たとへば髮毛一本をさしいるゝすきまもなきをいふ。

（**かん**［閑］（名）㊀ひま。いとま。「半日の—」。㊁むよう。むだ。

（**かん**［肝］（名）きも。「—の臟」。

（**かん**［稈］（名）禾本科に屬する植物の莖の中空なるもの。わら。

（**かん**［勘］（名）かんがへ。さとり。「—が鈍し」。

（**かん**［艦］（名）いくさぶね。ぐんかん。「—首」。「—尾」。

（**かん**［疳］（名）脾疳の略言。

（**かん**［柑］（名）【植】柑子の略言、かうじ。「蜜—」。

（**かん**［欠］（名）《「けん」の轉》物の勘定に、前より數の減ずるを。めり。「—が立つ」。

（**かん**［感］（名）感ずるを。感じたるこゝろ。感じたるかんがへ。「[illegible]の—」。

（**かん**［翰］（名）㊀てがみ。「—を呈す」。㊁ふで。「—墨」。㊂つばさ。「—を收むる鳥」。

（**かん**［簡］（名）㊀大要を記したるてがみ。「—を送る」。㊁わりふ。ふだ。「—札」。㊂複雜ならざるを。繁縟ならざるを。「繁より—に入る」。

（**かん**［奸］（名）㊀德義にはづれたるを。非理なる

と。㊁心ねぢけたること。よこしま。㊂かたまーさもの。わるもの。あくにん。「ーを誅す」。

カン［甲］（名）（字の唐音）音の調子の上がること。

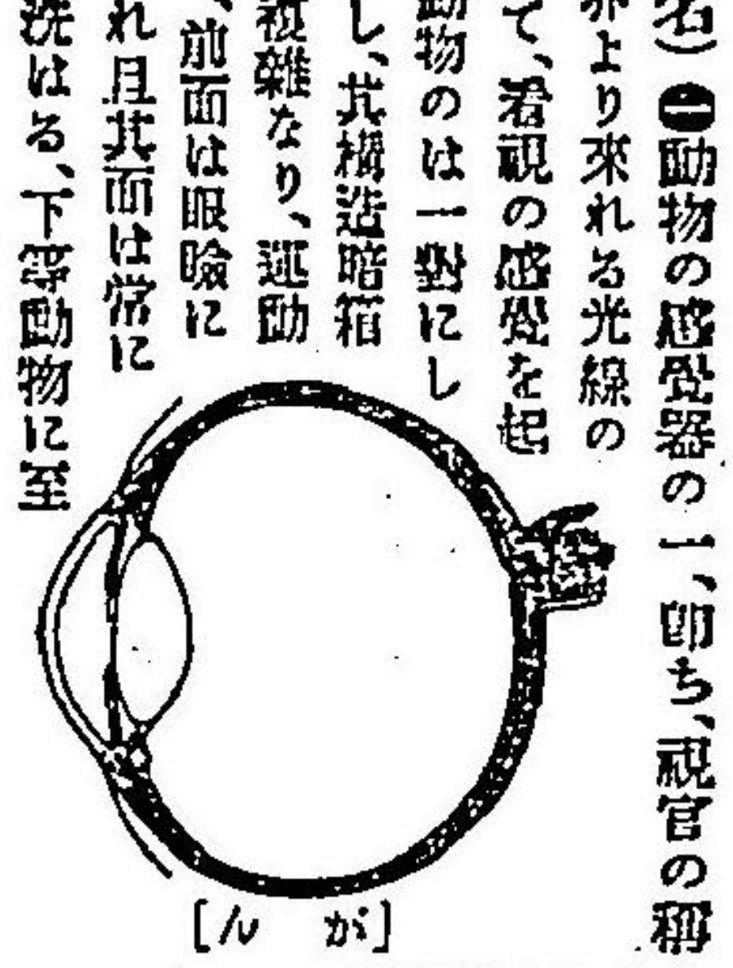
カン［羹］（名）（字の唐音）㊀「ざふに」の一名。㊁羹子の一種、よせ集めて凝（カタ）らせたるもの。「羊ー」。

（がん）［龕］（名）㊀佛像のづし。㊁ひつぎ。

（がん）［顔］（名）かほ。おもて。「ーを解く」。

（がん）［雁］（名）【動】「かり」に同じ。

（がん）［癌］（名）惡性なる固き腫物、往々大なる磊塊をなす、多くは遺傳性にして治癒し難し、胃癌・舌癌・子宮癌等あり。


［がん］

（がん）［眼］（名）㊀動物の感覺器の一、即ち、視官の稱にして、外界より來れる光線の刺戟に依りて、視覺の感覺を起す所、高等動物のは一對にして球形をなし、其構造暗箱に似て甚だ複雜なり、運動自在にして、前面は眼瞼にて保護せられ且其面は常に淚によりて洗はる、下等動物に至りては、或はこれを有するものあり或は有せざるものあり、これを有するものにても、何れも不完全なり。（右圖は人類の眼を縱斷したるもの）。㊁見ること。見る所。「ーに滿つ」。㊂めきき。鑑識。「ー高し」。㊃あな。穿孔。「針ーを穿つ」。㊄めだまの狀をなすもの。

（かん-あく）［姦惡］（名）㊀心のねぢけまがりたること。惡事をなすこと。㊁わるもの。あくにん。

かん-あけ［寒明］（名）寒あきて、立春の日になること。

かん-あげ［髮揚］（名）髮を結（ユ）ふこと。

かん-あふひ（オイ／アフヒ）［寒葵］（名）【植】あふひの一種、花は冬咲く。（杜衡）。

（かん-い）［汗衣］（名）はだぎ。あせじゆばん。

（かん-い）［簡易］（名）てがるきこと。たやすきこと。「ーの法」。（簡單、平易）。

（かん-いう）［甘誘］（名）甘言をもてあざむきいざなふこと。

（がん-いう）［含有］（名）中にふくみもつこと。

（かん-いん）［姦淫］（名）不正なる婬事をなすこと。夫婦にあらざればなすまじき所爲を、夫婦にあらざるものゝ間に於て行ふこと。――ざい［姦淫罪］（名）【法】強姦罪、準強姦罪又は姦通罪の總稱。

（かん-う）［甘雨］（名）春さきなどにしと〱とよく物をうるほす雨。

（かん-えう）（ウーヨ）［簡要］（名）㊀物事のしめくゝり。要點。㊁其物事の要點をつまみあげて說くこと。

（かん-えう）（ウーヨ）［肝要］（名）必ず要用なること。ひつえう。かなめ。（肝心）。

（かん-えつ）［感悅］（名）心にいたく感じて喜ぶこと。「ーに堪へず」。

（かん-えつ）［簡閱］（名）かぞへしらぶること。けみすること。――てんこ［簡閱點呼］（名）豫備役又は後備役等の下士卒を其地方にて召集し、人員のとりしらべをなすこと。

（がん-えん）［岩鹽］（名）【鑛】粒狀又は立方體の結晶をなす鹽素と曹達との化合物、水に溶解し易く鹹味ありて食鹽に同じ、大塊となりて現出し、岩石をなすことあれど、純粹なるものは稀なり。

（かん-おう）［感應］（名）㊀心の物事に觸れて動くこと。心にこたへひゞくこと。㊁信心のほど神佛に通ずること。感通。㊂【理】帶電體が發電體又は磁石に近づくとき、電氣又は磁氣を帶ぶるに至ること。又、磁場の強さを變ずるとき電流の通ずること。――き［感應起電機］（名）【理】感應によりて電氣を收集する機械。――コイル［感應コイル］=Induction coil（名）【理】強き感應電流を起す機械、其構造は太き針線數十條にて作りたる「コイル」（捲線）を心とし、細き針線にて作りたる「コイル」（捲線）にて蔽ひたるものより成る、太き針のものを第一「コイル」といひ、小さき針のものを第二「コイル」といふ、第一「コイル」は電流器及電池に連なり、電流が斷續的に通ずるが故に、第二「コイル」に強き感應電流起る。――でんりう［感應電流］（名）【理】磁場を變化するときに起る電流。

（かん-おん）［漢音］（名）漢字の音の一、支那の南北朝頃は鮮卑族等の侵入によりて、自然に字音の變化を生じ、漢以來の古音は北朝の地方に行はれ、雜揉せる音は南朝の地方に行はれぬ、漢音は即ち北朝の地方に行はれし字音の稱にして、吳音は即ち南朝の地方に行はれし字音の稱なり、共に我國に傳來したり、例へば、「行」を漢音にては「かう」、吳音にては「ぎやう」といふが如し。

（かん-か）［閑暇］（名）あき。ひま。いとま。

（かん-か）［感荷］（名）うけたる恩を深く心に感じ思ふこと。感佩。（感謝）。

（かん-か）［漢家］（名）㊀漢方の醫術を行ふ醫師。㊁支那にて、漢朝の帝室。「ー恩薄し」。

（かん-か）［轗軻］（名）志を得ざること。世に容（イ）れられざること。おちぶれたること。「ー不遇」。（坎坷）。

（かん-が）［閑雅］（名）㊀みやびやか。しとやか。㊁土地しづかにして景色のおもむき多きこと。

（がん-か）［眼下］（名）めのした。「ーに見る」。

（がん-が）［谽呀］（名）㊀大きなる口を開くこと。㊁谷又は坑などの廣きこと。

（かん-かい）［鑑戒］（名）いましめ。てほん。かゞみ。

（かん-かい）［陷害］（名）姦計にかけて人を罪におとし又は難にあはすること。

（かん-がい）［感慨］（名）物事に感じてなげくこと。

（がん-かい）［眼界］（名）目もて見るかぎり。

（かん-かう）（ウーコ）［勘考］（名）かんがへ。しあん。

（かん-かう）（ウーコ）［間行］（名）しのびあるき。微行。

（かん-かう）（ウーコ）［刊行］（名）文書を版に上（ホ）せて世に公にすること。（印行）。

（がん-かう）（ウーコ）［雁行］㊀空中に飛びゆく雁の行列。㊁人とはすかひに並び行くこと。

（かん-かく）［看客］（名）みて。よみて。けんぶつ。どくしや。（看官）。

（かん-かく）［間隔］（名）あひだ。へだゝり。

（かん-かく）［扞格］（名）互に相容れざること。互に相一致せざること。

（かん-かく）［感覺］（名）㊀感覺器により外界の刺戟を神經に傳へて腦に達し、これを感受すること。㊁不明瞭の智識。㊂さとり。のみこみ。――き［感覺器］（名）動物の體表にありて、種々なる外界の刺戟を感受する局所、即ち、觸官・味官・嗅官・聽官・視官等なり。――しんけい［感覺神經］（名）感覺器に刺戟あるとき、これを神經中樞に傳達する徑路、組織は通常三層より成り、神膜の內に髓質ありて其中心には軸索と稱する纖維貫通す、此軸索は即ち最も傳達に必要あるものにして、他は保護の用をなすものなり。――ちゆうすう［感覺中樞］（名）大腦・延髓・脊髓の稱にして、感覺神經の中樞なり、即ち、感覺神經より傳達し來る外界の刺戟を感受する所。――ろん［感覺論］=Sensualism（名）【哲】智識の根源は感覺にありとなす說にして、外界の刺戟腦に傳はりて感覺となり、此感覺蓄積して諸種の高尚なる智識を生ずとなす。

（かん-がく）［漢學］（名）漢文を綴り又は漢書を研究する學の總名、又、支那の漢朝時代に行はれし學問。――しや［漢學者］（名）漢學の學者。

がん-がさ［雁瘡］（名）多くは脚部に發する一種の皮膚病、慢性にして容易に治し難し、年々某時即ち雁の來る頃より發する故に此名あり。がんさう。

〔かん-かち〕（名）固くして小さき物の觸れて出る音。――だんご（名）杵（キネ）を小さき臼の緣にあてゝかんかちと音をさせ、路上に於て舂（ツ）きて賣りありく團子、多くはもろこし又は黍を以て製し、これにきな粉をまぶしたるもの。

（かん-かつ）［奸黠］（名）わるがしこきこと。又、其人。（奸猾）。

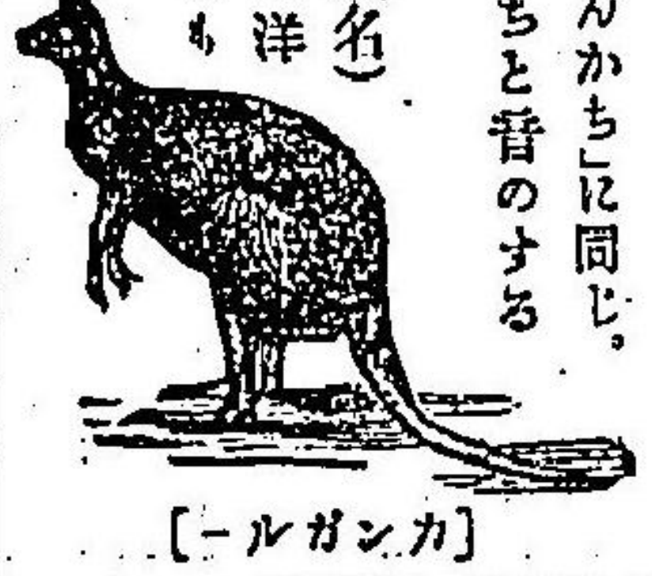
（かん-がふ）（ウーゴ）［勘合］（名）㊀支那の明朝の頃、其交通せる諸國に往來の證として與へたるわりふ。㊁周防の大內氏が外國と通商する爲に、我彼の商人に與へたる通商許可の證。

かんが-ふ（ウーガ）［考］（他、は下二）（へ　へ　ふ　ふる　ふれ　へよ）㊀思慮を廻らす。おもひはかる。しあんす。㊁勘當す。とがむ。㊂とりしらぶ。きはむ。

かんがへ（エーガ）［考］（名）㊀かんがふること。かんがへたる意見。しあん。かうあん。いけん。㊁かんだう。

かんが-み・る（み　み　みる　みる　みれ　みよ）［鑑］（他、ま上一）㊀例に照らして見る。手本にあはせて計る。（鑒）。㊁識別す。みわく。

〔かんから〕（名、副）（名）「かんかち」に同じ。――だいこ（名）かんかちと音のする小さき太鼓。


［カンガルー］

カンガルー［Kangaroo］（名）【動】有袋類に屬する獸、南洋諸島の原野に產す、大きなるものは起坐するとき高さ六尺に達す、前肢は甚だ小形なれど、後肢は尾と共に長大にして能く跳躍す、植物を食とし、子を生めば腹にある皮袋の中に入れて養育す。（袋鼠、長尾鼠）。

（かん-かん）（名、副）㊀ひゞく聲。「ーと鳴る」。㊁火などの盛（サカ）んに起りたつさまにいふ語。「火がーする」。㊂金屬など極めて固きものゝ相觸れて出る音。「ー金をたゝく」。

（かん-かん）［汗簡］（名）㊀支那の上代にては、竹を炙りてあぶらを去り、これに文字を書きしよりいふ。㊁文書又は記錄の異稱。

（かん-かん）［侃侃］（名、副）正直にして節（ミサヲ）を曲げざるさまにいふ語。「ーたる臣」。

（かん-かん）（名）結（ユ）ひたる髮。又、髷。（小兒の語）。

（かん-がん）［汗顔］（名）いたく恥ぢて顔に汗かくこと。極めて恥かしきこと。「ーの至り」。

（がん-がん）［巖巖］（名、副）山のけはしくそばだちたるさまにいふ語。「維石ー」。

（かん-き）［寒氣］（名）さむきこと。さむき時。さむさ。「暑氣の對」。

（かん-き）［勘氣］（名）「かんだう」に同じ。

（がん-き）［眼氣］（名）めのやまひ。眼病。

がん-ぎ［雁木］（名）㊀船つきに設けある階段。碼頭。㊁だん〱。はしご。階段。㊂犬の牙の如くに左右互に凸凹ありて、よく相合ふもの。「ーに組む」。㊃次第を追ひて進むこと。「ーざとり」。㊄「がんぎやすり」の略言。――ざとり［雁木悟］（名）頓に徹悟の境に到達するにあらずして、次第を追ひて徹悟の境に向ふこと、例へば、臨濟宗などにて、幾多の公案を經過して次第に進捗する如きこれなり。――だな［雁木棚］（名）四十八棚の一、雁木に組み合せたるもの。――やすり［雁木鑢］（名）㊀やすりの一種、太くして目あらく、金屬を擦るに用ふるも

の。㊁物事の磨滅するを又は齟齬するをいふ語。

(がん-きう[眼球](名) 眼に同じ、其球狀をなせるよりいふ。めだま。

(かんぎう-じゆうとう[汗牛充棟](名) (牛の汗かく程の重さと棟につかへるほどのかさとの意) 書籍の甚だ多きをいふ語。

(かん-ぎく[寒菊](名) 【植】菊の一種、冬期開花する故に名づく、觀賞用として栽培せらる。こがねめぬき。(珠子菊)。

(かん-きふ（キウ）[感泣](名) いたく感じて泣くこと。

(かん-きやう（キヤウ）[寒鄉](名) さびしきさと。

(がん-きやう（キヤウ）[眼鏡](名) 近眼の人が遠き物を見るため、又は遠眼の人が近き物を見るため、若しくは光輝の強きを避くるために眼にかくる具、眼を蔽ふに足るほどに切りたる楕圓形の「ガラス」の片の一雙に、銅・「ニッケル」・銀又は金などの線及蔓を附したるを普通とす、近眼者の用ふるは凹「レンズ」にして遠眼者の用ふるは凸「レンズ」なり、又、光輝の甚だ強きを避くるためには、綠色又は暗色の「ガラス」を用ふ。めがね。

(かん-きやく[閑却](名) 入用なきこと。

(かん-きよ[閑居](名) ㊀閑靜なる地のすまひ。㊁ひまにて居ること。やすみゐること。

(かん-きよ[扞禦](名) ふせぐこと。ふせぎ。

(かん-きよう[感興](名) ㊀おもしろみ。こゝちよさ。㊁其ものに趣味あるか意義あるかすること、即ち、美の價値の必要條件。

(かん-きよく[奸曲](名) ㊀わるだくみ。よこしま。(姦曲)。㊁わるもの。あくにん。

カン-キン[看經](名) (字の唐音) ㊀經文を默して讀むこと。㊁經文を讀むこと。(讀經)。

(かん-きん[監禁](名) 身體の自由を束縛して幽閉すること。おしこめ。――ざい[監禁罪](名) 【法】權利なくして不法に他人の身體の自由を束縛し幽閉せし犯罪。

(かん-ぎん[感吟](名) ㊀俳句にて感ずべき秀作。㊁他人の詩歌を感賞して吟ずること。

(かん-ぎん[閑吟](名) しづかに詩歌をくちずさむこと。

(がん-きん[贋金](名) にせがね。

(かん-く[甘苦](名) ㊀甘きとにがきと。㊁樂しきと苦しきと。

(かん-く[寒苦](名) 寒氣のくるしみ。

(かん-く[艱苦](名) なやみ苦しむこと。

(かん-ぐ[寒具](名) 寒氣をしのぐ用意。寒中のしたく。

(がん-くつ[岩窟](名) ㊀いはや。(石洞)。㊁不規律に、かど〳〵しきさまにいふ語。「―な坂」。

(かんく-てう（テウ）[寒苦鳥](名) 想像上の鳥、印度の雪山に棲み、夜に入れば寒氣になやみ巢を構へんと思ふも、晝はこれを忘るゝ、といふ。

かんく-の-あめ[寒九雨](名) 寒に入りてより九日目に降る雨、農家にて作物に利ありといへり。

がん-くび[雁首](名) 烟管(キセル)の頭、古昔のは長くして雁の首に似たりしより此名あり。(雁頸、火頭)。

がんくひ-まめ[雁喰豆](名) 【植】豆(マメ)科に屬する栽培草本、種子は色黑くして形ふぢまめに似たり。(黑扁豆)。

(かん-くわ[看過](名) ㊀見すごすこと。目をとほすこと。㊁見たばかりにて其まゝにすておくこと。

(かん-くわ[坩堝](名) るつぼ。

(かん-くわ[干戈](名) ㊀たてとほこと。㊁たゝかひ。戰爭。――をうごかす[動干戈] 戰爭をはじむ。

(かん-くわ[感化](名) 感じて善にうつらしむること。――じげふ（ゲフ）[感化事業](名) 不良の少年などを感化し善良の人となすこと。――ゐん[感化院](名) 地方長官の管理に屬し、不良少年を收容して其感化を圖る所。

(がん-くわ[眼科](名) 眼一切の醫術。(眼醫)。――い[眼科醫](名) 眼科の專門の醫者。めいしや。

(かん-くわい[感懷](名) 感じたるおもひ。

(がん-くわう（クワウ）[眼光](名) めのひかり。又、みるちから。――しはいにとほる[眼光透紙背] 讀書の理解力が字句以上に及ぶにいふ。

(かんくわう-せい（クワウ）[感光性](名) 【化】物質の光によりて分解する性質、硝酸銀を塗りたる紙の光によりて黑變するが如きこれなり。

(かん-くわん[感官](名) 感覺器に同じ。

(かん-くわん[間關](名) 艱難してさまよふこと。

(かん-くわん[看官](名) みて。よみて。けんぶつ。どくしや。

(かん-くわん[看貫](名) 物品の貫目のかけあらためをなすこと。

(かん-ぐん[監軍](名) 軍隊の監督、又、其職。

(かん-けい[奸計](名) わるだくみ。(姦計)。

(かん-けい[幹莖](名) 植物の上方に向ひて生長する軸部、これに葉又は枝を生ず、其位置又は外部の狀態によりて或は地中に存在して根狀をなし或は地上に現出す、狀態性質一ならずして、生活期の長短もまた種類によりて異なり。みき。くき。

(がん-けい[岩頸](名) 【地】岩流によりてなりたる圓錐形の丘。

(がん-けい[巖桂](名) 【植】「もくせい」の異稱。

かんげい-こ[寒稽古](名) 寒中に寒氣を犯して、早朝に擊劍などを學ぶこと。

(かん-げき[間隙](名) すきま。ひま。

(かん-げき[感激](名) 感じて意氣おこりふるふこと、感奮。

(かん-けつ[簡潔](名) 文章などの簡略にして要領をつくせること。つゞまやかなること。くだ〳〵しからぬこと。(簡固)。

(かん-けつ[汗血](名) 駿馬が遠路疾走して、あせに血のまじり出ること。

(かん-けつ[勘決](名) よく考へて決定すること。

(かん-けつ[間歇](名) 時をへだてゝ起ること。――せん[間歇泉](名) 一定の時に水蒸汽及熱水を噴出する溫泉。――ねつ[間歇熱](名) 「マラリヤ」性の熱病により、患者の身體に時を定めて發熱すること、おこり等これなり。――ゐでん[間歇遺傳](名) 祖先よりの遺傳が、一代又は數代を隔てたる子孫に發すること。

(かん-げつ[寒月](名) 冴えて寒く見ゆる冬の月。

(がん-けつ[巖穴](名) いはのほらあな。――の-し[巖穴士](名) 世をのがれて山野などに隱れたる人。

(かん-けん[寒暄](名) さむさとあたゝかさと。かんだん。――をじよす[叙寒暄] 時候のあいさつをなす。

(かん-けん[勘檢](名) 考へしらぶること。檢閱。

(かん-げん[諫言](名) 諫むること。諫むる言。いさめ。「―を用ひず」。

(かん-げん[甘言](名) 人の氣に入る巧なる言。うまいことば。「人を欺く―」。

(がん-けん[眼瞼](名) 眼珠の上下を被ふ皮、上部のものは伸縮す、よりて眼を開閉するを得。

‡かん-こ[神子](名) 「かみこ」の音便。

(かん-こ[諫鼓](名) 古昔、人民の上へ對して諫言する便を圖り、官闕に置きし鼓、諫言せんとする人民は、これを打ちて其意を通じたり。

(かん-こ[簡固](名) 「かんけつ」(簡潔)に同じ。

(かん-こ[鹹湖](名) 【地】鹹水を湛(タヽ)ふる湖、すべて排水口を有せざるもの。

(かん-ご[監護](名) 監督し保護すること。

(かん-ご[看護](名) かいはう。みとり。看病。

(かん-ご[閑語](名) ㊀靜かなる物語。いそがぬ談話。㊁空しく時間を費す談話。むだばなし。

(かん-ご[漢語](名) 漢字を音讀したる語。又、漢字にて綴りたる語。

(がん-こ[含胡](名) ㊀聲の口に含まれてよく聞えざること。㊁はつきりしたる決答なきこと。

(かん-こう[甘汞](名) 通常白色に稍や黃色を帶びたる粉末、醫藥殊に下劑に供せらる、古來伊勢國にて製出す、其法は食鹽と明礬との混合物に多量の水銀を加へ、これを土製の坩堝に入れて熱すれば昇華して半透明の結晶體を得。

(かん-こう[箝口](名) ㊀口をふさぐこと。言を發せざること。(緘口)。㊁言論の自由を束縛すること。

(がん-こう[眼孔](名) ㊀眼球のゐる孔。めのあな。㊁見識の範圍。「―小なり」。

(かんこう-じゆす[寒紅繻子](名) 一種の織物、「ガス」絲と綿絲とを交へ織り、光澤をつけて唐繻子をまねたるもの。

(かん-こうばい[寒紅梅](名) 【植】梅の變種、花は八重にして紅色なり、寒中に咲く。

かん-ごえ[寒肥](名) 寒中に植物に施す肥料。

(かんご-ぎむしや[監護義務者](名) 未成年者又は精神病者に對して、其監護の義務を負ふ者。

(かん-こく[寒國](名) さむき國。

(かん-ごく[監獄](名) 自由刑に處せられたる犯罪人又は刑事被告人を收容して、拘禁留置する所。らうや。ひとや。(檻倉、牢獄)。――きよく[監獄局](名) 司法大臣の意思を受け、監獄に關する一切の事項又は假出獄・免幽閉・監視假免出獄人保護等に關する事項を掌る司法省の一局。――しよ[監獄署](名) 監獄のやくしよ。

†かんこ-くさし[紙子臭し](形、二) 紙類・綿類・絲類などの火に焦(コ)げたる臭あり。きなくさし。かこくさし。(紙焦、焦臭)。

(かんご-そつ[看護卒](名) 軍隊の衞生部又は病院に附屬して、兵士の病者・傷者を看護する兵卒。

(かんご-ちやう（チヤウ）[看護長](名) 看護卒を取締(トリシマ)る下士官。

†かん-こ-どり[閑子鳥](名) 【動】「かつこうどり」の訛。「よぶこどり」に同じ。

(かんご-にん[看護人](名) 病傷者を看護する人。

(かんご-ふ[看護婦](名) 病傷者の看護をつかさどる婦人。特に、內務省の免許を受けて、病傷者の看護を職業とする婦人。

かん-こり[寒垢離](名) 寒中に垢離を行ふこと。

かん-ごゑ[寒聲](名) 寒中に謠をうたひ又は經を讀みなどして、聲をならすこと。

カン-ごゑ[甲聲](名) 甲ばしりたる高き聲。

(かん-さ[奸詐](名) わるだくみ。いつはり。

(かん-さ[勘査](名) つきあはせてとりしらぶること。くりかへしてとりしらぶること。

(かん-さ[監查](名) 監視し檢查すること。

(かん-ざい[寒劑](名) 【理】溫度を著しく降下せしむるに用ふる混劑、普通は鹽と碎氷との混合にして、其融解する際に融解熱を要するを以て、溫度著しく降下するなり。

(かん-さう「檻倉」(名) ひとや。らうや。

(かん-さう「諫爭」(名) おもてを犯して屈せずにいさむること。

(かん-さう「感想」(名) 感じて起りたる思想。おもひ。

(かん-さう「敢爭」(名) 決心して爭ふこと。

(かん-さう「疳瘡」(名) 梅毒によりて、陰部次第に潰爛する瘡。

(かん-さう「乾燥」(名) ㊀濕氣又は水氣なきこと。かわくこと。ひること。㊁趣味なきこと。おもしろみなきこと。——しつ「乾燥室」(名) 物を乾かすために特別の裝置をなせる室。「材木の—」。——くわ「乾燥果」(名)【植】果皮の乾燥せる果實、例へば、堅果即ち栗の類、翅果即ち楓の類、穎果即ち稻の類。——しよくぶつ「乾燥地植物」(名)【植】乾燥せる土地に適する植物、厚き肉質の莖葉を具ふるもの多し、地衣類の如きは岩石上に着生せる乾燥地植物なり。——むみ「乾燥無味」(名) 詩文などが、文句の修飾を欠き又は意味の含蓄に乏しく、讀みて何等の趣味なきこと。——れうはふ「乾燥療法」(名) 銃創の治療に、甚しく穢れ若しくは化膿せるもの、外は、洗滌せずにたゞ拂拭して、繃帶を施すこと。

(かん-ざう「肝臟」(名)【生】腹腔の右上側橫隔膜の下際にある赤褐色の消化腺、胃の上面を蔽(オホ)ふ、上部は凸隆し下部は凹陷す、血液中より膽汁を釀造しこれを膽囊に送る。

(かん-ざう「甘草」(名)【植】荳(マメ)科に屬する宿根草、高さ二三尺許、葉は互生し形狀の葉に似て、莖と共に毛茸を有す、花は蝶の形をなし荳の花に似て淡紫色を呈す、根は黃色にして甘味を有し、用ひて藥料とす、又、其汁を取りて物に味を付くるに用ふ。あまき。あまくさ。あまづる。(蜜甘、美草)。

(がん-さう「雁瘡」(名)「がんがさ」に同じ。

(がん-ざう「贋造」(名) 贋(ニ)せてこしらふること。又、にせもの。僞造。——ぶつ「贋造物」(名) 贋せてこしらへたる物。にせもの。

(がん-さく「贋作」(名) がんざう。

かん-ざけ「燗酒」(名) 燗をしたる酒。かんしゆ。

かん-ざし「簪」(名)（髮挿(カミサシ)の音便）㊀冠の附屬品、巾子(コジ)のもとに入れ、中のもとゞりを支ふるもの。㊁婦人の頭髮にさす一種の裝飾品、種類甚だ多し。

(かん-さつ「監察」(名) 人の所業を監査すること。又、其人。めつけ。

(かん-さつ「鑑札」(名) 或營業を許可したる證として、官より下附する印符ある木札。(免許札)。

(がん-さつ「贋札」(名) 贋造の紙幣。にせさつ。

(かん-ざまし「燗冷」(名) 冷えたる燗酒。

かん-さやく「監査役」(名) 株式會社又は株式合資會社の機關の一、會社の業務を監督し檢査するものにして、株主總會に於て株主中より選任す。

かん-ざらし「寒晒」(名) 食物などを寒中に晒して製すること、(寒製)。

かん-ざらひ「寒復習」(名) 寒中に早朝の寒氣を犯して、歌曲などの復習をなし聲をならすこと。

(かん-さん「閑散」(名) 勤務なきこと、用事なきこと。ひま。「官を退きて—なり」。

(かん-さん「汗衫」(名) あせとり。はだぎ。

(かん-さん「寒酸」(名) まづしきこと。さむしきこと。

(かん-し「諫止」(名) いさめて其事をおもひとゞまらすること。

(かん-し「漢詩」(名) 支那の詩。カラうた。和歌の對。

(かん-し「監視」(名) ㊀とりしまりまもること。きをつけみまもること。㊁【法】附加刑の一、犯罪人が主刑を終へし後、これに就きて一定の期間內に執行する行政處分にして、其期間內は、居住移轉の自由を禁じ且警察官をして其行狀を監視せしむる。

(かん-し「寒士」(名) 貧しきさむらひ。

(かん-し「瞰視」(名) 見おろすこと。

(かん-し「敢死」(名) 必死。決死。

(かん-し「甘死」(名) 死ぬるを厭はぬこと。

(かん-じ「漢字」(名) 國字に對して支那文字の稱、其多くは形象文字なり、上古蒼頡といふ人、鳥跡を觀て發明したるものといふ、漢學の傳來以後、我國にてこれを使用すること年を逐ひて多く、なほこれを用ふ。

(かん-じ「幹事」(名) ㊀其事を擔當すること。又、其人。㊁團體などにて、其庶務を司どる人。

(かん-じ「監事」(名) ㊀前條(二)に同じ。㊁法人の機關の一、其財產又は業務を監査するもの。

かんじ「感」(名) ㊀感受すること。感覺。㊁知覺すること。會得。「—の鈍きやつ」。㊂うつり染むこと。感じ動くこと。㊃きゝめ。「藥の—」。

かんじ「寒」(名) さむさ肌にしみわたること。さむさ。

(がん-じ「雁齒」(名) 橋上に橫たへたる材木の段。

(がん-じ「眼字」(名) 漢詩にて、五言の第三の字及七言の第五の字の稱、此字は、其句中の眼目にして、最も推敲を要するものなればいふ。

(がん-じ「雁字」(名) ㊀かりのたまづさ。㊁かりの空中に飛ぶ列が、時に字形をなすよりかりの列にいふ語。——あうさ「雁字鶯梭」(名) 雁の空中に飛ぶ列を字形にたとへ鶯の樹間をとびかふさまを織機の梭(サ)にたとへなどして、詩文の字句を虛飾すること。

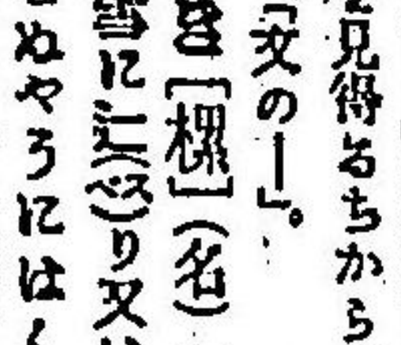
かんじ-い・る（ら、り、る、れ）「感入」(自、ら四) 深く感ず。

(がん-しう「含嗽」(名)「がんそう」に同じ。

(かん-しかめん「監視假免」(名)【法】監視に附せられたるものが、改悛の狀ある場合に、司法大臣が假に其監視を免ずる行政處分。

(かん-しき「鑑識」(名) 物事を見分くるはたらき。趣味を見得るちから。めきゝ。「畫の—」。「文の—」。

かんじき「橇」(名) 雪の多き所にて、雪に沈(シヅ)み又ははまりこみなどせぬやうにはく履物。(樏、檋)。


［かんじき］

(がん-しき「眼識」(名) 見分くるちから。めきゝ。

(かん-しげふ「閑事業」(名) 役にたゝぬわざ。むだのしごと。

(かん-しつ「看疾」(名) 看病。かいはう。

(かん-しつ「閑日」(名) ひまの日。用なきとき。

(がん-しつ「眼疾」(名) がんびやう。めやみ。

(かん-しつげつ「閑日月」(名) ㊀ひま。まあひ。㊁物事に齷齪(アクセク)せざる度量。又、餘裕ある思慮。「英雄の胸中自ら—あり」。

(かん-しや「感謝」(名) ありがたく感じて、謝意を表すること。おれいをいふこと。「—の至り」。

(かん-しや「甘蔗」(名)【植】さたうきび。

(かん-しや「檻車」(名) 囚人を載する車、車上に牢獄の裝置あるもの。

(かん-しや「瞰射」(名) 高處より低處へ向けみおろして射擊すること。

(かん-しや「間者」(名) まはしもの。しのびもの。

(かん-しや「奸邪」(名) よこしま。又、よこしまなるもの。(姦邪)。

(かん-しやう「癇症」(名) ㊀癇のやまひ。癇のある身體。少しの事にも激する神經質。(疳症)。㊁

(かん-しやう「奸商」(名) 惡だくみする商人。

(かん-しやう「感賞」(名) ㊀感心してほめたゝふること。㊁功をめでて賜はる褒美(ハウビ)。

(かん-しやう「感情」(名) ㊀おもはく。こゝろもち。「人の—を惡くす」。㊁【心】(い)知又は意に伴ひて生ずる快・不快なる心的要素。(ろ)意識內に於て快・又は不快の情の強烈なる現象。

(かん-じやう「干城」(名)（たてとしろとの義）國家の防禦。又、其任に當れる武夫。

(かん-じやう「感狀」(名) 軍功を感賞して、大將より賜はる褒美(ハウビ)の書狀、勵狀。

かん-じやうかう「乾生薑」(名) ほしたる薑(ハジカミ)の根、藥品に供せらる。かんきやう。

(かんじやう-けういく「感情敎育」(名)【敎】感情の融和をはかり、美的或は道德的なる情操を養成せんとつとむる敎育上の主義。

(かん-しやく「癇癪」(名) 癇の病氣。又、癇の性質。——だま「癇癪玉」(名) ㊀かんしやく。又、いきどほり。㊁小兒の玩具、地に抛てば破裂するやうに製したる小球。——もち「癇癪持」(名) 癇癪ある性質。又、其性質の人。

(かんしや-じやう「感謝狀」(名) 感謝の意を表したる書狀。

(かん-しゆ「燗酒」(名) かんざけ。

(かん-しゆ「看守」(名) ㊀看まもること。又、其職の人。㊁監獄にて、囚徒を看守する官屬。

(かん-しゆ「監守」(名) ㊀物事をとりしまりまもること。又、其職の人。㊁宮內省主獵局及御料局支廳の屬官の一。——たう「監守盜」(名)【法】官吏若しくは公吏が、自己の監守せる金穀などを竊盜若しくは私に消費すること。

(かん-じゆ「感受」(名) 感覺神經によりて外界の刺戟を知得すること。直覺的に對象を受容すること。——せい「感受性」(名)【心】感受の能又は直觀の力、天性・生育・遲鈍・平均等の事情によりて組織せらるゝものとす。

(かん-しゆつ「間出」(名) 人目をさけて出行くこと。

(かん-しよ「寒暑」(名) ㊀さむさとあつさ。㊁冬と夏と。「三たび—を經」。

(かん-しよ「漢書」(名) 支那の書物。漢字にて記るしたる書物。カラぶみ。(漢籍)。

(かん-しよ「甘藷」(名)【植】さつまいも。

(かん-しよ「閑所」(名) しづかなる場所。又、ひまの地位。

(かん-しよ「閑所」(名) せついん。(雪隱)。

(かん-しよ「姦所」(名) 男女の相姦する場所。

(がん-しよ「雁書」(名) かりのたまづさ。

(がん-しよう「岩乘」(名) ㊀馬の特にすぐれて逞しき者なること。㊁欄への堅固なること。㊂體の壯健なること、すこやか。「—な老爺」。

(かん-しよく「寒食」(名) 陰曆にて、冬至より大抵百十五日後頃に風雨ある節、支那の古昔に、當日は火食せざりし風習なりしより此名あり。

(かん-しよく「旰食」(名) 人君が政治に志を傾け暇を惜み、おそく食事に就きたまふこと。

(かん-しよく「間食」(名) 定まりたる食事と食事との間にものを食すること。あひだぐひ。

(かん-しよく「間色」(名) 青・黃・赤・白・黑の五色又は赤・黃・青の三色以外の色、又、二種以上の色の配合によりて成る色。

(かん-しよく「感觸」(名) 外界の刺戟に觸れ感ずること。——き「感觸器」(名) 感覺器に同じ。

(がん-しよく「顏色」(名) ㊀顏の色あひ。かほいろ。「—蒼なり」。㊁かほつき。かほばせ。——な

し[無顔色] 恥ぢ又は驚きて顔青ざむるにいふ。又、面目を失するにいふ。——をうかがふ[候顔色] 顔いろをうかゞふ、即ち、其人の機嫌をはかりてものするにいふ。——をうしなふ[失顔色]「がんしよくなし」。

(かんしよ-しん[寒暑針](名)「かんだんけい」の一名。

かんしよ-よみ[漢書讀](名) 漢籍よみ。

(かん-しん[感心](名) 心に感じ入ること。(感服)。

(かん-しん[寒心](名) 肝をひやすこと。心におそれを抱くこと。ぞっとすること。

(かん-しん[甘心](名) ㊀我が思ふがまゝにすること。㊁滿足すること。不平なきこと。

(かん-しん[奸臣](名) 心のねぢけたるけらい。わるだくみする家人。(侫臣)。

(かん-しん[艱深](名) 趣味を悟るに難きこと。むづかしきこと。「—なる文」。

(かん-じん[奸人](名) 心のかたまゝくねぢけたる人。ねぢけもの。わるもの。

(かん-じん[閑人](名) 用なき人。ひまじん。

(かん-じん[肝心](名) (肝と心とは、人間の身に必用なりといふ意より轉ず)肝要又は必用なること。

(かんじん-より(名)「かんぜんより」の訛。

かん-す（せしすするすれせよ）[姦](他、さ變) ㊀婦人を犯す。㊁不正なる淫事をなす。

かん-す（せしすするすれせよ）[監](他、さ變) きをつく。とりしまる。

かん-す（せしすするすれせよ）[緘](他、さ變) 封ず。「書狀を—」。

かん-す（せしすするすれせよ）[燗](他、さ變) 酒の燗をなす。あたゝむ。

かん-す（せしすするすれせよ）[間](他、さ變) 他人の仲をさく。

かん-ず（ぜじずずるずれぜよ）[感](自、さ變) ㊀物の氣に觸れ通ず。「電氣に—」。㊁感覺を起す。㊂ために情動

く。ために心おこる。㊃深く心に銘す。「恩に—」。㊄感心す。かんじいる。

かん-ず（ぜじずずるずれぜよ）[寒](自、さ變) 寒さ身に染む。

かん-ず（ぜじずずるずれぜよ）[勘](他、さ變) 勘當す。

かん-す（せしすするすれせよ）[嵌](他、さ變) はめこむ。「義齒を—」。

(かん-すう[函數](名)【數】甲數が乙數の變化に從ひて變化するとき、乙數に對して甲數の稱、例せば、$x^2+2x+3=z$ にて、z は x の函數なり。

(かん-すゐ[鹹水](名) ㊀うしほ。海水。㊁鹹味を含有するみづ。しほからき水。

(がんすゐ-さんくわてつ[含水酸化鐵](名)「かってつくわう」(褐鐵鑛)に同じ。

(かんすゐ-せき[寒水石](名) ㊀【鑛】大理石の一種、固くして質はしく、彫刻・裝飾などに用ふ。㊁鹽のにがりを凝結せしめたるもの、透明にして水晶の如し、眼病の藥用とす。(凝水石)。

(かん-せい[監製](名) 監督して製造せさせたること。

(かん-せい[寒製](名) 寒中の製造、かんざらし。

(かん-せい[陷穽](名) ㊀獸などをおとしいれ捕るために設けたる穴。おとしあな。(陷穽、坎阱)。㊁人をおとしいるゝための術策。はかりごと。

(かん-せい[鼾聲](名) いびきの聲。「—雷の如し」。

(かん-せい[閑靜](名) ものしづかなること、「—なる地」。(幽靜)。

(かん-せい[寒聲](名) さむく聞ゆる聲、ふるひごゑ。

(かん-せい[寒生](名) まづしき書生。

(かん-せい[汗青](名) (支那の古代にては、靑竹を火にて炙り、これに文字を書きしよりいふ) 史書又は記錄の異稱。「留取丹心照—」。

(かん-せい[感性](名) 感覺の能。直觀の力。

(かん-せい[間稅](名)「かんせつぜい」に同じ。

かんせい-ぬひ（イーヌ）[寒清縫](名)「かんせんぬひ」に同じ。

(かんせい-ゆ[乾性油](名) 酸素を吸收して乾涸せる油、亞麻仁油・胡桃油の如きこれなり。

(かん-せき[漢籍](名) 支那の書籍。又、漢字のみにて記したる書籍。カラぶみ。——よみ[漢籍讀](名) ㊀漢籍を讀む方法、即ち、返點又は送假名などをつけて漢文を讀むこと。かんしよよみ。カラぶみよみ。㊁漢學者。

(がん-せき[岩石](名) ㊀いは。いし。いはほ。㊁【地】地球の外皮を構成するものにして或は一種或は多種或は硬軟或は粗密の鑛物の集合せるもの。——どうふ[岩石豆腐](名) 豆腐を固く燒きて昆布に包み、これをよく乾たるもの。——らん[岩石蘭](名)【植】「せきらん」に同じ。

(かん-せつ[間接](名) ㊀間に或ものを隔てゝ其ものに對すること。㊁とほまはし。とほまはり。——こくぜい[間接國稅](名) 間接稅の性質なる國稅、即ち、酒造稅・醬油稅等をいふ。——しやげき[間接射擊](名) 丘陵山嶽などの障碍物を隔てゝ、其さきにあるものを射擊すること。——ぜい[間接稅](名) 稅を納むるものと稅を負擔するものと異なる租稅、例へば、酒造稅又は醬油稅の如く、稅を納むるものは製造人なれど、其稅の幾分は酒又は醬油の質價に組みこみあるが故に、實際に其稅を負擔するものは購買者なるが如し。——せんきよ[間接選擧](名) 一般より選擧したる被選擧人が、更に目的の選擧をなすこと。

(かん-せふ（ーシヨウ）[干涉](名) ㊀かゝりあひ。くわんけい。㊁立ち入りて其物事にたづさはること。㊂其任にあらざるものが、特に關係すること。「選擧—問

題」。㊃【理】二つの波が相重なりて振幅の或は大きく或は小さくなり、異なる光が重なりて種々の縞を作り、若しくは異なる音が重なりて唸(ナウ)りを生ずるが如き現象。——しゆぎ[干涉主義](名) 政府が民間に對し又は父兄が子弟に對し、若しくは壓主が被壓者に對して、何事によらず、ふかく立ち入りて關係すること。

(かん-せん[汗腺](名) 皮膚にありて、體中より汗を分泌して、これを體外に排出する作用を營む腺。

(かん-せん[幹線](名) 幹部即ちもとゝなる線。本線。支線の對。「—鐵道」。

(かん-せん[酣戰](名) 彼我入り亂れて戰ふこと。又、戰爭のまさかり。

(かん-せん[艦船](名) 軍艦と船舶と。

(かん-せん[感染](名) 他のものに感じて其如くなること。うつること。しみこむこと。

(かん-ぜん[間然](名) 異議あること。よしあしをいふべきこと。「—する所なし」。

(がん-ぜん[眼前](名) 今の時。この所。めのまへ。(目前)。

かんぜん-ぬひ（イーヌ）[閑清縫](名) 絲を現はして、打ちかへたるからげぬひ、袋物などの端に行ふ。

かんぜん-より[簡箋縒](名) 日本紙を細く切り、絲の如くに縒(ヨ)りたるもの。かうより。こより。かんぜんより。(紙縒、紙索)。

(かん-そう[閑悠](名) ものしづかなるさま。

(がん-そう[含嗽](名) うがひすること。——ざい[含嗽劑](名) うがひするためのくすり。くゝみぐすり。うがひぐすり。

(かん-ぞく[奸賊](名) にくむべき姦惡の徒、ぎやくぞく。あれもの。(逆徒)。

(かん-そん[旱損](名) 旱(ヒデリ)のために生じたる田畑の損耗。ひでりのそんじ。水損の對。

(かん-そん[寒村](名) ㊀貧窮なる村、さびしき村。「—僻邑」。㊁自家の居村の謙稱。

(かん-たい[簡怠](名) おこたり。ぬかり。なほざり。あやまち。

(かん-たい[寒帶](名) ㊀【地】地球の南北兩極より緯線各二十三度半の線内、即ち、赤道より緯線南北各六十六度半より兩極までの線内の稱、此帶内には、時に太陽の地下に没せざる永晝を生じ、又、時に太陽の地上に現れざる永夜を生ず。㊁【植】森林植物帶にて、溫帶以北の稱。——しよくぶつ[寒帶植物](名)【植】寒帶に生ずる植物、即ち、矮小なる樺木・杜松・楊柳等の灌木、及苔蘚類・地衣類に屬する植物等これなり。

(かん-たい[艦隊](名) 軍艦二艘以上を以て編制したるもの、稱、時としては、驅逐艦・水雷艇・工作船等を附屬す。又、驅逐艦二隻以上の編制にもいふことあり。——しれいくわん[艦隊司令官](名) 一艦隊の統率をつかさどるもの。——しれいちやうかん（ーチヨウー）[艦隊司令長官](名) 二個艦隊以上を聯合したるもの即ち聯合艦隊の統率者、天皇に直隷して、海軍大臣の命を受け所管の軍政を處理す。

(がん-たい[岩臺](名)【地】岩流の平かにひろがりたるもの。

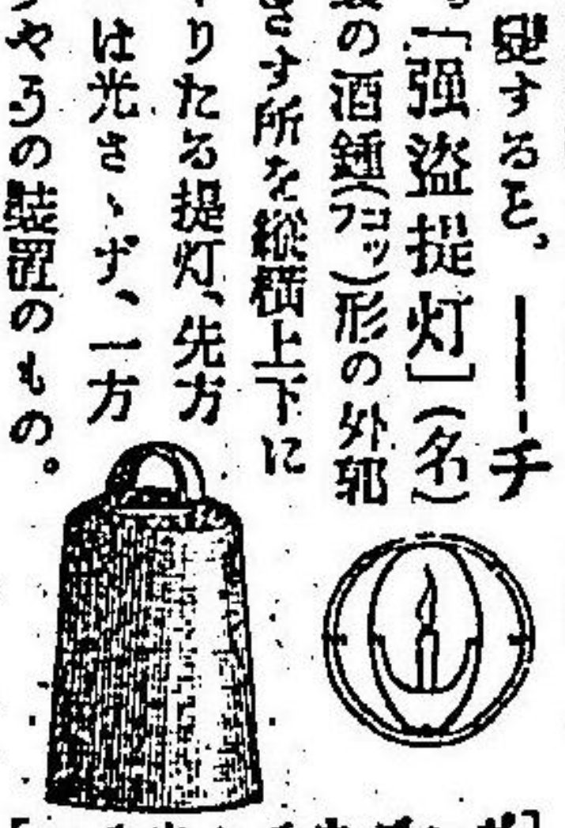
(かん-だう（ードウ）[撼蕩](名) ふるひ搖(ゴウ)かすこと。又、ふり搖(ゴウ)くこと。「樹木を—す」。

(かん-だう（ードウ）[勘當](名) ㊀規則に當てゝ罪を定むること。㊁目うへの氣に入らずして、其許(トモ)を追ひ出さるゝこと。かんき。かんだう。(勘氣)。

(かん-だう（ードウ）[間道](名) かくれみち。わきみち。ぬけみち。

⌒[ガン-ダウ（ードウ）[強盜](名) (字の唐音) ㊀「がうたう」に同じ。㊁「がんだうぢやうちん」の略言。——

がへし（ーエシ）[強盜返](名) 芝居にて、舞臺を覆へし其狀態を更に一變すること。——チヤウチン（ーチヨウー）[強盜提灯](名) 銅板又は鐵葉製の酒鍾(コツ)形の外郭の内に、蠟燭をさす所を縱橫上下に回轉すべくつくりたる提灯、先方を照せば我方へは光さゝず、一方へのみ光のさすやうの裝置のもの。



[ガンダウチヤウチン]

——づきん[強盜頭巾](名) 目ばかり出して他の部分はすべて包みかくす頭巾。

廿かん-たち[神達](名) 神々。

〰がん-だち(名)【植】「さるとりいばら」の一名。

廿かん-だち-べ[上達部](名) 古昔、三位以上の殿上人の稱。かんだちめ。

廿かん-だち-め[上達部](名)「かんだちべ」に同じ。

(かん-だ-ひ[乾打碑](名) 灰墨に蠟を混じて墨の如くに製したるもの、紙を文字又は圖畫を彫刻しある石碑の面にあて、これを以て其紙面を摺り、石碑の文字又は圖畫を寫すに用ふ。つりがねずみ。

〰[かん-たまご[寒玉子](名) 鷄が寒中に產みたる玉子、通常のものより滋養分多しといふ。

がん-だれ[雁垂](名) 漢字のかんむりの名、厚・厠などの字の上部にある厂の字の稱、もと雁を略して厂と書きしより此名あり。

(かん-たん[肝膽](名) ㊀きもといと。㊁こゝろ。心中。——さむし[肝膽寒] おそれをいだく。おそれてぞっとす。——をくだく[碎肝膽](名) 智能のあらん限りを盡くすにいふ。——をひらく[披肝膽](名) こゝろのおくそこをうちあく。

(かん-たん[閑澹](名)「てんたん」(恬澹)に同じ。

（かん-たん［感歎］（名）感心して賞美すること。「一なゝめならず」。

（かん-たん［簡單］（名）簡略。つゞまやか。（簡短）。

（かん-だん［閑談］（名）㊀しづかなる物がたり。ゆるやかにする話。「一歐列」。（閑話）。㊁むだばなし。

（かん-だん［寒暖］（名）寒きと暖かきと。

（かん-だん［間斷］（名）あひだ。たえま。きれめ。ひま。「一なく發射す」。

（がん-だん［岩團］（名）【地】不規則なる岩石の團塊。

（かん-だん-けい［寒暖計＝Thermometer］（名）溫度を計る器。通常用ふるものは、水銀を入れたる「ガラス」球に、目盛ある「ガラス」の毛細管を鎔（ナツ）ぎたるものにして、其水銀の上下する程の目盛を讀みて溫度を知るなり。氷の溫度を氷點といひ、水の沸騰する溫度を沸騰點といふ。其目盛に攝氏・華氏・列氏の三種ありて、攝氏のは、氷點を零度とし沸騰點を百度とし、華氏のは、氷點を三十二度とし沸騰點を二百十二度とし、列氏のは、氷點を零度とし沸騰點を八十度とせり。（寒暑針、驗溫器）。

（かん-たん-し［感歎詞］（名）【文法】喜怒哀樂等、情に感ずるときに發する一種の辭、しかるべき意味無く、其感情を其音聲にあらはす、例へば、「あら」「やあ」「は、」「おや」などの如し。（感動詞、間投詞）。

かん-たん-し［邯鄲師］（名）旅客の睡中をうかゞひ其懷中物などをぬすむもの。まくらさがし。

かん-たん-の-あゆみ［邯鄲步］（名）（支那の邯鄲といふ處に行きて、舞ひの足どりを學びし人が、其足どりのよく出來ずして、其上に故國の舞ひの足どりをも忘れたりといふ故事に出づ）學びの道の中途はんぱにして何等の効なきにいふ。

かん-たん-の-まくら［邯鄲枕］（名）（支那の邯鄲といふ處にて、盧生といへるもの、某仙人より富貴を夢み得といふ不思議の枕を借りて寢たるに、果して幾年の富貴を極めたる夢を見たりしが、夢覺むれば初めに炊ぎかけし黃粱がまだ熟せざりきとの故事に出づ）富貴のいとはかなきと又はさめてはかなき物事にたとへいふ。

かんたん-の-ゆめ［邯鄲夢］（名）前條に同じ。

（かん-ち［奸智］（名）よこしまなる智慧。ねぢけたる才能。（邪智）。

（かん-ち［閑地］（名）㊀ものしづかなる土地。㊁職務いそがしからざる地位。又、職務なき身分。

（がん-ち［眼一］（名）（鍛冶（カヌチ）の祖天目一（アメノヒトツ）神のかためなりしより出づ）めっかち。かため。（片眼、隻目）。

（かん-ちく［寒竹］（名）【植】竹の一種、高さ五六尺、寒中に筍（タケノコ）を生ず、節細かし、ふときものは杖などにす。紫竹。（雪竹、碎竹）。

（かん-ちく［漢竹］（名）【植】竹の一種、女竹に似て、節高く幹細し、もと支那より舶來したるものといふ。かはたけ。——の-だい［漢竹臺］（名）「かはたけのうてな」に同じ。

（がん-ちく［含蓄］（名）㊀ふくみもつこと。㊁意味の淺薄ならざること。

（かん-ちやう［艦長］（名）一軍艦の指揮統率をつかさどる人。

（かん-ちやう［翰長］（名）書記官長の異稱。

（かん-ぢやう［勘定］（名）㊀考へ定むること。㊁金高又は員數の計算。㊂仕拂ふ金高。——かた［勘定方］（名）金錢の出納の受持。くわいけいかた。——だか-し［勘定高］（形、二）金錢の出納又は物品の賣買等に關して、算當からし。——づく［勘定盡］（名）かねづく。まうけづく。

——ぶぎやう［勘定奉行］（名）㊀古昔、金穀の出納をつかさどりし武家の役名。㊁德川時代に、金穀の出納及租税・戶籍・裁判などをつかさどり、かねて遠國奉行・郡代・代官などを支配せし役名。

（かん-ちゆう［寒中］（名）小寒と大寒との總稱。かんのうち。

（かん-ちゆう［癇中］（名）癇と中氣と併發したる病。

（かん-ぢゆう［閑住］（名）しづかなる住居。

（がん-ちゆう［眼中］（名）㊀眼のうち。眼のさま。「一冷し」。㊁認むる所。見る所。「一の人」。——ひとなし［眼中無人］自ら地步を高むること高く、人を人とも思はざるにいふ。

（かん-つう［感通］（名）㊀感じひゞくこと。㊁我一念を先方が感じ受くること。

（かん-つう［姦通］（名）㊀男女のみだりに情を通ずること。㊁有夫の婦人が、其夫にあらざる男子と淫事を行ふこと。いろふかん。——ざい［姦通罪］（名）【法】姦通の犯罪、其婦人及其相手の男子共に犯罪者にして、本夫の告訴に待つものなり。

かん-づ・く（自、か四）考へつく。氣がつく。こゝろづく。「かんづきて油斷せず」。（勘付）。

かん-づくり［寒製］（名）寒中の製造、又、其物。

廿かん-つどひ［神集］（名）神のつどひあつまること。

廿かん-づまり［神駐］（名）神のとゞまること。

かん-づる［海金沙］（名）【植】「かにくさ」に同じ。

（かん-てい［鑑定］（名）㊀めきゝ。みさだめ。（辨査）。㊁【法】裁判所が刑事訴訟にて、犯罪の性質・方法又は結果を分明にするため、特殊の學藝に熟する人に、其現前の事實に對する意見を聞くこと。又、民事訴訟にて、證書又は物件等の眞僞などに關し、其道に長じたる人の意見を聞くこと。——にん［鑑定人］

（名）鑑定をする人。又、鑑定を命ぜられたる人。

カンテイラ（名）「カンテラ」に同じ。

（かんてい-りう［勘亭流］（名）書體の一、芝居の番附などを書くに用ふるもの、江戶中村座の手代勘六より創まるといふ。

（かんてき（名）「しちりん」の一名。（京阪地方の方言。）

（かん-でき［陷溺］（名）㊀おちいり溺るゝこと。㊁酒色などにおぼれすさむこと。㊂窮地におちいること。又、窮地におとしいるゝこと。「人民の一」。

（かん-てふ［間諜］（名）しのびのもの。まはしもの。たんてい。（探索者、探偵）。

カン-テラ（名）（「ポルトガル」語 Candeia、燭臺の義）鐵葉又は銅葉にてつくり、石油を盛り絲を心として火を點ずるもの。

（かん-てん［旱天］（名）ひでりのそら。夏のそら。

（かん-てん［寒天］（名）㊀さむぞら。㊁一種の食品、ところてんを晒（サラ）したるものにして、半透明の色をなす。——ばん［寒天版］（名）一種の印刷版、晒（サラ）したる寒天に、「リスリン」及さらし膠（ニカハ）を混じ、これを煮て平面の盤に延べつくりたるものにして、濃き「インキ」を以て印刷せんとする文字又は圖畫を描きたる紙の面を印して後、印刷す。

（かん-でん［間田］（名）㊀租稅をのがれてある田。㊁耕作せず又は植付せざる田。

（かん-でんち［乾電池］（名）【理】液體を用ひず固體及粘體を用ひて製したる電池、普通のものは「ルクランシ」の電池を改造したるものにして、硇砂の溶液を凝せる石膏末と過酸化「マンガン」とを亞鉛器中に入れ、中に炭素の棒を立てゝ、炭素を陽極とし亞鉛を陰極としたるもの。

（かん-と［奸徒］（名）わるものども。しれもの。

（かん-ど［漢土］（名）支那。もろこし。

（かん-とう［竿頭］（名）竿のさき。「百尺一」。

（かん-どう［感動］（名）ふかく心にしみて感ずること。物事に感じて起る急激にして條忽なる精神の興奮。「一して泣く」。

（がん-とう［巖頭］（名）いはのではな。いはのうへ。

（がん-とう［岸頭］（名）岸のほとり。岸のうへ。

（がん-どう［龕燈］（名）「ガンダウチヤウチン」の略言。——がへし［龕燈返］（名）「ガンダウがへし」に同じ。——チヤウチン［龕燈提燈］（名）「ガンダウチヤウチン」に同じ。

（かんどう-し［間投詞］（名）【文法】「かんたんし」（感歎詞）に同じ。

（かんどう-し［感動詞］（名）【文法】前條に同じ。

（かん-とく［奸慝］（名）かくれてあらはれざる罪惡。又、かくしもつ邪心。

（かん-とく［感得］（名）㊀かんづくこと。㊁神佛に我信心通じ、ために望める物事を得ること。

（かん-とく［監督］（名）㊀とりしまり。㊁行政を統一せんために、下級の行政官に對し、其權限を明かにし其職責を實行せしむる上級の行政官の行爲。㊂かんとくの任にあたる人。——くわんちやう［監督官廳］（名）官廳又は物事の監督をなす職權ある官廳、地方廳に對しては各省をいひ、市役所町村役場に對しては地方廳などをいふ。——しよき［監督書記］（名）地方裁判所・區裁判所及檢事局にて、書記二名以上ある場合に、上役の書記に命ずる職名にして、其書記課全體のとりしまりをなすもの。——ちやう［監督廳］（名）「かんとくくわんちやう」に同じ。——はんじ［監督判事］（名）區裁判所にて、二名以上の判事ある場合に、其上席判事に下す職名にして、該裁判所の事務のとりしまりをなすもの。

（かん-どく［簡牘］（名）てがみ。しよどく。——ぶん［簡牘文］（名）てがみの文。日用文。

かん-どころ［勘所］（名）㊀三味線又は琴などにて、絃（イト）を押ふる手にて音調をかんがふる處。㊁大いにかんがへを要する點。肝要の所。

カン-どころ［甲所］（名）甲の音を出すべき所。

（かん-どり［楫取］（名）「かぢとり」の訛。

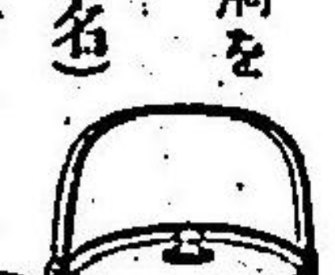
廿かん-ね（名）かな。（假名）。

かんな［鉋］（名）材木の表面を削りて平かにするに用ふる器、其種類多し。かな。——くづ［鉋屑］（名）鉋をもて材木を削りて出たる薄き木片。（刨屑）。——かけ［鉋掛］（名）經木の一名。

（かん-なう［肝腦］（名）㊀肝と腦髓と。㊁こゝろ。かんがへ。——ちに まみる［肝腦塗地］甚しき窮境に陷りたること、又は討死すること殺さるゝと失敗して死ぬることにいふ。——を しぼる［絞肝腦］さま〴〵とかんがへはかるにいふ。

かん-ながら［神隨］（名）「かむながら」に同じ。——の-みち［神隨道］（名）「しんだう」（神道）に同じ。

かん-なべ［燗鍋］（名）酒の燗をする鍋、多くは銅製なり。



［かんなべ］

かんなめ-まつり［神嘗祭］（名）「かむなめまつり」に同じ。

（かん-なん［艱難］（名）艱（ウ）きこと。つらきこと。難儀。

（かん-にち［坎日］（名）外出を忌むといふ日。

（かん-にふ［陷入］（名）おちいること。くぼむこと。

（かん-にふ［嵌入］（名）はめこむこと。

（かん-にん［堪忍］（名）㊀こらへ忍ぶこと。㊁怒り

を饒めて其罪を許すこと。(恕、堪辨)、——おやり（リヤウ）[堪忍情](名) 堪忍する心。——づよ・し（くしきけれ）[堪忍强](形、二) よく堪忍す。堪忍する力強し。——ぶくろ[堪忍袋](名) かんにんする度量。——ぶくろ の を が きれる もはや堪忍する能はざるにいふ。

かん・ぬし[神主](名) ㊀神につかふる人。㊁神社に仕ふる人の長。即ち、其神社の神事一切を行ふ人。

(かん・ねい)[奸佞](名) 心まがりよくへつらふこと、心ねぢけたること。又、其人。

(かん・ねつ)[寒熱](名) さむけとねつと。「—往來す」。

(かん・ねブツ)[寒念佛](名) 僧者が寒夜の修業に佛名を稱へながら寺詣りすること。

(かん・ねんブツ)[寒念佛](名) 「かんねブツ」に同じ。

(かん・のう)[堪能](名) よく爲し得ること。上手。「此切召し出したる—の琵琶法師」。

(かん・ぱ)[駻馬](名) 駻強き馬。

(かん・ば)[汗馬](名) ㊀汗をかきたる馬。又、馬を駈(カ)けさせて汗をかゝすること。㊁馬にのりて戰場に奔走すること。「—の勞」。

(かん・ぱ)[看破](名) 見やぶること。見あらはすこと。

(かん・ばい)[寒梅](名) 寒中に咲く梅。又、早梅。

(かん・ぱい)[感佩](名) 忝(カタジケナ)く心に感ずること。又、深く感じて心にとめおくこと。

(かん・ばう)（ウーボ）[感冒](名) 邪氣に感ずること。かぜひき、ふうおや、

(かん・ばう)（ウーボ）[監房](名) 罪人を入るゝ監獄の室。

(かん・ばう)（ウーホ）[漢方](名) 支那風の醫術。——い[漢方醫](名) 漢方の醫師。

(がん・ぱく)[雁帛](名) かりのたまづさ、

かんば・し（しくしきけれ）[芳](形、二) 「かうばし」の音便。

カン・ばし・る（らりるれ）[甲走](自、ら四) 聲の調子が高まりて勢鋭くひゞく。

かん・ばせ[顏容](名) 「かほばせ」の音便。

(かん・ばつ)[旱魃](名) ひでり。

(かん・ばふ)（ウーホ）[簡法](名) 手輕き方法。

(かん・ばん)[看板](名) ㊀商家などにて、家號又は職業其他一切廣告すべきものを記して、店前に掲げおきて行人に示すもの。(招牌)。㊁芝居又は見世物などにて、役者の名又は演藝の題などをゑるして、小屋の前面に掲げて行人に示すもの。㊂昔時武家にて、仲間などの着し短き服、其背に主人の紋所などを染めたるもの。(號衣)。㊃紋所又は家號などを記しある提灯又は法被(ハッピ)。㊄みえ。外觀。外見。——に いつはり なし 其實質の外見と少しも違ふ所なきにいふ。

カン・パン[甲板](名) (字の唐音)大いなる船の上部の廣く平かにして、木板若しくは鐵板などを一面に張りつめたる所。かふはん。(艦板)。

(がん・ぴ)[岩非](名) 【植】石竹科に屬する宿根草、高さ一二尺にして叢生す、葉は肥厚にして尖端を有す、夏の頃、五瓣にして赤肉色の花を開く、花瓣の端末は缺裂せり。(剪夏羅)。

(がん・ぴ)[雁皮](名) 【植】瑞香科に屬する小木本、葉は卵形又は卵狀披針形にして、面に絹絲狀の毛を有し、花序は頭狀に排列し、花蓋の裂片は、筒部より四倍短し、樹皮の纖維を製紙の料に供す。——し[雁皮紙](名) 雁皮の皮の纖維にて製したる紙、表面を椋の葉にて摺り滑かにしたる最も上品のものにして、伊豆國熱海の產最も名あり。

(かん・びやう)（ヨウビ）[看病](名) 病氣の介抱、みとり。看護。——にん[看病人](名) 看病する人。——ふ[看病婦](名) 看護婦に同じ。

(がん・びやう)（ヨウビ）[眼病](名) 眼の病氣、めやみ。

(かん・ぷ)[姦夫](名) 他人の妻に通ずる男。みそかをとこ。

(かん・ぷ)[姦婦](名) 夫にあらざる男に通ずる有夫の女。夫をかさぬる女。

(かん・ぷ)[奸婦](名) どくふ。あくふ。

(かん・ぷ)[姦富](名) わるだくみによりて得たる富、又、其人。

(かん・ぷう)[寒風](名) さむき風。さむかぜ。

(かん・ぷく)[感服](名) 感じて心から服從すること。まんぷく。(感伏)。

(かん・ぷくろ)[紙袋](名) 紙にて製したる袋。

(かん・ぶつ)[奸物](名) 心あしき人物。(姦物)。

(かん・ぶつ)[乾物](名) 食用に供する植物を乾したるもの。(干物)。——や[乾物屋](名) 乾物を賣る家。又、かんぶつを賣る人。

(がん・ぶつ)[贋物](名) にせもの。僞物。

(かん・ぶん)[漢文](名) 漢字のみにて記したる文章。——がく[漢文學](名) 漢文の解釋又は組織・使用等に就きて研究する學問。

(かん・ぷん)[感奮](名) 感じて精神のふるひたつこと。感激。「—して讀書を勵む」。

廿かん・べ[神戸](名) 古昔、神社に附屬して、租稅を神社に奉りし農民。

(かん・ぺう)（ヨーピ）[乾瓢](名) 一種の食品、夕顏の實の柔かなる肉を細く長く紐の如くに剝(ム)きて、干(ホ)し上げたるもの。(瓢菌)。

(かん・ぺき)[癇癖](名) 癇癪(カンシヤク)。

(かん・べつ)[鑑別](名) みわけ。めきゝ。

(かん・べん)[勘辨](名) ㊀考へわきまふること。㊁斟酌して、過失をゆるすこと。

(かん・べん)[簡便](名) 手輕くして便利なること。

——はふ（ウーホ）[簡便法](名) 手輕く便利なるしかた。たやすき方法。

(かん・ぽ)[閑步](名) しづかに歩むこと。足のはこびの急ならざること。

(かん・ぼう)[姦謀](名) わるだくみ。(奸謀)。

(かん・ぼく)[翰墨](名) ㊀筆と墨と。㊁轉じて、詩文などを草すること。又、書畫などをかくこと。「—の遊」。

(かん・ぼく)[肝木](名) 【植】忍冬科に屬する灌木、葉は楓葉に似て鋸齒を有す、夏初に、五瓣の小白花を開く、材は香ばしくして楊子の料とす。——やうじ（ウーヨ）[肝木楊子](名) かんぼくにて製したる楊子。

(かん・ぼつ)[陷沒](名) おちいること。おちこむこと。

カンマン(名) 【佛】梵語、不動尊の尊稱。

(かん・み)[甘味](名) あまき味。よき味。又、其食物。

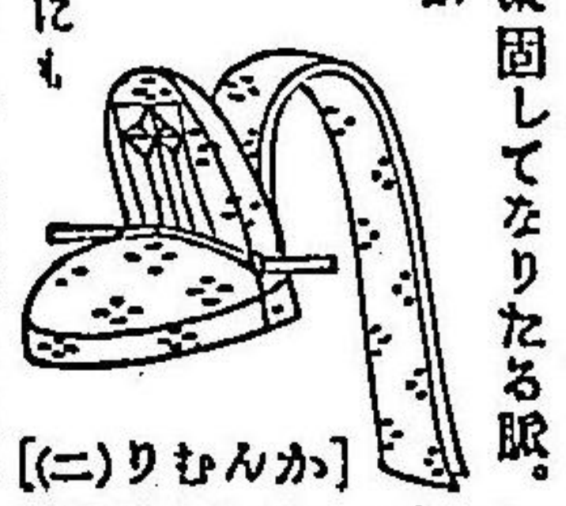
(かん・み)[鹹味](名) しほからき味。しほけ。

(がん・み)[含味](名) かみわけてあぢはふこと。よくあぢはふこと。

(かん・みやう)（ロウミ）[漢名](名) 支那にての名稱、例へば「かぶとぎく」を雙鸞菊といふが如し。

(がん・みやく)[岩脈](名) 【鑛】斑岩などが、他の岩石の裂罅(サケメ)に迸(ホドバシ)り出て凝固してなりたる脈。

かん・むり[冠](名) ㊀頭にかぶるものゝ總稱。かぶりもの。㊁束帶のときに用ふるかぶりものゝ特稱、黑羅又黑紗にてつくる、磯(ソイ)・纓(エイ)・簪(カンザシ)・巾子(コジ)等の名所あり、形にも厚額・薄額・透額・半額等の諸種あり。㊂漢字の上にある種々の字形の稱。「宀—」。「山—」。——を かく[挂冠] 官職を辭す。——を たまふ[賜冠] 五位に敍せらる。——を はじく[彈冠] 出仕又は仕官の用意をなすにいふ。


[かんむり(二)]

(かん・めい)[漢名](名) 「かんみやう」に同じ。

(かん・めい)[感銘](名) 恩義又は敎訓などを深く心に感じて忘れざること。

(かん・めん)[顏面](名) かほ。おもて。

(かん・もく)[緘默](名) 口をとぢて言を發せざること。

かん・もち[寒餅](名) 寒中の水をもて搗(ツ)きたる餅、又、寒中の水に浸(ツ)けたる餅。

がん・もどき[雁擬](名) (雁の肉に似るといふより此名あり)油揚の一種、古昔のは、麩を油にて煮しもの、今時のは、豆腐に細かく切りたる野菜を入れ、油にて煮たるもの。(雁蔬)。

(かん・もん)[勘文](名) 「かもん」に同じ。

(かん・や)[寒夜](名) さむき夜。

(かん・やう)（ウーヨ）[涵養](名) 漸を追ひて養ひ成すこと。又、染み移るやうに養ひ成すこと。「國力の—」。「品性の—」。

(かん・やく)[簡約](名) つゞまやか。かんたん。

かん・やどり[神宿](名) (神のやどる所なりとの義)兜の頂。はちまんざ。

(かん・ゆ)[肝油](名) ㊀動物の肝より取りたる脂肪。㊁鱈(タラ)より取りたる脂肪の特稱、肺勞などの藥として用ふ、臭氣強し。

(かん・ゆう)[姦雄](名) 奸智に長(タ)けたる英雄。「亂世の—」。

(かん・ゆう)[敢勇](名) 勇氣に富み事をおしきりてなすこと。

(かん・よ)[干與](名) あづかること。たづさはること。

(がん・らい・こう)[雁來紅](名) 【植】(雁の來るときに赤くなるといふ義)「はげいとう」に同じ。(老少年、十樣錦)。

かんら・からから(名) 高聲などの笑ひ聲。「—と打笑ひ」。

(かん・らく)[乾酪](名) 牛乳などの乾酪質を製したる滋養品。——しつ[乾酪質](名) 牛乳などの中にて、脂肪球と共に主要なる成分のもの。

(かん・らく)[陷落](名) ㊀おちいること。はまり入ること。「地震で大地—す」。㊁城盤のぬけおつること。——こ[陷落湖](名) 地層陷落して生じたる凹地に水を湛(タク)へて成りたる湖、十和田湖・琵琶湖の如きこれなり。——ぢしん[陷落地震](名) 【地】地震の一種、溫泉などのために、地下の物質が溶解せられて空洞を生じ、上部の陷落するによりて生ずるもの。

(かん・らん)[橄欖](名) 【植】橄欖科に屬する支那產の植物、葉は披針形又は披針狀長楕圓形にして全邊なり、果實は極實に似、果皮は綠色にして支那人に嗜好せらる、樹皮もまた藥用に供せらる。(翠瓶、忠果、諫果)。——がん[橄欖岩](名) おもに橄欖石より成りたる岩石。——せき[橄欖石](名) 【鑛】稀に結晶し多くは粒形をなす鑛物、概ね稍や黑色を帶びたる褐色をなす、裝飾の石材として用ふ。——ゆ[橄欖油](名) オリーブの果實の仁より採取したる油、食用とし、又、發泡劑藥用石鹼等を製する料とす。オリーブ油。

(かん・り)[幹理](名) すべくゝり。とりしまり。

(かん・り)[奸吏](名) よこしまなる役人。(姦吏)。

(かん・りう)[寒流](名) ㊀つめたき流。又、さむげに見ゆる流。㊁【地】海流の一、兩極地方より赤道地方へ向ひて流るゝもの。

(がん・りう)[岩流](名)、【地】地下にて溶解したる鑛物が、地上に噴出し、流れ走りて後凝結したるもの。

(がん-りき[眼力](名) ㊀物を見る眼の力。㊁物事を觀察する能力。

(かん-りやく[簡略](名) つゞまやか。簡單。

(がん-りよく[眼力](名) 「がんりき」に同じ。

(かん-りん[坎壈](名) おちぶれ。ふしあはせ。

(かん-りん[翰林](名) ㊀學者なかま。文人社會。㊁支那の中央官廳の一なる翰林院の稱。——がくし[翰林學士](名) ㊀文章博士の唐名。㊁支那の翰林院の高官、命を受けて勅などを草するもの。

(かん-りん[監臨](名) 監督にのぞむこと。

(かん-るゐ[感涙](名) いたく感心して出る涙。「の。

(かん-れい[寒冷](名) 冷かなること。つめたきこと。

(がん-れう[顏料](名) ㊀顏の化粧に塗るもの。おしろい。㊁繪具。染料。

(かん-ろ[寒露](名) 二十四氣の一、陰曆九月の節にして、陽曆十月八日に當る。

(かん-ろ[甘露](名) ㊀古昔、支那にて政治其當を得れば、天地其瑞として降らすといひ傳へし露の如き液體。㊁最も美味なる想像上の飲料。「飲めば—の味がする」。㊂「かんろすゐ」の略言。——すゐ[甘露水](名) 砂糖を混じ煮てさましたる甘味ある水。——に[甘露煮](名) 料理に蜜などを入れ甘く煮ること。又、其煮物。「鮒の—」。——ばい[甘露梅](名) 一種の食品、しその葉もて梅の實を包み砂糖漬にしたるもの。

(かん-ろく[間祿](名) ㊀無益の祿。「—を貪る」。㊁殘除の祿。「—もないに贅澤三昧」

(かん-わ[閑話](名) ㊀ゆるやかなる話。㊁無益のはなし。むだばなし。「—休題」。

(かん-わ[漢和](名) ㊀詩の句と歌の句とを連ねしもの。連歌の類。㊁支那と日本と。

(かん-ゐ[敢爲](名) 物事をおしきりて行ふこと。

(かん-ゐ[寒威](名) さむさ。さむさの程。(寒氣)。

き　ぎ

き　喉的破裂音k即ち舌の後部を軟口蓋に接して破裂せしむる音と、母韻「い」との綴音。

ぎ　「き」の濁音、凡て「き」と同じく、たゞ破裂音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。

き[木](名) ㊀木本莖の植物の稱、高大に生長するを喬木といひ、短小にして細枝を生ずるを灌木といふ。じゆもく。㊁建築又は製造などの用材。材木。㊂芝居にて、ひやうしぎの稱。「—を入れる」「—のかしら」。——により うを もとむ[緣木求魚] 其由る所をあやまり、求めんとすとも得べからず成さんとすとも能はざるをたとへいふ。

き[黃](名) 山吹の花の如き色。きいろ。

十き[葱](名) 【植】「ねぎ」の類の總稱。「あさつ—」。

十き[牙](名) 「きば」の古名。

十き[酒](名) 「さけ」の古名。「み—」「しろ—」。

十き[杵](名) 「きね」の古名。

十き[寸](名) 古代の尺度の名、今日の寸、馬の高さは、尚ほこれを用ふ、馬に一寸(キヒト)といふは四尺一寸の略言。「たつの駒、なゝ—と云ひて」。

十き[城](名) 城の古名。「おさへの—」。

(き[規](名) ㊀ぶんまはし。㊁さだめ。おきて。「之を—となす」。㊂いましめ。さとし。㊃漢文の一體、人をいましむるに用ふるもの。

(き[記](名) ㊀しるし。標識。㊁事實をしるしたる文書。きろく。㊂漢文の一體、事實をしるすことを主とするもの。

(き[紀](名) ㊀かきもの。記錄。㊁くち。端緒。「萬事の—」。㊂のり。法則。㊃みち。道義。「風人の—」。㊄かなめ。要會。「中和の—」。㊅もとゐ。基因。㊆かず。數量。㊇ほど。程度。㊈こと。事件。㊉きはまり。極度。「數の—」。⑪あふところ。かはるところ。⑫紀傳體の歷史中に、帝王の一代を主として書きたるもの。「本—」。⑬支那にて、十二年の稱、即ち、木星が其軌道を一周する間。「三—を歷」。

(き[基](名) ㊀もとゐ。もと。㊁どだい。下趾。㊂わざ。事業。「建て、—とす」。㊃【化】化學變化の際、分裂することなく恰も一個の如き作用をなす原子の團體の稱。

(き[忌](名) 喪にていみ愼む一定の時期。いみ。「—中」「—服」。

(き[期](名) ㊀とき。せつ。㊁をは。をり。「—失ふべからず」。㊂ひとまはり。「—年」(朞)。

(き[機](名) ㊀おこり。はじまり。㊁かはり。變化。㊂きざし。兆候。㊃はし、端緒。「—を身後にひらく」。㊄わけめ。際會。「成敗の—に達す」。㊅かなめ。主要。「治亂の—」。㊆みち。道義。㊇まつりごと。政樞。「—を握る」。㊈いつはり。詐僞。「—を藏す」。㊉たくみ。技巧。⑪はた。機織。「杼を投じて、—を下る」。⑫自然の性。「天—淺し」。⑬活動の心。⑭適當の時期。とき。をは。をり。⑮技巧の裝置。からくり。しかけ。⑯からくりによりて運轉する器具。きかい。

(き[器](名) ㊀うつはもの。いれもの。㊁もの。えなもの。「形は即ちこれを—といふ」。㊂用途あるもの。㊃用途一定して他に流用出來ざるもの。「君子は—ならず」。㊄其職に堪ふべき才能又は度量。きりやう。「俯仰の—」。㊅機能あるもの。「感覺—」。

(き[氣](名) ㊀風雨寒暑などの如き天地間に起る自然の現象。「天—」「寒—」。㊁十五日を一期とする稱、候の對。㊂くうき。ふんゐき。㊃あぢはひ。かをり。㊄光・熱などの如きはたらきありて形見えざるもの。㊅雲・霧などの如き空に立ちのぼるもの。「上有雲—」。㊆萬物を生成する根元。「精—爲物」。㊇生命の保存力。㊈たましひ。せいしん。㊉いき。呼吸。「—を屏け」。⑪いきほひ。ちから。⑫もちまへ。うまれつき。⑬こゝろ。こゝろもち。「民に怒—なし」。⑭けしき。おもむき。けはひ。やうす。——がある こらえたふこゝろがある。又、なさんとする心がある。——がきく 能く注意とゞく。——がきでない いろ〳〵心配する。——がつく 感づく。又、才はたらく ——にする 心配する。——になる 心配になる。——はこころ 氣のもちやうでどのやうにも思はれる。——をはらす なぐさむ。うつさんをなす。——をもむ いろ〳〵とあせる。

(き[季](名) ㊀支那にて一年を四分したる期間、即ち、三个月の稱。㊁四時の末の月。「—春」。㊂春・夏・秋・冬の稱。「四—」「秋—」。㊃すゑ。をはり。「—子」。

(き[几](名) ㊀つくゑ。おしまづき。けふそく。「—を肘ぶ」。(机)。㊁組み立てゝ机の如き形をなす臺具、これに帳(トバリ)を施す。きちやうのだい。「—帳」。

(き[己](名) 十干の一。つちのと。「—戊」(己)。

(き[癸](名) 十干の一。みづのと。「—卯」。

(き[奇](名) ㊀ことなること。めづらしきこと。㊁あやしきこと。「—怪」。㊂ふしぎ。不可思議。「宇宙すなはちまかく—なり」。㊃ひそか。秘密。「—計を出す」。㊄はんのかず。はん。㊅はしたのかず。はした。㊆かたく。ひとつ。㊇未だ一人前ならざるを、はんにんまへ。㊈ふえあはせ。ふうん。「數—」。

(き[畿](名) 君王の宮城に近き直隸の地。又、宮城に近き所の稱。「—内」「近—」。

(き[歸](名) ㊀むね。おもむき。趣向。「異塗同—」。㊁【數】珠算の割算にて、法一けたにてわること。

(き[汽](名) ゆげ。蒸氣。

(き[騎](名) ㊀馬に乘ること、「—馬」。㊁うまにのりたる人。うまのりむしや。「—戰」「—士」「—兵」。

き(しか)(助動) 過去の義を示す語。「夢てふものは、頼みそめて—」。

き—[生](接頭) ㊀或語に冠して、新鮮若しくは純粹の意を表はす語。「—酢」「—娘」。㊁或語に冠して、人工又は精製を經ざる意を表はす語。「—紙」「—藥」。

—き[基](接尾) 据ゑてあるものを數ふるにいふ語。「石塔一—」。

—き[騎](接尾) 馬のりを數ふるにいふ語。「百—」。

(ぎ[義](名) ㊀制裁其宜しきを得たること。處置其理にあたること。㊁自己の利害を顧みずして人のために事を行ふこと。公共のために力を盡すこと。㊂人の履み行ふべき正しき條理。人の執り守るべき常の分限。すぢみち。㊃物事の意旨又は條理。こゝろ。わけ。すぢ。「文字の—を尋ぬ」。㊄人なみすぐれたる正しき行爲あること。「—人なり、殺すべからず」。㊅親子若しくは同胞ならざるものが、親子若しくは同胞となる約束。「—を桃園に結ぶ」。

(ぎ[儀](名) ㊀事の準則。さだめ。のり。㊁禮の設備。ぎしき。㊂ぎやうぎさはふ。たちゐふるまひ。㊃ならはし。ならひ。風俗。㊄たぐひ。つれあひ。㊅こと。ことがら。いみ。わけ。「左樣の—」「拙者—」。

(ぎ[議](名) ㊀ひやうぢやう。相談。「—まとまらず」。㊁ぞんねん。意見。㊂はかりごと。謀計。「匈奴征伐の—」。㊃ぎろん。さうろん。㊄いさめ。諫官。

(ぎ[誼](名) ㊀みち。すぢ。道義。「君臣の—」。㊁よしみ。したしみ。

(ぎ[技](名) 腕まへ。わざまへ。「—をみがく」。

(ぎ[妓](名) あそびめ。うたひめ。遊女。

(ぎ—[義](接頭) ㊀或語に冠して、外表につけ加へたるもの、意を表はす語。「—齒」。㊁或語に冠して、混和したる飲料の意を表はす語。「—漿」。

き-あがり[氣上](名) ぢやうき。のぼせ。「顏もはかつく、—もだく〳〵」。

き-あさがほ[木朝顏](名) 【植】「てうせんあさがほ」に同じ。

き-あつ[氣壓](名) 大氣の壓力、大氣の遍滿に隨ひ其度を異にす、海面上にて高さ七百六十「ミリメートル」の水銀柱を支ふるに足る壓力を以て、一氣壓とす。

き-あひ(イーア)[氣合](名) ㊀きもち。こゝろもち。氣分。㊁いき。呼吸。「—が合はぬ」。㊂擊劍又は柔術などにて、精神の體に滿ちて構へに隙なきこと。「—負け」。㊃擊劍又は柔術などにて、敵手に攻めかゝる氣勢又は掛聲。

き-あまちや[木甘茶](名) 【植】虎耳草(ユキノシタ)科に屬する小木本、花は二樣ありて、外圍のものは大形の蕚を有す、花瓣は初め青色にして後に紅色に變ず、其葉を養てあまちやを製す。

(き-あん[几案](名) つくゑ。だい。

(ぎ-あん[議案](名) 會議に附する案文。議事の案件。

(き-い[奇異](名) ふしぎ。きくわい。きたい。奇妙。

(き-い[詭異](名) ㊀怪しきこと。㊁普通のものとかはりてあること。㊂よこしま。いつはり。

(き-い[貴意](名) 人の意存の敬稱。おこゝろ。

(き-いう)[杞憂](名)（古昔、支那の杞國の人が、天の崩れ墜つるをなきかと、心をいためたりといふ故事に出づ）未來の事に就きて、ふれこれとむだな心配すると。とりこし苦勞。

(きい-きい)(名) 氣分又は病氣。（小兒の詞）

(きい-きい)(名、副) 物の轢(キシ)る音。

き-いしばひ[生石灰](名) 石灰石を燒きたるもの、水をそゝげば爆發して、熱を起し、遂に粉末となる。

(きい-たふう)[利風](名) 氣のきゝたる風をよそほふと。何となく自慢めきたると。

き-いちご[木苺](名)【植】薔薇科に屬する亞灌木、葉は三裂乃至五裂し、缺裂狀鋸齒を有す、果實は黃色にして食用に供せらる。(木莓盆、懸鉤子)。

(き-いつ)[歸一](名) 別れたるものが一つになると。

き-いと[生絲](名) まだ練(ネ)らぬ絹絲。

き-いろ・し（く・しき・けれ）[黃色](形、二) きいろなり。

(き-いん)[基因](名) もとゐ。もと。ねもと。

(き-いん)[歸隱](名) 職をやめて鄕里に隱居すると。

(き-いん)[欺隱](名) 事實をかくして人をあざむく「と、

(ぎ-いん)[僞印](名) にせの印形。ぼうはん。

(ぎ-いん)[僞引](名) 詐りてひき出すと。

(きう)[灸](名) 漢方の手術の一、もぐさを肌に貼しこれに火をつけて灼(ヤ)き、其熱氣に由りて病氣を療治すると。きうてん。やいと。

(きう)[舊](名) ㊀ふるきと、もと。㊁ふるき物事。「一を問ふ」。㊂もとありしさま。むかしの境遇。「一を戀ふ」。㊃ふるきちなみ。ふるきとも。㊄久しくなりて見なれ聞きなれたると。㊅舊曆の略言。「一の八月十五夜」。(舊)。

(きう)[球](名) ㊀支那の古代にて、圓形をなせる一種の玉の稱。「大一小一」。㊁磬の一種、球玉を以て其板となしたるもの。㊂まるきかたち。まるきもの。たま。「地一」「一燈」(毬)。㊃【數】半圓の直徑を軸として、一周廻轉せしめて生じたる立體。又、一の定點より一定の距離ある點の軌跡。

(きう)[氣宇](名) きぐらゐ。きりやう。「一凡ならず」。

(ぎう)[牛](名) ㊀【動】うし。㊁二十八宿の一。

(きう-あ)[舊痾](名) 久しく癒(イ)えざる病氣。ぢびやう。

(きう-あく)[舊惡](名) 以前なしたる惡事。

(きう-い)[休意](名) あんしん。

(きう-いう)[舊友](名) むかしのとも。友。

(きう-いく)[救育](名) 棄兒・貧兒・貧病兒等を救ひ取りて養育すると。

(きう-えう)[久要](名) 久しき以前の約束。

(ぎう-えき)[牛疫](名) 牛の流行病。

(きう-えん)[久延](名) 物事ののび〱になると。

(きう-おん)[舊恩](名) むかしのおん。

(きう-か)[舊家](名) 久しく續き來たりたる家。其土地に久しく住居せる家。

(きう-か)[九夏](名) 夏季九十日の間の稱。「一三伏」。

(きう-か)[休暇](名) やすみ。ひま。

(きう-が)[球芽](名)【植】百合科の植物などの葉腋に生ずる紫黑色の小球、此小球地に落ちて發芽し繁殖す。

(きう-かう)[舊稿](名) 以前につくりし詩文。ふるきさうかう。

(きう-かう)[舊好](名) 以前のよしみ。

(きう-かう)[仇校](名) ふたつのものをてらしあはせてたゞすと。

(きう-かう)[仇香](名) 德川時代の代官の手代の異稱。

(きう-かう)[舊交](名) ㊀以前よりの交際。ふるきちなひ。(舊好)。㊁むかしのとも。きういう。

(きう-がく)[休學](名) しばらく學問をやすむと。又、生徒のしばらく登校をやすむと。

(きうか-しけん)[休暇事件](名) 裁判所が、七月十一日より九月十日まで即ち夏季の休暇中に、特に取扱ふ事件、養子緣組・婚姻事件其他親族に關係する事件等其おもなるものとす。

(きう-かつ)[裘葛](名) かはごろもとかたびらと。夏の衣と冬の衣と。——**をかふ**[易裘葛] 年月を經過するにいふ。

(きう-がふ)[糾合](名) よせあつむると。あはせて一つにすると。「人數を一す」。(鳩合)。

(きうかふ-るゐ)[鳩鴿類](名)【動】鳥類の一、脚短く翼長くして飛行迅速なり、嘴は小にして柔く鼻孔の周圍は膨(ク)る、穀類果實等を食す、かはらばと・きじばと等これに屬す。

(きう-かん)[嗅感](名) 氣體が鼻孔の上部なる粘膜を刺戟するより起る一種の感覺。鼻の感覺。

(きう-かん)[休刊](名) 新聞又は雜誌などが、其發行をやすむと。

(きう-かん)[球竿](名) 體操の用具、長さ五尺ばかりの木竿の兩端に、木の球をつけたるもの。

(きう-き)[嗅器](名) 嗅覺をつかさどる器官、高等動物の鼻又は甲殼類の第一觸角の外枝の如きこれなり。

(きう-き)[舊記](名) 古事を書きたるもの。ふるききろく。

(きう-き)[舊規](名) ふるきおきて。(舊法)。

(きう-ぎ)[舊誼](名) 以前のよしみ。ふるきなじみ。

(きう-ぎ)[球戲](名) たまつき。

(ぎう-き)[牛鬼](名) ㊀牛の形をしたる怪物。㊁正しからざる神靈。「何物の一か、敢て我義兵を拒む」。

(きう-ぎう-の-いちまう)[九牛一毛]（多くの牛の中の一條の毛の義）多き物の中に於ける極めて少部分の物にいふ。

(きうき-はふ)[九歸法](名)【數】珠算の割算にて、一けた即ち一より九までの數にてわるとの方法又は割聲、例へば、二一添作五・二進一十の如く、三にてわるに、三一三十一・三二六十二・三進一十などの如し。

(きう-きやう)[究竟](名) ㊀くつきやう。くきやう。終極。㊁假定又は特殊に對して、根本又は普通の稱。——**げんり**[究竟原理](名) 普通の科學の或事實を假定して說明せる特種の原理の上に立ち、すべてに普通にして且假定にあらざる第一原理の稱。即ち、哲學にて說明する所の原理これなり。

(きう-くわい)[舊懷](名) むかしのかんがへ、又、以前よりのなつかしさ。

(きう-くわう)[救荒](名) 饑饉におちいりたるを救助すると、

(きう-くわざん)[休火山](名)【地】古代に噴火せし形跡あれど、今は噴火せざる火山、

(きう-くわつ)[久闊](名) とほ〲しきと。久しぶり。

(きう-くわん)[嗅官](名)「きうき」(嗅器)に同じ。

(きう-くわん)[舊貫](名) ㊀もとの領地。㊁むかしよりのならはせ。(舊慣)。

(きう-くわん)[舊觀](名) もとのみえ。むかしのありさま。

(きう-くわん)[九官](名)【動】「きうくわんてう」の略言。——**てう**[九官鳥](名)【動】一種の鳥、もと支那產にしてかけす大なり、全身黑色にして翼に白色の部あり、脚黃にして嘴赤く、巧に人語をまぬ。(秦吉了、鳩鷯)。

(きう-くん)[舊君](名) もとの主君。舊主。

(きう-くん)[舊勳](名) もとのいさを。「一を思ひ」。

(き-うけ)[氣受](名) 他人が其人に對する感情。

(きう-けい)[球莖](名)【植】地下莖の一種、くわゐの如く球狀をなすもの。

(きう-けい)[求刑](名) 刑罰に處せられんとを求むると。

(きう-けい)[球形](名) 毬の形の如く圓きと。(毬形)。——**ぼく**[球形木](名)【植】枝梗は中部に多く且長く、上部に於て分れて細枝となり、其全形の球形をなす木の稱、はぎ・くるみ等これなり。

(きう-けい)[休憩](名) やすみ。いきつぎ。——**じかん**[休憩時間](名) やすみの時間。——**じよ**[休憩所](名) やすみどころ。休息所。

(きう-けう)[舊教](名)「キリスト」敎の一派、「ルーテル」氏の宗敎革命以前の宗旨によるもの、即ち、「ローマ」敎・「ギリシヤ」敎等の總稱。

(きう-けつ)[九穴](名)（九個の數の義）動物の體中に於ける口・兩耳・兩眼・兩鼻孔・二便孔の總稱。

(きう-けつ)[灸穴](名) 灸をすうべき身體の箇處、さんり・ちりけ等の類にして、其箇處は鍼術を施すべき箇處に同じといふ。

(きう-げふ)[休業](名) 業を休むと。

(きう-げん)[九原](名) よみぢ。又、黃泉。

(きう-こ)[舊故](名) ふるきなじみ。むかしのとも。

(きう-こ)[舅姑](名) 舅と姑と。夫の父母。

(きう-ご)[救護](名) ㊀すくひまもると。にぎはしたすくると。㊁病傷者の治療又は看護。——**はん**[救護班](名) 赤十社の戰時に於る救護上の部員編制の名。

(きう-ご)[九五](名)（易の卦にて、下よりかぞへて五つめにあたるもの、稱にて、其君位にあたれる象なるより出づ）天子のみくらゐ。「一に居る」。

(きう-さい)[救濟](名) ㊀不幸若しくは失敗の狀態に陷りたるを、其陷らざる以前の狀態に回復すると、すくひもどすと、たすけすくふと。㊁すべて物事を以前の狀態に回復すると。

(きう-ざい)[糺罪](名) 罪のとりしらべ。

(きう-さう)[灸瘡](名) 灸のあと。

(きう-さく)[舊作](名) 以前につくりし詩歌又は文章、

(きう-さつ)[糺察](名) 罪狀などをとりたゞしあきらむると。とりしらべ。ぎんみ。「罪を一す」。

(きう-し)[仇視](名) あだかたきとして憎むと。

(きう-し)[舅氏](名) 母方のをぢ。

(きう-し)[臼齒](名) 口の奧にある齒、先端は平かにして、臼の如く食物を碎(ク)き細かくする作用あるもの。おくば。

(きう-し)[舊師](名) もとの師匠。又、先師。

(きう-し)[九死](名) 殆んど死すべかりし甚だ危き場合。「一を出でゝ一生を得」。——**いつしやう**[九死一生](名)（死ぬべき場合が九分、生くべき場合が一分の義）前條に同じ。

(きう-しう)[九秋](名) 秋期九十日間の稱。

(きう-しう)[仇讎](名) あだかたき。

(きう-しき)[舊式](名) 舊のかたち、以前のかたち。「一の服」。

(きう-しき)[舊識](名) もとの知己、ふるきちかづき。

(きう-じつ)[休日](名) やすみの日。

(きう-しふ)[舊習](名) ふるきならはし、しみこみたるならはし。「一容易に改まらず」。

(ぎう-しや)[牛車](名) うしのひくくるま。

(きう-しやう)[休祥](名) めでたきと、又、めでたきしるし。

(きう-しやう)[舊章](名) むかしののり。

(きう-しやう)[求償](名) ㊀賠償又は償還を求むると。㊁【法】連帶債務者若しくは保證債務者が、自己の出捐によりて其債務の全部又は一部を消

減せしめたるとき、他の連帶債務者若しくは其主たる債務者に對して、出捐の償還を求むると。

(きう-じやう[球狀](名) 球の形をなすと。

(きう-じやう[舊情](名) むかしのなさけ。むかしよりのおもひ。

(きう-しゆ[舊主](名) もとの主君。むかしのダンナ。──じん[舊主人](名) 前條に同じ。

(きう-じゆつ[救恤](名) 助け賑(ニギ)はすと。ものをめぐみやると。──きん[救恤金](名) 救恤のために貯蓄し又は義捐する金錢。

(きう-しゆん[九春](名) 春期九十日間の稱。

(きう-じよ[救助](名) すくひ助くると。──まい[救助米](名) 救助のために貯蓄し又は義捐する米穀。

(きう-じよう[救拯](名) すくひ。たすけ。「神の─」。

(きう-しよく[休職](名) 其官にあれど其職を帶びざると。「─判事」。

(きう-しよく-きふ[休職給](名) 休職中の官吏に支給する俸給、文官は本俸の三分の一、海軍武官は十分の六を給す。

(きう-しん[舊臣](名) もとの臣下。もとのけらい。

(きう-しんせい-しんけい[求心性神經](名) 末梢端より中樞部に向って傳達する神經。

(きう-しんけい[嗅神經](名) 鼻孔の粘膜に分布して嗅覺を起さする神經。

(きう-しん-りよく[求心力](名)【理】物體の運動するとき、常に一定點に向って引き附くる力、例へば、或物體が圓運動をなすは、圓の中心に向ふ力即ち求心力が其物體に作用するが故なり。

(きう-せい[糺正](名) たゞしなほすと。(糾正)。

(きう-せい[舊制](名) もとののり。又、もとのかた。

(きう-せい[九星](名) 陰陽家にて、九個の星を五行及方位に配し、これを人の生年にあて、吉凶を判斷するもの、即ち、一白(水星、本位は北即ち坎)、二黑(土星、本位は西南即ち坤)、三碧(木星、本位は東即ち震)、四綠(木星、本位は東南即ち巽)、五黃(土星、本位は中央)、六白(金星、本位は西北即ち乾)、七赤(金星、本位は西即ち兌)、八白(土星、本位は東北即ち艮)、九紫(火星、本位は南即ち離)をいふ。

(きう-せい[救世](名) 人類を現世の不幸・罪惡・缺陷より救ひて、幸福・善良・圓滿の域に導くと。

(きう-せい-ぐん[救世軍](名)「キリスト」敎の一派、千八百六十五年「イギリス」人「ブース」氏の創始にかゝる、おもに貧民若しくは窮者の救濟に從事す、傳道の組織は軍隊の組織によれり。

(きう-せい-しゆ[救世主](名) 人類を救濟するもの。

(きう-せかい[舊世界](名)「アジア」「ヨーロッパ」「アフリカ」の三大洲の稱。新世界の對。

(きう-せき[舊跡](名) 以前に或物事のありたる所。

(きう-せき[休戚](名) よろこびと悲しみと。

(きう-せき[求積](名)【數】物の面積又は體積を算出すると。又、其算法。

(きう-せつ[九折](名) 阪路などの曲折多きと。つゞらをり。

(きう-せん[九泉](名) くわうせん。よみぢ。

(きう-せん[休戰](名) ㊀戰爭の中止。㊁交戰者が合意によりて、一定の期間交戰を中止すると。

(きう-せん[舊染](名) 久しき以前より染み込みたるならはし。

(きう-そく[休息](名) ㊀いきつぎ。やすみ。(休憩)。㊁やすらかに生涯を送ると。「民と─す」。──じよ[休息所](名) やすみば。

(きう-ぞく[九族](名) 高祖・曾祖・祖父・父母・自己・子・孫・曾孫・玄孫の總稱。

(きう-ぞく[舊俗](名) むかしのならはし。ふるきしきたり。

きう-た[杵歌](名) 杵もて穀類を搗(ツ)くときに謡ふ歌。

(きう-たい[久滯](名) 久しくとゞこほると。

(きう-だい[休臺](名) 茶盤の具。

(きう-だい[休題](名) 說きのぶるとをやむると。「閑話─」。

(きう-たう[舊套](名) ふるき事をうけつぐと。又、ふるき物事の範圍。「─を脫せず」。

(きう-だう[舊道](名) もとの道路。「箱根の─」。

(きう-たく[舊宅](名) もと住みたる家。(故屋)。

(きう-ち[舊地](名) もとの土地。もとの知行所。

(きう-ち[舊知](名) ふるきなじみ。ふるきとも。──き[舊知己](名) 前條に同じ。──じん[舊知人](名) ふるきとも。

(きう-ぢ[灸治](名) 灸の療治。

(きう-ぢ[救治](名) 以前の狀態にすくひもどすと。

(きう-ぢやう[九腸](名) はらわたの全體。

(きう-ぢやう[休場](名) 興行などを休むと。又、興行などに出勤せざると。

(きう-ちよう[九重](名) ㊀こゝのかさね。㊁天子の住みたまふ所。きんちゆう。──のてん[九重天](名) 天の最高所。又、きんちゆう。

(き-うつ[氣鬱](名) 氣分のふさぐと。(鬱悒、鬱悶)。

(きう-てい-たいりよ[九鼎大呂](名)《九鼎も大呂も共に支那上代の周の寶器》重き地位又は名望にかりいふ。

(きう-てき[仇敵](名) あだかたき。(讐敵)。

(きう-てん[灸點](名) ㊀「きうてんや」の略言。㊁灸穴の上に墨もてしるす點。──や[灸點屋](名) 灸點をおろす家。又灸點をおろす人。

(きう-てん[舊典](名) ㊀むかしの書きもの。古文書。㊁ふるき制度。むかしのかた。

(きう-てん[九天](名) ㊀【佛】九個の天體の稱、即ち太地を中心として回轉せる日天・月天・水星天・金星天・火星天・木星天・土星天・恒星天・宗動天をいふ。㊁支那にて、天を九方位に分ちたる稱、即ち、中央を鈞天といひ、東方を蒼天といひ、東北を變天といひ、北方を玄天といひ、西北方を幽天といひ、西方を昊天といひ、西南方を朱天といひ、南方を炎天といひ、東南方を陽天といふ。㊂單に、天上の稱。㊃轉じて、宮中の稱。「─に奏す」。

(きう-てん-ゑん[九點圓](名)【數】一つの三角形の各邊の中點、各頂點より對邊へ引ける垂線の足、及各項點と垂心との半途の點の九點の稱、此九點を過ぎ一の圓を畫き得る故に此名あり。

(きう-と[舊都](名) もとの都。ふるきみやこ。

(きう-ど[舊土](名) 舊地。

(きう-とう[球燈](名) 圓くして小さき提燈(チヤウチン)。

(きう-とう[舊冬](名) 昨年の冬。

(ぎう-とう[牛痘](名) 牛の疱瘡、うゑばうさうの種とするもの。(種痘)

(きう-とく[舊德](名) もと行ひたる善事。もとほどこしたるめぐみ。

(ぎう-にく[牛肉](名) 牛の肉、滋養の食料。

(ぎう-にゆう[牛乳](名) 牛の乳汁、滋養の飲料。

(きう-ねん[舊年](名) こぞ。きよねん。(昨年)。

(きう-はい[九拜](名) ㊀古昔の最敬禮、立ちて左・右・左、居て左・右・左、跪きて二度、立ちて一度、都合九たび拜すると。㊁書簡の末尾に敬意を表するに用ふる語。(稽首、頓首)。

(きう-はう[臼砲](名) 火砲の一種、彎曲したる彈道を以て射擊するものにして、舊時のは、砲身短く其形臼に似て球狀の彈丸を使用せしが、近時のものは、砲身も長さを增し彈丸も長形のものを使用するとゝなれり。

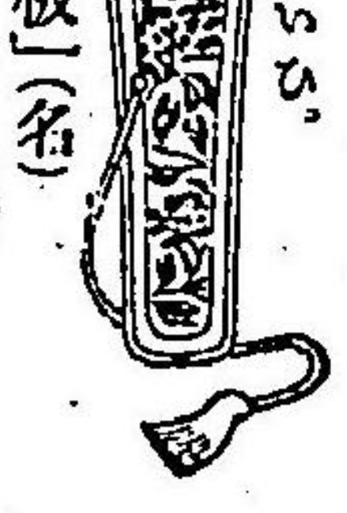
(きう-はく[休泊](名) やすむととまると。又、やどると。──じよ[休泊所](名) やすみ泊るべき所。やどや。はたごや。

(きう-ばく[舊幕](名) 明治維新後に、德川幕府を指して呼ぶ語。「─の頃」。──じだい[舊幕時代](名) 德川幕府が天下の政務を執行せし時代。

(きう-はん[舊藩](名) 舊幕時代の各藩。──し[舊藩士](名) 舊藩に仕へし士。──しゆ[舊藩主](名) 舊藩の大名。

(きう-び[糗糒](名) ほしいひ。

(きう-び[鳩尾](名) 胸骨の下部。みづおち。──のいた[鳩尾板](名) 鎧の附屬具、左のたかひもの上を蔽(オホ)ふもの。



[きうびのいた]

(ぎう-ひ[牛皮](名) ㊀牛の皮。㊁「ぎうひあめ」の略言。(求肥)。──あめ[牛皮飴](名) 一種の菓子、澱粉に砂糖を入れ飴を加へて煮固めたるもの、牛の革に似たれば此名あり。ぎうひ。(牛皮糖)。

(きう-ぶん[舊聞](名) ふるきはなし。「─に屬す」。

(きう-へい[舊弊](名) ㊀ふるくよりの弊害。習慣となりたるあしき癖。㊁陳腐なる習慣を好む性質。いんじゆん。

(きう-ほう[舊封](名) もとの封土。

(きう-ぼく-ふんど[朽木糞土](名)《くちたる木とくされたる土との義》墮落腐敗して、手入れできざるもの又は利用できざるものをたとへいふ。

(きう-む[舊夢](名) 以前みしゆめのあと。

(きう-めい[糺明](名) 罪狀をたゞしあきらむると。きうもん。ぎんみ。(糾察、吟味)。

(きう-めい[究明](名) 道理をきはめ明むると。けんきう。

(きう-めん[球面](名) 球を界する表面。──かく[球面角](名)【數】一つの球面上の二つの大圓をなす角。──きやう[球面鏡](名)【理】反射面が球面の一部をなす鏡、凹鏡と凸鏡とあり。──くわじよう[球面過剩](名)【數】球面三角形の角の和と二直角との差。──さんかくけい[球面三角形](名)【數】三つの大圓を以て圍みたる球面の一部分。──さんかくはふ[球面三角法](名)【數】三角法の一分科、球面三角に就きて論ずるもの。──しうさ[球面收差](名)【理】一點より發する光線が、球面鏡より反射し若しくは「レンズ」を通過したる後、一點を通過(若し發散する場合なれば後方に延長して)せざると。──たかくけい[球面多角形](名)【數】大圓弧を以て圍みたる球面の一部分。──とうえいはふ[球面投影法](名)【地】地圖作成の一法、透視畫法によるものにして、中央と邊側とは其割合を異にするものなり。

(きう-もん[球門](名) 打球にて、球を投(ナ)げこむ場所。

(きう-もん[糺問](名) ぎんみ。きうめい。(糾問)。

(きう-やく[舊約](名) ふるきちかひ。以前の約束。「─をたづぬ」。

(きう-らい[舊來](名) 前よりなると。もとよりなると。「─の情交」。(從來)。

(ぎう-らく[牛酪](名) 牛乳などの脂肪質を凝しかためたるもの。「バタ」。

(きう-らふ[舊臘](名) 去年の十二月。(客臘)。

きう-り[黃瓜](名)【植】葫蘆科に屬する草、蔓莖にして葉は冬瓜に似る、黃色の合瓣花を開く、果實は細長にして刺を有し熟すれば黃色となる、食用

に供せらる。(胡瓜、梭瓜)。——もみ[黃瓜揉](名) 一種の料理、きうりを薄く刻みよく揉(も)みて、これを三杯酢などに和けたるもの。

きう-り[久離](名) 久しくはなるゝこと。子弟などの緣を切ること。「——切って寄せつけぬ」。

(きう-り[舊里](名) ふるさと。故鄕。

(きう-り[究理](名) 事物の道理又は法則をきはむること。——がく[究理學](名) きうりの學問。特に、物理學。

(きう-りう[久留](名) 久しく留まること。

(きう-りう[九流](名) 儒敎・道敎・陰陽道・法家・名家・墨家・縱橫家・雜家・農家の總稱。

(きう-りやう[舊領](名) もとのりやうち。

(きう-りよう[丘陵](名) をか。(岡)。

(きう-りよう[虬龍](名) 龍の子の角なきもの。みづち。

(きう-れい[舊例](名) 昔時よりのきまり。以前のためし。せんれい。(先例)。

(きう-れき[舊曆](名) 陰曆の異稱。新曆の對。

(きう-ゑん[舊怨](名) 以前のうらみ。むかしのあだ。

(きう-ゑん[久遠](名) ㊀時の久しくとほきこと。「永世—」。㊁久しくつゞくこと。ながく滅せざること。

(きう-ゑん[救援](名) たすけ。加勢。

(き-うん[機運](名) まはりあはせ。とき。をり。

きえ[消](名) きゆること。

(き-え[歸依](名) 信仰して我生命を其ものに托すること。あるものによりてつねに自家の疑惑を息め得ること。——ソウ[歸依僧](名) 歸依する僧。——ブツ[歸依佛](名) 歸依する佛。

きえ-い・る[消入](自、ら四) ㊀死ぬ。たえいる。㊁深く恐しむ。

†きえ-かへ・る[消返](自、ら四) 死ぬるが如き心地になる。「—思ひをそれと、知らせてや」。

(き-えつ[喜悅](名) 喜ぶこと。よろこび。

きえ-のこ・る[消殘](自、ら四) ㊀消えずしてあとにのこる。㊁いきのこる。

きえ-は・つ[消果](自、た下二) ㊀全く消ゆ。消えてあとなくなる。㊁生命絶ゆ。

〔きえはてる[消果](自) 「きえはつ」の訛。

†きえ-まど・ふ[消惑](自、は四) 消え入るまでに思ひまどふ。

〔きえる[消](自) 「きゆ」の訛。

(き-えん[機緣](名) ㊀[佛] 衆生の根機に佛陀の敎を受くべき因緣あること。㊁をり。おほ。いんえん。

(き-えん[奇緣](名) 思ひもかけぬ不思議の緣。自然につながる奇妙の緣。

(き-えん[棄捐](名) ㊀自分の財を抛(なげう)ちて、他に恩惠を施すこと。ほどこし。㊁徳川時代に、幕府より大小名以下に貸與せし金錢又は米穀等の返濟を免除せしこと。又、幕府より命じて、札差(ふださし)などより旗本の武士に貸したる金穀のうち、年久しきものは債權を拋棄させしこと。

(き-えん[氣焔](名) ㊀いきほひ。ゐせい。㊁意氣のいとあがれること。又、其言論。「—を吐く」。——ばんぢやう[氣焔萬丈] 氣焔のいと高くさかんなるさまにいふ。

(ぎ-えん[義捐](名) 棄捐(一)に同じ。ほどこし。——きん[義捐金](名) 義捐のための金錢。

(き-えんさん[稀鹽酸](名) 水を混じて稀薄となしたる鹽酸。

(き-おく[記憶](名) ㊀一旦知覺したる物事を忘失せざること。おぼえ。㊁[心] 一旦知覺若しくは經驗したる表象が、再び意識中に喚び起さるゝ作用。きせい。——りよく[記憶力](名) 記憶の能力。記性のはたらき。——じゆつ[記憶術](名) 或物事に聯結して、器械的に記憶を便ならしむる方法。

き-おくれ[氣後](名) 恐れて勢ひるむこと。臆しおづること。

き-おち[氣落](名) 失望して心弱ること。(落膽)。

〔き-おも[氣重](名) 氣力引きたゝざること。氣のしづむこと。

(き-か[麾下](名) はたもと。(旗下)。

(き-か[机下](名) ㊀机の下。㊁多く文書に人の宛名の下に書く語。おそば。「某君—」。

(き-か[貴下](代) 敬意を含む對稱の代名詞。あなた。

(き-か[幾何](名) [數] 幾何學の略言。

き-が[木臭](名) 樽の材の杉の香が酒にうつりたるもの。きのにほひ。

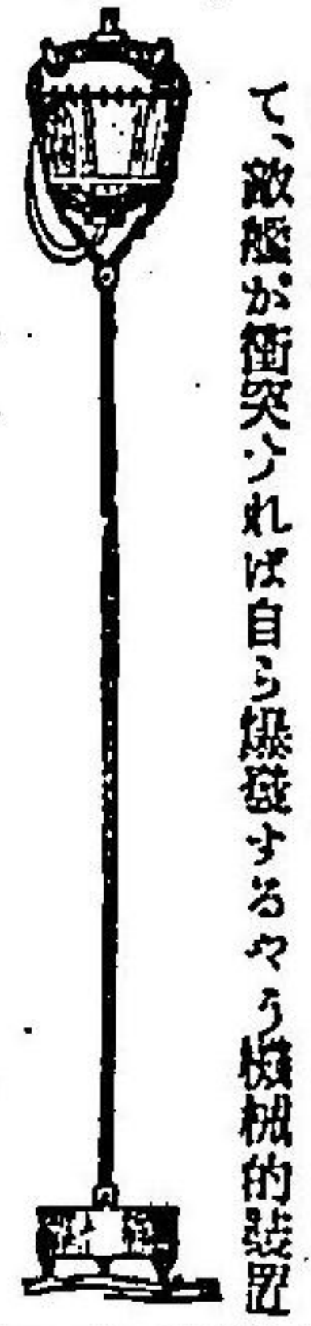
(き-が[飢餓](名) うゝること。うゑ。「—に迫る」。

(ぎ-が[巍峨](名、副) 高くそびゆるさまにいふ語。「—中天にそびゆ」。

(き-かい[氣海](名) ㊀臍の下一寸許の處の稱、古來呼吸の根ざす處といへり。㊁大氣の稱。

(き-かい[器械](名) ㊀うつはもの。うつは。だうぐ。㊁機械に同じ。——たいさう[器械體操](名) 體操の一種、鐵棒・木馬・棚などの器械によりて行ふもの。

(き-かい[機械](名) ㊀からくり。しかけ。㊁機巧により自然力を結合して成る器具、最初其運動の方向を誘導したるのみにて、動力傳はり自ら各種の動きをなす裝置のもの、これを分つて勢力的勞力的の二とす、勢力的とは、動力を發して勞力に代ふるものにて蒸汽機械の如きものをいひ、勞力的とは、勞力者の熟練に代ふるものにて紡績機械の如きものをいふ。㊂機械的動作をなすもの。他人のために勝手に使用せらるゝもの。「他人の—となる」。——がり[機械刈](名) 斬髮の機械にて、髮を短く刈りこむこと。——ぐち[機械口](名) 機械によりて開閉し得らるゝ瓶の口。——すゐらい[機械水雷](名) 防禦水雷の一種、海中に沈め置きて、敵艦が衝突すれば自ら爆發するやう機械的裝置あるもの。



——てき[機械的](名) ㊀機械の裝置あるにいふ。㊁機械が物理的に動力のために動くが如く、其活動に何等精神なくたゞ他よりの命令又は仕向に從ひて動くさまにいふ。——てきかんかく[機械的感覺](名) [心] 感覺神經を刺戟せらるゝによりて起る直接の感覺、即ち、觸覺・嗅覺などこれなり。——ば[機械場](名) 機械のすゑつけてある工作場。(工場)。——りよく[機械力](名) 機械の仕事する能、機械のはたらき。

(き-がい[氣概](名) 意氣の強きこと。するどき氣象。いきぢ。いきばり。

(き-がい[危害](名) 物事の危險又は損害。わざはひ。さいなん。——ぶつ[危害物](名) 危害を生じ易き性質の物品、石油又は火藥の類。

(き-かう[寄稿](名) 草稿を新誌などへ寄贈すること。

(き-かう[紀行](名) 旅行の日記。

(き-かう[枳柑](名) [植] きこくの屬、其實の味くねんぼに似る。

(き-かう[紀綱](名) 「かうき」(綱紀)に同じ。

(き-かう[起稿](名) 草稿をかきはじむること。「歷史の—に着手す」。

(き-かう[機巧](名) たくみ。さいく。しかけ。

(き-かう[奇行](名) 尋常ならぬおこなひ。

(き-かう[歸航](名) 船舶のかへりみちの航海。

(き-かう[寄航](名) 航路中の船舶が港へ立寄ること。——かう[寄航港](名) 船舶の寄航する港。

(き-がう[旗號](名) 旗じるし。旗章。

(き-がう[揮毫](名) 書畫をかくこと。

(き-がう[貴號](名) 尊貴を表はす號、即ち、博士號など。

(き-がう[記號](名) ふてふ。しるし。

(き-か-がく[幾何學](名) [數] 物の形、大きさ及位置に關する眞理を研究する科學。

き-がかり[氣掛](名) けねん。心配。

(き-かく[汽角](名) 汽笛の類、合圖(あひづ)に鳴らすもの。

(き-かく[揮霍](名) いそがしきこと。はやきこと。

(き-かく[掎角](名) (鹿を捕ふるに後足をとると角をとるとの意) ㊀敵の前後を制し又は夾み攻むるにいふ。㊁一國又は一地方に於て、兩雄おの〳〵一方に據るさまにいふ。

(き-がく[器樂](名) 樂器によりて奏する音樂、聲樂の對。

(ぎ-がく[伎樂](名) ㊀おんがく。又、わざをぎ。㊁†奈良朝時代の頃に行はれし一種の技藝、今の輕業(かるわざ)又は手品の類。

(き-か-きふすう[幾何級數](名) [數] 等比級數に同じ。

き-がけ[生掛](名) こよりに燈心を纏(まと)ひて心とし、これに油をもて煉りたる蠟を塗りかけ、數回乾かして塗りあげたる蠟燭。

〔き-がけ[來掛](名) 來る途。くるついで。

〔き-がさ[氣嵩](名) いきばり。かちき。

き-かざ・る[着飾](他、ら四) 美衣をよそほひ着る。「母は衣裳をきかざりて」。

(き-かつ[飢渴](名) 飢ゑ且渴すること。飲食の缺乏。

〔き-がね[氣兼](名) 他人に對するこゝろづかひ。ゑんりよ。きぐらう。

き-がはら[木瓦](名) 木製の瓦。

(き-かふ[龜甲](名) 龜の甲。きっかふ。

き-か・ふ[着替](他、は下二) 替へて著る。「衣を—」。

き-がへ[着替](名) 衣服を着かふること、又、其ための用意の服。「—賣りても損かけぬ」。(副服、副衣)。

〔きかへる[着替](他) 「きかふ」の訛。

き-がみ[生紙](名) 糊(のり)を加へずして漉(す)きたる紙。

†き-か・む[切齒](自、ま四) 齒ぎしりかむ。

き-からすうり[黃烏瓜](名) [植] からすうりの一種、夏の頃、白花をひらき黃果を結ぶ、根より天花粉を取る。(栝樓、瓜蔞)。

き-がらちや[黃枯茶](名) やゝ藍を帶びたる黃色。(正圓眼色)。——めし[黃枯茶飯](名) 醬油又は酒にて味を付け炊(かし)ぎたる飯、其色のきがら茶をなすより此名あり。(黃茶飯)。

き-がる[氣輕](名) ㊀執念(しふねん)深からずして、何事もうちとけやすきこと、きさく。「—の人」。㊁むづかしく考へざること、おも〳〵しくふるまはざること、「—にうけあひ」。——もの[氣輕者](名) 氣輕なる人。

(き-かん[龜鑑](名) かゞみ。てはん。模範。

(き-かん[期間](名) 一定の時間。

(き-かん[祁寒](名) 甚しき寒さ。

(き-かん[旗艦](名) 艦隊の中にて司令長官又は司令官の坐乘せる軍艦。

(き-かん[旗竿](名) はたを掲ぐるさを。はたざを。

(き-かん[饑寒](名) 饑うること、又、饑え且こゞゆること、衣食の缺乏。

(ぎ-かん[技監](名) 技術を監督するもの。

（ぎ·がん）［義眼］（名）いれめ。

きき［利］（名）㊀きくこと。「左—」。㊁ゑるし、かうのう。「藥の—」。（效驗）。

きき［聞］（名）きこえ。「人—が惡し」。

（き·き）［記旗］（名）うまじるし。又、しるしばた。

（き·き）［器機］（名）機械。

（き·き）［汽機］（名）蒸氣機械の略言。

（き·き）［危機］（名）あやふき場合。あぶなきをり。「—に際す」。——**いっぱつ**［危機一髮］殆ど危機に陷らんとする場合。

（き·き）［忌諱］（名）忌みはゞかること。「—に觸る」。

（き·き）［歸期］（名）歸る時。歸る期限。「—を問ふ」。

き·ぎ［木木］（名）多數の木。「—の梢」。

（き·ぎ）［奇技］（名）奇妙なるわざ。めづらしきわざ。

（き·ぎ）［危疑］（名）あやぶみ疑ふこと。ためらふこと。

（き·ぎ）［詭僞］（名）いつはり。たぶらかし。

（ぎ·き）［義氣］（名）義にいさむ意氣。

（ぎ·ぎ）［巍巍］（名、副）高く大いなるさまにいふ詞。「—たる山」。

（ぎ·ぎ）［疑義］（名）疑はしき意義。解し難き意味。

ぎぎ（名）【動】喉鰾類中なまづ科に屬する魚、頭扁く脊鰭長し、鰭骨硬く且銳尖にしてこれを以て物を刺す、體は茶褐色にして黑き斑紋あり、體長大なるは一尺許、淡水に產す。ぎゞう。（黃顙魚）。

（ぎ·ぎ）［擬議］（名）㊀あやぶみためらふこと。㊁評（アゲ）ひ又は語らんとしかくること。

きき·あ·く（かきくくけけ）［聞飽］（自、か四）㊀十分に聞く。たびたび聞く。㊁已に聞きて更に聞くを厭ふ。

きき·あは·す（ワース）（せせすするすれせよ）［聞合］（他、さ下二）たづねあはす。てらしあはす。とひあはす。「合せ」。

きき·あはせ（ワセ）［聞合］（名）きゝあはすること。問

きき·いだ·す（さしすすせせ）［聞出］（他、さ四）㊀秘密を探り知る。（探知）。㊁聞きはじむ。

きき·いみ［聞忌］（名）遠方の親類などの死去を聞きて、忌みにこもること。

きき·い·る（れれるるるれれよ）［聞入］（他、ら下二）人のいふ所を承引す。うけがふ。うけひく。

きき·いれ［聞入］（名）うけがひ。うけひき。

（き·きう）［箕裘］（名）（列子に良弓之子必學爲箕、良冶之子必學爲裘とあるに出づ）親の業を其まゝ受け繼ぐこと。又、親より讓らるゝ業。「—を繼ぐ」。

（き·きう）［氣球］（名）㊀輕氣球の略言。㊁内部に氣體の充滿するによりて、球狀をなすもの、稱、即ち、「シャボン」球の如きもの。——**たい**［氣球隊］（名）輕氣球を運用する軍隊。

（き·きう）［鬼臼］（名）【植】小蘗（メギ）科に屬する草、莖は直立し其端に葉を着け、背白色の花を開き、黃色の果實を結ぶ、これを細末にし消毒用として用ふ。（一九臼、鬼藥）。

〔ぎぎう〕（名）【動】「ぎぎ」に同じ。

きき·うで［利腕］（名）右方の腕。

（き·きう）［歸休］（名）我家にかへりて休息すること。——**へい**［歸休兵］（名）事務勉勵にして品行方正なりし等により、定期の現役を終へずして、特に歸休を許されたる兵士。

きき·お·く（かきくくけけ）［聞置］（他、か四）あらかじめ聞く。聞きて覺えおく。

きき·おち［聞落］（名）㊀聞きおとすこと。㊁聞きて案外興のさむること。

きき·おとし［聞落］（名）きゝおとしたること。

きき·おと·す（さしすすせせ）［聞落］（他、さ四）聞くべきことを聞かずにやむ。きゝもらす。

きき·おぼえ［聞覺］（名）㊀一度聞きたる覺のあること。㊁正しく教授を受けず、人の物語などをききて覺え知ること。みゝがくもん。

きき·およ·び［聞及］（名）聞き及ぶこと。でんぶん。

きき·およ·ぶ（ばびぶぶべべ）［聞及］（他、は四）かねてより聞きてあり。つたへきく。

〔きき·がう·しや〕（ガーウ）［聞巧者］（名）物事を聞くに其判別のたくみなること。

きき·がき［聞書］（名）聞きて書き取ること。又、其記錄、（筆記）。

きき·かじり［聞嚙］（名）きゝかじること。

きき·かじ·る（らりるるれれ）［聞嚙］（他、ら四）㊀よくは聞かずして少しく聞く。㊁其物事の皮相又は端緒のみを學ぶ。すこしく知る。

き·ぎく［黃菊］（名）㊀【植】花の黃色なる菊。㊁かされの色目、表は黃にして裏は青なるもの。

きき·ぐる·し（しくしくしきしけれ）［聞苦］（形、二）聞くに忍びず。聞くにつらし。

（き·き·くわい·くわい）［奇奇怪怪］（名）極めて奇怪なること。いとあやしきこと。

きき·ごま［利駒］（名）將棋の駒の金將·銀將などの稱。

〔きき·ざけ〕［聞酒］（名）酒を少し味ひて良否をためすこと。酒の鑑定。又、其ために飲ます酒。

きき·さ·す（さしすすせせ）［聞差］（他、さ四）よくは聞かずしておく。なかば聞きて止む。

廿**きぎし**［雉子］（名）【動】雉の古名。（山梁、銀雞）。

廿**きぎす**（名）【動】前條に同じ。「燒け野の—」。

きき·すぐし［聞過］（名）きゝすぐすこと。

きき·すぐ·す（さしすすせせ）［聞過］（他、さ四）聞きすごす。

きき·すごし［聞過］（名）きゝすごすこと。

きき·すご·す（さしすすせせ）［聞過］（他、さ四）㊀聞きて其まゝにしおく。㊁過度に心をこめ聞きて、其眞相をあやまる。

きき·す·つ（てててつつるつれてよ）［聞捨］（他、た下二）聞きて其まゝに打ちすておく。聞きながす。きゝすごす。

きき·ずて［聞捨］（名）きゝずてにすること。きゝてなほざりにすること。「—ならず」。——**る**［聞捨］（他）「きゝすつ」の訛。

きき·すま·す（さしすすせせ）［聞澄］（自、さ四）よく注意して聞く。氣をつけて聞く。

きき·ずみ［聞濟］（名）きゝすみたること。きゝとゞけ。

きき·す·む（まみむむめめ）［聞濟］（他、ま四）他のいふ所を納得（ナットク）す。きゝようちす。きゝとゞく。

きき·だ·す（さしすすせせ）［聞出］（他、さ四）きゝいだす。

きき·ちがひ（ガイ）［聞違］（名）きゝあやまり。聞誤。

きき·つぎ［聞繼］（名）いひつたへ。

きき·つ·く（けけくくるくれけよ）［聞付］（他、か下二）㊀それと心付きて聞く。聞きてそれとこゝろづく。㊁きゝいだす。きゝだす。

きき·つ·ぐ（がぎぐぐげげ）［聞續］（他、か四）人より人へとつたへ聞く。かたりづく。傳聞す。

きき·つた·ふ（クウ）（へへふふるふれへよ）［聞傳］（他、は下二）人づてに聞く。傳聞す。

きき·つたへ（クエ）［聞傳］（名）聞きつたふること。いひつたへ。

きき·て［聞人］（名）聞く人。よく聞く人。

きき·で［利手］（名）きゝうで。

きき·とがめ［聞咎］（名）きゝとがむること。

きき·とが·む（めめむむるむれめよ）［聞咎］（他、ま下二）聞きて其非をとがめだてをなす。

きき·どころ［利處］（名）よく利（キ）きてゑるしのあるべき所。

きき·どころ［聞處］（名）よく注意して聞くべき所。聞く甲斐（カヒ）ある所。

きき·とど·く（けけくくるくれけよ）［聞屆］（他、か下二）申立を聞き入る。許可す。ゆるす。

きき·とどけ［聞屆］（名）きゝとゞくること。許可。

きき·ども·な·し（くしくしきけれ）（形、二）聞くことを欲せず。きゝたくなし。

きき·どり［聞取］（名）きゝとること。——**がくもん**［聞取學問］（名）自工夫せずして人の說を聞きたるまゝの學問。

きき·とろ·る（れれるるるれれよ）［聞蕩］（自、ら下二）一心に聞きて惚る。

きき·と·る（らりるるれれ）［聞取］（他、ら四）㊀耳に受けとる。「聲小くしてきゝとれず」。㊁聞きて記錄す。

きき·とれ［聞蕩］（名）きゝとるゝこと。

きき·ながし［聞流］（名）聞きながすこと。

きき·なが·す（さしすすせせ）［聞流］（他、さ四）聞けども心をとめず。聞きすつ。きゝすごす。

きき·な·す（さしすすせせ）［聞做］（他、さ四）聞きてそれと思ふ。

きき·なほし（オシ）［聞直］（名）きゝなほすこと。

きき·なほ·す（オス）（さしすすせせ）［聞直］（他、さ四）更に尋ね聞く、くりかへしてきく。

きき·にく·し（くしくしきけれ）［聞惡］（形、二）㊀きゝぐるし。㊁聞きがたし。

き·ぎぬ［生絹］（名）きいとの絹布。いまだねらぬ絹布。（白生絹）。

きき·ねいり［聞寢入］（名）人の物語を聞きながら寢ること。

（き·きふ）（ーウキ）［危急］（名）危難の切迫せること。——**そんばう**（ーウボ）［危急存亡］（名）存するかほろぶるかといふ極めて危急の場合なること。「—の秋」。

（ぎ·きふ）（ーウキ）［僞級］（名）にせくび。

きき·ふけ·る（らりるるれれ）［聞耽］（他、ら四）耳を傾け心を寄せて聞く。

きき·ふ·る（りりるるるれりよ）［聞舊］（他、ら上二）聞き慣れて、珍しと思はず。

きき·みみ［聞耳］（名）㊀世人へのきこえ。「世の—もいとうるさし」。（外聞）。㊁聞かんとすること。

きき·め［利目］（名）利く力。ゑるし。かうのう。

（き·き·めう·めう）（ーミヨウ）［奇奇妙妙］（名）極めて奇妙なること。いとふしぎなること。

きき·もの［聞物］（名）聞く價値あるもの。聞く甲斐（カヒ）あるもの。

きき·もらし［聞洩］（名）きゝもらすこと。

きき·もら·す（さしすすせせ）［聞洩］（他、さ四）聞きおとす。（聞漏）。

きき·もれ［聞洩］（名）きゝおとし。

（き·きやう）（ーヨウキ）［桔梗］（名）㊀【植】桔梗科に屬する草、高さ三四尺、葉は楕圓狀にして細小なる鋸齒を有す、秋の初め、五瓣の花を開く、花は大形にして紫色若しくは白色なり、觀賞用として栽培せらる。きちかう。（白藥）。㊁桔梗の花の如き色、淡紫に稍や藍を帶びたる色。

（き·きやう）（ーヨウキ）［歸京］（名）みやこへ歸ること。

（き·きやう）（ーヨウキ）［歸鄉］（名）故鄉へかへること。

（ぎ·きやう·だい）（ーウーキヨ）［義兄弟］（名）「ぎけいてい」に同じ。

（き·きやく）［棄却］（名）㊀うちすてゝ用ひざること。すてゝとりあげざること。㊁【法】上告審にて、其上告を理由なきものとして却下すること。

（ぎ·きやく）［義脚］（名）「ぎそく」（義足）に同じ。

（ぎ·ぎやく）［戲謔］（名）たはむれ。おどけ。

（き·きやく·るゐ）［鰭脚類］（名）【動】哺乳動物に屬する魚形の海獸、全體に密毛を有し、趾間に膜を有す、後肢は後方に向ひて鰭狀をなす、多くは寒帶の海に棲息し時々上陸す、おつとせい·あざらし·あじか等これに屬す。

（き·きよ）［起居］（名）㊀たちゐ。おきふし。㊁其人の日常の狀況。やうす。「—を問ふ」。

（き·きよ）［箕踞］（名）兩足をなげだしてすわること。

（き·きよ）［欷歔］（名）すゝりなき。むせびなき。

（ぎ·きよ）［義擧］（名）義のために起す事業。義のた

めになすもこなひ。

(き・きよく [危極] (名) ㊀きはめてあやふきこと、㊁【經】經濟界の恐慌次第に增長して、損失者破產者の續々生出する等の狀態。

(き・きよく [戯曲] (名) 演劇の脚本。演劇のうたひもの、

き・き・わ・く [聞分] (他、か下二) ㊀よく區別して聞く。㊁なっとくす。得心す。

き・き・わけ [聞分] (名) 聞きわくること。得心。——る [聞分] (他) 「きゝわく」の訛。

(き・きん [基金] (名) 將來の支拂のために積み立てたる資金、其元金として積み立て、これを消費せざる資金。——てんぽ [基金塡補] (名) 基金の缺陷額をうづめたすこと。

(き・きん [饑饉] (名) 不作のために人民に食物の缺乏すること。(飢饉)。——どし [饑饉年] (名) 饑饉のある年。きようねん。

(き・きんぞく [貴金屬] (名) 存在稀にして價値高き金屬、即ち、金銀の類。

(きく [菊] (名) ㊀【植】菊科に屬する草、頭狀花を著け、總苞に圍繞せらるゝ聚藥雄蕋ありて花冠に著生す、また異雌蕋のものもあり、果實は瘦果なり、種類多し、多くは觀賞用として栽培せられ、中にはおもに食用に供せらるゝもあり。ももみぐさ。こがねぐさ。はしみぐさ。かたみぐさ。カラよもぎ。かはらよもぎ。(延年、擬年、齡草)。㊁紋所の名、菊の花又は花と葉とを描きたるもの。

(き・く [起句] (名) 詩の最初の第一句。又、文の冒頭。

(き・く [危懼] (名) あやぶみ恐るゝこと。

(き・く [規矩] (名) ㊀ぶんまはしとさしがねと。㊁のり。きそく。

(き・く [崎嶇] (名) ㊀道路のさがしきこと。㊁境遇の危難多きこと。

き・く [利] (自、か四) ㊀効用あり。しるしあり。「藥が—」。㊁よく活動す。はたらく。「氣が—」。

き・く [聞] (自、か四) ㊀聽官に音の感覺を生ず。音響耳に入る。「鐘を—」。㊁音を受けこれを心に記す。「予の嘗て—所なり」。㊂教訓を受く。「道を君子に—」。㊃知る。「未だきかず」。㊄たづぬ。問ふ。「行先を—」。㊅嗅(カ)ぐ。「香を—」。㊆味ふ。「酒を—」。

き・く [聽] (自、か四) ㊀つまびらかに聞く。くはしく聞く。㊁したがふ。きゝいる。㊂許可す。ゆるす。㊃まかす。ゆだぬ。「一に卿の處置に—」。㊄覘候す。うかゞふ。「東方の事を—」。㊅きりもりをなす。さだむ。をさむ。「政を—」。

き・ぐ [木具] (名) 木材もて製したる道具の普通のさしものよりは粗末なるもの。

(き・ぐ [器具] (名) ㊀うつはもの。だうぐ。㊁桶盆などの如き、他の財物を運搬し若しくは保存するための日用道具の特稱。

(き・く [疑懼] (名) うたがひおそるゝこと。甚だ不安心におもふこと。

(きく・いく [鞠育] (名) もりたて育つること。(鞠養)。

きく・いただき [菊戴] (名) 【動】燕雀類中うぐひす科に屬する鳥、小形にして嘴短小なり、頂に菊花に似たる黃色の羽毛あり。

きく・いちもんじ [菊一文字] (名) 後鳥羽天皇時代の鍛工備前則宗が鍛ひつくりし名刀。

(き・ぐう [奇遇] (名) 思ひ掛けぬ出會。「佳人の—」。

きく・がさね [菊重] (名) かさねの色目、表は白にして裏は蘇方(スハウ)なるもの。

きく・カラくさ [菊唐草] (名) 【植】毛茛科に屬する草、通常上昇莖にして、萼片は花瓣に排列し花瓣は存在せず、葉は對生にして九個の小葉より成る、觀賞用として栽培せらる。てつせんくわ。

きく・ぎ [木釘] (名) 木のくぎ。

(きく・きく (名、副) 關節などの角だち曲がるさまにいふ語。

(きく・ぎく (名、副) 前條に同じ。

(きく・きゆう キッ— [鞠躬] (名) 愼みかしこみて身を屈(カヾ)めありくこと。「公門に入るに—如たり」。

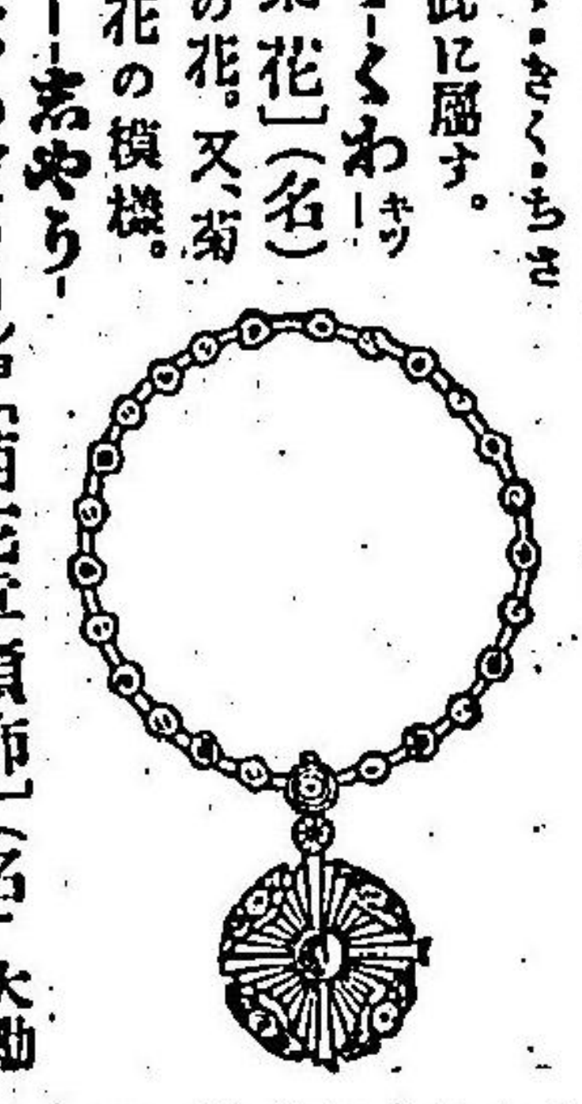
きく・きり [菊桐] (名) 皇室の御紋章、十六瓣の菊花を正面より見たるものと、垂れたる桐葉一片の上に桐花三條の立ちたるものとなり、もとは御衣の模樣に用ひられしものといふ。

(きく・きん [麴菌] (名) 【植】「あをかび」に同じ。

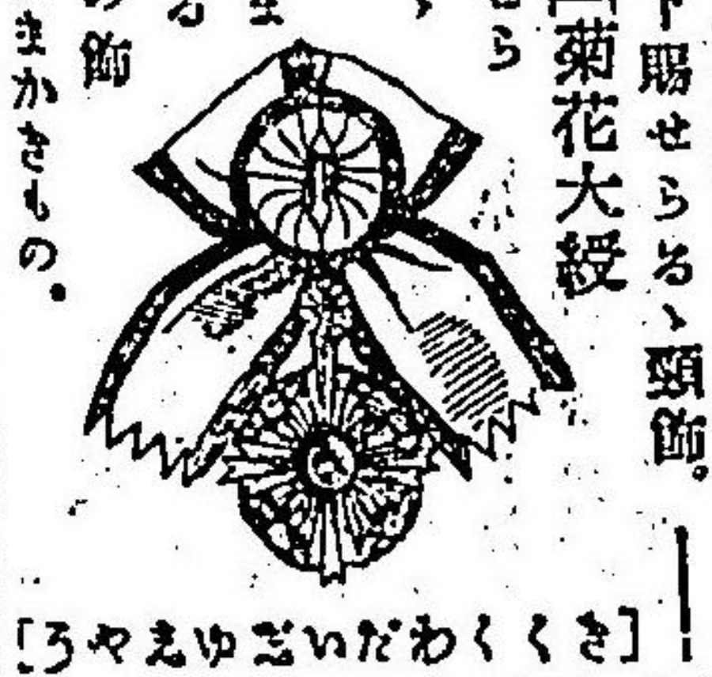
(きく・くわ キッ— [菊科] (名) 【植】多年生の草本植物、根は草質多年根、莖は草質一年生、葉は不完全葉に深き缺刻ありて網狀脈を有す、花は不整齊合瓣花にして頭狀花叢をなす、果實は瘦果なり、たんぽゝ・きく・ちさ等此に屬す。

(きく・くわ キッ— [菊花] (名) 菊の花。又、菊の花の模樣。——しやう—くびかざり カ—ショ [菊花章頸飾] (名) 大勳位に叙せられしものに下賜せらるゝ頸飾。——だいじゆしやう ヨウ—シ [菊花大綬章] (名) 大勳位に叙せられしものに下賜せらるゝ勳章。

(きく・ざ [菊座] (名) まはりの菊花の形に似たる金具の座、兜・鎧其他の飾として用ふ、はとめのこまかきもの。



[きくわしやうくびかざり]



[きくわだいじゆしやう]

(きく・ざい [鞫罪] (名) 罪のとりしらべ。

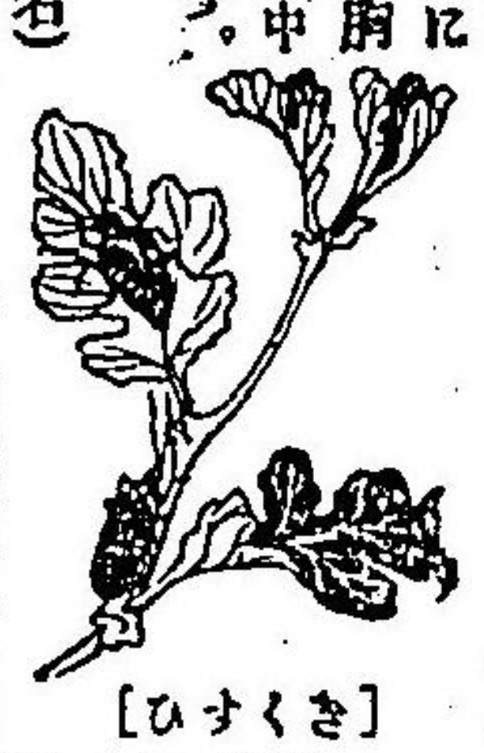
(きく・さく [菊作] (名) 後鳥羽天皇の御みづから、鍛冶して作らせ給ひし刀、銘に一輪の菊花を打ちあり。きくづくり。

きく・ざけ [菊酒] (名) 味醂の一種、加賀國又は肥後國より出だす、其製最も淑(ヨ)し。

き・ぐし [木櫛] (名) 木にて造りたる櫛、金屬又は鼈甲などの櫛の對。

(きく・じん [鞫訊] (名) 罪のとりしらべ、ぎんみ。

きく・すひ イ—ス [菊吸] (名) 【動】鞘翅類中天牛(カミキリ)科に屬する蟲、小形にして全體藍黑色、前胸に赤條あり、菊の莖中に入りて大害をなす。(菊虎、前頭蟲)。



[きくすひ]

き・ぐすり [生藥] (名) いまだ配劑せざる藥品。——や [生藥屋] (名) 生藥を賣る家。又、藥を賣る店の總稱。やくしゆや。(藥舖、藥種屋)。

(きく・すい [菊水] (名) 紋所の名、水に菊花の浮きたるさまを描(エガ)けるもの、楠木家の定紋として有名なり。

(きく・せい [麴生] (名) 酒の異稱。

き・ぐ・ぜん [木具膳] (名) 脚高く緣深き膳。

(き・くたぶれ [氣草臥] (名) 神氣の疲勞、氣のつかれ。

き・ぐち [木口] (名) 材木の性質。「—の善し惡し」。

きく・ぢさ [菊苣] (名) 【植】菊科に屬する草、葉はちさに似る。はなぢさ。

きく・ぢん [麴塵] (名) ㊀古昔、主上の褻(ケ)の御衣に用ひられし染色、黃色に靑色を帶ぶるものにして、かりやす・灰・紫の三色にて染め、其紋は、竹・桐・鳳凰或は麒麟と鳥となり。㊁かさねの色目、表は靑くして裏は黃なるもの。

廿きく・づき [菊月] (名) 陰曆、九月の異稱。

(きく・つ・く (自、か四) ぎくぎくす。

きく・づくり [菊作] (名) ㊀「きくさく」に同じ。㊁菊花を培養すること。又、其業の人。

きく・とうだい [菊燈臺] (名) 油皿を載する短檠。

きく・とぢ [菊綴] (名) 水干(スヰカン)又は直垂(ヒタヽレ)などの縫ひ留めの破綻を防がんがため、緒又は革若しくは絲にて菊花の形のごとき模樣を綴(ト)ぢつけたるもの。

きく・とは・なし・に ワ—ト (副) 聞かんとは欲せずに。

きく・な [菊菜] (名) 【植】「しゆんぎく」の一名。

きく・ならく [聞道] (副) (「きくなる」の延言) 聞くには。「—これ漢家の女」。(聞說)。

きく・にんぎやう ギヤ—ウ [菊人形] (名) 菊の枝をため、其花又は葉を組みあはせて衣裝となしたる人形の稱。「團子坂の—」。

きく・の・えん [菊宴] (名) 九月九日の觀菊の宴。

廿きく・の・きせわた [菊着綿] (名) 古昔、重陽の節に、菊に著せて其香を移しとりし小圓形の綿、これにて身體を撫(ナ)でさすれば、齡を延ぶといひ傳へたり。きせわた。

きく・の・せっく [菊節句] (名) 九月九日の節句。重陽の節。

きく・の・みづ [菊水] (名) 九月九日に酌む酒。(菊酒)。

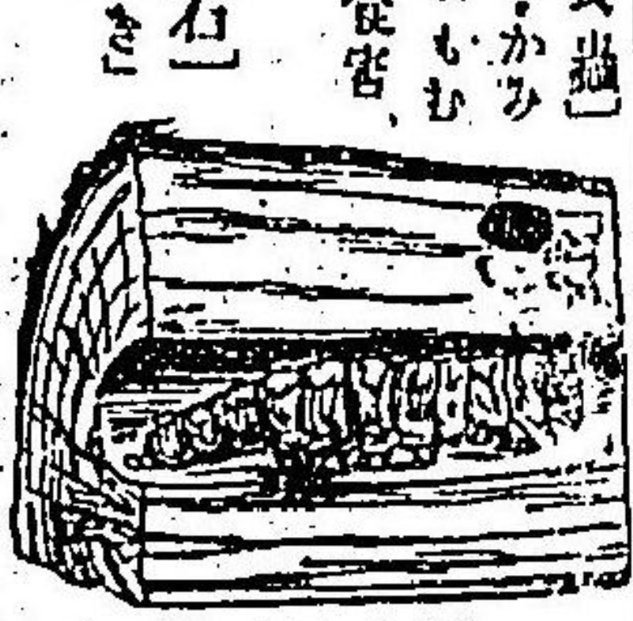
き・くばり [氣配] (名) 種々の注意をなすこと。氣をくばること。こゝろづかひ。(配慮)。

きく・ばん [菊判] (名) 巾二尺一寸長三尺一寸の大きさの洋紙を十六片に切りたるものゝ稱。

き・くひ・むし イ—ク [木食蟲] (名) 【動】かぶとむし・かみきりむし等の仔蟲、形いもむしに似る、樹木の幹を食害す。(木蠹、蛀蟲)。

きく・め・いし [菊目石] (名) 【動】「きくめいせき」の一名。(花石)。

(きく・めい・せき [菊銘石] (名) 【動】珊瑚蟲類中多放眼類に屬する腔腸動物、暖國の海岸に生ず、群體をなし、骨骼は互に合著して塊狀をなす、色灰黑く、其表面に菊のごとき模樣あり、多く南海道より出づ、細粉となして下劑の藥劑となす。



[きくひむし]

(きく・もん [鞫問] (名) 罪人などを問ひ亂(タヾ)すこと。ぎんみ。「罪人の—」。(詰問)。

き・ぐ・や [木具屋] (名) 木具を造る職人。又、木具を賣る店。(木器舖)。

きく・よもぎ [菊蓬] (名) 【植】よもぎの一種、菊の如き花を開く、

き・ぐらう ウ—ロ [氣苦勞] (名) 心をちゞに碎き心配すること。神氣の苦勞、きんぱい。

き・くらげ [木海月] (名) ㊀【植】一種の菌類、形は人の耳に似る、多くは桑・柳などに生ず、漢方醫はこれを藥劑に用ひ、痔・赤痢等に效ありといふ、又、食用に供せらる。(木聞、木耳)。㊁人の耳。

(き・ぐらゐ [氣位] (名) 心に持ちかまへたる品位、「—の高き人」。

(き・くり (名、副) おどろきおそるゝさまにいふ語。

(き・ぐり (名、副) 前條に同じ。

(き・くわ [奇禍] (名) 意外の禍害。さいなん。

(き・くわ [奇貨] (名) ㊀珍しきもの。㊁意外の見込あるもの。「—可居」。

(き-くわ「歸化」(名) 他國の人民若しくは無所屬國の人民が、或國の國籍を取得して其國の人民となると。我國現今の制にて、外國の人民が我國に歸化するには、國籍法の規定に適合する者にして內務大臣の許可を得れば、歸化するを得。――じん「歸化人」(名) 或國に歸化せる人。

(き-くわ「氣化」(名)【理】液體より氣體に變化すると。――ねつ「氣化熱」(名)【理】液體が同溫度の氣體に變ずるに要する熱。

(き-ぐわ「起臥」(名) おきふし。やうす。ききよ。「―を問ふ」。

(き-くわい「毀壞」(名) そこなひやぶると。

(き-くわい「機會」(名) ばあひ。まあひ。をり。まぎは。はずみ。「―を候ふ」。

(き-くわい「奇怪」(名) ㊀怪しむべきと。ふしぎ。㊁心得難くあると。とがむべきと。「―なる振舞」。

(き-くわい「議會」(名) ㊀帝國議會又は府縣會・郡會若しくは市町村會の如く、或物事の議決を職とする合議制の機關。㊁帝國議會の特稱。「―開會中」。

(き-くわん「汽罐」(名) 火を焚(た)き水を熱して蒸氣を發生せしむるに用ふる大いなる鐵、鋼鐵の板又は管にて製造す、其形體一ならざれど、要するに煙管式と水管式との別あり、後者は前者に比し蒸氣の發生急速にして且堅牢なり、燃料は固體と液體とありて、固體はおもに石炭を用ひ、液體は多くは石腦油を用ふ。じようきがま。

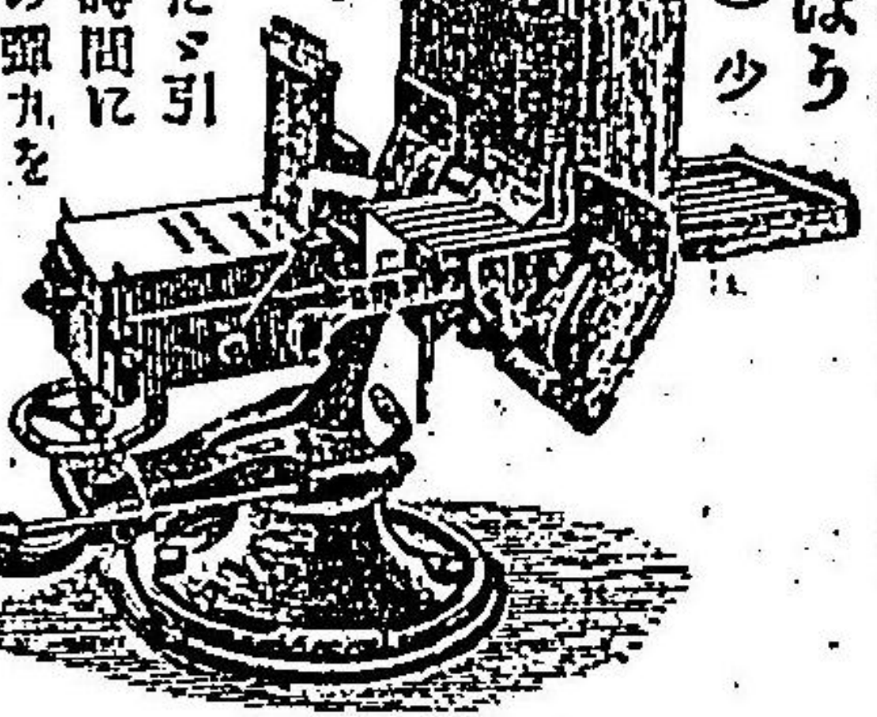
(き-くわん「汽管」(名) 蒸氣の通路なる管。

(き-くわん「器官」(名) 動植物體の種々の生活作用を分擔する局所の稱、分つて二とし運動及感覺に屬するものは、これを動物性器官といひ、營養及生殖に屬するものは、これを植物性器官といふ。(機官)。

(き-くわん「奇觀」(名) めづらしきさま。かはりたる見もの。「千古の―」。

(き-くわん「氣管」(名) 人類及高等動物の呼吸器の一部、肺の上部より食道の前面に沿ひ、咽喉を經て鼻腔に開通せる管、空氣の呼吸はこれを通じて行はる、又、昆蟲のは、無數に分岐せる膜質の細管にして體內に遍布せり。――し「氣管支」(名) 人類及高等脊椎動物の氣管の端より分れて左右の肺臟に各一本づゝ分出せる小さき氣管。

(き-くわん「機關」(名) ㊀活動の裝置ある器械即ち機械。「蒸氣―」。㊁他の行動の目的を達するために使用又は設置せられたるもの。「政黨の―」。「國家の―」。――くわん「機關官」(名) 專ら機關の事をつかさどる高等官。――し「機關紙」(名) 其もの、機關となり、其ものに利益ある報告言論を力むる新聞又は雜誌。――しや「機關車」(名) 鐵道の列車の蒸汽機關を備置せるもの。――しゆ「機關手」(名) 機關の運轉又は修理等をつかさどる人。――はう「機關砲」(名) 少數の人員を以て少時間に多數の彈丸を發射し得る火砲、機關を設け自動的に發火の準備をなすが故に、たゞ引金を引けば、一分時間に間斷なく數百發の彈丸を發射し得、且隨意に砲口を上下左右するを得。


[きくわんはう]

(き-くわん「貴官」(代) 官吏の敬稱。

(き-ぐわん「祈願」(名) 神佛にいのりねがふと。「神佛に―をかけ」。――しよ「祈願所」(名) 所願の事を依託する寺院。

(き-ぐわん「議官」(名) ㊀明治の初年に設置せられ、大政の評議に參せし高官。㊁元老院の議員。

(き-くん「貴君」(代) 同輩又は稍や貴き人に對して用ふる對稱の代名詞。あなた。

(き-くんし「僞君子」(名) 君子らしき擧動をなせど、實際の性狀は君子ならざる人。

(き-けい「奇計」(名) ㊀巧なる謀計。普通におもひつかざるはかりごと。(妙計)。㊁秘密なるはかりごと。「陳平六たび―を出す」。

(き-けい「葵傾」(名) (あふひの花の日の方へ傾く意) 心ひとへに其人の德に服すると。

(き-けい「奇警」(名) すぐれてするどくさときと。

(き-けい「畸形」(名) 普通の形に異なると。又、かたは。不具。――じ「畸形兒」(名) 異狀の體軀をなす小兒。かたわもの。

(き-けい「貴兄」(代) 貴君に同じ。あなた。

(き-けい「義兄」(名) ㊀義を結びて兄と定めたる人。㊁姉の夫又は妻の兄の稱。

(き-けい「僞計」(名) いつはりの手段。

(き-げい「技藝」(名) わざ。藝術。技術。

(き-けいてい「義兄弟」(名) 義を結びて兄弟となりたる兄弟。ぎきやうだい。

(き-けう「奇矯」(名) 強ひて人よりかはりたる言行をなすと。

(き-げき「喜劇」(名) ㊀看客に歡笑の情を催さしむる脚色の演劇、多くは滑稽の趣味あるもの。㊁傍觀者をしてそゞろに歡笑の情を催さしむる事態。

(き-けつ「起結」(名) ㊀詩の起句と結句と。㊁おこりとをはりと。

(き-けつ「歸結」(名) をはり。落着。

(き-けつ「剞劂」(名) ㊀はりものがたな。㊁版木を彫(ほ)ると。

(き-けつ「既決」(名) ㊀已にきまりたると。㊁判決の已に確定したると。――しう「既決囚」(名) 有罪の裁判已に確定したる囚人。

(き-げつ「虧月」(名)【天】滿月より新月に至るまでの間の稱、太陰の影が其面漸次虧(か)くるよりいふ。

(き-げつ「期月」(名) かねて定めたる期限の月。

(き-げつ「朞月」(名) まる一月。

(き-げつ「忌月」(名) いみづき。

(き-けつ「議決」(名) 合議して或事柄を可決したると。又、其可決したる事柄。――けん「議決權」(名) ㊀議案の表決に加はり、可否の數に計算せらるべき有力なる意見を表示する權利、議會及社團法人の議決權は平等なれど、財團法人の議決權は、出資額によりて制限を設くるを普通とす。㊁合議制度の機關が或事柄を議決する權利。「議會の―」。

(き-げふ「機業」(名) 布帛を織り出す事業。はたおりの事業。「桐生の―」。――か「機業家」(名) はたおりの事業を營む人。

(き-げふ「起業」(名) 新に一事業をおこすと。――こうさい「起業公債」(名) 事業の設計に要する資金を得んために募集する公債。

(き-げふ「企業」(名) ㊀くはだつる事業。又、事業をくはだつると。㊁【經】生產營利の目的を以て、生產營利に要する諸種の條件を結合し經營する事業、即ち、經濟的事業、規模を標準として大企業と小企業とに分ち、人を標準として單獨企業と共同企業とに分つ、大企業とは、多數の雇人を使役し企業家がそれを指揮監督するもの、小企業とは、企業家が勞働者を兼ぬるもの、單獨企業とは、企業家一人にして一切の責任を負ふもの、共同企業とは二人以上の共同になるものをいふ。――か「企業家」(名) 企業に從事する人。――ねつ「企業熱」(名) 經濟的事業を起さんとする人氣。

(き-けん「危險」(名) 安全ならざると。あやふきと。

(き-けん「奇驗」(名) ふしぎなる功驗。「藥の―」。

(き-けん「棄權」(名) 自家の權利を棄てゝ行使せざると。「―して投票せず」。

(き-けん「氣圈」(名)【地】大氣が地球を包圍せる區域。

(き-げん「紀元」(名) ㊀建國の初年。㊁其國の經過せる年を數へ始むる年、我國にては、神武天皇の即位したまひし年をいひ、西洋諸國の紀元より六百六十年前なり、西洋諸國にては、「クリスト」の降誕せし年をいへり。

(き-げん「期限」(名) ㊀豫め定めたる時期。一定せる時日。(定期、定限)。㊁【法】法律行爲の履行に關し、將來に於て効力の發生若しくは喪失するとの確定せる事實に附帶したる意思表示、例へば、十二月三十日迄に借金を返濟すと契約すれば、十二月三十日は其期限なり。

(き-げん「貴顯」(名) ㊀身分の高貴なる人。「―紳士」。㊁帝室の方々。

(き-げん「起原」(名) おこり。はじまり。(起源)。

(き-げん「徽言」(名) 善美なる言。たゞしきことば。

(き-げん「機嫌」(名) ㊀人の好まぬ事を伺ひ問ふと。(譏嫌)。㊁見並ふべき時機。「ことによりてよく―をはからふべきなり」。㊂起居。安否。㊃こゝろもち。きもち。「―にさはる」。㊄酒に醉ひて、心地のよささうなると。――うかがひ「機嫌伺」(名) 人の起居安否をたづぬると。――かひ「機嫌買」(名) 人に對する好惡の情の、かはり易く激しやすきと、又、其性質の人。――なほし「機嫌直」(名) 不快なる感情を去りて、愉快なる心地となすと。――をとる なぐさめよろこばす。又、人の氣心にさからはぬやうになす。

(き-げんじやう「喜見城」(名)【佛】帝釋(たいしやく)の居所の府といふ處。

(きげん-せつ「紀元節」(名) 我國三大賀節の一、神武天皇の即位し給ひし紀元の日を祝する祭事、每年二月十一日に行はる。

(き-こ「寄戶」(名) 寄留する家。

(き-ご「寄語」(名) 口上をいひ送ると。ことづて。

(き-ご「奇語」(名) 普通思ひつかぬことば。又、巧にして面白きことば。

(き-ご「綺語」(名) ㊀面白きことば。巧なることば。㊁詩文小說などのかざりたることば。㊂【佛】十惡の一、眞實に背きて巧に飾りたる言語。

(き-こう「奇功」(名) ふしぎなる功績。すぐれたるいさを。「―を奏す」。

(き-こう「氣候」(名) 氣溫・濕度・空氣の流動又は天氣の模樣若しくは雲雨雪霜等の變化の狀態の稱、其狀態は土地の形勢の異なるによりて同じからず。じこう。(季候)。

(き-こう「氣孔」(名) ㊀【動】昆蟲類などの體の側面にありて呼吸作用をなす數個の孔、これより體中の各所に分布する系統あり。㊁【植】葉又は莖の表皮の處々にある小孔、此氣孔により大氣中の炭酸瓦斯を吸收し、これを分解したる後にまた酸素を大氣中に放散す。

(き-こう「貴公」(代) もと長者に用ひしが、今日は下輩に用ふる對稱の代名詞。そこもと。

(き-こうし「貴公子」(名) 身分尊き家の男子。

(きこう-でん)[乞巧奠](名) 陰暦七月七日の夜に行ふ織女星の祭、機織を始め女の手工の巧ならんとを乞ふ意にて、庭前に机を据ゑ、香華をそなへ供物をおく、もと支那の風を移したるものにて、支那のは、棹の端に五色の絲をかけて祭りたりといふ。

(きこう-ふう)[季候風](名) 季候の變化によりて方向の變ずる氣流、即ち、一定の時季毎に相反する方向へ吹く風、殊に「インド」洋に於て、五月中旬頃より九月中旬頃まで吹く南西の風又は十月中旬頃より十二月中旬頃まで吹く北東の風の稱。

きこえ[聞](名) ㊀聞ゆると。㊁うはさ。ひやうばん。

き-こがんぴ[黄小雁皮](名) [植]こがんぴの一種、四瓣黄色の小花を開く、其莖皮の纖維は、雁皮紙の料に用ひらる。

(き-こく)[枳殻](名) [植]「からたち」に同じ。

(き-こく)[歸國](名) 郷里にかへると。本國にかへると。

(き-こく)[貴國](名) 他人の國の敬稱。

(ぎ-ごく)[疑獄](名) 世上の疑念をかもせる犯罪人の取調事件。

(ぎ-こくくわい)[擬國會](名) 國會の組織に擬へて、政事上の議事討論などの演習をなす會合。

き-ごころ[着心](名) 衣服などを着たる心地。

き-こし[木輿](名) いたごし。

きこし-め・す（さしすせせ）[聞召](他、さ四) ㊀聞くの敬語。㊁飲む・食ふ・行ふなどの敬語。

†きこし-を・す（さしすせせ）[聞食](他、さ四) きこしめす。

†きこ・す（さしすせせ）[聞](他、さ四) 聞くの敬語。「ありときこして」。

き-こ・す（さしすせせ）[來越](自、さ四) 通り過ぐ。すぐ。

[ぎこちな・し]（くくしきけれ）(形、二) 身に窮屈を感ず。

(き-こつ)[氣骨](名) 苟も屈伏せざる意氣。

(き-こつ)[肌骨](名) 肌と骨と。「寒氣―に徹す」。

き-こな・す（さしすせせ）(他、さ四) 衣服を着て動作又は風采によく適合せしむ。

き-こ-にち[歸忌日](名) 陰暦にて、嫁娶を忌むといふ日。

き-こ-の-いきほひ[騎虎勢](名) 虎に騎(ノ)りて中途にて下る能はざるが如く、物事のゆきがゝり上已むに已まれざるとをたとへいふ。

[ぎ-ごは](名) 衣服などのこはぐしくて、身になれざると。

き-ごみ[着込](名) ㊀上着の下に着る鎧の一種、おもにくさりかたびらを用ふ。(裏甲)。㊁衣服をきこむと。

き-ごみ[氣込](名) ㊀氣をこめて一心になると。㊁意氣ごみ。

き-こ・む（まみむむめめ）[着込](他、ま四) 上着の下に重ねて着る。衣服を數重ねて着る。(着籠)。「鎧」。

き-こや[木小屋](名) 材木を置くための小屋、(木

き-こ・ゆ（えゆゆるれよ）[聞](自、や下二) ㊀耳に音聲の感覺起る。音聲耳に入る。㊁道理了解せらる。意義さとらる。㊂廣く知らる。遍く傳はる。「世にきこえたる腕」。㊃香にほふ。

†き-こ・ゆ（えゆゆるれよ）[聞](他、や下二) ㊀いふの敬語。㊁まゐらす。たてまつる。「待ち―」。

き-こり[樵](名) きこるとを職業となす人。――**うを**[樵魚](名) [動]「まんざい」に同じ。

き-こ・る（らりるるれれ）[樵](自、ら四) 薪柴を採る。山木を伐(キ)る。

(き-こん)[氣根](名) ㊀長く物事に堪ふる氣力。こんき。㊁[植]根の一種、地中に入らず空中に生じて、大氣中の水分を採りて生活するもの、せきこく・ふうらん等の根これなり。

(き-こん)[機根](名) [佛]衆生の心中に本來具有し、敎法のために激發せらるゝ心機。「―を養ふ」。

(き-こん)[基根](名) ねもと。おほもと。「天下の―と。

(き-こん)[氣魂](名) たましひ。せいしん。

(き-こん)[既婚](名) 已に結婚せると。をっとある

†きさ[樏](名) 木にあらはれたるもや。もくめ。

†きさ[蚶](名) [動]「きさがひ」の略言。

†きさ[象](名) [動]「ざう」に同じ。

きざ[段](名) わかれめ。きざみめ。きだ。

(き-ざ)[跪坐](名) 正しく坐すると。かしこまると。

(き-ざ)[箕坐](名) 兩足をなげ出してすわると。

[き-ざ][氣障](名) 「きざはり」の略言。「―なやつ」。

†きさい[后](名) 「きさき」の音便。「―がね」。「―だち」。(皇后)。――**のみや**[后宮](名) ㊀「きさい」に同じ。㊁きさいのおはします宮。――**のつかさ**[皇后宮職](名) 古昔、中務省の被管にして、きさいの御事に關する事務をつかさどりしもの。――**ばら**[后腹](名) きさいの御腹に出生まし〳〵し皇子又は皇女。――**まち**[后町](名) 古昔、禁中にて南殿の北にありし常寧殿(ジヤウネイデン)の異稱。

(き-さい)[奇才](名) 世に稀なる才。又、其才ある人。

(き-さい)[饑歳](名) きゝんどし。きようねん。

(き-さい)[記載](名) 文書に記し載すると。

(き-さい)[起債](名) 負債を起すと。公債を起すと。

(き-さい)[既濟](名) すでに事ずみとなりたると。

(き-さい)[器財](名) うつはもの。うつは。だうぐ。

き-ざい[木材](名) もくざい。ざいもく。「かきと。

(ぎ-さい)[疑猜](名) うたがひねたむと。ねたみぶ

(き-さい-し)[奇才子](名) 奇才あるもの。

(き-さう)[起草](名) 草稿をかき始むると。案文をつくると。――**ゐゐん**[起草委員](名) 或草稿案文をかくために選ばれたる擔當員。

(き-さう)[箕箒](名) 箕(キ)と箒(ハウ)と。――**をとる**[執箕箒] 婦人が男子に侍りて給仕す。

(き-さう)[歸裝](名) かへりじたく。

(ぎ-さう)[艤裝](名) 船舶が所要一切の船具器械などを整へ出帆の用意をなすと。ふねじたく。

(ぎ-さう)[儀裝](名) 儀式の飾。儀式の支度。

(ぎ-ざう)[僞造](名) 異なる原質のものを用ひて、或物の擬似物をつくると。「文書―」。「貨幣―」。――**ざい**[僞造罪](名) [法]貨幣僞造・官印文書僞造・私書私印僞造等すべて僞造に關する犯罪。

きさ-がひ[蚶貝](名) [動]「あかゞひ」に同じ。

きさき[氣先](名) 氣勢のはな。「―を挫く」。

きさき[后](名) ㊀至尊の御配。くわうごう。㊁親王の御配。(妃)。――**がね**(名) きさきとなるべき候補者。――**ことば**[后詞](名) 高貴の婦人が用ふる一種の詞。――**まち**[后町](名) 「きさいまち」に同じ。

(ぎざ-ぎざ)(名) 鋸の歯などのごとく、入りちがひたる刻目ある狀態。(缺刻)。

(き-さく)(名) 執念深からざると。打ち解け易きと。きがる。「彼の老人の―なる」。

(き-さく)[奇策](名) 奇計。「―も遂に用ひられず」。

(き-さく)[詭策](名) 敵をあざむく詭計。いつはりのはかりごと。

(ぎ-さく)[僞作](名) ㊀にせづくり。まがひづくり。贋作。㊁[法]著作權法にて、他人の著作を侵害したる著述。――**しや**[僞作者](名) 僞作をなしゝ人。

き-ざくら[黄櫻](名) [植]「かばざくら」に同じ。

き-ざけ[生酒](名) 混合物なき純粹の酒。(醇酒)。

きさ-ご[細螺](名) [動](横(キサ)子の義) 腹足類に屬する貝、海に產す、殼はかたつむりに似て厚く、且麗はしき模様あり。ぜぜがひ。きゑやご。(細蠃)。――**はじき**[細螺彈](名) 小兒の遊戲、きさごの殼を指にて彈きて勝負を爭ふもの。

†きささ[虱子](名) [動]しらみの子。

き-さゝぎ[木角豆](名) [植]「きさゝげ」に同じ。

き-さゝげ[木角豆](名) [植]紫葳科に屬する木、葉は稍や卵形にして往々數狀に淺裂す、萼は唇形に分裂し、花冠は淡黃色にして亦た唇形に分裂す、子房二室にして數箇の胚珠を含む、木材は種々の用に供せられ、觀賞用として栽培せらる。あづさ。(楸、梓木)。

きざし[兆、萌](名) ㊀物事の起り來るべき徴候、しるし。㊁草木などの芽を發すると。めざし。

きざ・す（さしすせせ）[兆、萌](自、さ四) (氣差の義) ㊀物事始まり起らんとす。はじまりかゝる。「惡念―」。㊁芽出づ。もえいづ。めぐむ。「若草―」。「萌」。

(き-さつ)[貴札](名) 他人の手紙の敬稱。(貴簡、尊翰)。

きざ-はし[階](名) (刻階の義) ㊀昇降するために設けたる段。㊁物事の進退の由る所。

き-ざはし[木醂](名) 木におきて、其まゝ成熟せる柿。きざらし。きざがき。あがりがき。

き-ざはり[氣障](名) 嫌厭の情を生ぜしむると。又、其物事。

き-さま[貴様](代) もと敬稱として用ひられ、今は多く同輩又は下輩に用ふる對稱の代名詞。

きざみ[刻](名) ㊀きざむと。又、きざみたる目。㊁をり。とき。「今は思ふ―まで」。㊂階級。等級。㊃「きざみタバコ」の略言。――**あし**[刻足](名) 足並細かく急ぐと。――**ごばう**[刻牛蒡](名) 牛蒡の根を刻みて細かくしたるもの。――**タバコ**[刻烟草](名) 煙草の葉を細かく刻みたるもの。(切芽)。――**ども**[刻供](名) 徳川時代に、武士などの隨伴者が刻足にてあるきしと。又、其隨伴者。――**め**[刻目](名) 刻みの付きたる目。きざみたる箇所。

きざ・む（まみむむめめ）[刻](他、ま四) ㊀細かに切る。切りて細かくす。「烟草を―」。㊁物を彫刻す。ほる。ゑる。「佛像を―」。(鏤、鐫)。㊂ぎざぎざを設く。

き-ざら[木皿](名) 木にてつくりたるさら。

き-さら-ぎ[更衣](名) (衣更着の略言、此月猶は寒くして、衣を更に襲(カサ)ぬる義) 陰暦二月の異稱。「―なかば風寒み」。(衣更着、如月)。

き-ざらし[木晒](名) 「きざはし」(木醂)に同じ。

[き-ざる][生猿](名) まだ人馴れぬ猿。野生の猿。

(き-さん)[歸參](名) 一旦辭し去りたるもの、再びかへりまゐりて、もとの主人に仕ふると。「―がかなふ」。

(き-さん)[歸山](名) 僧侶などが、其住める寺院に歸ると。

(き-さん)[起算](名) かぞへ始むると。計算の始め。

(ぎ-さん)[蟻酸](名) [化]刺戟性ある一種の酸、赤蟻其他蜂類蟲の體內に存在するものにして、人の皮膚に觸るれば劇痛を感じ水腫を生ぜしむ、蜂類蟲の害は此酸の致すところなり。

(ぎ-さん)[蟻蠶](名) 蠶の孵化して未だ毛を脫せざる小蟲のときの稱。

(き-さん-ご)[木珊瑚](名) 枝つきの珊瑚。

(き-さん-じ)[氣散](名) 心氣の鬱がりたるを散ずると。鬱を去ると。きばらし。

(き-さん-おつ)[起算日](名) 期間をかぞへ始むる第一日。

(きさんてん)[起算點](名)かぞへ始むる第一次。

きし[岸](名)㊀陸の水に接近する所。陸と水との分界線。㊁山地の陷入したる側のきりそぎたる如くなりたる處。がけ。やまぎし。

(きし)[寄士](名)「きしん」に同じ。

(きし)[旗幟](名)はたじるし。

(きし)[起死](名)死すべき病人を回生せしむること。

(きし)[譏刺](名)人をそしること。

(きし)[貴仕](名)立身。出世。

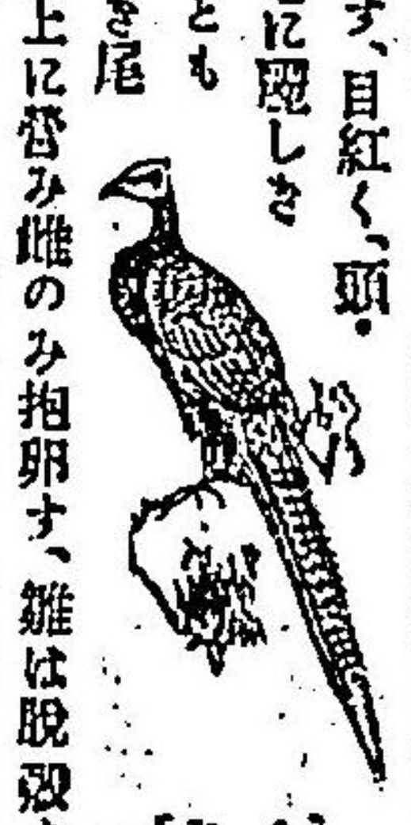
(きし)[餼子](名)下人。又、給仕人。

(きし)[騎士](名)㊀馬にのれる兵士。㊁馬にのるべき家格の武士。㊂「イギリス」語の Knight を譯し呼ぶ語。

(きし)[基址](名)もとゐ。どだい。

(きし)[棄市](名)支那の刑罰にて、斬罪に處したる上、其死骸を市中にさらすこと。

(きし)[氣死](名)絕望のあまり氣絕すること。


［きじ］

きじ[雉](名)【動】(「きぎし」の略言)鶉雞類に屬する鳥、山野に棲息す、目紅く、頭・胸・腹・頸の羽毛に麗しき光澤あり、雌雄とも細長なる直き尾を有す、巢を地上に營み雌のみ抱卵す、雛は脫殼するや直ちに奔走して自ら食を求む、肉は美味にして上饌に供す。きぎし。きぎす。(雉子、野雞、山梁)。

(きじ)[棄兒](名)すてご。

(きじ)[記事](名)㊀事實を記載すること。又、事實をのべしるしたる文章。㊁漢文にて、一種の文體、事實を記載することを主として議論を挿(ハサ)まざるもの。

(きじ)[機事](名)機密なる事實。「―密ならざれば成るを害す」。

(ぎし)[義子](名)やしなひご。養子。

(ぎし)[技師](名)官廳又は諸會社などにて、專門の智識を要する特別の技をつかさどる職名。

(ぎし)[義齒](名)いれ齒。(補齒)。

(ぎし)[義士](名)義を守る士。なみ〳〵ならぬ節操ある人。「四十七人の―」。

(ぎじ)[疑字](名)㊀うたがはしき字體。㊁互に似かよふ字形、即ち、「己と已と巳」などの類。

(ぎじ)[疑似](名)まちがひ易きこと。疑はしきほど似かよひてあること。

(ぎじ)[議事](名)會合して事を議すること。又、會合して議する事柄。

(きしう)[貴酬](名)返事の書狀の敬稱。ごへんたふ。ごへんじ。

(きしう)[季秋](名)秋のすゑ。ばんしう。

きしうみかん[紀州蜜柑](名)紀伊國名草・有田・海部の三郡より出すみかん、其名世に高し、殊に有田郡の產を最上とす。

きじかくし[雉隱](名)【植】百合科に屬する草、山地に自生す、通常葉を有せずして、綠色葉狀の小枝を有す、花は殆ど無柄にして白色なり、莖は上昇す。

きしかた[來方](名)きたりしかた。過ぎこしかた。こしかた。

(ぎしき)[儀式](名)㊀のり。さだめ。㊁公事・神事・佛事若しくは吉凶の物事等に定まりたる設備又は作法。典禮。(規式)。

きしきし(名、副)固きものゝ相磨する音。

ぎしぎし(名、副)「きしきし」に同じ。

(ぎじしやう)[疑似症](名)眞性のものにまぎらはしき病氣。「虎列拉の―」。

(きじたい)[記事體](名)記事の文體。

(きしつ)[氣質](名)㊀【心】遺傳若しくは身體の特質によりて、限定せられたる心的組織の顯著なる狀態、分つて多血質・神經質・膽汁質・粘液質の四種とす。㊁儒家にて、本性の善なるに對し、或は善或は惡なる心の作用をいふ。

(きしつ)[氣室](名)押上「ポンプ」にて水の噴出する管に連絡せる圓筒狀の室、水の漸次押し上げらるゝや、此室の空氣壓縮せられ、從ひて水は空氣の壓力を受くるを以て管口より續きて噴出す。

(きしつ)[蟣蝨](名)【動】しらみ。

(きじつ)[枳實](名)枳殼の果實、藥用に供せらる。

(きじつ)[期日](名)特に定めたる時日。期限の日。「―に到る」。

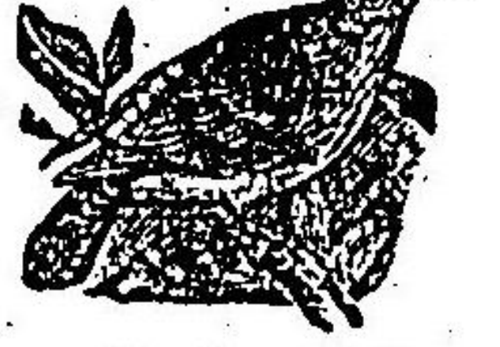
(きじつ)[奇日](名)はんの數にあたる日。奇數の日。

きしつく[軋](自、か四)ぎし〳〵す。

(ぎじにつてい)[議事日程](名)其日の議事の順序を豫め定め記したるもの。

きじのを[雉尾](名)㊀雉子の尻尾。㊁【植】羊齒類に屬する植物、芽胞を生ずる葉と生ぜざる葉とは異狀を呈し、芽胞房發は葉身の上部より下部まで連續して中肋に平行し、被包は大形にして、葉の綠邊の曲反せるものより成り、其側線は殆ど中肋に達す。

きじばと[雉鳩](名)【動】鳩鴿類に屬する鳥、嘴は短くして、膨大せる末端のみ角質にして餘は軟皮を被り、翼は長大なり、常に雙棲し、單一の巢を樹上に營み、每歲二回產卵し雌雄こも〴〵これを抱す、其雛(ヒナ)は微弱にして親鳥の哺育(ハグクミ)を仰ぐ。


［きじばと］

(きしふ)[奇襲](名)不意に敵陣に突擊すること。

きしぶ[生澁](名)混和物なききしぶ。

きじぶえ[雉笛](名)狩獵などにて、雉子を呼びよするために吹く笛。

(きじぶん)[記事文](名)記事體の文章。

きしべ[岸邊](名)岸のほとり。

きしぼ[鬼子母](名)【佛】「きしも」に同じ。——じん[鬼子母神](名)「きしもじん」(二)に同じ。

(きじほんまつ)[紀事本末](名)歷史の一體、一事件每に其始末を記して、年代に係はらざるもの。編年體又は紀傳體の對。——たい[紀事本末體](名)前條に同じ。

きしみち[岸道](名)岸邊に通ずる道。

きしむ[軋](自、ま四)㊀すれあひて圓滑ならず。澁滯して利ならず。㊁樞(クルル)又は車などの回轉するに滑(ナメ)らかならずして澁る。

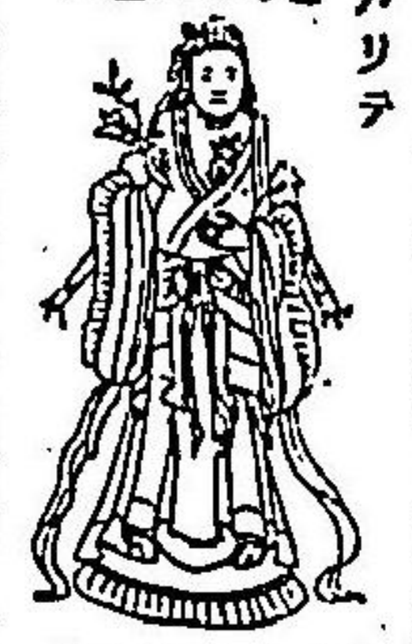
きじむしろ[雉席](名)【植】薔薇科に屬する草、葉は複葉にして、小葉は鈍頭を有し、托葉は草質なり、雌蕊は短毛を具し一個の胚珠を含有す、花は通常黃色を呈す。

きしめかす[軋](他、さ四)きしめくやうになす。

きしめく[軋](自、か四)きし〳〵す。「―車に乘りてありくもの」。

(きしめん)[碁子麵](名)一種の麵、小麥の粉を原料として竹筒の端にて押しきり、ゆでゝいり豆の粉を着けたるもの。又、平うちのうどん。

(きしも)[鬼子母]㊀【佛】女體の神、其像一兒を懷(フトコロ)にして吉祥果(ザクロ)を持つ。「インド」大兜國中に住し、所生千子ありて其最小なるは極めて愛憐する所なり、始め他人の子の血肉を食ひしが、後遂に佛の五戒を受け千子と共に正法に歸依したりといふ、子なき人は求むればこれを得、疾病あれば祈りて安きを得るといふ。カリテイも。——じん[鬼子母神](名)㊀【佛】「きしも」に同じ。㊁子を多く持ちたる女。


［きしもじん］

(きしや)[騎射](名)馬上にありて弓を射ること。特に、やぶさめ・いぬおふもの・うしおふもの・かさがけ等の總稱。步射の對。

(きしや)[汽車](名)蒸氣を機關の動力とし、其運轉によりて軌道の上を走る車。

(きしや)[記者](名)文章に由りて生業を營む人。特に、新聞又は雜誌の記者の稱。(作者)。

(きしや)[喜捨](名)心より進みて、佛に物を供じ又は貧人に物を施すこと。「淨財の―」。

(きしやう)[徽章](名)衣服又は帽子などに附くるしるし。

(きしやう)[騎將](名)騎馬の大將。

(きしやう)[旗章](名)㊀旗じるし。㊁旗の稱。

(きしやう)[起床](名)ねどこよりおき出ること。

(きしやう)[氣象](名)㊀人の生れつきたる心情の狀態、こゝろだて、きしやう。(氣性)。㊁精神又は意氣。㊂おもむき。けしき。「―萬千」。㊃寒・暑・冷・溫・晴・雨、其他すべて、大氣中に起る物理的變化の現象。——がく[氣象學](名)氣象の現因を研究する學問。——だい[氣象臺](名)㊀大氣中の氣象を觀測する臺。㊁大氣中の氣象の觀測又は研究に從事する所。——もの[氣象者](名)氣性の鋭き人。

(きしやう)[起請](名)㊀十古昔、長上に對して物事を請ひねがふための文書。㊁約束に僞りなきことを神佛にかけて誓ひ、起請前書をなしてしたためたる證書。近時は熊野牛王のお札の裏にしたゝむ。ちかひのしやうもん。きしやうもん。「―をとり交はす」。㊂轉じて、たゞ誓約の事を認めたる證書にいふ。「互に夫婦の―をとり交はす」。十——うて[起請討手](名)起請にそむきて罰を得ること。——まへがき[起請前書](名)起請にて誓ふ事柄を擧げ、若しこれに違ふに於てはかく〳〵の神佛の罰を蒙る旨を姓名の前に記したる文句の稱にして、即ち、「梵天帝釋四大天王總日本國中六十餘州大小神祇殊伊豆箱根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿大自在天神部類眷屬神罰冥罰各可罷蒙者也、仍起請如件」などの如し。——もん[起請文](名)起請の文書。

(きじやう)[机上](名)つくゑの上。(几上)。

(きじやうたい)[氣狀體](名)氣體に同じ。

きじやうゆ[生醬油](名)混和物無き醬油。

きじやき[雉燒](名)㊀二寸四方に豆腐を切り、鹽を付けて燒き、熱酒を掛けたるもの。㊁魚肉などを醬油に付けて燒きたるもの。㊂茄子を切りて、胡麻の油をひき味噌をつけて燒きたるもの。

(きしやく)[稀釋](名)他の成分を混へて、その成分をうすくすること。

(きじやく)[歸寂](名)【佛】僧侶などの死ぬること。

きしやご[細螺](名)【動】「きさご」の訛。——はじき[細螺彈](名)「きさごはじき」の訛。

(きしやきゆう)[騎射宮](名)【天】十二宮の一、一に人馬宮ともいふ。

(きしゆ)[旗手](名)㊀はたもち。㊁軍旗を捧持するもの、聯隊附の少尉これにあたる。

(き-しゆ)[起首](名)　物事のかしら。はじめ。

(き-しゆ)[龜手](名)　ひゞのきれた手。

(き-しゆ)[喜壽](名)　七十七歳の祝賀の稱、喜の字を草書にかけば㐂卽ち七十七といふ字の如くなればいふ。

(ぎ-しゆ)[技手](名)　諸官廳又は諸會社に於て、技師の下に屬して技術に從事するもの。

(ぎ-しゆ)[義手](名)　切斷せられたる手などに着くる銅鐵又は木製の手の形をなすもの。

(ぎ-しゆ)[蟻聚](名)　蟻のごとく數多く寄り集まること。

(き-しゆう)[騎從](名)　騎馬にてともをして行くこと、又、其人。

(き-しゆく)[耆宿](名)　年老いて其物事に經驗多き人。老成人。

(き-しゆく)[鬼宿](名)　㊀二十八宿の一。鬼星。㊁陰曆にて、正月は十一日・二月は九日・三月は七日・四月は五日・五月は三日・六月は一日・七月は二十五日・八月は二十二日・九月は二十日・十月は十八日・十一月は十五日・十二月は十三日の稱、其日は嫁とりの外は萬事に吉なりといふ。

(き-しゆく)[寄宿](名)　㊀他家に身を寄せて居ること、寄寓。㊁學校などに生徒のやどり居ること。㊂きしゆくしや」の略稱。——しや[寄宿舍](名)　學校の生徒などの寄宿するために設けたる家屋。

(き-しゆく)[耆熟](名)　年老いて事になるゝこと、老成。

(き-しゆつ)[奇術](名)　奇妙なる技術。——し[奇術師](名)　奇術を行ふ人。てづまつかひの類。

(き-しゆつ)[記述](名)　しるしのぶること。ときあかすこと。——がく[記述學](名)　研究の現象に關する眞理・法則を說明する學、理學・化學等の類これなり。

(ぎ-しゆつ)[技術](名)　理論を實際に應用する手段。理想を實際に表現する熟練。わざ。「藝術の—」。——か[技術家](名)　技術を業となす人。又、技術に長けたる人。——たい[技術隊](名)　工兵隊・鐵道隊・電信隊等の總稱。

(き-しゆん)[季春](名)　はるのすゑ。ばんしゆん。

(き-じゆん)[歸順](名)　反抗の心を改めて歸服すること。敵たりしものが我國又は我君に服從すること。

(き-しよ)[貴書](名)　他人の手紙の敬稱。(尊翰)。

(き-しよ)[寄書](名)　新聞又は雜誌などに、揭載するために其社へ他より寄贈する文書。きかう。——か[寄書家](名)　つねに寄書をなす人。

(き-しよ)[貴所](名)　他人の出勤せる所若しくは居住する所の敬稱。

(き-しよ)[貴所](代)　あなた。そこもと。

(ぎ-しよ)[偽書](名)　にせてがみ。にせがき。(偽筆)。

(き-じよう)[騎乘](名)　馬にのること。

(ぎ-しよう)[偽證](名)　㊀いつはりの證據。㊁【法】法廷に證人として召喚せられ、宣誓をなしたる後、故意を以ていつはりの事實を申述すること。——ざい[偽證罪](名)　【法】法廷に於て、故意を以て偽證又は詐偽の鑑定若しくは通事をなす犯罪、裁判宣告に至らざる前に自首するときは、其罪は免ぜらるゝものとす。

(き-しよく)[氣色](名)　㊀其心意の顏容にあらはれたる狀態。がんしよく。「—を害ねる」。㊁こゝろもち。きもち。「—が惡るい」。㊂やうす。ありさま。

(き-しよく)[饑色](名)　うゑたる容貌。(飢色)。

(き-しよく)[寄食](名)　かゝりうどゝなりて、他人に養はるゝこと。ゐさふらふ。

きしり[軋](名)　きしること。

[きしり](名、副)　良く適合するさまにいふ詞。「—合ふ」。

きし・る(ら、り、る、る、れ、れ)[軋](自、ら四)　㊀固きもの強く相摩して音を起す、相觸れて滑かに通ぜず。「車輪が—」。㊁互に競ひて惡み爭ふ。あつれきす。(轢、軋)。

(ぎ-じ-ろく)[議事錄](名)　議場に於ける議事の記錄。

廿きしろ・ふ(は、ひ、ふ、ふ、へ、へ)[軋](自、は四)　「きしる」の延音。

(き-しん)[鬼神](名)　㊀死人の靈魂。「精忠—を感ぜしむ」。㊁恐しく暴き神。あらがみ。おにかみ。㊂恐るべき暴力を有するもの。——ろん[鬼神論](名)　鬼神に就きて研究したる說。

(き-しん)[寄進](名)　㊀神社佛閣などの造營に、財物を寄附すること。きふ。㊁人に物を施し與ふること。

(き-じん)[奇人](名)　氣性又は品行の普通ならざる人。

(き-じん)[鬼神](名)　おにかみ。きしん。

(き-じん)[畸人](名)　かたはもの。不具者。

(ぎ-しん)[義心](名)　義に勇むこゝろ。

(ぎ-しん)[疑心](名)　㊀疑ひぶかる心。うたがふこゝろ。㊁そむかんとする心。ふたごゝろ。——あんきをしやうず[疑心生暗鬼]　うたがふ心高じて、ありもせぬ事實を想像して、恐れうたがふにいふ。

(ぎ-じん)[義人](名)　堅く義を守る人。みさを高き人。

(ぎ-じん)[擬人](名)　㊀自然人にあらざるものに、人格を附すること。又、其附せられたるもの。㊁非情のものを人類卽ち有情のものゝ如くにいひなすこと。例へば「波怒る」「花笑ふ」などの如し。

きす[鱚](名)　【動】硬鰭類きす科に屬する魚、鹹水及淡水に生ず、口小さくして上顎は下顎を蓋(オホ)ひ、背部は淡黃色にして腹部は淡白色に稍や淡黃色を帶ぶ、體長大なるもの一尺許に達す、我國西南東海に多く產す。(鼠頭魚、鱚魚)。

き・す(せ、せ、す、する、すれ、せよ)[着](他、さ下二)　㊀衣服などを他に着しむ。㊁上よりつゝみ被らす。かぶす。「銀盃に金を—」。㊂受けしむ。蒙らしむ。「無き罪を—」。

き・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[歸](自、さ變)　㊀趨向す。おもむく。「衆水海に—」。㊁集合す。あつまる。㊂かへる。もどる。㊃依附す。よりつく。「賢者これに—」。㊄婚嫁す。とつぐ。「遂に某氏に—」。㊅くみす。「天下—仁」。㊆をはる。又、をさまる。

き・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[歸](他、さ變)　㊀送附す。おくる。㊁還附す。もどす。㊂集合す。あつむ。「天下を一に—」。㊃委任す。まかす。「此事一に某氏に—」。㊄ゆるす。㊅をふ。又、をさむ。

き・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[記](他、さ變)　㊀書きとむ。しるす。㊁記憶してあり。おぼゆ。

き・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[期](他、さ變)　㊀待ち設く。まつ。㊁ちかふ。ちぎる。㊂かぎる。さだむ。「なほ他日を—」。㊃ねがふ。もとむ。「必ずこれを得んと—」。

きず[疵](名)　㊀斫られなどして皮肉破れたる處、身體に生じたる缺損。「刀の—」。(創)。㊁すべて、物體に生じたる缺損の稱。「茶碗の—」。(瑕)。㊂指していふべき不完全の箇處。間然すべき點。

(き-す)(名)【動】きり〴〵す。(京都の方言)。

きず[生酢](名)　混和物無き酢。「橙の—」。

き・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[擬](他、さ變)　㊀あてがふ。さしあつ。「刀を胸に—」。㊁まねす。まねぶ。「西施を—」。㊂くらぶ。比す。「自ら古の偉人に—」。

き・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[艤](他、さ變)　艤裝をなす。よそほふ。

き・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[議](他、さ變)　㊀相談す。はかる。「竊かに事を—」。㊁合議す。あつまりはかる。

きず-あと[瘢痕](名)　なほりたる疵のあと。

(き-すう)[奇數](名)　【數】一・三・五・七などの如く、二を以て除して殘餘を生ずる數。偶數の對。

(き-すう)[歸趨](名)　㊀おもむく所。「—を同じくす」。㊁むね。おもむき。

(き-すう)[基數](名)　【數】一より九までの數の稱。

(ぎ-すう)[擬數](名)　【數】代數の級數の一、「等差級數より導出せらるゝものなり、初項は必ず1にして、某番目の項の價が、與へられたる等差級數の初項より同番目迄の總ての項の和に等(ヒト)しきもの。又、一の擬數を基礎としもとの擬數を作りたると同じ方法を以て得たる級數。

1, 1, 1, 1, 1,
1, 2, 3, 4, 5,
1, 3, 6, 10, 15,
1, 4, 10, 20, 35,

(き-すう-はふ)[記數法](名)　【數】數を記する方法、先づ最高位の數を記し、順次に其右に次位の數を記し、若し或位に其數なきときは零を記す、例へば、三千二百四は、3204 なるが如し、整數と小數とを分つには小數點(，若しくは・)を用ふ、例へば、八十三個七分五厘は 83,75 なるが如し、若し小數のみなるときは、小數點の上に一箇の零を置く、例へば、三分五厘は 0,35 なるが如し。

き-ずき[生漉](名)　㊀楮・雁皮などの外他物を混和せずして、紙を漉くこと。㊁「きずきがみ」の略言。——がみ[生漉紙](名)　きずきにしたる紙。きがみ。「—とりのこ」。

(ぎす-ぎす)(名、副)　人の動作などのかど〳〵しく親み易からざるさまにいふ詞。「—した男」。

きすぐ(名)　すなほにして言行にかざりなきこと。しやうぢき。(木強)。

きず-ぐすり[疵藥](名)　きずに塗抹する藥。

きず-ぐち[疵口](名)　きずの裂に近き箇處。「—癒ゆ」。

きす-ご[鱚子](名)　【動】「きす」の一名。

(き-すゐ)[既遂](名)　なしとげたること。——はん[既遂犯](名)　【法】犯罪の成立要素を具備したる犯罪行爲。

き-ずゐ[奇瑞](名)　めでたきしるし。

き-ずゐ[氣隨](名)　他の都合を顧ずして、我思ふ所を立てとほさんとすること。きまゝ。わがまゝ。

き-すゐ-しやう[黃水晶](名)　【鑛】水晶の一種、色黃なるもの。

(き-せい)[祈誓](名)　神佛に祈り誓ふこと。ぐわん。ねがひ。

(き-せい)[既濟](名)　「きさい」に同じ。

(き-せい)[既成](名)　物事のすでに成り上りたること。

(き-せい)[規制](名)　規則上のさだめ。

(き-せい)[歸省](名)　親見舞にかへること。故郷をおとづれとふこと。ききやう。(歸寧)。

(き-せい)[期成](名)　㊀或物事を必ず成さんことを目的とすること。㊁其物事の必ず現(アラハ)れ成ること。

(き-せい)[寄生](名)　自ら獨立して生存すること能はざる動植物が、他の動植物の內若しくは外に寄り、それより營養を得て生存すること。

(ぎ-せい)[擬勢](名)　外面のいきほひ。

(ぎ-せい)[犧牲](名)　㊀神に供ふる生物。いけにへ。㊁或目的のためになげだし用ふる物事。「身命を—にして國事に奔走す」。

(ぎ-せい)[擬製](名)　㊀他物に模擬して製造すること。又、其製造せられたる物。「—の品」。(偽製)。㊁「ぎせいどうふ」の略言。

(き-せい-げんいん)[期成原因](名)　當然其結果の現はるべき原因。

(き-せい-こん)[寄生根](名)　【植】寄生植物の根、他の植物體に着生し、其體內に侵入してこれより營養を取るもの。

(き-せい-しよくぶつ)[寄生植物](名)　【植】他の植物體に着生して生存を保つ植物、きくらげ・さひ

たけ・かび等これなり。

(きせい-しよくぶつ[氣生植物](名)【植】氣根により大氣中より養分を吸收して生存する植物、例へば、せきこく・ふうらん等これなり。

(きせい-ちゆう[寄生蟲](名)【動】他の動物體に寄生せる蟲、條蟲・蛔蟲等これなり。

きせい-どうぶつ[寄生動物](名)【動】他の動物體に寄生し、それより營養を竊取して生活する動物、條蟲・蛔蟲等これなり。

きせい-どうふ[擬製豆腐](名)豆腐の一種、豆腐に玉子などを入れて甘味を付け、又、多少の野菜物などを加へて製したるもの。

(きせい-どうめい[期成同盟](名)或物事を成就せしめん目的にて、幾多の團體が同盟をなすこと。

(きせい-ろん[機制論](名)【哲】宇宙の現象を、因果律の行動によりて生じたる偶然の結果となす說、目的論の對。

(き-せき[貴戚](名)高貴なる方の親屬。

(き-せき[鬼籍](名)過去帳。(鬼簿)。――にいる[入鬼籍] 死去したるにいふ。

(き-せき[奇蹟](名)自然法にてはあり得べからざる現象、不可思議にして其理由の解釋すべからざる形跡、例へば、基督の復活又は昇天等の如し。

(き-せき[軌跡](名)【數】或要件に適したる點を有する線又は線の部分若しくは線の一群が、其點に對する稱。

(き-せき[輝石](名)【鑛】結晶の角閃石に似たる鑛物、塊色多くは綠色なり。

き-せき[氣急](名)急ぐこと。いら〳〵と思ふこと。きながの對。

(き-せき[議席](名)議場に於ける議員の席。

き-せきれい[黃鶺鴒](名)【動】せきれいの一種、

稱、肩部黃色なるもの。

(き-せけん[器世間](名)【佛】この世の中。

(き-せつ[既設](名)すでに設けおかれたること。

(き-せつ[季節](名)とき。をり。「―に會ふ」。(期節)。

(き-せつ[氣節](名)意氣と操守と。きがい。さてつ。けんきき。「―を重んず」。

(き-せつ[氣絕](名)驚愕若しくは打擊にあひなどして、一時氣息絕ゆること。(絕息)。

(き-せつ[義絕](名)在來の緣故を斷ちて交通せざること。

き-せ-なが[着脊長](名)大將の着る通常の鎧。

キセル[烟管](名)(由來不詳の外國語、一說に南洋語なりといふ)きざみ烟草を飲む具、金屬・牙・骨又は陶器などにて造り、がんくび・ひざら・すいくち等の名所あり。――づつ[烟管筒] 煙草入の附屬具にして、烟管を入るゝための筒。――ぶくろ[烟管袋](名)烟管を入るゝ袋。――やき[烟管燒](名)烟管に烟草を詰め、火を付けて肌などに燒印すること。

き-せる[着](他)「きす」の訛。

きせ-わた[着綿](名)㊀菊のきせわた。㊁すべて、物の上部に被らせ着せたる綿の稱。㊂一種の菓子、中に栗餡を入れ、側にこげ目をつけて燒きたるもの。㊃【植】「きせわたさう」の略言。――さう（ウ）[着綿草](名)【植】唇形科に屬する宿根草、高さ五六尺許、莖は方形なり、葉はやくもさうに似て毛を有し對生す、花は淡紫色なり。(藍菜)。

き-せん[木錢](名)㊀宿屋にて、旅人自ら米を携へ、これを炊(カシ)ぎたる薪炭の料のみを仕拂ふこと。㊁木錢宿に宿泊すること。

(き-せん[貴賤](名)貴きものと賤しきものと。

(き-せん[機先](名)他より先んじて事を行ふこと。

――をせいす[制機先] 敵よりさきんじて事を行ひ、敵の勢を抑(オサ)ふること。

(き-せん[汽船](名)蒸氣船の略言。

(き-せん[基線](名)㊀地上或二點間の距離を精しく測りて、測量の標準となすもの。㊁すべて他の基となる線の稱。

(き-せん[喟然](名、副)歎息するさまにいふ語。

(き-せん[毅然](名、副)強く猛きさまにいふ語。

(き-せん[義戰](名)道義上より起したる戰爭、名義たゞしき戰爭。

(き-せん[巍然](名、副)高大なるさまにいふ語。

(き-せん[僞善](名)外面をつくろひて善事を行ふこと。心からならざる善事。――しや[僞善者](名)僞善を行ふ人。ぎくんし。

きせん-やど[木錢宿](名)木錢を拂はしめて旅客を泊(ト)らする下等の宿。きちんやど。

きせん-やど[汽船宿](名)汽船に搭載する荷物又は旅客の取扱をなす宿。

(き-そ[基礎](名)㊀どだい。いしずゑ。㊁もとゐ。ねもと。

(き-そ[稀疏](名)まれなること。まばら。

(き-そ[起訴](名)裁判所に訴訟を提起すること。うつたふること。「檢事の―」。「被害者の―」。

十き-ぞ[昨日](名)さくじつ。きのふ。

(き-ソウ[貴僧](代)僧の敬稱。

(き-ぞう[寄贈](名)品物をおくりつかはすこと。(寄送)。

(き-そう[議奏](名)古昔、武家よりの奏聞を傳へて、天皇に奏上せし公卿の職名。

(き-そく[規則](名)㊀人民行爲の標準を定めたるすべての法令。さだめ。おきて。のり。㊁物事の原因結果の關係を說示したるもの。

(き-そく[氣息](名)いき。呼吸。「―奄々たり」。

(き-そく[貴息](名)他人の息子の敬稱。

(き-そく[羈束](名)ほだして自由を得しめざること。

(き-そく[氣色](名)「きしよく」に同じ。

(き-そく[驥足](名)(駿馬の足の意)すぐれたる人物の才能。――をのぶ[展驥足] すぐれたる人物が、其才能を十分に活用するにいふ。

(き-ぞく[歸屬](名)つくこと。したがふこと。

(き-ぞく[貴族](名)貴き家柄身分の人、平民の對。――こくたい[貴族國體](名)少數の貴族が、一國の政權を握りて政治を行ふ國體。――せいぢ[貴族政治](名)貴族國體なる國の政治。――せいど[貴族制度](名)貴族が政治上に於ける特權を有する制度。――てき[貴族的](名)貴族のさまにいふ語。階級儀式などに拘泥し、若しくは富貴を誇り榮華を特むなどにいふ、平民的の對。――ゐん[貴族院](名)二院制の國會にて、貴族を中心とし、更に卓越せる材能又は識見を有する臣民の代表者を以て、これが補充をなせるもの、我國にては、皇族議員・華族議員・勅任議員を以てこれを組織す、皇太子は十八歲他の諸皇族は二十歲に達せられたるとき議員に列せらる、公侯の爵にある滿廿五歲以上の男子は、終身議員に列せられ、伯子男の爵にありて同爵中の互選に當りたるものは、任期七年の議員に列せらる、勳功あり若しくは學識ある滿三十歲以上の男子と、各府縣にて多額納稅者十五名の互選に當りたる三十歲以上の男子とは、勅任せられて、前者は終身後者は任期七年の議員に列せらる。

(ぎ-そく[義足](名)足の切斷せられたる部分を補ふために着くる假脚又は木製の足の形。

きそく-だ・つ[規則立](自、た四)規律立

ちて亂れず。

きそく-どうし[規則動詞](名)【文法】正しき活用をなす動詞。

き-そば[生蕎麥](名)蕎麥粉のみにて他に混合物なききそばきり。

十きぞ-はじめ[着衣始](名)陰曆正月に、新衣着はじめの儀式。(着衣初)。

きそひ（イキツ）[競](名)きそふこと。はりあひ。はげみ。十――うま[競馬](名)今時の競馬。けいば。十――かり[競狩](名)古昔、五月の節句に、種々の草を競ひてとり集めし遊戲。

きそ・ふ（ウキツ）（はひふふへへ）[競](自、は四)㊀先後優劣を爭ふ。はりあふ。あらそふ。㊁はげむ。すゝむ。きはふ。「天下みな―」。

十き-そ・ふ（ウーツ）（へへふふるふれへよ）[着添](他、は下二)きかざる。

き-ぞめ[着初](名)衣服を着初(ソ)むること。

き-そん[歸村](名)我居村に歸ること。

(き-そん[毀損](名)やぶれこはるゝこと。又、やぶりこはすこと。

(ぎ-そん[犧樽](名)支那の古昔・祭典に供へし樽、牛の横樣を描き又は全體を牛の形に造りたるもの。

き-た[北](名)㊀方角の一、日の出づる方角に向ひて左方。㊁北風。「―が吹く」。

十きた[分](名)わかち。わかれ。

きだ[段](名)きれめ。きざみ。だん。

[ぎ-だ[義太](名)「ぎだいふぶし」又は「ぎだいふさみせん」の略言。

(き-たい[氣體](名)流動し易くして一定の形狀及一定の立積を有せざる物體。瓦斯體。

(き-たい[騎隊](名)騎馬の軍隊。又、其軍隊に屬する兵士。

(き-たい[期待](名)心まちに待つこと。必ず然あるべしと待つこと。

(き-たい[希代](名)㊀世にまれなること。「―の勇士」。㊁珍しきこと。不思議なること。「―な手術」。

(き-たい[危殆](名)あやふきこと。あぶなきこと。

(ぎ-たい[擬態](名)【動】昆蟲が自身を防禦する自然の性より、其態度を他物に擬すること。しやくとりむしが樹枝に擬し蝶が枯葉に擬する如きこれなり。

(ぎ-だい[議題](名)合議する問題。

ぎ-だいふ（イギダ）[義太夫](名)「ぎだいふぶし」の略言。――かたり[義太夫語](名)義太夫節を語ることを業とする人。――さみせん[義太夫三味線](名)義太夫節を語るに用ふる太棹(フトザヲ)の三味線。――ぶし[義太夫節](名)一種の俗曲、もと播磨節の分派にして、竹本義太夫の創始に係り、太棹の三味線によりて語る。じやうるり。――ぼん[義太夫本](名)義太夫節の詞をしるし更にこれに曲節をしるしたるもの。じやうるりぼん。

(き-たう（ウト）[祈禱](名)神佛に祈ること。又、其儀式。いのり。

(き-だう（ウード）[危道](名)あやふきみち。あぶなきしかた。

(き-だう（ウード）[詭道](名)いつはりのはかりごと。いつはりのしかた。

(き-だう（ウード）[軌道](名)㊀車の過ぎゆく道。わだちのみち。㊁車輛の軌道として布設したる鐵條、車輛其上を通過す。「レール」。㊂【天】天體の運行する道、地球より見たる軌道を視軌道といひ、これに對して實際の軌道を眞軌道といふ。

(き-だう（ウード）[氣道](名)動植物の體內の呼吸せる氣の通路。

(ぎ-たう（ウト）[儀刀](名)儀式のかざりに用ふる刀。

(きたう-しや（ウト）[祈禱者](名)祈禱を行ふ人。

(きたう-ばう（ウトボウ）[祈禱坊](名)祈禱をする僧侶。「稻荷の神主―」。

(きたう-りう（ウトリウ）[起倒流](名)柔術の一派、寺田正重を祖とす。

きた-かぜ[北風](名)北方より吹き來る風。きた。

十きたきす（名）【植】「ごばう」の古名。

きだ-きだ【段段】（名）「きざきざ」に同じ。

（き-たく【歸宅】（名）我家に歸ること。（歸館）。

（き-たく【寄託】（名）㊀あづけたのむこと。「書籍を—す」。㊁【法】當事者の一方が、相手方より受け取りたるものを、相手方のために保管の契約をなすこと。善良なる注意を以てこれを保管する責あるものとす。——**しよう-しよ**【寄託證書】（名）【法】寄託せられたる人が寄託したる人に對し、寄託の證として交附する文書。

き-たけ【着丈】（名）身長に適するほどの着物のたけ。

十きた-げ【北氣】（名）北の方より吹きくる風。

きた-ごち【北東風】（名）北東の方より吹く風。

きた・す【來】（他、さ四）來らしむ。まねく。よぶ。

き-だち【木太刀】（名）ぼくたう。ぼくけん。

き-だち【木立】（名）こだち。たちき。

き-だち【木質】（名）本草學にて、其性質の木によく類似せるものゝ稱。草質の對。（木本）。

（き-だて【氣立】（名）こゝろだて。きまへ。

十きた-なか【段半】（名）一段の半。

きたな【穢】（名）きたなきこと。——**いろ**【穢色】（名）きたなき色。よごれいろ。——**ごころ**【穢心】（名）卑怯なる心。又、吝嗇なる心。——**し**【穢】（形、二）㊀けがれよごれてあり。清潔ならず。㊁卑怯なり。吝嗇なり。いやし。十——**む**【穢】（他、ま四）きたなく思ふ。〜——**ら**【穢】（形、二）きたなく見ゆ。けがらはしく思はる。

十きた-の-おきな【北翁】（名）塞翁（サイオウ）の一名。

きた-の-かた【北方】（名）高貴なる人の妻の敬稱。れんちゆう。おくがた。

十きた-の-ぢん【北陣】（名）古昔、禁中の北門なる朔平門の一名。

十きた-の-ふぢなみ【北藤波】（名）藤原四家の中の北家の異稱。

十きた-の-まつり【北祭】（名）加茂の臨時祭。

きた-の-まんどころ【北政所】（名）關白の妻女の、宣旨をうけて稱（たゝ）ふる尊號。

きだ-はし【階】（名）「きざはし」に同じ。

きたひ【鍛】（名）㊀金屬類を鍛ふこと。㊁物事の修錬。「腕の—にぶし」。——**がね**【鍛金】（名）よく鍛ひたる金屬。

十きたひ【腊】（名）干（ほ）したる肉。「魚の—」。

（き-たふ【貴答】（名）返事の敬稱。おへんじ。

きた・ふ【鍛】（他、は四）㊀金屬を火に熱し、或は焠（ニラ）ぎ或は打ちて其密度を細かくし其硬度を強くす。「鐵を—」。（鍊）。㊁たびたび反覆して其技術に熟す。其物事に熟す。

きた・ふ【鍛】（他、は下二）前條に同じ。

（ぎ-たふ【僞答】（名）いつはりの返答。

（き-だふれ【着倒】（名）生活費の大部を美服を着るために費すこと。又、其ために生活の困難なるをあざけりていふ語。

（きたへる【鍛】（他）「きたふ」の訛。

十きた-ます【鞫】（他、さ四）糺（キク）して處罰す。

十きた-まつり【北祭】（名）「きたのまつり」に同じ。

きた-まど【北窓】（名）㊀北向きの窓。㊁つきいらずの錢「はぎのもち」の異稱。

十きた・む【鞫】（他、ま下二）罪をとりたゞす。

十きため【鞫】（名）きたむること。ぎんみ。

きた・る【來】（自、ら四）㊀彼方より此方へ到着す。いたる。㊁彼方より還歸す。かへる。㊂およぶ。かゝる。「禍難—」。㊃將來に屬す。「—者猶可追」。

きたる—【來】（接頭）次に來（ク）べき。近きうちに來べき。「—二日」。

（き-たん【忌憚】（名）忌みはゞかること。

（き-たん【起端】（名）はじまり。おこり。（發端）。

（き-たん【起單】（名）禪宗にて、寺を離れ出ること。

（き-だん【奇談】（名）意外にして興味ある談話。

（き-だん【義膽】（名）義氣。「忠魂—」。

（ぎ-だん【疑團】（名）うたがひのかたまり。うたがひのこゝろ。「—氷解す」。

（き-だんじ【奇男子】（名）奇なる性行ある男子。又、普通ならぬ男子。

（きち【吉】（名）よき事。めでたきこと。凶の對。

（き-ち【窺知】（名）うかゞひ知ること。

（き-ち【機智】（名）よく活動する才智。はたらき。「—に富む」。

（き-ち【既知】（名）すでに知れてあること。

（き-ち【危地】（名）危難の場所。

（き-ち【貴地】（名）他人の居る地の敬稱。

（き-ぢ【木地】（名）㊀木材の文理。もくめ。あや。㊁材木の文理のまゝをあらはして漆をかけたるぬり方。「—の重箱」。㊂何等の人工をも加へぬこと。其まゝの地。（素地）。㊃塗物の下地。

十きち-かう【桔梗】（名）【植】「ききやう」の古名。

きちがひ【氣違】（名）㊀心狂ふこと。精神の錯亂。㊁精神の錯亂せる人。狂人。（瘋癲）。㊂過度に好みて有頂天となること。又、其人。「芝居—」。〜——**じみる**【氣違染】（他、ま上一）狂人の如くに見ゆ。——**なすび**【氣違茄子】（名）【植】茄科に屬する有毒草、葉は藥用に供せられ、氣管支病等の鎭痙劑として効あり、俗にぜんそく煙草といふ、此實を食へば、氣狂ふといふより此名あり。〜——**みづ**【氣違水】（名）酒の異稱、飲めば本心を失ふよりいふ。（狂氣水）。

〜きち-きち（名、副）㊀齒などの如きもの、相觸れて發する音。㊁物事のよく適合し又は緊頓しゆくさまにいふ語。——**ばった**（名）【動】ばったの一種、飛べばきちきちと音するより此名あり。

〜ぎち-ぎち（名、副）㊀物の相さしむ音。㊁物事の圓滑に行かぬさまにいふ語。

（き-ちく【鬼畜】（名）おにとちくしやうと。轉じて、無慈悲なる者。

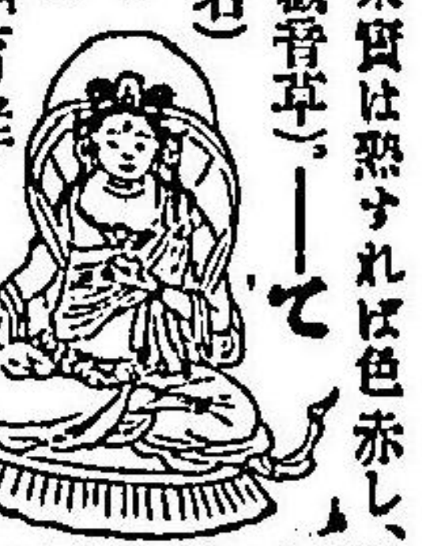
（き-ちく【騎竹】（名）竹馬に乘ること。——**の-まじはり**【騎竹交】（名）子供の時からのなじみ。

（き-ぢく【機軸】（名）㊀機關の軸。車輪の軸。㊁地球の廻轉する中心の虛軸。㊂物事の活動のよりて起る中心。「—を握る」。㊃物事のくみたて又は方法。「別に—を出す」。

（きち-じ【吉事】（名）緣起よきこと。よろこび事。

（きち-じやう【吉上】（名）㊀此上もなく吉なること。㊁次條の（二）に同じ。

（きち-じやう【吉祥】（名）㊀めでたき祥あること。好ましき兆。㊁古昔、衞士の中にて、日夜よく務めたる功により頭となりたるもの。（吉上）。——**くわ**【吉祥果】（名）石榴の果實。——**こんがう**【吉祥金剛】（名）【佛】文珠菩薩の一名。——**さう**【吉祥草】（名）【植】百合（ユリ）科に屬する草、竹林の陰に生ず、根莖は多數の細長なる鬚を生じ、花は外紅紫色にして下垂せず、果實は熟すれば色赤し、觀賞用として栽培せらる。（觀音草）。——**てんによ**【吉祥天女】（名）【佛】女體の佛、毘沙門天の妹、容貌端麗にして功德廣大なりといふ。——**らん**【吉祥蘭】（名）【植】「きちじやうさう」の一名。



［きちじやうてんによ］

（き-ちすう【既知數】（名）㊀既に値の知られある數。㊁【數】方程式中にて與へられたる數、文字を以て表はされたりとも、與へられたる數を代表するときは既知數なり。

（きち-ずゐ【吉瑞】（名）よろこばしき前兆。めでたきさが。

（きち-にち【吉日】（名）物事をするに吉き日。よきひがら。めでたきひ。きつじん。（吉辰）。

〜ぎち-つ・く（自、か四）ぎちぎちす。

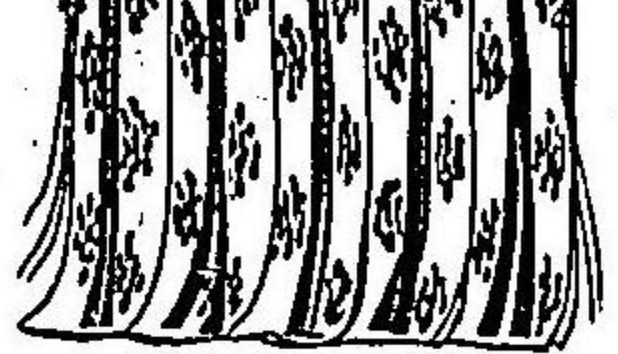
きぢ-ぬり【木地塗】（名）木地の文理をあらはしたる漆塗。又、其器具。

きぢ-びき【木地挽】（名）木地の挽（ヒ）きもの細工。又、其細工の職人。

きぢ-もの【木地物】（名）㊀木地びきにせるもの。㊁少しも人工を加へぬ其まゝの物。

〜きち-や【吉彌】（名）「きちやむすび」の略言。

（き-ちやう【几帳】（名）臺に柱を立て、これにとばりを掛けたるもの、古昔、外方より見えぬやう貴婦人の座側に立て用ひたり、今時のついたての類。



［きちやう］

（き-ぢやう【氣丈】（名）氣丈夫の略言。

（ぎ-ちやう【議長】（名）議員を統率し議場を整理し、議會を代表し且つこれを管理する人、會議する一座の長たる人。

十ぎ-ちやう【毬打】（名）㊀古昔、毬を打ち合ひ遊びし戲。まりうち。打毬。㊁古昔、正月に行はれし小兒の遊戲、槌の如き杖に、五彩の絲をつけ、これをもて木製の球を打ち遊べり。ぎっちやう。

（ぎ-ぢやう【議場】（名）會議する場所。

（ぎ-ぢやう【議定】（名）㊀評議して事を定むること。㊁さだめ。おきて。「—を破る」。——**くわん**【議定官】（名）㊀明治初年に設けられし太政官の最高官。㊁賞勳局に於ける賞勳會議の議員。——**しよ**【議定書】（名）「ぎていしよ」に同じ。

（ぎ-ぢやう【儀仗】（名）儀式に用ふる兵仗。——**へい**【儀仗兵】（名）兵仗を帶びて儀式に列する兵隊。

き-ぢやう-ぶ【氣丈夫】（名）自信力の強きこと。心のしっかりしてあること。

〜きちやう-めん【几帳面】（名）㊀机・盆などの細工に、撫角（カナデカク）に面取りて、一筋のきざを入れたるもの。㊁行事の嚴格にして折目正しきこと。

（き-ちやく【歸着】（名）㊀歸りて到着すること。「國に—す」。㊁ひと、ところに寄ること。おもむきあつまること。㊂をさまること。おちつくこと。「—する所は一」。

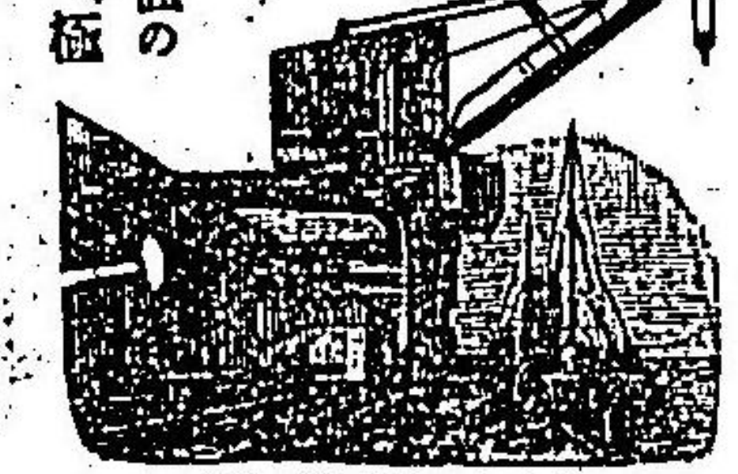
〜きちや-むすび【吉彌結】（名）帶・紐などの結び方、德川時代に、玉村吉彌と云ふ役者が始めて結び出したるものといふ。

（き-ちゆう【忌中】（名）忌（イミ）にこもるあひだ。忌のかゝりある間。

（き-ちゆう【鬼誅】（名）神の罰。

（き-ぢゆう【歸住】（名）歸りて住むこと。

（きぢゆう-き【起重機】（名）重量きものをおこしあぐるに用ふる機械、其制種々ありて、大なるものは蒸汽機關のそなへつけあり。



［きぢゆうき］

（き-ぢよ【貴女】（名、代）婦人の敬稱。

（き-ぢよ【鬼女】（名）㊀女體の鬼。女夜叉。㊁鬼の如くに、極めて殘酷なる女。

（き-ちよう【貴重】（名）極めて大切なること。たふときこと。——**ひん**【貴重品】（名）極めて大切なる物品。

（ぎ-ちよう【蟻塚】（名）蟻の塚。

（きちれい）［吉例］（名） めでたき例。よきためし。

きちん［木賃］（名） 木錢（キセン）に同じ。――やど［木賃宿］（名） 木錢宿に同じ。

廿きぢん［麴塵］（名） 「きくぢん」の略音。

（きぢん）［歸陣］（名） 陣屋へかへること。

廿きつ［狐］（名） 【動】「きつね」の古名。

（きつ）（名） 魚を入るゝ箱。

（きつ）［吉］（名） 「きち」に同じ。「盛は―」。

（きつえん）［吉宴］（名） めでたき酒宴。

（きつえん）［喫煙］（名） 煙草を吸ふこと。――しつ［喫煙室］（名） 煙草を吸ふに設けたる室。

（きっかい）［乞丐］（名） こつじき。ものもらひ。

（きっかう）［頡頏］（名） ㊀上下すること。㊁互にはりあひて相下らざること。

（きっかう）［桔槹］（名） はねつるべ。

（きっかう）［吉行］（名） めでたきたび。又、つねのたび。「―には三十里」。

（きっかうてん）［乞巧奠］（名） 「きかうでん」に同じ。

〔きっかけ〕［切掛］（名） ㊀てはじめ。はじまり。㊁なり。きは。

きづかはし（ワシ）（しく、しき、しけれ）［氣遣］（形、二） 氣遣ふべし。心にかゝる。あやぶむべし。

きづかひ（カイッ）［氣遣］（名） 氣づかはしきこと。こゝろづかひ。こゝろがかり。志んぱい。（心配、掛念）。

（きっかふ）［龜甲］（名） ㊀龜の甲殼。かめのかふ。㊁「きっかふがた」の略音。――がた［龜甲形］（名） ㊀かめのかふの如き、六角形の上下左右に重なり並びたる模樣。㊁紋所の名、龜の甲を描（エガ）きたるもの。

きづかふ（カウ）（はひふへへ）［氣遣］（他、は四） こゝろもとなく思ふ。志んぱいす。あんず。（不安心）。

〔きっかり〕（名、副） 物事のきはだちて分明なるさまにいふ語。

きづき［氣附］（名） きづくこと。こゝろづき。

〔ぎつぎつ〕（名、副） 圓滑ならずして、角立ちたるさまにいふ語。

（きっきやう）（キヨウ）［喫驚］（名） びっくりすること。おどろくこと。

（きっきよ）［拮据］（名） はたらくこと。つとむること。

（きっきよう）［吉凶］（名） よろこび事とまが事と。よきとあしきと。

きつく（か、き、く、く、け、け）［來着］（自、か四） 來り着く。到着す。

きづく（か、き、く、く、け、け）［築］（他、か四） （城築の義） ㊀城塞を設く。志ろつく。（城）。㊁土石もて積み固めて作る。「盛場を―」。

きづく（か、き、く、く、け、け）［氣附］（他、か四） それと感知す。こゝろづく。

廿きづくし［氣盡］（名） 心づくし。

（きっくつ）［詰屈］（名） 文章の曲折に過ぎてむづかしきこと。

〔ぎっくり〕（副） はたと差支へ又ははたと身振を直すさまなどにいふ語。「―胸にこたへる」。

（きっくわい）［奇怪］（名） 詰（ナジ）り責むべきこと。憎み憤るべきこと。理に當らぬこと。「やあ―なる雜言」。

きつけ［着附］（名） ㊀着てなること。㊁着物を着たる工合（グアヒ）。「役者―の善し惡し」。

きつけ［氣附］（名） ㊀注意せしむること。心を添ふること。㊁勇氣を添ふること。「―の酒」。㊂氣絶えたるをよみがへらしむること。㊃「きつけぐすり」の略言。――ぐすり［氣附藥］（名） 氣附に用ふる藥。

きづけ［氣附］（名） 氣を附けさすること。近頃 c/o（「イギリス」語）の意を借譯し、書翰の表などに此語を記して、「某人某所の注意を乞ふ」義に用ふ、なほ「某氏方」などいふが如し。

〔きつけ〕［來附］（名） 來なれてゐること。「―の家」。

（きっけい）［吉慶］（名） 目出度きこと。賀すべき事。

きっさう（サウッ）［氣相］（名） （血相の轉）顏の樣子。かほいろ。「―かへて」。

きっさう（カウッ）［吉左右］（名） 好きおとづれ。よろこぶべき志らせ。

きっさき［切先］（名） 刀のはさき。はさき。（鋩、鋒）。――あがり［切先上］（名） 打つ刀の柄の方低く切先の方高きこと。――さがり［先切下］（名） 打つ刀の柄の方高く切先の方低きこと。

きつし（くしき、けれ）（形、二） ㊀はなはだし。おびたゞし。㊁きびし。からし。㊂つよし。たけし。

（きつじ）［吉事］（名） 「きちじ」に同じ。

廿ぎっしゃ［牛車］（名） 古昔、牛にひかせしやかた車、官等によりて種々の制限ありたり。

廿きっしょ［吉書］（名） 古昔、年の始め政始め等すべて物事のあらたまりたるとき、吉日を選びて奏覽せし文書。――そう［吉書奏］（名） 古昔、年の始めに政務上嘉例の文書を奏覽せし儀式。――はじめ［吉書始］（名） ㊀吉書を書く日。又、かきぞめに吉とする日。㊁かきぞめ。試筆。

〔ぎっしり〕（名、副） 滿ちつかへたるさま又は適合したるさまにいふ語。

（きっしん）［吉辰］（名） よき日。吉日。（良辰）。

キッス［Kiss］（名） 西洋の禮式にて、他人の體に我吻を接して親意を致すこと。（接吻）。

きっ・す（せ、し、す、する、すれ、せよ）［喫］（他、さ變） ㊀飮食す。くらふ。のむ。㊁受く。かうむる。「一驚を―」。

きっすゐ（名） まじりけ無きこと。純粹。

（きっすゐ）［喫水］（名） ㊀水をのむこと。㊁船脚の水に入る程度。「―淺き平底」。（吃水）。

（きっずゐ）［吉瑞］（名） 「きちずゐ」に同じ。

きづた［木蔦］（名） 【植】五加（ウコギ）科に屬する植物、莖は上昇し團扁にして、冬も猶は枯れず、花片は鑷合樣に排列し、子房は五室あり、觀賞用として栽培せらる。（常春藤）。

きったて［切立］（名） 切り立てたるが如くそびえたること。（屹立）。

（きったん）［吉旦］（名） 吉日。吉辰。

（きったん）［詰旦］（名） あした。あさ。

廿ぎっちやう（ヨウチ）［毬杖］（名） 「ぎちやう」（二）に同じ。

きっちゆうのたのしみ［橘中樂］（名） （幽怪錄に巴邛の人橘實を剖開したるに、中に二人の叟ありて圍碁しありとの故事に出づ）圍碁又は將棊のあそび。

きっちよ（名） 【動】「はたおり」に同じ。

〔ぎっちり〕（名、副） 「ぎっしり」に同じ。「―はまる」。

〔ぎっちり〕（名、副） 前條に同じ。

きつつき［木突］（名） 【動】攀木類に屬する鳥、嘴鋭直にして堅く啄木に適す、四趾中二趾は前方に向ひ二趾は後方に向ひて攀木に便なり、舌は細長にして尖頭に逆鉤を有す、嘴にて樹を叩き中に木蠹のあるを察し孔を穿ちこれを鉤出す、森林の樹洞中に卵を産す。てらつゝき。けらつゝき。（啄木鳥）。

きっつけ［切付］（名） ㊀きりて付くること。㊁志たぐら。（韉、韂）。――もん［切付紋］（名） 切り付けたる紋。貼（ハ）り付けたる紋。そめあげ紋の對。

きつつじ［木躑躅］（名） 【植】つゝじの一種、葉は倒披針形若しくは倒長卵形にして二寸五分內外の長さを有す、花は八分內外の柄を具し、短き總狀花序に排列して黃色又は赤色を呈す、觀賞用として栽培せらる。（羊躑躅）。

きって［切手］（名） ㊀てがた。通用券。㊁郵便券。

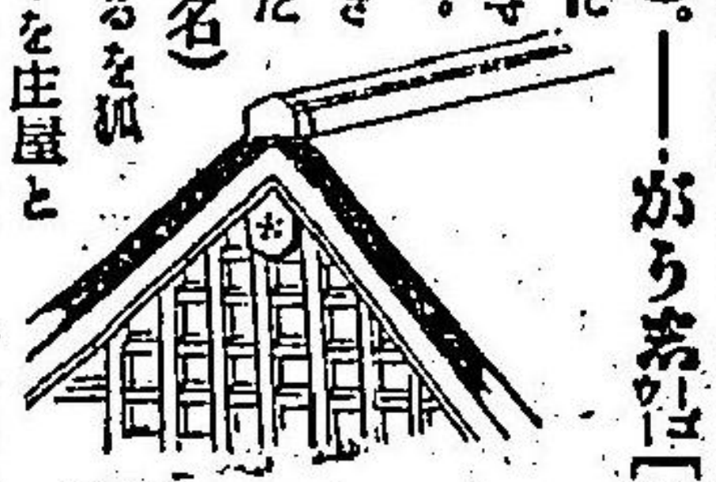
（きってう）（ヨウチ）［吉兆］（名） めでたき志るし。よろこばしききざし。（吉瑞）。

きっと［屹度］（副） ㊀ちよっと。「―思ひ出て給ふ」。㊁（急度）。㊂相違なく。かならず。たしかに。「―忘るな」。（必定、是非）。㊃嚴重に。きびしく。「―申渡す」。㊄態度面色を改めて。「―形を改めて」。

（きっとん）［橘飩］（名） 「きんとん」に同じ。

きづな［絆、紲］（名） （息綱の義） ㊀動物をつなぎとむる綱又は繩。ほだし。㊁斷つに忍びぬ愛情。離れがたき情實。わづらひ。「恩愛の―斷しがたし」。

きつね［狐］（名） ㊀【動】食肉類中犬科に屬する獸、形狗に似て小さく且瘦す、頭は延長し尾長し、蹠行にして、前趾に五爪後趾に四爪あるを常とす、性狡猾にして人家に近き山野に穴居し、食物などを盜み食ふ。きつ。たうめ。（野干）。㊁〔姦佞なる者。小人。㊂〔娼妓の異稱。（人をよくだますといふより名づく）。――あざみ［狐薊］（名） 【植】あざみの一種、葉は針狀の鋸齒を有し、苞は針狀の尖端を具す、總花托は剛毛狀の小苞を有し、專に冠毛あり。ひめあざみ。きつねのまゆはけ。（蘋蔦）。――がうし（ガウシ）［狐格子］（名） ㊀正しく縱橫に組み立てたる格子、宮殿・社寺の屋根などの破風（ハフ）に設く。きつねど。きつねまど。㊁きつねがうしの裏に板を張りたる戸。――けん［狐拳］（名） 拳の一種、額に兩手を擧ぐるを狐といひ、膝の上に兩手を置くを庄屋といひ、鐵砲をかまへたる體に手を前に出すを鐵砲といひ、狐は鐵砲にまけて庄屋に勝ち、庄屋は狐にまけて鐵砲に勝ち、鐵砲は庄屋に負けて狐に勝つの定めなり。（狐拇戰）。



［きつねがうし（一）］

――つかひ（カイッ）［狐遣］（名） ㊀狐の力を藉（カ）りて行ふといふ妖術。又、其妖術を行ふといふ人。――つき［狐付］（名） 狐の妖術のために精神を喪（ウシナ）ひたりといふ一種の神經病。又其神經病にかゝりたる發狂人。（狐憑、狐祟）。――つり［狐釣］（名） わななど設けて狐を捕ること。又、其事をなす人。（打狐）。――ど［狐戶］（名） 「きつねがうし」に同じ。――のまゆはけ［狐眉刷子］（名） 【植】「きつねあざみ」に同じ。――のよめいり［狐嫁入］（名） 日影さして雨ふること。――び［狐火］（名） 燐火の異稱、古來狐の口より吐くといひ傳ふより此名あり。――まど［狐窓］（名） 「きつねがうし」に同じ。――まめ［狐豆］（名） 【植】「のあづき」の一名。

（きっぱう）（ウホ）［吉報］（名） よろこばしき志らせ。めでたき報知。

〔きっぱり〕（名、副） たしかに定まるさまにいふ語。「―する」。

（きっぱん）［喫飯］（名） めしをくふこと。食事。

きっぷ［切符］（名） 金錢の受け拂ひなどの證として用ふる札。「乘車―」。

〔きっぷ〕（名） きまへ。氣風。

〔きづま〕［氣褄］（名） こゝろあひ。機嫌。「機嫌―を取る」。――をあはす きげんをとる。

きづまり［氣詰］（名） 心の窮屈なること。氣分のさはやかならざること。（氣屈）。

きづよ・し（くしき、けれ）［氣强］（形、二） ㊀勇氣あり。かちきなり。㊁つれなし。むごし。㊂きづかひなし。こゝろづよし。

（きつりつ）［屹立］（名） そびえたつこと。「―五千仞」。

（きてい）［起程］（名） 志ゆったつ。いでたち。

（きてい）［起碇］（名） 錨をあげて出帆すること。

(き-てい[規程](名) 從ひよりて行ふべき一定の方程、のり。「庶務―」。

(き-てい[旗亭](名) はたごや。やどや。又、茶屋。料理屋。

(き-てい[既定](名) すでに定まりてあること。――さいしゆつ[既定歳出](名) 前年度の豫算によりて、すでに其額の定まれる歳出。――さいにふ[既定歳入](名) 前年度の豫算によりて、既に其額の定まれる歳入。――よさん[既定豫算](名) 帝國議會若しくは府縣會等の議決を經たる國若しくは府縣等の豫算。

(き-てい[規定](名) ㊀規則として定むること。きめさだむること。㊁規則として定めたる條件又は標準。おきて。さだめ。――めいだい[規定命題]=[Categorical proposition](名)[論]特殊の概念を一般の概念に從屬せしめ、これによりて斷定したる命題、例せば「家はさめ易きものなり」といふ命題の如し。

(き-てい[義弟](名) 義を結びたる弟分。義兄の對。

(き-てい[議定](名) ㊀評議して事を定むること。㊁やくそく。さだめ。――くわん[議定官](名)「ぎぢやうくわん」に同じ。――けんぱふ[議定憲法](名) 主權者と人民との協議より成立發布せられたる國家の憲法、欽定憲法の對。――しよ[議定書](名) ㊀議定したる事をかきとめたる文書。㊁全權の委任を受けたる互の使臣が、會合して議定したる國際の事件をかきとめたる文書。

(き-ているゐ[奇蹄類](名)[動]哺乳動物に屬する有蹄獸、前趾には四趾あるもあれど、後趾の趾數は必ず奇數にして中趾最も良く發達し、其先端に蹄(ヒヅ)を有す、馬・犀等これに屬す。

(き-てう[歸朝](名) 外國へ行きし者の歸ること。

(き-でう[軌條](名) 車輪の軌道として布設したる鐵條。「レール」。

(き-てき[棄擲](名) ㊀うちやること。なげうつこと。㊁すて、使用せざること。

(き-てき[汽笛](名) 汽罐に裝置し、物事の合圖に蒸氣にて吹き鳴らす一種の笛。

〔きてれつ(名) 最も奇妙なること。「奇妙―妙不思議」。

(き-てん[起點](名) はじまりの箇處。おこり。

き-てん[木貂](名)[動]食肉類中鼬鼠科に屬する獸、深山に棲息す、形てんに似て太く、胸腹共に黄色、指趾五個あり、尾長く惡臭を放つ肛門線を有す、性質太だ怯懦にして、雷鳴の時、往々村里に飛び出るより、雷獸の名あり。

(き-てん[氣轉](名) 心のはたらき機敏なること。めさきのきくこと。(頓智)。

(き-でん[歸田](名) 官職を去りて、民間に下ること。

(き-でん[貴殿](代) 同輩若しくは同輩以上に用ふる對稱の代名詞。あなた。

(き-でん[紀傳](名) 人の一生の行事をかきつたふること。又、其文書或は文體。――たい[紀傳體](名) 歷史の一體、紀傳の體裁により、本紀・列傳等其人の傳を記列すること。編年體又は紀事本末の對。――だう[紀傳道](名) 古昔の大學寮の一學科、史記・漢書等歷史を教授せしこと。――はかせ[紀傳博士](名) 古昔、大學寮の所屬の博士歷史の教授を司どりし職。

(き-てん[儀典](名) ㊀儀式の規定。㊁のり。典範。

(き-でん-き[起電機](名)[理]多量の電氣を發生せしむる器械、摩擦により發生せしむるものを摩擦起電機といひ、感應により發生せしむるものを感應起電機といふ。

(き-と[歸途](名) かへりみち。かへりがけ。(歸路)。

(き-と[企圖](名) ㊀くはだつること。こひねがひはかること。㊁もくてき。めど。

廿き-と(副) すぐに。ちよつと。「聰明―みて」。

き-ど[木戶](名) ㊀城の門。柵門。㊁通路の出入口に設けある屋根なき開戶の門。(柵門)。㊂芝居・相撲其他、興行場などにある見物人の出入口。

(き-ど[喜怒](名) 喜びと怒りと。「―色に現れず」。――つねなし[喜怒無常] 感情みだりに激して喜怒測りがたきにいふ。

(き-とう[季冬](名) ふゆのすゑ。ばんとう。

(き-どう[奇童](名) いとすぐれたる子供。

(き-どう[起動](名) はたらきを起すこと。

(き-どう-えんしふ[機動演習](名) 陸軍にて、毎年秋期の教育を了したる後、各種の兵を連合して行ふ野戰の演習。

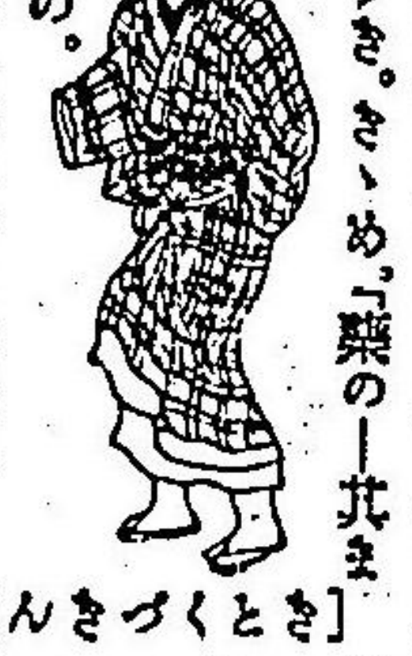
廿き-どう-さんし[儀同三司](名) 古昔の准大臣の異稱。「―の母」。

き-どき[着時](名) 或衣服を着るべき時節。

(き-とく[危篤](名) 病氣のおもくなること。

(き-とく[既得](名) 從前に取得したること。――けん[既得權](名)[法]從前の法規に基づき正當の行爲に依り、特定人が取得したる權利、法律が一般に認めし權利は既得權にあらず。

(き-とく[奇特](名) ㊀普通と違ひて、賞すべき所爲なること。(殊勝)。㊁くりき。きゝめ。「藥の―其まゝに」。――づきん[奇特頭巾](名) づきんの一種、元祿の頃、婦人の被りたるもの。


[きとくづきん]

きど-せん[木戶錢](名) 興行物の見物料。

きど-ばん[木戶番](名) 木戶を守ること。又、其人。

〔き-どほし[着通](名) 同一の衣服のみを常にきてゐること。

き-どり[木取](名) きどること。用材の見積。

〔き-どり[氣取](名) ㊀樣子ぶること、きどること。㊁趣向。工夫。「あの―が面白い」。――や[氣取屋](名) しやれもの。容體ぶるもの。

き-どる[木取る](他、ら四) 材木を挽(ヒ)きて、それ〴〵の用になるべき見つもりをなす。

〔き-どる[氣取る](他、ら四) ㊀樣子をかざる。容體をつくる。㊁樣子を眞似(マネ)す。「役者を―」。㊂きづく。かんづく。

キナ[規那=Quina](名)[植]茜草科に屬する木、葉は對生し綠色にして光澤あり、花は小形にして白色又は帶紅色なり、株々孤立して生ぜず、南「アメリカ」の特產なり。――えん[規那鹽=Quina chlorida](名)「キニン」を鹽酸に化合せしめて製したる白色針狀の結晶體、溶液は間歇熱に効あり。

(き-ない[畿內](名) ㊀宮城の附近なる天子直隸の地。㊁京都の周圍なる山城・大和・河內・和泉・攝津の五箇國の總稱。ごきない。

(き-なう[氣囊](名) ㊀[動]鳥類の有する皮囊、胸部と腹部との間にありて其內に空氣を出入せしめ、以て體量を加減し且呼吸作用を盛んならしむ。㊁輕氣球などの瓦斯を入れ置くふくろ。

き-なか[半錢](名)(「一文なきなか」の略言) ㊀一文錢の半分。㊁轉じて、僅かなる物事。「一文―も、うしろ暗き所なし」。

き-なが[氣長](名) 急(ソ)がざること。氣ゆるやかなること。氣ぜきの對。

き-ながし[着流](名) 袴をはかざること。

き-なが・し[氣長](形、二) 氣ゆるやかなり、急がず。

〔き-な-き-な(名、副) 力なく愁ふるさまにいふ語。くよ〳〵。「必ずとも、―思はず」。

〔き-な-くさ・し[焦臭](形、二) 綿・紙などが火に焦(コ)げる臭(クサ)あり。

〔き-な-ぐさみ[氣慰](名) 心のなぐさみ。きばらし。

〔き-な-こ[黃粉](名) 炒(イ)りたる大豆を挽(ヒ)きてつくりたる粉、餅などに付けて食ふ。(豆砕、大豆黄屑)。――もち[黃粉餅](名) きなこをまぶしたる餅。あべかはもち。(粉餈)。

き-な・す[着做](他、さ四) 正しく身に着る。竪へ着る。「長くきなしたる姿の、武士めいたる」。

キナ-ひ[規那皮](名)「キナ」の樹皮を採集したるもの。「キニン」はこれを精製したるものなり。

(き-なふ[歸納](名) ㊀かへしをさむること。よせあつむること。㊁[Induction][論]論理の二大法の一、許多の事實を集めて一致の點を求め、其中に存する原理を案出し、更にこれより最高理に論及すること。演繹の對。㊂反切によりて、漢字の字音を出すこと、例せば、德の字の反切は多則にして、音は「とく」なるが如し。

き-なら・す[着馴](他、さ四) 着て身になれしむ。

〔き-なり(名、副) 其まゝ。ゆきなり。「―ぱつたり」。

き-な・る[着馴](自、ら下二) 屢々身に着けて馴れたり。「きなれし裝束」。(着慣)。

き-な・る[來馴](自、ら下二) 屢々來る。

(き-なん[危難](名) あやふきこと。わざはひ。さいなん。

キニーネ[規尼涅=Quinine](名)[化]「キニン」に同じ。

(き-にいり[氣入](名) 心にかなふこと。愛せらるゝこと。又、其人。「―の臣」。(寵人、嬖人)。

(き-にち[忌日](名) 其人の死したる當日。命日。

(き-にち[期日](名)「きじつ」に同じ。

(き-にふ[記入](名) かき入るゝこと。しるし加ふること。

(き-にようばう[生女房](名) 處女たりし人の嫁して人の妻となりたるもの。

(き-にん[貴人](名) 身分貴き人。「―高家」。

(き-にん[歸任](名) 任處へ歸ること。

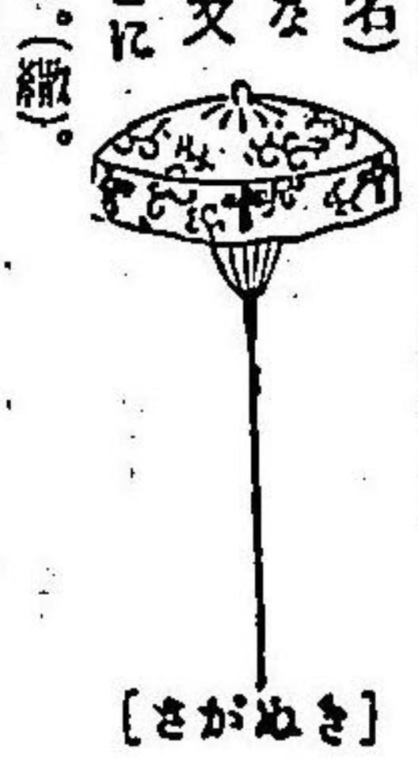
キニン[Quinine](名)[化]「キナ」の樹皮中にある「アルカロイド」、苦味ある結晶體にして解熱劑として用ひらる。

きぬ[衣](名) 身に纏(マト)ひ着けて寒暑を防ぐもの。ころも。きもの。衣服。

きぬ[絹](名) 蠶の繭より取りたる絲、又、其絲をもて織りたる織物。(帛)。――あや[絹綾](名) 薄き綾織の羅紗。――いと[絹絲](名) 蠶の繭より取りたる絲。――をり[絹織](名) 絹絲にて織りたる織物。――をりもの[絹織物](名)「きぬをり」に同じ。

廿きぬ-いた[衣板](名)「きぬた」(砧)に同じ。

きぬ-がさ[衣笠](名) 絹を張りて蓋(オホヒ)となしたる傘、古昔、支那又は我國にて貴人などに翳(カザ)すに用ひしもの。(繖)。

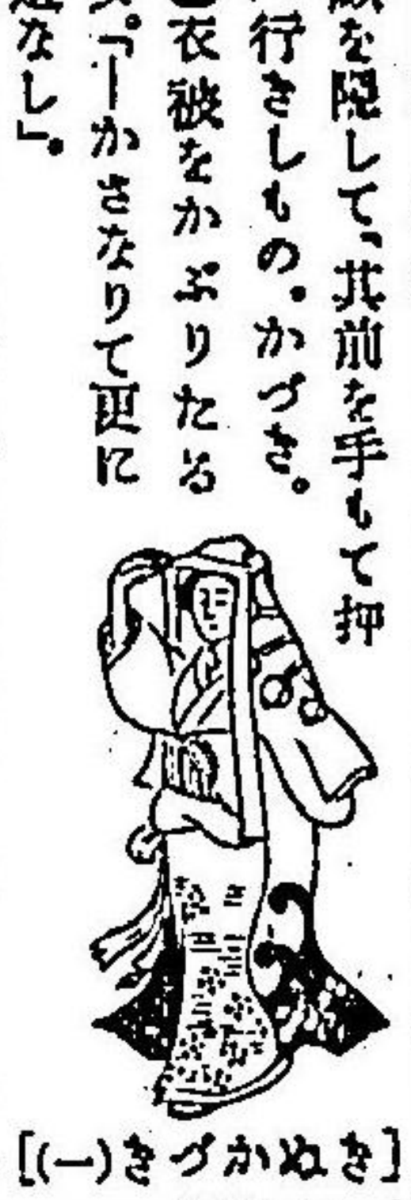

[きぬがさ]

きぬ-かたびら[絹帷子](名) 絹絲にて織りたる帷子。「―の袖すゞしき風」。

きぬ-かつぎ(名) ㊀芋の子を皮つきのまゝ茹(ユ)でたるもの。㊁[動][illegible]の異稱。

廿きぬ-かづき[衣被](名) ㊀昔時、婦人の外出のときに用ひし服、袷かたを前へ三寸ばかり下げて裁(タ)ちて仕立つ、これを頭より背に掛けて被り、深く

顏を隱して、其前を手もて押へ行きしもの。かづき。㊁衣被をかぶりたる女。「―かさなりて更に道なし」。


[きぬかづき(一)]

きぬ-かぶり[衣被](名) 前條に同じ。

〔**き-ぬ-ぬき**〕[着拔](名) 着たる着物を其まゝ、脫(ヌ)ぐこと。

きぬ-ぎぬ[後朝](名) 夜寢を共にしたる男女が、其翌朝各己のきぬを着て別るゝこと。又、男女相會ひたる其夜の翌朝。「―の、わかれていつか」。

きぬ-ぎれ[絹切](名) 絹布のむりはし又はきりはし。

きぬ-け[氣拔](名) 精神のうっとりとすること。心をうしなふこと。(失神、喪心)。

きぬ-こし[絹漉](名) ㊀物を絹にて漉(コ)すこと。又、其漉(コ)したる物。㊁「きぬこしどうふ」の略言。

―どうふ[絹漉豆腐](名) 絹の袋にて漉(コ)して製したる豆腐、質緻密にて味佳良なり。

きぬ-た[砧](名) (衣板の約) ㊀衣を被せて搗(ウ)つための木又は石の臺。「相槌に、母を頼めば、―より」。(謡)。㊁きぬたの形にこしらへたる枕。

きぬ-ぢ[絹地](名) 絹おりものゝ地。「―繪」。

きぬ-ちぢみ[絹縮](名) ちゞみのきぬおり物。木綿ちゞみの對。

きぬ-づきん[絹頭巾](名) 一種の頭巾、絹にてつばも無く、圓柱體のやゝ扁(ヒラ)き形に作り、頭の全部に嵌(ハ)むるもの。「―ゐこゑなし」。

きぬ-の[生布](名) 未だ さらさぬ布。

〔**きぬ-の-しり**〕[衣尻](名) 「きよ」(裾)に同じ。

きぬ-ばり[絹張](名) ㊀絹布を張る板。㊁絹布を張ること。又、絹布を張りたるもの。「―の傘」。

きぬ-ばり[絹針](名) 絹布を縫ふに用ふる針、木

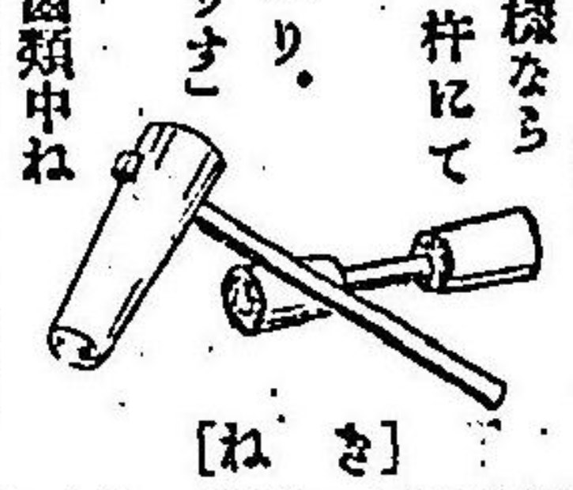
綿針に比して細小なり。

きぬ-ふたこ[絹雙子](名) 絹絲を少しく交へて織りたる雙子縞。

きぬ-ぶるひ(ルイ)[絹篩](名) 絹布を底に張りたる篩、細粉をふるふに用ふ。

††**き-ね**[宜禰](名) (祈女の義)女の巫(カンナギ)。

き-ね[杵](名) 臼に附屬する具、臼に穀物又は餅などを入れて搗(ツ)くもの、其形一樣ならず。**―うた**[杵歌](名) 杵にて物を搗くときにうたふ歌。


[きね]

(**き-ねい**)[歸寧](名) さとがへり。

き-ねずみ[木鼠](名) 【動】「りす」(栗鼠)に同じ。

き-ねずみ[黃鼠](名) 【動】嚙齒類中ねずみ科に屬する小獸、天氣の曉(ハウル)しきときは穴口に出づ、若し人を見れば、前足を交叉し手を拱(コマヌ)き、恰も禮拜するが如きさまをなして走りにぐ、支那にては裘の材として珍重す。(禮鼠、𪕋狸)。

††**き-ね-たち**[木根立](名) 樹木のきりかぶ。

††**き-ね-つづみ**[杵鼓](名) 古昔、杵の音を助くるために打ちし鼓。

(**き-ねん**)[祈念](名) 念じいのること。又、いのる念力。

(**き-ねん**)[期年](名) 限れる年。ねんげん。

(**き-ねん**)[朞年](名) まる一年。

(**き-ねん**)[紀念](名) かたみ。「友人の―」。**―くわい**[紀念會](名) 以前ありし物事の記憶を新しくするために催す會合。**―さい**[紀念祭](名) 以前ありし物事の紀念のために行ふ祭事。**―にち**[紀念日](名) 以前に其物事のありし當日。「旅順陷落の―」。**―しやう**[紀念章](名) 或物事の紀念のために、其場に列したる人などに與ふる徽章の稱。「憲法發布―」。**―**

ひ[紀念碑](名) 紀念のために立つる碑。或物事を後に傳ふるためにたつる碑。(紀念標)。**―び**[紀念日](名) 「きねんにち」に同じ。**―ゑはがき**[紀念繪葉書](名) 紀念のために發行する繪葉書。

(**ぎ-ねん**)[疑念](名) うたがふ心。うたがひ。「―を懷く」。

(**き-ねん-こく**)[祈年穀](名) 古昔、豐年を祈りて幣を神祠に奉りしこと。

(**き-ねん-さい**)[祈年祭](名) 「としごひのまつり」に同じ。

(**き-のう**)[機能](名) はたらき。作用。

(**き-のう**)[歸農](名) 官を辭して民間に下ること。(歸田)。

(**ぎ-のう**)[技能](名) うでまへ。わざまへ。

き-の-え[甲](名) (木兄の義) 十干の一。(閼逢)。

き-の-こ[菌](名) 【植】(木の子の義) 高等なる菌類の俗稱、山野の樹陰又は落葉の敷きたる地若しくは朽ちたる樹木等に生出す、其狀態は極めて多數なれど、皆な無性生殖にして胞子より菌絲を生じて發生す、或は食用とすべきものあり或は有毒のものあり、食用となる部分は菌の全體にあらずして、胞子即ち顯花植物の花實にあたる所なり。たけ。**―がり**[菌狩](名) まつたけがり。たけがり。

〔**き-の-お**〕(名) 女などが、體をすこし横にして坐したるさまの「き」の字形に似たること。

き-の-と[乙](名) (木弟の義) 十干の一。(旃蒙)。

き-の-どく[氣毒](名) (心の毒といふ義) 他人の心配又困難などを思ひやりて、自家の心をいたますこと。(惱悶)。**―せん**[氣毒錢](名) (使用するに、價低くて他人に對しきのどくなりとの義) 寬永通寶の一文錢の一名。

き-の-ばし[氣暢](名) きやすめ。

き-の-ふ[昨日](名) けふの前日。さくじつ。

―けふ[昨日今日](名) ㊀きのふとけふと。㊁近き頃。

き-のぼせ[氣上](名) 神氣の逆上。のぼせ。

き-のぼり[木登](名) 木に攀(ヨ)ぢのぼること。「猿の―」。

††**きのまる-どの**[木丸殿](名) 「きのまろどの」に同じ。

††**きのまろ-どの**[木丸殿](名) 荒木にて造りたる宮殿、きのまるどの。

き-の-み[木實](名) 木に結びたる果實。このみ。(木子)。

〔**きのみ-きのまま**〕(名) ㊀服裝を更へず着たる着物のまゝなること。「―にて行く」。㊁たゞ着たる着物のまゝにて、外に持ち物なきこと。「丸燒けにて―」。

††**き-の-みど-きやう**[季御讀經](名) 古昔、禁裏にて春季二月及秋季八月に、大般若經を講ぜられしこと、此時僧に茶を賜ふを例とせり。

き-の-め[木芽](名) ㊀木の萌芽。め。㊁食物のつまにする山椒の芽。**―あへ**(エ)[木芽韲](名) 山椒の芽を擂(ス)り込みたるあへもの。**―づけ**[木芽漬](名) あけびのわかめのしほづけ、京都鞍馬の名產。**―でんがく**[木芽田樂](名) 山椒の芽をあへたるでんがく。

〔**き-のり**〕[氣乘](名) 其氣になること。おもしろみを感ずること。

きは(ワキ)[際](名) ㊀かぎり。はて。はし。「谷の―」。㊁そば。かたはら。ほとり。㊂とき。をり。きざみ。㊃ほど。ていど。ぶんざい。

き-ば[牙](名) (牙齒の義) 門齒の左右に、一枚づゝある鋭く尖りたる齒(牙)。**―をかむ**[咬牙] 齒をくひしばる。はがみをなす。

き-ば[木場](名) 材木を貯へ置く所。材木商のあつまり住む所。

(**き-ば**)[騎馬](名) 馬に乘ること。又、其人。「―て行く」。

き-はい[氣配](名) ㊀氣くばり。えんばい。㊁けいき。樣子。「生絲相場の―」。

(**き-ばう**)[幾望](名) (殆ど望に近き義) 陰曆十四日の夜。又、其夜の月。

(**き-ばう**)[既望](名) (既に望のをはりたる義) 陰曆十六日の夜。又、其夜の月。

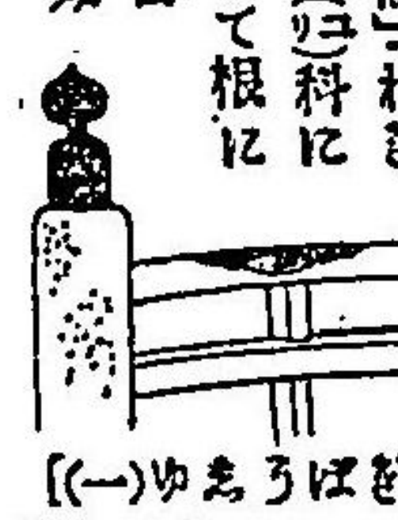
(**き-ばう**)[希望](名) 或物事を成し若しくはこれに達せんとねがひのぞむこと。のぞみ。ねがひ。「立身出世の―」。(期望)。

(**き-ばう**)[企望](名) 方策を考へて希望を遂せんとすること。くはだて望むこと。くはだて。のぞみ。

(**き-ばう**)[氣貌](名) やうす。風采。

(**き-ばう**)[欺罔](名) あざむくこと。だますこと。

(**ぎ-ばうしゆ**)[擬寶珠](名) ㊀欄干の柱の頭につくる飾、形はちよろぎ又は葱の莖に似たるもの。(蜻頭)。㊁【植】「ねぎのはな」の異稱。㊂【植】百合(ユリ)科に屬する草、葉は長楕圓形にして根より叢生す、高さ四五尺、夏の頃、白色六瓣の花を開く、根は癰に効ありといふ。(紫萼)。


[ぎばうしゆ(一)]

き-は-ぎは(キワギワ)[際際](名) ㊀ほどほど。㊁はし〳〵。

き-は-ぎは-し[際際](形、二) 極めてきはだちてあり。きはやかなり。(顯著)。

(**き-はく**)[稀薄](名) 液體又は氣體の密度の薄きこと。

き-はだ(キワダ)[黃肌](名) 【植】芸香科に屬する木、暖地の山中に生ず、葉は複葉にして數個の小葉より成る、果實は核果にして內皮は黃色なり、其內皮及樹皮は藥用又は染料に供せらる。(黃蘗)。

き-はだ(キワダ)[生肌](名) 【動】「きはだまぐろ」の略言。

―まぐろ[生肌鮪](名) 【動】硬鰭類中さば科に屬する魚、後背鰭及臀鰭は長くして相對す、胸鰭も稍や長し、體色は背部蒼黑にして腹部白し、體長大なるは六尺に達す。

き-は-だか[際高](名) ㊀きはのたかきこと。㊁きは〳〵しくいかめしきこと。**―し**[際高](形、二) きはだかにてあり。きは〳〵し。

き-は-だ・つ[際立](自、た四) 他との區別著しくあり。めだつ。

〔**き-ばたらき**〕[氣働](名) 心のはたらき。きてん。きよう。

き-バチ[木鉢](名) 木製の鉢。(木盌)。

(**き-はつ**)[揮發](名) 通常の溫度にてもよく引火すること。「―の油」。**―ゆ**[揮發油](名) 無色透明にして稀薄なる石油、揮發するが故に點火用に供する能はず、樹脂を溶(ト)き塗料を製し、若しくは脂肪等にて汚染せる物を洗滌するに用ふ。

(**き-ばつ**)[奇拔](名) いと希代なること。若しくすぐれたること。

(**き-ばつ**)[貴閥](名) たふとき家格。

き-はづか・し[氣恥](形、二) こゝろはづかし。うらはづかし。

き-は-ど・し[際疾](形、一) ㊀まぎはに切迫せり。㊁事物切迫してあやうし、危機せまれり。㊂手段危險なり。「きはどき手段」。

(**き-ばふ**)[匱乏](名) 不足なること。竭(ツ)きてむなしきこと。とぼしきこと。

き-はまり(キワマリ)[極](名) はて。をはり。かぎり。つめ。きよくてん。きよくど。(終極、窮局)。

き-はま・る(キワマル)[極](自、ら四) ㊀いたり得べきつめに至る。それ以上進む能はざる度に達す。

おしつまる。㊁つく。をはる。やむ。「廻轉きはまらず」。㊂くるしむ。せまる。「これに安んじてきはまらず」。㊃いたる。とゞまる。「天に—」。㊄決定す。きまる。さだまる。

きはみ［極］（名）きはまり。をはり。かぎり。「悲哀の—」。

きは-む［極］（他、ま下二）㊀いたるべきつめまで致す。それ以上進む能はざる度に達せしむ。おしつむ。㊁つくす。終ふ。やむ。㊂くるしましむ。せまる。㊃決定す。きむ。さだむ。

きば-む［黃］（自、ま四）黃色を帶ぶ。黃色になる。「—なる葉」。（發黃）。

きば-むしや［騎馬武者］（名）うまのりきへい。

きはめ［極］（名）㊀つめ。きは。かぎり。はて。㊁さだめ。きまり。決定。㊂めきゝ。鑑定。㊃あらへ。㊄鑑別。—がき［極書］（名）「きはめふだ」に同じ。—ふだ［極札］（名）きはめの證明の札。をりかみ。「骨董の—」。

きはめ-て［極］（副）はなはだ。もっとも。いと。「—麗し」。

きは-もの［際物］（名）所用の季節の眞際(マギハ)に賣る品物。三月の雛人形又は正月の羽子板などの類。—し［際物師］（名）きはものゝみを製造し又は商賣する人。

き-ばや［氣早］（名）氣早きと。きぜき。せいきふ。

きばや-し（くしきけれ）［氣早］（形、一）堪忍力少し。はやり氣多し。心いそがし。氣みじかなり。

きは-やか［際］（名）著しく際だちてあると。

き-ばらし［氣晴］（名）鬱をはらすと。きさんじ。なぐさみ。（散悶、消悶、解悶、散鬱）。

〔**き-ばり**［氣張］（名）きばると。ふんぱつ。

〔**き-ばる**［氣張］（自、ら四）㊀氣をふるひ張る。いさみたつ。ふんぱつす。（奮興）。㊁不相應に多く出金す。意外に高價の物を買ふ。はずむ。おごる。㊂見えを張る。

(**き-はん**［歸帆］（名）㊀船舶の歸路に就くと。㊁歸途に就く船舶。

(**き-はん**［軌範］（名）のり。てほん。

(**き-はん**［羈絆］（名）ほだし。又、くわんけい。「—を脱す」。

(**き-はん**［規範］（名）從ひのっとるべき標準。のり。—がく［規範學］（名）從ひのっとるべき標準を立つる學。倫理學・論理學等これなり。

(**ぎ-はん**［僞版］（名）僞作の版木。又、其刷(ス)りもの。

(**ぎ-はん**［儀範］（名）のり。てほん。

(**きはん-りよく**［既判力］（名）【法】判決の確定より生じたる一事不再理の効力。

(**き-ひ**［忌避］（名）㊀忌みてさくると。きらひてあづからざると。㊁【法】訴訟事件にて、判事若しくは書記が、法律により其かゝりより除斥せらるゝと、又、其事件のかゝりの判事若しくは書記が、偏頗の嫌疑ある場合に、訴訟關係人より其かゝりの除斥を請ふと。「—の申請」。

きび［黍］（名）【植】禾本科に屬する植物。高さ二三尺の草本にして、小穗狀花序は開き出て、下垂せる圓錐花序に排列す。果實は淡黃色を帶ぶ。もちきび・うるきびの別ありて、共に食用とす。（稷粔）。

‡(**き-び**［吉備］（名）備前・備中・備後の古稱。

(**き-び**［機微］（名）㊀隱微なるおもむき。きざし。㊁けはひ。けしき。「—の言面に見るゝなし」。

(**き-び**［驥尾］（名）（駿馬の尾の義）賢者の後(シリ)。又は陰。「—に附く」。

〔**き-び**［氣味］（名）氣味(キミ)の訛。「—が惡い」。—

きび［氣味氣味］（名、副）勇ましくして心地よきさまにいふ語。

きび-ざけ［黍酒］（名）黍にてかもしたる酒。

きび-し（しくしきけれ）［嚴］（形、二）㊀嚴重なり。ゆるやかならず。おごそかなり。㊁からし。むごし。（刻覈）。㊂はなはだし。いみじ。「—き寒さ」。（甚）

キビ-シヨ［急燒］（名）「キフス」の訛。

〔**きび-しよう**［急須］（名）前條に同じ。

きび-す［踵］（名）くびす。（踵）。

きびたき（名）【動】燕雀類に屬する鳥。小形にして美麗なり。嘴の基部は偏潤にして鬚を生ぜず、尾長くこれを振りて鳴く。（金花）。

きび-だんご［黍團子］（名）黍の粉にて製したる團子。備前國岡山の名產。「日本一の—」。

(**ぎ-ひつ**［僞筆］（名）他人の手蹟に擬(ニ)せて書きたる筆跡。にせひつ。にせふで。（僞書）。

‡**きびは**（名）㊀みやびやかなると。㊁よわきと。「—なる人のいふさへ（源氏）」。

きび-もち［黍餅］（名）もちきびを蒸(ム)してつきたる餅。

き-びら［生平］（名）いちびの纖維にて織りたる布のよく晒さぬもの。近江國犬上郡邊の名產。

き-ひろひ［木拾］（名）㊀たき木をひろふと。㊁たき木を拾ふ賤業者。「湯屋の—」。

(**き-ひん**［氣品］（名）きぐらゐ。

(**き-ひん**［奇品］（名）めづらしきしな。

(**き-びん**［機敏］（名）發動又は處置のすみやかなると。すばやきと。敏捷。「—な性質」。

(**き-ふ**［給］（名）㊀給料又は給金。㊁あてがひ。たまもの。めぐみ。「—を富人に仰ぐ」。

(**き-ふ**［級］（名）㊀しな。くらゐ。等階。㊁だん。きだ。階段。㊂あるし。首級。「敵を斬る三千—」。

(**き-ふ**［急］（名）㊀はやきと。はげしきと。㊁たちまち。にはか。「—の間にはあはぬ」。㊂きびしきと。からきと。㊃きみじか。きばや。「君の性は—」。㊄猶豫すべからざると。「事の—なるを聞き」。㊅困難。事變。「國家の—に赴く」。㊆第一に行ふべきと。先要。「人生の—務なり」。

(**き-ふ**［笈］（名）㊀おひ。㊁背に負ふ書物箱。——をおふ［負笈］鄕里を離れて遊學又は入塾するにいふ。

(**き-ふ**［寄附］（名）㊀公共の事務を補助する目的を以て財物を贈ると。㊁【法】寄附行爲をなすと。

(**き-ふ**［棋布］（名）將棊を列したる如くに散じ居ると。「灣內に—する松島」。

(**き-ぶ**［基部］（名）もとになる所。ねもと。

ぎ-ふ［妓夫］（名）女郎屋の下男。女郎屋の客引。

(**きふ-いん**［吸引］（名）㊀吸ひこむと。㊁我味方にとりこむと。

(**き-ふう**［氣風］（名）こゝろだて。きだて。氣性。「さくい—」。

(**きふ-う**［急雨］（名）にはかあめ。

(**きふ-かう**［急行］（名）急に行くと。いそぎゆくと。——れつしや［急行列車］（名）途中の小さき驛に立ち寄らずして急行する鐵道列車。

(**きふ-かうゐ**［寄附行爲］（名）【法】公益上の目的を以て財團法人を設立せんため、自己の財產を無償にて處分し義捐する單獨行爲。

(**きふ-がく**［給額］（名）給與するたか。

(**きふ-き**［急騎］（名）はやうま。（驛）。

(**きふ-きふ**［岌岌］（名、副）あやふきさま又は高きさまにいふ語。

(**きふ-きふ**［汲汲］（名、副）一心を傾けてつとむるさまにいふ語。「—として夜を日に繼ぎ」。

(**きふ-きふ**［急急］（名、副）最もいそぐさま又は極めてきびしきさまにいふ語。「—事を處す」。——によりつりやう［急急如律令］（名）僧侶又は道士などが、惡魔其他邪道を行ふものを攘(ハラ)ふ咒文の終末に添へ唱ふる語。

(**きふ-きよ**［急遽］（名）㊀にはか。きふ。㊁あわつると。（周章）。

(**きふ-きん**［寄附金］（名）寄附の金錢。「學校の—」。

(**きふ-きん**［給金］（名）給料として渡す金。

(**き-ふく**［起伏］（名）㊀或はたかく或はひくきと。たかひく。「連山—」。㊁或は起り或は止むと。「人生の波瀾は—常なし」。

(**き-ふく**［歸服］（名）つきしたがふと。降參。歸順。

(**き-ぶく**［忌服］（名）忌と服と。例へば、父母の忌は五十日にて服は十三ヶ月なるが如し。

(**きふ-くわ**［急火］（名）まぢかき火事。近火。

(**きふ-げき**［急擊］（名）はげしくせめかけ戰ふと。急に擊つと。

(**きふ-げき**［急激］（名）㊀にはか。たちまち。㊁はげしくあらだつと。おこりたつと。（急劇）。

(**きふ-けつ**［泣血］（名）（なみだ盡きて血出づる義）非常に泣き悲しむと。

(**きふ-こ**［急鼓］（名）つゞけ打ちに早く打つ太鼓。

(**きふ-ざいさん**［寄附財產］（名）【法】寄附行爲により義捐したる財產。

〔**き-ふさぎ**［氣塞］（名）心の窮屈なると。氣のはれ〴〵せざると。

(**きふ-し**［給資］（名）資本を給すると。費用をあたふると。

(**きふ-し**［急使］（名）にはかの使者。又、早飛脚。

(**きふ-じ**［給仕］（名）㊀傍に居て行ふこま〴〵しき雜務。又、其雜務をとる人。㊁饗應の席に侍りて、飮食の世話をなすと。又、其人。かよひ。

(**きふ-じ**［急事］（名）さし迫りたる事。にはかの事。ゆるがせにならぬ事。

き-ぶし［生五倍子］（名）「ふし［五倍子］」に同じ。

(**きふ-しう**［吸收］（名）㊀外物を體內にすひいるゝと。㊁あつめをさむると。「資金の—」。

(**きふ-しやう**［急性］（名）いらだち思ふと。又、氣ばやき性質。「—な人」。

(**きふ-しやう**［急症］（名）きふびやう。

(**きふ-しやう**［吸上］（名）すひあぐると。

き-ぶしやう［氣無性］（名）氣の引き立たざると。氣のおもきと。又、其性質。

(**きふ-しよ**［急所］（名）㊀身體の中にて、其所を害せば命にも關係すべき所。（致命處）。㊁すべて物事の要處の稱。

(**きふ-じよ**［給助］（名）めぐみ。ほどこし。にぎはし。

キフ-ス［急燒］（名）（字の唐音）もとは酒を入れて燗したる具、今はおもに煎茶を入れ湯をつぎ、煎じ出す小さき土瓶。キビシヨ。（急須）。

きふ-す［給］（自、さ變）具備す。そなはる。たる。「家々きふし人々足る」。

きふ-す［給］（他、さ變）㊀たまふ。めぐむ。あたふ。「衣服を—」。㊁そなふ。あてがふ。くばる。「糧食を兵士に—」。

(**きふ-すう**［級數］（名）【數】一定の法則に從ひ增減する數を順次に排列したるもの。等差級數と等比級數とあり。

(**きふ-すゐ**［給水］（名）水を供給すると。

(**きふ-せい**［急性］（名）㊀病氣の急に起る性狀のもの。慢性の對。「—僂麻質斯」。㊁氣ばや。

(**きふ-ぜん**［翕然］（名、副）一つに合ふさまにいふ語。

(**きふ-そく**［急速］（名）にはか。たちまち。きふ。「兵は—をむねとす」。

(きふ-だい（キウ）【及第】(名) ㊀試驗を經て、秀才又は進士の科に登用せらるゝこと。㊁學力又は實務の試驗に合格したること。

きふ-だい（キウ）【妓夫臺】(名) 女郎屋の店先に妓夫のひかへ居る所。

きふ-ぢ【木藤】(名) 【植】「まめふぢ」の異稱。

ぎふ-チヤウチン【岐阜提燈】(名) 美濃國岐阜の名產なる提燈、骨細く紙薄くして長卵形をなし、多くは草花などの畫を描く、夏夜軒端などに吊（ツル）す。

き-ブツ【木佛】(名) ㊀木ぼりの佛像。㊁情愛うすき人。（木石漢）。

(き-ぶつ【奇物】(名) ㊀珍しき品。奇品。㊁奇人又は奇男子。

(き-ぶつ【器物】(名) うつはもの。だうぐ。器具。

(ぎ-ぶつ【僞物】(名) にせもの。贋物。（僞造品）。

(きふ-てい（キウ）【泣涕】(名) 淚を流して泣くこと。

(きふ-てん（キウ）【急轉】(名) 急にかはること。——**ちよくか**【急轉直下】(名) 急に勢かはりて其まゝひたおしにおしくだること。「時勢は——して」。

(きふ-なん（キウ）【急難】(名) 急に起る災難。又、單に困難又は事變。「兄弟——あり」。

きふ-に（キウ）【急】(副) にはかに。たちまち。はやく。「——行く」。

(きふ-にふ（キウニウ）【吸入】(名) すひこむこと。すひいるゝこと。——**き**【吸入器】(名) 氣液を吸入する用に供する器。

(きふ-にん（キウ）【給人】(名) 昔時、武家にて扶持米を給したる雇人。

きふ-ば（キウ）【急場】(名) 事の急なる場合。難場。

(きふ-はう（キウホウ）【急報】(名) いそぎのしらせ。

(きふ-はく（キウ）【急迫】(名) ㊀急にさし迫ること。せっぱつまること。㊁如何ともしがたき困難にあふこと。

(きふ-ばん（キウ）【吸盤】(名) 【動】或種の動物の有する圓狀の器官、これを以て他の物體に附着す。

(きふ-ひ（キウ）【給費】(名) 費用を給すること。——**せい**【給費生】(名) 學費を給せらるゝ學生。

きふ-び（キウ）【急火】(名) 料理物など燒く火の激しすぐること。又、其火。「——て焦がす」。

(きふ-びやう（キウビヤウ）【急病】(名) 急に起りたる病氣。——**にん**【急病人】(名) 急病にかゝりたる人。

(きふ-びん（キウ）【急便】(名) 急なるたより。

(きふ-ふ（キウ）【給付】(名) ㊀財物を供給交付すること。あたふること。ひきわたすこと。㊁【法】債權又は債務の目的たる作爲若しくは不作爲の行爲。

(きふ-ぶん（キウ）【給分】(名) 給料。「御身が——にて」。

(きふ-へん（キウ）【急變】(名) にはかに起りたる變事。（激變）。

(きふ-む（キウ）【急務】(名) 急ぎて爲すべき事業。第一になすべきつとめ。

(きふ-やう（キウヤウ）【給養】(名) ㊀衣服糧秣其他需用品を供給すること。㊁あてがひやしなふこと。めぐみたすくること。

(きふ-よ（キウ）【給與】(名) めぐみ與ふること。又、其財物、

(きふ-よう（キウ）【急用】(名) いそぎの用事。

き-ぶり【着振】(名) 着たるやうす。「羽織の——」。

き-ぶり【木振】(名) 樹木の幹又は枝などの樣子。

(きふ-りう（キウリウ）【急流】(名) 水勢迅（ハヤ）き流。はやせ。

(きふ-りやう（キウリヤウ）【汲量】(名) ㊀のみこみ。ゐとく。㊁おもひやり。すゐさつ。㊂吸ひこむ分量。

き-ふるし【着古】(名) 着て舊くすること。又、其衣服。ふるぎ。（古着）。

き-ふる・す（さしすすせせ）【着古】(他、さ四) 着て舊くす。

(きふ-れう（キウレウ）【給料】(名) 雇人等の受くる給與若しくは官吏職員等の受くる俸給、即ち、勞力に對する報酬の稱にして、前者の如きを契約的給料といひ、後者の如きを強制的給料といふ、又、これを名義上と實際上との二に分ち、名義上とは受領する貨幣の給額をいひ、實際上とはそれによりて享受する生計の總額をいふ。

(き-ぶん【奇聞】(名) 珍しきうはさ。（奇談）。

(き-ぶん【餽問】(名) 物を贈りおとづるゝこと。

(き-ぶん【氣分】(名) ㊀きもち。こゝろもち。（心氣）。㊁氣質の狀態。

(ぎ-ふん【義憤】(名) 義のために心の奮ひおこること。義に勇むこと。

(き-へい【騎兵】(名) 騎馬の軍隊。騎馬の兵卒。

(き-へい【奇兵】(名) 敵の不意を襲ふ軍隊。

(き-へい【麾兵】(名) 麾下の兵卒。

(ぎ-へい【疑兵】(名) 敵をして軍隊の屯在するかと思はしむるいつはりの設備。

(ぎ-へい【義兵】(名) 義のために起す兵。

(きべつ-るゐ【龜鼈類】(名) 【動】爬蟲類中の一目、背部及腹部は堅き甲をなし、頭尾及四肢は兩甲の間より出入す。

廿き-へ・ゆ・く（かきくくけけ）【來經行】(自、か四) 年月過ぎ行く。

(ぎ-へん【欺騙】(名) 欺くこと。だますこと。

(き-へん【机邊】(名) つくゑのほとり。

き-へん【木偏】(名) 漢字の偏の名、松・梅・柳などの如き字の左にある木の字。

(き-べん【旗瓣】(名) 【植】荳科に屬する植物の花冠の中央にある大花瓣。

(き-べん【詭辯】(名) 理を非に曲ぐること。好みて奇怪なる說をなすこと。又、其議論。「——を吐きて、人を迷はす」。——**がくは**【詭辯學派＝Sophism】(名) 【哲】紀元前五世紀頃「ギリシア」にて唱へられし一派の哲學、不易の眞理なるもの存することなく、眞理はたゞ各人の觀念に對し存するのみといふ說。

(き-ぼ【規模】(名) ㊀たゞしき例。手本。㊁かまへ、

かゝり。「廣大なる——」。㊂勘賞にあづかること。

(き-ぼ【希望】(名) ねがひのぞむこと。

ぎ-ぼ (名) 【植】紫色のぎばうしゆの稱。

(ぎ-ぼ【義母】(名) 義理ある母。繼母又は後母。

(き-ほう【機鋒】(名) ほさき。いきほひ。「——鋭利」。

き-ほう【木棒】(名) やじりのまろく長くして鏑の如き形をなせるもの。

(き-ぼう【奇謀】(名) 奇妙なる謀策。

(き-ぼう【詭謀】(名) だまして術中に入れんとすること。

(き-ぼく【龜卜】(名) 龜の甲を燒きてなすうらなひ。

(ぎ-ぼし【擬寶珠】(名) 「ぎばうしゆ」の訛。

廿き-ぼね【牙骨】(名) 上下の腭骨。（顎骨）。

き-ぼね【氣骨】(名) 心づかひ。心ぱい。——**がをれる** 心づかひす。心ぱいす。

きほひ（キホオ）【競】(名) ㊀きほふこと。はりあふこと。㊁はなばなしき威勢。「江戸の——」。廿——**うま**【競馬】(名) 古昔、五月の三・四・五・六の四日間、加茂の祭禮に行はれたるくらべ馬。——**がほ**（キホーガホ）【競顏】(名) はりあふさま。競ふやうす。——**ぐみ**【競組】(名) きほひてある連中。いさみの連中。——**はだ**【競肌】(名) きほひのたち。勇みはだ。

きほ・ふ（キホフ）（はひひふふへへ）【競】(自、は四) 勇み立ちて、互に意氣をはりあらそふ。いきほふ。きそふ。

(き-ほん【基本】(名) 物事の由りて起るべき基礎。もとゐ。——**きん**【基本金】(名) 或費用を支出するための基本と定めたる資金。——**ざいさん**【基本財產】(名) 或費用を支出するための基本と定めたる財產。——**たんゐ**【基本單位】(名) ㊀【理】長さ・質量及時の單位の稱、此三つの單位定まれば、他の總ての量の單位はこれより算出し得るを以て名づく。㊁【數】或名數の單位の中にて基本となるべきものゝ稱、其他の單位はこれを補助單位といふ、例へば、長さの基本單位は尺にして、里・町・間・分・寸等は補助單位なり、又、地積の基本單位は步又は坪にして、町・段・畝・合・勺等は補助單位なるが如し。㊂すべて物事の基本の單位。

き-まい【期米】(名) 定期米の略言。

き-まかせ【氣任】(名) 思ひの儘（マヽ）にせさすること。氣まゝ。

き-まくら【木枕】(名) 木製の枕。

(き-まぐれ【氣紛】(名) 心の物事にまぎれたること。又、心まぎれ易く變りやすき性質。——**てんき**【氣紛天氣】(名) 陰晴定まらぬ天氣。——**もの**【氣紛者】(名) 心變り易き人。

(き-まじめ【生眞面目】(名) 最も眞面目なること。

(き-まづ・し（くしきけれ）(形、二) 氣に障（サハ）りて快からず。不愉快なり。おもしろからず。（不興）。

(き-まぶり【木守】(名) 「きまもり」の訛。

(き-まへ（エーマ）【氣前】(名) ㊀氣だて。こゝろばへ。㊁金錢の遣ひ方又は物品の貸し方などのやうす。「——がいゝ」。——**もの**【氣前者】(名) 金錢又は物品などに未練（ミレン）少き人。

き-まま【氣儘】(名) ㊀こゝろに思ふまゝ。㊁わがまゝ。きずゐ。——**づきん**【氣儘頭巾】(名) 寬保頃に行はれたる一種の頭巾、鼻と口との所へ別に切れを當てゝ目ばかりを出す縫ひ方。——**もの**【氣儘者】(名) きまゝの振舞をなす人。わがまゝもの。

き-まもり【木守】(名) ㊀木を守るもの、㊁(轉)木の果實の取り殘されてたゞ一つ樹にあるもの。きまぶり。（殘果）。㊂最後にのこりしもの。

きまり【極】(名) ㊀さだまり。おちつき。決定。㊁をはり。をさまり。結局。㊂まとまり。とりつゞめ。緊縮、㊃いつも同じき默燈、おかぶ、おやうれい。㊄人に對する面目、「——わるし」。

きま・る（らりるるれれ）【極】(自、ら四) ㊀決定す。さだまる。おちつく。㊁結局す。をはる。はつ。㊂緊縮す。ちゞまる。

(き-まん【欺瞞】(名) だましすかすこと。

(きまん-めんぢよ【期滿免除】(名) 【法】(い)民事上にて、一定の期間を經過せるため、義務の履行を免除せらるゝこと。(ろ)刑事上にて、刑の執行をのがれたる犯罪人が、一定の期間を經過せるため、其刑の執行を免除せらるゝこと、其期間は刑の種類によりて同じからず、すべて刑の執行を免れたる日より起算し、若し闕席裁判に係るときは、其宣告の日より起算するものとす。

きみ【君】(名) ㊀人民の首長。帝王。君主。㊁主君。「——の御爲」。㊂人の敬稱。「源氏の——」。㊃遊女の異稱。「江口の——」。

廿きみ【公】(名) 古昔のかばねの名。「上毛野——」。

き-み【黃身】(名) 鳥卵の蛋白質の中にありて、一團をなす黃色の物質。（蛋黃）。

き-み【黃味】(名) きいろ。

(き-み【氣味】(名) ㊀にほひと味と。㊁おもむき、樣子。「御惱の——」。㊂心もち。こゝろ。——**あひ**（イーア）【氣味合】(名) 心もち。又、おもむき。「聟ばかり貴めずと、——も貴めてくりや」。

(きみ【黍】(名) 【植】「きび」に同じ。（稷）。

きみ【君】(代) 對稱の代名詞。

きみ-が-よ【君代】(名) 我國の國歌の名、主上の治ろしめす御代を謳歌したるものにして、其初句の四字を取りて名とす、即ち、「君が代は、千代に八千代にさゞれ石の、巖となりて苔のむすまで」にして、和漢朗詠集の中の歌よりとれるもの。

きみじか［氣短］(名) 心はやりやすきこと。事を急ぐこと。たんき。性急。(短慮)。

きみ-しらず［君不知］(名) 鳥の翅の裏なる二枚「目の羽」。

きみ-づし［黄身鮨］(名) 一種の料理。鳥卵の黄身を固めて味をつけ、飯の如くにしたるもの、上に鰕又は魚肉などを敷き、握り口取などに用ふ。

(**きみつ**［機密］(名) 秘密なる事件。(隱密)。——**ひ**［機密費］(名) 機密なる事件のために使用する費用。——**ぶんしよ**［機密文書］(名) 秘密なる事件に關する書類。

きみつ［生蜜］(名) 未だ精製せざる蜂蜜。蜂巣の中よりとりたるばかりの蜜。

きみづ［黄水］(名) 溜飲などにて吐く膽汁。廿——**をはく** わなゝき恐るゝさまにいふ。

(**きみやうら**［歸命］(名)【佛】梵語、南無の譯。佛の敎命に歸依して他に移らざること。——**ちやうらい**［歸命頂禮］(名)【佛】歸依禮拜すること。又、佛に禮拜するに唱ふる語。

きみ-ばし-る［黄味走］(自、ら四) 黄色を含む。きばむ。

(**ぎみん**［義民］(名) 義のために事を起せる民。義のために一身を犠牲となす民。「阿波の——」。

(**きむ**［機務］(名) 根本の事務。樞要の政治。「——に參す」。

きむ［極］(他、ま下二) ㊀決定す。さだむ。㊁約定す。ちかふ。㊂なじる。とがむ。「きめつけてやつた」。㊃其やうすをなす。

(**ぎむ**［義務］(名) ㊀風俗・習慣若しくは道德・信仰等の要求に一致せる行爲。自家の分限に應じて爲すべく又は爲すべからざる行爲。「國民の——」。㊁【法】法律が規定し強制せる行爲又は不行爲。又、債務。——**けういく**［義務敎育］(名) 國民が一般に義務として受くべき普通敎育。——**しや**［義務者］(名) 義務を果すべき責任ある者。債務を負ふ者。

き-むく［黄無垢］(名) 黄色にして無地なる衣服。

き-むすめ［生娘］(名) 未婚の少女。世になれぬ少女。うぶなをとめ。(處女)。

き-むづかし［氣難］(形、二) 萬事につけて、容易に氣に入り難し。

き-め［木目］(名) ㊀材木の面にあるあや。もくめ。(木理)。㊁皮膚の面にある細かきあや。(肌理、膚理)。㊂すべて物體の面にある細かきあや。「石の——」。

きめ［極］(名) さだめ。やくそく。「——通り」。

(**き-めい**［忌明］(名) いみあけ。(解忌)。

(**き-めい**［記名］(名) ㊀姓名を記すること。「——捺印す」。㊁記名式に同じ。「——公債」「——株券」。——**しき**［記名式］(名) 證劵を發行するに、其權利者の氏名又は商號等を記載すること。無記名式の對。——**とうへう**［記名投票］(名) 投票紙に投票者の姓名を記すること。無記名投票の對。

(**ぎ-めい**［僞名］(名) いつはりのな。

(**き-めう**［奇妙］(名) ㊀くしくたへなること。不思議。㊁巧にして立派なること。著しくすぐれたること。「——の文」。

〔**きめ-こまか**［肌理細］(名) 皮膚のきめの細かなること。(緻理、密理)。

〔**きめ-こ-む**［極込］(他、ま四) ㊀きめつく。㊁其やうすをなす。「音羽屋を——」。

〔**きめ-つ-く**［極附］(他、か下二) ㊀いよいよそれときめなす。㊁責めなじる。

〔**きめつける**［極附］(他) 「きめつく」の訛。

〔**きめる**［極］(他) 「きむ」の訛。

(**き-めん**［鬼面］(名) おにの假面。——**ひとをおどす**［鬼面嚇人］ 外見をいかめしくして世人にえらく思はするにいふ。

きも［肝］(名) ㊀かんざう。(肝臟)。㊁臟腑又は心中。㊂たましひ。氣力。膽力。「——太き奴」。(膽)。——**いり**［肝煎］(名) ㊀周旋する人。とりもつ人。㊁支配人。世話役。㊂名主。庄屋。——**きゆ**［肝消］(自、や下二) いたく驚き又は恐しむにいふ。——**だま**［肝魂］(名) きも。たましひ。——**だましひ**［肝魂］(名) 前條に同じ。廿——**なます**［肝膾］(名) (きもをなますにする意) 心配すること。心を碎き氣をもむこと。「——をつくりかたづをのむもあり」。——**ふとし**［肝太］(形、二) ㊀物事に臆せず。(大膽)。㊁惡事をなすを憚らず。——**にめいず**［銘肝］ 深く心に記して忘れざるにいふ。——**をつぶす** いたく驚くにいふ。——**をひやす** 前條に同じ。

き-もち［氣持］(名) こゝろもち。こゝち。「——が惡い」。

〔**きもつ-たま**［肝魂］(名) きもだま。

き-もの［着物］(名) ころも。いふく。衣裳。(衣服)。

き-もの［季物］(名) 其時節に應じたるもの。「活花には——を用ふ」。

(**き-もん**［記問］(名) たゞ記憶のみの學問にして、これを實際の行狀にあらはさゞること。「——の學」。

(**き-もん**［鬼門］(名) ㊀(此方角に鬼屋ある故にいふ) 陰陽家にて、萬事につけて忌み避くべきものとせる方角、卽ち、艮(トウシ)の隅。㊁行くを忌む所。「あの家はおのれは——」。——**よけ**［鬼門除］(名) きもんの方に、神佛を祭り災難を除(ヨ)け避くること。

〔**き-もん** (名) きもの。いふく。

(**ぎ-もん**［疑問］(名) ㊀疑ひ問ふこと。㊁疑ふべきこと。分明ならざること。「彼の心中は——なり」。——**し**［疑問辭］(名) 疑問に用ふる辭、か・や等の類。——**だいめいし**［疑問代名詞］(名) 疑ひ問ふ稱の代名詞、たれ・どこ・いづこ等の類。

き-や［木屋］(名) 材木をあきなふ家。

(**きやう**［經］(名) ㊀佛敎の經文、卽ち、佛陀の言を錄したるもの。きやうもん。「一切——」「阿含——」。㊁儒學の經書、卽ち、聖人の言を集めたるもの。けいしよ。「詩——」「書——」。㊂經文を讀むこと。どくきやう。

(**きやう**［饗］(名) 酒食を設けてもてなすこと。ちそう。「人の——を受く」。

(**きやう**［香］(名) 將棊の駒の名。「きやうしや」の略言。

(**きやう**［鄕］(名) ふるさと。さと。「——にかへる」。

(**きやう**［卿］(名) ㊀古昔、八省の長官。㊁三位以上の人の敬稱。「公——」「藤原藤房——」。

(**きやう**［京］(名) ㊀宮城のある都會。みやこ。㊁京都市の特稱。「——の淸水」。

(**きやう**［境］(名) ㊀さかひ。かぎり。㊁ばあひ。をり。「九死の——」。㊂ありさま。やうす。「佳——」。

(**きやう**［磬］(名) 磬(ケイ)の一名。

(**きやう**［强］(名) ㊀つよきこと。つよきもの。「北方の——か」。㊁四十歲前後の稱。をとこざかり。㊂示されたる數は概算にして、なほ切りすてたる殘餘のあること。「九百——」。

(**きやう**［狂］(名) ㊀常態を失すること。くるふこと。又、其人。きちがひ。「——となる」。㊁志大いにして行の不檢束なること。又、其人。「——者は進取す」。

(**ぎやう**［行］(名) ㊀【佛】十二因緣の一、煩惱の惑ひを因として、善惡の諸業を造作すること。志よぎやう。㊁僧侶又は修驗者が、其道の定まりたる業を修むること。特に、其難苦なるものをいふ。「難——苦——」。㊂「ぎやうじや」の略言。㊃「ぎやう志よ」の略言。㊄位と官との間に置きて、位高く官低きことを表はすに用ひし語。「正二位——大納言」。㊅つらなり並ぶこと。ならび。くだり。「——がそろはぬ」。

(**きやう-あく**［强惡］(名) きはめてあしきこと。

(**きやう-いう**［享有］(名) 無形物を我身にうけたもつこと。「天より——す」。

(**きやう-いつ**［驚逸］(名) おどろきてそれ走ること。「馬——す」。

(**ぎやう-えふ**［杏葉］(名) ㊀唐鞍に用ふる杏の葉の形に似たる飾、ぎやうえふ。㊁胴丸(ドウマル)のよろひのたかひもの上を益(ホオ)ふもの。㊂すべて杏の葉の形をなしたるものゝ稱。

廿**きやう-えん**［竟宴］(名) 古昔、書物の講義などをはりし後に開きし酒宴。「日本紀——」。

(**きやう-おう**［饗應］(名) もてなし。ちそう。

(**きやう-おう**［響應］(名) 響の聲につれて起るが如く、其人のなす所に應じてきそひ起ること。「天下——す」。

きやう-おしろい［京白粉］(名) 京都より製出する上品の白粉。

(**きやう-か**［狂歌］(名) 平易の言を以て諧謔の調をなしたる和歌。たはれうた。

(**きやう-かい**［境界］(名) さかひ。くろき。はんゐ。

(**きやう-がい**［境界］(名)【佛】六識と六根とによりて形成せる自家の狀態。

(**きやう-がい**［境涯］(名) 此世にある身分のほどあひ。(境遇)。

(**きやう-がい**［驚駭］(名) おどろきおそるゝこと。

(**きやう-かう**［强硬］(名) てづよきこと。屈せざること。「——なる手段」。

(**きやう-かう**［强項］(名) (首の骨の強き義) 妄に人に首をさげざること。

(**きやう-かう**［鄕校］(名) さとの兒童の學問所。

(**きやう-かう**［强行］(名) 先方の事情如何にかゝはらずおしておこなふこと。——**ていさつ**［强行偵察］(名) 敵の砲火を冒して敵狀の偵察をなすこと。又、敵の港口の閉塞を確實にするため、港口に突入して行ふ一種の作業。——**はふ**［强行法］(名)【法】人民の志望如何に關せず、必ず遵奉せしむる法律、卽ち、憲法・刑法等これなり。隨意法の對。

(**ぎやう-かう**［行幸］(名) 天子のみゆき。

(**ぎやう-かう**［行香］(名) 儀式の席にて、香をくばること。

(**きやう-かうがい**［京笄］(名) 京都にて製造する「かうがい」。

ぎやう-かく［仰角］(名) 「かうど」(高度)に同じ。

(**きやう-がく**［驚愕］(名) にはかの事におどろきて心みだるゝこと。

廿**きやう-かご**［京駕籠］(名) 古昔、人をのせて京を發したる駕籠。「旅に——を下して」。

(**きやう-か-し**［狂歌師］(名) よく狂歌をよむ人。

きやう-かたびら［經帷子］(名) 佛式にて死人を埋葬するとき、死人に着する衣、白麻をもてつくり、南無阿彌陀佛など、書けるもの。(經衣、甲衣)。

きやう-かのこ［京鹿子］(名) 京都にて染めたる鹿子しぼり。

きやう-ガハラ［經瓦］(名) 佛經を彫(ホ)りたる瓦、永く傳ふるために土中に埋めおくもの。

(**きやう-かん**［狂簡］(名) 志大いにして物事に疎略なること。

(**きやう-がん**［强顏］(名) ㊀つれなきこと。㊁あつかましきこと。

(**きやう-き**［强記］(名) ものおぼえよきこと。又、よく物事を記憶せること。「博覽——」。

(**きやう-き**［驚喜］(名) 其事の意想外なりしに、おどろきよろこぶこと。

(**きやう-き**［狂喜］(名) 常を失ふばかりにいたくよろこぶこと。

⌒きやう-き【狂氣】(名) きちがひ。

きやう-ぎ【經木】(名) 檜又は杉などの材木を紙の如くに薄く廣く削りたるもの、もとはこれに經文を寫しゝより此名あり、近時は菓子などを包み、菓子折に敷くなどに用ふ。——がさ【經木笠】(名) 經木にて編みたるかぶりがさ。——さなだ【經木眞田】(名) 經木にて眞田紐の如くに編みたるもの、帽子などの料に供せらる。

⌒ぎやう-ぎ【行儀】(名) ㊀たちゐふるまひの作法。(禮儀)。㊁たちゐ。ふるまひ。「——わるい」。㊂ならびかた。そろひやう。——あられ【行儀霰】(名) 行儀正しく粒になりたるあられ小紋の模樣。

廿きやう-きやう【輕輕】(名) かろ〳〵しきと。けいそつ。

⌒ぎやう-ぎやう-し (名) 【動】「よしきり」の一名。(中國邊の方言)。

ぎやう-ぎやう・し（しくしくしき しけれ）【仰仰】(形、二) おほげさなり。ぎやうさんなり。

ぎやう-き-やき【行基燒】(名) 古昔、僧行基が燒き始めたりといふ素燒の陶器。

⌒きやう-ぎよ【强圉】(名) 十干の一、丁の異稱。

⌒きやう-きよ【强禦】(名) つよき敵。「—をおそれず」。

⌒きやう-きよく【鄕曲】(名) さと。むら。「—の譽」。

⌒きやう-く【狂句】(名) 滑稽の調ある俳句。せんりう。やなぎだる。

⌒きやう-ぐう【境遇】(名) 其身に到來せる運命又は附隨せる事情。まはりあはせ。ゐあはせ。

廿きやう-くだり【京下】(名) 昔時、京都より地方へ行きしと。——ぶぎやう【京下奉行】(名) 古昔、京の官人の鎌倉に下りてなしゝ訴訟を判斷せし武家の職名。

きやう-くつ【敬屈】(名) 人をうやまひ人にへりくだると。

⌒きやう-くやう【經供養】(名) 佛經を寫し、それを以て佛事のいとなみとなすと。

⌒きやう-くわ【狂花】(名) かへりばな。くるひざき。

⌒きやう-くわ-すゐ-げつ【鏡花水月】(名) 鏡に映(ウツ)りたる花と水に映じたる月との意。目に見えて手に取るとをえざる物又は感悟すべくして言說すべからざる事にいふ比喩。——はふ【鏡花水月法】(名) 露骨に說明せずして、僅かに其形跡を髣髴たらしむるが如き文體、おもに漢文にいふ。

⌒きやう-くわん【鄕關】(名) ふるさと。くにもと。「男兒立志出—」。

⌒きやう-くわん【鄕貫】(名) くにもとの戶籍、又、くにもと。

⌒ぎやう-けい【行啓】(名) 太皇太后宮・皇太后宮・皇后宮又は東宮のみゆき。

⌒きやう-けん【狂犬】(名) 一種の病毒に罹(カヽ)れる犬、躁狂にしてよく人を咬(カ)み傷つく。

⌒きやう-けん【强牽】(名) こじつけ。

⌒きやう-げん【鄕愿】(名) 鄕里に於て好人物との評判よき小人。

⌒きやう-げん【狂言】(名) ㊀古代のわざをぎの流派、中世、田樂などに附屬して起りしが、今時にては、專ら能樂の間(ヒマ)に行はるゝ一種の滑稽なる戲技。(雜劇、扮戲)。㊁役者の演ずる事柄のすぢみち。歌舞伎のたくみ。㊂常にはづれたる大言。又、理にあはぬ妄說。「—を發して衆を迷はす」。㊃〜いつはりてたくみかまへたる事實。「彼等のなす—」。——かた【狂言方】(名) 芝居にて、狂言に關する事を督し、俳優の出入又は幕の開閉等を指揮する人。——さくしや【狂言作者】(名) ㊀座に附屬して、其芝居の狂言を作る人。㊁〜事實をたくみこしらへたる人。——し【狂言師】(名) ㊀能の狂言をする人。㊁大名方の奧向に出て、歌舞伎の狂言をなし、役者。(俳人、談優)。

⌒きやう-けん-びやう【狂犬病】(名) 狂犬に咬(カ)まれて、其病毒に感染したる一種の病、通常其傷口は一旦治癒し病毒一時潛伏して後發作するもの、患者は液體を嚥下すると能はず、たゞこれを見るのみにても、咽部の痙攣を起すより、一に恐水病ともいふ。

⌒きやう-こう【向後】(副) このゝち。こうらい。以後、

⌒ぎやう-さ【行作】(名) おこなひ。ふるまひ。

⌒きやう-さう【競漕】(名) 「ボートレース」に同じ。

⌒きやう-さう【競爭】(名) ㊀せりあひ。はりあひ。㊁自己の利益を得んがために、互に他をおしのけんとする狀態。㊂政府が工事の請負又は物件の貸借・購入・拂下等に關し、一般に廣告して競爭入札を以てこれを決定すると。——かかく【競爭價格】(名) 競爭入札の價格。——しけん【競爭試驗】(名) 採用若しくは入校を許すべき人員の一定せるにより、多人數の希望者を試驗して高點者より順を追ひて其人員だけを採用し若しくは入校せしむると。——にふさつ【競爭入札】(名) 多人數のものに入札せしめて、購入などには最低價の入札者を、賣渡などには最高價の入札者を落札者とすると。

⌒きやう-さう【强壯】(名) つよくさかんなると。すこやかなると。(强壯)。——ざい【强壯劑】(名) 身體を强壯にするためにのむ藥。

⌒きやう-ざう【經藏】(名) 寺院にて、一切經をおさむる藏。りんざう。きやうだう。

⌒ぎやう-さう【行裝】(名) ㊀かたち。相好。「般若の—」。㊁いでたち。よそほひ。

きやう-ざうり【京草履】(名) はちく竹の皮にてつくりたる草履。

廿きやう-さく【景迹】(名) ㊀こゝろばせ。ぎやうぎやう。又、履歷。㊁履歷によりて推察すると。

廿きやう-さく【警策】(名) 「かうざく」に同じ。

⌒きやう-さつ【驚殺】(名) 非常に驚くと。

⌒ぎやう-さん【仰山】(名、副) ㊀甚だ多きさまにいふ語。㊁甚だ大いなるさまにいふ語。㊂些細なる事をも大ぎやうにものするさまにいふ語。㊃勢よきさまにいふ語。

⌒きやう-さんらう【鄕三老】(名) ゐなかのせわやき。又、ゐなかのものしり。

⌒きやう-し【狂詩】(名) 諧謔の字句を用ひて、諧謔の意味をなす一種の漢詩。

⌒きやう-し【筐笥】(名) はこ。かたみ。

⌒きやう-し【香匙】(名) かうすくひ。さじ。

きやう-し【經師】(名) 經文を卷物又は折本などに表具する職人、轉じて、書畫又は襖子・屛風などを表具する職人。——や【經師屋】(名) ㊀經師を業とする家。又、其人。表具屋。(裝潢工、表裝師)。㊁〜婦人などを手に入れんと狙(ネラ)ひて行く人。

⌒ぎやう-し【行司】(名) 相撲又は鬪雞などに立ち合ひ、其勝負を決定する勤めの人。

⌒ぎやう-じ【行事】(名) ㊀古昔、朝廷の儀式佛事などに、主として其事をとりあつかひし役。㊁昔時、商人又は町內の組合にて、輪番に組合を代表して管理し又は公邊に關係したる事などをとりあつかひし人、幹事、頭取。——くらうど【行事藏人】(名) 古昔、五節帳臺の試みのとき、諸事を處置せし職名。廿——くわん【行事官】(名) 古昔、朝廷の儀式の調度をつくりし役。廿——どころ【行事所】(名) 古昔、藏人所に屬して、諸國の貢物を點定し又は神樂をつかさどりし所。

⌒きやう-しふ【强襲】(名) 敵の防禦の有無に關せず突擊を强行すると。

⌒きやう-しや【香車】(名) 將棋の駒の名、たゞ前の一方へは遠近意のまゝに進み得るもの、なりては金將と同じ進退をなす。きやうす。きやう。やり。

⌒ぎやう-じや【行者】(名) ㊀佛家又は道家などにて、其道を修め行ふ人。「法華經の—」。㊁修驗者の特稱。「羽黑山の—」。(瑜伽者)。——にんにく【行者韮】(名) 【植】百合科に屬する草、花は白色にして花莖の頂端に繖形花序を生じ、葉は楕圓狀又は長楕圓狀の披針形をなす、ねぎに類すれど臭氣なく、葷酒を禁ずる行者も食ふとの故に此名あり。あらゝぎ。(茖葱、山葱)。

⌒ぎやう-じやう【行狀】(名) ㊀おこなひ。みもち。ふるまひ。(品行)。㊁其人の一生の經歷言語等の記錄。「山陽先生之—」。

⌒きやう-じやく【强弱】(名) つよきとよわきと。「兵の—」。

⌒きやう-しゆ【强取】(名) しひてとると。うばふと。

⌒ぎやう-しよ【行書】(名) 漢字の書體の一、楷書の畫を稍や崩(クヅ)したるもの。

⌒きやう-しん【强震】(名) 【地】座(スワ)り惡き器物顚倒し、液體溢出し、振子停止し、古き家屋などの破損を生ずるほどの地震。

⌒きやう-じん【狂人】(名) 氣のくるひたる人。きちがひ。(風癲人)。

⌒きやう-じん【鄕人】(名) 同鄕の人。ふるさとのひと。

⌒きやう-す【香車】(名) 「きやうしや」の訛。

⌒ぎやう-ずゐ【行水】(名) ㊀潔齋のために、淸水にて身體を洗ひ淸むると。㊁湯をもて身體を洗ふと。ゆあみ。(湯浴)。

⌒きやう-せい【匡正】(名) たゞすと。なほすと。

⌒きやう-せい【强勢】(名) いきほひづよきと。

⌒きやう-せい【强制】(名) 威力を用ひ他の自由意思を壓して事を行ふと。おしつけてなすと。——きやうばい【强制競賣】(名) 【法】債權者が强制執行により、債務者の動產・不動產若しくは權利に就き、執達吏の手を經て行ふ競賣。——くわんり【强制管理】(名) 【法】不動產に對する强制執行の一、其不動產の收益により債務者を滿足せしむる方法にして、執行裁判所は、これが管理人を任命し指揮監督をなす、管理人は、不動產を占有し收益を取り立て、其中より租稅其他の費用を控除し、殘額を債權者に配當するものとす。——けういく【强制教育】(名) 國家が公力を以て、學齡兒童を一定の年期間は强制して就學せしむると。——しつかう【强制執行】(名) 【法】民事上の確定判決又は執行名義の趣旨に從ひ、公力を以て義務者を强制し、其特定財產若しくは一部の財產に付き特定せる義務を執行せしむる手續。——ほけん【强制保險】(名) 國家が公力を以て、或職業の人民に疾病・負傷又は老癈等の用意のためになさしむる保險。——よさん【强制豫算】(名) 【法】監督官廳が地方自治體に對し、强制して其豫算を定めこれを執行せしむるもの。——りかう【强制履行】(名) 【法】債務者が債務を

履行せざる場合に、債權者が裁判所に訴訟し、國家の公力によりて履行せしむると。

(ぎやう-せい（ギョー）[行政](名)【法】我國法上にては、天皇が法律若しくは勅令により、國務大臣以下の機關若しくは自治體の機關に委任して行はしめ給ふ諸般の政務、これを分つて内務・外務・財務・農商務・司法・遞信・軍事・教育とす。——かんとく[行政監督](名)【法】行政上の施設の過誤(アヤマリ)を未發に防遏し又は既發のものはこれを匡正すると。——きくわん[行政機關](名)【法】行政事務をつかさどらしむる機關、即ち、國務大臣・自治體等の如きこれなり。——くくわく[行政區劃](名)【法】或行政機關が其權限を及ぼすべき範圍として定められたる土地の區劃、即ち府・縣・郡・市・町・村の如きこれなり。——くわん[行政官](名)行政事務にあづかる官吏。——くわんちやう（チョー）[行政官廳](名)行政事務をとりあつかふ官廳。——けいさつ[行政警察](名)【法】各部の行政に關連附隨して、危害を防遏し其目的を遂せしむるための警察、例へば、衞生・營業・建築等に關する警察の如し。——けん[行政權](名)【法】行政と稱する統治權の作用。——さいばん[行政裁判](名)㊀【法】行政上の權利を保護し又は行政上の法規の適用を強制するために、行政訴訟に對して行政裁判所がなす裁判。㊁行政訴訟の俗稱。——さいばんしよ[行政裁判所](名)行政訴訟を審判する合議制の機關、長官一人評定官十一人を置く、其裁判は、裁判長及評定官合せて五人以上の合議に成るものとす。——さいばんしよちやうくわん（チョーカン）[行政裁判所長官](名)行政裁判所の事務を總理する勅任官、他の評定官と同じく行政裁判所を構成する一員とす。——じむ[行政事務](名)行政上に關する事務。——しよぶん[行政處分](名)【法】行政機關が行政上の法規を執行するため、若しくは法規存せざる場合には、法律命令の範圍内にて、行政の目的を達するため、特定の人に對し特定の事項を強制する行爲。——そしよう[行政訴訟](名)【法】行政機關の違法なる處分により、權利を毀損せられたりとなすものが、行政處分の取消又は變更を請求する訴訟。——ちやう（チョー）[行政廳](名)行政官廳に同じ。——はふ（ホー）[行政法](名)【法】行政機關の組織並に其權力・權利の享有・行使に關する法規の全體。——めいれい[行政命令](名)【法】行政機關が私人に對して發する規則の全體の稱、閣令・省令・廳府縣令・郡の警察規則、市町村條例及規則等これなり。

(ぎやう-せき（ギョー）[行跡](名)ぎやうぎやう。みもち。(品行)。

(きやう-ぜん（キョー）[饗膳](名)ちそうのぜん。ちそうの酒肴。

(きやう-そう（キョー）[競走](名)はしりくらべ。かけっこ。

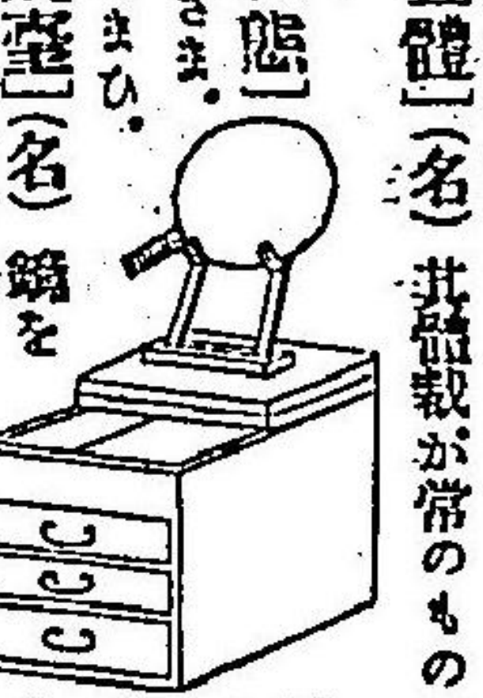
きやう-ぞめ（キョー）[京染](名)京都にて染むる染物。

(きやう-そん（キョー）[鄕村](名)さとむら。

(きやう-たい（キョー）[狂體](名)其體裁が常のものにたがふと。「—の文」。

(きやう-たい（キョー）[狂態](名)くるへるありさま。常にはづれたるふるまひ。

(きやう-だい（キョー）[鏡臺](名)鏡を立てゝおく臺、主に箱の造りにして、櫛道具を入るゝにもかね用ふるもの。かゞみかけ。かゞみたて。かゞみだい。(鏡架、粧飾臺)。「の對。


[きやうだい]

(きやう-だい（キョー）[經題](名)經文の名稱。品題(ホンダイ)。

(きやう-だい（キョー）[兄弟](名)㊀あにとおとうと。けいてい。㊁はらから。同胞。(骨肉、連枝)。

(きやう-たう（キョートー）[鄕黨](名)むらのなかま。又、むら。

(きやう-だう（キョードー）[嚮導](名)道しるべ。あんない。(先導)。

(きやう-だう（キョードー）[經堂](名)經文を納むる堂。

(ぎやう-だう（ギョードー）[行道](名)㊀法師の經をよみつゝ行くと。㊁列をなし左右に分れて佛又は堂をめぐる儀式。

きやう-だて（キョー）[經立](名)食物を折敷などにもりて出すとき、其へりに立つる紙。又、其紙の折形。

(きやう-たん（キョー）[驚歎](名)すぐれたると又は奇妙なるとに驚き感心すると。

(きやう-だん（キョー）[鄕談](名)くにもとのはなし。

(きやう-だん（キョー）[杏壇](名)(莊子に、孔子杏壇に立ちて琴を彈じ、弟子其前に讀書すといふ記事あるに出づ)學問を教へ授くる所。がくもんじよ。

(きやう-ち（キョー）[京地](名)みやこ。又、かみがた。

(きやう-ち（キョー）[鄕地](名)ふるさと。くにもと。

(きやう-ち（キョー）[狂痴](名)㊀きちがひとばかと。㊁極めておろかなると。心氣あら／＼しく事理に暗きと。

(ぎやう-ちや（ギョー）[行茶](名)佛事の儀式にて、茶をくばると。

(きやう-ぢゆう（キョー）[輕重](名)けいぢゆう。

(ぎやう-ぢゆう-ざぐわ（ギョー）[行住坐臥](名)㊀行くと止まると、すわると臥すと、即ち、ぎやうぎふるまひ。佛家にてこれを四威儀といふ。(威儀)。㊁つね／＼。ふだん。「—にこれを思ふ」。

きやう-づか（キョー）[經塚](名)佛經を永く後に傳ふるため、經筒に入れ、これを埋めたる處に立つる塚。

きやう-づくゑ（キョー）[經机](名)佛前にてどきやうのとき、經文をのせ置く案。

きやう-づつ（キョー）[經筒](名)經塚に埋むる佛經を入るゝ金屬又は燒物の筒。

(きやう-てい（キョー）[筐底](名)はこのそこ。はこのなか。

(きやう-てき（キョー）[強敵](名)がうてき。

(きやう-てん（キョー）[經典](名)きやうもん。きやう。

(きやう-てん（キョー）[鄕天](名)こきやうのそら。

(きやう-てん（キョー）[狂顚](名)きちがひ。

(ぎやう-てん（ギョー）[仰天](名)いたく驚くと。びっくり。

(ぎやう-でん（ギョー）[宜陽殿](名)古昔、禁中紫宸殿の東南にありし御殿の名、中に、陣座(ヂンザ)とて政を職せし所ありて、其所には大臣宿、公卿座などあり。又、樂器・書籍などををさめおく所もありたり。

(きやうてん-どうち（キョー）[驚天動地](名)㊀天をおどろかし地をうごかす。㊁大いに世人をおどろかすとにいふ語。「—の事業」。

(きやう-と（キョー）[京都](名)宮城のある都會。

(きやう-ど（キョー）[狂奴](名)常人とはいとたがひたる行爲ある人の賤稱。「—の故態」。

(きやう-ど（キョー）[強弩](名)つよきおほゆみ。

(きやう-ど（キョー）[鄕土](名)其人の生れ長ぜし土地。ふるさと。こきやう。——ちり[鄕土地理](名)兒童の就學せる學校のある地方の地理。

(ぎやう-とく（ギョー）[行德](名)【佛】佛法修行の德。

(きやうと-ござん（キョー）[京都五山](名)京都にある五つの禪宗の寺院、即ち、天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺をいふ。

きやう-な（キョー）[京菜](名)【植】「みづな」に同じ。

(きやう-にん（キョー）[杏仁](名)アンズの仁、藥用に供せらる。

(ぎやう-にん（ギョー）[行人](名)ぎやうじや。——べん（ギョー）[行人偏](名)漢字の偏の名、行・後などの左方にある彳の字。(雙方人旁)。

(きやう-ねん（キョー）[享年](名)生きてありし間の年齡。ねんれい。よはひ。

(ぎやう-ねん（ギョー）[行年](名)前條に同じ。「大石主稅—十六歲」。

(きやう-はい（キョー）[狂悖](名)きちがひじみたると。又、いたく道にはづれたる行爲あると。

(きやう-ばい（キョー）[競賣](名)多人數の買手の中にて、最も高價のものに賣ると。せりうり。

(きやう-ばい（キョー）[競買](名)多人數の買手が、己が手に入れんと爭ひて高價にて買ふと。せりがひ。

(きやう-はう（キョーホー）[襁褓](名)むつき。おしめ。

(きやう-ばう（キョーボー）[狂暴](名)くるひあるゝと。又、常道常規にはづれたる亂暴。

(きやう-ばう（キョーボー）[強暴](名)㊀つよくしてあら／＼しきと。あれておしとゞめ難きと。㊁強迫又は暴行を加ふると。

(ぎやう-ばう（ギョーボー）[仰望](名)仰ぎのぞむと。心をよせしたふと。「風采を—す」。

(きやうはう-がく（キョーホー）[享保學](名)享保年間に行はれし漢學の稱、當時、江戸には林大學頭を始めとし、室鳩巢・荻生徂徠・菅野兼山等あり、京都には伊藤東涯・淺見絅齋・大阪には三宅石庵・五井持軒・筑前には貝原益軒・對馬には雨森芳洲等ありて、漢學大に天下に起りたり。

(きやうはう-きん（キョーホー）[享保金](名)德川吉宗の代、殊に享保年間に鑄造せられし大判金・小判金などの稱、金位は慶長金に同じ。

(きやうはう-ぎん（キョーホー）[享保銀](名)享保金と同時代に鑄造せられし丁銀(チャウギン)などの稱。

(きやう-はく（キョー）[強迫](名)㊀おしつくると。おしせまると。㊁不法なる手段を以て、他人の自由意志の決定を妨ぐると。威嚇を加へて己が意に從はしめんとすると。——けういく（キョーイク）[強迫教育](名)「きやうせいけういく」に同じ。

(ぎやう-はふ（ギョーホー）[行法](名)天台宗又は眞言宗にて、密教の行をなす法。「護摩の—」。

(きやう-ふ（キョー）[驚怖](名)おどろきおそるゝと。びっくりしておぢけちゞむと。

(きやう-ふう（キョー）[驚風](名)小兒の腦膜炎。

(きやう-ふう（キョー）[強風](名)樹木の大枝を動かすほどの風。つよきかぜ。

(きやう-ふう（キョー）[狂風](名)極めてあらき風。

卄ぎやうぶ-しやう（ギョーブショー）[刑部省](名)古昔の八省の一、刑罰及訴訟に關する一切の事を掌りしところ、今の司法省と大審院とを合せたるが如し。

(きやう-ぶん（キョー）[狂文](名)おどけの文。滑稽文。

うったへたゞすつかさ。

(きやう-ほん（キョー）[狂奔](名)㊀せきにせきてかけつくると。のぼせあげて奔走すると。㊁馬などの勢つよくそれ走ると。

(きやう-ほん（キョー）[競奔](名)先をあらそひてはしると。

きやう-ま（キョー）[京間](名)尺度の名目、曲尺六尺三寸或は六尺五寸の長さにして、もと京都にて座敷を造るにこの長さをもて度としたりしに起る。あひのま(六尺)又はゐなかま(五尺八寸)の對。

(きやう-む（キョー）[鄕夢](名)他鄕にて故鄕の物事を夢みると。

(きやう-めん（キョー）[鏡面](名)かゞみの表面即ち反射する方。

(きやう-もん)[經文](名) ㊀佛教の聖典として佛徒の遵奉する文書。㊁すべて宗教の聖典として其信徒の遵奉する文書の稱。

(きやう-もん)[狂紋](名) いろ〳〵の紋樣をまじへたること。又、其織物。「―の狩衣」。

きやう-やき[京燒](名) 京都より出す陶器又は磁器の總稱にして、特に粟田燒・淸水燒をいふ。

(きやう-よう)[饗應](名) 「きやうおう」(饗應)の訛。「―し、ものくはせ」。

きやう-よみ[經讀](名) ㊀きやうを讀むこと。㊁きやうを讀む法師。又、法師の異稱。――どり[經讀鳥](名)【動】「うぐひす」の異稱。

(きやう-らく)[競落](名) 競賣・競買又は請負等の入札にて、其物事が手に落つること。せりおち。

(きやう-らん)[狂亂](名) ㊀精神又は擧動の常態を失ふこと。くるひみだるゝこと。㊁きちがひ。きやうき。㊂小唄の名。「―を舞ふ」。

(きやう-らん)[狂瀾](名) たちくるへる波瀾。たちさわぐなみ。(怒瀾)。

(きやう-り)[筐裡](名) はこのなか。

(きやう-り)[鄕里](名) ふるさと。故鄕。

(きやう-り)[鏡裏](名) 物像の映(ウツ)りたる鏡の表面。「―白髮新」。

(きやう-りやう)[强梁](名) てづよくして手に合はぬこと。

(きやう-りん)[杏林](名) (神仙傳に、董奉といふもの、病者に施療して報酬を受けず、癒えし重病者は五株の杏を輕病者は一株の杏を紀念に植ゑさせしに、數年の後、林をなしたりといふ故事に出づ)醫者仲間の稱。

(きやう-れう)[經料](名) 讀經の報酬として僧侶に與ふる金錢。

(きやう-れつ)[行列](名) ㊀列をなして行くこと。又、其列。「提燈―」。㊁儀衞を備へ供人を從へて行くこと。又、其一群。ろぼ。「供奉の―」。(儀仗、鹵簿)。――さんぢゆう[行列三重](名) 芝居の囃(ハヤシ)のさんぢゆうの一種、行列などにてねりゆく時に用ふるもの。

(きやう-ろん)[經論](名) 佛教の經典。又、其中の大日經・法華經の類と俱舍論・淨土論の類と。

(きやう-わく)[誑惑](名) だましあざむくこと。たぶらかしまどはすこと。

(きやう-わく)[狂惑](名) 心のみだれまどふこと。道理にたがひまどふこと。

きやう-わらべ[京童](名) みやこのこども。

(きやう-ゐ)[行爲](名) おこなひ。かうゐ。

(きやう-ゐき)[境域](名) さかひ。かぎり。

[きや-きや](名、副) 疼痛のさしこみ來るさまにいふ語。きやり。「―痛む」。

(きや-く)[鬼藥](名)【植】「ききやう」(鬼臼)の一名。

(きや-く)[旣約](名)【數】分數又は分數式の兩項に公約數なく、更に簡單なる形となす能はざること。

(きや-く)[規約](名) 規則に定めたる約定。さだめ。

(きや-く)[格](名) 「かく」に同じ。

(きやく)[客](名) ㊀おとづれて來りたる人。招き呼びたる人。まらうど。㊁外來の者。又、寄寓せる人。㊂たび。たびびと。行旅。㊃ひと。人士。「劍―」「仙―」。㊄主の對。「敢て主となり―とならず」。㊅物を買ひ又は注文する人。貨を出して物を借る人又は料を拂ひて物に乘る人。代價又は報酬を拂ひて其物品又は其勞力を需要する人。(花主、得意、客人、顧客)。

(きやく)[脚](名) あし。「前―」「山―」。

――きやく[脚](接尾) 足のある道具を數ふるにいふ語。「二―の机」。

(きやく)[瘧](名) おこり。わらはやみ。

(きやく)[逆](名) ㊀さかしま。うらはら。反對。「―に取る」。㊁正しからざること。道理に違ふこと。㊂君父に叛(ソム)くこと。㊃ぎやくぎやう。のぼせ。㊄ぎやくて。(逆手)。㊅【數】一の定理の假定と終結とを轉倒して得たる定理、もとの定理は眞なれど、逆は必ずしも眞ならず。

(きやく-い)[逆意](名) むほんのこゝろ。そむく心。

(きやく-えん)[逆緣](名) 親の子より後れ、老者の幼者より後れてながらふること。

(きやく-か)[却下](名) 願書などを取り上げずしてさぐること。

(きやく-か)[脚下](名) あしもと。

(きやく-が)[客我](名) 「かくが」に同じ。

(きやく-かう)[逆行](名) ㊀物事の順序を顚倒して行ふこと。㊁さかさに進みゆくこと。「洪水―」。㊂【天】遊星の運行が、時により西より東に向はずして、東より西に向ふが如く見ゆること、地球の公轉のために起るものにして、下遊星にては下合のときに起り、上遊星にては衝のときに起る。

(きやく-き)[客氣](名) 「かくき」に同じ。

(きやく-きやう)[逆境](名) 意の如くならざる境遇。苦痛多き境涯。

(きやく-ぐう)[虐遇](名) むごきとりあつかひ。

(きやく-くわん)[客觀＝Object](名) 「かくくわん」に同じ。――てき[客觀的](名) 「かくくわんてき」に同じ。

(きやく-ご)[客語](名) 「かくご」に同じ。

(きやく-ざ)[客座](名) まらうどの座席。

きやく-ざしき[客坐敷](名) 客をとほす坐敷。

(きやく-さつ)[虐殺](名) むごたらしきころしやう、非道なる殺害。

(きやく-ざん)[逆產](名) 子の出產するに、頭部より出でずして他の部分より出づること。さかご。さかさん。

(きやく-し)[客思](名) 「かくし」に同じ。

(きやく-し)[虐使](名) ひどうにつかふこと。

(きやく-しき)[格式](名) 「かくしき」に同じ。

(きやく-しつ)[脚疾](名) 脚氣。(脚疾)。

(きやく-しふ)[逆襲](名) 防禦者若しくは敗走者の地位にありしものが、態度を變じ攻擊者に向つて進擊すること。さかよせ。

(きやく-しや)[客車](名) 「かくしや」に同じ。

(きやく-しや)[客舍](名) 「かくしや」に同じ。

(きやく-しやう)[客情](名) 「かくぢやう」に同じ。

(きやく-じやう)[逆上](名) 神氣常にたがひて上へのみたかぶりすゝむこと。のぼせ。かみつり。

(きやく-しゆ)[逆修](名) ㊀死なざる前に逆(アラカジ)め、自身のために佛事を修め冥福をいのること。㊁若きもの先に死にて、老いたるもの其冥福を修すること。「―の因果」。㊂大小喪服の亡者のために、其冥福を修むること、其功德の多くは修むる者の身にむくひ來るといふよりいふ。

(きやく-しゆ)[逆取](名) 無理なるかたによりて手に入るゝこと。道にたがひたる所行によりて取りたること。「―して順守す」。

(きやく-しよく)[脚色](名) 脚本のしくみ。

(きやく-しん)[隔心](名) へだて心。隔意。

(きやく-しん)[客心](名) 「かくしん」に同じ。

(きやく-じん)[客人](名) きやく。まらうど。

(きやく-しん)[逆心](名) 謀叛のこゝろ。そむくこゝろ。(逆意)。

(きやく-しん)[逆臣](名) 君にそむく人。君を弑したる人。むほん人。(反臣)。

(きやく-せい)[客星](名) 「かくせい」に同じ。

(きやく-せつ)[逆說＝Paradox](名) ㊀主義又は意見の反對なる議論。いろん。㊁衆論に反對するが如き觀あれど、仔細に其理路を尋ぬれば、究竟は衆論と一致せる說。

(きやく-せんぷう)[逆旋風](名) 地表の一點に高氣壓生ずるとき、此部より四方に向ひ、螺旋狀に旋動して吹く風。

(きやく-ソウ)[客僧](名) 旅の僧。たびソウ。

(きやく-ぞく)[逆賊](名) 反逆せる賊徒。(反賊)。

(きやく-たい)[却退](名) あとへひくこと。又、あとへひかすること。

(きやく-たい)[客體](名) 「かくたい」に同じ。

(きやく-たい)[虐待](名) むごきあひしらひ。非道なるとりあつかひ。

(きやく-たう)[脚湯](名) 逆上を防ぎ又は發汗を催さするために、兩脚を湯に浸しあたゝむること。

きやく-て[逆手](名) ㊀柔術にて、敵の手を逆に受けて防ぐ手。㊁相撲にて用ふる柔術の手。

(きやく-でん)[客殿](名) 賓客に對面する所と定められたる殿舍。賓客をとほす書院。おもてごてん。

(きやく-ど)[客土](名) 「かくど」に同じ。

(きやく-と)[逆徒](名) 惡逆を行ふ者ども。げきと。

(きやく-と)[逆睹](名) まへかたより其物事の如何を推知すること。

きやく-どめ[客止](名) 興行場大入りにて、客をいるゝ場所なくこれを謝絶すること。

(きやく-はんおう)[逆反應](名)【化】一の反應ありたる後、周圍の狀況を異ならしむるとき、再び初めの狀態に復歸すること。

(きやく-ひれい)[逆比例](名)【數】反比例に同じ。

(きやく-ふう)[逆風](名) むかひかぜ。

きやく-ぶん[客分](名) 客としとりあつかふこと。又、其人。「―にて入れたる嫁」。

(きやく-ぶんすう)[旣約分數](名)【數】分子及分母が、互に素數なる分數。

(きやく-ほん)[脚本](名) 狂言のしくみ又は舞臺の模樣、役者のせりふ等を逐一記載せる冊子。

きやく-ま[客間](名) 客をとほす室。きやくざしき。

きやく-まち[客待](名) ㊀車夫などが、客の乘車を待ちてあること。㊁車夫の客を待ち居る小屋。

(きやく-みやう)[逆名](名) 生前につけおく死後の戒名。

(きやく-らい)[客來](名) 客の來ること。客の來りてあること。「―て失敬」。

(きやく-りう)[逆流](名) さかさに流るゝこと。又、さかさに流るゝ水。

(きやく-る)[逆流](名)【佛】生死の流に逆(サカ)ひ六塵に染まず聖道に入ること。

[きや-しや][花車](名) (華奢の訛) よわ〳〵しくてすがたよきこと。體のほそくしなやかなること。

きや-す[消](他、さ四) 消えしむ。

きや-すめ[氣休](名) 暫時心を安め慰むること。――もんく[氣休文句](名) きやすめのためにいふ實際ならぬ文句。

きや-たつ[脚榻](名) 高處へ手を屆かせんとするときなどにのるふみ臺、四脚にして多くは木をもて

製したるもの。ふみだい。（脚踏）。

きやつ［渠］（代）あいつ、かやつ。

〔**きやっ**（名）いたく驚きたる時などに出す聲。「―と叫ぶ」。――**きやっ**（名、副）女子などが驚きて聲を立てさわぐさまにいふ語、きやきや。

きや-はん［脚半］（名）脛(ス子)に纏(マト)ひつくる衣。はゞき。（脚絆、脛衣）。

きや-ふ［脚布］（名）婦人の腰卷。（湯褌）。

キャベージ［Cabbage］（名）【植】十字花科に屬する栽培植物、葉は紫綠色にして牡丹の花の如し、花はあぶらなの花より大形にして淡紫色なり、葉は食用に供せらる。（華牡丹、甘藍）。

〔**キャベツ**（名）【植】「キャベージ」の訛」――**まき**（名）一種の料理、「キャベージ」葉の瓣に肉をつゝみて、蒸煮にしたるもの。

ギヤマン（名）（「オランダ」語 Diamant の訛）㊀金剛石。㊁「ガラス」の異稱。――**せき**（名）金剛石。

き-やみ［氣病］（名）思ひ屈したるあまりに起る病氣。

キャラ［伽羅］（名）（梵語 Kala-aguru の略、黑と譯す）一種の香料、にほひ強く、香合には、六國香の一として、香料の中殊に貴ぶもの、沈香の屬の心を採りて製すといふ。（奇楠香、加藍香）。――**の-あぶら**［伽羅油］（名）髻を結(ユ)ふに用ふるねり油。＋――**の-おんかた**［伽羅御方］（名）古昔、本妻の異稱。――**ぶき**［伽羅蕗］（名）一種の食品、ふきの莖を醬油にて黑くなるまで煮つめたるもの。――**ぶし**［伽羅節］（名）麗(ハウル)しき歌の節、「匂ひある聲や、―諷ひ初め」。――**ぼく**［伽羅木］（名）庭などに植うる小さき水松の稱。（土欒木）。――**まくら**［伽羅枕］（名）引出ありて其中にて香をたくべき枕。

キャラコ［Calico］（名）金巾(カナキン)に似て、手あたり好く緻地細かに、光澤多き布。

き-やり［木遣］（名）㊀多人數にて重き材木などを音頭(オンド)を取り掛聲をなして送り遣ること。㊁「きやりうた」の略言。――**うた**［木遣歌］（名）きやりのとき、勞を助け力を添ふるために唱ふる一種の俗歌。きやり。（勸力歌）。

〔**きやり**（名、副）きやきや。「胸が―する」。

〔**きやん**（名）犬の驚きたる時などに鳴く聲。「犬が―と鳴く」。

〔**きやん**［俠］（名）きはひ肌に過ぎたること。

き-やんま［黃蜻蛉］（名）【動】きやうりやうとんぼ。

（**き-ゆ**［覬覦］（名）分外の物事を得んと覬(ウカ)ひ狙(ネラ)ふこと。「帝位を―す」。

き-ゆ（きえ、きゆ、きゆる、きゆれ、きえよ）［消］（自、や下二）㊀其形跡失(ウ)せて見えずなる。㊁火の氣盡く、火なくなる。㊂解く。「雪―」。㊃散る。「痕―」。㊄はろぶ。つく。「小人道―」。㊅死ぬ。

（**きゆう**［宮］（名）㊀みや。又、いへ。㊁五音の一、口を合はせて發するものにて、これを中聲と稱し五音の主とせり。㊂天球の區分、星宿。「十二―」。

（**きゆう**［弓］（名）㊀ゆみ。「―馬の道」。㊁支那の古昔、弓術にては六尺の稱にいひ、又、地積にては八尺の稱にいふ。「地一―」。

〔**きゆう**［窮］（名）㊀くるしみ。なやみ。びんばふ。㊁くるしむもの。びんばふ人。「―を救ふ」。

〔**きゆう**（名）物を捻(ネ)づるさまにいふ語。「―と廻はる」。

（**きゆう**［毅勇］（名）㊀忠義と勇氣と。又、忠義に厚く勇氣多きこと。㊁國家社會のためにすゝみて事をなすこと、君國のために一身を犠牲となすこと。――**かんたい**［毅勇艦隊］（名）平時には海運を業とし、戰時には軍艦に艤裝して、國家の戰闘に參加する商船の團體。

（**きゆう-かう**［躬行］（名）我身に行ふこと。行狀にあらはすこと。「實踐―」。

（**きゆう-かう**［躬耕］（名）自分で耕作すること。

（**きゆう-かう**［穹窖］（名）弓形のあなぐら。

（**きゆう-き**［窮鬼］（名）びんばふがみ。

（**きゆう-きやう**［窮境］（名）くるしき境遇。

（**きゆう-きよく**［窮極］（名）㊀つめ。はて。どんづまり。㊁きはめつくすこと。おしつむること。

（**きゆう-けい**［弓形］（名）ゆみなり。ゆみがた。「アーチ」。

（**きゆう-く**［窮苦］（名）くるしみ。なやみ。「事を成すは―の日にあり」。

（**きゆう-くつ**［窮屈］（名）㊀自由ならざること。ゆるやかならざること。㊁氣づまり。きがね。

（**きゆう-けつ**［宮闕］（名）宮門。又、禁中。

（**きゆう-こう**［窮寇］（名）追ひつめられたる敵兵。

（**きゆう-さう**［穹蒼］（名）おほぞら。そら。

（**きゆう-さく**［窮策］（名）くるしきあまりの策略。

（**きゆう-しつ**［宮室］（名）㊀きゆうでん。ごてん。㊁すまひ。いへ。（おもに漢文に用ふ）。

（**きゆう-しやう**［宮相］（名）宮内大臣の異稱。

（**きゆう-じやう**［窮狀］（名）くるしむありさま。びんばふのやうす。「―見るに忍びず」。

（**きゆう-じやう**［宮城］（名）帝王の居城。おみや。皇居。

（**きゆう-じゆつ**［弓術］（名）弓をいる技術。射術。

（**きゆう-じん**［宮人］（名）宮中に仕ふる女。宮女。

きゆう-す（きゆうせ、きゆうし、きゆうす、きゆうする、きゆうすれ、きゆうせよ）［窮］（自、さ變）㊀きはまる。せまる。つまる。㊁くるしむ。なやむ。㊂つくる。をはる。「永世きゆうせず」。㊃びんばふにてあり。

（**きゆう-せん**［弓箭］（名）㊀弓と箭と。㊁兵甲。「―を以て授受せん」。

（**きゆう-そ**［窮鼠］（名）おひつめられたる鼠、困りきれる鼠。――**ねこをかむ**［窮鼠嚙猫］（追ひつめられたる鼠は猫にくひつく意）おひつめられて逃路なきより一大決心をなせば、弱者も強者にうつてかゝつてこれを破ることあるにいふ。

（**きゆう-だう**［弓道］（名）きゆうじゆつ。

（**きゆう-たつ**［窮達］（名）零落と出世と。びんばふとふうきと。「―は命なり」。

（**きゆう-ちゆう**［宮中］（名）㊀禁中。禁裏。㊁神宮の境内。――**こもんくわん**［宮中顧問官］（名）帝室の典範儀式に係る事件の御諮詢に奉答する勅任官、國家に勳勞ありし者これに任ぜらる。――**も**［宮中喪］（名）宮中のみに限りて行はせらるゝ喪(モ)。

（**きゆう-ぢよ**［宮女］（名）みやづかへの女、女官。

（**きゆう-つう**［窮通］（名）「きうたつ」に同じ。

（**きゆう-てい**［宮廷］（名）きんちゆう。きんり。

（**きゆう-てう**［窮鳥］（名）追ひつめられたるとり。轉じて、おひつめられたる人。「―懷に入る」。

（**きゆう-でん**［宮殿］（名）皇居の御殿。みや。との。

（**きゆう-とう**［窮冬］（名）冬のをはり。

（**きゆう-ば**［弓馬］（名）弓と馬と。又、弓を射る術と馬に乘る術と。

（**きゆう-はく**［窮迫］（名）㊀經濟又は生活の困難なること。くるしみなやむこと。㊁逃路なきまでに敵をおひつむること、おひせまること。

（**きゆう-へい**［毅勇兵］（名）國家の強制によらず、人民自ら進んで組織したる軍隊。

（**きゆう-ほう-こう**［毅勇奉公］（名）君國のために一身を犠牲となして力をつくすこと。

（**きゆう-みん**［窮民］（名）びんばふにん。貧民。

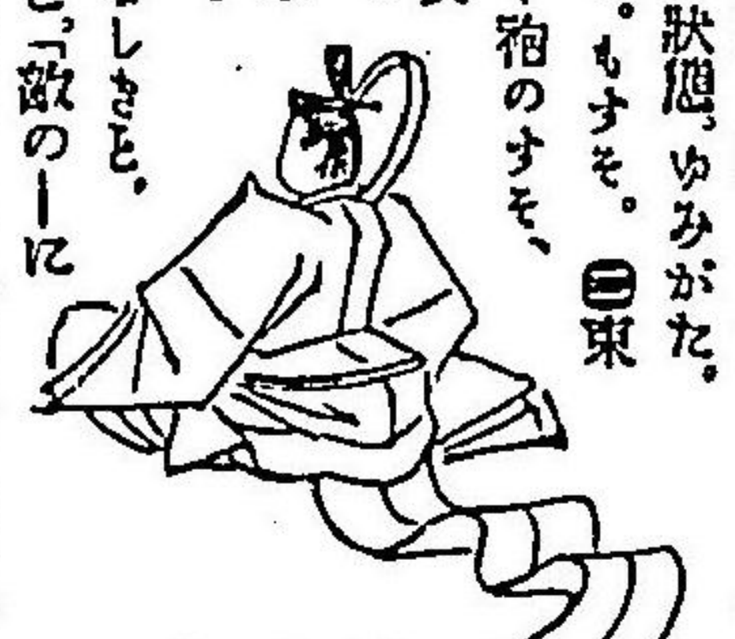
（**きゆう-めい**［窮命］（名）苦しき目にあふこと。

（**きゆう-もん**［宮門］（名）宮城の門。みやのもん。

（**きゆう-やく**［窮厄］（名）危難にあひくるしむこと、さいなん。

（**きゆう-りゆう**［穹窿］（名）㊀晴れたる天空の狀態。㊁「きゆうりゆうけい」の略言。――**けい**［穹窿形］（名）天空の如く中央高くして側邊の弧狀をなし垂下する狀態、ゆみがた。

（**きよ**［裾］（名）㊀すそ。もすそ。㊁束帶の時に長く地に曳く袍のすそ、官位に由りて長短を異にし、貴きものは長く、低きものは短し。きぬの志り。ころものすそ。


［きよ（二）］

（**きよ**［虛］（名）㊀むなしきこと。から。㊁そなへなきこと。「敵の―に乘ず」。㊂私慾なきこと。「恆に―なれば足り易し」。㊃力乏しきこと。衰へたること。「國以て―なり」。㊄根も葉も無きこと。そらごと。うそ。いつはり。「―を語る」。㊅そら、こくう、太空。㊆あな、すきま。孔竅。

（**きよ**［居］（名）すみか。すまひ。「―を轉ず」。

（**きよ**［擧］（名）おこなひ。ふるまひ。しわざ。「稀世の―」。

（**きよ**［渠］（名）みぞ。「―成つて水通ず」。

（**きよ**［凶］（名）よからざること。きよう。吉の對。

（**ぎよ**［御］（名）㊀馬に乘ること、馬をあつかふこと。㊁馬をあつかふもの。べつたう、ぎよしや。㊂君王のめしたまふ衣服・飲食又は車馬。㊃お側にはんべるもの、おそば、こしよう。㊄お寢殿にて幸せらるゝもの、妃嬪など。

（**ぎよ**［魚］（名）うを。いを。「―類」。「―鳥」。

（**ぎよ**［敔］（名）支那古代の樂器、形は伏せる虎の如くにして、背上にぎざ〳〵あり、一尺許の割竹にて、搔(ス)り鳴らすもの。

（**ぎよ-―**［御］（接頭）尊敬の意を表するために物事に冠する語。「―璽」。

（**ぎよ-い**［御衣］（名）陛下又は殿下の衣服。

（**ぎよ-い**［御意］（名）㊀おかんがへ。おぼしめし。㊁いひつけ。命令。

（**ぎよ-いう**［魚油］（名）魚類の脂肪より採りたる油。

（**きよ-いん**［醵飲］（名）多人數互に費用を出しあひて酒を飲むこと。

（**きよ-いん**［虛引］（名）漢文にて、題目の物事に論及するに先だち、それとはなしに後に照應するやうの論議をなし置くこと。

（**きよう**［興］（名）㊀おもしろみ。たのしみ。「一座の―」、「―醒む」。㊁支那古代の詩の六義の一、自家の感ずる所を他の物にくらべかたどりてのぶること。

（**きよう**［凶］（名）㊀運命のよからざること。えんぎのわるきこと。吉の對。㊁わざはひ。さいなん。㊂ききん。ふさく。㊃よこしま。又、わるもの。「―を除く」。（兇）。

（**きよう**［拱］（名）㊀兩手にて合せ持ち又は抱へ持つほどの太さ。㊁「アーチ」（一）に同じ。

（**き-よう**［器用］（名）㊀役に立つ材能あること。㊁技藝に巧者なること。

（**ぎよ-う**［御宇］（名）天皇の御國を治めたまふ間。みよ。「土御門天皇の―かとよ」。（治世）。

（**きよう-あく**［凶惡］（名）極めてあしきこと。又、其人。

（**きよう-い**［凶衣］（名）忌中に着くる衣服。もふく。

（**きよう-いう**［共有］（名）㊀一の物を二人以上共

同して持つこと。㊁〔法〕一の所有權が二人以上に屬すること、其處分は共有する者全體の同意あるにあらざればなし得ざるものとす、されど持分あるときは、其持分だけの處分・使用をなし、且其分割を請求することを得るものとす。——ざいさん〔共有財產〕(名) 二人以上の共有に屬する財產。——ぶつ〔共有物〕(名) 共有に屬するもの。

(きよう-いん〔跫音〕(名) 「きようおん」に同じ。

(きよう-いん〔凶音〕(名) 死去のしらせ。

(きよう-えき〔共益〕(名) 共同の利益。——ひよう〔共益費用〕(名) 〔法〕共同に利益となる場合に要する出費。

(きよう-えつ〔恐悅〕(名) かしこみよろこぶこと。「—至極」。

(きよう-おく〔胸臆〕(名) ㊀むね。胸部。㊁こゝろ。心中。㊂おぼえ。記憶。——を おこなふ〔行胸臆〕 思ひ通りに勝手なる事をなす。

(きよう-おん〔跫音〕(名) あしおと。「空谷の—」。

(きよう-かう（ウーコ）〔胸腔〕(名) 胸部の體腔。

(きよう-かう（ウーコ）〔兇行〕(名) てあらき惡事。不正なる亂暴。

(きよう-かく〔胸膈〕(名) むね。胸部。

(きよう-かく〔恐嚇〕(名) おどかすこと。おどかし。

(きよう-かつ〔恐喝〕(名) 無根の事を以て、他人を恐れしむること。おどかしおどすこと。——しゆざい〔恐喝取財〕(名) 〔法〕他人を恐喝して財物又は證書類をかたりとること。

(きよう-かふ-るゐ（ウーコ）〔胸甲類〕(名) 〔動〕甲殼類の一、頭部と胸部と相合して頭胸部をなし概ね甲を被る、複眼に柄ありて能く自由に動き、步脚は數對ありて其第一對は往々螯(ハサミ)に變ず、かに等これに屬す。

きよう-が・る（ら・り・る・る・れ・れ）〔興〕(自、ら四) 面白がる。愉快に感ず。

(きよう-かん〔兇悍〕(名) 性根ねぢけて氣質あら〱しきこと。

(きよう-かん〔兇漢〕(名) ㊀わるもの。しれもの。㊁他人の身體に危害を加へたるわるもの。

(きよう-き〔兇器〕(名) 人を殺傷する用に供したる器具、又、人を殺傷する用に供せらるゝ器具。「戎器又は—」。

(きよう-き〔凶器〕(名) 不吉なる事に使用するもの。

(きよう-ぎ〔共議〕(名) 共に相談すること。

(きよう-ぎ〔凝議〕(名) いろ〱と相談を重ぬること。

(きよう-きふ（ウーキ）〔供給〕(名) ㊀そなへたすこと、めぐみあたふること。㊁要求に應じて物を提出すること、㊂〔經〕販賣又は交換の用に充(ア)てんため、市場に提出せらるゝ貨物の分量。——けいやく〔供給契約〕(名) 〔法〕物若しくは權利を供給する目的を以て成りたる契約。

(きよう-きよう〔兢兢〕(名、副) おそれをのゝくさまにいふ語。「戰々—」。

(きよう-きよう〔恟恟〕(名、副) 心騷ぎたつさまにいふ語。おど〱。「人心—」。

(きよう-く〔恐懼〕(名) ㊀おそれいること。おそれをのゝくこと。おそれかしこむこと。㊁書狀などの末に記す敬語。「—再拜」。

(きよう-くわう（ヲウーク）〔恐惶〕(名) ㊀畏れつゝしむこと。おそれいること。㊁書狀の末に記する敬語。「—謹言」。㊂次條に同じ。

(きよう-くわう〔恐慌〕(名) ㊀〔經〕信用の濫用等より經濟界の恐怖心を生じ、金融切迫事業沈滯し、生產・分配・交換等の全部若しくは一部が、其活動を止むる狀態。㊁すべて何事によらず人々恐怖心を生じて安堵せざる狀態。

(きよう-くわう〔凶荒〕(名) きゝんどし。ききん。

(きよう-くわく〔胸廓〕(名) 胸のひろさ。

(きよう-くわしや〔凝華舍〕(名) 古昔の禁中の五舍の一。うめつぼ。

(きよう-けつ〔凝結〕(名) こりむすびて、液體が固體となり氣體が液體となること。

(きよう-けん〔恭謙〕(名) うや〱しくて人にへりくだること。

(きよう-こ〔鞏固〕(名) かたきこと。たしかなること。

(きよう-こ〔凝固〕(名) ㊀こりかたまること。㊁融解せる物體が冷却して固體となること。——てん〔凝固點〕(名) 〔理〕融解物が凝固する溫度。

(きよう-こつ〔胸骨〕(名) 高等脊椎動物(爬蟲類以上)の胸部にありて胸腔をなす骨。

(きよう-さい〔凶歲〕(名) 作物のみのらぬ年。ききんどし。

(きよう-さい〔共濟〕(名) 共力して事をなすこと。

(きよう-さく〔凶作〕(名) 作物のみのり甚だあしきこと。

(きよう-さつ〔恐察〕(名) 他人の事を推察する敬語。

(きよう-さん〔共產〕(名) 資產を共同にすること。——くみあひ（イーア）〔共產組合〕(名) 勞働者が、互の小資本を醵集して會社を組織し、共生產に從事して勞銀を得、更に資本に對する配當を得る組織をいふ。——しゆぎ〔共產主義＝Communism〕(名) 私有權を撲滅して社會の總財產を社會を組織する各人の共有とし、消費又は勞働を平等ならしめんとの說。——たう（ウート）〔共產黨〕(名) 共產主義を奉ずる黨派。

(きよう-さん〔胸算〕(名) むなざんよう。

(きよう-し〔胸次〕(名) むねのうち。おもひ。

(きよう-じ〔凶事〕(名) あしきこと。わざはひ。

(きよう-し〔凝脂〕(名) ㊀こりかたまりたる脂肪。㊁轉じて、色の白き肌。

(きよう-し〔凝視〕(名) 目をはりてみつむること。

(きよう-しふ（ウーシ）〔凝集〕(名) こりあつまること。

(きよう-しやう（ヨウーシ）〔胸墻〕(名) ㊀凡そ胸の高さ程に築きたる墻。㊁堡壘又は砲臺の主要なる部分にして、我軍の射擊を便にし敵の射擊を殺(ソ)ぐ目的を以て築造せられたる積土。

(きよう-じやう（ヨウージ）〔兇狀〕(名) 國法にふれたる惡事をなしゝこと。犯罪。——もち〔兇狀持〕(名) 犯罪あること。又、其人。

(きよう-しゆ〔拱手〕(名) ㊀手をこまぬくこと。㊁何事をもなさゞること。「—して成を人に仰ぐ」。

(きよう-しゆ〔凝聚〕(名) かたまりあつまること。(凝集)。——りよく〔凝聚力〕(名) 〔理〕同物質の分子が相牽引する力、物體はこれによりて其體形を維持す。

(きよう-しゆく〔恐縮〕(名) いとおそれ入ること。

(きよう-しゆく〔凝縮〕(名) こりちゞまること。

(きよう-じゆつ〔供述〕(名) 訊問に應じ申立つること。

(きよう-じゆん〔恭順〕(名) つゝしみかしこみてあること。かしこみて反抗せざること。

(きよう-しよう〔恐悚〕(名) おそれちゞむこと。

きよう-す（せし・すず・する・すれ・せよ）〔供〕(他、さ變) そなふ。

きよう-す（せし・すず・する・すれ・せよ）〔拱〕(他、さ變) こまぬく。

きよう-ず（ぜじ・ずず・ずる・ずれ・ぜよ）〔興〕(自、さ變) 興に入る。たのしむ。

(きようする-びやう（ヨーヒ）〔恐水病〕(名) 「きやうけんびやう(狂犬病)」に同じ。

(きよう-せい〔共棲〕(名) ともに一處にすむこと。ともに居を同じくしていきながらふること。(共生)。

(きよう-せん〔凝煎〕(名) 「ぢわうせん」の一名。

(きよう-たい〔凝滯〕(名) とゞこほりて通ぜざること。どゞまりて進まざること。

(きよう-たく〔供託〕(名) ㊀物を提出して其保管を賴むこと。㊁〔法〕規定又は指定により、金錢又は有價證券を供託所へ提出して其保管に付すること。——しよ〔供託書〕(名) 〔法〕供託物に添へて出す書類。——しよ〔供託所〕(名) 〔法〕供託せる金錢又は有價證券を保管する所。——ぶつ〔供託物〕(名) 供託する物件。

(きよう-ちゆう〔胸中〕(名) ㊀胸の中。むね。㊁こゝろ。おもひ。

(きよう-つう〔胸痛〕(名) 胸部のいたみ。

(きよう-つう〔共通〕(名) 雙方へ共に通ずること。通有。

(きよう-てう（ヨウーチ）〔凶兆〕(名) めでたからざるきざし。えんぎあしききざし。

(きよう-と〔兇徒〕(名) ㊀わるもの。惡徒。(惡黨、惡漢)。㊁兇行をなすもの。きようじやうあるもの。㊂多人數集合して亂暴をなし官吏に抗し官廳に迫りなどするもの、暴動の仲間。——しゆうざい〔兇徒聚衆罪〕(名) 〔法〕多人數暴動を圖り官吏の說諭を受けて解散せざる罪、多人數相集まりて暴動をなしたる罪。

(きよう-どう〔共同〕(名) 數多のものが共に事をなすこと。二人以上が資格を同一にして相結合すること。——かいそん〔共同海損〕(名) 〔法〕海損の條を見よ。——かうゐ（ウーコ）〔共同行爲〕(名) 〔法〕共同してなしたる行爲。——ぎむ〔共同義務〕(名) 〔法〕同一の債務を共同して負擔すること、連帶債務の如きこれなり。——くみあひ（イーア）〔共同組合〕(名) 二人以上相集まりて組織したる團體。——けいざい〔共同經濟〕(名) 〔經〕小資本を糾合し團體を組織して、經濟上の便利發達を圖ること。——げんこく〔共同原告〕(名) 〔法〕二人以上のものが同一の事件の原告となること。——けんり〔共同權利〕(名) 〔法〕同一の權利を共同して有すること、例せば、不可分債權の如きこれなり。——さうぞく（ウーソ）〔共同相續〕(名) 〔法〕遺產相續にて、同順位にある遺產相續人が、共同して其遺產を相續すること。——じげふ（ヨウーギ）〔共同事業〕(名) 共に協力してなす事業。——せいくわつ〔共同生活〕(名) 互に助けあひよりあひて生活すること。——そしよう〔共同訴訟〕(名) 〔法〕同一の訴訟事件にて、原告若しくは被告が數人あること。——だんたい〔共同團體〕(名) 共同によりて成立する團體。——ひこく〔共同被告〕(名) 〔法〕同一の訴訟事件にて、數人が共に被告となること。——べんじよ〔共同便所〕(名) 路傍などに、公衆のために設けられたる便所。

(きよう-ねん〔凶年〕(名) 不作なる年。ききんどし。(凶歲、飢歲)。

(きよう-はう（ウーホ）〔凶報〕(名) ㊀めでたからぬしらせ。㊁死去のしらせ。

(きよう-ばう（ウーボ）〔兇暴〕(名) 不正なる亂暴。

(きよう-ばう（ウーボ）〔凝望〕(名) 眼をすゑてよくのぞみみること。

(きよう-はん〔共犯〕(名) 〔法〕二人以上のもの共同して罪を犯すこと。——しや〔共犯者〕(名) 共同して罪を犯したる連中。

(きよう-ふ〔恐怖〕(名) 甚しく恐るゝこと。おぢおそるゝこと。「—戰慄」。

(きよう-ぶ〔胸部〕(名) むね。

(きよう-ふく〔凶服〕(名) もふく。

(きよう-へき〔胸壁〕(名) ㊀「きようしやう」(胸

壁)に同じ。㊁とりて。こはる。㊂内臟に對して、胸部の外壁の稱。

(きよう-まう[兇猛](名) 極めてあら〱しきこと。あしくしてたけきこと。

(きよう-ぼう[共謀](名) 二人以上のものが、共同してはかりたくらむこと。――しや[共謀者](名) 共同してはかりたくらみたる連中。

(きよう-まく[鞏膜](名) [生]眼球の外壁を包む白色の纖維膜。

(きよう-まく[胸膜](名) 「ろくまく」(肋膜)に同じ。

(きよう-み[興味](名) おもしろみ。おもむき。

(きよう-む[凶夢](名) えんぎあしき夢。

(きよう-めい[共鳴](名) ㊀[理]「ともなり」に同じ。㊁他の活動を感受して、我心にもまた其さまの活動を生ずること。

(きよう-やく-かく[共軛角](名) [數]項點及二邊の共同なる角の各が、他の角に對しての稱。

(きよう-やく-こ[共軛弧](名) [數]和が圓周に等しき二つの圓弧が、他の弧に對しての稱。

(きよう-やく-てん[共軛點](名) [理]一點より發する光線が球面鏡より反射し、又は「レンズ」を通過して後、再び通過又は發散(發散するときは後方に延長して)する點と原點との稱。第二の點に光線を置けば光線は、反射又は通過の後初めの點を通過する故に名づく。

(きよう-やく-ふくそすう[共軛復素數](名) [數]$a+bi$ と $a-bi$ との如き二つの數。

(きよう-やく-ふじんこんすう[共軛不盡根數](名) [數]$a+\sqrt{b}$ と $a-\sqrt{b}$ との如き二つの不盡根數。

(きよう-ゆう[洶湧](名) 水波のわきあがること。

(きよう-わ[共和](名) 二人以上のものが、共同して政事を行ふこと。「睨して―といふ」。――こく[共和國](名) 共和國體の國。――こくたい[共和國體](名) 國法上最高の地位を占むるものが二人以上なる國體。又、國法上最高の位地を占むる者を大統領と稱し、人民の選擧によりてこれを定むる國體。――せいぢ[共和政治](名) 國法上最高の地位あるもの二人以上の共同によりて行はる、政治。人民の選擧せる大統領によりて施行せらる、政治。共和國の政治。――せいど[共和制度](名) 共和政治の制度。

(きよ-えい[虛榮](名) 實際の價値もなき外見上のさかえ又はほまれ。――しん[虛榮心](名) 虛榮をむさぼる心。

(きよ-えふ[杏葉](名) 「ぎやうえふ」に同じ。――ぼたん[杏葉牡丹](名) 紋所の名、牡丹の花をぎやうえふの形に描きたるもの。

(ぎよ-えん[魚鹽](名) 海邊の生產物の總稱。海產。「沿海にして―の利あり」。

(きよ-か[許可](名) ゆるすこと。ゆるし。

(きよ-か[許嫁](名) いひなづけ。

(きよ-か[擧家](名) 家內の全體。(全家、闔家)。

(ぎよ-か[漁家](名) 漁夫の家。

(ぎよ-か[漁歌](名) 漁夫のうたふ歌。

(ぎよ-か[御下](名) てした。配下。

(ぎよ-が[御駕](名) 天子などの御車。

(ぎよ-かい[魚介](名) 魚類と貝類と、即ち、海產動物の總稱。

(きよ-かう[擧行](名) 披露しおこなふこと。おほやけになすこと。

(きよ-がう[倨傲](名) おごりたかぶること。

(きよ-がう[虛耗](名) ㊀むなしく費ゆること。㊁身體のおとろへたること。

(ぎよ-かう[御幸](名) みゆき。

(ぎよ-かう[御溝](名) 宮城のみぞ。おほり。

きよ-がき[淸書](名) 下書などを、新に正しく書くこと。せいしよ。(淨書)。

(きよ-がく[巨額](名) かず多きこと。たかく。

(きよ-かつ[虛喝](名) 虛勢を張りておどすこと。

(きよ-かん[巨艦](名) おほいなるいくさぶね。

(きよ-がん[炬眼](名) 明かに物事を鑑察する才能にいふ語。

(きよ-がん[巨眼](名) めだまのふときこと。

(ぎよ-かん[御感](名) 主上の思召。おぼえ。「―斜ならず」。

(きよ-き[歔欷](名) すゝり泣き。

(きよ-ぎ[虛僞](名) うそ。いつはり。

(きよ-ぎ[虛儀](名) いつはりの儀式。かざりばかりの儀式。

(ぎよ-き[御忌](名) 貴人又は祖師等の年忌の法會の敬稱。

(きよきよ-げつ[去去月](名) 其月よりひと月隔てたる前の月。せん〲げつ。(先々月)。

(きよきよ-じつ[去去日](名) をとゝひ。一昨日。

(きよきよ-じつじつ[虛虛實實](名) 互に計略又は技倆を盡し、敵の實をさけ虛に乘じ相戰ふこと。

(きよきよ-ねん[去去年](名) をとゝし。一昨年。

(きよ-きふ[遽急](名) ㊀にはか。きふ。㊁あわつること。あわたゞしきこと。

(きよ-きん[醵金](名) 多人數より金をよせあつむること。費用をだしあふこと。「―して寄附す」。

(きよく[曲](名) ㊀たゞしからざること。ねぢけたること。よこしま。㊁すみ。くま。「河―」。㊂ことわけ。

委細。「心―を盡くす」。㊃こわけ。部局。㊄音律歌謠の變化節奏。ふし。てうし。㊅技藝の變化節奏。あや。げい。「―うち」。㊆音律歌謠又は技藝の段落。きり。㊇おもしろみ。きよう。「―もない其御ことば」。㊈漢詩の一體。思想を委曲にのぶる詩。「長恨―」。

(きよく[局](名) ㊀こわけ。きり。㊁つぼね。へや。㊂碁盤・雙六(すごろく)盤又は將棊盤等。「―に對して日を終ふ」。㊃事務の小區分、又、事務の一區分を掌る所。㊄其場合、其物事。「―に當る」。

(きよく[極](名) ㊀きはみ。きはまり。はて。つめ。「思の―」。㊁くるしみ。なやみ。「子をして此―に至らしむ」。㊂みくらゐ。天位。「―に登る」。㊃まなか。中央。㊄もと。主要。㊅むき。方位。「天に六―あり」。㊆無上道。第一義。「これ佛道の―」。㊇北辰星と老人星との稱。㊈[地]地軸の兩端の稱。其北を北極といひ南を南極といふ。又、地軸の延長線が天體と相會する兩端の稱。㊉[理]磁石の作用の最も強き二點の稱、これを磁極といひ南極と北極とに分つ。又、電池若しくは電解器に電線の出入する口の稱、これを電極といひ、陽極と陰極とに分つ。⑪[數]球の大圓又は小圓に垂直にして球の中心を通過する線の球面と會する二點の稱。

(ぎよく[玉](名) ㊀寶石若しくは角閃石の一種、古來支那及我國にて、寶石として裝飾又は印材等に使用せり、色は種々なれどすべて半透明なり。㊁遊女、藝妓などをあぐるさための料。「藝妓の―代」。

(ぎよく―[玉](接頭) 敬語に冠して、貴重又は美麗の意を表はす語。「―體」、「―顏」。

(きよく-あく[曲惡](名) つみ。とが。あくじ。

(ぎよく-あん[玉案](名) たまのかざりあるつくゑ。貴重なるつくゑ。

(ぎよく-いん[玉音](名) こゑ又はおとづれ等の敬稱。

(きよく-うち[曲打](名) いろ〱の手わざをなして太鼓をうつこと。

(ぎよく-えい[玉詠](名) 他人の詩歌の敬稱。

(ぎよく-えふ[玉葉](名) ㊀他人の葉書の敬稱。㊁天子の御一門を申す語。「金枝―」。

(きよく-かい[曲解](名) 正しからざる解釋。

(きよく-がく[曲學](名) 正道にはづれたる學問。又、曲解したる學問。――あせい[曲學阿世](名) 曲學を以て人氣に投ずる言說をなすこと。

(きよく-かん[極諫](名) 心のたけをつくして諫むること。

(ぎよく-がん[玉眼](名) 細工物などにはめ用ふる硝子の眼球。

(ぎよく-がん[玉顏](名) 玉の如き麗しき顏。

(きよく-き[旭旗](名) 日のまるのはた。日章旗。

(きよく-き[旭暉](名) あさひ。

(きよく-ぎ[局戲](名) ばくち又はスゴロク等の遊戲。

(きよく-きより[極距離](名) [天]南北の一極よりの角距離。

(きよく-ぐわい[局外](名) 其物事に關係なき位地。「―にありて事を見る」。――ちゆうりつ[局外中立](名) 國際上にて、交戰國の何れにも援助を與へず、また交戰に影響すべき行爲を避くる國家の地位。

(きよく-くわう[極光](名) 高き緯度の地にて、空中に弧狀若しくは輻射狀に見ゆる淡綠黃若しくは紅紫緋等の美麗なる光の稱、空中電氣の現象なるが如しといふ。

(ぎよく-くわん[玉冠](名) ㊀玉にて飾りたるかんむり。㊁「べんくわん」(冕冠)の稱。

(きよく-けい[極刑](名) おもきつみ。しざい。

(きよく-げい[曲藝](名) さまざまに目先の變れるをなす藝。

(きよく-けん[極圈](名) [地]南北回歸線より各二十三度半の所に地球の周圍に劃せる圈線にして、南なるを南極圈といひ北なるを北極圈といふ。

(きよく-げん[極言](名) いひつむること。ことばを盡くすこと。

(きよく-げん[極限](名) ㊀かぎり。はて。㊁[數]或數が一定の法則に從ひ漸々變値して達せんとする一定の數、此數と變數との差は漸々小さくなるべきものなれど遂に同値となる能はざるもの。

(ぎよく-ざ[玉座](名) 陛下の御座所。おまし。

(ぎよく-さい[玉碎](名) (たまとなりて碎くる義)節義を守り又は功名を立て、死するなどにいふ語。

(ぎよく-ざん[玉山](名) 人品の優雅なるをたとへいふ語。「―まさに頽れんとす」。

(きよく-さんかくけい[極三角形](名) [數]一つの球面三角形の各邊の二つの極の中、其邊に對する頂點と同じ側にあるものを、大圓の弧により結び付けて得る球面三角形の、もとの球面三角形に對しての稱。

(きよく-し[極死](名) 罪きはまりて、死に至ること。

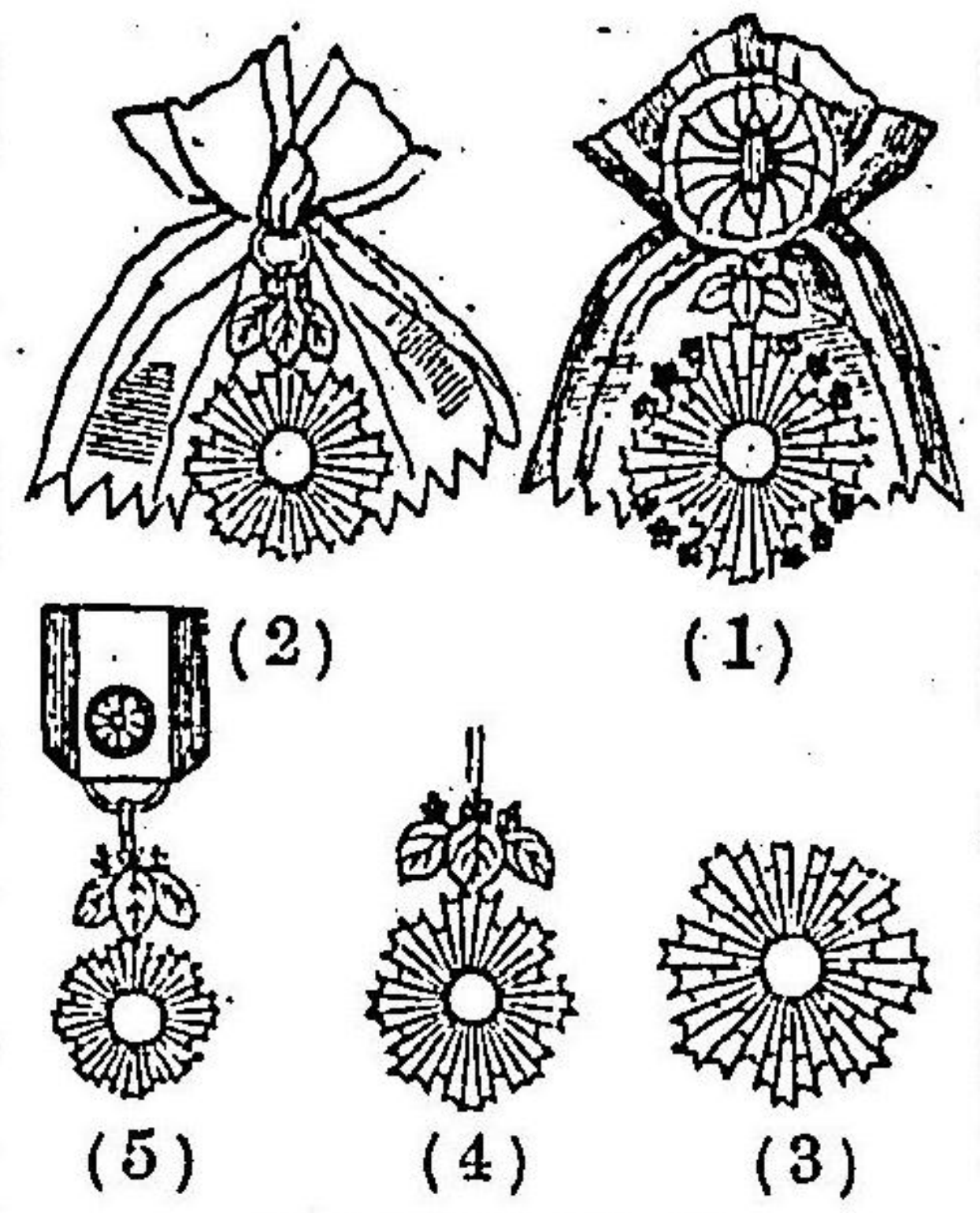
(きよく-じ[曲事](名) 正しからざる事。くせごと。「―事たるべし」。(惡事)。

(ぎよく-し[玉趾](名) 他人の足の敬稱。おみあし。「―を勞す」。

(ぎよく-じ[玉璽](名) 至尊の御印の稱。ぎよじ。

(きよく-じつ[旭日](名) あさひ。――き[旭日旗](名) 旭日を描(ゑが)きたる我國の聯隊旗又は軍艦旗等の稱。――しやう[旭日章](名) 勳勞ありし男子に賜はる勳章の一、勳一等より勳

八等まであり、勳一等は旭日桐花大綬章(圖の1)及旭日大綬章(圖の2)、勳二等は旭日重光章(圖の3)



[きよくしやう]

勳三等は旭日中綬章(圖の4)、勳四等は旭日小綬章(圖の5)、勳五等は雙光旭日章、勳六等は單光旭日章、勳七等は青色桐葉章、勳八等は白色桐葉章なり。

(ぎよく-しやう)シヨウ[玉章](名) ㊀うるはしき詩文。㊁他人の手紙の敬稱、たまづさ。「―拜誦仕候」。

(きよく-しやく)[曲尺](名) かねぢやく。

(きよく-しよ)[極所](名) きはまりたる所。どんづまり。おく。はて。

(きよく-しよ)[局所](名) ㊀身體の關節の曲折する場所。「―解剖術」。㊁一部分の箇所。全體の對。

(ぎよく-しよ)[玉書](名) 他人の手紙の敬稱。

(ぎよく-しよく)[玉食](名) 珍味の膳部。「金衣―」。

(きよく-しん)[棘薪](名) そだ。たきゞ。

(きよく-すゐ)[曲水](名) ㊀庭園又は樹林などの間をまがりて流るゝ小さき水。㊁「きよくすゐのえん」の略言。 **――のえん**[曲水宴](名) 古昔、禁中にて三月三日卽ち桃の節句に行はれし公事、御前にて酒を賜はり詩歌を作りしを、もと支那にて其日に會する者、曲水のほとりに座を連ねて坐し、上流に杯を浮べ、其杯の己の前を流れ過ぎぬ間に、詩を作り、其杯をとりて酒を飲みしならひの移りしなりといふ。まがりみづのとよのあかり。

(ぎよく-ずゐ)[玉髓](名) 【鑛】結晶極めて微小なる鑛物、色は黄・白・赤・綠等種々あり、多く岩石の空洞中に出づ。

(ぎよく-せい)[玉成](名) 完全なる人物と成すこと。「艱難汝を―す」。

(きよく-せう)シヨウ[極小](名) ㊀きはめて小なること。㊁【數】或量が一定の法則に從つて變化するとき、漸々減小し來りて、遂に增大し初めんとする點に達したるときの値。

(きよく-せき)[跼蹐](名) ㊀せぐゝまりて抜足すること。「天地に―す」。㊁束縛せられて、自由なるふるまひをなし得ざること。

(ぎよく-せき)[玉石](名) ㊀たまといしと。㊁すぐれたるものとおとりたるものと。「―混淆」。 **――ともにやく**[玉石共焚] すぐれたるものとおとりたるものとを一つにしてすて去るにいふ。

(きよく-せつ)[曲折](名) ㊀折りまぐること。折れまがること。㊁變化すること。かはること。㊂をれめ。かゞみめ。又、かはりめ。㊃いちぶしじゆう。ゐさい。「其―を說く」。

(きよく-せつ)[曲節](名) 音樂又は遊藝のあや。ふし。てうし。

(きよく-せん)[曲線](名) 【數】連續的に曲れる線。何れの部分も有限直線ならざる線。

(ぎよく-そく)[玉足](名) 他人の足の敬稱。おみあし。

(きよく-だい)[極大](名) ㊀きはめて大いなること。大いなるきはみ。㊁【數】或量が一定の法則に從ひ變化するとき、漸々增大し來りて、遂に減少し初めんとする點に達したるときの値。

(ぎよく-たい)[玉體](名) 身體の敬稱。おからだ。

(ぎよく-たい)[玉帶](名) 玉にて飾りたる帶。

(ぎよく-だい)[玉代](名) 藝妓・娼妓などをあぐる一定の料。

(きよく-たん)[極端](名) ㊀ごくのはし。はしのつめ。㊁中正をはづれたること。「―の論」。

(きよく-ち)[極致](名) 十分に其趣をつくしきはむること。きはみ。「美術の―」。

(きよく-ちやう)チヨウ[局長](名) 局中一切の事務をすべて局員をとりまる職名。局のをさ。

(ぎよく-ちやう)チヨウ[玉帳](名) 藝妓・娼妓などの玉代を記する帳面。

(きよく-ちよく)[曲直](名) まがれるとすぐなると。正と邪と。

(きよく-てん)[極點](名) きよくど。つめ。

(きよく-ど)[極度](名) 最も窮極したる度合。つめ。きよくてん。はて。「惡の―」。

(ぎよく-と)[玉兔](名) (月中に兎の棲むといふ古來の俗傳に出づ)月の異稱。(銀蟾)。

(きよく-とう)[極東](名) 東洋諸國中最も東方に位する地方、卽ち、我國及「アジア」大陸の東海岸地方の總稱。「―の風雲」。 **――もんだい**[極東問題](名) 極東に於ける各國の權力及利益範圍の消長に關する問題。

(きよく-とつ)[曲突](名) かまどのけむりだし。

きよく-どり[曲取](名) あやなして物を操ること。

きよく-のり[曲乘](名) 目先のかはりたる乘馬のわざ。

(きよく-ば)[曲馬](名) 馬を使ひて、種々目先のかはりたるわざをなさしめ、又は馬上にて種々目先のかはりたるわざをなすこと。

(ぎよく-はい)[玉杯](名) 玉をもて造りたる杯。

(ぎよく-はい)[玉佩](名) ㊀おびもの。おもの。㊁支那の古代に、大帶にかけ佩(オ)びたる玉の飾物。

(ぎよく-ばう)ボウ[玉貌](名) うつくしき容貌。

(ぎよく-はく)[玉帛](名) ㊀たまときぬおりものと。㊁國際の贈物。「―を修め」。

(ぎよく-ばん)[玉盤](名) 玉のさら。

(きよく-ひ)[曲庇](名) 事實又は法律をまげてかばひだてすること。

きよく-びき[曲彈](名) 三味線などを種々の技(ワザ)をなして彈(ヒ)くこと。

(きよく-ひつ)[曲筆](名) 理を非に曲げたる趣を書くこと。又、其文章。

(きよく-ひ-どうぶつ)[棘皮動物](名) 【動】體軀に背腹の別あるのみにて、左右前後の別なく、體壁中に石質の骨片を有する動物の總稱。うに・ひとで・なまこ等これに屬す、概ね海產にして運動の力弱し、口は腹面の中央に位し、腸の末端は其反對の面に開くを常とす。

(きよく-ふ)[曲譜](名) 歌謠又は音樂の譜。

(きよく-ぶ)[局部](名) 全體の中の或部分。

(きよく-ふう)[極風](名) 【地】南北兩極の周圍に、地球の自轉のために常に西に吹く風。

(きよく-べん)[曲辯](名) 非を是にいひくろむる言。

(きよく-べん)[勗勉](名) ほねをりつとむること。

(ぎよく-へん)[玉偏](名) 「たまへん」に同じ。

(きよく-ほ)[極浦](名) 極めて遠きうら。

(きよく-ほ)[曲浦](名) まがりくねりたるうら。

(ぎよく-ほ)[玉步](名) 他人のあゆみの敬稱。

きよく-まち[局待](名) 電報の發信人が、發信の局にありて其返信を待つこと、其旨を受信人に通ずるには「ヤム」の符號を用ふ。 **――でんぱう**ポウ[局待電報](名) 局待の符號を用ひて發送する電報。

(きよく-めん)[局面](名) ㊀碁盤又は將棊盤の上。又、其上における相互の勝敗の變化。ばんめん。㊁物事のなりゆきの狀態。「社會の―」。

(きよく-めん)[曲面](名) 【數】連續的に曲れる表面。何れの部分も平面の部分ならざる表面。

きよく-もち[曲持](名) 曲をして物を持ち上ぐること。

(ぎよく-もん)[玉門](名) 婦人の陰部。

(ぎよく-らん)[玉蘭](名) 【植】花の白き木蓮。

(きよく-りう)[極流](名) 【地】南北兩極地方より赤道地方へ向ひて流るゝ海流、寒流。

(きよく-りよく)[極力](名) あらん限りの力をつくすこと。最もつとめほねをること。

(ぎよく-りん)[玉輪](名) 明月の異稱。

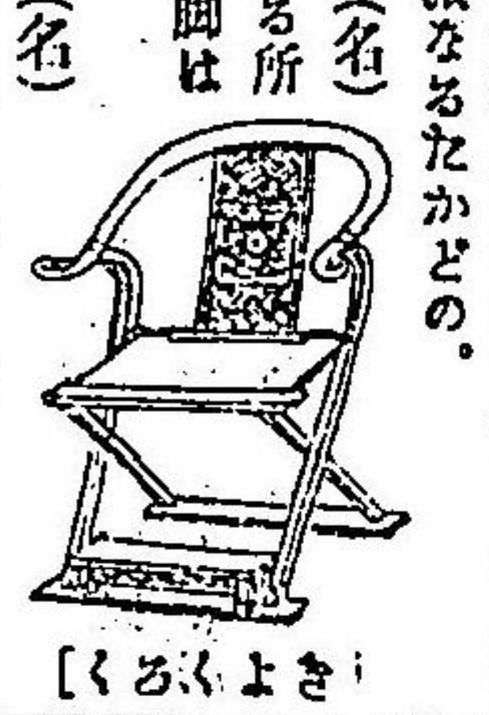
(きよく-れい)[曲禮](名) こまごましき禮儀。

(ぎよく-れん)[玉輦](名) 王后等の乘る車。

(ぎよく-ろ)[玉露](名) ㊀つゆを玉にたとへていふ語。㊁上品なる煎茶の稱、甘味多くしてよく煎じ出さるゝもの。 **――せい**[玉露製](名) 玉露の製法により茶を製すること。

(ぎよく-ろう)[玉樓](名) たまにて飾りたるたかどの。又、極めて立派なるたかどの。

(きよく-ろく)[曲彔](名) 椅子の一種、よりかゝる所を圓く曲げてつくり、脚は牀几の如き様のもの。


[きよくろく]

(きよく-ろん)[曲論](名) 正しからざる論。又、理を非に曲ぐる論。

(きよく-ろん)[極論](名) いひつむること。十分に論ずること。

(きよ-くわ)[炬火](名) たいまつ。

(ぎよ-くわ)[漁火](名) いさりび。

(きよ-くわい)[巨魁](名) 賊徒又は一揆などの首領、ほつとうにん、をさ、かしら、頭領。(渠魁、張本)。

(きよ-くわん)[居館](名) すまひのやかた。

(ぎよ-くわん)[魚貫](名) 魚の隊をなすが如くにつらなりならび行くこと。「―して過ぐ」。

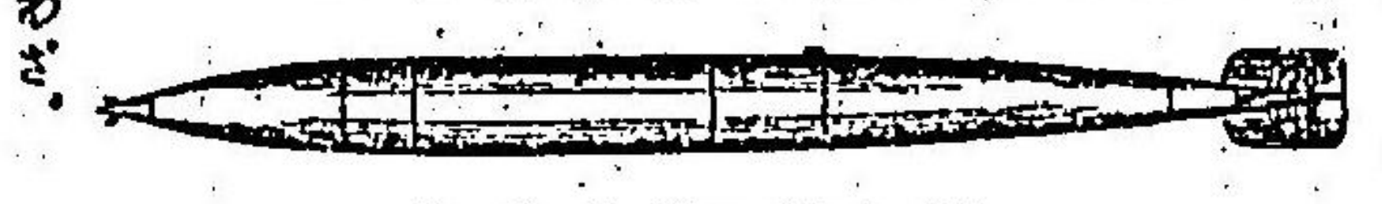
(ぎよく-わん)[玉椀](名) たまにてつくりたる椀。

(きよく-ゐん)[局員](名) 局長の命を受けて事務をとりあつかふ人。

(ぎよく-ゐん)[玉韻](名) 他人の詩作の敬稱。

(ぎよ-けい)[御慶](名) およろこび。

(ぎよけい-すゐらい)[魚形水雷](名) 攻擊水雷の一、魚形水雷發射器によりて發射せらるゝものにして、葉卷煙草形をなし、其氣室に壓搾せる空氣の作用によりて水中を進行し、發射當時の方向及深度を維持する機械を具備し、敵の艦底に命中すれば、頭部に裝置せる綿火藥は爆發す。 **――はつしやき**[魚形水雷發射器](名) 軍艦に備へ付けられ魚形水雷を裝塡して艦外に發射するための器、發射框と發射管とありて、更に水上用と水中用とあり、製式一樣ならず。


[ぎよけいすゐらい]

(きよ-げつ)[去月](名) まへのつき。ぜんげつ。あとげつ。(客月)。

(ぎよ-げふ)ギヨウ[漁業](名) すなどりのわざ。

(きよ-げん)[虛言](名) 「きよごん」に同じ。

(ぎよ-けん)[御劍](名) 天子の佩びたまふ劍。「―を按じ」。

(きよ-こ)[虛誇](名) 實力なきに、みだりに事を誇大にすること。

(ぎよ-こ)[漁戶](名) 漁夫のすむ家。

(きよ-こう)[巨礮](名) おほづゝ。たいはう。

(きよ-こう)[虛構](名) いつはり。うそ。

(きよこう-さいりん)[巨口細鱗](名) （合大きく鱗こまかき魚の義）【動】鱸（スヾキ）の異稱。

(きよ-こく)[擧國](名) 國中悉皆。國の全體。

(きよ-ごん)[虛言](名) そらごと。うそ。僞言。

きよさ[淸](名) きよき度合。

(ぎよ-ざ)[御座](名) 陛下又は殿下のいまします座席。

(きよ-さい)[去歲](名) ㊀こぞ。きよねん。㊁むかし。以前。

(きよ-さい)[巨細](名) ㊀大いなるものと細かなるものと。㊁いちぶしゞゆう。委さい。

(きよ-ざい)[巨材](名) ふとき材木。

(きよ-ざい)[巨財](名) 多量の財物。

(きよ-さう)[距爪](名) けづめ。

(きよ-ざう)[虛像](名) 【理】像の條を見よ。

(ぎよ-さく)[御作](名) 貴人のつくりたまひしもの。

(きよ-さつ)[巨刹](名) 大いなる寺院。

(ぎよ-さん)[魚山](名) （支那の陳思王魚山にて自然の音響を聞きて發明せし音律に基くといふ、慈覺大師これを我國に傳へ後、大原來迎院の僧良忍これを盛にせり）「ボンばい」（梵唄）の異稱。

(きよ-し)[鉅資](名) 多くの資財。

きよ-し(くしき/けれ)[淸](形、二) ㊀けがれなし。にごりなし。㊁あきらかなり。くもりなし。「日影―」。㊂のこりなし。あまりなし。㊃邪念なし。惱悩なし。「きよき心」。㊄心地よし。すゞし。「風―」。

(きよ-じ)[虛字](名) 漢文にて、實字及助字以外の字、即ち、恐・惡・泣・落などの如く、多くは動詞若しくは形容詞として用ひらるゝもの。

(きよ-じ)[凶事](名) 「きようじ」の略音。

(ぎよ-じ)[御璽](名) 天子の御印、傳來のものは、銅の材にして曲尺方二寸七分、明治七年新製のものは、黄金の材にて曲尺方三寸、何れも天皇御璽の四字を刻みあり、内大臣これを尙藏す。

(きよ-じ)[語次](名) はなしついで。

(きよ-しう)[巨酋](名) かしら。巨魁。

(きよ-しう)[去秋](名) こぞのあき。

(きよ-しう)[去就](名) 去ると止まると。背くと從ふと。

(きよ-じう)[巨獸](名) 形體大いなるけもの。

(ぎよ-しう)[漁舟](名) いざりするふね。

(きよ-しつ)[居室](名) 居間。

(きよ-じつ)[虛實](名) ㊀うそとまことと。なきとあると、「―を決す」。㊁敵に對する防禦の有無。㊂敵の虛に乘じ實を避け種々の謀計又は技術を用ふると、「―を盡くして戰ふ」。

(きよ-じつ)[虛日](名) 其物事のなき日。ひまの日。「―無し」。

(きよ-しふ)[醵集](名) 金員を出しあふと。

(ぎよ-しや)[馭者](名) 馬をあつかふ人。特に、車の前に乘りて馬を扱ふ人。（御者）。

(ぎよ-しや)[漁者](名) すなどりするもの。

(ぎよ-しや)[漁舍](名) 漁者の住むいへ。

(きよ-しやう)[去聲](名) 漢字の四聲の一、分つて送・宋・絳・寘・未・御・遇・霽・泰・卦・隊・震・問・願・翰・諫・霰・嘯・效・號・箇・禡・漾・敬・徑・宥・沁・勘・豔・陷の三十韻とす、これに屬する字はすべて仄字なり。

(きよ-じやう)[居常](名) つね。ひごろ。

(きよ-じやう)[居城](名) すまひせる城。

(きよしやう-じつし)[虛掌實指](名) 書道にて、筆管を持つに掌を虛くし指先に力を入るゝと。

(きよ-じやく)[虛弱](名) ㊀備なく力よわきと。㊁精根の薄きと。すこやかならざると。

(きよ-じゆん)[去春](名) こぞのはる。

(きよ-しよ)[居所](名) ㊀居る場所。ゐばしよ。ゐどころ。すみか。㊁住所に對して、現に居る所の稱。

(きよ-しよ)[居諸](名) （詩經に日居月諸とあるに出づ）つきひ。くわういん。「―を惜む」。

(きよ-しよう)[擧證](名) 成事實の存否を證明すると。「―の責任」。

(きよ-しよく)[虛飾](名) いたづらに外見をかざると。うはべのかざり。

(ぎよ-しよく)[漁色](名) たれかれの擇びなく女を弄ぶこと。女色にふけると。

(きよ-しん)[虛心](名) 心にわだかまりを抱かざると。「―平氣」。

(きよ-じん)[巨人](名) 身體の偉大なる人。又、品性の偉大なる人。

(ぎよ-じん)[圉人](名) 馬かひ。（馬飼）。

ぎよ-じん-ね・る(ら・り・る・るゝ・れ・れ)[御寢](自、ら四) げしなる。

ぎよ-す(せ・し・す・する・すれ・せよ)[御](他、さ變) ㊀馬をとりあつかふ。（馭）。㊁統制す。すぶ。たゞす。㊂つかさどる。をさむ。㊃使用す。もちふ。つかふ。（天子にいふ）。㊄寢處に幸す。「嬖妾―せず」。

(きよ-すう)[虛數](名)【數】負數の平方根の稱、かゝる數はあり得べからざる故に名づく、例へば、$\sqrt{-8}$の如し、而して$\sqrt{-8}=\sqrt{8}\sqrt{-1}$なるが故に、虛數は實數に$\sqrt{-1}$を乘じたるものなるより、通常$\sqrt{-1}$を以てこれを表はす。

(ぎよ-すゐ)[魚水](名) （魚と水との義）君と臣との極めて親しきと、「―の親」。

(きよ-せい)[去勢](名) 動物の睾丸を拔き去ると。「―の馬匹」。

(きよ-せい)[虛聲](名) 根も無きうはさ。いつはりのひやうばん。

(きよ-せい)[虛勢](名) 外見のみのいきほひ。「大いに―を張る」。（虛威）。

(きよ-せい)[去聲](名) 「きよしやう」に同じ。

(ぎよ-せい)[御製](名) 天皇陛下の御作の詩歌。

(きよ-せう-てん)[虛焦點](名) 【理】凸鏡面より反射せる光線が假に會する如く見ゆる鏡後の一點。

(きよ-せつ)[虛說](名) そらごと。浮說。

(きよ-ぜつ)[拒絕](名) こばみふせぐと。ひきうけざると。

―しようしよ[拒絕證書](名) 手形などの所持人が、支拂又は引受を受くると能はざる場合に、其事實を證明するため、公證人又は執達吏に請求して作成する證書。

(きよ-ぜん)[居然](名) 其まゝにてあるさまにいふ語、「―たる昔時の一書生」。

(きよ-ぜん)[遽然](名) にはかなるさま又はあわつるさまにいふ語。

(ぎよ-せん)[漁船](名) れふ船。いさり船。

(きよ-ぞく)[巨賊](名) 手下多き盜賊。大いなる惡事をはたらく盜賊。おほぬすびと。

(ぎよ-ぞく)[魚族](名) ぎよるゐ。うを。

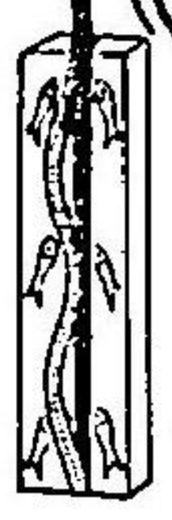
(きよ-そん)[踞蹲](名) うづくまると。

(ぎよ-そん)[漁村](名) 漁者のあつまりすむ村。

(きよ-た)[許多](名) 數多くあると。あまた。

(きよ-だい)[巨大](名) 大いなると。

(ぎよ-たい)[魚袋](名) 古昔、束帶のとき、石帶の右の第一第二にむすびし物、厚さ五分長さ三寸幅一寸許の箱を白鮫にて張り、金又は銀にて彫りたる鯛の形を表に六つ裏に一つ付け、紐もて帶びたり。


[ぎよたい]

(きよ-たく)[居宅](名) 住む家。すまひ。すみか。

(きよ-たく)[虛托](名) いつはりかこつくると。

(きよ-だく)[許諾](名) うべなふと。きゝいるゝと。承知。承諾。

(きよ-だつ)[虛脫](名) 身體おとろへて體力のぬけうせたると。又、死に近き狀態。

(きよ-だん)[虛談](名) 根もなきはなし。（虛說）。

きよっと(副) 胸にこたへて驚くさまにいふ語。「岩永も―せしが」。

(きよ-てい)[居邸](名) 住まひのやしき。

(きよ-でん)[虛傳](名) いつはりの風聞。

(ぎよ-でん)[魚田](名) （魚の田樂の略言）一種の料理、魚に味噌を付けて炙り燒きたるもの。

(きよ-どう)[擧動](名) たちゐ。ふるまひ。やうす。

(ぎよ-とう)[魚燈](名) 「ぎよとうゆ」の略言、―ゆ[魚燈油](名) 魚肉より煎じ出したる油、特に鰯又は鰊（カド）より煎じ出したる油の稱、燈火の油に用ふるもの。（魚膏）。

きよと-きよと(名、副) おそれを含みてうろうろするさまにいふ語、「狼狽て―」。

(ぎよ-にく)[魚肉](名) ㊀魚の肉。㊁やがて斬殺せらるべきもの、「我は方に―たり」。

(きよ-ねん)[去年](名) こぞ。昨年。

(きよ-はう)[巨砲](名) たいはう。おほづゝ。

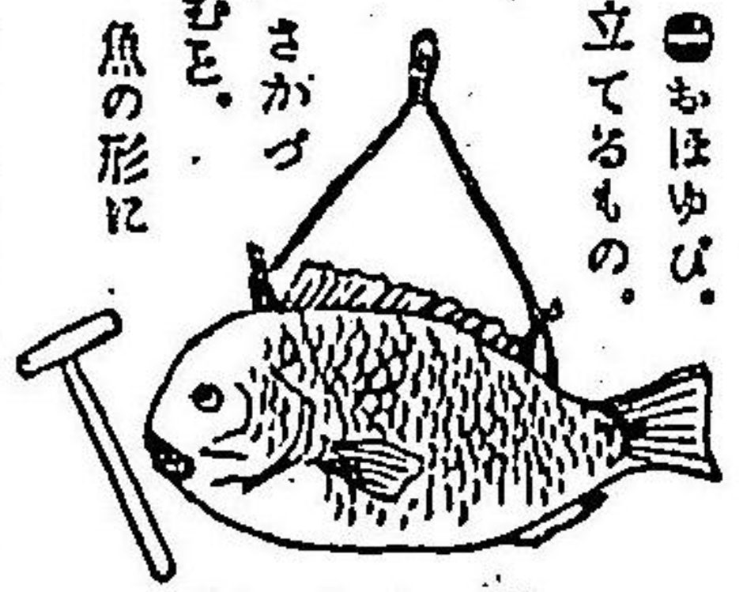
(きよ-ばう)[虛妄](名) ㊀うそ。いつはり。㊁まよひ。まどひ。

(きよ-はく)[巨擘](名) ㊀おほゆび。大指。㊁其社會にて、頭立てるもの。かしら。「文壇の―」。

(きよ-はく)[巨舶](名) 巨大なる船。

(きよ-はく)[擧白](名) さかづきを手にすると。酒を酌むと。

(ぎよ-ばん)[魚板](名) 魚の形に作れる木板。


[ぎよばん]

(きよ-ひ)[拒否](名) こばみいなむと。

(きよ-ひ)[許否](名) ゆるすとゆるさゞると。

(ぎよ-ひ)[魚肥](名) 鰊（カド）又は鰯などを乾して製造したる肥料。

(きよ-びやう)[虛病](名) にせやまひ。つくりやまひ。けびやう。（作病）。

(ぎよ-ふ)[漁夫](名) 漁（スナドリ）を業とするもの。れふし。

―の-り[漁夫利](名) 他の互に相爭ふに乘じ、傍より勞せずして利を收むるとをたとへいふ語。

(きよ-ぶん)[虛聞](名) ㊀根もなきうはさ。虛傳。㊁むなしきほまれ。

廿きよ-まはり[淸](名) ものいみ。（齋戒）。

廿きよ-まは・る(ら・り・る・る・れ・れ)[淸](自、ら四) ㊀きよまる。㊁物忌みす。「いましもけざやかにきよまはりてたちにしわが名」。

きよ-ま・る(ら・り・る・る・れ・れ)[淸](自、ら四) 淸淨になる。きよくなる。

(きよ-まん)[巨萬](名) 莫大の數、「―の富を重ぬ」。

(ぎよ-み)[魚味](名) うをの料理。

きよみづ-やき[淸水燒](名) 京燒の一、京都の淸水邊にて製する陶器、多くは染付のいしやきなり。

(きよ-みん)[居民](名) 其地に住む人民。

(ぎよ-みん)[漁民](名) 漁（スナドリ）する人。れふし。

(きよ-む)[虛無](名) ㊀何の物事も無く空なると。㊁心を虛くして挾む所なきと。㊂【哲】支那の戰國時代に、楚の老子の唱へし說にして、天地萬物は虛無に生ずとし、無爲玄默を以て道德の極となすと。

―しゆぎ[虛無主義＝Nihilism](名) 現在の政治・宗教・社會上の一切の制度を否認し、これを打破して共產主義により更に之を組織すべしとの主義。

―たう[虛無黨](名) 虛無主義を實行せんがために組織せられたる祕密團體、「ロ

シア」國に多く、皇帝の此獄員の手に逆殺せられしとあり。——**のがく**「虛無學」（名）【哲】支那に於て老子これを唱へ、其徒莊子等の承繼し鼓吹せし學問、玄默無爲を以て道德の極となす、其後流は道家となりたり。——**ぼつが**「虛無沒我」（名）其物自身に何等の挾持する所なく、たゞ對象を其まゝ受用すること。

きよ・む（むめるれれよ）「清」（他、ま下二）㊀けがれをはらひ去る。きやうやうにす。きよくす。「不淨を—」。㊁恥辱をはらひ去る。すゝぐ。はらす。「汚名を

きよめ「清」（名）きよむると。淸淨にすると。「—」。

（**きよ-めい**「虛名」（名）實よりは高き名。實に過ぐるきこえ。「—を貪る」。

（**ぎよ-めい**「御名」（名）陛下又は殿下の御名。

きよめ-がき「淸書」（名）せいしよ。淨書。

〔**きよ-もと**「淸元」（名）「きよもとぶし」の略言。——**ぶし**「淸元節」（名）一種の俗曲、富本節の分派にして、延壽太夫淸水吉五郎に始まる。

（**きよ-よう**「許容」（名）ゆるすと。（許可、許諾）。

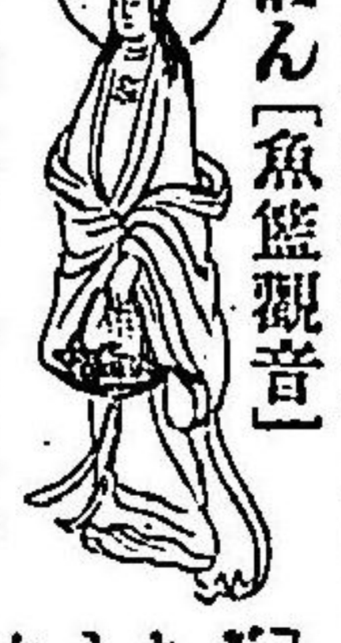
†**きよら**「淸」（名）きよらかなると。「—に見ゆる海邊の影」。

（**きよ-らい**「去來」（名）㊀ゆきき。「—の船」。㊁過去と未來と。——**こん**「去來今」（名）過去・未來及現世、即ち、三世の稱。

（**きよ-らう**（ウ-ロ）「虛勞」（名）精氣衰弱し、身體疲（カツ）るゝと。

きよ-らか「淸」（名）けがれ又はにごりなきと。

ぎよらん-くわんおん「魚籃觀音」（名）魚を入れたる籃を提（サ）ぐる像の觀音。


［ぎよらんくわんおん］

（**きよ-り**「距離」（名）㊀へだゝり。あひだ。

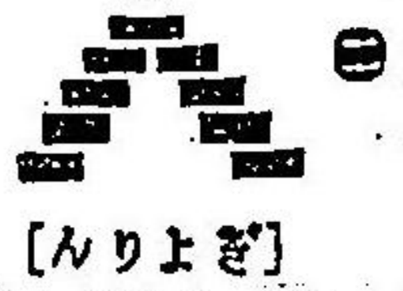
㊁【數】二物體間の長さ。二體の間に終る最も短き直線の長さ。二點を結ぶ直線の長さ。

（**きよ-り**「巨利」（名）大いなる利益。（大利）。

（**きよ-りう**「居留」（名）㊀假に其所に留りて住むと。（寄留）。㊁外國の居留地に住むと。——**ち**「居留地」（名）條約により、或國が其領土の一部を限りて、他國人の居留を許したる地域。開港場などにて、外國人の居留する一區域の地。——**みん**「居留民」（名）居留地に居留する他國の人民。

（**ぎよ-りう**「御柳」（名）【植】金絲桃科に屬する木、もと支那より渡來したるものといふ、葉は檜に似たれど細くして扁（ヒラ）たからず、枝細くして下垂す、夏秋の交、翠に似たる赤色の細花を著く。（檉柳）。

（**ぎよ-りん**「魚鱗」（名）㊀魚のうろこ。㊁うろこの如くにならぶと。㊂昔時、鱗の並びたるやうに順序正しく列べたる陣隊。


［ぎよりん］

（**ぎよ-るゐ**「魚類」（名）【動】水中に棲息する冷血動物、體は概ね側扁にして游泳に適し、皮膚に鱗を生じ四肢は胸鰭及腹鰭にして、鰓を以て呼吸し鰾（ウキブクロ）によりて體重を加減す、心臟は一心耳一心室なり。うをるゐ。うを。

（**きよ-れい**「虛禮」（名）うはべばかりの禮儀、やくにたゝぬ儀式。

（**ぎよ-れい**「魚麗」（名）昔時、長楕圓形の陣隊。

（**きよれい-ふまい**「虛靈不昧」（名）これぞといふ形態も内容も認むべからざれど、其作用は不可思議にして、一切の對象をうつし知る義にして、儒學にて、心の狀態にいふ語。「—にして衆理を具へ萬事に應ず」。

（**ぎよ-れふ**（ヨウ-リ）「漁獵」（名）すなどりとかりと。魚

をとると鳥獸をとると。——**おだい**「漁獵時代」（名）人智の最も幼稚にして、專ら自然物の採取即ち漁獵などによりて生活せし時代。

（**きよ-ろ**「蘧廬」（名）やどや。はたごや。（旅舍）。

〔**きよろ-きよろ**（名、副）あたりに目を配（クバ）りて、見まはすさまにいふ語。（盱盱然）。——**まなこ**（名）きよろ〳〵見まはす目。

〔**きよろ-つ・く**（かきくくけけ）（自、か四）きよろ〳〵なす。

（**きよ-ゐ**「虛位」（名）㊀あきてある地位。占むるもののなき地位。㊁實權なき地位。「人主—を擁して制を權臣に受く」。

（**きよ-ゐ**「虛威」（名）外見のみの威勢。（虛喝）。

きら「雲母」（名）【鑛】「きらゝ」の略言。

きら「煌」（名）㊀きら〳〵する光。㊁水に油などの浮きてぎら〳〵と見ゆるもの。（浮垢）。

（**き-ら**「綺羅」（名）㊀羅（ウスモノ）はしき衣服。「—を飾る」。（美服）。㊁みえ。よそほひ。「—を張る」。

（**き-ら**「碁羅」（名）ごいしをならべたる如くに、ずらりとならぶと。「—星の如く」。

（**き-らう**（ウ-ロ）「耆老」（名）六七十歳の老人。としより。

ぎら-ぎら（名、副）きらめくさまの稍や鈍きが如く見ゆるさまにいふ語。「油が水に浮いて、—する」。

きら-きら「煌煌」（名、副）きらめくさま又はかう〳〵しきさまにいふ語。（晃晃）。

きら-きら・し（しきしくしけれ）「煌煌」（形、二）㊀きらめきて見ゆ。㊁たふとく思はる。

きら-く「氣樂」（名）㊀心の安樂なると。きがゝりなきと。（安樂）。㊁物事を氣にかけぬと。無頓着なると。——**おん**「氣樂人」（名）氣樂なる生活をなす人。又、物事を氣にかけぬ性質の人。——**もの**「氣樂者」（名）前條に同じ。

（**き-らく**「歸洛」（名）みやこへ歸ると。（歸京）。

†**きら・す**（さしすすせせ）「霧」（他、さ四）霧たつ。くもる。「かき—霧げの空の霽けきに」。

〔**きら・す**（さしすすせせ）「切」（他、さ四）㊀金錢のきれめをよくす。氣前をよくす。㊁貯へを殘りなくす。

きら-ず「雪花菜」（名）（切らずして好しとの義）豆腐のしぼりかす。から。うのはな。（豆滓、豆渣）。

〔**きら-つ・く**（かきくくけけ）「煌」（自、か四）きら〳〵す。

〔**ぎら-つ・く**（かきくくけけ）「煌」（自、か四）ぎら〳〵す。

きらは・し（しきしくしけれ）「嫌」（形、二）好ましからず。忌みさくべし。嫌ふべし。

きらひ（イキウ）「嫌」（名）㊀きらふと。きらふもの。㊁うたがひ。まがひ。「功を貪るの—あり」。

きら-びき「雲母引」（名）「きらゝがみ」に同じ。

きら-びやか「煌」（名）きらめきて麗（ハウル）しきと。きら〳〵して鮮明なると。（的歷、美麗）。

きら-ふ（ウ-ロ）「生蠟」（名）採りたるまゝの蠟。

きら・ふ（はひふふへへ）「嫌」（他、は四）㊀いやに思ふ。好まず。「行くを—」。㊁あきたらず。こゝろよからず。㊂にくむ。うらむ。㊃はゞかる。いむ。㊄うとんず。避く。

きら-ぼし「煌星」（名）光のきら〳〵する星。

†**きら-めか・し**（しきしくしけれ）「煌」（形、二）きらめきて見ゆ。きらめくさまなり。

きら-めか・す（さしすすせせ）「煌」（他、さ四）きらめくやうにす。

きら・めく（かきくくけけ）「煌」（自、か四）㊀きら〳〵して見ゆ。ひかりかゞやく。「夕日山に映りて—」。㊁†酒杯を饗し、引出物など遺す。

きら-ら「雲母」（名）（きら〳〵する故に此名あり）【鑛】「うんも」に同じ。——**がみ**「雲母紙」（名）きらゝを一面に着きたる紙。

きら-らか「煌」（名）きら〳〵して麗（ハウル）しきと。きらびやか。（的歷、燦爛）。

きり「霧」（名）地上に浮遊する水分子の烟の如く見ゆるもの、寒冷なる空氣が、溫暖且濕潤なる空氣と混合するとき、水蒸氣の一部凝結して生ず。

きり「桐」（名）㊀【植】玄參科に屬する木、大形の葉を有し、花は紫色若しくは白色、花序は複性にして萼は密生毛を有し、花冠は大形にして雄蕊は四個あり、木材は、琴・箱其他種々の器具の料に供せらる。（白桐、崗桐）。㊁紋所の名、桐の葉と花とをとりあはせて描きたるもの。㊂†琴の稱。「—の絲」。

きり「錐」（名）㊀小さき穴を穿つに用ふる刃物の特稱。「揉—」「打込—」。㊁すべて、尖頭ありて物に穴を穿つに用ふる具の稱。「はりぬきの—を入れる」。㊂弓射るに、先の矢の中（アタ）りたる的の目に、後の矢の中ると。「—を入れてかへる」。——**をたつべきち**　わづかの空地。

きり「切」（名）㊀切ると。切りたる片。㊁くぎり。だん。段節。「芝居の—」。㊂かぎり。はて。際限。「道樂に—無し」。㊃たえま。きれめ。㊄「きりきやうげん」の略言。

（**き-り**「肌理」（名）きめ。肌合。

—**きり**「切」（接尾）或語に添へて、際限の意を表はす語。だけ。かぎり。「此酒の有り—」。

（**ぎ-り**「義理」（名）㊀履行すべき正當のすぢみち。「—が違ふ」。㊁他に對して自家の操りまもるべき行爲。みさを。㊂わけ。こゝろ。趣味。「—が通ぜぬ」。㊃つきあひ。交際。

きり-あ・ぐ（げぐぐるれげよ）「切上」（他、か下二）きりあげをなす。

きり-あげ「切上」（名）㊀一段落をつくると。たちとゞむると。㊁【數】省略算にて、切りすつる最初の桁が五なるとき、本數の最後の桁に一を加ふると。

㊂いもなど細かく切り、油にて揚げたるもの。

きり-あさ「桐麻」（名）【植】「いちび」（茼麻）に同じ。

きり-あひ（イ-ア）「切合」（名）きりあふと。

きり-あ・ふ（はひふふへへ）（ウ-ア）「切合」（他、は四）㊀互に刀を交へて戰ふ。格鬪す。たゝかふ。（斫合）。㊁物と物とが十字形若しくは又字形に交はる。

きり-あめ「霧雨」（名）いと細き雨。ぬかあめ。

きり-いし「切石」（名）㊀其用途に從ひて種々の形に切りこしらへたる石。㊁割れてかど立ちたる石。㊂敷石。いしだゝみ。

きり-い・る（らりるるれれ）「切入」（自、ら四）刀を揮りて敵中に進擊す。きりこむ。

ぎり-いっぺん「義理一片」（名）形式上の義理のみなると。世間に對するいひわけに、好まぬながらものすると。「—て、あとは振り返らぬ」。

（**き-りう**「氣流」（名）大氣の流動。

（**き-りう**「寄留」（名）㊀他鄕に住ふと。又、他家に身をよせてあると。㊁本籍地の外に住居すると。——**がへ**（エ-ガ）「寄留替」（名）現住の寄留地を去りて、他の寄留地に移轉すると。——**せき**「寄留籍」（名）寄留地の戶籍吏の管轄に屬する寄留せる人の戶籍。——**ち**「寄留地」（名）寄留せる土地。

（**き-りう-さん**「稀硫酸」（名）水を加へて稀薄にしたる硫酸。

きり-うり「切賣」（名）㊀少しづゝ物を斷ち切りて賣ると。㊁研究又は著述したるものゝ中を、此處彼處拔いて講義し又は出版などすると。㊂相手を撰ばずに淫をひさぐと。

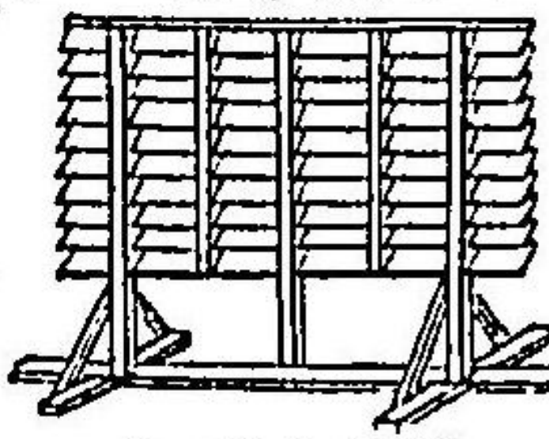
きり-おとし-ぐち「切落口」（名）土藏の二階の床などに、荷物の揚卸（アゲオロシ）のためにあけたる口。

きり-かかり「切掛」（名）切りかくると。又、其物。

きりかか・る（らりるるれれ）〔切掛〕(他、ら四) ㊀きりはじむ。㊁刀を振りて擊つてかゝる。

きりか・く（けけくくるくれけよ）〔切掛〕(他、か下二) ㊀きりつく。きりはじむ。㊁切りたるものを他の物へ掛けおく。又、切りたる處へ他の物をかけおく。

きりかけ〔切掛〕(名) ㊀きりかくること、又、きりかけたるもの。㊁古昔、庭先などの蔽ひに用ひし屏(ヘイ)、板を横に柱にきりかけたるもの。―る〔切掛〕(他)「きりかく」の訛。



〔きりかけ(二)〕

きりかね〔切金〕(名) 金箔を種々の形に切りたるもの、多く佛畫に使用せらる。

きりか・ふ（へへふふふるふれへよ）〔切替〕(他、は下二) ㊀これとかれと取り替ふ。㊁附替をなす。

きりかぶ〔切株〕(名) 木を伐りたるあとのかぶ。

きりかへ（ーカエ）〔切替〕(名) きりかふること。―る〔切替〕(他)「きりかふ」の訛。

きりかみ〔切髮〕(名) 髮を頸のあたりにて切りて垂らし置くこと、(剪髮)。

きりかみ〔切紙〕(名) ㊀折紙を半分に切りたるもの。㊁武藝などの最初のゆるしの名稱。

きりがやつ〔桐谷〕【植】(もと鎌倉の桐谷より出たる故に名づく) 櫻の一種、花は單瓣又は重瓣にして薄色なり。

きりぎし〔切岸〕(名) 切りたてたるが如く聳(ソビ)えたる崖。がけ。「―の下を眺めば」。(斷岸、絕壁)。

きりきず〔切疵〕(名) 刃物などにて切りたる傷。(金創、瘡瘢)。

きりきやうげん（キヨーウ）〔切狂言〕(名) 芝居の大切の狂言。

きりきり(名、副) ㊀軋(キシ)る音又は軋るが如き聲。「―と鳴く」。㊁烈しくめぐるさま又は卷くさまにいふ語、「獨樂が―廻はる」。㊂早く行ひ又は急ぎ歩むさまにいふ語、「―歩め」。

きりぎり(名) つむじ。(旋毛)。

きりきり〔切切〕(名、副) ㊀それ以上に餘地なきさまにいふ語。きりつめ。㊁それ以外に上位なきさまにいふ語。さいおやう。㊂切齒する程いらたち怒ふさまにいふ語、「―して殘念がる」。―ばつちやく〔切切決着〕(名) それ以上餘地なきまでに押し詰めたること。つめ。

きりぎりす〔螽蟖〕(名) 【動】(い)直翅類中螽蟖科に屬する蟲、形はいなごに似る、觸角は鞭狀にして體軀より長く、翅と翅とを磨りて音をなす、綠色と褐色との二種あり、秋冬の交、晝夜を分たず鳴く、晩秋地中に卵子を藏し、卵子は翌春に至りて孵化す。(ろ)古昔の歌に咏ぜしは、蟋蟀(コホロギ)なりといふ。

きりくぎ〔切釘〕(名) 頭無き釘、材木と材木とを繋ぎ合はする時に用ふるもの。くれくぎ。

きりくだき〔切碎〕(名) きりくだくこと。きりくだきたるもの。

きりくだ・く（かきくくけけ）〔切碎〕(他、か四) 切りて細(コマ)かくす。ずた〳〵にきる。

きりくち〔切口〕(名) ㊀物を切りたるこぐち。(切端)。㊁切りきずの口、「首の―」。㊂【數】立體と平面とが、出會ひてなす平面形、(截口)。

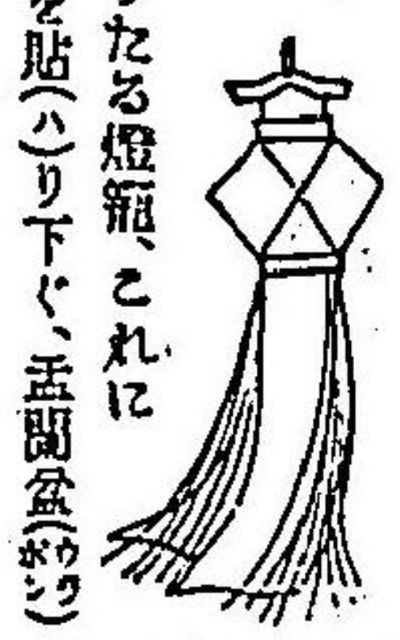
きりくづ〔切屑〕(名) 物を切りたる端屑。

きりくづし〔切崩〕(名) きりくづすこと、又、其物。

きりくづ・す（さしすすせせ）〔切崩〕(他、さ四) ㊀高きものを切りて低くす、くづす、「山を―」。㊁切り込みて揉(モ)み碎く。「敵を―」。㊂ずた〳〵にきる。きりくだく。

きりくひ（ーイク）〔切株〕(名) きりかぶ、(杭)。

きりこ〔切籠〕(名) (切角の略言) ㊀方形なる物の角を切りたる形、即ち、六角形など、(切餅)。㊁「きりこどうろう」の略言。―だま〔切籠玉〕(名) きりこの形をなす玉。―どうろう〔切籠燈籠〕(名) わくをきりこ形に作りたる燈籠、これに細(コマ)かく切りたる紙を貼(ハ)り下ぐ、盂蘭盆(ウラボン)會などに用ふ。



〔きりこどうろう〕

きりこうじやう（ーコウジヨウ）〔切口上〕(名) 物いひの嚴格にして分明なること。口上を一句一句きつかりいひなすこと。

きりこまざ・く（かきくくけけ）〔切細裂〕(他、か四) 細(コマ)かにきりさく。(細斷)。

きりこみ〔切込〕(名) ㊀きりこむこと。㊁一種の食品、きりきざみたる魚肉を鹽漬にしたるもの。―たい〔切込隊〕(名) 敵中に切り入るために組織せられたる部隊。

きりこ・む（まみむむめめ）〔切込〕(他、ま四) ㊀切りいる。㊁深く切る、(截入)。

きりさげ〔切下〕(名) 「きりさげがみ」の略言、「―の未亡人」。―がみ〔切下髮〕(名) 頭髮を頸のあたりにて切り、髻(モトドリ)をくゝりしまゝに下げたるもの、未亡人など多くこれをなす。

きりさめ〔霧雨〕(名) きりあめ。(細雨)。

きりざんせう（ーシヨウ）〔切山椒〕(名) 一種の菓子、しんこに山椒を加へ、搗(ツ)き混(マ)ぜて細かく刻みたるもの。

キリじ〔吃哩字〕(名) ㊀梵字別除多の一、毛字の名。㊁【佛】一切諸法は神通にして不可得なること。㊂轉じて、極めて稀罕なること。

キリシタン〔切支丹〕(名) (「スペイン」語 Christian の訛) ㊀後奈良天皇の天文十七八年の頃、「ジェシュイト」派の僧侶「ザヴエル」氏等によりて、我國に傳播せられたる天主敎の稱、織田氏はこれを優待せしが、豐臣氏殊に德川氏はこれを嚴禁し、信ずる者に酷刑を加へたり。㊁「キリシタン」の僧侶が、我國に渡來の當初、布敎の方便に、理化學を應用して、當時の人には魔術と思はるゝ種々の事をなしゝより、轉じて、魔術の稱。

きりしま〔霧島〕(名) 【植】「きりしまつゝじ」の略言。―つゝじ〔霧島躑躅〕(名) 【植】つゝじの一種、葉は普通のものより圓狀にして光澤多く、花冠は小形にして漏斗狀若しくは鐘狀をなし深紅色なり、觀賞用として栽培せらる、日向國霧島山より出づる故に此名あり。(映山紅、紅躑躅)。

ギリシアけう（ーキヨウ）〔希臘教〕(名) 「キリスト」敎の分派の一、紀元一世紀のころ「カトリック」敎會の分れて東方に傳播したるもの、現今「ロシヤ」「ギリシア」等に行はる。

きりす・つ（てててつつるつれてよ）〔切捨〕(他、た下二) ㊀切りて其端を捨つ。㊁切りたるまゝにてすておく。

きりすて〔切捨〕(名) ㊀切り捨つること、「錢以下は―の勘定」。㊁昔時、武士が、無禮をなしたる平民を斬りすてしこと、「―御免」。

キリストけう（ーキヨウ）〔基督教＝Christianity〕(名) 「ユダヤ」人「ヤソキリスト」を敎祖とし、其人格を中心として組織せられ、全智全能にして絕對惟一なる神(多くは天父・神子・聖靈の三位を一體に具すと說く)によりて、靈魂の救拯を得んとを主旨となす宗敎、歐米諸國に盛に行はる、敎派多し。

きりずみ〔切炭〕(名) 鋸(ノコギリ)にて程よく切りたる炭。

きりせん〔切錢〕(名) ㊀兩替の手數料。㊁日々に貯蓄するはした金。

きりだし〔切出〕(名) ㊀切り出すこと、又、切り出したるもの、「牛肉の―」。㊁小刀のやゝ大きなるものの稱、其刃は斜狀をなして銳く尖る。

きりだ・す（さしすすせせ）〔切出〕(他、さ四) 切りて出しおく。切りてもくり出す、「山より木材を―」。

きりた・つ（てててつつるつれてよ）〔切立〕(他、た下二) ㊀切りはじむ。きりかく。㊁きりまくる。

きりたて〔切立〕(名) ㊀きりたつること。きりはじむること。㊁切りてまだ程へぬこと。又、其もの。㊂＋＋古昔、蹴鞠(ケマリ)のかゝりの四隅に、植木のかはりに切りたる根なき木を立てしこと。

ぎりだて〔義理立〕(名) かたく義理を守ること。

⌒きりたてる〔切立〕(他) 「きりたつ」の訛。

きりだめ〔切溜〕(名) ㊀臺所に置き、野菜などの切りすてたる端などを中に溜(ク)め置く箱。㊁奉公人などの椀・茶碗などを入るゝ具。

きりちらし〔切散〕(名) 切りちらすこと、又、其物。

きりちら・す（さしすすせせ）〔切散〕(他、さ四) ㊀切りこみて追ひ散らす。きりまくる。きりたつ。㊁わけもなくずた〳〵に切る。

きりちん〔切賃〕(名) ㊀兩替の手數料。㊁物を切りたるちん。

（きりつ〔規律〕(名) ㊀のり。おきて。㊁一定の秩序、きまり、「仕事に―がなくてこまる」。

（きりつ〔起立〕(名) たつこと、又、たゝすること。

（きりつ〔擬律〕(名) 法律を事實に適用すること。

きりつぎ〔切繼〕(名) 切りてつぎあはすること。又、切りてつぎあはしたる物。

ぎりづきあひ（ーイア）〔義理附合〕(名) 世間體若かたなしにするつきあひ。

きりつ・く（くけけくくるくれけよ）〔切付〕(他、か下二) ㊀きりかゝる、きりあつ。㊁切り取りて他の物へ付く。

ぎりづく〔義理盡〕(名) 義理のはりあひ。つきあひのいきぢ。

きりつけ〔切付〕(名) きりつくること。―せつた〔切付雪駄〕(名) 享保の頃、茶屋などの下男のはきし雪駄。―もやう（ーヨウ）〔切付模樣〕(名) 種々の絲もて切れを縫ひつけたる模樣。―もん〔切付紋〕(名) 衣服などに縫ひ付けたる紋。

きりづま〔切妻〕(名) 「きりづまやね」に同じ。

＋＋きりづまいた〔切妻板〕(名) せまき板敷。

きりづまはふ〔切妻破風〕(名) 切妻屋根の破風。

きりづまやね〔切妻屋根〕(名) 棟の長さを軒の長さと等しくしたる屋根。

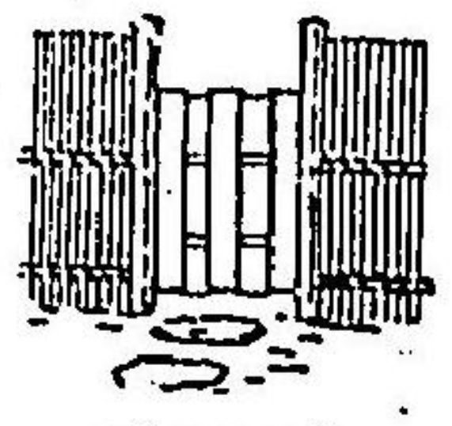
きりつ・む（めめむむむるむれめよ）〔切詰〕(他、ま下二) それ以上餘地なきまでおしつむ。

きりつめ〔切詰〕(名) それ以上餘地なきこと。―る〔切詰〕(他) 「きりつむ」の訛。

ぎりづめ〔義理詰〕(名) 義理にせまりて仕方なきこと。

きりて〔切手〕(名) 切る人。又、巧に切る人。

きりど〔切戸〕(名) 一片のとびらをつけたる戸、四つ目垣などある庭の小門などに用ふるもの。(簀戶)。



〔きりど〕

きりどほし（ートオシ）〔切通〕(名) ㊀山などを切り開きてつけたる道、(陋阪、孔道)。㊁＋＋物事のとゞこほりなく行はるゝこと。

きりどほ・す（さしすすせせ）〔切通〕(他、さ四) 山などを切り穿ちて、行路又は水路を開く。

きりどり〔切取〕(名) ㊀きりとること。㊁人を斬り

殺して、物を掠め奪ふと。「—強盜」。（剪逕）。

きり-と・る（らりるるれれ）［切取］（他、ら四）一部分をわけ取る。切りて取る。「敵國を—」。

きり-なし［切無］（名）をはりなきと。たえまなきと。「—に喋る」。

きり-ぬき［切拔］（名）㊀切り拔くと。又、切り拔きたるもの。㊁「きりぬきゑ」又は「きりぬきつうしん」の略言。——**つうしん**［切拔通信］（名）新聞又は雜誌等の、其人に要用なる部分を切り拔きて送附すると。——**ゑ**［切拔繪］（名）物の形を切り拔きて取るやうに畫きたる繪。又、切り拔きて取りたる繪。

きり-ぬ・く（けけくくるくれけよ）［切拔］（他、か下二）㊀圍まれたる敵中に切り入つて免(マヌカ)れ出づ。㊁免れがたき場合を免れ得。

きり-ぬ・く（かきくくけけ）［切拔］（他、か四）一部分を切りてぬき取る。

きり-ぬけ［切拔］（名）きりぬくると。——**る**［切拔］（他）「きりぬく」の訛。

きり-ぬさ［切幣］（名）細(コマ)かに切りたるぬさ。

†**きり-の-まがき**［霧籬］（名）とぢこめたる霧をまがきにたとへていふ語。

きり-はし［切端］（名）斷ち切りたる物のはし。きりくづ。（斷片）。

きり-はた［切畑］（名）新に切り開きたる畑。

きり-ばな［切花］（名）きりとりたる花の枝。

きり-はなし［切離］（名）きりはなしておくと。

きり-はな・す（さしすすせせ）［切離］（他、さ四）切りたちてはなれしむ。

〔**きり-はなれ**［切離］（名）おもひきり。あきらめ。「—のよい男」。

きり-はら・ふ（はひふふへへ）［切拂］（他、は四）㊀切り入つて敵を追ひはらふ。㊁樹木などの枝を切りのぞく。「小枝を—」。

〔**きり-ばり**［切張］（名）紙障子などの破れたる所ばかり、切り取りて張り替(カ)ふると。

きり-び［切火］（名）ひうち石とひうち鐵と又は固き物と物とを打ち合せて取りたる火。うちび。「—かち〱、祝を申す」。（鑽火、鑽燧）。——**なは**(ツナ)［切火繩］（名）切火を燃(モ)し付けてそなへ置く火繩、火繩銃砲を打つ用意になすもの。（鑽火繩）。

†**きり-びと**［切人］（名）主君などに愛せられて、權威強き人。きりもの。（寵臣）。

きり-ひら・く（かきくくけけ）［切開］（他、か四）㊀山上又は荒地などを平らに均(ナ)らして、田畑又は道路を開墾す。㊁敵中にきり入つて、一方の路をひらく。

†**きり-びをけ**［桐火桶］（名）桐の木にて造りたる火桶。桐木の火鉢。

きり-ふ［切斑］（名）㊀鷹の羽の上下黑く、中間白きもの。㊁斑(フマダ)ある草木の葉。「—の芭」。

きり-ふだ［切札］（名）「トランプ」にて、他の組の札を押へとる價値ありと定めたる札。（勝牌）。

きりぼう-かご［切棒駕籠］（名）駕籠の棒の切りつめたる如く短きもの。長棒駕籠の對。

きり-ぼし［切乾］（名）一種の食品、大根を細く切り、日に干(ホ)して乾物(カンブツ)にしたるもの、煮て食ふべし。おもに秋又は冬に製す。（切乾菜、纎蘿葡）。

きり-まい［切米］（名）扶持米の代りに金錢を渡すと。

きり-まく［切幕］（名）切りておとすやうに張りたる幕。

きり-まく・る（らりるるれれ）［切捲］（他、ら四）㊀はげしく切り入つて敵を追ひ散らす。㊁はげしく論難す。

きり-み［切身］（名）肉の斷片。切りたる肉。（臠）。

きり-むぎ［切麥］（名）一種の食品、小麥の粉を餛飩の如く製し、薄く延ばして細く切りたるもの、多くは夏日ゆでゝ水に冷して食ふ。（切麪）。

きり-むす・ぶ（ばびぶぶべべ）［切結］（他、ば四）切りあひて刀を互に合はす。「—太刀の下」。

きり-むね［切棟］（名）屋根の棟の兩端をきつかりと切り立てたるもの。

きり-め［切目］（名）㊀切りたるこぐち。切りたるあと。㊁物事のきまり。「折目—」。——**いし**［切目石］（名）自然に現出せる銅。

きり-もち［切餅］（名）㊀角に切りたる餅。㊁昔時、一分銀百枚を紙に包みて封じたるものゝ稱。

†**きり-もの**［切者］（名）きりびと。寵臣。

〔**きり-もの**［着物］（名）きもの。

きり-もり［切盛］（名）㊀料理又は膳部のこしらへに、程よく食物を切り又は盛ると。㊁物事の處置。さばき。はからひ。

（**きり-やう**（リヨウ）［器量］（名）㊀物事の用に立つべき才能又は德量。「將帥の—」。㊁かほばせ。みめ。姿色。「—佳き娘」。

（**きり-やう**（リヨウ）［伎倆］（名）はたらき。うでまへ。わざまへ。

きり-やき［切燒］（名）切りて燒くと。又、其物。

（**きり-やく**［機略］（名）はかりごと。ちゑ。

（**きり-よ**［羇旅］（名）たび。「—の臣」。

（**きり-よく**［氣力］（名）物事に堪へ得る精神の力。氣根。性根。

きり-よけ［霧除］（名）㊀霧を除(ヨ)くるために、角窓の上などに造る小さきひさし。㊁すべて霧のかからぬために用ふるものゝ稱。

〔**きり-り**（名、副）㊀「きりきり」に同じ。「—とする」。㊁ゆるみなきさまにいふ語。「—とした顏」。

（**きり-り**（名、副）前條(二)に同じ。

（**きり-ん**［麒麟］（名）㊀支那古代の想像上の獸、狀は鹿に似て大きく、尾は牛に似て蹄は馬に似る、頭

上に肉に包まれたる一本の角を有し、背毛は五彩にして腹毛は黃色なり、生草を履まず生物を食はず、聖人出で王道行はるれば現るといへり。㊁［Giraffe］［動］偶蹄類麒麟科に屬する獸、「アフリカ」の內地に產し、形狀鹿に類す、頸は前脚と共に甚だ長く、頭は地上より一丈五尺以上の高さに在り、好んで木の嫩芽を食す。㊂最も傑出したる人士の稱。「河北の—」。——**けつ**［麒麟竭］（名）一種の血止藥、膠の如き黑色の塊狀をなす。——**さう**(サウ)［麒麟草］（名）［植］景天(ベンケイサウ)科に屬する草、葉は長楕圓形若しくは長倒卵形にして、葉緣に鋸齒あり、夏日、花咲く。（費菜）。——**じ**［麒麟兒］（名）技藝又は才能の最も拔群なる少年の稱。——**もおいてはどばにおとる**［麒麟老劣駑馬］（名）武勇すぐれたる傑士も年老いては、其はたらき凡人よりも劣るにいふ。

†**き・る**（らりるるれれ）［霧］（自、ら四）㊀きり立つ。「きり渡る空」。㊁くもりて見ゆ。

き・る（れれるるるるれれよ）［切］（自、ら下二）㊀はなる。わかる。たゆ。「緣が—」。（斷）。㊁盡く。果つ。終はる。㊂やぶる。さく。「袖が—」。㊃不足す。へる。かく。

き・る（らりるるれれ）［切］（他、ら四）㊀たつ。さく。はなす。（斷）。㊁刃物を用ひて斷ち又は劃く。「紙を—」。（截）。㊂刃物を動物の體部に加ふ。（斫）。㊃殺害す。ころす。「人を—」。㊄去る。除く。「筆の端を—」。㊅遮(サヘギ)る。「連絡を—」。㊆よこぎる。橫過す。「供先を—」。㊇盡す。果たす。終ふ。「讀み—」「書き—」。㊈骨牌(カルタ)などを改めてまぜあはす。又「トランプ」にて、切札もて他の組の札を押へとる。㊉兩替をなす。

き・る（らりるるれれ）［鑽］（他、ら四）物と物とを烈しく摩(ス)り合せて火を取る。「火を—」。

き・る（きききるきるきれきよ）［着］（他、か上一）㊀體にまとひつく。身につく。「着物を—」。（服、衣）。㊁穿つ。はく。「袴を—」。㊂蒙る。うく。「恩を—」。（被）。

キルク（名）「コロップ」に同じ。

き-るゐ［着類］（名）身に着する服。ころも。きもの。衣服。（衣類）。

きれ［切］（名）㊀きるゝと。㊁切りたる小さき部分。きれはし。きれくづ。「材木の—」。㊂特に、反物のきれはし。「—で繼ぐ」。（帛、㡆）。㊃反物。織物。㊄刃物の物を切り得る能。「剃刀の—が止つた」。㊅石材の一尺立方。——**あぢ**［切味］（名）刃物などのきれぐあひ。「刀の—殊に愛でたし」。

（**き-れい**［奇零］（名）單位以下。はした。——**じやく**［奇零尺］（名）普通の尺に裝置したる小さき尺、細かき寸法をとるためのもの。

（**き-れい**［綺麗］（名）㊀綺羅を裝ひて麗(ウルハ)しきと。㊁うつくしきと。みごと。あざやか。みやびやか。（鮮麗）。㊂いさぎよきと。㊃殘りなきと。「勘定が—に濟んだ」。——**ずき**［綺麗好］（名）すこしのよごれをも厭ふ性質。（潔癖、好潔）。

（**ぎ-れう**（リヨウ）［議了］（名）議しをはると。議決したると。

きれ-ぎれ［切切］（名）㊀切れたる上に更に切るゝと。甚しく裂けやぶれたると。（寸斷）。㊁切れ散りたる斷片。「—をつぎあつめて」。——**に**［切切］（副）はなれ〲に。ずた〲に。

きれ-くづ［切屑］（名）きれの小さき不用物。

きれ-こみ［切込］（名）きれこむと。きれこみたるあと。

きれ-こ・む（まみむむめめ）［切込］（自、ま四）切れたるあと深く入る。切れて深くはひる。「爪の絲が手に—」。

きれ-ぢ［切地］（名）㊀反物。織物。㊁反物のきれはし。織物のきれ。

（**き-れつ**［龜裂］（名）ひゞいりてさくると。さけめの亂れ生ずると、

（**ぎ-れつ**［義烈］（名）忠義のすぐれたると。みさをの最も堅きと。

〔**きれ-て**［切手］（名）㊀吝(シワ)まずに金錢を出す人。氣前よき人。㊁決斷よき人。よく處置する人。

きれ-はし［切端］（名）切れたるあまりの端。「紙の—」「—をとぢつくらふ」。（斷片）。

きれ-ま［切間］（名）たえま。「雲の—」。

きれ-め［切目］（名）㊀切るゝところ。切れたるあと。㊁をはるところ。つくるところ。はて。しまひ。「金の—が緣の—」。

きれ-もの［切物］（名）㊀物を切る用に立つるもの。刃ものの類。㊁貯蓄盡くると。種盡くると。「船間で—となる」。㊂〔氣前よき人。果斷よき人。きれて。

きれ-や［切屋］（名）織物などをあきなふ店。たんものや。ごふくや。

〔**き-れ・る**（れれるるれれよ）［切］（自、ら下一）㊀よく物を切り得る。「刀が—」。㊁果斷に富みよく事を處置す。又、金錢を吝まず手放す。

きれん-ぐは［木煉瓦］（名）煉瓦の大さにつくりたる木材。

き-れんじやく［黃連雀］（名）［動］れんじやくの一種、嘴は側扁にして頭上に羽冠あり、體部は黃色なり。（十二黃雀）。

（**き-ろ**［歸路］（名）かへりみち。もどりみち。

（**ぎ-ろ**［岐路］（名）わかれみち。ふたまたみち。——**ひつじをうしなふ**［岐路亡羊］岐路にて牧せる羊の亡げうせ、何れの方へさがし行くべきかと惑ふが如く、物事の方向を何れに定むべきかとまどふをたとへいふ。

（**ぎ-ろう**［妓樓］（名）いうぢよや。ぢよらうや。

〔**ぎろ-ぎろ**（名、副）目をぎろ〱とさせて、物を見るさまにいふ語。ぎよろ〱。「—と見る」。

(き・ろく［記錄］（名）㊀書きつくると、志るすと。㊁物事を書き志るしたる文書又は帳簿、「ふるき—」。**—・志よ**［記錄所］（名）後三條帝のときに置かせたまひし役所、當時は、專ら諸國の莊園の地券のとりしらべをなす所なりしが、後世のは、土地に關する一切の裁判をもつかさどらせられたり。

(き・ろく・がん［輝綠岩］（名）【鑛】閃綠岩に近似せる岩石、質緻密にして堅く、粒狀をなせり。

キログラム［瓩＝Kilogramme］（名）質量の單位、「グラム」の千倍にして、我二百六十六匁二〇三七に相當す、もと「フランス」國の制定なれど、我國にても萬國度量衡同盟に加入せしより、此單位を基礎として貫匁等を定めたり、よりて「フランス」國の「キログラム」原器に等しきものを、我政府に保管し比較の標準とす。（基）。**—カロリー**［Kilogram calorie］（名）【理】熱量の單位、即ち「カロリー」の稱、「グラム、カロリー」に對していふ。**—メートル**［瓩米＝Kilogram metre］（名）【理】仕事の單位、一「キログラム」の力作用して一「メートル」だけ物體を動かしたる仕事。

キロメートル［粁米＝Kilometre］（名）一「メートル」の千倍、即ち三千三百尺に相當す。

キロワット［Kilowatt］（名）【理】「ワット」の千倍。

(ぎ・ろん［議論］（名）㊀意見を戰はすと。論じあふと、「—に日を亘ぬ」。㊁論ずる意見、せつ。**—か**［議論家］（名）よく人と議論する人、又、議論に巧なる人。**—を・おやらげす**［上下議論］議論を戰はす。

き・わう［石黃］（名）色の黃なる雌黃。

(き・わう［既往］（名）㊀今より以前の時。（過去）。㊁過去の疫過又は過去の物事、「—は咎めず」。

(ぎ・わく［疑惑］（名）うたがひ。まどひ。「—晴れず」。（疑心、疑念）。

き・わた［木綿］（名）【植】錦葵（アフヒ）科に屬する草、高さ二三尺、葉は對生し掌狀に分裂す、花は大形にして通常黃色を呈す、果實は桃果に似るが故にもゝと稱す、種子をわただねといひ、種子に生じたる長軟毛はわたと稱し採りて種々の要用に供す、又、種子より油を搾（シボ）り、これを燈火用其他の用に供す、我國へは天正・永祿の頃に傳來せりといふ。（古綿）。

き・わた［生綿］（名）もめんわた。

(ぎ・ゐん［議員］（名）議會を組織し議決の數に加はる權利ある者、「國會—」。**—ばいしう**［議員買收］（名）議員をして自家に利益ある議決又は行動をなさしめんがために、金錢を與へて其主義議論を曲げしむると。

(ぎ・ゐん［議院］（名）國會の稱。又、國會の開設せらるゝ場所。**—せいど**［議院制度］（名）國會を設けて、國家の政務に參與せしむる制度。

＋き・ゑんば［胡黎］（名）【動】「きやんま」に同じ。

き・をれ［氣折］（名）氣の弱ると。

(き・をん［氣溫］（名）大氣の溫度、其變化の主たる原因は、太陽の熱なりとす。

ギヲン［祇園］（名）（梵語、Jetavana）「ギヲンのかみ」「ギヲンしやうじや」の略言。**—しやうじや**［祇園精舍］（名）（梵語、Jetavana-vihāra）古昔、「インド」「マカダ」國の須達長者が、釋迦牟尼のために設けし寺院、「—の鐘の音、諸行無常と響くなり」。**—どうふ**［祇園豆腐］（名）最も精製したるきぬごしの豆腐、京都祇園社鳥居前の二軒茶屋にて賣りしより此名あり。**—のかみ**［祇園神］（名）牛頭天王（素盞嗚尊の御事）、八王子宮（天照大神の五男三女の御事）、少將井宮（稻田姬の御事）を併せて祭れる神の稱。

(きん［金］（名）㊀黃色の光輝ある金屬、質重く軟（ヤハ）かにして、延性及展性に富み、酸に逢ひて錆（サビ）を生ぜず、硫黃に觸れて變化せず、又、單一の酸に溶解せず、たゞ電解器の陽極として用ひらるゝとき、徐々に硝酸中に溶解す、天然に遊離して存在す、其光輝の美麗なるより、古來種々の裝飾品に供せられ、殊に、近來多く本位貨幣として文明諸國に使用せらるゝより、其分配及產出の如何は、經濟上に偉大なる關係を有するとなれり。こがね。㊁金屬の總稱。きんせん。きんぎん。かれ。㊂貨幣の異稱。㊃金屬にて製したる樂器、即ち、鐘などの稱。又、其樂器より發する樂音、「—爽下に起る」。㊄やり。かたな。はもの。兵器。㊅金屬を以て質となしたる器物の總稱、「功績を—石に勒す」。㊆貨幣の單位、即ち、圓又は兩の類、「百—に買ふ」。㊇きいろ。こがねいろ、黃色、「—毛九尾の狐」。㊈金錢の高、「—十圓」。㊉將棊の駒の金將の略言。

(きん［斤］（名）稱目の名、普通は百六十匁にして度量衡法にてもまたこれを定量とし、六百「グラム」に當るものとせらる、されど古來量るべき品物に由りて目方を異にし、舶來品は、大抵百二十匁を用ひ、胡椒・肉桂などは百三十匁を用ひ、茶などには百六十匁、二百五十匁、三百匁、其他、藥品などは百八十匁、硫黃は三百二十匁等にして一定せず。

(きん［禁］（名）いましめとゞむると、又、其おきて。はっと、「—を解く」、「—令」。

(きん［琴］（名）きんのこと、「吉野宮は唐に渡りて、—を覺えたる事」。

(きん［筋］（名）すぢ。

(きん［釁］（名）㊀ひま。あひだ、「—を開く」。㊁つみ。きず。

(きん［衾］（名）ふすま、「—を擁す」。

(きん［襟］（名）㊀えり。㊁むね。こゝろ、「—を開く」。

(きん［菌］（名）【植】（い）きのこ。たけ。（ろ）きんるゐ。ばいきん。

キン［磬］（名）（字の唐音）うちならし。

(きん（名）「きんたま」の略言。

(きん—［金］（接頭）㊀武語に冠して、極めて堅固なる意を表はす語、「—城鐵壁」。㊁武語に冠して、極めて貴重なる意又は美麗なる意を表はす語、「—言」、「—殿玉樓」。

(きん—［欽］（接頭）君主のなしたまふ御事に冠する敬語、「—定」、「—勅」。

(ぎん［銀］（名）㊀金より稍や輕く且硬（カタ）き白色の金屬、延性及展性に富む、新に磨きたる面はよく光輝を放てども、硫黃の化合物にあふときは、忽ち硫化銀を生じ黑皮にて被はる、天然には多く他の鑛物と混じて現出し、貨幣又は種々の裝飾用に供せらる。志ろがね。㊁銀目の高、「—何百兩」。㊂志ろ。志ろかねいろ、純白、「—木犀」、「—世界」。㊃丁銀（チヤウギン）の略言、「—五十枚」。㊄將棊の駒の銀將の略言。

(ぎん［吟］（名）㊀吟ずると。うそぶくと。くちずさむと。㊁漢詩の一體、「梁甫の—」。

(きん・あつ［禁壓］（名）強ひておしとゞむると、強制して禁ずると。

ギン・アン［銀杏］（名）「ギンナン」に同じ。

(きん・い［錦衣］（名）㊀にしきのきもの。㊁故鄕に歸るに、功名を揚し面目のはえあると、「—鄕に還る」。**—かう**［錦衣行］（名）功名を揚して故鄕にかへると。

(きん・い［金衣］（名）極めてうるはしく價高き衣服、「—玉食」。**—こうし**［金衣公子］（名）【動】「うぐひす」の異稱。

(きん・いつ［均一］（名）ひとしきと。平等なると。

きん・いり［金入］（名）こがねを用ひて其中に飾をつけたると、又其物、「—の織物」。

ぎん・いろ［銀色］（名）志ろかねいろ。

きん・いろ［金色］（名）こがねいろ。

(きん・いん［近因］（名）直接の原因、遠因の對。

(きん・う［金烏］（名）（日輪の中には三足の烏ゐるといふ俗傳に出づ）太陽の異稱、玉兎の對。

きん・うるし［金漆］（名）金泥をまじへたる漆。

(ぎん・えい［吟詠］（名）詩歌をうたふと。詩歌をつくると、又、其詩歌。

(きん・えう［緊要］（名）最も大切なると、「—事件」。

(きん・えう［金曜］（名）七曜の一、日曜より數へて第六番目の日。**—にち**［金曜日］（名）金曜にあたる日。**—び**［金曜日］（名）前條に同じ。

(きん・えふ［金葉］（名）紙の如く薄く金を延ばしたるもの。

(ぎん・えふ［銀葉］（名）㊀紙の如く銀を薄く延ばしたるもの。㊁雲母にてうすくつくり、香をたくときに火の上におくもの。かうまき。

(きん・えん［禁厭］（名）まじなひ。

(きん・えん［禁煙］（名）㊀食物の煮たきなどを禁ずると。㊁煙草をのむとをさしとむると。

(きん・おう［金甌］（名）こがねにてつくりたるかめ。**—むけつ**［金甌無缺］（名）一國が曾て外侮を受けたるとなきにいふ語。

きん・おり［金織］（名）金絲を用ひて織りたると、又、其織物。

ぎん・おり［銀織］（名）銀絲を用ひて織りたると、又、其織物。

(きんか（名）はげあたま。（臘梨頭）。**—あたま**（名）頭上に毛髮なくてひかりたる頭。きんか。

(ぎん・が［吟哦］（名）詩歌を吟ずると。

(ぎん・が［銀河］（名）あまのがは。（銀漢）。

(きん・かい［禁戒］（名）いましめ。はっと。

(きん・かい［近海］（名）海の陸地に近き部分。**—かうかう**［近海航行］（名）一國內の諸港の間を海岸近く航行すると。**—かうろ**［近海航路］（名）近海航行のふなぢ。

(きん・かう［均衡］（名）彼此平均を保つと。ひとしきと。

(きん・かう［近郊］（名）城市に近きゐなか。又、城市のちかまはりのはら。

(きん・がう［近鄕］（名）近き在所。近在。

(ぎん・かう［銀行］（名）金融の機關をなす一種の法人、信用を利用して自家の資本及公衆の預金により、資本の需要と供給との媒介をなすものにして、其業務は、公衆の預金、手形の割引、荷爲替の取組、貸附、代理取立、爲替送金、證券又は地金の賣買、金錢出納の代理、貨幣の兩替等にして、現今我國に於ける其種類は、日本銀行・正金銀行・勸業銀行・農工銀行・興業銀行・普通銀行・貯蓄銀行・臺灣銀行・北海道拓殖銀行等とす。**—かぶ**［銀行株］（名）株式會社の組織なる銀行の株。**—けん**［銀行券］（名）銀行が何時にても所持人に支拂を約する信用券、即ち、銀行の兌換紙幣などこれなり。**—志へい**［銀行紙幣］（名）銀行が政府の認許を得て發行する紙幣、兌換紙幣と不換紙幣との別あれど、近來のものは皆な兌換紙幣なり。

(きん・かく［金革］（名）㊀兵器と甲冑と。又、戰鬪の用具の總稱。㊁轉じて、戰爭又は戰陣、「—に習はず」。

(きん・かく［巾幗］（名）支那にて、婦人が喪中にかぶるづきん、轉じて、婦人の稱。

(きん-かく[勤恪](名) 謹みぶかきこと。

(きん-がく[金額](名) きんだか。「—何程」。

(きん-がく[勤學](名) 學問を勤めはげむこと。「—して身をたつ」。

きん-かくし(名) 大便所に大小便をなすために屈みたる人の脚部以下を蔽ふやうに其前面に設け立てたるおほひ。

きん-かた[金方](名) きん志ゆの一名。

きん-がは（ワーガ）[金側](名) 側が黃金にてつくられたるもの。——とけい[金側時計](名) 金側の懷中時計。

ぎん-がは（ワーカ）[銀側](名) 側が銀にてつくられたるもの。——とけい[銀側時計](名) 銀側の懷中時計。

きん-がみ[金紙](名) 金箔又は金色の箔を塗りたる紙。

ぎん-がみ[銀紙](名) 銀箔又は銀色の箔を塗りたる紙。「—にはね元結」。

(きんか-もとゆひ（イユ）(名) (きんかあたまの少き髮を束ぬるに用ふる意)極めて細き元結。

きん-カラかは（ワーカ）[金唐革](名) ㊀金泥をもて模樣を高く打ち出したる鞣しがは。㊁金泥をもて模樣を高く打ち出したる紙。

(きん-かん[金柑](名) [植]みかんの變種、夏の頃白色の小花を開く、果實は小形にして冬に至り熟して黃金色となる、食ふべし。

(きん-がん[近眼](名) ㊀水晶體「レンズ」の凸起の度高く、通常の眼より明視の距離小にして、遠方の物は明瞭に見ること能はざれど、近接したる物は却て頗大に見ゆる眼。㊁前途を推察すること能はざるもの。——きやう（ヨーキ）[近眼鏡](名) ちかめの人の掛くる凹眼鏡。

(ぎん-かん[銀漢](名) あまのがは。

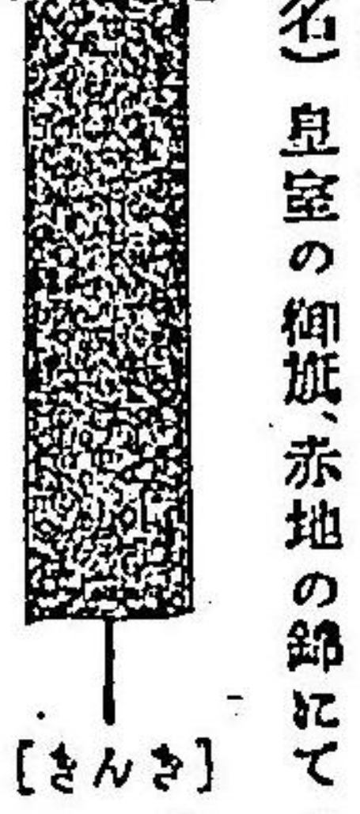
(きん-き[欣喜](名) よろこぶこと。「—に堪へず」。

(きん-き[禁忌](名) 忌みて禁ずること。

(きん-き[金櫃](名) ㊀貨幣などを入るゝはこ。かねばこ。㊁金匱(二)に同じ。

(きん-き[金器](名) こがねを用ひてつくりたる器物。

(きん-き[錦旗](名) 皇室の御旗、赤地の錦にて上部に日月の形を並べて描きてあり、昔時、詔勅によりて發遣せらるゝ、征討軍の標識としても用ひられしもの。にしきのみはた。



[きんき]

(きん-き[近畿](名) 宮城の所在地に近き國々。

(ぎん-き[銀器](名) 銀にてつくりたる器。

(きんぎう-きゆう[金牛宮](名) [天]十二宮の一、其最大なる星を天高とす、昴宿は此宮內にあり。

(きん-きふ（キーウ）[緊急](名) ㊀絲又は繩などのきびしく物にまとふこと、「—の絃」。㊁事件の重大にして且火急の場合に迫れること。——ちよくれい[緊急勅令](名) [法]公共の安全を保持し又は其災厄を避くるに緊急にして、且帝國議會閉會中提出協贊を經るの暇なきより、特に發せらるゝ法律に代はるべき勅令、此勅令を發せらるゝには、樞密院の決議を經べきものにして、發せられたるときは、次の帝國議會に提出して其承諾を求むることを要し、若し議會に於て承諾せざるときは、政府は將來に於て其効力を失ふことを公布すべきものとす。——どうぎ[緊急動議](名) 議すべき緊急なる事件を提出し、當日の議事日程を變更して、これを議題となさんとするの動議。——めい

れい[緊急命令] [法]「きんきふちよくれい」に同じ。

(きん-きゆう[窘窮](名) くるしみ。なやみ。

(きん-ぎよ[金魚](名) [動]ひぶなの變種なる小魚、豚は膨(ふく)れ尾は長くして數箇に分岐す、色は黃金色若しくは白銀色又は黃白相交れるもあり、種類多し、何れも人爲淘汰の結果なりとす。——あたま[金魚頭](名) きんかあたま。はげあたま。——バチ[金魚鉢](名) 金魚を飼ふ鉢。——ぶ[金魚麩](名) 金魚に與ふる料に燒きて極めて輕くしたる麩。——も[金魚藻](名) [植]藻類の一、淡水殊に溜泉に生ず、莖は細くしてすぎなに似る、所々に結節ありてこれより枝葉を輪生す、中心に一個の長き細胞あり、金魚好みて此藻に卵を產み付くるより此名あり。まつも。ふさも。(聚藻)。——や[金魚屋](名) 金魚を賣る家又は育つる人。

(きん-ぎよく[金玉](名) ㊀こがねと玉と。㊁最も珍重すべき物事にいふ語、「—の文字」。——たう（ウート）[金玉糖](名) 一種の菓子、寒天(カンテン)と砂糖とを煮て混(マ)ぜたるもの。

きん-きり[睾切](名) 睾丸を拔き取りたること。「—牛」。

きん-ぎれ[錦切](名) にしきのきれはし。

(きん-きん[欣欣](名、副) よろこびいさむさまにいふ語、「—然」。

(きん-きん[近近](副) ちかぢかに。ほどなく。

(きん-ぎん[金銀](名) ㊀こがねとしろがねと。㊁通用の貨幣。かね。通貨、「—の出納」。——かんぢやう[金銀勘定](名) 簿記の勘定の科目、總て受取りたる金額を借方に記入し支拂ひたる金額を貸方に記入す。——くわい[金銀塊](名) 金塊と銀塊と。

——くわ[金銀貨](名) 金貨と銀貨と。——すゐたふちやう（チヨウ）[金銀出納帳](名) 日々の金銀の出入を記入する帳簿。——すゐたふぼ（ウート）[金銀出納簿](名) 前條に同じ。——ふくほんゐ[金銀複本位](名) 金貨と銀貨とを以て本位貨幣とし、他の貨幣を補助貨幣となす制度。

(ぎん-ぎん[誾誾](名、副) もの靜かに意見を戰はすさまにいふ語。

(きん-く[禁句](名) ㊀歌にて、忌み避くべき語、とめ句。㊁他人にきらはるゝことば。

きん-ぐさり[金鎖](名) 金にてつくりたるくさり。

ぎん-ぐさり[銀鎖](名) 銀にてつくりたるくさり。

(きん-くわ[近火](名) 近所より出たる火事、「—にて騒ぐ」。

(きん-くわ[金貨](名) 金を以て鑄造したる通用貨幣の稱、我國現時の制度上の品位は、純金九百分にして參和銅百分の定めなりとす。——こく[金貨國](名) 金貨本位の國。——たんほんゐ[金貨單本位](名) 金貨を本位貨幣とし、他の貨幣を補助貨幣となす制度、文明諸國多くは此制にして、我國にては明治卅年三月以後此制を採れり。——へい[金貨幣](名) 金貨に同じ。——ほんゐ[金貨本位](名) 金貨單本位に同じ。

(ぎん-くわ[銀貨](名) 銀を以て鑄造したる通用貨幣、我國現時の制度上の品位は、純銀八百分にして參和銅二百分の割合なりとす。——こく[銀貨國](名) 銀貨本位の國。——たんほんゐ[銀貨單本位](名) 銀貨を本位貨幣とし他の貨幣を補助貨幣となす制度、支那等は此制を採れり。——へい[銀貨幣](名) 銀貨に同じ。——ほんゐ[銀貨本位](名) 銀貨單本位に同じ。

(きん-くわい[金塊](名) 黃金のかたまり。金貨の地金。

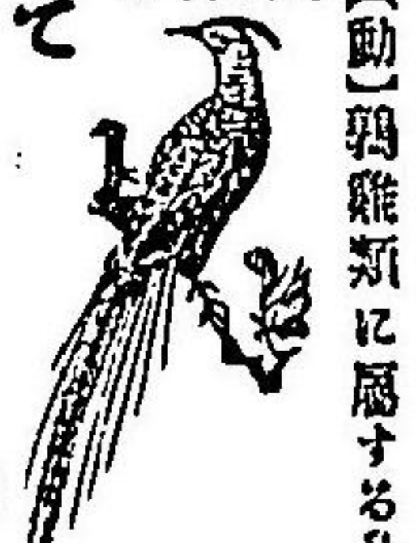
(ぎん-くわい[銀塊](名) しろかねのかたまり。銀貨の地金。

(きんくわ-ぎよくでう（ヨウ）[金科玉條](名) 最も貴重なる規定若しくは訓戒。

(きん-くわん[金環](名) 金製の環。——しよく[金環蝕](名) 日蝕の一種、太陰が恰も太陽の中央のみを蔽ひ、太陽が環狀に見ゆること。

(ぎん-くわん[銀環](名) 銀製の環。

(きん-けい[錦雞](名) [動]鶉雞類に屬する鳥、もと支那產なり、頭に雛冠を有し、形狀毛色共に雉(キジ)に似て美麗なり。にしきどり。あかきじ。——てう（ヨーチ）[錦雞鳥](名) 前條に同じ。——のま[錦雞間](名) 宮中の御間の名稱。——のましこう[錦雞間祇候](名) 退職せる勅任官が特に陛下の御思召によりて命ぜらるゝ名稱、時々錦雞間に祇候して御咨詢などに奉答するもの。



[きんけい]

(きん-けつ[禁闕](名) ㊀帝王の御門。禁門。㊁天皇の御所。內裏。宮城。「—を護す」。(大闕)。

(きん-けつ[禁穴](名) ㊀其所を害せば一命に及ぶべき體中の局部。急所。㊁最も緊要なる箇所。

(きん-けつ[金穴](名) ㊀金鑛のいづる山。(金坑)。㊁かねもち。富裕。㊂資本又は費用などをみつぎくるゝ人。

(きん-げふ（ヨーギ）[近業](名) ちかごろできたる著述又は詩歌などの稱。

(きん-けん[近縣](名) 近まはりの地方。近在。「—旅行」。

(きん-けん[金權](名) 金錢上の權威。かねのゐくわう、かねのちから。

(きん-けん[勤儉](名) 事務につとめはげみて費用を節すること。——しやうぶ（カーショ）[勤儉尙武](名) 政府の冗費を淘汰し歲計を節減し、且大いに武勇の氣風を鼓舞するを以て政治の眼目となすこと。又、個人が勉強且けんやくにして、武勇の精神を養成すること。——ちよちく[勤儉貯蓄](名) 勤儉にしてつとめて餘財をたくはふること。

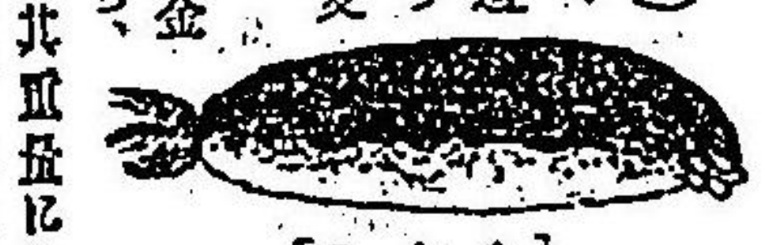
(きん-けん[金券](名) 「きんさつ」(金札)に同じ。

(きん-げん[金言](名) 貴重すべき言語。格言。「—耳に逆ふ」。

(きん-げん[謹嚴](名) つゝしみ深くして物事の嚴重なること。

(きん-げん[謹言](名) (謹みていふ意)書狀の末に用ふる語、「恐惶—」。

きん-こ[金海鼠](名) ㊀[動]沙噀(ナマコ)類に屬する棘皮動物、なまこに似て稍や圓く小さくして刺なし、陸前國金華山邊より北海に掛けて產す、食用に供せらる、其茹(ユ)でゝ干したるものは、多く支那に輸出せらる。㊁「いりこ」に同じ。



[きんこ]

きん-こ[金粉](名) ㊀黃金の粉末、金砂。㊁博奕に用ふる一種の錢、穴を穿ち、其中に金粉をいれて、如何に投ぐとも、其重量により必ず定まりたる目の現出するやうにたくみこしらへたるもの。

(きん-こ[金庫](名) ㊀貨幣金銀などを藏むる庫。かねぐら。㊁貨幣其他重要なる書類等を收めおくため特別のこしらへある櫃、錠前及周壁を嚴重且堅固につくりて、火難・盜難等を防ぐ裝置あるもの。㊂大藏大臣の管理に屬し、國庫に於て保管出納する